TRAL REVIEW

大正六年七月十四日印刷納本
大正六年七月十五日發行（毎月一回一日發行）

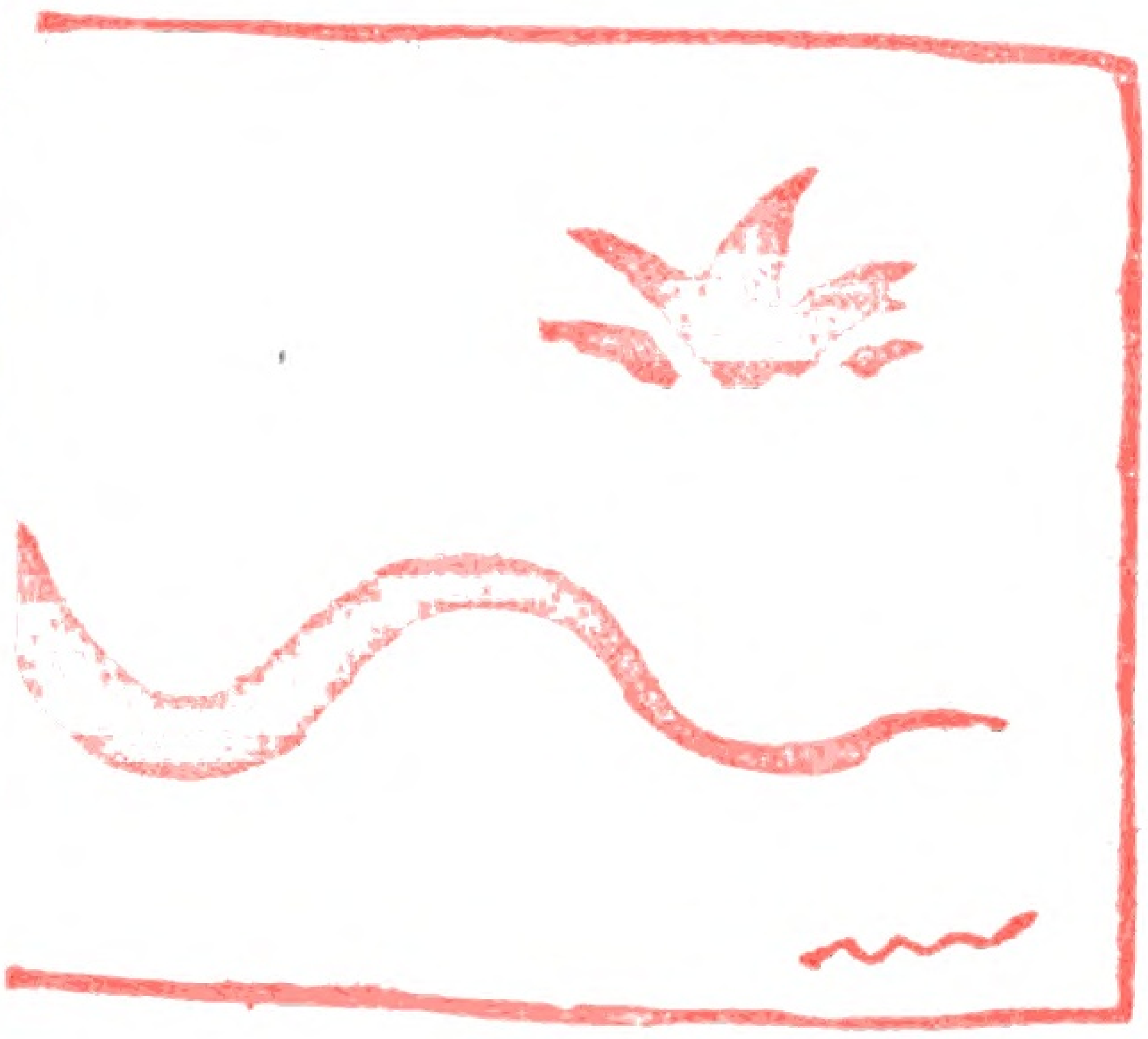
中央公論

臨時増刊

自然生活號

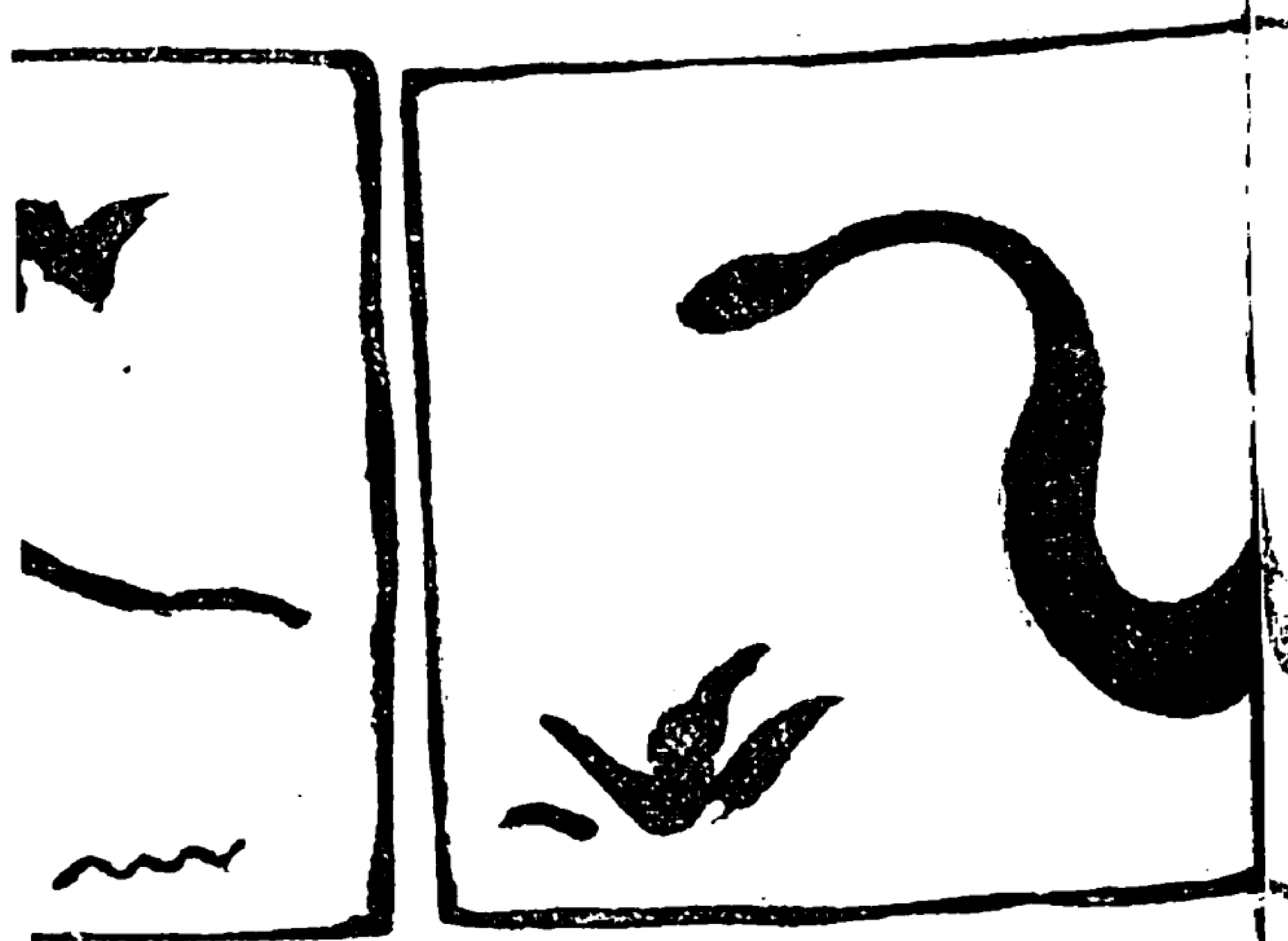
第三十二年第八號　第三百四十六號


染めたと見えぬ
自然の黑髮と全じ色に染る
志らが赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タツタ二十分で染る。
□自然の髮の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 東京 大阪 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

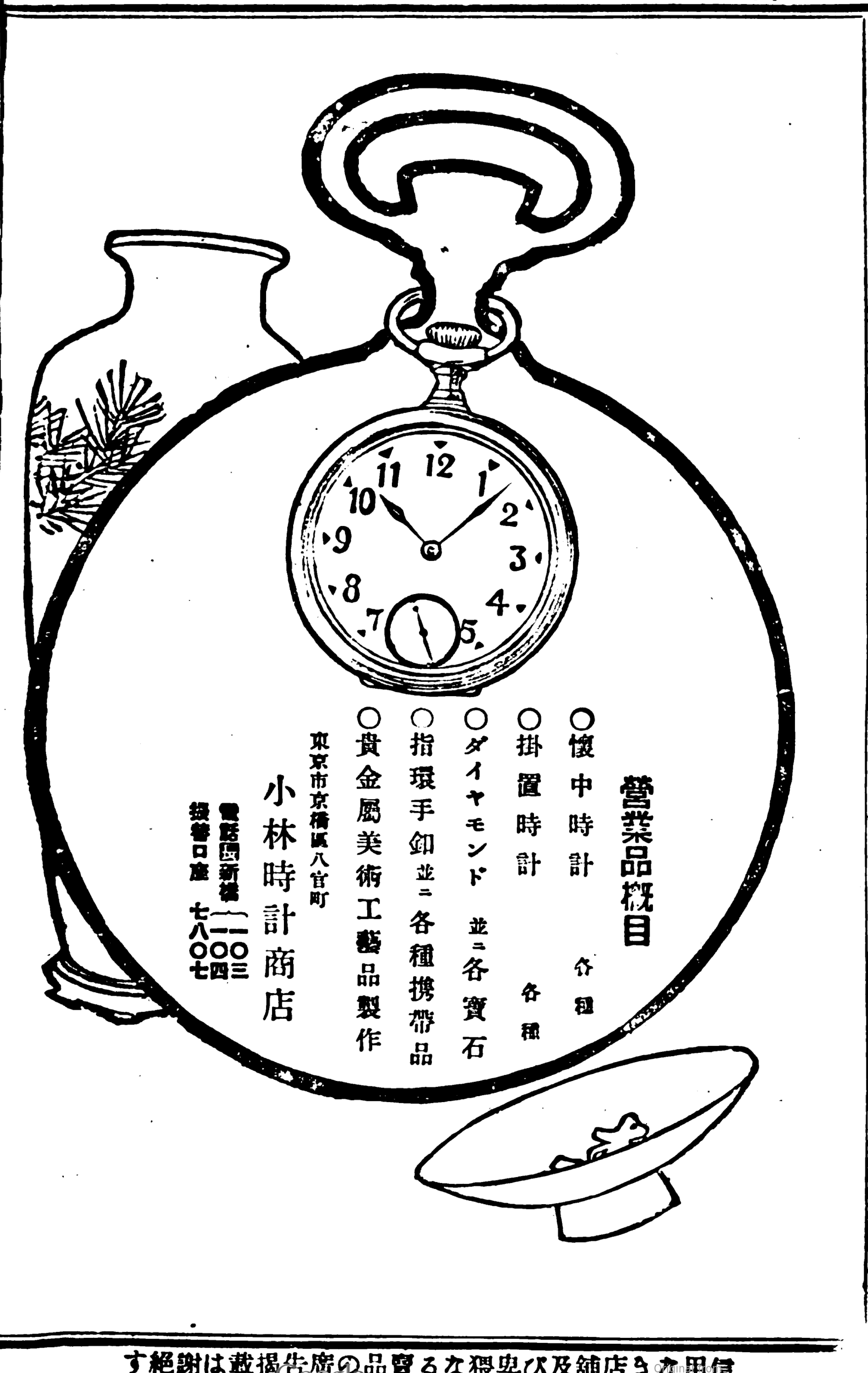


小杉天外　柴田勝衛　秋田雨雀　溝口禎次郎　廣津和郎　窪田空穗
笹川臨風　齋藤與里　五十嵐力　田村俊子　戸川明三　内ケ崎作三郎
本間久雄　宮崎八百吉　長谷川時雨　中川忠順　鈴木三重吉　鎌倉生

▼說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



VINCENT VAN GOGH

THE CAVE

中央公論



自然生活號
第卅二年第八號
第三百四十六號

自然生活に對する憧憬の心理、倫理

田中王堂

一、本論の志趣

「哲學者は立法家である」とカントは云ひました。そして、あんなにカントを嫌つたニイチエも、不思議に、この意見に於てだけは、カントに同じて居ります。然し、哲學者、乃至、評論家は代言者でなければなりません、何者たるよりも先づ代言者とならねばなりません。彼れにして立法家たることがあるにしても、其れは、代言者たることより自然に生ずる成果としてでなければなりません。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『わたくしは、哲學者とし、評論家として永久にあなた方の代言者となつて行かうと思ひます。然し、それには、一つの重大なる義務を自課することを決して忘れては居りません。自分の賦性と、經驗と、反省とが許す限り、ますます、賢明になり、善良にならねばならぬと云ふことが、其れであります。』

是れは、この頃或る機會に於て、わたくしが、觀て以て、哲學者、評論家の職分とするもの、隨つてわたくしの職分としなければならぬとしたところのものの志向を闡明した文章の一節である。

して見ると、本論の主題たる自然生活、一層精しく云へば、自然生活に對する憧憬に對して、わたくしの執らねばならぬ態度は、わたくしにして哲學者であり評論家であることを罷めない限りは、已に明瞭に劃されて居らなければならぬ。そして、其れは、最深の作用をはたらかせ、最眞の意義に於て、その事實の代言者となることである。この態度を外にして、わたくしの執るべきものは一つもないのである、又あらう筈はないのである。

その意の遠く、その義の深い代言者の資格に就いて、わたくしは、近頃、或る時は、簡に、或る時は詳に、二度までも說明して置いた(『德富蘇峯』『代表と卓越』參照)。されば、わたくしは、重ねて、こゝに、其れの概念の建設に關する工夫に立ち入る手數を取りたくない。たゞ、さきの工夫より自然に生ずる派見の考察に到つては、本論の主題の意義と價値とを批判する上に於て、重大な轉向を齎すものとして、暫く其れに一瞥を與へるだけの用心を缺いてはならぬ。

一體、一つの行爲、一つの思想、乃至、一つの情操に對して、其れの代言者と成ると云ふのはどう云ふことであるか、あらねばならぬか。わたくしは、端的に、本論の主題に即して、其れの特徴を說明することにする。

その樣式と分量とに於ては、人每に多少の出入りはあるが、今日わたくし共の生活を彩どる一つの成分として、自然生活に對する憧憬の潛在することは何人といへども無視することの出來ず、否定することの出來ない儼乎たる事實である。さうすると、(其れの究極するところに從つて語るならば)代言者の職分は、何人にも優れて銳敏に其れの存在を感知し、何人にも優れて正確に其れの意義を識揚し、何人にも優れて寬大に其れの要權を認容するところにあるのである。然し如何なる思慮に依り、如何なる効果を擧げるときに、彼れは是等の目的を實にしたと云はれ得るのであらうか。

自然生活に對する憧憬が現に在るやうなものとなつて居るのは、其れが過去の歷史に於て或る特殊の變遷を閱したからであり、又、其れが今日の生活の中に或る特殊の關係を保つからである。是等の二大事實が、其れをしてわたくし共が現に認めるやうな、認めなければならぬやうな特徵を有たしめて居る總べての條件である。して見ると、若し代言者にして(わたくしがこゝに敢言して居るやうに)、果して何人にも優れて、自然生活に對する憧憬の存在と意義と要權とを銳敏に、正確に、寬大に、感發し、識揚し、認容することがあるならば、その秘訣は、たゞ、彼れが其れの發生を討ねるのに何人にも優れて忠實であり、其れの志向を稽へるのに何人にも優れて透徹であるからである。彼れは其れの偶發したものでないことを知つて居るがために、進化論的に其れの發生を討ねようとし、彼れは其れの孤立して居

るものでないことを知るがために、關係的に、其れの志向を稽へようとする。この當然の結果として、其れの到著し、採用する理會にしても、鑑賞にしても、深遠であり、中正である。又、精到であり、簡明である。否、深遠であるがために中正であるのであり、精到であるの結果簡明に歸するのである。兎角、遒勁と跳强とを混同し、浮誇を光彩に取り違ひて居る俗人等は、眞の代言者に依て創造さるゝかゝる理會と鑑賞とを目して抽象である、微温であるとして、一概に其等を排斥しようとするであらう。然し、事實の眞相は全然彼等のこの憶測に反して居る。其れは思想の様式として、具體であり、白熱の狀態にあるのである。之れを要するに、かゝる理會と鑑賞とは、わたくし共の生活を標準として、自然生活に對する憧憬に出來るだけの意義を發揮し、出來るだけの價値を賦與することを唯一の目的とし、この目的を達する唯一の方法として、其れが實際に於て他のさまざまな氣分や、衝動や、欲求の間に介在し、其等と等しく生活の道具とならうとして、其等と共に互に反撥し合ひ、互に讓步し合ひ、終には、互に妥協し、抱擁し、助成し合つてはたらいて居る過程の中に見出だされるまゝに、理智と併せて想像力を用ゐて、是れを最深に、そして、最自然に解釋することを擇ぶのである。

借問す、かゝる目的を以て工夫され、確定されたわたくしの解釋が、一樣に平等に萬人を滿足せしめ得ることであらうかと。否。十中の七八まではそんなことはあるまい。そんな事はわたくし自身決して期待して居らぬ。自然生活に對する憧憬の氣分、欲求と云ふやうなものは、たとひ其れが總べての人々の意識の底に遍在して居るにしても、わたくし共にして、現にわたくし共が經營する文明と生活とに取り圍まれて居る間は、其れの意義を割し、其れの價値を判することになると、他の殆ど總べての種の事

實、又は、經驗に超えて更に多くの異説を惹き起す種の事實、又は、經驗である。わたくしの解釋の、或る人に取つては、其れの志向を發揚することが不足であると見えると同時に、他の或る人に取つては、其れの作用を高調することが過重であると思はれるのはいたし方はない。然し、わたくしは尠しもそんな思惑を心配して居らぬ。

一個の哲學者とし、文明史家として、わたくしの態度はこの問題を取扱ふ上に於ても、あらゆる他の問題を取扱ふ上に於けると尠しも相違はない。わたくしが一生を通じて自分の事業として居ることは、わたくし共の生活を一層自由にし、一層豐富にし、一層柔軟にしようとするのに限られて居るのである。されば、若しわたくしが或る事實又は經驗に興味を有つに到るならばたゞ其れが積極的にか消極的にか平生わたくしの理想とするもの、總べて、若しくは、其等の孰づれかと交渉するところがあるからである、或は、交渉せしめられるところがあるからである。そして、わたくしが自然生活に對する憧憬に興味を有つに到つたのも全く同一の理由からであることは云ふまでもない。

人々の特徴からすれば、自然生活に對する憧憬に多大の價値を認めて居るものもあらう。又、其れに僅少の意義しか見出だし得ぬものもあるに相違ない。わたくしの態度は是等の孰づれの種の人々に對しても、嚴正中立である。わたくしの志すところは、彼等をして、等しく、この情操を更に深くして汎い生活の一成分、又は、一側面と觀て、其れの意義を改釋し、其れの價値を改判せしめようとするところにあるのである。

二、自然生活とは何ぞや

人間の生活は、昔より今日に至るまで、其れの樣式に於て似寄つたものであつたと想像すると、其れは大した間違ひである。衝動と理智と、空想と事實と、欲求と條理と、存在と不在と、可能と不可能と孰づれを孰づれと見分けの付かぬまでに、互に錯綜し紛糾して居たのがその初期に於ける其れの特徴であつた。この時期に於て人間の生活は色彩と驚異とには極めて豐富であつたが、輪劃と法則とには極めて貧弱なものであつた。總べてのものは不調和であつた。然し何ものと雖も矛盾することはなかつた。生活は走馬燈の如くに急轉した。同時に、其れは甚だ悠長寛濶なものであつた。神人常に交應し、幽明容易に交通して居つたのもこの時代に於ける生活に取つては日常茶飯事に過ぎないものであつた。大分色も褪せ、調子も引き下げられては居るが、(已に分類、統一等の工夫が行はれた後の仕事であるから)、わたくし共は、わたくし共の手にまで傳へられた諸の神話に由つて微かにこの時代の狀態を髣髴することが出來るのである。

然し、生活は一大事件である。人間は彼れに賦與された睿智を持ちながら、長くかゝる不滿足な、不安定な狀態に止まることを欲しなかつた。彼れはあらゆるものゝ無盡藏たる彼れの知覺の內具性を高揚し、醇化して生活に一層便利なやうに、其れを安排することを始めた。類似聯想に依つて、創設された精神と接近聯想に依つて創設された自然とはこの努力の結果であつた。是れまで混淆した一つの大きな人格であつた彼れの生活はこゝに非人格化されて、我と、非我と、精神と、自然との兩界に截然區別さ

れることになつた。

是れは確かに人間の生活に取つて大なる進歩であり、獲得であつた。後年、生活の存續と發展との主要な道具となつた實利の體系は斯くして著手されたのである。然し、人間には、初めより實利の體系の外に、時としては其れと併行し、時としては其れと抱合するが、決して、其れに依つて吸收されもせず、又、征服されても了はぬ他の原理がはたらいて居る。其れは鑑賞の原理である。實利の體系が睿智に依つて完成されて居るやうに、鑑賞の原理は想像力に依つて培養されて居るのである。實利の體系にしても、鑑賞の原理にしても、等しく單一な生活の統一機關としてはたらいて居るのであるから、一方の建設するものを他方が破壞して居ると云ふやうなことは固より無い。どちらにしても、其れの終局の幸福のために貢献しようとして居るに相違ない。たゞ、其れの用ゐる方法に到つては、多大の相違を認めねばならぬ。但し、この相違なるものも反對の其れではなくして塡補の其れである。

わたくしは、さきに初期の經驗の特徴を叙して、絢爛の色彩と繚亂の衝動と、混沌の形體とを濫含した知覺が其れであると云つた。睿智はこの繼續體より其れの關係の要素を抽出して法則の世界を造つた。さうした結果衝動に形體に特に色彩に或る沈滓の殘されるのは自然である。是等のものもと生活の所産である以上は、如何に法則の世界はすでに造られたにしても其れが生活に取つて全く無價値になつたと云ふことはない。想像力は同じ繼續體より其れの感覺の要素を拾集して鑑賞の世界を造るのである。睿智にしても、想像力にしても、その恒久の體系を創設するに當つて、其れの材料とするものは時々刻々の知覺の外に何物もない。然し、一方はその關係の統一を目的とするがために科學と産工業とを生じ、

他の一方はその感觀の總合を主眼とするがために宗敎と藝術とを生ずるに至つたのである。

わたくしのこの觀察は、主として兩者の起原と特質とに遡つて立せられたのである。然し、過去の事蹟に於て、現在の傾向に於て、實利と鑑賞とは互に響應して來たのみならず、段々に漸進的に進行して居る。直接の意識こそ異なれ、眞正の科學と產業とは必然に鑑賞を助長するものでなければならぬと同時に、宗敎にしても、藝術にしても、苟も實利に牴觸するものは、當然に虛僞のものとせられねばならぬことになつた。隨つて、今日に於ては、想像力の大膽な活動を許すのは科學と產業との一條件となつて來たやうに、睿智の嚴格な軌範に從ふのが宗敎と藝術との一義務となつて來たのである。この大勢よりして、わたくし共は、尠なくも大體の輪廓に於てだけは、科學と產業と、宗敎と藝術とが一如として響應し、提撕してはたらく未現の生活狀態を未來に豫想し得ることが出來るやうになつた。

その字面に拘泥しないで、その志向を斟酌するならば、畢竟するに、自然生活とは生活に於て實利の專制に反抗し、其れの羈絆を緩めて、鑑賞の權能を主張しやうとする態度を指すことでなければならぬ。世人に依つて其れの特色とされて居るところの、或は林泉に盤桓する如き、或は田園に棲遲する如き、或は過去を追慕する如き、或は異國趣味に憧憬する如き、或は單純なる衣食に執著する如き、そして傲奢と、權力と、進步と、規律と、組織とを嫌忌し、囘避する如き、彼等は是等を以てその目的を實現するに必須の方便と信ずるからの事に外ならないのである。是等の方便の選擇に於て、彼等の本能は正しいところもある。間違つて居るところもある。兎に角、自然生活の眞骨頭の實利の專制に反抗して、鑑賞の權能を主張しやうとする一點にあることは動かぬ診察であるとわたくしは信じて居る。

三、自然生活に對する憧憬の由來

不幸な戀愛は、其れを一つの對象より他の對象に轉嫁することに依つて慰藉されることは出來る。然し、全然其れを抑壓し去ることは至難の業である。人間が科學を神話に代へ、産業を魔法に代へた時には、それ迄主觀的の想像に依つてのみ振作されて居た彼れの幸福は、始めて客觀的の方法に依て保障され、存續されることになつた。彼れは確かに一段聰明になり、自由を得たのである。然し、之れがために、彼れが自分の生活に絢爛の光輝と、縹渺たる情調とを失つたこと、失つたと感じたことは事實である。彼れはどうしてもこの經驗を忘れることが出來ぬ、忘れやうとすることが出來ぬ。彼れは今に到つても、尚ほ是れの轉機の必然を不問に付しながら、一向に其れの損失（其れの多くは想像の所産であるが）をのみに對して未練を懷くのである。あのウオルズスウオルスの"Ode to Immortality"が永久にわたくし共の肺腑を衝くの眞氣と眞情とを含むのは、全く人類一般に代はつてこの悔恨を歌つて居るからである。

其れから降つて、科學と産業と、政治と、道德との時代になつても、人間がおのれの命に代へても抱擁して置きたい、享樂して居たいと思ふ何物かが一度でも彼れの意思通りに存續したことがあるか。戀、交友、學問、制度、往々にして、懷しい山河までも百年を期せないではないか。シラアに一つの句がある。其の意味は、或る日、戀と、涙と、花とは彼等の短命を愬へにジユピタアの許に行つた。然し、ジユピタアは彼等に諭すに、彼等の短命であるのは畢竟、彼等の美しいためであると云ふことを以てしたと云ふのである。（今、彼れの詩集はわたくしの手許にないから正確にこの句を傳へることが出來ぬ）。然

し、人間はジュピタアのこのあつけ無き說諭に依つて彼等の態度は變へなかつた。人間は今日に於けるやうに、多分、今後に到るまで、永久に、戀と、涙と、花との褪せ易く、萎み易きを歎ちて行くであらう。

Determinatio est negatio 「決定は否定である。決定のないところには生活はない。生活することは、結局決定することである。然し、一つの決定は多くの否定を竢つて成り立つのである。一つの理想を決定するには、其れと併立し、矛盾する多くの欲望を否定して始めて實現されるのである。勿論或る人が多くの欲望を否定して一つの理想を決定するには、彼れの現に有てる能力と、彼れの現に置かれた境遇とからして、彼れの全人格が最善の方針として選擇した結果であるから、その結果の中には物質的には、兎に角、精神的には、採用された理想と共に、排斥された欲望も共の時、其の場合に可能であるだけの程度に、實現し、滿足を得て居るのである。が、この事實は獨り彼れの理性の納得するところのものであつて、彼れの感情の容易に承認するところのものではない。彼れは決定した理想を保持しながら、否定した欲望に執著しようとする。南に面つて北斗を見ようとし、木に緣つて魚を求めようとし、卵を全うしながらオムレツを作らうとするのが、一般人の一般本能である。

人間が一つの事を企てる時、最初に於て可能は無數であり、無限の樣式は彼れの支配の中に置かれてある。然し、其の中に就き、一度、一つの樣式が選擇されるや、否や、直ちに、可能の數は局限を受け始める。そして、其れが完成される曉には可能の數はたゞ一つにまで限定されて了ふ。其れは卽ち、今事實として、眼前に顯現して居るところのものである。斯くの如きは、人間に依つて工夫されるあらゆ

る事件と物件との悉とく服從しなければならぬ運命である。然し、彼れの生活が其れの可能の數を減ずるに伴れて、其れの蔚茂の度を減じて行くのは、尠なくも、さうして行くと感じられるもののあるのは事實である。いつの時代に於ても、分明なる想爲の中によりも、模稜の情操の中に一層の意義を感じ出ださうと努力し、時には感じ出だしたと想像する神秘家の絶えないのも、こゝに其の根柢を有するのである。

して見ると、わたくし共の生活の様式には、互に矛盾する二種の豐富がある。その一つは進んで決定を重ねることに依つて獲られる分明の理智より來たる豐富である。他の一つは退いて制限を避けることに依つて味はれる不分の情操より來たるの豐富である。然し、是等はわたくし共の性情を標準として商較される時に、その價値は決して同格であるとは云へぬ。進んでも或る得失はあり、退いても或る損益はあるにしても、わたくし共の性情にして一變せざる以上は、わたくし共は是れまで進んで來たように是れから先きも進んで行かねばならぬ。そして、不分の豐富を犧牲にしても、分明の豐富を保留することで滿足して居らねばならぬ。ヴイクトル・ユゴオの定義に從へば、天國とは、そこに母の何時までも若く、兒等の何時までも幼き世界の謂であるが、わたくし共の世界に於ては、如何なる手段に愬へるも、母の老い去るのを止めることが出來ないならば、わたくし共は兒等が無事に成長し行くことに滿足して居らねばならぬ。

人間の生活の進行は、大體に於て決定されて來た。決定されて居る。其れは混沌たる衝動、生滅定めなき知覺を動力とし、材料として是等の自具性に基づいて人生と自然とを體現し、完成することである。

終極、是れが彼れの幸福を保障し、増進する唯一の道である。然し、(前にすでに一應、説明した通り)、人間の現に限られたる性情よりしては、この永久の行程に於て、一段の進步は、一段の局限を意味し、一段の局限は一段の抽選を意味せざるを得ない。本來、彼れの衝動と知覺との成分でありながら、(當面の必要からとは云へ)、生活からは全く追放されずに、(當面の必要からとは云へ)、たゞ、排斥されて行く殘滓に固有する價値は、常に彼れが一つの限られた義務のために思索し、行動する間にも、彼れの意識の底に潜在して幽かに、不滿と反抗との氣勢を作つて居るのである。

然し、わたくし共はこの殘滓の有てる、そして、時々、外に顯はす大なる意義と効果とを沒却してはならぬ。其れの職分は生活の方針が沈滯し、固定して、人間本來の欲求に對して扞挌して來た場合には其れに新らしき動力と色彩とを與へるために、何時でも、不測、無盡の道化の奥底から、新たに暗示と刺激とを取り來たることである。常套を破るために、斷續して社會に生じて來たる動力と氣分とは、信仰に於ても、藝術に於ても、科學に於ても、政治に於ても、たとひ其れの方向と樣式とは他から來るにしても、其れの動力と色彩とに到つては、一つとしてこゝから來ないものはない。

生活の機關の進行は野猪の其れに似て居る。自づからおのれの方向を轉換することは非常に困難である。其れは、結局前進することを目的としながら、その最善の否、唯一の方法として、暫らく退却しなければならぬ。過去に遡源しなければならぬ。この Regressus と云ふことは、あらゆる改良の、改革の、そして、革命の基調であり、大法である。改善はすべて出直すことを其れの第一義とし第一步とする。出直すのは、つまり、當時人間の性情のうちには潜在しながら、通常人に依つて忘却され、不問に附せ

られて居る成分を取り入れて、其れの氣分に聽き其れの要請を容れることである。そして、當時の日常生活の硬性を柔らげ、其れの偏倚を正し、其れの空疎を充たし、其れの輕浮を落ち付かせようとすることである。此等の工夫を外にして、生活を改良し、改革し、若しくは革命するの道は無いのである。されば、古來の改革家は、彼等の個性や事業の性質は別として、プレトオ、基督、釋迦、ルウタア、カント等の如き大改革家は、其れの手段に於て、悉とく復古者であつた。尠なくとも regressus を前進するに必須の方法と考へた。ルウソオは自然の狀態に還れと叫んだ。カアライルは中世紀の理想を採れと唱へた。トルストイは基督教の教理に遵へと教へた。現代に於て、中世紀の理想に依つて生活せよと說くのは無理である。基督教の教理に依つて生活せよと說くのは一層無理である。まして特に十八世紀の後期に於てなりとも、自然の狀態に於て生活せよと說くに至つては、無理と云ふよりも、全然無意味である。そして、是等の人々は、揃つて科學を非難し、或は科學と併せて藝術を非難して居る。然し、そんな無謀な、輕卒な企劃をする前に、彼等はどれ程までに是等二つの機關は如何に深く人間の根本性情に根ざし如何に强く彼れの根本欲求より發して居るかを吟味したであらうか、吟味しようと心懸けたであらうか。未來永劫、こんな企劃は實現されることの無いに極まつて居るが、假りに彼等の企劃が實現されるものと假定するならば、その曉には今日わたくし共の所有し、受用して居る生活の機關を棄てゝ、更に幼稚な粗笨な生活の機關に賴ると云ふことに歸著して了ふであらう。彼等の見解は次ぎのやうなものであつた。世人は手段と理想との關係を誤解して居る、否、理會して居ない。彼等の不滿と、不安と、貧困と、疾病と、罪惡とは、悉とくこの誤解と無理會とから來て居るのである。眞の幸福は現に彼等が輕信して居る

方法に依つては得られない。其れの第一歩は、簡易な、そして、同情ある協同生活を實行することにあるのであると。彼等のこの見解には、確かに現代文明に對する一つの批評として多分の眞理が含まれて居る。然し、この思想と、それであるから、科學若しくは其れと併せて藝術は無用であるとする思想との間には大なる間隙がある。彼等は、彼等の實行に於てすでに彼等の理論を裏切つて居つた。彼等は欣んで當時の文明が與へ得る科學と藝術との恩惠を受用して居たのである。若し文字通りに、現代文明より科學と藝術とを取り去るならば、其の結果はどんなことになるかと云ふことを彼等は考へず、又、考へ得なかつたのである。特にルウソオが『社會契約』とエミイルの二卷に於て、新らしき科學と藝術との建設に依る新らしき生活の方針を鼓吹し、知らず識らず、自分の學說の偏倚と不遍とを批判して居る。

然し、わたくしのこの觀察は彼等の宣言に對してであつて、彼等の志向したものに對してではない。其れに對して、わたくしは、全然別樣の觀察をせねばならぬ。トルストイの主張がどれだけの感化を現代に與へて居るかは未知であるが、ルウソオとカアライルとが後世に與へた感化に至つては極めて明瞭である。是等の二人は、當時の疾患の何物であるか、其れが何處に伏在するかを可なり正確に診斷したのであつた。たゞ其れを治療する方法に關して、彼等は大なる誤謬に陷つたのである。ルウソオは診察して、其れが、當時、民衆の要求を壓迫する煩瑣な、そして、偏頗な制度にあることを發見した。其れ故に、彼れは是れを掃蕩するために自然生活の福音を說いた。カアライルは診察して其れが當時、國民を支配して居た孤立の思想と懷疑の情操とにあることを發見した。其れ故に彼れは是れを匡正する方便と

して一致と勞作との福音を説いた。そして、ルウソオは自由制度の先驅者となり、カアライルは協同主義の開拓者となつて、極めて不經濟な、同時に、極めて重要な貢献を社會生活になした。詮ずるところ、彼等は、當時の方針と制度とに疎外されて居た、然し、深く人間の性情の奥底に潛著してゐた衝動、又は、要求を揮權して、其等の力に依つて其等の封鎖を切斷したのであつた。彼等は森林を伐り倒した。然し、其處を永久に荒野と化することが其れの目的ではなかつた。其れの目的は、さうして得た木材を以て、其處に美しき宮殿を建てることにあつたのである。

その宣言と手段と樣式との如何に關はらず、時代の要求を代表する復古の運動は、概して、斯かる主張を以て生じ、斯かる效果を收めるのである。

四、現代文明に含まれた假想の、及び眞實の缺陷

わたくしは現代文明の是認者である、謳歌者である。わたくしは眞に現代文明を愛する、尊敬する。然し、わたくしがさうするのは、其れの志向に對してであつて、其れの現狀に對してではない。わたくしがさうするのは、其れを未來に偉業を前徴する靑年としてであつて、現在に功績を誇示し得る壯年としてではない。其れの主流は正當な方向に進んで居ると信ずるが、其れの支流に至つては、往々邪路と傍徑とに逸することのあることをわたくしは決して否まない。

どういふ理由で、わたくしは現代文明を是認し、謳歌するか。其れは他でもない。彼れは、其れに於て、前代未聞の程度に自己の尊貴を覺悟し、自己の力量を實現して、前代未聞の樣式に賢くなり、強く

なつたからである、この結果として、彼れは彼れの生活を統一する方便として、ヒユマニズムと科學とを其れの二大支柱とすることを工夫した。

近世文明の建設者等は、悉とく、一面に於て、科學者であつて、他の一面に於て、ヒユマニストであつた。一層適切に事實を語れば、彼等はヒユマニストたるの職分を全うせしめんがために、科學者たるの手段に頼つたのである。そして、眞の文明はヒユマニズムを其れの精神とし、科學を其れの機關とするものでなければならぬことを明白に體認し、體得して居つたのである。若し、一つでも近世文明に特有の光榮なるものがあるならば、わたくしは、それは、其れがヒユマニズムと科學とを一つの理性より生じた二つの分派として居る一點にあることを指摘しようと思ふ。單にヒユマニズムの發動だけでは近世文明は出現しない。又、科學の構成だけでも近世文明は存續しない。ヒユマニズムの發動が科學の構成となつたところに近世文明は出現したのである、そして、存續し得るのである。

近世文明の古代文明と相違し、且つ、其れに優越して居る所以は、古代文明に在つては、ヒユマニズムは、たゞ、ヒユマニズムたるに止まつて居たのに反して、近世文明に在つては、其れが科學にまで分化したところにあると云へる。ヒユマニズムの役目は、智慧の力に依つて、生活全體の幸福を企劃するところにあるのであるが、科學の役目は、智識のはたらきに依つて、その企劃を實現しようとするところにあるのである。されば、正しき智慧は當然に知識にまで成熟すべきものであり、正しき知識は智慧に根柢すべきである。生活全體の幸福を企劃する智慧の力は、主として情操の陶冶に於て顯はれ、その企劃を實現しようとする知識のはたらきは、主として境遇の整頓に於て顯はれる。不幸にして、智慧の淺

慮と併せて知識の輕卒のために、智慧がだん〴〵に知識に變形し行くに隨つて、智慧は知識に對して嫉妬を感じ、知識は智慧に對して輕蔑を懷くに至つた。今日に於て、互に信賴し、補佐し合つて、始めて相方、本來の機能を發揮し得べき智慧と知識とは、互に乖離し、反目することになつた。この結果は、空疎な智慧と粗硬な知識とは、各、生活の一隅に割據して、生活の統一を獨占しようとして居る。公平に觀て、今日、社會の疾患の多くは、この悲むべき狀態より來たつて居るのである。

近世文明は無條件で是認され、謳歌されるには餘まりに缺陷の多いものである。若し世の中に其れを無條件で是認し謳歌する者があるならば、彼れは確かに、人類の永遠の幸福のために闘つて忠なるものではない。全然、近世文明の意義の看取出來ぬ者に在つては、其れに對して、彼れがどう云ふ態度を取るも其れは勝手である。然し、苟も其れの志向の諦察し得る者に在つては、其れの長所を助成すると同時に、其れの短所を匡正し、若しくは塡補することに努めねばならぬ。

其れならば、如何にして其れの短所を匡正し、塡補すべきであるか。その方法としては別にない。其れはたゞ近世文明の創始者、開發者の感得しながら、彼等の會得しなかつたところのもの、することの出來なかつたところのものを實現することである。そして、其れはいろ〳〵の事情や、事故に依つて、一度、分離され、阻隔された智慧と知識との合一と協同とを盡することである、大成することである。

現代は科學の時代である、尠なくも、俗衆に依つてさう速了されるだけの特徴を有つて居る時代である。そして、科學が Divide et empera を其れの生命として居るやうに現代も、また、Divide et empera を其れの最も顯著な活動の一つとして居るのである。實に、分割と實驗とは、分割して實驗することは實

驗するために分割することは、現代の光榮となり、同時に其れの負擔となつて居るところのものである。一部の人々から歎美されるのはこの點である。他の人々から非難を受けなければならぬのも亦この點である。歎美するものが正しくあつて、非難するものが謬つて居るのであるか、乃至は、正しいのが非難するものであつて、謬つて居るのが歎美するものであるか。わたくしは部分的にはどちらも正しいが全體的にはどちらも謬つて居ると考へる、斷ずる。

どう考へても、人間にはたゞ一つの目的しかない。其れは生きること、善く生きること、幸福を確保するやうに生きることである。如何なる時代に於ても、如何なる機關を用ゐても、人間は太古より今日に至るまで、是れ以外のものを目的としたことは一度でもなかつた。彼れは東洋に於ても西洋に於ても、神話を用ゐても、魔法を用ゐても藝術、道徳、科學其の他の機關を用ゐても、彼れの實現しようとしたことは、たゞ、是の一事であつた。然し、眞に、完全に彼れが幸福な生活を實現するには、(概して云ふと)、生活を組織する境遇と、性情との二成分の改善に等分の努力を拂ふことが必須であつた。そして、彼れが遺憾なくさう云ふことをするのには、彼れの睿智は二つに分化して性情の陶冶を主とする智慧と、境遇の整頓を司る知識とになつて現はれねばならなかつた。しかし、比較的に近世に到るまで、睿智は分化せずして、其れの作用は、纔かに、性情の陶冶だけに限られることになつて居た。そして、其れは、智慧と稱せられて居た。然し、智慧は知識の存在を假定して、始めて正當にはたらき得るものであるから、智慧と知識とに分化しない睿智を智慧と呼ぶのは全くの誤稱に過ぎない。今日に於ては、想像力は智慧を翼贊し、知識を塡補して、睿智と協同してはたらくが、この時代に於ては、想像力は睿智と對立

してしば〳〵擬似知識としてはたらいたのである。性情の陶冶は相應に出來ても、境遇の整頓の大して出來なかつたのに、何んの不思議もない。

近世文明は一方に智慧と知識と、他の一方にヒユマニズムと科學と、甲は乙の存在を假定し、乙は甲の作用に信賴して居るものと觀て、始めて理會することが出來、鑑賞することが出來る種の文明である。智慧とヒユマニズムとの蘊蓄を發揚すれば、知識と科學とにまで發展せねばならぬし、知識と科學との主張を追究すれば、知慧とヒユマニズムとにまで充實しなければならぬものである。然し、知識と科學とが智慧とヒユマニズムとを壓迫して居るにしても、若しくは、智慧とヒユマニズムとが知識と科學とを窒塞して居るにしても、實際の手段としては、その弊を矯るに二つの方法があり得る。其れは、一方に作用を附與するために、他の一方の作用を制限するのと、一方の意義を敷衍することに依つて、其の中より他の一方の意義を顯現せしめるのとである。そして、どちらの方法が一層有効であるかと云へば、わたくしは、後者の前者に勝る場合の多いことを認めるものである。

今、知識と科學とは、わたくし共の生活の中に跋扈して、何一つ憚るところなく、總べての善きもの、總べての美なるもの、總べての聖なるものを迫害し、虐遇して居ると云はれて居る。この場合に於て、悠久に、最も有効な方法は、知識と科學との作用を制限することではなくして、其の意義を敷衍するの一事にあると思はれる。

智慧とヒユマニズムとの特徴は、經驗を志向と觀、協同を生活の意義と觀るところにある。知識と科學との特徴は、經驗を狀態と觀、獨立を生活の意義と觀るところにあるのである。協同の關係を豫想しな

ければ、獨立の存在出來ないことは、志向のはたらきを假定して、始めて狀態は成立出來るやうなものである。窮極するところ、經驗と生活とに於て、あるところのものは唯志向と協同とのみである。そして、(或る必要からして、)想像の上で、其れの進行を途中に阻止し、姑らく、狀態と觀、協同と觀て居るのである。この意味からして、物質とは精神の一部分を指して謂ふのであり、分業とは協同の裏面を指して謂ふのである。

カアライルや、トルストイや、ニイチエ等が、科學と產業との作り出した現今の人生觀と社會制度とに對して、不滿を感ずるのには多大の理由がある。然し、是等を開展し、解放することに依つて、是等を一層完全なる人生觀と社會制度とに變化せしめようとせずして、彼等が異なる時代と境遇とから採つた人生觀と社會制度とを率ゐて、其等をして是等に對立せしめ、反抗せしめようとすることにはわたくしは全然同意を表するわけに行かぬ。彼等の從事した戰鬪は壯烈であつた、高貴なものであつた。然し、彼等の勞苦はその效果に依つて半分を酬いられては居らぬ。

「過に陷るのは人間である。其れを赦すのは神である。」嘗て、人間の手に成つたもので過に陷らず、罪を犯さなかつたものが一つでもあつたか。宗教でも、藝術でも、道德でも、悉とく、過に陷つて來た、罪を犯して來た。されば、科學と產業とがこの點に於て、其等の足跡を追ふて居るからと云つて、わたくし共は、其れに對して苛酷であつてはならない。寬恕でなくてはならない。(然し前にも述べた通り、)科學と產業との現在の爲體は、わたくし共が無條件で是認し、贊美するには、餘まりに缺陷の多いものである。わたくしはこゝに重ねて云はうとする。人間のあらゆる作爲、あらゆる努力は、善く生きるこ

と、幸福を保障するやうに生きることとの一事に限られて居ると。して見ると、この目的を達するに、科學と産業とが、如何なる方便を用ゐるも其れは勝手であるが、是等のものゝ最後の目的は幸福を獲得するの方便たることでなければならぬ。然し、事實はどうであるか、どうなつて居るか。

幸福の必要條件は、滿足と安定との二つであらねばならぬ。如何なる刺戟も、活動も、努力も、はた、奮闘も、その最後の成果として、滿足と安定とを齎さぬものは、どう云ふ意味にでも、合理のものであると云はれぬ。近世に到つて、科學と産業との力に依つて、わたくし共の境遇は整頓された。そして、生活の方便が豐富となつたこと、多種多樣になつたことは事實である。然し、斯くして得られた方便は、幸福を增進したことよりも、其れを攪亂し、攪拌したことが多くはなかつたであらうか。是れは、主として、科學と産業とが輕擧にも、無謀にも、智慧とヒユマニズムとより分離し、生活の中樞たる性情の陶冶を懈つて、徒らに、其れの末梢に過ぎない境遇の整頓だけに偏執した結果である。

今日、科學と産業との缺陷として世に傳へられて居るものゝ中に、眞實のものよりも、假想のものゝ多いことは事實である。また、眞實のものにしても、俗學の徒の揣摩する如く、決して其れを匡正するに術の施すべきものなく、手の附けどころのないやうなものではない。然し、其れが樂觀すべき風潮を馴致して居らぬことも確かに事實である。今日、世人の多くは科學と産業との感化の下に一致の感帶と卓越に對する鑑識とを失つて居る。それがために、だん〳〵に硬化されて行くのは彼等の情緒であり、ますます俗了されて行くのは、彼等の趣味である。彼等の焦心するところのものは、どう在らうかと云ふことではなくして、どれだけ持たうかと云ふことである。又、彼等の鋭感であるのは量の多寡に關してで

あつて、質の優劣に關してではない。斯くして、喧躁と、不滿と、輕薄とは一代の風尙たらんとして居るのである。『吾人は美を愛するも奢に流れず、學を好んで弱に陷らず』、とは、哲人ペリクリイスがアテンスの文化の優秀を誇つた演說の一句である。わたくし共にして人類の一部分が四千年前に實現したこの事實、尠なくも、彼等が懷抱したこの標識を取つて、其れを以て、今日、わたくし共の生活の狀態と理想とを測定する尺度とするとき、わたくし共の當然催ふす感慨は如何なるものであらうか。『吾人は美を愛するも奢に流れず、學を好んで弱に陷らず』！何んと立派な、健氣な覺悟であることよ。畢竟するに、知識も、科學も、產業も、わたくし共をして、この理想を持たしめないならば、持たしめることに貢献するところがないならば、わたくし共に取つて、大して價値のあるものとは謂はれないであらう。

其れならばどうしたら宜いか。其れは、知識を智慧化し、科學と產業とをヒユマナイズする他に策はない。そして、さうする場合には、之れが動力となり、同時に批判となるものは、自然生活の名稱の下に、人間の根本性情と根本欲求とであらねばならぬ。

五、ウオルタア・ペエタアの事業

ウオルタア・ペエタアは、最近に於て英國人を解放した最優者である。ロツクが政治に於て爲したところのものを、ヒユムが哲學に於て爲したところのものを、彼れは藝術と生活との批判に於て爲したのである。

由來、英國人は歐羅巴に於ても、他のあらゆる國民に先だつて、文明の曙光を迎へ、自由の恩澤に浴した天寵の種屬であると自づからも信じ、他よりも認められて居る。然し、この宣言は多くの制限を附して、而して後、始めて許さるべきものである。英國人が夙に自由を得たのは實行生活に於てだけであつた。理論生活と、色彩生活とに於て、特に、最後のものに於て、彼れはまだ十分なる意味に於て自由を得て居らぬ、解放されて居らぬ。英國人は今に、猶、ハイネの謂ふところの町人の國民である。英國人は聰明である、重厚である。しかし彼等は聰明なる、重厚なる町人たるに過ぎぬ。

英國人は確かに實行に於て、最も秀でた國民であるに相違ない。どんな實行でも感覺を其れの材料とし、議論を其れの意義として居るのであるから、英國人が聰明な、重厚な實行家であるならば、彼等は必然に充實した感覺を經驗し、正確な理論を所有して居らねばならぬことは云ふまでもない。然し、彼等は餘まりに無雜作に實行に成功して居るがために、彼等の生活に於て、感覺は忽ち實行に吸收され、理論は直ちに實行に併吞されて了ふ。かう云ふわけで、前者の本質たる色彩と、後者の本質たる原理とは、與に、實行の體系から離れて、獨自の體系を作るの必要と自由とをもち得ない。成る程、一般國民は別として、少數の顯著な性格に就いて觀れば、確かに、英國と雖も大哲學者を出して居る、大詩人を出して居る。然し、彼等は獨立した思想、若しくは、遊離した心像を獨立の體系、又は、宇宙とすることをしない、さうすることを欲しない。彼等の思想、又は、心像は、いつでも實行を中核とした緣端に過ぎない。勿論わたくしはこの特色だけに依つて、哲學上の、乃至、藝術上の彼等の創造が淺薄であるとか、不徹底であるとか云ふのではない。然し、特色は特色として明らかに其れの意義を討ねなければ

ならぬ。其れが證據には、英國に於て、大なる音樂も生ぜず、大なる形而上學も起らないではないか。佛蘭西人が英國に眞の美術はないと云ひ、獨逸人が英國に眞の形而上學はないと云ふのにも一分の眞理はたしかにある。

然し、方便が目的より獨立して一つの目的となり、屬性が本體より獨立して一つの本體となつて行くことは、生命の在るところに見出だされるあらゆる經過の特色である。そして、其れが、當初の起原と併せて當面の作用を忘れぬ限りは、この變形は、生活の豐富と充實とのために、損害であるよりも有利である。

感覺はあらゆる思想、あらゆる行動、あらゆる情操の原料であると同時に源泉である。自己も、宇宙も、內界も、外界も、悉とく感覺の發展し、感覺より分化したものに外ならない。若し人間が享樂する現在を持つならば、記憶すべき過去を持つならば、期待し得べき未來を持つならば、其れが實在性は感覺の中に潛在し、そこから成長するものでなければならぬ。

第一步の經驗に於て、わたくし共の世界は、色と、形と、聲とより成り立つて居る。わたくし共を取り圍む要素の中で、色と、形と、聲とが其等の大部分を占る。隨つて、わたくし共の注意と感興とは最も多く是等三つのものに依つて惹き起される。

幸福を追窮するわたくし共は、わたくし共の住む世界を出來るだけ住みよいものとするがために、先づ、其れの色と、形と、聲との選擇と改排とを始める。或る色、或る形、或る聲は、わたくし共に快感を與へる。之れに反して、他の或る色、或る形、或る聲は、わたくし共に惡感を與へる。そこで、前種の

ものを醇化して一層の快感を得ようと努めると同時に、後種のものの中の或るものを不問に附して惡感を避けようと試みる。或は中の他の或るものを醇化して、快感を起さしめようと試みる。オスカア・ワイルドも、ホイッスラアも、人間の欲求に依つて、雲の形、夕陽の色を改造して居ることを語つて居るが、是れは、もつと低級の經驗に於て已に始めて居る仕事である。

人間は何故に或るものを美と觀、他の或る物を醜と感ずるか。是れは絕對であつて、別に說明を要しない、又、容れないものである。聯想の作用の生ずるに先だち、實利の考慮の生ずるに先だつて、夙にはたらいて居るのである。其れは、たゞ與料である、事實である。其れは經驗に依つて、敎育に依つて、聯想に依つて、反省に依つて變化することはある。されば、小兒と大人との間に、野蠻人と文明人の間に、同一人に在つても、彼れの青年時代と壯年時代と乃至、老年時代との間に相違があり、變遷がある。然し、或る場合に、或る人が、或る物を美と觀、醜と觀るのは何等の理由を挾まず何等の解釋を竢たずして端的に與料であり、事實である。プレトオは善と美とを同一視しようとし、キイツは美は眞であると云つた。然し、相對的でない善と眞とは考へ得られない通り、美が絕對的でないとはどうしても考へ得られない。

わたくし共は、已にわたくし共の經驗の對象は悉とく靈性であることを意識して來た後までも、わたくし共に利益を與へる神には美しき色相聲を附し、害惡を與へる神には醜き色相聲を附へるほどに、わたくし共の生活は、色と形と、聲とに依つて纏綿せられ、わたくし共の好惡は美と醜とに依つて左右されて居るのである。

政治生活と道德生活とに於て夙に解放された英國人が、獨り斯くまでに重大なる意義を有する感覺生活に對して最近に至るまで、盲目であり、無覺であつたことは、彼等に取つて大なる損失であつたと云はねばならぬ。

過去百年間に於て、審美的に、若しくは、藝術的に、英國人を敎育し、彼等をして、感覺生活の驚異と光輝とに開眼せしようと努めた思想家が三人ある。ラスキンと、アーノルドと、ペエタアとが、即ち、其れである。ラスキンとアーノルドとは、與に、猶、英國傳來の倫理主義の繩墨を脫却することが出來なかつた。ラスンキは自然に對して驚くべき靈覺を有し、アーノルドは人生に對して奇しき透察を有して居つたに拘らず、彼等は、まだ、人間の審美活動を獨立のもの、獨自のものとして觀ることの自由を獲なかつたのである。隨つて、彼等の說くところ、論ずるところは、平明であるが到徹せず、雜多である割りに精細を缺いて居る。

ウォルタア・ペエタアは、實に評論壇の革命家の使命を以てこの世に出現したのであつた。彼れは、自づから一つの傳統を起さうとして居つたから、何等の傳統をも承けなかつた。自づから一つの流派を立てようとして居たから、何等の學派にも學ばなかつた。彼れが美感の、藝術の、そして、人生一般の批評家として、如何に偉大な、如何に卓越した事業を完成し、遺したかは英國に於て、彼れに先だつた評論なるものと、彼れの後に彼れの啓沃の下に生じ來たつた其れとを商較すれば、何人でも容易に認取することが出來ることとである。

彼れの世に寄與した數多の著述の中では、特に價値あるものとして、わたくしは、The Renaissance と

Marius the Epicurian との二つを畢げる。是等の書は永久に、わたくし共に對つて、如何に事物を審美的に觀るべきかを敎へ、如何に生活を藝術的に生くべきかを敎へるものである。嘗てブラウニングは羅馬を目して、其れは一個の人生大學であると云つた。是等の二書は、たしかにわたくし共が審美的に觀、藝術的に生きるためには、一部の百科字典であるよりも、一部の福音書であるよりも、寧ろ、一個の大學である。

恩惠者の恩惠の世人に認識されないのは常のことである。認識されないのみならず、反逆者と誤解されることのあるのも常である。嘗て架上に磔殺せられしこと、强ひて毒杯を仰がせられたことなど、是れが好個の實例ではないか。して見れば、特に、ペエタアの場合に於てわたくしが其れを異とするにも及ばぬことである。然し、英國人は今に到るまで、彼等に取つて、眞の恩惠者は、如何なる風丰と、宣言と、事業とを以て來たるかを、未だに十分に覺へて居らぬやうである。彼等はクロムウエルに感謝することを知つて居る、コブデンに感謝することを知つて居る、然し、同じ理由と、其れ以上の意義とで、彼等はウオルタア・ペエタアに感謝することを知らぬのである。實に、ペエタアは彼等よりも、もつと深く、もつと眞實に、もつと悠久に、英國人を解放したのである。何故ならば、彼れは生活を組み立てる上に於て、政治よりも、道德よりも、遙に內的な、同時に、遙に普遍的な美感と、藝術とに於て、彼等の同胞の解放を圖り、そして或る程度に其れを成就したからである。彼れが世に出で、彼れの事業の感化の普及するまでは、英國人が自由を誇り得たのは、彼等の生活の一半に於てだけであつた。其れの他の一半に於ては、彼等は、猶、桎梏の下にあつたのである。

彼れ一代の事績を一つ一つ取つて點檢する時は、其れは、いろ〳〵に分かれる。希臘の神話に新らしい解釋を與へたと云ふこともある。文藝復興期の藝術に深い意義を附したと云ふこともある。近世人の生活の中に正しき理想を發見したと云ふこともある。

然し、窮極するところ、是等は悉とく現代人を感覺的に、審美的に、藝術的に解放しようとする大なる目的の手段であつたのである。

其れならば、彼れは、如何なる風に、この大なる目的を遂しようとしたか。

彼れは審美的に觀、藝術的に生きることを人間の生活の、最も高き様式、最も全き完成と考へたのである。そして、さうする力を得るのには、各人は自分の知覺に依つて美を發見し、自分の努力に依つて其れを醇化し、自分の鑑賞に依つて其れに共鳴し、薫染することである。然し、美は風景にも、人格にも、藝術にも、無數に含まれて居る、現はれて居る。そして、其等は、殆ど獨自の形と味とを以て立つて居る。其れ等の間には、卓越の程度から來たる優劣はあるが、種類の相違から生ずる優劣はない。されば、つまり、成りたけ多くの、そして、異なる種の美を發見し得、醇化し得、鑑賞し得、薫染し得る人が最高の意義に於て、最も善く敎養された人物、最も完全なる人格であるのである。畢竟するに、The Renaissance と Marius the Epicurian との二書は、彼れが如何に、實際にこの高尙な、重大な工夫を積むべきかをわたくし共に示さうとした手本である。わたくしから觀ると、あの名高き「結論」は、「文藝復興」全體の動機であり、氣分であるとして、彼れが其れの初頭に於て宣言したところのものと、大分に行き違ひを生じて居る。藝術の鑑賞は、もつと積極的に性格の完成を目的としなければならないのに、

こゝでは、其れは藝術の享樂は、其れより受ける刺激に依つて、瞬間毎に迫り來たる死の觀念をまぎらはすための方便となつて居る。『メリヤス』に含まれた思想は文藝復興に於て始められた思想の繼續であると彼れは語つて居る。成る程、審美的に藝術的に自己を完成する思想はこの書に於て、復たび、新たに一層大なる規模と決心とで取り上げられて居る。然し、(主人公は彼れの修業の途中で早逝しては居るが)、こゝにも、自己を完成する工夫は利己的のものに限られて、其れが、社會的に、宗教的にまで發展して行かないのは、人をして極めて物足らぬさを感ぜしめる點である。何んとならば、眞に充實した自己の完成は、たとひ、其れが感覺の訓練より始められなければならぬものにしても、色彩は常に他の何物かの象徴として存在し、人間の經驗が色彩だけのものに限られて居ない以上は、どこまでも色彩の側面より生活の統一を圖るの目的を以て、だん／＼に、其の範圍の巾を廣くして行くと同時に、其の觀照の度を深くして行き、終には彼れの生活の周邊のいづれの點をも包括し、醇化しなければならぬとわたくしは信ずるからである。

　改革家に大切なのは、彼れの事業の成果ではなくして、其れを企劃した彼れの氣分と、其れを取り扱ふ彼れの態度とである。評論をその機關とする改革家に於て特にさうである。して見ると、彼れの事業には上に尠しくわたくしが指摘した缺陷と併せて、わたくしが指摘しなかつた缺陷がどれだけあるにして、彼れの事業が一事に於て、人生に取つて重大なる意義を有する一事に於て、すでに不朽を獲得して居ることは確かである。わたくし共は、この不朽たるべき一事の成就に對して、彼れに永久の尊敬を捧げねばならぬ。そして、其れは云ふまでもなく、彼れが殆ど前者を超え、後者を絶するほどまでに、成

覺的に、審美的に、藝術的に、わたくし共を解放してくれたことである。

若し自然生活の役目は、現代の主潮たる現代生活の方針に對抗するやうに、原始の、粗硬の方針を皷吹することではなくして、やゝもすれば、桎梏となり、範疇となつて、わたくし共の生活の自由と新鮮とを脅さうとする現代文明の傾向を開放し柔化することにあるのであるならば、わたくしは自然生活のために、ウォルタア・ペエタアの事業の意義と價値とを輕々に看過することは出來ぬものである。

六、美と實利と

永く漆黑の文字を以て、二十世紀の罪惡史の幾頁かを滿たすべき現下の歐洲戰亂に於ては、眞の人類の愛者をして傷心せしめ、斷腸せしむべき事件は數限りなく起つた。現に、數限りなく起つて居る。第一には少數の權者の貪欲、若しくは失政のために、日に幾千となく無辜の神の子が屠殺されて居ることである。第二には、彼等に取り殘された幾萬の老幼と婦女とが、奄々たる氣息の間より、其の饑餓を愬へて居ることである。然し、この二つの最大なる罪惡を擧げた後には、わたくしは、罪惡の可なり大なるもの一つとして、風景と、藝術との無殘な破壞を擧げなければならぬ。敵、身方、與に、その事だけを單獨に考へたときには、是れより以後、人工にて到底復舊出來ない風景、人工にて容易に模倣し難き堂搭、伽藍、乃至、橋梁を破壞することを以て決してよい事、望ましきことであるとは考へて居るまい。たゞ、彼等は一方に、この犠牲を拂つても、尚あまりありと信ずる實利を獲ようとするがために、この破壞を敢へてして居るのである。こゝに、宏大なる規模に於て、美と實利との撞突が行はれ、そして、美

は實利のために征服されて居るのである。

　實利も美も與に、生活の要求より生じたのである。人間は未だ嘗て美に依らず、實利にのみ依つて生きた場合は無かつた。之れと同時に、彼れは實利に頼らずして、美にのみ頼つて生きた場合はなほ更なかつた。美も實利も生活を統一し、その統一を完成しようとする以外に、一つも目的を有たぬ。しかし、是等は、各、異なる方便を用ひてその共同の目的を遂して居る。さうして、不幸にして、今日に至るまで生活に對照して、兩者を調節する尺度がなかつたものであるから、美と實利とは、到底 incommensurate であると考へられて來たのである。

　如何に、美と實利とが異なれる方便を以て、同じ目的を遂しようとして居るかを説明するために、わたくしは、生活統一の二つの機關たる神話と科學とを取ることにする。

　神話は假想の發現であり、科學は事實そのものの叙述である。兩者の性質の間には峻然たる眞假の區別が存すると云ふやうに、俗人は考へて居る。が、これこそ空想の所產であつて、何等の據りどころのないものである。どちらも、感覺、若しくは、知覺を其れの基礎とし、材料とし、方針として出立する。たゞ、神話は感覺、若しくは、知覺の有てる色彩と心像とを其のまゝ保存して、生活の統一を圖り、科學はこの色彩を關係に、この心像を概念に變更して、生活の統一を圖つて居る。是れが、兩者の相違の凡べてである。そして、たゞ是れだけのところでは、科學は神話に優つて居ると云ふ證據は何處にも無いのである。否！若し、他の條件の同一であることが假定されるならば、生氣ある方針は、蒼白の方針よりも有力であるに定まつて居るから、神話の方が科學に優れて居るものとせねばならぬ。そして、人

間の歴史に於て、科學よりも神話の方が、一層よく生活を統一して居た時代のあつたことは事實である。

太陽の出沒の説明として、舊き太陽は毎夕西山の陰に死し、毎朝其れの子が東海に生れるのであると するのと、其れは地球が右より左へ、二十四時の間に、一廻轉するより生ずる現象であるとするとの間には兩方の假定が太陽の出沒と云ふ一つの事實に關しては完全に説明して居る限り、説明としては、何んの優劣もないのである。若し強ひて、其の間に優劣を立てるならば、優れたのは前説であつて、後説こそ劣つたものであらねばならぬ。たゞ後説が前説より優れたものとされるのは、全く、他の考慮より來たるのである。

天上には他に多くの現象があり、地上には尚更多くの現象がある。そして、是等のものが、悉とく、太陽の出沒と並立し、且つ、交渉して人間の經驗の一部を形作つて居る以上は、總へて是等の現象は、人間の思想の中に、一つの宇宙、又は、體系を成さねばならぬ。太陽の出沒に關する二つの假定のうちで、他の現象の假定に適合するのが一層價値多きもの、卽ち、眞であつて、其れに適合しないものが、一層價値なきもの、卽ち、僞のものであると云ふことになるのである。

然し、人間の經驗に入り來たる、可能性を有する現象の數は無論こゝに盡きたのではない。されば、この段階に於て、眞とせられ、科學的のものとせられた假定でも、更に一層大なる宇宙、又は、體系に對照された時には僞のもの、神話的のものとならないと云ふ保障は決して與へられない。其れが、さうなると、ならないとは、たゞ、其の場合に、其れと競爭する假定の性質、如何に懸つて居ることである。さうして、或る假定が、だん〳〵に他の競爭者を征服しつゝ、最後に、眞とされ、科學的とされる優越

者たるの月桂冠を得るにしても、其れは、何時か、新たな競爭者のために、哀れな敗殘者となつて、倒たり、神話的たる地位に墮ちないとは限らない。されば、神話と科學との間には、決して兩者を峻別し得るやうな烙印は永久に押されるものではないのである。今日、一般に、最も優秀の科學にしても、神話の素質は可なりに持つて居るのである。

然し、若し其れの樣式の上から神話と科學とを分別しようとするならば、其れは全く不可能の事ではない。(前にも尠しく提唱したやうに)、心像の暗示に依つて經驗を統一するのが、神話の特徵であつて、概念の關係に依つて、其れを統一しようとするのが科學である。隨つて、神話の創設に主としてはたらくものは想像力であつて、科學の構成に主としてはたらくものは知力である。然し、神話は古代の藝術の溫室であつたし、科學は近世の產業の源泉となつて居るを見ても、藝術と科學との發生上の近親はほど窺はれるのである。今日、全然 incommensurate たる美と實利とでも、その本を洗つて見れば、同一祖先より發して居ることを知るのである。

主として美の向上を目的とする藝術と、主として實利の發展を目的とする科學との間の矛盾も、隨分久しい話である。然し、實際に、どれだけが、事實であらうか、どれだけが、事實でなからうか。

チヤアレス・ダアヴインの語るところに據ると、彼れの二十歲前後に當つては、彼れはシエックスピヤアの愛讀者であつたさうである。然し、其の後、彼れは、半世紀も、科學の研究に沒頭した。そして、終に、彼れは進化論の創始者として、彼れの名聲は世界の四隅をも壓することになつた。彼れの晩年に於ては、彼れ晝間を研究に充て、夜間は、之れを、文藝上の讀書に費すことにして居た。然し半世紀前、

そんなに多くの風奮と、慰藉とを彼れに與へたシエッタスピヤアもどうしたものか今は、彼れに取つて興味索然たるものとなつてしまひ、彼れは、纔かに當時の第三流の小說に於て、彼れの共鳴し得るものを發見し得たと云ふことであつた。世人はこの經驗より、演繹して、一般の傾向として、科學の研究に必要なる知力の發達は必然に、藝術の鑑賞に必要なる想像力のはたらきを阻害するものであると斷定するのである。

わたくしはダアヸインの告白の事實を語るものであることを聊しも疑はない。然し、世人がこの事實よりして、飛躍一番、無雜作に科學と藝術との兩立し難く、乖離し易きを說くのには大した根柢はないと思ふ。

あの美しい論文で、想像力が如何に物理學の研究に對して重要な役目を持つかを美しく說いたチンダルは、又、生活の弧を完成するに、如何に知力と併せて情操の大切であるかを知つて居た。夕陽の雲の色は音學の附し得る以上の價値を有ち、幽かに聞える遠寺の鐘の音には、音學の與へ得る以上の意義が含まれる、と、彼れは語つて居る。

彼れは科學者であつた。然し、彼れの精神は實利的にと等しく、審美的に發達して居つたのである。この人にして、一世を被告としたカアライルの論告に感激し、意を決して、物理學に赴き、そこに、刻苦精勵すること幾星霜、終に、當代の巨匠と成り得たのは極めて自然であると思はれる。

然し、チンダルが事實を自覺し、ダアヸインが其れを理會しなかつたに拘はらず、どちらにしても、(特に、ダアヸインに在つて)、科學の研究に於て、あれだけ光彩燦然たる成果を擧げるには、詩の中に

はたらく崇高な想像力と熾烈な建設力とがはたらいて居たのに相違ない。科學者自身は何んと理會するにしても、畢竟するに、科學上の發見と呼ばれて居るものは、其の實、彼れの感覺、若しくは、知覺の傾向を基本とし、其れに選擇と醇化とを加へて、彼れに取つて理會したり、取り扱つたりするに一層容易なものとした結果に過ぎない。そして、是等は最高の藝術の實行して居る事である。

公平に觀て、(さきにわたくしの識別した相違の點だけはどこまでも念頭に置くとして)、今日に到るまで科學と藝術とが互にその動機と方法と、結果とを異にして居るやうに取られて居るのは、全く、藝術家が科學の性質を理會しなかつたことよりも、藝術の性質を理會しなかつたことより來たつて居るのであり、科學者が藝術の性質を了解しなかつたことよりも、科學の性質を了解しなかつたことより來たつて居るのである。然し、一度、科學と藝術とは、與に創造の方便であると云ふことゝ、美と實利とは共に價値の對象であると云ふことゝの根本原理が體得されて來れば、科學と藝術との間の謂ふところの矛盾も美と實利との間の謂ふところの衝突も、人の解決を竢つまでもなく、自づから斷解して了ふであらう。

美と實利との關係が、理論の境涯を脫して、實生活の領域に入るとき、其れは、藝術と道德との關係として現はれる。是の興味ある、然し、複雜なる問題に就いては、(この論文の性質からしても)、巨細に亘つて、觀察し、評價するの暇をわたくしは有たぬ。されば、わたくしは唯一つの暗示を與へるに止めて置かねばならぬ。

今日、藝術と道德との矛盾は數多くある。然し、藝術も、道德も共に、或る方法と、或る樣式とで、

生活の維持と、建設とを圖らうとして出來たものであつて、又現に圖つて居るものであるならば、是等二つはたまたま、矛盾することがあるにしても、其れの多くは、各の本質から來るのではなくして、是等に對する世人の誤れる所見から來るのである。是れも、畢竟するに、彼等が是等の如何に發生したかの事情と如何に現狀に達したかの經路とを十分に理會して居らぬからのことである。

俗見に憑ると、生活の要具として、道徳が先づ發生し道徳が爛熟して始めて其れより藝術が派出したのだとされて居る。然し是れは、事實を枉げた觀察である、事實を顧ない空想である。藝術と道徳とは二對の双生兒である。一層、正確に語るならば、是等は二對の双生兒の子孫である。されば或る人々が想像するやうに、是等の間に決して主從の關係はありはしない。

藝術と、道徳とが分化し、發生するに先だち、藝術でもなく、道徳でもない、但し、是等の萌芽を胚胎した或るものがあつたのである。人生は嚴肅である、藝術は遊戯であると歌つたのはシラアであつた。が、この或るもの丶特徴は半ば遊戯であり、半ば、嚴肅であるところにあつた。一層正確に云へば、其れは、嚴肅にもなり得ず、遊戯にもなり得ないものであつた。この或るものよりして、歩行と舞踊とが生じ、言語と唱歌とが發したのである。藝術になるにも、道徳になるにも、等しく經驗と反省とより、制限と訓練とを受けなければならぬのである。其等を受けて、だん／＼に様式を劃し、意義を富まして行くのである。

總べての行動は、情操を伴ひ、結果を期待する。そして、尠なくも、それの初期に於て、情操其のものを享樂するために行動すれば、そこに藝術が生じ、又、主として、結果に興味を置いて行動すれば、

そこに道徳が現はれるのである。されば、藝術も、道徳も、生活の助長と、統一とを圖つて居るが、いづれも、獨自の方法を以て、同格の地位に立つて圖つて居るのである。勿論、道徳が藝術と交渉するやうに藝術は道徳と協同する。然し、この事實あるがために、藝術が道徳に附隨しないことは、猶道徳が藝術に隷屬しないのと同樣である。

若しもこの觀察にして藝術と道徳との由來の眞相を把持し得たものであるならば、世人の藝術に對する評價には大なる誤謬が含まつて居ると云はねばならぬ。この誤謬が、人間の自由と幸福とを害することは實に尠なくない。

ヴイクトル・ユゴオは云つた、『美は實利と同等に有用である、——多分、其れ以上に、』と。是れは、たしかに、人間に在つては、美の要求は獨自であり、無上であるの眞理を道破したものである。

わたくしは、斯く云ふわたくしの眞意を正解されんことを讀者に望まざるを得ない。わたくしとて、何人に取つても、生存は彼れに取つて最高である。そして、生存するに第一條件となるものの衣食であるくらゐはわたくしとて知つてゐる。然し、今日、不幸にして、衣食の窮乏に居るものは人類の大半である。彼等は、すでに生存の第一資料を缺いて居る、どうして(たとひ其れが彼れに取つて、永遠には、どれだけの價値があるにしても)、この他の何物に對して、尠しでも、興味を有つの餘裕が彼れにある筈はない。斯かる狀態にある彼等に對つて、衣食に依憑することが多過ぎる、彼等は、もつと藝術に信賴しなければいけぬ、と說くことは、餘りに世態に迂にして、人情に疎なもののやうに思はれるに相違ないと思つて、自身ながら氣耻かしく思ひもする。然し、わたくしは、尙ほ、わたくしの所見をして徹底

せしめなければならぬ。

成る程、美と實利との起原を較べれば、美は反つて實利の先にあるかも知れぬ。然し、實際の問題として、一般人に取つて、藝術よりも衣食を先きとするのは定まつた話である。わたくしは、其れにも拘らず、藝術を先きにし、衣食を後にせよと云ふやうな不通の論をして居るのではない。ただ、わたくしは人間の根本性情に關する間違つた解釋よりして單に、想像の上で、實際にあるよりも以上に、衣食に對する要求を過重視し、藝術に對する要求を輕視することが無いとは限らない。否確かにあると思つて居る。わたくしはこの迷信を去れと云ふのである。

衣食の充實は、確かに、幸福の重大條件である。然し、決して唯一の條件ではない。わたくし共は、幸福の保障を得んがために、先づ、衣食の保障を得ねばならぬ。然し、衣食の保障を得るだけ、概して、幸福の保障の得られない場合が多い。

わたくしは、天然の風致を保存するためには、どんな不便を忍んでも、トンネルを穿ち、橋梁を架してはならぬとは思はぬ。又、剛健素雅な盆踊りを持續するためには、其れがどんな惡風俗を養成しても厭ふべきではないとは信じない。ただ、わたくしは美に對する人間の要求の權威を認めることの無いがために、淺薄なる道徳觀念、若しくは、狹隘なる經濟思想よりして、民衆より、無益に不必要に、僅かの美の萌芽までをも褫ひ去らうとする無謀の擧を非難するものである。自然生活の精神は實利の門より入らずして美の門より入ることが多いと信ずるからである。

Ars longa, vita brevis（藝術は長へにして、生命は短し）是れは、古の哲人のわたくし共に與へた言葉

である。藝術は目的であり、生命は方便である。又、藝術は理想であり、生命は現實である。然し、わたくし共は、現實たり、方便たる生命の外に、藝術を理想とし、目的として求むべきではない。現實たり、方便たる生命を、藝術と化するところに、目的があり、理想があるのである。

こゝに、美と實利とは最も正しき關係に置かれて居るとわたくしは思ふ。何故ならば、こゝに、美と實利とは、識別されて、分別されず、混合されずして、融合されて居るからである。

七、代償生活の尊貴

新が舊に繼ぎ、複雜が單純に代はる時に、そこに、必らず、代償は起つて居る、はたらいて居る。代償は事物の精神化であり、象徴化である。

順序として、わたくしは、先づ、尠しく代償の意義を說明せねばならぬ。

人間の活動に於て、代償の工夫が最も早く、最も美しくはたらき始めたのは、數の觀念の創設であつた。どんなに、獨立した事實としては、宇宙間の隅々を搜し廻はつても、數と云ふやうなものの見出せよう筈はない。實際にあるところのものは、悉とく物體である。三つの俵十匹の馬、二十人の職工は實在である。然し、三つ、十、二十、其のものは、決して實在ではない。太古に於て、人間はすでに彼れの經驗する物體より、其等の性質の一つを抽象し、醇化して、數と云ふ驚くべきものを發明した。今日に至るまで、わたくし共は、數に賴りて生活して來たことが極めて長くあつたし、又現にさうして生活して居ることが極めて大きいために、わたくし共は十分に其れの恩惠を鑑賞することが困難に見える。

然し、若しわたくし共にして、假りに數と云ふものが、初めから、全然、發明されなかつたと想像するならば、わたくし共は、どう云ふ風に生活するであらうかと云ふことは殆ど思ひ付かれない。然し、數と云ふものがなかつたならば、人間の生活と云ふものは、其れは其れは、隨分不便な、不自由なものであるであらうと何人でも感じないものはあるまい。

然し、わたくし共の遠い、遠い祖先は、たしかに、まだ數の觀念を發明して居らず、又さうすることが出來なかつたのである。兎に角、わたくし共が、實際の物體を見ずに若しくは、實際の事件の結果を想念の上で計算するのは、皆、數の作用を通じて、代償によつてするのである。然し、數の樣式を籍りてはたらいて居る代償のはたらきは、可なりに廣汎ではあるが、極めて單純である。わたくしどもの生活の大部分は、もつと、複雜な樣式を取る代償のはたらきに依つて統一されて居る。

わたくし共の生活に於て、新らしい意義と要求とを以て、舊いものを取り入れ、そして其れを利用して居る時に、代償ははたらいて居るのである。されば、代償の生活は、決して回顧の生活でもなく擬古の生活でもない。改造の生活、應用の生活である。わたくし共の生活は、大勢に順應して行けば、絕えず、新らしい或るものを得ると同時に、舊き或る物を失なはねばならぬ。然し、わたくし共の根本要求からして、この舊いものを無下に失ふと云ふことが、わたくし共に取つて、損害となることならば、わたくし共は、現在の生活の當の要求と矛盾しないやうに、其れの樣式を變化し、其れの意義を醇化した上に保存しようと努める。つまり、是れは、獨り、代償の工夫に依つてのみ可能とされることなのである。

公平に判斷して、わたくし共は、近世文明に入つて以來、損失を招いて居るよりも、利益を受けて居る方が多い。思想が自由になつたこと、移動が安全に且つ容易になつたこと、相互の間に、實祐の精神が增したこと等は、わたくしが、今、之等を擧示して、無條件で近世文明の古代文明に優れた諸點であるとしても、このわたくしの判斷に反對するものは、一人もあるまいと思はれる。

然し、等しく公平に觀察して、わたくし共が近世文明に入るがために、わたくし共の蒙つた損失が尠なくも二つある。其の一つは、家庭工業の制度が工場工業の制度に依つて、取つて代はられたことであり、他のも一つは、民衆の大數が、連りに田園を見棄てゝ、都會に群中するの傾向である。

昔より、東洋に於ても、西洋に於ても、地球に對して、人間の懷く信賴と親愛との情は、自然、彼等をして其れを『大母』と呼ぶに到らしめた。實に、人間は彼れの生活に必要な一切のものを、其れに依つて與へられて居る。彼れの事業の一切は地球を舞臺として演ぜられる。彼れに、如何に大なる企畫があり、如何に烈しき功名心があるにしても、彼れは、其れを地球以外に施すことは出來ぬ。されば、永久に何等の幕を隔てず、面と面、この地球に接し、この地球と物語ると云ふことは、確かに人間の幸福に取つて必須のことの一つであらねばならぬ。然し、自づから進んでこの至大の幸福を享樂するの權利を放棄する人々が年々殖える。

產業が一家庭に限られた時代に於ては、酒、醬油、衣服等、日常生活に必要なる殆ど總べての品物の原料は、一家に屬する田地より取り上げられ、其れがやがて其の一家族者の手に依つて、最終の形にまで製作され、仕上げられた。彼等は其等が蒔かれる時より其等を見守つたのみならず、彼等は、又、各、

其等に對するあらゆる取扱ひを分擔して居つた。斯くして、彼等は、最も完全に、卽ち、生産的にと同時に、社會的に生活の全體性を感得することが出來たのである。

然し 彼等が田園を見捨てゝ、都會に來たり、男工となり女工となつて、それぞれ、職を工場に執ることになると、彼等は纔かに細微に分かたれた業務の一片にしか從事することは出來ぬ。彼等は、一擧にして、製産的に社會的に孤獨の人々となつて了ふのである。實にこの二つの事相は、世の識者に依りては、近世文明の弊害として、常に提示されるところのものである。そして、わたくしも、亦、彼等の所見に裏書きする一人である。然し、是れは世界の大勢となつて居るものであり、わたくし共、日本人も亦、人類に共通する性情を享けて居ると云ふ單純なる事實よりして、啻にこの大勢に順應して居るのみならず、進んで、其れを歡迎して居るのである。この大勢も、日本人の性情も、十分の忍耐を以て多年の努力を費やせば、改善出來ないことはあるまい。然し、短日月にては出來るだけに賢き方法に依つて之れに順應する外に道はあるまい。改善するにしても、順應しながら其れを改善して行く外に道はあるまい。されば、わたくし共の取るべき道は、産業制度が尠なくも、當分の間は、繼續される氣運を認識し、其れに對して覺悟を怠らないと同時にあらゆる方法に依つて、其れより來たる缺陷を成りたけ限定することにあるとわたくしは信ずるものである。それは、近世文明より來たる利益を十分に善用することに依つて、過去文明に於ける老人より、一層聰明となり、一層有力となると同時に、代償の工夫を通して、其れに特有であつた長所を、わたくし共の修養に依つて、更に精神化し、象徴化することであらねばならぬ。それならば、どうしたら、それの精神化と象徴化とが行はれるであらうか。其れは、都會に住する小兒と、大人との生活をして、代償を通じて田園生活と家庭工業とに接觸せしめ、薫染せしめることである。今日のところ、大人のためには庭園市街の企てがあり、小兒のためには、其れと併せて手工教育の試みがある。

大食、小食、斷食

醫學博士 佐々廉平

上 大食小食斷食の意義

「エネルギー」の需要量
其自然の調節者(食欲)

斷食が何を意味するかは言ふを要せぬ、字の如く食を斷つ事である、一に絶食、饑餓とも云ふ、絶食の間而し水だけは随意に取るのが通常である。次に大食小食とは何を云ふか、之も讀んで字の如くである、然らば大と云ひ小と云ふは何を標準とするかの問題が起る嚴格に云へば大、小は生理學者、醫學者の云ふ體重維持に必要なる「エネルギー」の需要量を越へて多く食ふか又は反對に不足に食ふかを意味する。而らば「エネルギー」の需要量とは何を云ふか。之に就ては多少の説明を要する。

甲 食物撰擇の理論(エネルギーの需要量)

元と人間に限らず、生體が生活する間は常に其體成分を消費して生活に必要なる「エネルギー」を發生せねばならぬ。此體成分從て「エネルギー」の損失を償ふものは吾人の日々攝取する食物である。かくして生體内に於ては絶えず其物質其「エネルギー」が新陳交代して居る、之の現象をば新陳代謝と云ふのである。此新陳代謝の平衡を保ち、體量を維持(乃至増加)し行くには一定量の食物が入用である。

食物の「エネルギー」價を云ひ表はすには、通例「カロリー」なる語を以てする。一「カロリー」とは一立の水を攝氏零度から一度に温むるに要する熱量を云ふ。此人の體量を現狀の儘維持するには、一日幾何「カロリー」の食物が入用であるとか、此人を肥やすには、此人

痩せかすには幾何「カロリー」以上又は以下でなくてはならぬと云ふ様に唱へる。

吾人の要する滋要素

「エネルギー」を與ふるものは食物中の或滋養素である。食物は種々の滋養素を含有し、夫等が體內に入りて、「エネルギー」ヲ與ふるか否かに由りて二別する。

(イ)「エネルギー」を發生する物質。之に屬するものは、有機性養素卽ち蛋白質、脂肪、含水炭素である。

(ロ)「エネルギー」を與へざる物質、無機性養素卽ち水鹽類、酸素、

食物が胃腸に入れば、其內に含まるゝ有機性養素は酸素の力で或程度迄分解せられ、動物膜(腸壁)を通過し得る形に變化する、之を消化と云ふ。消化された物質は胃腸壁から眞の體內に取込まる(但し胃腸腔は未だ眞の體內では無い)之を吸收と云ふ。吸收された物質は間接直接血流に入り各臓器組織に送られ、茲に沈着し、體物質增加をなし又は直に燃燒分解して「エネルギー」となる。

動物の體內で起る化學的變化は主に分解である。卽ち動物は複雜なる化合物、蛋白質、脂肪、含水炭素等を食物として之を吸收し、呼吸に由つて取つた酸素の力にて酸化(分解)し、單簡なる化合物、水、炭酸、尿素等に迄分解する。此際複雜なる化合物中に存する、化學的「エネルギー」が遊離して、之が他の形の「エネルギー」、卽ち吾人の生活に直接必要なる、體溫とか、筋肉運動とか、內臓の機能とかになるのである。

一方に同時に口から取込んだ無機性養素、水、鹽類は其儘吸收せられ、其儘排泄せられ、身體を素通りして直接「エネルギー」を發生することはないが、而し之等は體內に滯在する間、他の滋養素が「エネルギー」を發生する媒介をなす。卽ち生體內に於ける交流作用、吸收だの、分泌だの云ふ機能の經過を司るものである。

吾人の日常攝取する食物は純粹の滋養素のみより成つて居ない。同時に取込んだ不消化物質(殊に植物纖維素)は一部は腸內の「バクテリア」の作用で分解するが、主に其儘殘留して糞便となり、腸管を刺戟し其運

動を調節し、旨く排便作用を營ましむる効力を有する。或動物殊に草食動物では植物纖維素は缺けてはならぬ物質で、之が缺亡すれば「糞ヅマリ」を起し、一種の中毒現象の中に斃死するものである。

尚食物中の一要素として忘れてはならぬものがある。曰く嗜好品である。元來上記の各滋養素は、純粹の狀態では無味無臭で、久しきに亘つて之を食はんと欲せば忽ち厭惡の感を來し、到底永く持續するわけに行かぬ。玆に於て香料嗜好品の必要が生ずる。元來自然の食品に美味美香の有るのは各自固有の嗜好品が雜つて居るためである。嗜好品は單に食欲を增進するのみならず、直接に、又は神經系を刺戟して間接に、消化を助け元氣をつけるものである。

最後に尚、化學的性質不明の一種の有機物質で、活素(ヴィタミン)等稱へられ、之が缺けては生命維持の出來ぬものが有る。例へば、之れ無くては動物に脚氣に似た疾患が起ると云ふ樣な事實が發見された。人間の脚氣が果して糠等の中に在る活素なるものの缺亡に由て起るものか否かは別問題である。

三大滋養素の配合

上述の如く食品中に含まるゝ各種の要素は各固有の働を持つて居る故、吾人の生活には其何れの一つをも缺いではならぬ。而し之等要素の內、水、酸素、鹽類植物纖維素、嗜好品、活素等は、通例の吾人の生活に自然に充分の分量に攝取せられて居る故、特に注意を拂ふ必要は稀である。

反之常に問題となるは三大有機養素、蛋白質、脂肪含水炭素で有る。之等の物質は何れも體內にて分解して一定量の「エネルギー」を發生し、其發生する「エネルギー」の量に應じて、甲の物質は乙の物質を補ひ得る。此意味に於て三つの養素は同じ働を有し、何れか一つさへ十分に取れば良きわけで有る。が而し滋養素の作用は單に「エネルギー」を發生する許りで無い、日常の生活に際し失はるゝ體成分を補充して行かねばならぬ。而して體成分の主なるものは蛋白質である。今若し人間の體內で甲の物質から乙の物質に相互に容易

く移行し得るものなれば夫れで良いが。蛋白質だけは特異の性質を有し、他の物質即ち脂肪、含水炭素からは、動物體内では十分に合成せらるゝ事が出來ない。かく體成分が主として蛋白質より成り、しかも蛋白質なるものが新に身體内で出來ぬ以上は動物體は蛋白質だけは特に充分の分量に於て外から取らねばならぬ。一方に蛋白質從て之を含有する食品は、一番高價なる關係上、蛋白質は成る可く少く、而し必要量だけ取るには幾何量以上日々攝取す可きかは、生理學者醫學者から嚴密に攻究せられ、今日では生理的蛋白質攝取最小値は、成人に向て日々體重一瓩に對し一瓦と云ふ事に決着した。例へば五十瓩(十三貫三百目)の日本人は毎日少くとも五十瓦の蛋白量を食はねばならぬ。而らば如何なる蛋白質でも蛋白質でありさへすれば同じかと云ふにそうは行かぬ。元來各動物の體質を構成する蛋白質は各其内に含有せらるゝ成分（「アミノ酸」の種類及分類）が微妙に異なつて居る故、成る可く其動物固有の蛋白質に酷似して居る蛋白質を取れば、他の種類の蛋白質よりは、少量取つても同じ効力を顯はすものである、此理由の下に、例へば廉價な豆腐の蛋白質百瓦と高價な美味な牛肉の蛋白質百瓦とを同一視してはならぬ。上記の生理的蛋白質攝取最小限は一般に人間の取る各種の蛋白質を平均しての話である。

反之脂肪と含水炭素とは體内で容易く甲より乙に、乙より甲に轉變し得るもの故、何れか一方さへ十分に取れば、他は全く缺げても可いわけであるが、併し理論は實地と異り、吾々人間の消化管は既に兩方を適宜に雜ぜて食ふように出來て居る故、余り一方にしみ偏すると、容易く消化障碍を起し、例へば脂肪のみ多食すれば下痢を起し易く、又含水炭素のみを多食すれば多量の不消化物を含有し、分量が過大に陷り易く、吾人の胃腸が堪へないのが普通で有る。

「エネルギー」の需要量を定むる種々の條件

上述の如く食品中に含まるゝ、各種の滋養素は各固有の働を持つて居るが、要之、直接間接吾人の生活に

必須の「エネルギー」（體溫、筋力、內臟機能等）の原料となる。人間に限らず、溫血動物では體溫は常に一定して居るが、筋肉働作は人に由り時に由り大に異り從て其人其時に由り筋力の源となる可き「エネルギー」の分量、從て食物の需要量が異なつて來る。

成人の生活（體重維持）に要する一日の「カロリー」量は平均次の如きものである。

	體重一瓩(キログラム)ニ就テ	五十瓩ノ成人ニ就テ
就牀安靜	三〇	一五〇〇
輕度ノ勞働	三五—四〇	一七五〇—二〇〇〇
過劇ノ勞働	五〇	二五〇〇

卽ち「エネルギー」の需要量は其人の體重に從ひ、其人の生活狀態に從ひて大に異るものである。尙細かに觀察すれば其人の皮膚面積に由り大小がある、面積大なれば大なる程、溫の損失多く從て餘計の「カロリー」を要する。此理由で一般に小動物、小供の方が單位體量（一瓩）に對する「カロリー」の需要量が多いわけである。其人の體質が物質消耗の盛んな組織（筋肉、腺器）より成るか、又燃燒機能の弱い脂肪組織が多いかに由りて異る、依て羸せたる人は脂肪肥りの人より比較的餘計の「カロリー」を要する。

各養素の「エネルギー」値

而らば食品中に含まるゝ各滋養素が幾何量の「エネルギー」を與ふるかと云ふに、平均次の如くである。

一瓦、蛋白質　四、一カロリー
一瓦、脂肪　九、三カロリー
一瓦、含水炭素　四、一カロリー
（一瓦「アルコール」　七、〇——七、一カロリー）

上記の養素の內、脂肪と含水炭素とは（「アルコール」モ同じ）、體內にて完全に燃燒して、水、炭酸に迄分解する故、之れ等が體內に於て發生する熱量は、體外（空氣中）にて之に火を附けて燃やした時に發生する熱量と同一である。而るに蛋白質は體內では、空氣中に於けると異り、水や炭酸の外、尿素に迄しか燃燒せぬ此尿素は未だ體外では燃燒し得るものである。故に蛋白質の體內で發生する熱量は、體外に於て燃燒して發

生する熱量より、此の尿素の燃燒熱を差引いた差である。尚又蛋白質は其種類に由り體內にて發生する熱量に相違が有る。例へば動物性蛋白質は一瓦に付き四、二三、植物性蛋白質は三、九六「カロリー」を出す。人間は大凡動物性蛋白質六に對し、植物性蛋白質四を攝取すると假定して、一般に食物中の蛋白質一瓦の「エネルギー」價を四、一「カロリー」と定めたのである。

是等滋養素が、體內に於て分解（燃燒）して發生した新陳代謝終末產物の內、炭酸は主として呼氣中に、水は呼氣、汗及尿中に、尿素は尿中に移行して體外に出るものである。

食物の組成、分量の決定（標準食）

斯く論じ來つて、最後に起る問題は、「然らば吾人の攝取す可き食物の分量組成は如何にして決定す可きか」である。先で各食品中に含有せらるゝ滋養素の分量を知るを要す。之は食物分析表に據れば可い。次に此食品中の滋養素が幾何吸收せらるゝか、即ち各食物の利用率を知るを要す。之も多くの食品に於ては既知である。然る後に吾人の體格より其體質保持に入用なる蛋白質の量を忖度する。又他方に其人の行作の多少に由り含水炭素又脂肪の需要量を計算すれば可い。

獨逸民顯大學の教授フォイト氏Voitが多年の經驗に由り定めたる有名なる標準食（保健食料）は今日も尙當に引合ひに出る。氏は西洋人體重七十瓩（約十八貫七百目）一日平均十時間力役する男子に就ては、一日次の食量及滋養素の配合を要すると唱へた。

蛋白質	一一八瓦（一八、三瓦窒素）
脂肪	五六瓦
含水炭素	五〇〇瓦
總熱量	二、八一〇カロリー

之を標準として日本人の保健食料を東京衞生試驗所で定めたものが有る。先づ日本人は體重が少い故（平均五十二瓩即ち約十三貫八百目）夫れだけ總熱量は少くて可い。次に日本人が脂肪を多く取らず、含水炭素を多食する習慣を鑑みて次の如く改定して有る。

蛋白質　九六瓦
脂肪　二〇瓦
含水炭素　四五〇瓦
總熱量　二四二五カロリー（體量一瓩に對し四六、六カロリー）

尙此保健食料の滋養成分定數に據りて、分り易き爲め三例許りの保健食料調理の例を掲げてある。其第一例をのみ紹介すれば

牛乳　一合
味噌　五匁
野菜（一葱類　二十匁
　　　二芋類　二十匁
　　　三瓜類　十五匁
肉類　六十匁
白米　四合

合計
　蛋白質　九五、七瓦（二六、五匁）
　脂肪　二八、〇瓦（七、五匁）
　含水炭素　四五四、三瓦（百二十匁）
　總熱量　二五一五カロリー

而し此「カロリー」量は、其人の體格職業に由り差異あるは勿論、又各養素の配合も必ずしも之に從ふを要せぬ。蛋白質は總「カロリー」量さへ十分なれば遙かに之より少くて可い事は前述した。又含水炭素と脂肪の比も可なり隨意に變じ得る事も再言を要せぬ。

乙　食物選擇の自然的調節者

斯く論じ來れば、人間が健康を維持し行くためには理論上幾多の點に顧慮して食物を撰定せねばならぬわけで有るが、併實地上には、決して此等色々の點を考へつゝ食物を定めては居らぬ。一定量の蛋白質を攝取する以上は各自好む所に從て飲食し、皆良く需要に應じて居る。健康なる成人が、屢々數年間體量一瓩の差無く止り得、又小兒にても、體量增加の關係誠に規則正しきを見ても明かである。是は自然と「エネルギー」の消耗と食物の輸入との間に、微妙なる調節機能が存して居るからである。此兩者を平衡させる調節者は吾人の自然に覺ゆる食欲で有る。

食欲とは食物を攝取せんと欲する慾望を云ふ。之が高まれば饑餓感となる。之の反對は厭惡惡心である。食物を退けんとし、又は之を吐出せんとする作用である。食欲有る時十分に食へば食欲去る、之を滿腹感と云ふ。其以上に食へば嘔心甚しき時は嘔吐が來る。

健康人に於て、上述の如く、食物の攝取は通例理性に由らず、食欲に據つて居る。食欲は單に食物の分量のみならず、食物の性質をも指定し、生命保持に必要なる蛋白質をも等閑に附せず。例へば運動を多くする時は、過勞無き限りは、食欲亢進し、餘計の食物を攝取して需要の增進に並行する。從て實地上肥滿者を單に運動のみに由りて羸瘦せしめんとするも効の無いのが常で有る。反之安靜は通例食欲を減退す。若し例外として食欲減退來らざれば早晩肥胖症が起る。旨い物を食ひつけて思はず大食し、車にのみ乘つて居る人の肥滿し易いのは其適例で有る。又病の回復期に體量速かに增加するは、單に食欲の致す所で、安靜を保つに拘はらず屢々健康者の二倍以上にも亢進する。決して此時期に「エネルギー」の消耗は減却するものでない、却て大食に由り新陳代謝は高まり居るもので有る。寒い場所、寒い時期には自然と「カロリー」の多い脂肪性食品を好み、暑い所暑い時には「カロリー」の少い淡泊な植物性食品を嗜むに到ることは既知の事實で有る。

食欲は完全には意思に由りて左右せられ得ざる慾望で有るが、而し人工に一程度迄上下せしめ得るものである。飢餓せる時は食欲高まり食物の良き調理を要せぬが普通の生活には之を要する。食欲特に存せぬ時でも、良く調理せられたる食物を見る時は、以前に取りたる其食物の味良き事を思浮べて、吾人の食欲は大に徵發せらる。反對に不味に調理せられた食物は、切角存せし食欲をも破壞し去りて却て嘔心を起す。此意味に於て嗜好品は食欲と同じ意味に働く。

多數の嗜好品に富む食品は、吾人は每日食つても厭かぬ。米飯、パン、肉の如き之で有る。之等の物に馴れ來れば之を去る時は却て非常の不快を感ずる。例へば糖尿病者に絕對に米飯を禁ずること、腎臟病者は氷

久に肉を絶つことは殆んど不可能の事實たるは既知で有る。他の嗜好品少き食物は速かに厭が來て長く持續することは困難である。多くの植物性食品殊に豆類の如きは之で有る。一般に單調なる植物性食品は容易く嘔心を起し、長き攝取に堪へぬが、此時僅かなる變化、適期の斷續さへ來れば、頓に食欲を回復し得ることが多い。一般に食物は其變化が頗る重要で有る。此變化は單に嗜好品の上にのみ止まらず、食物の物理的性質及其他の性質の變化をも顧るを要する。例へば粥、重湯、穀粉ソップ、金團狀野菜の如き流動食は食物の咀嚼に由り來る唾液の分泌が無いため速かに厭惡が起る。又食物の外觀も大に影響し、自然の赤い「トマトー」、白い大根、靑い「ホーレン草」、深黃色の澤庵は何れも目を喜ばせ、引いては食欲を亢進す。反對に不自然の着色は却て厭惡を起す。尙又食物を盛る器具の淸潔、食卓の裝飾等が食欲を左右し往くことは日常經驗する所で有る。

尙食欲に大影響有るものは精神變動で有る。憤怒、悲哀、憂慮、精神過勞、身體の疼痛は食欲を破壞し、反對に穩かなる感情は單純なる食物をも旨くする。食前數時間の騎馬よりも、却て心の合へる朋友との會食が食欲を增す等の實例は云ふを要せぬ。尙精神狀態と食欲從て營養狀態との深き關係は神經病患者（神經衰弱「ヒステリー」、精神病者）が其沈鬱狀態に在る間は常に體重減少し、輕快せば再び增加する事實に由りても明了に知り得。

次に食欲は尙一程度迄人工に欺かれ得るもので有る。元來食品の有する「エネルギー」量と其容積とは何等の關係も無い。食品に由りて、僅かの分量で高き滋養價を有するもの（濃厚なる良品）と、反對の物とある。一般に云へば植物性食品は動物性食品に比して容積の割合に「カロリー」が少い。例へば。

食品名	其百瓦ノ有スル「カロリー」量	等量ノ「カロリー」ヲ與フル各食品ノ分量ノ比
豚（中等ニ肥ヘタル肉）	三一九	一〇〇
馬鈴薯	八六	三七〇
菠薐草	一九	一六八〇

元來常座の食欲を充すものは食物の分量である。何を食つても胃袋さへ膨滿すれば滿腹感を起し、食欲は少くとも一時は納まるもので有る。常から容積大なる食物に馴れたる人間は大きな胃を有し、反對に滋養素の多い容積小なる食物を常食せる人の胃は小さい。今前者に「カロリー」は等しいが容積の小なる食物を與ふれば、其人は馴れる迄は十分に飢餓感を押へる事が出來ず、十分に食はせぬと不平を鳴らすであらう。反對に後者に向て容積の大なる食物を與へば、全部食ふ事が出來ず、若し皆食へば過食感、甚しき時は吐出するであらう。此事實を利用して吾人は「カロリー」を多く入れんと欲せば濃厚なる容積の小なる食品を選び、「カロリー」を少くし、しかも飢餓感を防ぐには、容積大なる滋養素の稀薄なる食品を選んで居る。而し日常の生活に容積過大の食物を取つては、單に身體が重く感ぜられて敏活なる運動の妨となるのみならず、長く持續せば胃壁を擴張し胃壁筋の張力を失はしめ、消化不良や他の障礙を來し易いことは勿論である。

以上の論據に由りて、食欲なる者は吾人の要する「カロリー」に對し適宜に食物を攝取せしむる微妙なる調節者なる事を知ると共に、之が種々の他の影響に由りての一時又は永く病的に變化し來り、食物攝取に對する良き指導者たる資格を失ふ場合あることを明にした。從て吾人は食欲が健全なる間は之の命ずるまゝに食物を攝取して差支無きを知ると共に、食欲を何れの場合に於ても唯一の標準と爲し得るものでないことをも知悉し得たと思ふ。

中　大食小食斷食に由り起る變化

食物の過不足に由る新陳代謝異常
長期斷食者に關する研究的觀察

吾人が要する食物の分量は上述の如くである。若し此需要以上に大食する時、又は反對に其以下に小食乃至斷食する時は、一定の新陳代謝の變化が起り、夫々特種症狀を外に表はすものである。

大食時の新陳代謝

蛋白質は大量に食つたとて體内に蛋白質として沈着するものでない。之は食へば食ふだけ分解して、大部分熱となつて徒らに體外に放散せらるゝ。而し詳しく云ふと、蛋白質は體内で分解するや、先づ窒素を含む部分と、窒素を含まぬ部分とに別れ、其含窒素部分は殘らず分解して簡單なる化合物（主として尿素）となつて尿中に排泄せられ、其分解に際し發生する「エネルギー」は熱になる。而し無窒素部分の方は、一部は燃燒して「エネルギー」となるも、他の一部は動物性澱粉（グリコゲーン）に轉化して、含水炭素や脂肪の分解を防禦する作用をなすもので有る。之れ故に蛋白質を多食して肥らうと思ふ事は、經財上には勿論、理論上にも大なる間違である。尚實地上人間の消化器は永く多量の蛋白質を消化し得るものでない。

反之、脂肪と含水炭素とを需要量以上に取れば、餘分の脂肪は其儘、含水炭素は先づ動物性澱粉（グリコゲーン）となりて肝臟や筋肉中に貯へられ、尚餘り有れば脂肪に轉化して體内に沈着する。

醫師が病の豫防又は治療で肥胖療法を行ふは此原理を應用した美しき結果で有る。脂肪過多の爲め種々の障礙を來す肥胖症は同じく過食の惡結果に外ならぬ。

斷食期の新陳代謝變化及其結果

食を絶つか、又は食物の分量が需要量に足らぬ時（小食）は、動物は止むなく體成分を崩壞して、生活に必要なる「エネルギー」を償はねばならぬ。此際先づ生命に直接關係無き、貯藏品たる動物性澱粉と脂肪が崩壞せられて、緊要なる體蛋白質は比較的庇護せらるるものである。

斷食の三つの時期

吾人は動物が斷食して餓死に到る迄の間を新陳代謝の上から三つの時期に別ち得る。第一期では、貯藏し居りし動物性澱粉と、攝食期（斷食前）に取り置いた蛋白質の殘りとが燃燒する。此二つは最も燃燒し易い性質のもので有る。體脂肪は勿論飢餓の狀態が起ると同時に一樣に燃燒し始めるが、第二期に入れば他の燃燒

物の盡るため、熱源は主として體脂肪である。體脂肪が犠牲となるため、生活せる細胞體をなす蛋白質は良く保たれて、蛋白質の分解量は僅かに一日の熱源の一割に過ぎない位に有り得。從て蛋白質の分解產物として尿中に表はるゝ窒素(主に尿素)の量は極小に迄減ずる。此期では全新陳代謝が攝食期に比して明かに低下し居る。之は一に攝食夫のものに由り起る「エネルギー」の無益の損失が無い事と、又體細胞が多少食物の無い事に適應する結果である。而し其差は僅か九乃至十七%位の減少に過ぎぬ。勿論體成分の崩壞と共に體重が減少する故、夫れだけ全代謝が減少する事は勿論である。第一期の短いに反し、第二期は可なり長く人間では二三週間又は其以上にも亘る。斯くして燃燒す可き體脂肪が盡されてしまうときは、脂肪分解頓に衰へ、之に連れて止むなく、生命を擔ふて居る體蛋白が俄かに崩れて、玆に第三期の代謝狀態が成立し、從て尿中窒素は俄かに劇增する。第三期の持續は頗る短く須臾にして餓死に終るものである。

斷食期中に起る各臟器組織の消耗の程度

上述の如く飢餓期に於ては、一方に主として「グリコゲーン」と脂肪が崩壞せられ、體蛋白質は終期迄可なり良く愛惜せらる。他方に此等各體成分の諸臟器に於ける分布は一樣でないため、飢餓期中に起る各種臟器組織の損失量は非常に差が有つて、例へば脂肪組織は其量を失ふこと最大で、甚しきときは肉眼上殆んど見えない程度になる。筋肉組織之に次ぎ、內臟殊に肝臟等は中間に位す。反之神經組織と心臟は殆んど餓死迄重量を減じない。之は比較的重要ならざる臟器組織が身代りとなつて分解し、生命に直接關係ある重要臟器を保護する結果に外ならぬ。

餓死の時期

之に關係するものが二つある。一は貯蓄滋養物卽ち脂肪の分量に關係す。普通の營養狀態に在る動物では體重が四〇%減却すれば死亡するを常とするも、肥滿せる動物は約半分迄になつても尙死なぬ事が有る。第二には新陳代謝機能の强度に關係する。從て動物の種

類に由つて大に耐饑餓日が異る。鳥は二十日を越えず蛇は半ヶ年、蛙は一ヶ年以上も生存する。又一つの動物なれば安靜にして居れば生存時日從て長い。又夏は冬より久しく耐へ得る。又た動物の年齢に關し、幼者は壯者より早く死ぬる。人間でも新陳代謝の旺盛な幼年者程早く斃るゝ、例へば小兒は斷食三乃至五日で死し、壯者は約三十日位は耐へ得る。而し之には可なり極端な例外が有る事は後述する。

吾々は明治四十四年冬、二週間眞の斷食をした一人の男子に就て、詳細なる觀察をなす好機會に接した、(渡邊學士と共著、東京醫學會雜誌第二十九卷參照)。此人は有名なる能樂者で、當時四十歳、羸せ氣味の、而し體格の良い人であつた。長く胃弱に苦んだ結果、飢餓療法に由り身體を丈夫にせんと決心して、吾々の監督の下に是を決行したいと申出でた。當時氏は吾々の希望をも十分に納れて、諸方面に甘じて研究の材料となつて呉れられた。玆には此被驗者より得た經驗と當時渉獵した西洋の文献とを稱として興味ある點をのみ紹介しようと思ふ。

斷食期に表はるゝ諸種の變化

斷食中體重の減少、斷食すれば次第に體重の減じ行く事は當然で有る。其速度は始めは速かに次第に緩慢となる。吾々の被驗者では斷食前日の體重五〇、八五瓩(キログラム)であつた、之が始めの七日間に四、四〇瓩、次の七日間に二、三五瓩、合せて十四日間に六、七五瓩の損失を起した。從て元の體重に對し一三、二五%、之を一日に平均すれば〇、九五%、即ち此人は斷食中日々平均共體重を百分の一ずゝ失ひ行つたわけで有る。

斷食を止めて後も體重だけは特に長く觀察した。之に由れば攝食期に入るや、日々非常の速度にて增量し二週間の斷食に由て失はれただけを、次の二週間の攝取に由て全く取返したのみならず、第三週に入つてからも尙增量が持續し、一時は斷食前より。榮養が佳くなつた。彼の如く斷食後一時却て肥つて來る事は、彼の腸「チブス」等の後にも屡々見る所で、何れも珍しい事

でない。之は反動で一時食欲の旺盛になるのと、回復期安靜を保つためで有つて、別に此時期に物質消耗が減弱するのではない。而し此營養佳良は多くは一時的のもので、再び職業に携り肉體精神の勞働に付けば、元の狀態に迄歸せて來るのが通例で有る。

身體諸部の周圍徑　も體重の減少に連れ始めの一週間には强く、次の一週間には比較的弱く減少した。最も甚しく細くなつた所は腹部で、次が手足の肉付きの良い部分であつた。之に反し手首足首等は少しも變化しなかつた。

肺活量は始め四〇〇〇立方仙のものが、斷食の終日には三〇〇〇に迄減少したが、攝食後一週日の後には既に三九〇〇に迄歸つた。手の握力も同樣で、斷食中大に減弱したか攝食後速かに回復した。

體溫、脈搏、呼吸は斷食中何等の變化もなかつた。

血液の變化をも精細に攻究したが、要するに吾々の場合には水を自由に飲んだに拘はらず、斷食期中は濃稠となつた。脈搏の緊張度(血壓)も一時低下した。

斷食者の訴へる苦痛

人の想像するが如く强劇なるものでない。吾々の斷食者に就てもさうで有つた。飢餓感は通常斷食に入つて第一日第二日位は强烈であるが、第三日前後からは殆んど無くなる。勿論始めより或る原因のため食欲缺亡し居つた人には此苦痛が無い。次に斷食のため多少新陳代謝の減弱する結果、僅かの事で惡寒を催し、衰弱疲勞感を起す事は勿論で之は次第に强くなる。甚しきは種々の神經症狀、頭重、頭痛、眩暈、卒倒を來し、遂には虛弱、心臟衰弱を起す事さへある。尙屢々食物の來らぬに拘はらず、胃液の分泌止まらず、ために胸燒けが盛んで水や重曹の內服でも中々止まらぬ場合が有る。現に吾々の被驗者では、此苦痛のため斷食を二週間以上持續する事が出來なくなつた。勿論何事でも剛れゝば之に堪へ易い、斷食も再三之を行へば次第に苦痛が少くなるものである。

斷食者の排泄物(糞便及尿)

斷食者の排泄する尿量　動物の身體成分中、「グリコ

グーン」と脂肪とは分解して水と炭酸とになり、體蛋白質は水、炭酸の外尿素となる。尙組織の融解と共に其中に含まるゝ水分や無機鹽類が遊離する。斯くして出來た新陳代謝の終末產物は直に體外に排泄さるゝ故、斷食期中に於ても排泄物は止むものでない。卽ち出來た炭酸と水の一部は呼氣中に移り、他の水、鹽類、尿素等は尿となる故、斷食して一滴の水を飮まずとも汗も出れば尿も出で來るに何の不思議もない。例へば吾々の被驗者に於て、二週の斷食期中に取つた水の量は合せて一二、七八〇瓦、同期中に排泄した尿量は合計一一、四三三一瓦、卽殆んど同量で有る。元來人間にては其生活中に排泄する水分中、尿となつて出る量と、汗及呼氣（呼氣は常に水蒸氣を以て飽和されて居る）から出る量（之をば目に見えぬ水分損失と云ふ）との比は、氣溫や、生活狀態に由り大差あるか、兩者同等か又は尿の方が少しく多い位である。從て吾々の場合には此肺及皮膚から蒸發し去つた大量の水分は、組織の崩壞に由りて遊離した水から源を得たわけで、實際吾々の被驗者は、二週間の斷食中、其體重六、七五瓩を失つたが、今若し人體成分の六〇％が平均水より成るとせば、約四瓩の水が遊離して、之の全部が目に見えぬ水分排泄となつたわけである。

日々の尿量と飮水量とを比較すると吾々の場合には大體に於て多く水を飮んだ日は尿量が增し、飮水を節約した日は尿量も少くなつて居る。一般には斷食期中には飮水量より尿量の方が少いが、唯斷食に入つた當座始めの四五日間は却て尿の方が多いことがある。吾々の例は夫れであつた。彼の斷食又は減食に由つて、尿の出方が却て攝食期より一時多くなる事はある病、殊に心臟や腎臟の故障で、浮腫の有る場合には、特に著明に表はるゝもので、後に述べる如く之の現象を吾々は旨く治療上に應用するので有る。斷食を止めて攝食するようになると、多量の水分を取るに拘はらず、一時尿量が却て減却し、水が盛んに身體に沈着し體重速かに增加するものである事は、吾々の場合に於ても詳細の計算の結果明瞭に表はれて居る。

尿の比重は斷食中は增すのが通例である。而し吾々の場合は被驗者が比較的多量の水を飯んだため、之を前後の攝食期と比較して大差が無かつた。

尿の酸性は斷食期には常に著しく高くなる。元來尿の性は肉食する動物では强酸性、草食する動物では「アルカリ」性である。肉を食へば其蛋白質が體內で分解する際多量の酸が出來るためで、反對に植物を食へば其中に含まるる多量の「アルカリ」が體內に入るからである。今人間に限らず、動物が饑餓に陷れば、丁度自分の肉體を食ふ事になる故、尿が强酸性を呈するのは當然である。尙此上に人間等では斷食すれば、體內で或る有毒の有機酸が多量に出來て、之が尿に排泄せらるゝ。元と人間等の體では此有機酸は常から出來て居るものであるが、同時に取る含水炭素の作用で直に更に分解し、炭酸や水に迄なるのである。然るに食物を取らぬため、從て含水炭素が體內で缺乏するため、此出來た酸が旨く分解し得られなくなる結果、此が體內に蓄積し、從て尿中に移行する。之の現象を酸毒症と云ふて、斷食の有害となる一つの點で有る。但し斷食に由つて來る此酸毒症の度は動物の種類に由りて異るは勿論、人間でも個人に由りて可なり大なる差が有る。吾人の被驗者では、既に斷食第二日に明かに起り、一旦益々增進し、第一週の終りに頂點に達し、夫れから又少しづゝ減少した。攝食期に入つて既に第二日目には全く消失し去つた。

生體は而し此酸の害毒から免れんとして、他方に盛んに蛋白質から「アンモニア」を作り之を中和せんと勤める、從て斷食中は尿中の「アンモニア」量が增るものである。吾々の被驗者でも「アンモニア」量は多い時は平時の三倍にも上つた。此「アンモニア」量を計れば大凡酸毒の度を知る事が出來る。

尙吾々は詳細なる尿分析に由つて斷食中に起り來る種々の新陳代謝異常を攻究したが、之等は玆で述ぶるに適せぬ故一切を省略する。兎に角、斷食中には色々の點に於て興味ある變化を見るもので、其一部は生體が或物質を十分に燃燒し得ぬため、一部は生體が可及

的經財的に物質を利用するため、尙一部は生體が主要物質を成る可く保護せんと勤むる現象と見做し得るのである。

饑餓便　食物を全く取らずとも、胃腸や肝臟や膵臟等の消化液が全く枯るゝわけでない。尙一方に身體組織中で出來た分解産物は、絕へず一部は腸壁より排泄せられ、腸壁の上皮等も絕へず新陳交代して古いものは常に剝脫する故、之等が一種粥狀の腸內容物、所謂饑餓便を構成し、從て斷食期中に糞便排出の有ることも何の不思議もない。蓋し斷食中は大腸の運動を起し、排便を促す食物の不消化殘渣が缺けるため、排便の無い事が多い。攝食期に入つて始めて、しかも通例は攝食第一日中に、特有の排便があるものである。此等の事實は胎兒が生後直に胎便を排出すると同じ關係で有る。

下　大食、小食、斷食の醫治應用

治療法としての大食、過食

治療法としての小食、斷食

吾々醫家としても、勿論萬病に對して一々決定的治療法を有しては居らぬ。或種類の病は如何なる名醫に由るも治癒し得ぬ。又他の種類の病は治療の如何に拘らず自然に治す。第三の種類の病症に限りて良醫の治癒の下にのみ治る、而らざれば不幸の轉歸を取るもので有る。しかも此第三の場合は人の考ふる程夥しくない此缺點に附け入つて、何れの國でも不可思議なる素人的治療家が跋扈して居る。例へば吾國に於ても、或者は全身又は局所の按摩術、或者は灸術、或者は神佛の名を利用して所謂靈術を以て、或者は不可思議の食物例へば唯一種類の野菜のみを以て、或者は沃度劑のみを用ひて、最後に或者は斷食療法を以て、萬病を一軌の下に治癒し得ると唱へて居る。甚しきは健康者をも引入れて己れの顧客となす。之等は僅かに極端で有る事は何人も疑ふ者はあるまい。恐らくは此等の治療家自身も承知の上ならんも、そこは自衛上止むを得ぬのであろう。勿論吾々醫師とて、其治療の効果が萬病に對し絕對的のもので無い以上は、或病に對しては、彼等

の爲す所を一概に罵倒する權利を持たぬ。のみならず彼等は却て、吾等醫家を目して或は極端なる藥劑にのみ據る治療家と認め、同じく吾黨の士たるを免れ得ずと嘲つて居るかも知れぬ。此譏有りとせば實際に於て一部眞理で有る。日本の多數の醫師は、兎角に藥劑的治療をのみ主視し、他の貴重なる療法、例へば食餌療法、理學的療法を輕視して居る、輕視せぬ迄も少くとも十分に實行して居らぬ傾がある。其原因の主なるものは、此等の療法の面倒なると、費用の點とで有る。面し完全なる醫學的治療家は、之等すべての方法を實用し得るものでなくてはならぬ。彼等民間治療家の用ゆる各技術は、實際に於て、吾々醫家の用ゆる治療術の一部に過ぎないのである。唯吾人醫師は、彼等の用ゆる治療術を、しかも屢々唯一つの方法を、萬病に向て同様に强いる事はしない。古代より現時迄の萬有學者醫學者の數へたる、實驗と經驗との上に立ちて、其目前に横はれる病を診定し、其病の何れの狀態かを判斷し、例へば大食の適せる場合にのみ大食を强い、少食乃至斷食の適せる場合にのみ之を勸むると云ふ順序を踏む點を異にするのである。

玆には平易に現代の醫家が、如何なる病症に大食小食乃至斷食を實施せるか、之を最も安全に實施する方法、其者が齎らす効果、其等が伴ふ弊害等に就て略述して見ようと思ふ。

健康なる人は健康なる食欲の所有者である。宜しく其食欲の命ずるまゝに食ふ可く、渇するまゝに飮む可きで有る。勞働を營む職業の人は大食す可く、安靜を守る職業の人は寧ろ小食す可きである、而し一般に大食は全身の營養を佳良にする益あるも消化器を損するの憂有り。小食は胃腸の負擔を輕くする利あるも營養不足を起す恐あり。寧ろ其何れを取る可きかは次の說述に由りて明了となるであろうと思ふ。

患者に就ては其病症に從て、營養を過剩にして體重の增加を圖らねばならぬ事あり。又反對に營養を不足にし體重の減少を望まねばならぬ事あり。又は體重を現狀の儘維持せしむ可く勸むる場合もあり。夫に從て

食物の分量をも組成をも適合させねばならぬ。

(甲)大食及過食の醫治應用

茲に余は便宜のため、大食と過食とを區別する。大食とは前にも述べた通り、「カロリー」の需要量を標準とせるもので、實際に體重保持に要する分量以上に攝食する事を云ふ。過食とは食欲を標準として、其時の食欲以上に食過ぎる場合を指す。從て食欲健全なる者にては大食と過食は一致するが、食欲缺亡せる者の過食は大食たるを要せず、寧ろ「カロリー」量は需要量にも及ばぬ場合も有る。

大食過食の醫治應用の原理　之を二大別し得る。一は豫防的應用で、病氣の有無に關せず、營養不良なる人は身體の諸病に對する抵抗力が薄弱である故、食物を成る可く多く取つて、營養を保持乃至改善し、病氣にならぬよう、病氣の進まぬよう、餘病を起さぬよう勤めねばならぬ。身體が弱れば病毒も弱ると思つた昔の考は間違ひである。第二は治療的應用で身體を肥滿せしめて、或病氣を追拂ふのである。其最好例は慢性傳染病殊に結核症と、官能性神經症とである。之等の場合に胃腸障礙の有無に關せず、旨く食物の分量を增して、肥滿せしむると云ふ方法より、より以上有效なる武器なき場合が屢々である。

大食過食の醫治的應用の場合(適應症)　上記の目的の下に大食過食を應用する場合を大凡次の三つに別ち得ると信ずる。

(一)急性疾患に於て過食法に由り衰弱を出來得るだけ制限し、病の經過を待ち、回復後漸次大食して、健康體を得る場合　例へば誤れる營養法、肉體的過勞、精神的過勞、或る胃腸病等有る時は、食欲減退し漸次羸瘦する。殊に著しきは熱病（重症腸窒扶斯、慢性化膿症）で、此時に一部は身體内の物質燃燒大となるため、一部は食欲缺損し從て攝食少きため、尚一部は胃腸過敏となり、食物を取れば容易く消化障礙を來したため、頓に衰弱羸瘦するものである。此時の場合に於て吾人の義務は上記の原因を除去する事であるが、之が出來ぬ時は、成る可く食欲以上に過食せしめて、羸瘦

を防がねばならぬ。若し此際、食欲の命ずる儘の攝食に放置する時は、次第に衰弱し、精神的沈鬱、食欲缺損益々加はり、例令食欲有りても攝食の勇氣無くなり勇氣有りても胃腸が之に堪へぬようになり、遂に羸痩が四十%内外の體重損失に及ぶ時は餓死に陷る。又屢々かゝる程度に達せぬ前に、衰弱のため身體の抵抗力が減弱し、容易く餘病を起し、そのため不幸の轉歸を取るに到るものである。故にかく衰弱の進まぬ内に或るだけ攝食せしめ、體重損失を防禦し、病の去るを待たねばならぬ。一旦病源が去れば、食欲は速かに回復し、少しく營養法を注意せば、患者は見る見る内に肥滿し來るが通例である。

(二)慢性疾患に於て體重の維持を勸め病の增進を防ぐ事　病が存して、其爲め食餌を注意せざれば、體重減少を來す傾ある時、其儘に放置する時は、羸痩の進行と共に、病勢益々增進する。之等の場合、食餌を注意して體重の維持を圖る事は比較的容易なれども、一旦失はれたる體重を增大する事は非常に困難なのが通例である。適例は糖尿病、腎臟病、膀胱病、神經衰弱症等で有る。此等の症患では、一部は精神狀態の影響(悲觀)に由り、一部は種々の病苦のため、一部は制限せられたる生活狀態(食物や運動の制限)のため食欲振はず、衰弱に傾き易いものである。

(三)大食從て體量增加を以て病氣に打勝ち、之を治癒せしむゝ事　一般に營養を佳良にし置けば、殆んど總べての病に好影響を及ぼすものであるが、特に大食に由り肥滿すれば、其肥滿自己が直接に病を治療せしむる場合がある。

其適例は結核症殊に肺結核である。多年の經驗に由り見るに、かゝる患者を過剩に營養し、體重を增加し置けば患者の氣分良好となり、反對に患者の營養不良にして體重減少する場合には、患者の氣分惡しく、屢々病勢進行する。此氣分の良惡は全身の力の增減のみの結果に非ずして、體重の增減が直接病竈に働きて、體重增す時は肺病竈の進行停止し、又は退行し、體重減少せば病が進行するに由るものである。營養を佳良

にせば何故肺病竈が治るかと云ふに、之は血液の性狀が變化して、病毒其者を滅すか否かは別とし、少くとも筋力が增加し、咳嗽從て有毒なる排泄物たる咯痰を强く完全に略出し得るようになり、又心臟力が强まり循環佳良となり、以て病竈に好影響を及ぼす事は慥かである。故に吾人は今日規則正しき營養過剩法を行ふことを肺結核治療法の最大要件として居る。

其他の肺病に向ての効果は結核の如く著しくない。而し慢性氣管技加答兒、氣管技擴張、氣管技膿漏等に向て營養を佳くし、筋力を强くし、十分に排泄物を略出すれば、間接に病に好影響を與へる。のみならず營養佳良其者が、漿液性又は化膿性の滲出物(結核性、非結核性を問はず)に向て直接治療的に働くものである。

神經衰弱。其他の官能性神經症に向ても關係同種で有る。營養が惡しくなれば神經も從て益々衰弱する、營養が佳くなれば神經も强固となる。此理由の下に羸せたる神經衰弱患者の方が、治癒の見込が多い。何となれば之を肥らすと云ふ治療法が有るからである。

大食過食に由り過剩に取りし食物の運命（脂肪性肥滿と筋肉性肥滿） 食欲以上に取つた食物が、全く消化せられぬと考ふるは大なる間違である。良く其病症を判斷し、其病症に害の無いよう、食物の分量性質を注意してやれば餘計に食つた食物は、體成分に化し體重を增加し得るもので有る。

普通體重の增加するのは、而し、主に**脂肪の沈著**に由る。此脂肪組織の增加は比較的容易に得らるゝものである。而し實際必要なるは、身體の生活機能を司る**體蛋白質**（筋肉、腺器等）を增加して、以て其生體の活力を高むる事である。此體蛋白質增進は、實地上にも理論上にも最も困難である。食餌を注意すれば、可なり大量の蛋白質を、體に着け得るが、此外見上の蛋白質の身體內の蓄積は、多くは一時的の停滯に過ぎずして之が生體の永久の所得、換言すれば筋肉か腺器等の器關の成分となつて、其器關の物質を增加し、其機能を高め得る樣になるものでない。少くとも、彼る眞の體蛋白質增加は、健康者にては、如何に大食すとも得ら

れるものでない。之に反して、體組織の增殖せんとする傾行の有る場合、例へば發育しつゝある小兒、經過せし慢性病等にて、組織の消耗したる跡、即ち病の回復期に在る人間等に於ては、食物の注意に由り、脂肪質のみならず、眞の蛋白增加を達し得るものである。

大食過食の困難及び之に打勝つ法　減食の必要な場合には通例食欲は亢進し。大食過食を要する際には食欲の減退乃至缺亡して居る事が多い。食欲の無い者に如何にして大食乃至過食せしむるかは困難なる問題である。先づ吾人は、食欲缺乏を起せし源因を除去し得るものなれば、之を除去せねばならぬ。同時に其病症に差支無い限り、食欲を增進せしむる法を講ぜねばならぬ。其方法に就ては前に述べた。屢々又食欲を有つても、食ふ事殊に或食物を食ふ事が有害なりと誤信して、攝取を拒む場合がある。彼る時は此迷信を去らねばならぬ。又食欲もあり、患者も攝食せんと勸めても胃腸が過敏で之に堪へぬ事がある。かゝる時は食欲增進藥と共に胃腸の消化を助ける藥の必用も起る。世の中に直接肥る藥は無いが、此の意味に於て肥る事に間接役立つ藥劑は有る。

以上の困難に打勝つに必要な事は、第一醫師（及看護者）の權威である。第二には醫師の嚴格が役立つ事がある。止むなくば人工營養、例へば護謨管で胃袋中に滋養物を注ぎ込まねばならぬ。而しかゝる强制執行法よりは、却て醫師の深切と熱心とが目的を容易く達し得る場合が有る。

大食過食時の食物撰定　肥滿するには一方には過剩の「カロリー」量を輸入せねばならぬ（增食）。他方には成る可く「カロリー」の消耗を少くせねばならぬ（運動制限）。

食欲以上に食物を與ふる場合の發足點としては、患者の、今迄困難無く取り得し、食品食量を與へ、此分量を日々增加して、所望の度、即ち體重體力增加の度に達するのが最も安全である。此際食量增加の速度は衰弱の輕き場合には緩慢でよいが、重き場合には出來るだけ急ぐを要す。かくして成る可く早く過食を過ぎ

て大食の城に進まねばならぬ。

食物の分量を多くすれば從て體重增加は速かである。今胃腸がよく之に堪へ得る假定の下に食物の過剩と體重增加の比とを示せば

一日ニ過剩ニ與フル「カロリー」量	平均一週間ニ增量スル體重
五〇〇——八〇〇「カロリー」	六〇〇——一〇〇〇瓦
八〇〇——一〇〇〇	一〇〇〇——一二〇〇
一八〇〇（即チ所要「カロリー」量ノ二倍）	二〇〇

食物の分量を增すと共に、食物の性質の撰定が重要である。上述せる如く、蛋白質は非常に燃燒し易き故餘計に取れば取る程、燃燒して熱となる。從て蛋白質は殆んど、或は全く、肥滿せしむる効は無く。而し蛋白質が一程度過剩に存する事は蛋白質を身體に沈着させるため入用である。即ち蛋白質は多過ぎても役に立たぬ。少過ぎてはならぬ。幾何位が適當かと云ふに、先づ需要量より三割内外多いのが最も可い。蛋白質としては種々の動物性（肉類）並に植物性（豆類）のものを用ゆる傍、一部は蛋白性人工營養品を用ゆるが最便である。例へば「ソマトーゼ」、「プラスモン」、「サナトゲーン」、「グリヂン」、「レグモン」、「アロイロナート」「ヌトローゼ」「プラスモン」等で有る。之等は蛋白質を濃厚に含有する故、分量が少く、從て胃腸を膨滿させる事が無い利がある。而し眞に肥滿を起す物質は脂肪と含水炭素とである。兩者の何れを主として取る可きかは、昔考へし如く重要な問題でない。人により脂肪類の方が良い事と、澱粉類の良い事と有る。而し何方かと云へば含水炭素を多く取る事よりは脂肪量を多くする事の方が良い。即ち理論上から、脂肪の方が「カロリー」が多い故、分量が少くてすむ便が有る。又多くの人の經驗により、脂肪の增量の方が目的を達し易い事に一致して居る。

「エネルギー」の輸入增加と共に「エネルギー」の消耗制限が必要である。即ち成る可く安靜にする事が肥滿を助ける。昔は絕對安靜を主張したが、今日では適當に筋肉を使役する事を推薦する。絕對安靜は脂肪を增殖する事（脂肪性肥胖）には最も良いが、吾人の欲する

筋肉性肥胖には不適當である。筋肉を使役すれば燃燒を盛んにするが、筋肉質自己は增殖する。從て筋肉使役をなせば、安靜に比し、初期に於ては、肥滿の速度が遲い不利があるが、而し筋肉質を增加する故、安靜に由る唯の脂肪性肥胖の時より生體の活力を大にしつゝ肥滿し得。夫れ故一々の場合に於て、寧ろ安靜に傾く可きか、又は中等度の筋肉使役を取る可きかは、病症に由り取捨せねばならぬ。

營養療法の效果如何を見る最良き標準は體重の測定である。一週に少くとも一度は計らねばならぬ。體重增加の速度は、普通一週半瓩乃至一瓩を通例とし、夫れ以上增すことは稀である。

肥滿法を施せし實例

最後に一つの例を引いて、前に述べた諸々の點を分り易くしようと思ふ。

岡崎某氏、二十三歲、男子　病名兩肺炎加答兒

患者は二三年以來僅かの勞働で動悸がし、息切れがし直に疲勞し易く、兎角く床の上を親しんだと云ふ。診ると體格は中等であるが、可なり羸瘦し貧血せる一男子である。兩方の肺尖に常に水泡音と摩擦音が聽へる(肺尖加答兒及肺尖肋膜炎)。又食物を取ると、胃袋にいつ迄も蓄つて居る樣で、多く食へぬと云ふ。胃液を見ると鹽酸が少しもない、粘液が可なり多かつた、(無酸性胃加答兒)。入院させて始め隨意に食はせて置いたが、十七日間體重は增減せぬ。そこで肥滿療法を始めたるに、八十日間に四〇、七〇瓩の體重が、五一、五五に迄上つた。卽ち此間に一〇、八五瓩、之を一日に平均すれば一三五瓦づゝの增量である。此間與へた食物の分量及組成は次表の如くである。分量は可なり多く、全量二二八六「カロリー」、體重一瓩に就て始めは五六、三カロリー、後には四四、六カロリー、平均四九七カロリーである。從て肥滿法食餌に移つた當座は、分量の可なり大きいため、「モタレル」感は甚しかつたが、元氣がつき肥滿するに連れて、平氣で旨く食はれる樣になつた。勿論全肥滿法の期を通じて食欲增進藥消化藥を投與した。

食品目	其分量(一日分)	其蛋白質	其脂肪質	其含水炭素質	其熱量(カロリー)
米飯	八〇〇	二五、六	—	二五八、四	一一六八
豚肉(中脂)	二〇〇	二八、〇	五六、[illegible]	—	六三八
野菜	一〇〇	一、〇	—	四、〇	二二
豆腐	二〇〇	一三、二	六、〇	二、二	一一八
牛乳	二〇〇	七、〇	七、六	九、八	一四〇
肝油	二〇	—	二〇、〇	—	一八六
レグモン	四〇	三、四	—	—	一四
合計		七八、二	八九、八	二七四、四	二二八六

體重は隔日秤つたが玆には之を省略して次の表にして見た。

月日	食餌	體重
一月二十八日入院	普通食(隨意食)	四〇、六〇瓩
二月五日		四〇、七五
二月十三日より	肥胖療法食餌(分量及組成ハ前表ノ如シ)	四〇、七〇
二月十八日		四一、〇五
二月二十六日		四二、三五
三月六日		四三、二五
二月十八日		四五、一〇
三月三十日		四七、三五
四月七日		四八、五〇
四月十五日		四九、九五
四月十三日		五〇、五五
五月四日		五一、五五

肥滿と共に、患者は元氣大に回復し、始め階段の昇降さへ大儀なりしものが、療法後半期には半日の散歩が疲勞なしに出來るようになつた。又肥滿と共に貧血去り皮膚の色澤良くなりしため、三ケ月後歸鄉して、家人知人より一驚されたと云ふ。尙肺の症狀も殆んど去り、胃液の性質も全く健全に復した事をも證明し得た。

(乙) 小食、斷食の醫治應用

食物を「エネルギー」の需要量以下に減じ、若くは一時絶食する事が、却て身體を健康にし、又は病を治癒せしむる場合がある。吾々醫師の減食乃至飢餓の應用を其目的に從て二大別し得る。

第一は體重減少(羸瘦)を目的とする場合。卽ち目下の病症に對し羸せる方が良い時、殊に肥胖症である。是は肥り過ぎて、そのため色々の苦痛を起す病症を

ふ。之の時は減食させて有り過ぎる脂肪を取る。唯の減食で効無き時は一定の法則で飢餓法を行ふ。次には心臓、腎臓肺臓の或病症に於て、肥り過ぎて居るため、呼吸困難の大なる時等には、減食と同時に下劑を與へる。之で間に合はぬ時、例へば急性病（肺炎等）の時は、血液を人工に取る事さへある。此等の場合の減食法は、通例後述するカレル氏法の形に於て行ふ。

第二、食物を多く取る時は害ある場合。之の場合には羸せる事は目的でない。止むを得ざる結果である。例へば或る胃腸疾患で食物が行くと病の治癒が惡い時等に、一時全く絶食するか、又は無刺戟の形、即ち液狀又は粥狀にして少量を與へる。此間に病氣の治癒するを待ち、其跡で食物を増して、成る可く早く體重の回復を計る。此の時は次に述べる絶食法が屢々行はるゝ。

便宜上余は玆に小食乃至斷食の療治應用を、其實施方法に從て四つに分つ。

（一）減食法（小食）
（二）絶食法（斷食）
（三）カレル氏牛乳療法（特種飢餓法）
（四）或滋養素のみを制限する法（部分的飢餓法）

第一　減食法

減食法は一程度迄攝食量を減じ、しかも通例之を長く持續するを要する。

適應症　一言にして云はゞ、食ひ過ぎに由り起つた病に向てである。殊に重要なるは肥滿症である。次には或る胃腸の慢性疾患例へば胃擴張胃「アトニー」消化不良の或場合である。

實施法　唯食物の分量のみ減ずれば可い場合と、同時に胃腸に障らぬ樣な性質の食物を要する時とで、多少實施法の異るは勿論で有る。玆には主に前者に就て述べる。

食物を減ずる事は、食欲の無い時は容易いが、食欲病的に興進せる場合には困難で有る。大食は多くは知らず／＼の内に養ふ惡習慣である故、之を意思の力で矯正せねばならぬ。單に攝食の度數を減ずる事、例へ

ば三食法の代はりに二食法を取ることに由りても亦多少減食の目的を達し得る場合も有るが、之は通例効果がない。必要なるは後述する食物の選擇の外、其調理を加減することである。

減食の危險　之に二つある。一は減食すれば空腹感が起り、其爲め容易く倦怠衰弱を覺える、甚しきときは神經過敏となり、虚脱、心臟衰弱を引起すこともある。第二は減食すれば必ず體成分が崩壞する。此際主に體脂肪が先づ燃燒し、體蛋白は一程度迄は庇護せらるゝものであるが、減食の度餘り大なるか、又は餘り長く持續する時は、體蛋白が崩壞するに到る。生體の生活機能を負ふ蛋白質の損失は、勿論大なる危險を伴ふものである。

以上の二つの危險を出來るだけ防禦するには、減食の程度を人々に由り適當に定むる事と、減食の際、食餌の選定を注意することとに在るのである。

減食の程度　體重減少の速度と、減食の程度とは、略比例する。速かに羸瘦せしめんとせば、經驗上食物を需要量の半減にせねばならぬ。而し之に危險を伴ふ反對に安全を計るため、餘り減食の度を弱くすれば、羸瘦に非常なる時日を要する。從て此減食の程度は、昔より大なる問題であるが、今日の所では急減法は殆んど廢止せられ、成る可く緩慢なる法に據る事に決着した。現今減食法を其程度により之れを三度に區別する。

（一）五分の一減食法（第一度の脱脂法）｝緩慢なる
（二）五分の二減食法（第二度の脱脂法）｝脱脂法
（三）半減法（第三度の脱脂法又は急劇なる脱脂法）

五分の一減食法とは其人の食物の需要量を計算し、夫れより五分の一だけ減却して（即ち五分の四の分量を）攝食せしむるのである。尤も茲に考ふ可きは、肥滿せる人は、自分の體量の維時には、羸瘦せる人よりは、食物が少くて濟む。何となれば、肥滿せる人は、物質代謝に預らぬ脂肪なる貯蓄物が有るからである。故に吾人は肥滿せる人は、大凡其脂肪量を體重の十乃至十五％と見做し、夫れだけ體重より減却して、其

の需要「カロリー」を計算する。例へば玆に七十瓩（十八貫七百目）の肥滿者ありとせば、其人の脂肪量は約七乃至十瓩と見做し得る液、之を七十瓩から減じた、六十乃至六十三瓩に、單位體重（一瓩）の所要熱量（カロリー）（三五乃至四〇「カロリー」）を乘じたるもの、卽ち其人の體重維持に要する食物量となる。五分の二減食法は、所要「カロリー」より五分の二を減じたるだけの「カロリー」の食量を與ふる事、半減法は所要「カロリー」量の半分を與ふる法である。

減食時の食物選擇　減食しさへすれば、食物の性質如何に拘はらず、必ず體量減少するが、而し減食に伴ふて來る上記の二大危險を出來るだけ防遏するには、特に食物の性質選擇に注意せねばならぬ。元と體量減少の眞の目的は、不用の過剩の脂肪を脫することである。身體の活動力そのものたる體蛋白は少しも減ぜぬようにするのが理想であるが、減食しつゝ絕對的に體蛋白の損失を防遏する事は先づ不可能である。夫故減食時とて、蛋白質だけは決して減却してはならぬ。是れだけは十分に與へて、稍もすれば損失せんとする體蛋白を償はねばならぬ。蛋白質は一日百乃至百二十瓦位を入用とする。從て減却す可きものは脂肪か含水炭素である。兩者の何れを減却す可きかは、重要の問題ではない。而し一般には脂肪を強く制限して含水炭素を殘す方が良い。何となれば含水炭素含有食品は專ら植物性食品で、之は同時に不消化物（植物纖維素）を含むため、容積大で空腹感を防ぎ易い。又不消化物の有るため、減食と同時に來り易い不快な便秘を豫防し得尙含水炭素の方が脂肪より容易く燃燒して蛋白質の損失を保護する力大である。次に減食時に沓水を飲む事を強く制限した時代が有つたが、之は害ありて益なしである。今日は水は寧ろ欲するだけ與へる。之には色々の理由があるが省略する。勿論「アルコール」性飲料は、「カロリー」が多いため全然避けるが可い、殊に麥酒等に於て然りである。

理論は以上の如くであるが、而らば實際上如何なる食品が減食時に適合するかと云ふに、西洋人は馬鈴薯

を推薦する、之は容積大にして養分が乏しいからである、何となれば其二十%が含水炭素で他は水から成つて居る。勿論日本人でも之の好きな人は結構である。一般に米飯よりも麥飯の方が可い。反對に濃厚な食品、餅、鮨、餅菓子の類等は嚴禁す可きである。最も可きは野菜の多食である中等量の生果物も可い。

筋肉使役　肥滿するには大食しつゝ一方に安靜にすれば可い。羸痩するには減食しつゝ一方に成る可く運動する方が効果が早い。のみならず、運動して筋肉を良く使へば使ふ程、肉だけは肥る、之に反し脂肪は餘計に燃える。從て脂肪のみを去り、筋肉を保護する眞の脱脂なる目的に叶ふわけである。故に、運動して差支無き場合には、成る可く種々の運動を勸める。散歩登坂、登山、自轉車乘、「スキー」、體操何れでも可い。

其他の保助法　減食と運動法に兼ね用ひて、脱脂の目的を保助するものが澤山ある。例へば溫浴法殊に砂浴、臟器療法(甲狀腺製劑を食ふ事)、氣候療法等であるが問題以外に亙る故省略する。

第二　絶食法

之は短時日間全く飢餓する方法である。水までも屡々一時は口からは全く入れぬことさへある。

適應症　新鮮の胃腸の出血、殊に胃や十二指腸の潰瘍等。胃腸の新しき創傷、殊に手術又は外傷後。頑固の嘔吐殊に姙婦に來る嘔吐症。腸疾患殊に或腹膜炎、盲腸炎等である。

世の中の斷食崇拜者の斷食應用範圍は頗る廣く殆んど百病に向て卓効ありと唱導して居る。吾人が過食の應用範圍にも進入して居る。健康者に向て迄强ひて居る。之は慥かに極端である。之に向ての一々の批評は茲に止るが彼等の云ふ處にも一部眞理の潜んで居るのは認める。例へば斷食論者が云ふが如く、健康者でも折々斷食すれば、之を重ねるに從て、少くとも斷食だけに對する抵抗力を增す事は事實である。第一回の斷食よりも第二回の方が絶え易い事は西洋の職業的斷食者等にも見る所である。從て後來或病に罹つて、又は他の原因にて斷食せねばならぬ場合の豫備になるかも

知れぬ。尚一つ考ふ可きは普通健康人は多くは大食の弊に陷つて居る、換言すれば必要以上に食つて居る、そして胃腸に過剩の負擔を課して居る。此事は吾々が或病例へば糖尿病者等を入院させて、食餌を一定する場合に屢々認める現象である。之等大食の害は卽座には見えぬ、數月數年の後に表はるゝ事が多い故、之を豫防するためには減食が必要であるが、長く減食する苦痛に堪へぬ人は、折々短時日斷食して、胃腸を休養せしむるのも一理ある。斷食論者の唱る斷食後の精神の一變、生活法の一變も眞理である。例へば贅澤三昧に世を送りし人が、或原因のため貧困の生活に移らねばならぬ場合等は、次第に生活狀態を換へるよりは、短時日の斷食を夾んだ後速に換へる方が容易いに相違ない。此に類する事實は日常吾々が糖尿病者等の治療の時に認める所である。糖尿病者に部分的飢餓法（含水炭素除去）を強ひる場合に、次第に含水炭素を減却するよりは差支無き限り、一轉嚴食餌に移行する方が結果がよい。出來得るだけ、急激糖除去法を取る可き事は學者の說の一致せる所である。又斷食なる生活法の一變に由て來る、精神狀態の一變も、屢々之を善用し得るが、之は而し常に良い方にのみ轉變すると保證出來ぬ。其病症と個人とに由りては却て反對の惡影響を起すもので有る。

絕食の危險　昔は斷食を數週に亘つて行ふたが、之れは大なる危險を伴ふ故、今日では通例數日位に止める。何故絕食が危險であるかと云ふに大凡二つの理由が有る。一は其人が幾何長く無害に飢餓し得るか、一々の場合に於て吾人は明言する事能はず。人間を斷食せしむる時は、始め劇しき飢餓感來るも、之は二三日にして消失する。之に次で次第に、又は卒然として非常なる衰弱感、虛弱、心臟麻痺が起り得る。しかし其時期は人々に由り大差ありて、大食に馴れ居る健康者は却て早く衰弱し、心臟麻痺を起し易い。瘦せたる小食しつゝありし人、殊に婦人にて胃弱のため小食せし者等は、良く絕食に堪へ得る。一方に滋養浣腸とて或滋養物を大腸から注入し、「エネルギー」の一部を償

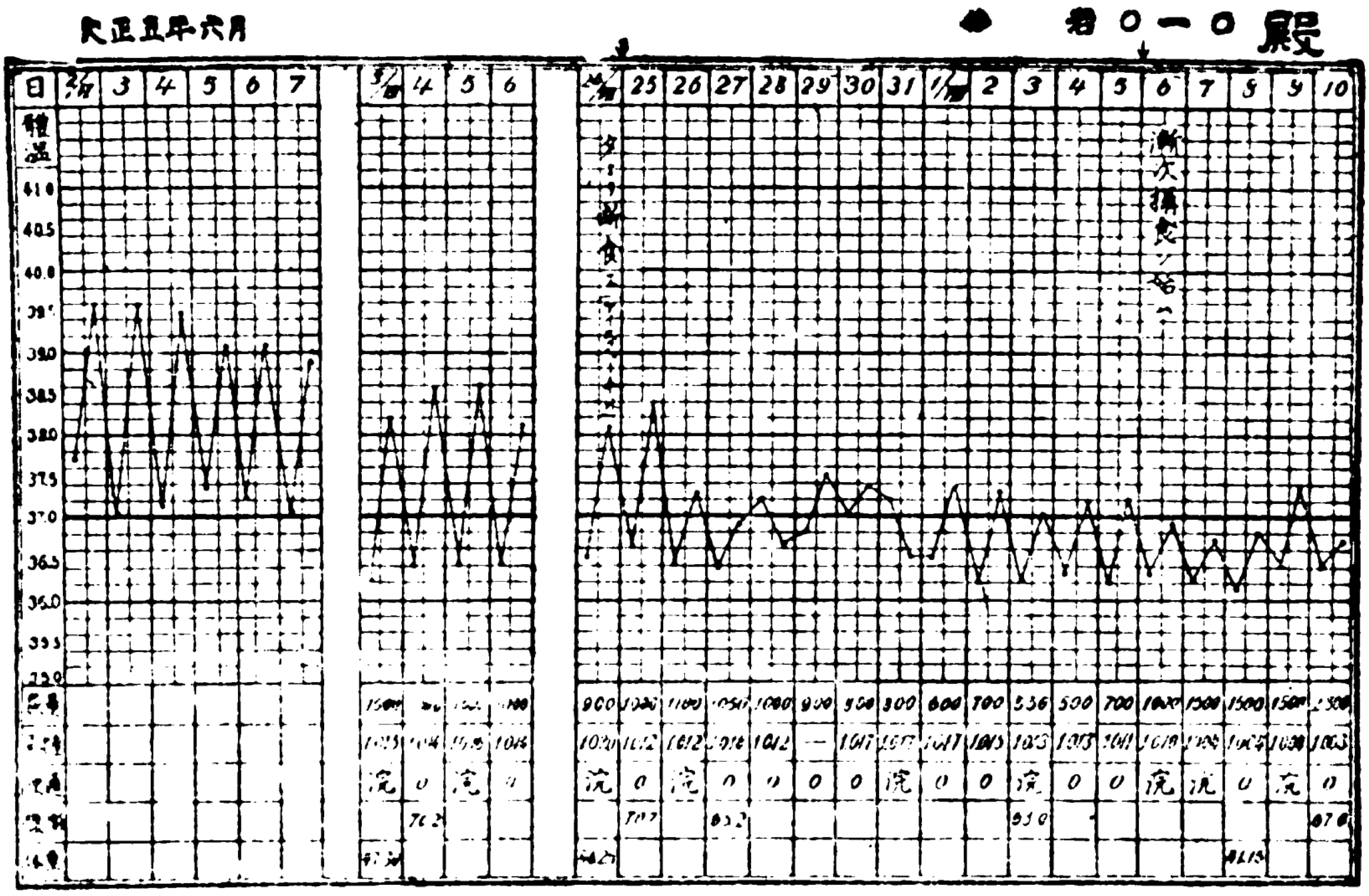
ふ方法は、元來人の考ふる如く、左程役立つものでない。通例は數日間効あるのみで、直に腸を刺戟して、之を吸收する迄、腸に保ち居る事が出來なくなる。例令腸內に止つて居つても、注入液は直に分解し、種々の毒物を發生し、嘔吐や其他の自家中毒の徴候を起し易いものである。第二の絶食の危險は、斯く斷食したる人間が斷食を止めし後、攝食期に移行する時の危險である此際食欲に托せて俄かに大量の、又は粗雜の食物を取る時は頗る危險である。反對に餘り長く飢餓する時は衰弱のため、實際に食欲缺亡し、又は食欲は有つても屢々食物に對する恐怖心が起り、どうしても食物を嚥下することが出來ぬ、嚥下しても直に吐出する。斯かる食物に對する恐怖心は迷信の下に斷食した人、又は醫師より攝食の害を說諭せられて餘り深く信じ切つた患者等に稀ならず認める現象である。現に知己渡邊學士の最近經驗した例は夫れで有る。靑春の一處女、肺尖加答兒にて、或宗敎の迷信の下に斷食を始め、非常に衰弱し、家人醫師の勸めに由り、幾何攝食せんとするも能はず、嚥下すれば早晩嘔吐を起し、しかも、胃に入りし食物は良く消化し、吐出せしものには食物の殘渣殆んどなく、少量の粘液胆汁のみであつた。滋養浣腸も唯生活期を延べしのみにて、七十日間の半飢餓の下に、骨と皮とに迄消耗し、鬼籍に陷つたのである。

絶食の卓効ありし實例　胃潰瘍、腸チブス等で出血する場合、急性胃腸炎、盲腸炎等の時に、醫師が直に斷食を思立ちて數日間持續する事は、今更述べる必要がない。反之亞急性又は慢性腹膜炎の經過中、發熱持續し、胃腸障礙有る場合、之の患者に過食せしめて、營養を佳良に保ち、病の治癒を待つ可きか、又は反對に一時斷食又は減食せしめて、胃腸の刺戟從て腹膜の刺戟を去り、病を速かに治癒せしむ可きか、甲に從へば全身の營養には可いが局所の病竈の治癒に惡い、乙に從へば病竈の治癒には可いが全身の衰弱を招く。こう云ふ風に、一つの病氣でも、其場合〱に應じて全く反對の治療法を取らねばならぬ。玆の分ち目を明確に

取捨する事が、名醫の名醫たる價値の表はるゝ所と思ふ。

茲には最も興味ありと信ずる、惡急性腹膜炎患者に半ば偶然斷食をさせたのが、動機となつて、病を殆んど根治せしめ得た實例を一つ紹介しよう。

去年五月十三日から、頭痛、倦怠、食欲不振、多少の熱を以て發病した。熱は少しも下らず、三十一日になると、突然惡寒を覺へ、次で體溫が四十度に上つた。それから毎日午後になると三十九度以上の熱が出で、午前は低い。熱の增した頃から、多少の腹痛、腹部膨滿を起したが、便通が有ると樂になり、攝食すると苦しいと云ふ。始めは病竈が不明で腸「チブス」の疑を持つた位であつた。七月に入つて腹部の所見明了になり腹膜炎と分つた。其内又肋膜炎を合併して、彌々比較的急性に起つた結核性肋腹膜炎と決定した。熱は一時よりは低くなつたが、而し日々夕刻には三十八度以上に上つた。腹部膨滿が稍去ると共に一層明らかに腹腔の所々に過敏な硬結が觸れ來つた。かくして七月二十四日迄、即ち二ヶ月以上、少しも輕快の傾向がない。此間明らかに、攝食に由て局所の苦痛が增して居つたが、二十四日の晝食後からは、今迄の食後の僅かの嘔氣が劇しくなり、且又食ふと直ぐ胃部の劇痛が加つた。茲に於て半ばは止むなく全く絶食せしめた。翌二十五日は過ぎ、二十六日になると、午後に上る可き熱が全く來らず、腹部の膨滿感も輕快し、斷食前日には腹圍(臍高)七〇、二仙(センチ)のものが二十七日には六五、二仙に下り、斷食九日後即ち八月三日には六二、〇に下つた。此間に少量の「アイスクリーム」だけ取らして置いたが、八月四日後は食後の嘔氣、疼痛全く去り、尚又腹部に存せし多數の硬結が縮小し、全身症候が著しく良くなつた。勿論此間に體重は著しく減少し、斷食前四六、二二五瓩(キログラム)のもの四一、一五に迄下つた。漸次に攝食量を增したが、熱は更に來らず、元氣體重次第に回復して、間もなく(八月十三日)退院し、直に熱海に轉地した。半ヶ年の後即ち本年の始めから再び某大學に通學して、現今尚健康體を持續して居る。今體溫



體重、腹圍徑等の關係を一覽表にすれば上の如くである(體溫表參照)。

此例は久しく攝食に由り局部症狀が惡しく影響せらるゝ事を知り居りながらも、全身衰弱を恐れて患者の意の儘に攝食せしめ置いたが、餘り局所症狀の強くなつたため短期斷食を決行した所が、此間に腹膜の炎症が攝食に對し過敏ならざる程度迄治癒し、是が動機となつて腹膜炎も治し、全身の營食も回復した、美しき一例である。

第三　カレル氏牛乳療法

之は醫師の最屢々用ゆる一種の半飢餓法である。詳しい事は玆で述べるに適せぬ故、省略するが、吾々の日常用いて居るのは始め五乃至七日間は日に唯牛乳四合を一合づゝ四時間毎に飲ませ、其の間絶對安靜をさせて置く。次で漸次に卵、「ビスケット」、「パン」後には米飯肉野菜を與へ、通例、十二日目位に混合食に歸る。而し其後も暫くの間(二乃至四週)は成る可く飲料を制限し、尙全期を通じて便通の整理を計る。

適應症 は心臓、腎臓、肺臓、疾患の或場合である。例へば心臓瓣膜病、心筋炎、腎臓炎、脚氣、肺氣腫、慢性氣管支加答兒、肥胖症等で心臓衰弱し、呼吸困難、喘息發作、浮腫、心臓部に反覆せる疼痛ある場合。其他腹膜炎や肋膜炎や肝臓硬化等で、腹腔肋膜腔に水ハ畜積した場合等に適用する。吾々は脚氣の結果、殊に再三反覆して脚氣に罹つたため、心臓の悪くなつた時(之を慢性心臓型脚氣と命名した)浮腫の有無に拘はらず、之を行つて卓効を認めて居る。而しカレル氏法には色々の注意を要し、例へば腎臓炎で尿毒症の有る時は禁忌である。心臓の筋肉の非常に侵されて居る場合には奏効せぬ。貧血衰弱せる動脈硬化患者等には注意を要する。

カレル氏牛乳療法は今より五十年前ロシアの侍醫カレル氏の發明に係り、其奏效は寧ろ經驗から出たものである。之が何故奏功するかは、寧ろ後から理窟を付けたに過ぎない。奏効の理由は減食、減水、減食鹽、無刺戟に因る消化器循環器排泄器の休養である。同時に併用する安靜の價値も度外視してはならぬ。旨く奏効する時は、療法施行後數日にして、尿量却て著しく増加し、總ての苦痛が消散する。此療法を適應せる疾患に、合理的に應用して、しかも奏効が無い時には、其患者の豫後は頗る悪いと云はねばならぬ位に價値が有る。

カレル氏療法實施の實例 カレル氏療法の好果を今更吹聽するのは、大に遲れて居る故、玆には吾々が特に應用し始めた脚氣の或場合に卓効を認め居る事に就て其一例を紹介しようと思ふ。

高橋某、二十六歳、强壯なる男子。去年八月脚氣に罹り、それが十分に治りきらず、足が重くて少し歩くと動悸や息切れがすると云つてゐた。今年四月十一日入院させて、診ると心臓が頗る大きく。又足の腓腸筋の内側に硬い「シコリ」が殘つて居る。入院以來成る可く水を飲む事を制限したため、尿量一日四百乃至七百瓦位である。單純の安靜や藥劑療法が効が無い故、四月二十二日からカレル氏療法を始めた。所が患者には

外見少しも浮腫なきに拘はらず、其日から尿量俄かに增して、第一日二二〇〇、次日一八〇〇と云ふ風に四五日增量持續し、次で元の量に歸つた。療法施行後(五月五日)の心臟の大さと施行前の大さを、X光線で比較するに、明らかに後の方が小さい、殊に右の方へ小さくなつた、同時に動悸も息切れも無くなつた。而し此二週間の間に體重は四八、一五瓩から四四、四五に迄減した、漸次食物を增すに從て、體重も頓に回復し、五月十七日退院の時は四九、四五即ち元以上になつた患者は長き病苦を一掃して嬉々として歸鄕した。

第四　部分的飢餓法

之は食物中の或る一二の滋養素のみを制減乃至除去する法である。健康者では、前に述べた如く、滋養素の何れの一つを缺いでも、健康に差支を生ずるものである。而るに或病人では此內の或る滋養素が有つては又は之を取り過ぎては、却て禍をなす事がある。斯う云ふ場合には、此有害なる滋養素だけを全く除去し又は減量すれば、病を治し又は輕快し得る。かく食物中の或る滋養素のみを制限する事を部分的飢餓法と命名する。之れに夫々病症に從て、蛋白質、脂肪、含水炭素水、食鹽の制限法がある。此等に就ての詳說は全く避け玆には梗概に止めて置く。

(一)蛋白質制限(謝肉食餌法)が或る病、殊に官能性神經症例へば癲癇「ヒステリー」神經衰弱、バセドウ氏病、或神經痛等に良効を奏する事は既知である。又或血液病、或皮膚病、腸胃より來る自家中毒症にも肉を斷つ事が良い。

(二)脂肪制限　肥胖症の人は一般に脂肪多き食物は不適である。其他或胃腸病黃疸等には制限を要する。

(三)含水炭素除去乃至制減　最大の適應症は糖尿病である。糖尿病者は特別に重症の場合は外とし、一般に含水炭素を減じて糖が尿中に出ない樣に勸め居れば漸次に(而し常に緩慢に)輕快し又は全治に到るものである。又特種の腸の病で酸性醱酵症なるものがある。之の時も含水炭素(穀物や牛乳)を制限すれば全治に到り得るものである。

（四）水、食鹽の制限　前述のカレル氏法は一部は此原理を應用したものである。一般に浮腫の有る場合に適當する。

以上の記述に由て、大食小食斷食なるものの意義、其際に起る身體内外の變化、之を醫療上に應用する事等に就て、大略を紹介し得たと思ふ。之が受療者に對し幾分の便宜を與へ、施療者に對し多少の參考となり得ば、演者の滿足する所である。尙不備不足の點に向ては識者の批判を望む。

大正六年六月於駿河臺寓居

＊　＊　＊　＊　＊

トルストイの自然生活論批判

加藤一夫

『鳥を見よ、彼等はたゞ飛び餌をあたり巢を營むで生きて居る。そして彼等がこれを爲して居るのを見ると彼等の歡喜は余を悦ばせる。山羊や野兎や猿はたゞ食ひ殖えそしてその子を育てる。而も彼等がこれをなして居るのを見る時には余は彼等の幸福を確信する。そして彼等の生活の合理的なることを信ずる。』

これはトルストイが彼の「我懺悔」に於いて、長い間の懷疑の後に漸く得たる希望の光をもつて云つた言葉である。これを吾々の言葉で言つて見ると、鳥は鳥で山羊は山羊で、野兎は野兎で、みな自分に本具して居る性能をもつて居る。で、彼等の眞の生活と云ふのはその自己に固有なる性能を十分に遺憾なく發揮して生きて行くことである。その時初めて鳥は本當の生活をし自分でも幸福であると云ふことになる。即ち鳥がそ

の自己の本然を（即ち自然を。自分は玆に本然と自然とを同意語に用ゆる）十分に表現した時始めて彼の生活が眞實を得ると云ふのである。

トルストイは更に進んで、然らば人は如何に生くればよいのであるかと自問して、それも仍り、此鳥の場合と等しく自己の本然に生きることであると云つて居る。

此考へ方は何もトルストイ獨特のものでない。中庸に於いて「天の命これを性と謂ひ、性に率ふこれを道と謂ひ、道を修むるこれを教と謂ふ」と支那の聖人が言つた道の根本義も「心は即ち道、道は即ち天、心を知れば道を知り天を知る」と云つた王陽明も、無爲の道を説いた老子も凡てみな同じ根柢に立つた考へ方である。

即ちトルストイも亦、多くの東洋の聖人達と共に、人間の生活の根柢を此の本然に歸したのである。本然に從ふ生活のみが眞の生活であり、實在の生活であるのを見たのである。何故に吾々の本然が、吾々に生活の根本義を與へるのであるか。何故なればそれは實在の根柢から生じて來た實在の表象であつて、實在そのものであるからである。それを信ずるに至つた光明の一刹那の感を彼はかう記してある。

「此の衷心の復興は一體何であつたか。神の存在の信仰を失つた時には余は生きて居なかつた。もし神を見出し得ると云ふ感情が少しも余の衷になかつたなら、余は最早、ずつと前に自殺して居たであらう。余は實際彼を求めた時にのみ生きて居たのである。「おやそれ以上何を求める必要があるんだ」ある聲が余のうちで叫んで居る樣に見えた。「これが彼だ。自分にとつてそれを離れては生命のない彼だ。神を知ることと、生きることとは一つだ。神は生命だ」

神は即ち、生命、實在、神の此の三つを一つにすることが出來たのである。そして吾々のうちにその神を見たのである。

一切の生存はそれ〴〵に自己に固有なる面目を備へて居る。しかしその生存の奥にまでわけ入つて行く

らば、必ずそこに、相互に脈々として相通ずるものがある。そしてこれが卽ち生命の渾一的實在である證據である。「コサック」(一八六一年出版)のオリェニンはカウカサスの戰地に在つて、太陽の光も通らぬ樣なこんもりと繁つた靜かな森の中に獨りで獵に行つた。そしてそこに腰をかけて休みながら、蚊や蚋のブン〱云つて飛んで居る光景を凝乎と視て居た。すると彼の心は段々と靜まつて來て、自然と森との沈默に同化して來た。そして其時彼は此の森の精やそこに飛んで居る蚋の心の中にまで入ることが出來た。彼は思つた。「彼等の各々が何等かの理由によつて自分の周圍にブン〱飛んで居るのだ。そしてその一つ〱がみんなドミトリイ・オリェニンで、丁度自分と同じやうに凡ての他のものから區別されて居る存在なのだ」と。かくて彼はまたその蚋の心もちを察する事が出來た。「此處だよ、こつちだよ、子供達。こつちにうまいものがあるよ」から蚋の親がその子に云つて居るのだと彼はわかつた。けれど獸ものの心を遙かによく知つて居るのは、オリェニンがカウカサスで初めて知合になつた、あの老獵人イエローシュカ小父である。彼は獸の心を知つて居た。そしてその獸が人間同樣に賢い本能をもつて居るのを知つて居た。そしてあのガサツな手で蠟燭の灯にとび寄つて來る蛾を追ひ放ひながら、「小馬鹿め、馬鹿め」と自分の子に對してども居るかの樣に、愛情のこもつた聲で「自分の身を燒いてしまふぢやないか、この小馬鹿め、さあ此方に、どんで行きな、空間(あひだ)がたんとあるぢやないか」と叱つて蛾の翅をやさしくつかんで出してやる爺さんであつた。

此樣風に、啻に動物のうちに人間を見るばかりでなく、更にまたトルストイは人間のうちに動物を見た。そしてメレジュコフスキイが謂つた樣に、彼は「人間を探究して動物に至り、動物を探究して人間に達することによつてトルストイは兩者の奧底に最初の共通なる者、唯一のもの、象徵的なるもの」を與へることが出來た。と云ふのは彼は凡てこれ等の個々の存在の奧に一つの實在的生命の流通を直觀したからである。

眞個の生活は本然に從つて生きることであるのがわかつた。然らばその本然とは一體何であるか。その本然に從つて生きると云ふ自然生活とは一體どんなものであるか。

そのディテールに入るに先立つて、それ等のディテールの根本的性情とも云ふべき自然生活の標本の――トルストイが示した――一つを玆に語るならば、それはまさしく「イワン・イ丶リヰッチ」の僕ジラシンや「主人と僕」の僕ニキタの如きものであらう。

極普通の善良な生活を送つて來たと思つて、何等の煩惱も疑惑をも起さなかつた裁判官イワン・イ丶リヰッチが初めて死の面前に立つた時、彼は實に如何ともすることの出來ない恐怖と苦痛と孤獨と寂寥とを感じないでは居られなかつた。けれどそこにたつた一つ彼を慰めたものがあつた。それは彼の僕ジラシンである。ジラシンはイワンに接觸する文明人の他の凡ての樣に虛僞を言つたり虛僞をすることを知らなかつた、又その必要もなかつた、それ程彼は純眞な生命の自然に生きた一個の自然人であつた。そしてその彼の自然の性情は物の奥底に横はつて居る意味を覺ることが出來、それを佯る必要を少しも見なかつた。そして病み衰へて居る主人をひたすらに氣の毒に思つて居る狀があり〳〵と見えて居た。そして何もかくさずにその主人に人間は皆一度は死ぬのだから、彼は今死にかゝつて居る主人のためになら（他の凡てのものは彼の死を彼にかくして居た）どんな事をしても厭はないと謂つた。それ故にイワンは彼にだけはどんなだゞを捏ねてもいゝ樣な落着きと親しさと自由さとを感じた。

けれどもつときつぱりとその性格の表はれて居るのは、「主人と僕」の僕ニキタであらう。彼は金を勘定することと商買の取引との外何者もない主人ワシリ・ドミトリヰッチに仕へて何等の不平もなく、ただ自分自身の自然に生きて居る僕であつた。だが主人が慾に眼がくらんで、ある吹雪の夜、生命の危いことも顧みないで行つた橇の旅びのお伴をして、さて途に迷ひ迷

ひ、到頭もう如何ともすることが出來ないので、雪の荒野に野宿しようとする時にも、別に恐ろしくも何ともなかつた。死の恐怖に悸えた主人が僕をホツテキポリにして、獨り馬の背に跨つて何處かと驅けて行ても、主人を哀れみはしても怒りもせず、悲みもしなかつた。

「自然を相手に生活し、萬づ不如意に慣れた者の常として、彼は辛抱強く、數時間は愚か幾日の間でさへも苟且の不安も苟且の苛立たしさも味ふことなく過すことが出來た。……今夜自分は死ぬかも知れない、多分此有樣では死ぬであらうといふ考へは橇の後へ倚掛つた刹那にも考へついて居た……今夜死ぬと云ふ考へは彼には別に不愉快でも恐くもなかつた。彼の生涯は一度だつて御祭のやうなことがなかつた。反つて間斷のない辛苦で、そして今になつてそれがそろ〳〵倦ぐんで來て居た。そこで自分は愈々死ぬんだと思つたとて彼には別に恐くはない、彼にはワシリイ・アンドレヰッチと云ふ樣な主人があつて、此世に居てはこれに使はれて居たが、まだ此の外に、今一つ自分を此世へ送つてくれた本家本元の主人があつて、自分はこれに依りすがつて居る樣な氣がした。で、死ねば死ぬで、此の主人の力のまゝに從つてしまふだらうし、それにこの主人は彼を親切にしてくれるだらうと思つて居た。そこで、自分は愈々死んだと思つたとて彼には別に恐くはなかつた。」

かうトルストイは此のニキタについて言つて居る。

前者の自然には基督教的な純眞な愛の自發がある、後者の自然には佛教的な素朴な悟入がある。兩方とも宗教的で、何等の拘束のない自由人の自然である。そして此れが普通民衆の至醇なる自然的生活である。そこには何等の作意がない。虛僞もない。たゞ自分のうちにある自由なる自然をそのまゝに出してあやまたない。「一性に從ふこれを道と謂ふ」所以である。

これは最も醇眞な自然生活の具體的な表現である。しかしながらこれ等の人々はまだ、廣い世界をもつた人々でない。彼等の世界は自分や自分らの主人や主人

の家のうちに限られて居る。たとひその生活には何等の澁滯がなく、懷疑がなく、自由を感じ、テキパキして居ても、それは丁度自分以外の多くの煩ひを自分に負ふことのない小兒の自然の樣なものであつて、子供や妻や生活の些事の一切を自分の肩に負ふところの、父親のもつ自然ではない。

人はだん／＼と、年をとるに從つて、生活はたゞ自分一個のものでないと云ふとに氣がつく。生活は萬人共同のものである。眞の自己は他の一切と孤立した世界に住むべきではない。眞の自己は世界と稱する一切を自分のうちに抱含して居るものである。從つてそこに本質的な交渉がある。そうした人の自然はもうニキタやイェロートシュカの樣な單純な世界ではあり得ない。トルストイの考案も亦そこまで進まねばならない。

イワン・イヽリヰッチも「主人と僕」の主人ワシリイも、あの死の恐怖を見た終焉の床に於て、ふとしたはづみから初めて心の底から、即ち彼の自然によつて、他人を愛する心が起つた。生れてから死に至るまでの長い年月の間、たえて解放したことのない自然を、今はの際になつて初めてその終生の牢屋からとき放つたのである。そして見よ、何たる變化を彼等は經驗したか。そのちよつとした心の變化に、その自然にぞつこん沒入しきつた時に、彼等の前にはもう、死の深淵はなかつた。一切は樂しく、安く、喜ばしかつた。死は忽焉として消え去り、恐怖は虹の樣になくなつてしまつた。

丁度これと同じ樣な經驗をトルストイはしたのである。トルストイの所謂、今までとは正反對に者の見える樣になつた、そんな轉機が彼の上に來たのである。彼も亦イワンやワシリの樣に、勇猛なる愛の實行者となつた。

「我等何を爲すべき乎」一卷は彼の論文と云ふよりは寧ろ、此の轉向後に於ける彼の心理の變化と心眼の開發とを敍述した物語であると云つてよい。それによると彼は先づ新しい生活の第一歩として、貧民に對する

慈善事業に着手した。けれど彼は、それによつて貧民の狀態が寸毫もよくならない事を知つた。そして此の經驗は彼に貧者と富者との關係の眞相を示した。――自分は今トルストイが示した、自然生活の實際的適用を語らうとして居るのである。

富者が貧民に慈善をする。それは實に美はしい善い事の樣に思はれて居る。勿論さうであるのに違ひはない。しかしながらもつと根本的に考へて見て、此れは世人の考へて居る程に立派なことであらうか。貧者に對し富者のなすべき義務はそれよりももつと根本的な何かゞあるのでなからうか。

トルストイは貧富の關係を明瞭に見ることが出來た。そしてその時、慈善をなんかとして居る自分が耻しくてたまらなかつた。何故なれば彼は、自分で儲けたのでない、父祖の代から受嗣いだ、多くの土地と金錢と財產とを所有して居る。そして彼は、自分では何事もしないのに、それ等の土地や財產から生ずる多くの利潤によつて贅澤な遊民の生活をつゞけて居る。而かもその土地や財產からして富を生產するものは、彼のために汗水をたらして、終日終夜、たゞそれのみにかゝつて生きて居る多くの勞働者たちである。貧しい勞働者が額の汗の報酬は、彼の生產した富のその幾萬分の一であるかも知れない。しかも富める彼の怠惰と贅澤との報酬は正にその反對である。彼は貧民に慈善をする、しかしそれが何で慈善であらう。貧民から奪ひとつた富の極少部分を彼等に歸してやつたとて、それが何で賞讃さるべき美德であらう。

かくて彼は慈善事業をやめなければならなかつた。その良心の故にやめなければならなかつた。そして何が本當の生き方であるかを改めて考へなければならなかつた。

彼は、貧富の間に斷つことの出來ない相關の存ずる事を見た。富者である彼が、贅澤であればある丈け、貧者の勞力を無殘に消耗して居るのであるのを知つた。更にまた、彼の所有して居る金や土地が、貧者を新しい意味の奴隸にする一種の暴力であるのを知つ

た。そこで彼の考へたことは、眞の生活は、自分のことを自分ですることと云ふことと、土地や金の如き暴力の所有を拒むことにありと云ふことにあつた。財産をもつてはならない。そして凡てみな勞働者であらなければならない。

凡てはみな勞働者でなければならない。少なくとも自分の食糧を自分で儲けねばならない。それは吾々の最始にして避くべからざる義務である。然るに多數の富豪や「敎養のある人民が、自分では働きもしないで靜かに他人の勞力を――彼等自らのために必要なる――吸取て、そしてかゝる事柄は極めて自然で合理的であらうと思惟して居ると云ふのは何と云ふ怪しからぬことであらう」何處にまた如何に、住まふとも、炭火一つとても、米粒一つとて自然と湧いて來るものでない。必ず誰かゞ働らいてそれを生產したのでなければならない。而もそれは吾々の生活のためには必要缺くべからざるものである。然らば吾々敎養のあるものや、富者が、何で自分ではそれ等を生產することなくして而も他人の勞働の成果を盜むの權利があるか。

のみならず、吾々には頭腦があり心情があると共に眼もあれば手もあり足もある。吾々の肉體は吾々をして勞働せしむる樣に造られて居る。もし吾々にして頭ばかり働かして居ていゝのなら、手や足は吾々によつて何の用があるか。手や足を働かすことなくして頭ばかりを働かして生くることが何で自然の生活であると云へやう。

今日の社會に於ては分業といふことが行はれて居る。そして今日の科學はそれの正當である事を認容して居る。彼等の分類に從へば、生產は土地と資本と勞働との三要素によつてなされる。そして土地は地主に屬し、資本より生ずる利子は資本主に屬し、勞働は勞働者に屬すとなして居る。そして玆に三つの分業が行はれて居る。しかしこれは正當な區別ではない。もし地主が土地に對する地代を要求するならば、同じ樣にまた、生產の主要部分をなして居る太陽や空氣の割前は――生產の要素を三分するの非はこれでも十分にわ

かる——誰が果して要求してゐるのであるか。論者は言ふであらう。太陽や空氣は萬人の共有である。しかし土地はある所有主に屬すると。しかしそれは果して正當であらうか。

空氣や太陽が萬人の共有であると共に土地もまた萬人の共有である。それをある地主が私有するのは正當であるとは云はれない。

土地はもと、それを使用する何人の用にもなつた。それは決して地代を拂はねばならぬ樣な種類のものではなかつた。而もそれが或る者の手に歸するに至つたのは、征服者と被征服者との區別か生ずるに至つてからである。トルストイは曰ふ

「侵略者はその土地から取り得る限りの凡ゆるもの——家畜穀物及び織物——を掠奪して行く。また時には男や女の捕虜をさへ取つて行く。

幾年かたつた後、侵略者はやつて來る。けれど人民はまだ彼等の不幸の傷痍から醫されないので、侵略者が彼等から奪つて行くのが殆んどない。そこで彼等はまたその犧牲を利用する更によい方法を案出する。

その方法は極めて簡單であつて何人の心の中にも自然と浮んで來る種類のものである。その第一は即ち個人的奴隷である。その抑壓者が凡ての事を管理運用しなければならず、凡ての奴隷を養はねばならぬことがわかつて來るので自然と第二の方法が表はれて來る。そこで人民は、侵略者の財產と見做されたところの彼等自身の土地に殘される。侵略者はその土地を重なる軍人の間に分掌させる。そして人民の勞力を利用する樣になる。

併しこれにも亦障碍がある。被征服者の凡ゆる生產を、これ等の人々によつて監視さすのは決して便利でない。そこで、第三の方法が案出される。それも亦一つの初めの方法の如く原始的である。即ちそれは被征服者が或る定められたる期限内に拂はなければならぬ義務的租稅である。」

然らば玆に、何人のものでもなかつた萬人共有の土地が、ある權力者の權力によつて支配される樣になつ

たのである。そしてその權力者は、自分の者でない萬人の公有物から地代をとる樣になつたのである。

金が貧民を奴隷にする段取もまたこれと同じである。金は土地を買ふことが出來る。そしてその土地は自ら勞働しない人のために生産の大部分を提供するのである。金はまた器械を据ゑつけることも、多くの職工を使用することも出來るのである。そしてこれは座ながらにして多くの富を蓄積するのである。

かくの如くにしてトルストイは、金及び土地が新らしい奴隷をつくる恐るべき暴力であるのを見た。そこで彼は人生に眞の幸福を見んとせば人々がお互に此の惡より脱れ出でなければならぬと云つた。そして此の萬人の共有である土地に於いて、凡ての人が働いて食糧を儲け、そしてその餘れる時間をもつて各自に特有な仕事をなせと云つた。

かくてトルストイは、最も理想的な自然生活は、人々がみな自分の事を自分でし、他人の手を煩はさぬと云ふことを根本として、一日を四分し、その第一部をもつて手足を烈しく働かせる勞働のために用ひ、第二部は手首を用ふ手工のために用ひ、第三部を智的もしくは想像的勞働のために用ひ、第四部をもつて交友に當つることにありとなした。

吾々は今、トルストイがたゞ漠然として人間の自然を生きよと云ふに止まらずして、更にそれを實際に適用して現代文明の批判にまで及んだことを感謝しなければならない。しかしながらトルストイの忠告に從つて生くる時、吾々は果してそこに何等の困難をも矛盾をも感じないですむであらうか。

「自然に生きよ」から謂ふことは易い。しかし實際にぶつかつて見ると、決してさう容易ではない。色々な面倒なことが起つて來る。もつともイワン・イヽリヰッチが死の深淵を瞶めながら見出した樣に、今迄の如き虛僞な生活や虛禮を省いて、純眞な自己に生きやうとする事は、少し强い人なら左程の困難を感じないでやつて行くかも知れない。また、ワシリイ・アンドレエ

キッチの様に、一切の人情を忘れ、また、精神的なことを忘れて、只管に金の取引と、富の蓄積とをのみ念じて居だ者が、ふとした自分の愛の行爲によつて發見した、新しい生活に跳入することも左程困難な事ではなからう。しかしワシリイ・アンドレエキッチにして、まだあれから生き延びて居たとするならば何うであらう。彼のうちに眼ざめた愛はたゞ、冷たくなつて死にかゝつて居るニキタを自分の身體の溫みで溫めてやる様な事ばかりでなく、その愛心が彼の行爲の一つ〳〵に表はれて來なければならぬ筈である。さうすると彼は、今迄の様にニキタをコキ使つて彼の儲けた利益を自分ばかりに、壟斷する事が出來なくなるであらうし、萬人の使用にまかせられて居ると云ふ土地を私用することをやめたくもなるであらう。また自分が持つて居るのに任かせて、小資本家や貧乏人から土地を買ひ占めて、土地から生產する富によつて益々多くの人さ[illegible]にしたり、彼等の勞働を盗むことの苦痛にたえなくなるであらう。さうだ、彼のうちに目ざめた新らしい心は、一切のことに改革を成就しやうとするに相違ない。而も彼の周圍に居る他の殆んど凡てのものは、依然として不自然な生活を續けて改める事がない。困難がそこから湧き出でない道理はない。

たとへばトルストイは無財產說を唱へる。愛の自然な實行の外、その結果の如何などを意に介することなく一切の惡を(即ち一切の財產――土地、金等)捨てよと云ふ。さうすると、今の世では恐らくトルストイの書いた「イワンの馬鹿」の上に下つて來た様な運命がその人に來らないで、アルツ・バーセフの「イワン・ランデ」の上に下つた様な、嘲弄と冷笑と飢餓と死とがその人に來るであらう。たとひそのために飢えて死んでもいゝ、惡から遁れよとトルストイは云ふであらう。嗚呼しかしながら何んなにそれは難いことであらう。トルストイ自身でさへなほそれを實行しきることが出來なかつたでないか。吾々の自然は、強烈に吾々の生きん事を要求する。

萬人が勞働をするならば、吾々はお互に少しばかり

の勞働だけでもつて生活に必要なだけを儲け出すことが出來るであらう。そしてまた、勞働そのものが普通に人が想像して居るのとは違つて、(若しそれが適度の勞働でさへあるならば)什麼に愉快であるかも知れない。殊に土につける勞働の快味は、到底これを筆に言表はす事が出來ない位のものである。萬民がみな勞働するならば、こんな怡ばしいことが又とあらうか。

しかしながら、吾々がたゞ勞働するだけであるならばそれは實に下らない事である。吾々が、今日の百姓や職工を見て氣の毒に思ふのは、彼等がたゞ勞働にばかり縛りつけられて居るからでないか。吾々は勞働と共に、吾々は自然に内具して居る諸々の性能を發揮し度い。即ち眞の吾々の本然を表現し度い。トルストイが萬民に勞働をすゝめる所以も亦、萬人をして此の愉快な自已表現を完ふせしめんがためであるのは曰ふまでもない。而も今日ではまだ、萬民が勞働をしない。それ故に、たとへば自分の如き文なしが勞働を始めたとするならば、それこそ終日終夜働らきづめに働らいて、やつと糊口を凌いで行ける位のものであらう。さうして見るならば、萬人が勞働しなければならぬと云ふことは、トルストイの様な十分の才能とそして富とをもつたものばかりに適用の出來ることであつて、吾々の様な貧乏人には甚しく困難なことになる。否、反つて吾々にとつてその目指すところとは反對な結果を獲得するに至るものである。

またトルストイは、人が眞に救はれんがためには一切の財産を捨てねばならぬと云ふ。それは、ある富める青年がキリストに救ひの道を尋ねた時に基督のとつた答である。しかしながら吾々はたゞ事の外皮ばかりを見てはならない。基督が此の青年にかく曰つたのは此の青年にとつてはかくするより外に道がなかつたと信じたからであらう。彼の教示は、富や物質に捕へられてはならない。それ等のものから自由にならねばならない。その時初めて永生を得る事が出來ると云つたのである。持ちものを一切捨てると云ふことはそのための手段の一つに過ぎない。それをトルストイは

の目的であるかくの如くに見て居る樣に見える。また金そのものが惡であるとトルストイは曰ふ。それも亦眞理である。しかしながら人類の歴史の發達上、金は多くの缺點をもつて居ると共に、それを用ふる事は最も便利な方法であるのを見出したから用ひられたのであらう。たゞ、それが征服者の被征服者に對する手段とせられた時に惡をなしたのである。それならば、もしそれ等の害惡を除く方法が講じられさへすれば、その時には最早金を使用しても少しも差支えがない筈である。金を癈するにしても、それから害惡を取除くにしても、何れにしてもまだ中々の時間を要するであらう。

自分がかう云ふのはトルストイの提供した自然生活を非難しやうとするのではない。或る人の樣にそれが極めて不自然なそして油のない、ひからびた、ガサ／＼した器械の樣な規則だと思ふのではない。もしそれが實行された曉には、これ程結構なことはなく、また凡ての人がこれを實行する義務を有するものであるのを信ずるのである。だからまた、如何なる嘲弄や冷笑や迫害に出逢つても、此の眞理を說明し度いと思ふのである。たゞ、これが完全に實行されるまでにはかなりの時間がかゝる。そして、その時の來るまで、吾々は何をすべきであるかと云ふことが問題なのである。

トルストイの此の教訓に從つて新に起つた勞働團體はかなりに澤山あつた。世にこれをトルストイ殖民地と稱したものである。けれどその大部分は失敗してしまつた。モードは此の失敗をもつて、トルストイの無財產說、無抵抗說、無法律主義の誤謬に歸して居るけれど、しかしそれは、此の團體員がまだ十分にその根抵からして革命されて居なかつたからである。それ故にそれをトルストイの思想の誤謬に歸する事は出來ない。たゞ時がまだ來らない。

然らばその時の來るまで我等は何うして居るべきであらうか。眞に勞働の生活の尊さを悟つたものは、たとひそれがまゝごとの樣なことであつても、兎に角、

勞働に從事した方がよい。しかしそれ丈けで食ふことが出來ないから、その殘りの時間をもつて、自分の最も優れたと思ふ仕事によつて自分の生活を支えるがよい。玆に吾々にとつて必要な事は、汎勞働のユートピアの出現を待つて居ないで、たとひ世人が吾々の聲に耳を傾けなくとも、そして從前のまゝの生活を續けて行かうとも、吾々は此の不自然、不自由、そして撓められ曲げられたる此の有りのまゝの社會にありながら、而も吾々自身の本然の世界に住み得る樣にならねばならぬ事である。

そしてそれをなすのに二つの道がある。一つは禪家の修得して居る樣な、あの無碍の境地に出入する事である。絶對の境地を感得して、柳は緑に花は紅と云つた樣な生活をもつて、不自由相對の世界に絶對を打ちたてる事である。今一つは、エドワード・カアペンタアの力說する樣に、吾々の內なる力、即ち本然によつて、物質界を征服し、それを材料として、本然それ自身の表現をなすことである。

トルストイは他人に對する愛の自然性を力說するために、かうした自己表現を說くことにおろそかなところがなくはなかつた。而も吾々は今、トルストイの取つた此の自然生活の途と共に、此の不完全な世界に住しながらも、而も吾々の眞實を生き得る禪家の世界やカアペンタアの積極的自己表現の世界をもつことの絶對に必要な事を感じるのである。——七、四——

愛は、力は土より

中澤臨川

M市の一隅にある城山の小高い丘を今私は下りて來た。初夏の陽はもう落ち盡して、たゞその餘光が嶮はしい連山の頂きを、その雪の峯を薄紫に照してゐた。眼の下の街々は僅かに全體の輪廓だけを殘して、次第々々に灰色の空氣につゝまれて行つた。

妙に心の落付く夕暮であつた。私は徐かに足を運んだ。別に行き逢ふ人もないのに、殊更迂路をして、白い野薔薇のところ〴〵咲いてゐる小徑を擇つて歩いた。

「別に急ぐことはない。急いだつて同じことだ。」

かうした淋しいやうな、なつかしいやうな、一種絶望的な、或は落ちつき拂つた考が私の心を私の歩みにつれて牽いた。次第に私の眼には涙が浮んだ。少年の頃によく經驗したことのあると同じやうな純な敬仰の心がふと燃え上つた。その時自分の頭に「生命の故郷」といふ詞が一つの尊い啓示か何かのやうに閃いた。なつかしい詞だ。久しく忘れてゐた詞だ。少年の頃よく稚ない詩を作つた折に屢々使つた詞だ。

生命の故郷！

然うだ。私がこの頃來求め苦み、尋ね喘ぎてゐた道の方向を示してくれるのはこの詞よりほかにない。

私はこの三四年來人知れず苦んで來た。自分相當の懊惱を重ねて來た。

「おまへの苦みはおまへの自墮落の結果だ、自業自得だ。」

かういつて私は斷えず自分の半生の放埒な經路を悔んだ。恐らく世間も朋友も親戚もさう私を視てくれた

に違ひない。物質的に私は憐れまれたに違ひない、そして責められたに違ひない、笑はれたに違ひない。私は充分にそれを自識してゐた。否な、それよりも以前に、私は自分で自分を笑つた、憐んだ、悔んだ、そして責めた。

この兩三年來の私の生活は自ら鞭つ生活であつた。自分で自分を責めた揚句、私は自殺の心をさへ起した——或時は江州の片田舍で、或時は京都の旅舍で、また或時は九州の旅のはてで。私は死ぬべくあせり、同時に活き鬪るべくあせつた。

しかしこんな無益な告白が何になる?。人は私を薄志弱行の徒と笑ふであらう。ディレッタントとも嘲るであらう。

が、徐かに意識するにつれて、その頃の私の懊惱には自墮落の結果以外、實世間との交渉以外、もつと深い、もつと根本的な、生命の推移につれて必然的に來るべき或物が存在したことを知ることができた。私の年齡は四十の阪にかゝつてゐた。

人が四十の阪を越す頃から、當然踏まねばならない一つの運命がある。それは一生のうちに二度とない大きな危機（クライシス）である。その時我等の肉體にも精神にも、徐々たる然かし深甚な、犯すことのできない組織の變化が起る。我等の肉と心とは一度壞されて更に新しく築かれねばならぬ。それは神聖な生命苦である。物質的にはどうすることもできない運命の必然である。

私のその頃の懊惱には、確かにかうした必然の分子か含まれてゐたことを、私はおぼろげながら知りそめた。私の苦みはやゝ溫められた。私は半ば運命に身を任せ、半ば自ら苦み上げねばならぬといふ覺悟と智慧とを得た。

「何うするものだ。迷うなら迷へ。徐かに歩むがよい。益のない苦みをするな。」

こんな宿命的な考にも誘はれた。私は急に老人じみた心持を懷くやうになつた。

夫から此田舍へ引込んでから約一年半を過ごした。私の心は自然に「土」に愛着を持つやうになつた。

薄暮の氣のひしひしとせまつてくる小徑に、暫くの間私は茫然と立ち盡した。私の眼には、涙が浮んだ。私の胸はこみ上げてきた。私は聲を上げて泣くか叫ぶかしたかつたが、しかしできなんだ。三四年來苦んで求めた物が遂に來たといふやうな喜びがあつた。この兩三年の懊惱も決して徒勞(あだ)ではなかつたといふやうな感謝の思も湧いた。

『生命よ、わが故郷よ、なつかしき自然よ、温かき土よ、おん母よ、大地よ。』

といふやうな禱りの思想がリテラリイに私の胸を突いた。凡ての生命の、愛の、力の源なるこの大地のこの土を踏みしめて我が立つあひだは私は惠まれた者である。

智慧は徐かに來る。苦み惱み果た喜びに、育(はぐ)くまれて智慧は徐かに來る。思へば人生の經驗のさゝやかな一片でさへ智慧の肥料(こやし)とならないものはない。さるにても苦しかりし我が最近の生活よ。更に驚くべきはその醜き堆積の中より育て上げられし今宵の淸き華よ

私は大地に跪いて土に接吻したかつた。しかし僅かに野草の莖の一片を取つてそれを口に當てた。

私は濃い夜色の中に立つてゐた。幸に空は晴れてゐて、星の光が僅かに四邊(あたり)を照して具れた。私は知らずしらずに或る野寺のうしろに當る墓地へ出た。

私はまた暫く其處で立ち盡した。その墓場には野薔薇が繁つてゐた。折から一段と背の高い瘠せた莖の頂きから、一つの白い花が蕚のまゝ音もせずに落ちた。小さな平和の死よ。これも自然の運行の一部である。から私は思つた。

幼少年の頃からの夢のやうな思出が私の頭の中で繰返された。嘗て讀んだ書物の中のさまざまの人物までが次ぎ次ぎに私を訪れた……

バザロフ！、勇敢なりし汝の一生よ。私も或る時代には汝の如く強く行ふ人でありたいと思つた。今もその空想は私を離れない。然かし今宵の私の心のムッド

に泌々と親みをはこぶものは汝の死である。汝の埋められた露西亜の遠い片隅の一寒村の墓地の光景は今もあり〱と私の眼の前に浮ぶ。努力、死、自然の冷淡、生命(親と子)の矛盾と愛——これ等のものゝ關係を汝の墓ほど直截に談るものはほかにない。しかし何にも增して汝の墓からうる我等の感銘はかうである——「その墓に埋れた心が、何れだけ熱情的で罪深く、また反逆的であつたにせよ、そが上に咲く花は無邪氣の眼で我等に視入り、その眼は永遠の調和と無限の生命とを我等に談る。」

バザロフよ、汝は遂に土に歸つた。そして汝の魂を土が温め、汝の土を汝の魂がヒユーマナイズした。

なつかしきエミリイ、ブロンテ!!、彼女は眞の自然兒であり、忍耐強いそして忠實な運命の奉仕者であつた。短命な彼女の生活は殆んどその故郷なる沼地で過ごされた。何れだけ彼女はその地に、その自然に強い愛を捧げたか。何れだけ彼女の生活が野生の小兎に似てゐたか。彼女は暇(ひま)さへあれば何時も沼のほとりにたゝずんだ。彼女ほどに熱情的な愛着を以て草木鳥獸に親んだ者はなかつた。彼女は幼少の頃からその日課なる散歩の歸りに、屢々ひな鳥や子兎を掌の上に乘せてなつこく談りながら歸つた。彼女は小鳥の言葉を解することができたと信じてゐた。それだけが彼女の一生であつた。彼女はMother Earthそのものであつた。然したつた一つの彼女の形見である「ワザーリング、ハイツ」を繙く者には、何れだけ強く深い人生の經驗が、この不幸な、嘗て一たびも戀の囁きさへ耳にしたことのない少女の胸の中に潜んでゐたかといふことがわかる。それから、彼女には何よりも——凡ての情熱を超えての——強い宿命觀があつた。それは凡てを自然の懷に任せる野獸のそれに似てゐた。

忘れることのできないのは「ワザーリング、ハイツ」の最後の一節である。強い戀と嫉妬との一生を終つた敵味方の三つの墓は互に並んで建てられた。「私は穩やかな空の下で、これ等の墓を廻りながら徐かに步いた。私はいばらの下に舞ふ羽虫の姿を見た、そして小草を

越えて吹く柔らかな風の音を聞いた。で、私は訝つた、何人が此の靜かな土の中に眠る人々に安らかでない睡眠のあるといふことを想像しえたかと。」

生命の推移、運命の輪廻、それから來る永遠の調和——それを最も深く思はせる處は墓地である。「生命の戰はたゞ無益に戰ふばかりではいけぬ、汝は知られぬ神の前にひざまずくことをも知らねばならぬ」といふ詞の意味を强く敎える處は墓地である。ハンブルな靜かな心で墓地へ來る者には、溫かい「あきらめ」の敎訓が與へられる。それには慈母の懷に抱かれた幼年の想出に等しいものがある。かうした瞑想によつてのみ我等は「土」を知る。そして土の智慧からのみ眞の愛と力とが湧く。

こんな考に耽りながら私は多時立ち盡した。野薔薇の小さな白い花の幾つかゞ星の光に愈々鮮やかに浮いて出た。

私の眼からはもう涙が乾いてゐた。私は家路をさした。しかし急がなんだ。

「急いだつて何うするものだ。急ぐことはない。・・・・迷つてもいゝ。明け方までに歸ればいゝ。」

かういふ考が矢張私の心にあつた。私の足の下には堅い、確かな、それで溫かい土がある。私の踵をとほしてその土のもつ深い喜びと沈靜とが私の脈搏に通ふ。私の徐々たる步みの一步々々に私は深く／＼大地の懷に抱き込まれるやうな氣がした。私の吸ふ露けき空氣は地の胸から出る乳だ。今宵わが「母」は贅澤に生ひ茂つた草の葉に、その上に置く露に、その根元になく蟲に——あらゆる物にあふれてゐる喜びで私の魂を牽きつけやうと企んでゐるのだ。星は天の戶を開けてしんみりとした夕暮の曲の音を奏でゝゐる。

一種の甘い悲に醉ひ惚れて、私は風の落ちた薄暗の小徑をとぼ／＼と辿つた。私は自分の家へ歸れるだらうか。土の精が今宵私を訛して他界からの親しらしい挨拶で私の魂を奪はうとするのではなからうか。

・私は疲れた足をひいて漸く自分の家へ辿りついた。床をのべてそして靜かに身を横へた。私は强いて考ふまい、また强いて祈るまい。私の感謝の道は別にあらう。
私は今夜、慈母のやうに甘へることのできる神を發見した。私の弱つた魂にあなたは祈禱の義務を免して下さるだらう。あまつさへあなたは私の疲れた眼の上に安眠のヴェールを曳いて下さるだらう。

今私は眠る。私の四肢にはなほ快よい土の脈搏が通よつてゐる。よしや私の瞼が閉ぢ、私が無感覺の域に這入らうとも、私の五體は、魂は——彼の大地が贅澤にはぐくむ草木の呼吸とともに、彼の大地が靜かに永遠に抱き葬つた百千の靈魂とともに、未來永劫に涉つて可能なる無限無數のまだ生れない生命とともに、さては地の喜びを頒つ空の星とともに、汪洋たる生命の諧調を合すであらう。

知識階級の歸農を唱道す

横田英夫

一　一木前內相の卓說

法學博士一木喜德郞氏が內務大臣當時に、都會に於ける高等遊民は宜しく農村に歸れと云はれたことがある。私は何かで此の說を讀んだ時、內務大臣にしては珍らしい卓說と感じた。而して當路の大臣たる一木氏が之れを主張する以上、或は何等かの形に於て所謂高等遊民の歸農方法が講ぜられるかと、內々は非常な興味を以て之れを注意して居たが、今日に至るまで未だ夫れらしいこともない。爲めに私は少なからず失望はしたもの丶、內務大臣の要職にある人から知識階級の

歸農を奬勵する意見を聞いたことを、今でも非常に力强く覺えて、爾來自ら之れを實行したと共に、此の問題に就いて考へて居る。

一木前内相が所謂高等遊民の歸農を慫慂した意志は、其の趣旨が之れに依つて農村の開發を計らんとするにあるのか、或は所謂高等遊民を善導しやうとするのが主なのか、其の邊のことは能く判然しないが、孰れにしても所謂高等遊民の歸農と云ふことは、結果に於て兩樣の意義を兼ぬる一擧兩得の策であつて、頗る傾聽すべき卓說と推稱してよい。

我國の農村を救濟しなくてならぬと云ふことは、今日に於ては既に議論が盡きて居る。唯、問題は如何にして之れを救濟すべきかと云ふ方法論である。而して其の方法論も今日に於ては凡ゆる方面から論議せられて、其の講究も既に盡きて居るやうな觀があるが、偖て顧みると一として滿足な成績で實行されて居ない憾がある。此の殆ど最後の時に當つて、閑却されたと云ふよりは寧ろ何人にも氣附かれなかつた知識階級の歸農と云ふことが唱道されたのは、正しく空谷の跫音を聽く感があるではないか。私は之れを以て今まで講究された凡ての農村救濟策を、最も有効に連絡して實行し得る唯一の策として、世の識者が此の卓說に考慮を費されんことを希望して已まない。殊に一木氏の所謂高等遊民なるものは、稍々虛榮的に知識を過重する高等教育の普及と、社會の需要を超過する諸學校卒業生の增加とに伴つて、益々其の數を增加する傾向を呈し、早晩其の善後策が社會上の問題となるべく豫想さるゝ今日に於ては、所謂高等遊民の善導と云ふ別箇の見地から見ても、決して等閑に附すべき問題ではない。斯くの如き見方は兩樣の見地から爲されるが、私は玆では其の主理由を、農村の救濟開發と云ふ國家的大問題の解決策に置き、知識階級の歸農と云ふことに對する私見を述べて見たいと思ふ。

農村が何故に今日の如く荒廢したかと云ふことに就いては、種々の理由があり又各方面の觀方に依つて異なるが、或る方面から之れを綜觀的に論ずると、近代

の國家が中央集中主義を利とし、之れを促行したことに原因して居る。即ち人材の中央集中、資金の中央集中、權力の中央集中等悉く然りで、此の大勢は地方農村から其の振興發展の要素を奪つて、悉く都市の振興開發を計る用に供して仕舞つた。故に一面から之れを觀れば、農村の荒廢は之れを職業的に觀れば商工業發達の犧牲であり、之れを地理的に觀れば都會勃興の犧牲であると云へる。成程、地方自治制度は布かれて、行政機關を首として各種の地方的機關は系統的に施設されて居る。然しながら之等の施設は、彼の滔々たる中央集權に伴ふ中央集人主義、中央集金主義の大勢に抗するには餘りに微弱である。尤も封建制度の崩壞に續いた中央集權制度の初期に於ては、人材と資金とが權力の所在に追隨して移動するは當然でもあり、又、已むを得ない趨勢ではあるが、國家的統一力が完全に發揮されて、其の體制が確立して搖ぐ虞なき今日に至つては、人材と資金とは必ずしも權力に追隨する必要はない。寧ろ自由に活動するを以て有利とする。加之ならず、國勢が固着して仕舞つた國家にあつては、人材は資本に依從したがる傾向があるが、興國的國家にあつては宜しく此の風を打破して、人材は獨自一箇の自由活動に依つて、或ひは反對に資本を依從せしめ、或ひは新に資本を造ることにならなければならぬ。今、農村が人缺、金缺の爲めに萎微として振はず、然も夫れが國家的大問題として忽諸に附す能はずとすれば、宜しく人材を逆輸入して、其の缺所を補ふ必要があるではないか。

玆に於て乎、知識階級の歸農と云ふことは、其の根本に於て頗る合理である。即ち農村から之れを云へば、人材の奪還に過ぎない。唯、問題は農村は左までに人材が必要なりや否や、又、知識階級の歸農は可能なりや否やの二點に存する。

二　農村の現狀を説く

私の觀る所に依れば、我國の農村の現在の有樣では、如何に救濟の名案があつたとしても、何等の適策を施す餘地が無い、然り、全く無いと云つて宜い。而

して今にして救濟の適策を施さず、現狀の儘で放任して置いたならば、農村の前途は到底死滅の運命を免れない。尤も玆に死滅と云ふは、農業を營む區域が亡滅すると云ふ謂ではない。我國が二千年來維持して來た農村の使命、價値、換言すれば國家が期待するやうな制度と精神の農村が亡滅すると云ふ意味である。詳しいことは煩に亙るから省くが、兎に角、今日の儘に放任して置けば、農村の將來は年一年と亡滅に近づいて、其の前途は非常に憂慮すべきものがある。之れは私は如何なる樂觀論者の前でも、責任を以て斷言するに憚らない。而して此の私の斷言は、仔細に農村の實情を承知したならば、何人も必ず首肯することゝ思ふ。

農村の實情に就いては、私は之れまでに再三報告の文を公にした。殊に拙著『日本農村論』には、一々統計と事實とに根據して推論し、最も系統的に其の大勢を歸結して置いた筈である。今一々の事實に就いて語るは煩はしいが、之れを抽象的に云ふと、現在の我國の農村は、經濟的に云ふと全く收支の數字を無視した經營が行はれ、社會的に云ふと全く時代の進步を無視した生活が營まれて居る。此の點は當局でも頗る心に懸けて、內務、農商務、文部の各省が相聯繫して改善策に腐心して居るやうであるが、其の方法に猶議すべき點がある故か、毫も見るべき成績を擧ぐること能はず、時には殆ど其の見込が無いかと疑はれる位である。勿論、中には多少の例外はある、然し大多數の農民は前記の通りで、今の所では朝野の人の折角の改善策に對して殆ど反應性を持つて居ない。今試みに其の一二例を擧げて見るに、我國の總農戶數五百萬戶の內で、其の副業とする所は別として、本業たる米作の收支を能く明かにして居る農家が果して何戶あらう。尤も收支の數字を明かにしないからと云つて一概に經濟無視の耕作とは云へまいが、我國の農民が現在遣つて居るやうな耕作經營では、特別に米價が暴騰した時の外は、米作は必ず算盤に合はぬことが立證出來る。此の事實は之れまでに幾度か、心ある人に依つて指摘された所で

ある。詳しい點は後に述べる積であるが、米作は單に一例である。其の他、都會地に近接せる農家の野菜栽培を除いては、他の諸作は全く無茶に耕作されて居る。收支が償はふが償ふまいが、一切算盤と云ふものが考に入れられたことがない。土に着く農民の生活の呑氣な所は其處にあると云へば夫れまでゞあるが、苟も自給經濟の破壞に依つて農業が營業化せられた今日、農民は詩人が趣味道樂の上から美的百姓を遣るやうな考で居て、滿足に經濟生活が支持される筈がない。少なくとも斯樣な經營法は、多少の經濟的知識あり營業眼を有する人に取つては、速刻革めらるべきことである。然るに我國の農民の大多數は、恐るべき惰性に引摺られながら平然として之れに甘んじて居る。農業の合理化(營業化)と云ふことは、經濟組織の變動に伴ふ必然の約束であると云ふことを、我國多數の農民は知らないで居る。其の結果が如何になるかは、識者の能く豫想し得る所であらう。

農村の生活が時代と云ふものを無視せる事實は更に驚くに堪えたものがある。識者は國民の教育は進歩したと云ふ。成程六箇年の義務教育強制に依つて、如何なる山村水郭と雖も西洋風の小學校舍あらざるはないから、頗る進歩したには相違ない。然しながら事實は未だ農民の九割までは、科學的處方の醫藥よりも怪しげな神符靈水と稱へるものが治病に有効なものと心得て居る。淺薄な小學校教師の科學の知識は、遂に農民を支配せる迷信の力の一擊にも値して居ない。

茲に好例を擧げれば、某縣の檢事が選擧違反事件で農民有權者を取調べた所が、『貴重な一票だと云ふから無代價で投ずるのは勿體ないと思ひ金を貰ひました』と申立てたと云ふ。又、或る農民有權者は兩方から金を貰つたので兩方へ義理を立てる積で、甲候補者の姓と乙候補者の名を綴つて書いたと云ふ話が、東京の新聞に笑草に載せられたが、あれは決して笑草ではない。選擧と云ふものに對する一般農民の知識程度を、最も正直に告白したものである。百二十萬の農民有權者中、此の亞流でないものが、果して幾人あるであら

うか。例外の農民は怒るかも知れないが、私は五百萬戸の農家中、約九割を通じて此の程度の農家であると斷言するに憚らない。農民で明確に選擧と云ふことを理解するものは殆ど無いと云つてよい。現に農民の多數は自治と云ふことを知らない。何の爲めに村會議員を選擧するのか、何の爲めに村會議員になるのか、新聞でも讀んで居る農民の中には聞嚙りの知識を持つて居るものもあらうが、正しい理解を持つて居るものは一村一人平均にはあるまいと思ふ。或る農村では村會議員選擧の時は、村民は相談と稱して飲食店に會合し盛んに飲む。さうして一番支拂を綺麗にした人を議員に選擧することに定めて居る。之れは私が實見した事例であつて、名を指すは憚るが左程片田舍の例ではない。斯くの如き例は擧げて來れば限なくあるが、一事は萬事として他は推すべしである。之等を見ても農村の生活が如何に時代と云ふものに沒交渉であるかが判るであらう。之れを時代無視と云はうか、時代超越と云はうか、私には適當な評語が見出だせない。比較的に能く農村の見聞を多く蒐めて居つた私ですら、歸農して村居して見ると、四圍の生活境遇に對し殆ど隔世の感を禁じ得ないで居る。

所詮、農村をして斯くの如き經濟無視の經營に甘んぜしめ、斯くの如き時代超越(?)の生活を營ましむる所以のものは、一に農民が無智だからである。而して彼の『農村に留まるものは豚と老人のみ』と嘆ぜしめた英國の農村荒廢が、商工業の偏頗な發達に伴ふ人口の都會集中の結果であると同じく、我國の農村に如上の無智な農民を多からしめたのは、全く中央集中主義の極弊たる農村の人材掠奪を行つた結果である。私は農村を救濟する根本策は、農民を教育改造する一事にあると信ずる。農民を教育改造して、農業を合理化し、農村を文明化した時、始めて農村の振興開發が期し得られると思ふ。然らずんば百の農村救濟策を行ふも無效である。

三　農業の合理化

偖て如何にして最も有効に農民を教育改造すべきか

と云ふに、之れには現に各般の施設が整つて官民が努力しつゝあるが、其の一方法として系統的機關の活動以外に最も有効なのは、既に充分其の資格ある知識階級の人々が歸農して自ら農民となり、兼ねて爾餘の農民に對し示範的活動を爲すことである。然し此のことは農民教育論として本文とは別問題であるから之れを略し、私は玆に農業を合理化する最捷徑は、知識階級が歸農して農業經營を爲すことである所以を述べて見やう。

　農業を合理化しなくてはならぬと云ふことは、今日に於ては最早問題ではない。交易經濟が自給經濟に代つた經濟組織の進歩は、農業の合理化と云ふことを必然の約束として要求して居る。而して農業の合理化と云ふことは、農業の合理的經營と云ふことを前提として居る。農業を合理的に經營すると云ふは如何なる意義かと云ふに、生産能率の增進に依つて、營業として採算上立行くやうに爲すことである。夫れには農業經營に今少し知識を加へる必要がある。科學的知識が一、經濟的知識が二、全體の經營を打算する企業的能力が三。

　現在の農民の知識能力の程度は既に前述した通りである。從つて現在の農民に依つて爲されて居る農業經營には、少しも知識能力と云ふものが働いて居ない。故に一切の遣方が全く不合理である。全く學問を無視し、經濟を無視し、粗雜な經驗を承けた慣習的方法にのみ依つて經營されて居る。一々實例を擧げることは百姓の講釋になるから略すが、農民に今少し農學的知識や經濟的頭腦が有つて、土性と作物の如何に依つて肥料の計算や配合を合理的にし、又、收支の採算を正確にして肥料の自給でも計つたならば、何程現在行はれつゝある空費や相殺を省いて、生産能率が增進されるか分らない。然るに現在の農民は少しも斯う云ふ點は考へて居ない。折角種々の施設を企てゝ當局者が此の方面の知識を注入しやうと努めて居るにも拘らず、振向かうともしないで依然として幼稚な耕作經營を株守して居る有樣である。斯かる有樣であるから、現在

の農民に依つて農業の合理的經營を行ふと云ふことは、當分の所では殆ど見込がない。

慣習的農業には空費相殺から來る消費の高が驚くべき程多い。今若し農民の全體が慣習的農業を脫して合理的農業を營んだならば、生產經費の減少に於て、生產收量の增加に於て、どれほど生產能率の增進を來すか知れない。之れに若干の經濟的能力を働かして、購買、生產、販賣、信用等の各種の產業組合的活動を併せ加へたならば、恐らく一切の農村事實は根本から改造されるであらう。私は歸農後未だ日淺く、從つて各種の農耕經驗も數ふるに足らぬ位であるが、此の淺い經驗に於てすら、既に慣習的農業より合理的農業に進むことに依つて、多くの農事統計改造の可能なることを確めて居る。成程、農民は最も鍛練した得難い勞力を多く有して居る。然るに此の得難い折角の勞力も、之れに知識の指導を與へない爲めに、半ばは空しく浪費されて居る觀がある。工業生產や商業經營に於て、知識と勞力との共働合一が驚くべき能率增進を示した事實を承知して居る私は、農業生產に於ける知識と勞力との共働合一の結果如何と云ふことに非常の興味を以て注意して居たが、事實に於て矢張り略ぼ同樣の結果を示すことを確かめ得た。

私は素より農村救濟策が農民の自力主義にのみ依つて全きものとは信じない。其の一半は他力主義の保護政策に賴らなければならぬと思ふが、夫れにしても先決問題は、農民の自力が如何なる程度まで發揮され、如何なる程度まで救濟の効果を奏するかと云ふことである。保護政策は此の最可能限度を確めて、其の上に始めて策定さるべき性質のものである。保護政策は講じて遣らう、先づ保護の必要を證明するに足る究極の事實を示せと云はれた時、我國の農民は果して何と答へるであらう。私は決して農民の無智は責めない、彼等は無智なるべき理由があつて無智なのであるから、素より彼等には罪はない。然しながら苟も農村問題に思を致すものは(私自身の今までも左樣であつたが)、農民保護の必要を證明するに足る究極の事實を擧げ

て、然る後保護政策の必要を絶叫しなければならぬ。悲しい哉、我國には權威ある農村統計なるものがない。經營の最善を盡した所謂究極の事實なるものが無い。現に有るものは悉く幼稚な、即ち生產能力の空費相殺を敢てして顧みない慣習的農業の齎らした事實のみである。

私は痛切に農村に於ける新事實の創造、即ち農事統計改造の急務なるを感ずる。而して之れを爲すは、從來の如き慣習的農業を廢して合理的農業に進むことである。農業の合理的經營を爲すことである。此の際農民が一切を合理的に經營すると云ふことは、啻に自力に依る農村救濟策として必要なるのみならず、亦實に保護政策を要求する根本の準備として最も必要のことに屬する。然るに合理的農業經營と云ふことは、智識と努力との共働合一に依つて始めて期し得らるゝことである。即ち知識ある農民の努力に俟たなければならぬ。知識ある農民と云ふ。勿論、之れは農民教育の普及發達に期すべきであらうが、私は農村狀態の實際に觀、教育方針の現狀に徵して、聊か百年河淸を待つの感に堪えないものがある。そこで寧ろ其の最尤の策を知識階級歸農の捷徑に求めて、其の到着の日の速なるべきに囑望せんとするのである。

四　農村の文明化

農村振興上、農業の合理化と云ふことゝ相並んで最も必要なことは、農村の文明化と云ふことである。現在の我が農村は、野蠻未開にして住むに堪えぬ所、從つて娛樂と趣味に缺けた寂寞の所と思はれて居る。事實亦其の通りである。そこで農民と云ふ階級は、敗殘無能な人間の寄合のやうに思はれ、事實も亦さう云ふ待遇を受けて居る。之れは商工業と都會とが農業と農村とを犧牲とした產業革命の過渡時代に起る必然の狀態であつて、且つ一世の風を爲した農業卑視、勞働嫌忌が人心を支配した結果であるが、決して自然の經過ではない。農村には農村獨自の使命があり存在の意義がある。一部の商工心醉者は、農村を以て都會の後援を爲すべき先天的約束地のやうに思惟して居るが、農

村が都會の背後にあつて其の繁榮發達を支持すると云ふことは、決して農村が都會の犧牲となると云ふ意味ではない。然るに今日の所では種々の思想が輻合して、野蠻未開にして文明生活に交渉しない點が却つて農村の特色であるかのやうに誤解されて居るが、之れは實に慨かはしい次第である。

農業は決して商工業の犧牲となるべき職業ではない。農村は決して都會に出ることの出來ない敗殘者に依つて經營さるべき所ではない。農村は農村として不可侵、不可沒の面目を有し、獨自に存在する使命と價値とがなければならぬ。農業と商工業、農村と都會との關係は全く相對的であつて、社會生活の本來から强ひて其の輕重貴賤を論じたならば、農村こそ或は絶對的價値と使命とを有すべきである。極端な物質萬能主義と商工偏重主義とが、都會と商工業との爲めに農村と農業とを掠奪して、敢て其の犧牲として顧みなかつた結果は、今日到る所の文明國に地方荒廢と云ふ疾患を醸したではないか。今日、見識ある政治家は地方農村の振興を策し、文明批評家に依つて農村文明論が唱へらるゝは寔に所以がある。都會の文明化に對して農村の文明化と云ふことは、正に今後の急務である。

然しながら農村の文明化は、自ら都會の文明化と其の面目態樣を異にしなければならぬ。交通、衛生、娛樂、教育等の諸機關を整備するも無論結構には相違ないが、物質的文明を以て農村を沒了することは餘程考物である。物質文明を以て農村を沒了しなくとも、自ら別面目を以て農村の文明化を實現することは出來る。之れに關する詳細は農村文明論として別題に論ずるを適當とするが、試みに根本の問題に就いて云へば、第一は人の問題である。農民をして文明人たるの資格を有せしむることである。第二は人と人との關係の問題である。最も進歩した思想を有つた人々が、最も進歩した組織、即ち最も便利で且つ合理的な形式に於て共同生活を營むことである。私は此の立場から觀て、農村文明化の根本要件を、農民が農業に對する信念及び趣味の保持と、自治體の完成とに置くものであ

る。

今日の如く農業卑視、勞働厭忌の風が一般の人心に浸み渡つた時代にあつては、農業に對する信念や趣味は、人生に對する正しい且つ深い理解を持つた智識階級でなければ、容易に求めることが出來ない。彼の農民が祖先來農業に從事し、且つ生れつき農村に住んで居るにも拘らず、毫も自分の職業に對して信念なく、滔々として輕薄にも農業を嫌ふ風あるは、概ね彼等が無學無知であつて、人生に對する理解の如きは勿論のこと何等心に信ずる所が無い結果に外ならぬ。理解あれば趣味を生じ、趣味あれば執着し、執着あれば信念が生れる。斯くの如くなれば自然に職業に對する自覺となつて、容易に外界から誘惑されるものでない。不利の狀態に陷つて誘惑せらるゝ隙が多くなればなる程、工夫精進の途を拓く氣になるものである。然るに現時の農民の中で、衷心から農業に對して趣味を感じ、信念を有ち、職業的自覺の上に立つて努力して居るものが果して幾割あらう。私の觀る所に依れば、殆ど九分九厘までは自ら生存競爭裡の敗戰者のやうに感じ、失意絶望の裡に已むを得ず農業に從事しつゝ、人に指さるゝを愧づる狀である。之れは獨り農民のみではない、都會の人にも亦農民を見るに、右の如き眼を以て觀て居る。之れには多少の理由もあるであらうが、斯かる有樣では到底農業の進步や農村の發展を計れる筈がない。農村の問題は畢竟人の問題である。何處へ出ても優れて活動出來るやうな人々が、不動の信念と趣味とを抱いて農村に留まり、職業的自覺の上に立つて農業生產に從事し、農村の經營に携はつたならば、期せずして面目鮮な農村の文明化が實現されるのであらう。私は有能有材の士が農村に居ることを以て人物經濟上國家の不利益であるやうに思ふ愚學者を、心から憎むものである。一代の人心を索して農村を荒廢せしめたのは、實に此の輩の愚論の罪である。

論より證據、農村今日の實情は如何。自治制が布かれてから既に二十餘年になるか、農民は未だ自治の何たるかを解して居ないではないか。役場の建物は立派

に建築されても、能く自治體を經營するに足る村長や村會議員がないではないか。整然たる系統機關と數百萬の經費とを擁して、幾百人の農業技師が附切になつて居ても、未だに慣習的農業が革められないで居るではないか。産業組合は十戸の邑必ず設立されて居るが、能く其の精神を體して經營する適材が無い爲めに、空しく形骸となり了つて居るではないか。而して都會には職を得ないで苦んで居る幾萬と云ふ高等教育修業者が居る。官廳の門には押し合つて入り切れぬ位の官吏志願者が居る。頭大足小の國と云はうか、甚だしく人材の配置が衡を失つて居る。農村に人材なきを嘆ずるを已めよ。農村に居れば農民として亦自治體經營者として申分ない人材は、人材登用試驗とやらの坩堝に鑄られて、現に屑々たる刀筆吏と化して居るではないか。國家と自治體との組織的關係に就いては、今更私が喋々するまでもなからう。而して農村自治體の完成と云ふことが、農民各箇の生活と力量とが、最も合理的組織の下に合一され結構されて、整然たる共同生活を營む時始めて期せらるゝものなることを思へば、農村に有能なる農民を養成し羅致すると云ふことは、何よりも大切なことでなければなるまい。

農民各箇が强固なる生活の上に立ち、自治體が此の力に依つて培はれて、有機體として間然する所なき結構（ストラクシヨン）を示したる時は、即ち農村文明化の渠が通じた時である。水は導かずして到るであらう。

五　先づ農村に歸れ

農村の現狀は以上述べた通りである。亦、今日之れを救濟する內治策として、農業を合理化し、農村を文明化するの急務なることも、大略以上述べた通りである。そこで私は其の最捷徑最尤策として、知識階級、特に諸學校卒業生の歸農を唱導し勸告する。

今や官界、商工界に於ては人員過剩の狀態に陷り、各種學校卒業生は就職難に襲はれ、驥足空しく都會の陋居に朽ちて伯樂なきを嘆ずるの風がある。各種學校卒業生にして就職口なく空しく遊食して居るものを數へたならば、恐らく毎年萬千を以て算するであらう。其

の如何に夥しき數に達するかは、逐年、諸學校卒業生を如何にすべきかと云ふことが當局者の頭を惱まし、所謂高等遊民階級の善導が社會の一問題たらんとするのを見ても想像される。無職の知識階級が徒らに増加する時は、如何にも種々の弊害が釀されるであらう。心ある識者が其の善後策を苦慮するは尤もである。さらば之れを如何にするか。徒らに聲を大にして、海外に發展せよ、新職業を發見せよ、月給取たらずして獨立せよと云つた所で、餘り大した効果はあるまいと思ふ。海外に發展するのもよい、新職業を求めて獨立するならば更に結構である。然しながら志所期に添はない人々には、先づ海外移住よりも、新職業の發見よりも、脚下の農村に歸つて成功の新境地を拓くのが更に容易であり、亦、頗る意義のある事ではあるまいか。

　農村の人口過剰を苦にする一部の論者もある。成程、全國の平均數を調べたならば、土地と人口との關係は左様にも見える。然しながら一面には、農業の慣習的經營に絶望したり、輕薄な世の風潮に浸染したりして、浴々として農村から移出する人口があることを知らなければならぬ。斯う云ふ人々は、概して農業に趣味も信念も有たない最も無智な農民階級であるから、極めて下等な機械的勞力の所有者に過ぎない。故に所謂農村の合理化的、文化的過程として惜しむに足りない。若し之れを補ふに知識階級の歸農者を以てしたならば、却つて喜ぶべき人物轉換である。現在の農村には數萬の新農者を迎へても既耕地の利用だけで充分である。況んや更に倍加する可耕地あるに於てをや。一部の人が嘆ずるが如き『歸らんとするも土地なし』と云ふ憂は決して意とするに及ばぬ。

　次に懸念とされるのは、勞働を經驗したことのない知識階級が歸農し得るや否や、假令、歸農したとしても農業に依つて生活を營み得るや否やと云ふことであるが、私の實驗に依れば、之れも多少の例外はあらうが、大概可能である。其の準備や方法に就いては後に述べるが、要するに問題は歸農の決心がつくかどうかに依つて定まる。歸農の決心さへつけば他は充分に可

能である。私の考を他人に推せば、相當の知識を有して人生に對する理解を有つて居る人ならば、歸農其のことには餘り異存はあるまい。勞働にさへ堪えられるならば、其の勞働が意義のある勞働である以上、寧ろ喜んで勞働に服したいと感ずるのであらう。尤も絹物を纏つて懐手をしながら金儲をしたいと云ふやうな不所存者は別である。人間として最も有意義な生活は、自ら生産者となることである。一切のものが生産者となり、若しくは生産者の觀念を有する時、人生生活は始めて擴張されて充實される。生産者は自分の實力に恃んで生活を營んで行くことが出來る。故に社會の健全なる發達と云ふことも、畢竟、凡ての人が生産者となり、生産者の觀念を有することに依つて容易に期せられる。所が現時の學校教育や社會の空氣は、餘りに多くの『弱い紳士（ウイーク・ゼントルマン）』を出だすに傾いて居るが、之れは識者の大に考ふべき點であらう。抑々生産者となるのを厭ふやうでは、始めから問題として論ずるに足りない。而して生産に勞働は附物であるから、生産者となるには勞働者となる覺悟がなければならぬ。歸農の決心は此の生産者となる決心である。

何故に知識階級の歸農が可能であるかと云ふに、第一は農業生産は比較的に容易だと云ふ點にある。第二は非常に趣味が饒いと云ふ點にある。農業生産は工業生産と違つて、多くの機械を使用しないから、比較的に専門的熟練を要しない。唯、天意に奉事すると云つたやうな敬虔の情と熱心があればよい。勞働は馴れない内は稍々困難であらうが、夫れとても學校の運動場で鍛練した體力があれば容易に堪え得られる。尤も合理的に農業を經營するには、多少農學に關する知識が必要であるが、夫等も決して深遠な専門的な學問でなくて、單に土壤、肥料、作物栽培、牧畜等に關する大體の知識でよいから、高等教育を受けた程の素養のある人には、歸農してからでも讀書に依つて片手間に修得される。要するに農民として必要な農學の知識は、原則（プリンシプル）でなくて應用（アプリケーション）にあるのだから、必ずしも修學者のような努力は要らない。現に私は農學に關する知識は

全く悉無であつたが、歸農してから耕餘に前記各項の簡易な書籍を讀んだので、普通の農耕には差支を感じない程度の知識は得て來た。若し差支を感じたならば時に隨ふて之れに關する知識を修めればよい。蓋し現在の農民は全然無學で居て慣習的農業を營みつゝも、猶、相當の成績を舉げて居るのであるから、讀書修學を爲し得る素養のある人には、合理的農業を營むに必要な程度の普通農耕に關する生産技術の上の知識の如きは、何程でも求める便宜があるのである。凡ての生産が悉く學問に依つて操作せらるゝ今日、農業のみは猶慣習的だと云ふ事實は、一面に於て農業生産は他の何の生産よりも容易だと云ふことを物語つて居るものではないか。普通の農民となるには別に專門的な知識も熟練も要らない。適當した土性に適當した作物を植え、之れに適當した肥料を施して丹精に手入れすればよいのである。此の位容易な生産は他にない。

　農業が趣味に饒であると云ふことは、他の何生産業にも比較出來ない特色である。之れは單調な機械的勞働でなくて、天地の自然に依つて育成する生産物を相手にする故である。試に思へ、一度期に應じて播種すれば、地に落ちて一點粒は靈妙不可思議なる大地の作用と相應じて、根となり芽となり莖となり花となり實となる。作物育成の理窟を云へば夫れまでであるが、躬ら耕作者となつて水を注ぎ土を培ひ肥を施して居れば、作物育成の理窟そのものが實に一種絶妙なる超科學、超哲學、超宗敎の力たることを感ぜずには居られない。私は毎日之れを感じて殆ど心行くばかりである。尤も人心は人面の如しで、私の趣味を移して直ちに萬人に推すことは出來ないが、趣味は或る程度まで普遍性を帶びて居る。恐らくは私の感ずる此の趣味の滿溢は、其の境を同じうすれば萬人の概ね享受し得る所であらうと思ふ。天地到る所、慈々として物を生む力を藏す、何を苦しんでか街頭に奔命して他の殘肴を拾はんとするや。私は近頃になつては、神經衰弱に罹りながら就職運動に東奔西走したり、青白い營養不良の色に窶れて安月給に喘ぐ人々を見ると、實に可哀想

で堪らなくなる。其の暇には街道の馬糞でも拾つて畑に入れた方が、何程幸福だか知れないと、衷心から歸農したことを喜んで居る。農人の樂は卽ちこゝにある。

趣味論は別として、最後に私が知識階級に告げたい事は、農村が到る所に人材の來るを俟つて居ることである。農村に人材の無いことは前に述べて置いたが實際、材能を伸べんと欲すれば、農村には何程でも其の餘地がある。役場には數箇の椅子があるが、之れに座すべき適材がない。獨り自治體のみならず、產業組合と云ひ、青年會と云ひ、其の他あらゆる機關は悉く主腦となるべき適材が無いために、殆ど有名無實のものとなつて居る。玆に來つて草創未拓の境地に才能を現はし、以て意義ある農村文明の創造に努むるも、亦男子決心の業ではないか。素より輕浮な虛榮心や個人的評價から觀れば、都會に於て榮達して物質慾、名譽慾を滿たす方が、餘り見榮のしない農村の小天地に營々するよりも遙に華々しいかも知れない。然しながら人生の高所に立つて之れを論ずる時は、富豪門閥の驕馬となつて、辛うじて刀筆胥吏や營業會社の傭人となつて簿書堆裡の埃に埋れながら頤使されるよりは、小天地ながら頂天立地、最も重要の使命ある農村文化の開發に從つて、縱横自在の手腕才能を獨自に揮ふ方が、何程意義のある仕事だか知れない。グルンド・ウイークを中心とせる幾多無名の小グルンド・ウイークの獻身的努力が、世界地方史に最も光彩を放てる丁抹の農村文明を齎らした事蹟を思へば、知識階級の歸農も亦甚だ酬ゐらるゝ所が多いではないか。

心ある知識階級の人よ、落着きたる心眼を以て社會を見得る諸學校卒業生よ、都會の黃塵に心身を塗るよりは先づ地方に歸れ、相競ふて安月給の口を求むるよりは先づ農村に歸れ、農村の凡てのものは草創の儘で新人の開拓を待ちつゝある。馴れない勞働と榮ない努力とは聊か辛からうが、夫れはやがて農業の合理化、農村の文明化と云ふ高貴なる成果となつて、無名の農村教化の先驅者に酬ゆるであらう。先づ大決心を以て農村に歸れ。

六　歸農の準備及び方法

倩、私が知識階級の歸農を唱ふる趣旨は右の如くであるが、理論としては如何に慫慂すべきことも、亦如何に夫れが可能であつても、實行方法を示さなければ行ひ難いと云ふ關係もある。依つて私は簡單に自分の經驗を基礎として、歸農の準備並びに方法を略述し、長談義を終らうと思ふ。

農村出身の人であつて、農村に立派な家もあり骨肉もあると云ふ人は、別に歸農の準備も方法も要らない。決心さへつけば極めて容易である。又、農村に緣故ある人も、其の緣故を通じて相當の方法を講ずれば、必ずしも至難ではない。私は都會出身の人であつて全然農村に緣の無い人には、決して歸農を勸めやうとはしない。歸農を勸める以上は、農村に相當の財産を有する人か、然らずんば農村に緣故を有する農村出身の人に限られて居る。私は後者の爲めに聊か歸農の準備と方法とを說いて見やう。何となれば、私は鄕里に歸農するに足るだけの財産と親戚とを有するにも拘らず、特に全然知らない土地に行つて農を營まんとし、目下夫れを實行中だからである。

先づ粗衣粗食の生活に堪え得る經驗を爲すことが準備の第一である。私は之れが爲めに東京在住中に、特に一箇年間此の經驗を試みた。先づ居を東京郊外に移して土に親しみ、木綿筒袖を着て衣服一着主義を嚴守し、冬期は斷然外套類を纏はないで暮して見た。一體私の身體は虛弱ではあるが、遂に感冒にも罹らず見事堪えられた。食物は麥四分米六分を常飯とし、副食物は一切魚肉を用ひないで、全然菜食主義を勵行した。此の野菜は大抵土地を借りて園藝的に試作したものである。次に勞働の鍛練を爲すことは準備の第二である。私は人並以下に虛弱な爲めに、之れには多少苦心したが、夫れでも野菜畑の耕作で餘程鍛へられた。其の他も居常努めて體力を使用するやうな仕事を專らにした。徒歩主義は用の辨ずる限り如何に遠距離でも勵行する必要がある。此の間に簡易な農業書を讀んで、農業に關する知識を養へば猶結構である。準備は以上

一年間の經驗で充分である。人に依つては之れで直ぐ歸農してもよいが、歸農後直ちに農業に依つて獨立生活を營まうとするには、更に自信を堅くする爲めに、一年間實際の農家に作男になる必要がある。若し相當の奉公口が無いならば、食費を用意して自分で負擔すれば、農家は喜んで雇つて吳れる。食費代として一箇月五圓を用意すれば充分である。此の一箇年（人に依つて二箇年ならば更に可）間の作男に依つて、充分に勞働の鍛練と農耕の經驗とを積めば、最早歸農して獨立の生活を營むだけの自信はつく。之れは農業生産が比較的容易なこと、農業を合理化する餘地が非常に多いのを發見することゝに依つて、實際に當つて見れば充分に判ることとである。

以上で準備は終る。次は愈々歸農であるが、農村に家も土地も持たない人は、先づ緣故を通じて土地と家屋とを借受ける必要がある。所謂小作農となるのであるが、關西九州地方は兎に角、北越東北地方ならば一村に必ず一戸位は土地附の家屋が明いて居るから、之れを交渉して借受ける。而して歸農する時は、農具代雜費として三十圓乃至五十圓の金と、一人前米麥各々二俵の食糧を用意すれば結構である。無論、夫れ以上の用意があれば夫れに越したことはないが、家屋及び土地の獲得以外に金を持つて行く必要は決してない。寧ろ之れはよした方がよい。歸農してからは農耕に依つて生活を營むと云ふ簡易生活に處する大決心が必要なことは云ふまでもない。之れは苟も歸農の決心を堅めて決行した以上、無論敢行し得るであらう。

以上說く所は都會の飽食暖衣に馴れた人には實行し難く、到底之れに堪えられないやうに感ずるが、所謂農民としての趣味と信念とが、土に親しんで居る內に油然として起つて來るから、都會生活が想像して居る程困難なものでない。寧ろ中途から非常な趣味と興味とを以て、喜び甘んじて此の辛苦に堪える氣になるものである。現に私の知人で三四名歸農して居るが、六七年を經過した人などは、今では純粹な農民として、然も良農となり精農となつて好成績を擧げ、又、私も

今現に實行中で、豫想外に滿足して居るのを見ても首肯されやう。舊い言葉だが所謂『能はざるにあらず、爲さゞるなり』で、決心斷行さへすれば思つた程困難ではない。要は決心の如何にある。生産者となる愉快は、生産者に成り了した後よりも、生産者たらんと努力しつゝある前にある。所謂『勞働は神聖なり』と云ふ眞理と、『立てる農夫は座せる紳士よりも貴し』と云ふ格言は、身勞働者となり立てる農夫となつた人が、躬ら體讀して始めて味ひ得る言葉である。歸農を決行した私は、着々素志が豫定通りに遂げられつゝあるので、昨今は殆ど精神的愉快の情が溢れるのを抑へ難い程である。故に私は確信して曰く、知識階級の歸農は非常に有意義である、而して夫れは可能であると共に、其の人に幸福な生活を齎らすものであると。

筆を擱くに當つて、私は知識階級の歸農と云ふことに就いて、政府當局並びに要路の識者が深く考慮を費さんことを望む。(六月五日稿)

近代の繪畫に於ける自然觀

澤村專太郎

(一)

諸種の繪畫のうち山水は最も高級なものだとシレーゲルは云つたが、此言だけでも、彼れの思想の近代的な事は充分に知れる。彼れの思想をその儘受容れる事の出來ないのは、云ふまでも無いとして、とにかく山水畫を重視したその一言から推しても、わが藝術の近代的精神が彼れの胸中に、甚だ強く燃えてゐた事が分かるのである。少くとも近代に於ては、山水畫が繪畫

史上の重要な諸問題の負擔者である事は、彼れの言說の有無に拘らず、動かす事の出來ない事實として橫はつてゐる。

この問題は必ずしも西洋だけに止まらない。東洋に於ても亦この强き傾向が現はれてゐる。併しその由つて來る所の事情に至つては、兩者全く一致する部分もあり、また全く一致せざる部分もある。ラスキンは近代に於ける信仰の缺乏が、近代藝術の基調を造る上に、甚だ强い働きをなしてゐる事を說き、近代の宗教畫が僞善と虛飾とに滿ちてゐることを指摘し、眞摯なる近代藝術は、多く無信仰的傾向を示してゐると云つてゐる。この判斷には多少の除外のある事を免れないけれども、この問題が山水畫の近代的運命を決定する大きな勢力の一つである事だけは爭はれない。即ち純粹な意味の宗教畫は、近代生活の圈外に追ひやられ、而して從來注意の焦點から可成に離れてゐた山水畫が、漸次に明確な姿を投現して來た。けれども山水畫の近代的運動は、決して忽然として現はれて來たのではない。既に中世に於て、かくの如き大なる渦卷の素因は、漸次に强く深く卷起りつゝあつたのである。但だ當時にあつては、神を中心としたものか、人間を中心としたものかの何れかの繪畫が、大に勢力を得てゐた。即ち宗教的信仰に基いた繪畫と、人類に關聯した事象を描寫する繪畫とが、著しく勢力を保つてゐたのである。從つてその繪畫には、常に可成に多量の或種の內容が、必ず結合してゐた。それ故、是等の繪畫の鑑賞上の問題に對して、其內容の力が與つてゐた事の多大であつた事は、怪しむに足らないのである。

是等の間に於て、山水畫はその根と葉とを少しづゝ伸ばして行つた。而して間々純粹なる風景畫もその間に於て現はれて來たのである。けれどもそは宗教畫や人事畫に對して、風景が結合してゐた量と質とには、比較すべくも無かつた。手近かな例を求めると、わが國に於ける繪卷物に現はれてゐる自然景、わが佛畫例へば迎攝畫の如きものに結合してゐる自然景、更にかの垂迹畫と呼ばれてゐる社地曼荼羅の如き、何れも一

面に於て山水畫の發展を暗示するものである。けれども是等に於ける自然景描寫は、自然景そのもの丶本質を中心として考へて行かうとしたものではない。即ち宗教的または人事的なる中心に對して、多くは調和的若くば照應的職分を保つてゐた。畫面に現はされた自然美は、要するにその獨立の價値よりも、それ以外の他の要素を圍繞して働かうとしてゐたのである。

一體、自然景に對する感想が、宗教的信仰に關係して動かされてゐることに就いては、中世の歐羅巴が可成に注目に値する所の事例を留めてゐる。それは即ち當時基督教が宣布せられた結果の一つとして、山間に於ける幽邃閑寂の境が、大に神聖視せられ、同時に之れに對して畏怖の念が高められつゝあつた事である。この點に於て、主義上の相異こそあれ、わが國に於ける密教の宣布が、國民一般の眼の前に大自然を展開し來るに、與つて大に力があつた事と相似たるものがある。元來佛教は閑寂なる山谷林野に隱栖することを皷吹する性質のものである。從つてその興隆が山野林藪に對する異常なる注意を强めるに與つてゐる事は、恠しむに足らないのだが、特に密教に於ては、深山幽谷を啓き、之れに堂塔を起し、またはそこに神聖なる地域を設けると云ふやうな事を、其思想の根本に於て奬勵する。これは畢竟人間生活を蔑如し、所謂浮世を離脫した山川生活の淸淨なる事を認め、且つ之を以て冥想に耽るに適すとなし、或は秘法を行ずるに適すとなす等の理由に基くのであるが、そは何れにするも、信仰的刺戟のために、今や山間幽栖の境は、漸く特殊なる色彩を帶ぶるに至つた。同時に一方に於ては、種々なる迷信が、山川に對して結合するやうな結果をも見るに至つてゐる。かくて中世の自然景描寫には、信仰的對象の表現の上と、人事を中心とする表現の上との諸問題に影響せられて、實自然を正確に表出することに就いては、不充分なるものあるを免れ難くなつてゐたのである。けれどもまた、かくの如き自然景描寫は、近代に於ける山水畫の蔚興に對して、基礎を成すに至つてゐる事をも忘れてはならぬ。

わが國に於ては密敎のほか、更に自然景描寫の問題に對して、根本的なる勢力を與へた宗門がある。それは禪宗である。この宗旨の本義は學究的努力を排し、または儀式的努力を喜ばず、一に自己の工夫によつて直ちに佛道を成ぜんとするにある。而して山林の閑靜なる地點に於て營まれた修道院にあつて、此派の僧侶は修業を積む。その形式を排し、自主を喜び、從つて活達自由を愛する風から、延いては自然景に對する愛賞的熱心を喚び起すに至つてゐる。けれどもこの宗門に關係して起つて來た自然の好愛は、密敎のそれとは多少其趣を異にしてゐる。即ち密敎に於ける自然觀には、何處までも自然に對する神聖の感情と畏怖の感情とが加はつてゐる。從つて人間は自然に屈從してゐるやうに見えるが、實は兩者は或意味に於て對立してゐるのである。然るに禪宗に於ける自然觀は、自然の威力を信じ、その畏怖を感ずる事あるも、毫も之れに屈從しないが、併しまた抗爭しやうともせない。而して人間自體は寧ろ自然の裡に消沒し去らんとする。かくて何處までも自然的狀態を尚び、自然的生活に適應し、順應して、その大なる理法の儘に消滅生起する。この自然觀の上に、山川沼澤の美が理解せられて行かうとした事によるも、禪門の方面よりするもの丶方が、密敎のそれよりも一層深刻である事が知られる。かくの如き一種の自然主義的傾向からして、山水の愛賞が促がされ、延いては山水畫の勃興を見るの氣運を現はし來たるに至つてゐる。而かもその半面に於ては、宗敎畫の頽廢を來たしてゐる事は、寧ろ止むを得ない事と云はねばならぬ。

(二)

純粹なる山水畫の發展から云へば、支那は最も古いのであるが、日本の近代畫に對して著しい感化を及ぼしてゐる點と、支那自身に於ても近代畫に對して基調を形成するに至れる點と、而して其實質に於ても眞に一區劃を成すに足る點とに於て、宋朝の山水畫は最も注目に値する。てふどわが國に於ける近代畫が足利期に於て發足點を有すると等く、宋代は遙かに明淸の繪

畫に對して、源泉的の位置にある。かの時代は思想上には自由討究の精神が漲り、また宗教上には禪宗の自然的傾向の高まつて來た時期である。その詩的感想の如きも、唐及びそれ以前の如く、形式美を喜ぶの風尙を去り、實を取り質に即くやうになつてゐる。而して自然に對する態度に於ても、著しく眞摯となり、鋭くなり、深くなつてゐる。かの西洋の近代畫家が、一時、自由を喜ぶ風潮の下に、伸々した樹立、心の儘に流るゝ淸流、意の如くはびこる雜草を好んだ事があるが、てふどかくの如き風潮も、また宋時代には現はれてゐる。そして山林に入り、哲理を談じ、讀書の樂を樣まゝにする事などが、愈々著しく行はれて來た。かくの如き風潮に伴つて、自然の破壞力を喜び、その大なる力の下に廢滅荒敗する狀態を觀て快となすやうな思想も自ら湧いて來てゐる。

かくて宋朝の畫には、誠實に自然を描寫したやうなものゝあるべきは云ふまでも無い。もと宋朝の畫は、山水畫以外に於ても、形似の一面に於て大なる發展を示してゐるのであるが、その寫實的なる力量は、山水畫に於て心ゆくばかり發揮せられてゐる。けれどもこの時代が單純なる山水の描寫、かの唐の張彥遠の云つてゐるやうな「山水の寫貌」だけで、滿足してゐたとは云はれない。更に進んで種々なる詩的感想の滲透してゐるものが、此時代の山水畫中には見出だされる。その感想の中には種々の傾向があるが、その著しいものは點景的人物に托して、自然美の愛賞、若くば脫俗的生活を指摘せんとするものである。そしてその半面には都市生活に對する反感が甚だしく高められてゐた。同時に當時その勢力の甚だ盛んであつた所の禪宗が、山水畫に於ける感想上の問題にも直接の刺戟を與へてゐる。それは從來超絕的のものとして理想化せられ、類型化せられてゐた所の、信仰的對象が、遂に自然物視せられ來るに至つた事である。而してそれが山水畫中の點景的性質に誘致せられる事が盛んに行はれ來つた事である。特り禪宗の祖師に限らない、釋迦も、文珠も、普賢も、觀音も、畫家は之を一個の自然物視

し、恰かも一詩人の水岸に起つて詩句を案ずる狀を圖すると、殆ど大なる差別を認めざるが如き態度を以て之れに臨んでゐる。宗教畫を以て藝術の最高級と考へてゐるやうな一派の人士には、それは明かに墮落と認められる。けれども是は宗教の一種の傾向と結合して、現はれ來つた所の現象であつて、而かもそれはてふど世界の近代的風潮に投合したかの觀を呈してゐる事は注目に値すべき事である。

宋畫のかゝる内部性は、畫の技巧上の種々なる發展的過程と交錯して、實際に於ては、甚だ複雜なものとなつてゐる。着色畫に於ては寫實味と裝飾味との相反したる二方面が錯雜し、之れに對して別に墨畫が大なる渦紋を畫いて展開してゐる。目にならされた東洋人にとつては、墨畫は何等異とすべきものでないかも知れない。けれども實自然に於ける無限の色彩的變化に留意するならば、之を唯僅かに一色に省約して了ふと云ふ行きかたは、寧ろ驚くべき大膽なる企である。けれども墨色の有する沈靜な感情を鞭韃して、之を以て雜音ぬきの奏樂を試みると云ふ事は、別種の情味を豫想させる。況んや一線一筆の起伏、輕重、遲速に依つて、殆ど無限の變化を、人の心裡に注ぐことを得るに於てをや。而して人の心に靜かに、注ぐには本來沈着な水墨の感情的價値が、特に有効なるべきに於てをや。墨の性質は、明晦と光澤との二方向に變ずるに過ぎない事は云ふ迄も無いが、その微細なる變化をも鋭敏に人に訴へ得ると云ふ事に於て、墨に及ぶものは殆どない。試みに朱筆を以て事象が表現せられたとする。吾人はその一線一筆に含まれたる要素を味ふ以前に、その反撥的なる或種の力に妨げられて、之を靜かに味ひ難いのみならず、筆線自體の含蓄は何等の効力をも吾人に及ぼさないのである。是等の點から考へると、墨そのものゝ性質は沈靜であるだけに、或種の藝術的內容にとつては、之を投現するに好都合である。

かゝる水墨を旨とする畫法の發展は、宋代の山水畫をして一層多趣味ならしめてゐる。即ち第一の方面に於ては、自然景を骨法用筆の上から考察し、實景はそ

こに意志化せられ、時あつては理智の力に陶冶せられたものとなつて現はれてる。かくてこの方面の山水畫は、元來寫實を出立點としてゐたに拘らず、時代の經過と共に、實自然との連絡を失ふやうな狀態に陷らんとした。わが足利時代に於て移入せられ、流れて近代の狩野派に至つてゐるもの丶多くは、卽ち此流である。この派の山水は、形式的興味がその主動的位置を保つてゐるから、その意想感情の如き方面は、近世に至つて殆ど全く枯渇して、唯無意義なる反複となり了つてゐる。同時にその訴へ來る所のものは、筆墨の運用に基ける感覺的要素が主となつて、筆墨と形相との間には、多くの空隙があり、從つて實自然に接する時に於て吾人が受取るが如き、淸新なる感情には乏しい。けれどもまた、一種の力感や、重感や、動感などがこれに結合してゐる。この方面に於ける山水畫に就いても、さすがに大陸宋元の間に現はれた名作や、わが東山時代に於ける諸家の手に成つた逸品中には、自然の力强き裏書を有しながら、筆墨化の妙用を盡して、自然に對する甚深なる洞察力を發揮したものが少くない。畢竟ずるに、この種の山水畫は、自然の保つてゐる所の特性を捕捉せんとしてゐるのであつて、此派はすべての點に於て沒我的である。固よりその意志化し、若くは理智化する點に於て、精神的なる要素が著しく加味せられてはゐるけれども、主我の反映たる情趣的要素には乏しいのである。

（三）

第二の方面は、山水畫の近代的運命に最も關係の深いものであつて、それは畫の客觀的條件に就いては、最初より問題とはせずに、主として主觀的要素を以て、山水を理解せんとするものである。換言すれば、山水の客觀的なる要求を第一義とはせずして、作家の意想感情の方を重んずるものである。かゝる山水畫は、單に自然美を表はすだけが其目的ではなく、作家の內部生活を山水にかりて發表せんとするものである。從つてその或物には作家の思想的要素を强く體現してゐる事もあり、また或物には作家の主觀的なる情趣を俱象

してゐる事もある。

この種の山水畫は、とにかく宋朝に於て、可成に發展を遂げてゐた。然るに是はかの骨法用筆主義のものが、大陸に於ても、我國に於ても、近代に入り現代に近づくに從つて、漸次に衰頽して來たのに反し、近代に入るに及んで、驚くべき展開を示してゐる。かの南宗的山水、及び文人風なる山水畫の如きは、即ち此種のものである。元來、南畫にせよ、文人畫にせよ、その起源に至つては、宋朝の以前に求められるけれども、その著しき發展を見たのは、宋代であつて、而かも之れが更に大に發達を遂げたのは、明清の時代である。此種の山水畫は、わが足利期に於て移入せられたけれど、それが眞に邦人に理解せられ、且つその畫の盛行を見るに至つたのは、德川時代の中葉より以後、最近に亘つての事である。

この種の山水畫に於ては、既に說いた如く、作家の思想的要素の流露せられたものが少くない。而してその多くは自己の理想的生活の意を暗示し、或は詩歌的意想を發露し、或は自己の隱退的生活を指摘してゐるのである。而してその內容は殆ど何れも、繁劇なる人間生活より脫離して、隱退的讀書生活の意を寓してゐるものである。かゝる隱逸生活と山水とを結合せんとする風潮は、既に宋代よりも以前に於て存した所なれども、宋代に至つて殊に著しく行はれ、延いては近代の支那山水畫家の常套手段と老へらるゝほど、一般的となつてゐるのである。かくて此種の思想は、わが國に南宗文人の畫態が行はるゝに及んでも、矢張りその儘移入せられて、作家の反復する所となつてゐた。かくの如き隱逸生活を寓する事は、西洋近代の山水畫に於ては餘りに見出だされない所である。ラスキンは近代に於て山嶽を愛する風潮の大に高まり來つた事を說き、近代に於ては中世紀のやうに山嶽に對して冥想的なる精神を持たないし、また特に深山に對して畏怖の念を有つてゐないと云ひ、畫家は山嶽の前景に點ずる人物は、隱逸者流よりも、寧ろ狩獵者が適當だとなすであらうと云つてゐる。とにかく支那の知識階級、殊

に文墨の徒が理想とする所は、實に山林原野に於ける一種の脱俗隱逸の生活にあるので、その山水畫を喜ぶ風潮に於ても、かゝる方面にその根柢の一つが存する事は云ふ迄も無い。

西洋に於て近代に山水畫が起つて來た事に就いては、其半面に於て、人體美に對する理解が多少古代乃至中世とは、變化しつゝある事を認めねばならぬ。即ち今や人體が繪畫に於ては、漸く取扱はれることが少くなつて來てゐる事は怪しむに足らないとして、その之を取扱ふに於ても、單に身體美を表はすと云ふが如き意味は、稀薄になつてゐる。かの最もよく人體を取扱ひつゝある彫刻の方面に於ても、人體は今や單なる肉體美の問題のみから取扱はれんとする風潮は認められず、寧ろ思想感情の方面から考察せられ行かんとしてゐる。てふどそれは、山水畫が單に自然美の問題に卽して解釋せられ難くなつてゐる所の、近代的傾向と一致してゐるのである。そはともあれ、山水畫の流行が、人體描寫のそれと相反的狀態を示してゐる事は、西洋に於ては認められるけれども、裸體描寫の展開を見なかつた東洋に於ては、餘りによくは認められない。併しまた、之を全體の上より考へると、人體と云はず、廣く人事に關係してゐるもの、例へば歷史畫的性質のものゝ如きが、近代に至つて其勢力を失ひつゝある事は、彼此一樣なる傾向に出でゝゐる。

山水畫の思想的要素のほかに、更に近代的傾向を發揮するものは、前述の情趣本位の山水畫のことである。西洋畫に於ては此種のものが近代に於て特に注目せられる。獨逸の山水畫にも此類のものはあるが、多く佛蘭西のコローを先蹤としてゐる一派に於て見る所である。此種の山水畫に於ては、自然景は作家の感情の反響となつてゐるので、鑑賞家は要するに之れに共鳴するものに外ならぬのである。そして此情趣の發相に於ては、種々なる手法材料の問題が著しく關係して來る。例へば東洋に於ける文人畫の如きは、その用筆運墨の方面に於て書法的流露が必要なる一條件と認められてゐるが、その基く所の如きは、作家の情趣が思ふ

儘に發露し盡され得る事にあるのである。殊にその筆墨の婉轉自在の趣と人間の氣分との融合は、最も可能的であるから、此方面に於て情趣的要素が文人風の山水畫に結合し易いと云ひ得られる。さうでなくとも山水のそのもの丶感情的價値は頗る音樂的である。音樂を以てフォルケルトが情趣藝術（スチムムングスクンスト）と云つてゐるのは、その本質の上から考へての事である。吾人の見る所を以てすれば、書道の如きまた一種の情趣藝術となすべきものである。そはとにかく、山水畫が音樂的氣分を示すことは、東洋畫に於ても、西洋畫に於ても、最も屢々認められる事實である。而かもその問題は更に一歩を進めて、色彩的効果の上からも考へられねばならぬものである。卽ち情趣を尙ぶと云ふ自覺が、山水畫の上に現はれ來るや、情趣と最も親密に結合する所の色彩の適切なる取扱ひが企てらるべきである。

およそ色彩の氣分的効果に於ては、西洋の近代山水畫は特に著しく發展してゐる。近代の哀愁的なる一般の氣分が、山水畫に於てもまた沈靜な色調となつて現はれてゐる事は、ラスキンに依つて既に繰返された所である。けれどもラスキンの考へてゐる事は、一般には當篏まらない。彼れは少くとも一歩を進めて近代山水畫が情趣的方面を忘れなくなつて來た事を、一層力强く指摘せねばならなかつたのである。畢竟するに山水畫の色調的關係から情趣を讀ませやうとする事は、近代に於て著しく高められた事であつて、此點に於ては東洋の南畫よりも、やゝ異つた發展を示してゐる。けれどもまた、わが南畫に於ても、此點に就いて忘れてはならない特調を有つてゐる。それは水墨の潤致と情趣とを結合させる事である。卽ち墨色に五彩の變化を求めやうとする事は、墨畫家の希望であるが、水墨はもと畫面に滲透して一種の濕潤的特色を示すものである。此濕潤的特色の要求に基いて、支那に於ては、紙のほか、近代にては絖の類がよく用ひられてゐる。この特調が情趣を投現するには、甚だ好都合であつて、恰かも西洋畫の色彩に基く所の氣分的効果に劣らないものがあるのである。

（四）

自然景を模様化し、裝飾化し、之れによつて特殊なる興味を喚び起さうとする運動が、また近代畫の上には認められる。この點に於て光琳の一派を始めとして、わが桃山期の障屏畫は代表的なるものとなる。元來東洋畫は西洋畫の如く、空間の第三延長を表はすことに努めないから、此點に於て西洋畫よりも一層寫實には遠ざかり易く、裝飾的のものとなり易い。この東洋畫の一面に刺戟せられて、西洋に於ても裝飾的山水畫が近代に於て大に頭角を擡げてゐる。例へばライスチコフの如き、またダハアウエル派の如きは、卽ち此方面に於て注目せられてゐるものである。もと裝飾的山水畫は、主として美的官能に訴へ來るものであつて、特に是等の山水畫に於ては、その特色として陰影的明暗の照應が構圖上に用ひられ、その陰（ネガチブ）と陽（ポジチブ）との二要素は、圖法の中堅をなしてゐるのである。而して是等を裝飾的に調節するを以て常套手段としてゐる。而かもその調節に就いて、特に有効の手段として用ひられてゐるものは、精妙典雅なる線であつて、此線條を用ひて巧みに部分と部分とを、若くば個物と個物とを連結してゐるのである。

この線的効果に就いて、ストリチゴウスキは日本の藝術の西洋畫に對する影響の著しい事を指摘してゐる。氏は光琳の畫や、師宣以下の諸版畫などが、西洋畫に及ぼした感化の特に少くない事を指摘してゐるが、模様風なる自然景が、日本の工藝品の類に、巧みに用ひられてゐる事よりして、更に進んで埃及、アッシリヤ、バビロニヤ、希臘、乃至全歐羅巴の藝術と東亞の藝術との近代的關係を指摘してゐる。そして日本乃至支那の藝術と西洋藝術との關係を、往昔の埃及藝術とヘレニック藝術との相關的關係に似てゐるとなしてゐる。とにかく西洋の裝飾的自然景畫は、大に東洋畫の刺戟によつて發展して來てゐるが、それは純鑑賞のほか、建築的方面に著しく應用せられてゐるのである。

ストリチゴウスキの觀察は、東洋畫に對して可成に

同情あるものである。けれども氏の東洋畫に對する觀察中には、吾人の首肯し難き點が無いでも無い。但だ自然景を模樣化して、線條の交錯と、色彩の集團的配置と、明暗の照應等の諸効果が、相助け相結んで、近代の歐羅巴に於ては、殆ど全く考へられなかつた天地を打開した事を認むる點に於ては、固より同感である。然るにわが桃山の障屛畫や宗達光琳の畫に於ては、前件のやうな形式美のほか、內容美を保つてゐる點に於て、多少その趣を異にするものゝある事を知らねばならぬ。蓋し模樣化の傾向は、動々もすると興味を失つて了つて、直觀によつて得た心象と、之れに結合すべき感情とが、相互に策應せない事となる。かゝる關係を融和せんが爲めに、或は回想的要素を共內容に投入し、或は詩的感興に適するやうな景趣を捉へて來る必要が起る。卽ち桃山の障屛畫や琳派の繪畫に於ては、かゝる內容の方面をも開拓してゐるのである。從つてその自然景を模樣的に處理するに於ても、詩的感興、殊に平安時代に於て著しく發展した和歌的興味の多量が、屢々投入せられてゐるのである。外國人の此方面に於ける觀察に於ては、多くはこの重要なる點に留意せない。ストリチゴウスキイの觀察も、强いて云へば、多少この方面に於て不備が認められるやうである。

最近に於ては、この方面が少壯なる日本畫家の興味を動かしてゐる。若し是れが新らしい意義を以て開展して行くならば、蓋し別個の境地があるであらう。但だ桃山期や、琳派の諸家が、保つてゐたやうな深い意想感情を以てしては、固より新運命を擔つて立つべくも覺えないが、要するに自然に對する新解釋、人生に對する新理想等幾多の問題に基いて、形式美のほか、內容に於て新らしき生命を托するの必要が認められる。

（五）

山水畫がその發達した都市の環境と親密な關係を有つてゐる事は、殆ど何人にも想察せられ得る事である。和蘭陀の近代風景畫が、低地國の實景をその題材の上に齎らし、之れによつて特色ある風景畫の旗幟を樹立

してゐる事は、餘りに世に知られた事實である。之を支那に關係せしめて考へても全く同一である。かの南北二宗の山水畫の特色に於て、南宗の山水には披麻、亂麻、鮮索等の皴法を用ひ、その山容は何れも溫和なる趣を有し、北宗の山水には大小斧劈の皴法を用ひ、その山角天空に朝する勢があるを普通とする。從つて或は南宗は之れ支那南方の溫和なる風色を寫し、北宗は北方の峭拔なる山光を描寫して成立したかのやうに說くに至つてゐる。けれども實際に於ては南方の風光、必ずしも溫和に限らず、北方のそれ、亦必ずしも奇峭ではない。之に依つて支那評家の間にあつても、此見解に對して反對する人が多々ある。固より南北二宗の別を、直ちに實景の上に關係せしめて說破しやうとしたから、多少困難が起つたのである。かゝる問題を離れて支那の山水畫を仔細に吟味すると、或は蜀の風光と結合して現はれた畫風があり、或は長江の雲山煙波を消化して現はれた畫樣がある。殊に近代支那の山水畫にあつては、作家が屢々自然の閑寂なる境域に隱退し、そこにあつて筆墨を樂んでゐるやうな事が多かつた。彼等は多く觸目する所の四周の風趣を描寫して倦まなかつたらしく、その作品を吟味すれば、是等の特色が屢々現はれてゐるのである。例へば明の王問の如き、淸の曹有光の如き、或は晚年太湖に隱栖し、或は西湖に寄寓して、爲めに畫く所、常に四圍の風趣を傳ふるに至つてゐるのであるが、此種の例は殆ど數限りなく存するのである。

更に之をわが國に關係せしめ、わが中世及びそれ以前の繪畫に就いて考へると、かの大和繪に於ける山水の如きは、大體上、京畿の自然景から誘致せられ來つた特色を備へてゐる。卽ちかの和らかな曲線的起降をなして、一起一伏、蜿蜒として遠く走れる繪卷物の連峯は、要するに是れ、京洛や南都より望まるゝ山容峯姿である。かくの如き實例を近代の山水畫に求めると、わが圓山及び四條の流派に指を屈せねばならない。圓山派の特調は、應擧の藝術的生活に、四條派のそれは吳春のそれに、夫々之を求めて行く事が出來る。應擧

は各地に旅行してはゐるけれど、その生活の基礎は、京洛を出でないのであつた。彼れはその技巧上の傳習は、或は狩野風を學び、或は元明の古畫に眼を轉ずるなど、種々なる工夫は凝らしてはゐたが、其山水畫に於ける材料に於ては、殆と京攝を出づる事が出來なかつたのである。吳春また蕪村に學び、更に應擧の法を慕つてゐると共に、是れまた京攝の自然を友として生活した。かくて此二流に於ては、其自然景は京攝のものを中心としてゐるのである。加ふるに此二流の態度は、寫實にあるが故に、その山川を描寫するに於ては、努めて客觀的に正確を期してゐる。それだけに其環境の感化を蒙ることも亦甚深なるものがあつた。吳春は應擧の精細なる畫風とは稍その趣を異にし、もと蕪村によつて南宗文人の畫風を學び、更に寫生風に入り來つたのであるから、應擧とは多少洒脫な特調を有し、從つて其自然を畫くに於ても、淨化を喜んで、形式の省略を旨とするの風がある。而かもその自然景そのものゝ基調は、京畿のそれである事は、言ふまでも無いであらう。

然るに等しく寫實的でありながら、從來の山水畫とは全然異つた態度と、異つた解釋の上に出立してゐるのは、かの一立齋廣重等を以て代表者とする所の、近代の浮世繪に見る風景畫である。此種の風景畫に於ては、自然が人間生活の現實相と結合して、表現せられんとするに至つてゐる。此種の風景畫以外の多くの山水畫の類に於ては、現實生活を輕蔑する傾向と之を避けんとする方法とが、二方面から現はれてゐた。卽ち第一は典雅を喜び、吾人の生活から離れた點に、自己の歸趣を見出ださんとする本然の性質から來てゐるものである。卽ちそのある物は好古の感情となつて現はれ、そのある物は回想的興味を誘ふてゐるのである。かゝる傾向だけからしても、自然景を理想化せんとする運動が起るべきである。然るにわが國の近代山水畫には第二に强き大陸趣味が之れに結合してゐる。卽ち風俗を異にした點、一種の隱逸生活を理想とした點等が、前述の本然の傾向を滿足させるに適當してゐた。

加ふるに畫法が大陸から移入せられた爲めに、傳習的なる方面からも、山水を理想的狀態に誘つて行かうとする。かゝる樣々なる要求と事情とからして、近代のわが山水畫には、直ちに吾人の生活圈に横はれる自然景を投現する事が出來難かつた。應擧は寫生を標榜して起つてはゐたが、彼れの自然景を畫くや、點出し來れる人物に於て、支那人物を見たが如き、此傾向を洵に能く現はしてゐるものである。

廣重等の運動は、てふど近代日本の山水畫に於ける大きな缺陷を指摘し、之れを補充したものである。そして此新運動は自然を觀る眼を、一層大きく、一層廣くした事も爭はれない。吾人はまた、之れに結合して歐羅巴の近代風景畫か、働いてゐたのを忘れる事が出來ぬ。即ちかの西洋畫に於ける遠近法（ペースペクチブ）の如きものが、新たに風景畫としての或條件を滿足させるやうになつて來た。かくてまた其色彩の用法に就いても、洋畫の刺戟を受取つてゐる。是等の點に於て文晁、華山の徒も忘れる事は出來ないが、文晁の如きは自然の研究、殊に山嶽の研究に於ては、甚だ努めてゐたにも拘らず、彼れに對しても矢張、應擧の持つてゐたやうな一種の傾向を認めねばならぬものがある。廣重等の山水畫が西洋畫、特に西洋銅版畫の影響を受けてゐた事は、兎に角として、その風景畫としての自然の觀察が、精緻を加へて來た事に注意したい。特にその氣象上の諸變化を捕捉し、之を投現する事に於ては、可成に大なる努力の痕迹を殘してゐる。彼等は夜景の描寫を始めとして、雨中の變化、曉明薄暮の趣等を追究して措かなかつた。かくの如き寫實味を有つてゐた點が、やがて西洋鑑賞家の心を動かすに至つた條件の一と認められる。加ふるに沈靜な調子を以て自然景を律し、之れに依つて色調から來る所の一種の情趣が、巧みに流露せられてゐるのを見る。かの北齋の如きは、特にこの點に於て、名狀すべからざる魅力を示してゐた事は、云ふまでも無からう。けれども浮世繪の風景に於ては、自然現象の外面に卽して、之れに典型的興味を當嵌めやうとする傾向がある。彼等の自然を觀るや、深遠嚴

蕭なる大自然の內部に肉逼して、その何物かを捕へ來たる底のものではないのである。此點に於てはかの大陸宋元に於ける名家の自然觀とは、著しく相異する所がある。けれどもまた徹頭徹尾、世間相に卽して、山林の幽寂も、野外の靜閑も、すべて人間生活の忙たしき一面に關係せしめて、觀じ來らんとする傾向は、明かに近代生活の一面を露はすものである。

ラスキンは自然の愛の發現して成つた所の純正なる風景畫は、和蘭陀派の風景にも、伊太利派の風景にも、之を求める事か出來ないと云ひ、ターナーを以て代表する英國派の風景こそ眞に近代的のものだとなしゐる。蓋し近代に於ける都會文明が、人間生活を壓逼しつゝある事は事實であつて、之れが爲めに大自然に於ける自由と閑靜とを愛慕する思想感情の高まつてゐる事は爭はれない。かのラスキン等の所謂近代風景派の喚起も、また彼等の主張も、要するに如上の思想感情の一種の發現に外ならぬ。從つて此種の風景畫を否定し去るの必要は毫もないけれども、別に人間內外の生活に對する執着力が、更に强く自然の閑寂境に於て認められる必要もある。從つて山水畫に於て、自然自體の純正なる相を讀まうとする希望のほか、別に作家の感想を讀み、情趣に共鳴する事の希望は、山水畫に對して決して過分なる要望とは云はれない。而して都會文明の威逼が如何に强くなるとも、此種の要望は決して山水畫の近代的運命を裏切るものではない。况んやその問題は大都市文明のほかに於て、更に深く、人間の內部的生活に接觸してゐるものなるに於てをや。

都會生活者の採り容れ得べき自然生活味

○　坪谷水哉

大隱は市に隱るとか。都會に住めばとて爭かで自然生活味の採り得られざることとやはある。渠端の清風、公園の明月、鉢植の朝顏の色、軒端の風鈴の聲、都市と田園との間に何の異なる所かあらん。社の杜に蟬時雨を聞き、寺の庭に雲の峰を賞し、屋上の物干場に日光浴を試み、店先の納涼臺に天文を觀測するが如きは、何人にも大都の眞つたゞ中に於て採り容れ得べき、夏の自然生活味にあらずや。

欄干の橋や納凉の目白押

○自然の姿は我が家にも　松崎天民

庭には茄子と瓜が、やがては食べられさうに實つて居る。座敷には葭の障子に、青い色した簾が掛つて、煽風器の風にも、自然の音づれがある。床の間には、幽溪を型つた水盆を配つて、翠緑の瀑布の軸物にも、飛沫渦まくかと爽快しい。風鈴の音、忍の雫、蟲籠には鈴蟲が、チロリンチンチロリン。石垣には朝顏が、紅紫とり〴〵に笑つて居るなど、貧しい我が家の夏にも山水自然の姿は漂ふ。——日盛りの湯浴一二回、裸體一貫になつて、冷たい西瓜を食べる時、夏はいづくぞ、清樂境の裡にあり。

青山に居た頃の夏が、さうであつた。今年は麴町區内幸町に移り住で、黄昏の日比谷公園を、我が家の夏に領して居ます。以上。

○歌二首　田山花袋

わすれけりけふのあつさもわぎも子かゆふへの酒の心つくしに

中々に山水よりもすゞしきは大川端のともしびのかけ

○ 丘 淺 次 郎

自然に接せずして自然生活味を得んとするは恰も飛ばずして飛行味を得、游がずして游泳味を得んとすると同樣に全く無理なる註文なり、されば都會生活者の採り得べき自然生活味はたゞ想像の力によりて嘗て經驗したる所を思ひ起すにあるのみ、そのためには、紀行文を讀むもよし、山水畫を詠めるよし隣家の壁を海と見るもよし、電車の響を瀧の音と聞くもよし、厚さのある綿として三尺ばかりの箱庭を造るもよし。

○ 上 司 小 劍

冬は火鉢を用ゐるのに、夏は冬の火鉢に相當するやうなものがなく、障子をあけ放して風を入れるぐらゐに止まつてゐます。扇風機や花氷は贅澤なものとして、普通の家では餘りつかひません。殊に扇風機は黴菌を集めるので非衛生ださうです。そこで冬の火鉢に對して夏は氷鉢を作り、間斷なく氷に手をかざし、客が來れば何よりもまづ氷鉢を出すことにしたい。炭をつぐ代りに氷をつぐのも面白い。

○ 今 泉 雄 作

一室を片付け水をあびて素裸にて中央に御坐り可被成候

裸の有無は其人の程度次第に候也

○ 德 田 秋 聲

一、夜の明け方は私の住所などではさすがに武藏野だと云ふ感じがしますが、下町では其も駄目です。しかし朝起きはいくらか新鮮な自然に接することになりませう。

二、晩方の散歩がいゝと思ひます。しかしから自働車や何かゞ劇しくなつては遣切れません。路傍樹の繁つた靜かな人道、若しくは公園をもう少し殖したいと思ひます。海及び川を利用することも必要です。現今の東京は社交にはとにかく、住所としては全くゼロだと

思ひます。精神的方面は別ですが、普通に考へては右のやうなものです。

○　石川半山

一、先づ各自心中の煩悶を去るべし、心に煩悶ある時は山水明媚の地に往くとも面白からず、之れなくば紅塵萬丈の裡に在りても悠々天地の美を味ふを得べし。

二、朝早く起き出でゝ近傍の神社佛閣に參詣す可し、神社佛閣は俗塵の外に立てる一廓の自然にして、毎朝之に入て其の亭々たる樹木に對する時、我が一身の都會に在ることを忘る可し。

三、晴れたる夜は仰て空の星を見よ、雄大なる自然美は卿等の前に展開せん、雨の夜は靜座して點滴の音を聞け、卿等は自然の福音を聽くを得ん。

四、一鉢の盆栽にも自然の味あり、一個の風鈴にも脫俗の音あり。

五、大に勞働す可し、汗を流したる後の凉味は避暑客の理解する能はざる所なり。

○　沼波瓊音

御尋ねの事は氣のきいた工夫のいることにて候小生の如き氣のきかぬものにはよき御答出來かね候。

小生の知る醫師に夏になると障子を全部紗ばりにして成るべく締め切つておく人あり候其居心よく四邊凉しき光線になり、蟲は入らず風はよく通ひ候この紗障子の外に長き草などの見ゆる、又月の影なども面白く候。

いかに家たちこみたるところにても空の見えぬところは無き事まことに天恵にて候、空は廣く見渡さずとも、心靜めて仰ぎ居れば味深く大いなるものにて候雲の變幻を味ふ事も人の覺え學ぶべきことに候。

又自然と人間と別物のやうに切り離して考へぬやうにおのが心を慣らすべきことと存候。

○　高島米峰

猫の額程の空地もなくて、ダリヤ一本植ゑることも出來ず、一鉢二錢の朝顏を買つても、それさへ並べる、適當の場所を持たないといふ程に、切りつめた生活をして居る吾々のやうな都會生活者が、物質的に、自然

生活味を採り容れるなどゝいふことは、全く空望であります。幸にして、吾等は、書を讀むことを教へられて居りますので、坐して東西の名勝を探り、臥して遠近の山水を跋渉することが出來ます。時に或は、店頭に打坐して、洞山が謂はゆる無寒暑の地に去ることも、不可能でないことを、幸福として居ります。

○　近松秋江

外出といふことは暑いから、なるべく外出せずして、家の建て方や間取りによつては、ちよつとした居場處によつても廂合はひなどから涼しい風が通つてくるからそんな風を入れながら、手拭地の裕衣などを着て、清新な食物を食べ、心を靜に落着けてゐたら、生半の避暑地などへゆくより遙に好い。避暑にゆくのに二日や三日や乃至七日や十日ぐらゐゆくのは近暑にゆくやうなもの。行くゝらゐなら少くとも二た月ゆかねば駄目。

○　小川未明

獨り繪畫と盆栽あるばかりだと言ふことが出來ます。私は常に何等かによつて自然を思慕しやうとつとめて來ました。而して、現下の煩雜な都會裡にあつてたゞ私の心を幽遠の境に誘ひ得るものは獨り繪畫と盆栽あるばかりです。いかなる人の紀行文を讀むよりも、私は一枚の日本アルプスの繪はがきに、山岳の線(ライン)を懐かしみます。轉々居を換へる毎に庭地の少なきを憾む私は一鉢の高山植物を眺めて、人跡稀れなる、露深き境に心を馳せるのです。

○　武林無想庵

團扇から生ずる風大の涼味、打水から輝き出づる白露の感觸、夕立のあとの緑叢の新鮮さ、殊に月明の夜のそゞろ歩きなどは、却つて自然生活に於いて得られべきものをば更に一段と洗練して、自然以上の自然生活味が湧き上つて來るやうに思ひます。私はいつも山や海に暑を避けてゐる時、必ず思ひ出すのは都會の花やかな夕方の散歩ですNot in abundance, but in virtuosity と云つた Edgar Saltus の言葉は、所謂自然生活味といふものゝ上にも適用されると考へます。

○　　　　青柳有美

時間的にも空間的にも大自然を小自然とするにあり。即ち日常生活に時間的空間的野趣を持ち込むにあり。例へば朝四時頃に起きて屋外に散歩し之を山野の跋渉と心得、椽側に籐のソーファを夕景より出して之にソツクリ返へり恰も野外の叢に寢コロんだ如き心地となり、玄關の敷石及び庭などに絶えず打水して海濱若くは溪川に遊べる如く感じ、朝顔を植ゑたり盆栽を並べたりして深山或は曠野に入れる如くに思ひなすが如し。

○　　　志賀重昂

一、西洋人は五十度以北に生れ五十度以北に人と爲りたるものなり、即ち太陽の光線薄く太陽の熱の弱き方面に生れ且發育したるものたり、即ち皮膚の生白くなり子々孫々相禀けて白色人種となりたるものなり、然れば熱を恐るゝこと甚だしく、下等社會と雖ども避著〳〵と稱ふ。

一、之に反し日本人は五十度以南に生れ五十度以南に人と爲りたるものなり、即ち太陽の光線比較的强く太陽の熱の比較的强き方面に生れ且發育したるものなり、然れば西洋人の如く熱を恐れず、南洋にても布哇にても伯剌西爾にても炎熱燒くが如き北米加州の帝國平原にても必ず成功す。

故に日本に於て避著とか自然生活の云々とか都會生活の云々とか呼號するは天祐の大資本を自ら拋棄するものなり故に返答申上げず。

○　　　大庭柯公

家居のまゝに著を忘れんためには、讀書よりも觀畫觀畫よりも畫筆を弄ぶに如かず。會心の書は別として、讀書は兎角に倦し、寧ろ畫集畫帖を披きて、畫中の物象に同化するこそ好けれ。若し臥榻の人たらんには、庭前の即興に詩作俳句を試むる亦大に可。

軒端の風鈴、椽先の籐椅子、月並の嫌はあれど凉を呼ぶには好適なり。夕顏の花は暮色に會ひて愈々白く、芭蕉葉に玉の露を宿せるは、夕立の名殘りか、打水の飛沫か。

○　岩野泡鳴

洞察すれば、人間の生活ほど自然なものはない。夏でも同じことです。

○　黒田鵬心

都會生活者が採り容れ得べき自然は一見甚だ狹少のやうではあるが、考へてみると決してさうでない。日本橋のやうな所に住んでゐても、日、月。星、風、雨などには直接親しむ事が出來る。自然を山川にのみ限るのは謂れない事である。日の出、日沒、月夜、星夜、夕立、涼風等は美しくも又快い大自然の一部ではないか。猶都會生活者が自然生活味を採り容れるモットーの一つは自然的の生活をなす事である。フロックコートを着て四角張つてゐては自然生活味はない、夏なら中形の浴衣でソファーの上にでも横になれば自然生活味が油然として湧くものである。

○　若宮卯之助

夏に於ける自然生活の第一要件は裸體に候。其の次は水に候。裸體で居る事と、裸體で水を使ふ事との、二大條件を充實するに大膽でありさへすれば、夏は人間の樂天地に候。

○　吉井勇

小生はかへりて都會の中に於て、洗練されたる自然生活味を見出すものに候。屋上庭園の類は偖置き、緣日などを散歩してはからずも槖駝師の露肆に逢着する時、往々深山幽谷を想はしむるが如き奇木を發見すること有之候。何時なりしか忘れたれど、赤城の躑躅を賣るものありしが、この時はその感一層深くして、夏猶寒さを覺え候ひき。

○　谷崎精二

子供の時分神田で或る川沿ひの家に住んで居ましたが、川に面した庭の垣根へ夏になつて朝顏を植付けたら毎日百幾つと云ふ程澤山花が開いて、それは〱眼がさめる程美しかつた事を覺えます。都會に居て夏を涼しく送らうと云ふにはせめて庭でも手入れをして涼風を導き入れるより外仕樣がありますまい。但し僕一個の忘暑法としては此の頃晝過ぎに必ず一時間程晝寢

をやります。眼が覺める頃には暑さも稍や薄らぎ、頭の勞れもなほつて好い氣持になります。晝寢の味だけは都會でも田舍でも全く同じです。

○　　鵜崎鷺城

都會生活と云ふも自然生活と云ふも、超物質的に看れば別段變つた事は無之、要は心地の問題卽氣の置方一つ也。熱中冷あり、冷中熱あり、山村水鄕に行くのみが夏の愉快味を領得すと爲すは淺し。假令人間に遊び、紅塵を踏み、毀譽の聲を聽き、是非の言を聞くとも松風は吹き谿水は流るゝ也。酷熱の時も我れは大に活動す可し、大に汗を流すべし、大に書を讀む可し、大に談論す可し。暑熱に心を置けば暑熱に心を取らるる也。夏の暑さも亦た自然味の一なりと覺れば暑熱に打勝つ也。心頭を冷にすれば火も亦た涼しとあり。淸風溪聲何れの處にか無からん、明月蘆花何の地にか無からん。

心地上無風濤
隨在皆靑山綠水

少くも以上は小生の忘暑納涼の工夫に御座候。

○　　鹿子木員信

「魂の根柢の深さ、その一切の街路を通り盡くして、汝は、遂にその境を究むる能はず」（ヘラクライトス）と。――自然のうち最も深祕にして偉大、悠遠にして複雜多樣を極むるは、實に人間の自然、魂の自然である。かくして最も深く自然を覗かんと欲する者は、宜しく魂の自然に沈潜すべきである。而して此の深祕なる魂の自然を表はすもの、實に藝術に外ならぬ。かくして外的自然に放浪する能はざるの人は、偉いなる藝術例へばゴエテ、トルストイ、ドストエウスキー等の描く、深祕なる魂の自然に參すべきである。

○　　和辻哲郎

小生唯今は涼しき松林中に暮し居り、お訪ねの件にお答へするには少し氣がさし申候。しかし涼しい田舍にゐても、時々、銀座通や淺草あたりの夏の夜の散歩を、もつと〳〵涼しいものに思ひ出で候。

小生の忘暑法は、何か面白いものに熱中すること、

だけに御座候。

○　小杉天外

庭の樹木に鋏を入れて我が思ふ枝ぶりに作らんとする事、草花に肥料を施し、夕暮の水を忘れず、色濃き花の咲けかしと、ふくらむ蕾をたのしむ事など、何人にも容易く自然に接觸し得る都會の生活と存じ候。

○　笹川臨風

避暑と云ふことをしたことのない自分の生活を土臺にして、ざつとかくの通り。我田引水も水の戀しい夏のことですから、まんざら縁のないことでもありますまい。

朝起朝湯晝寢夕に一風呂浴びる。

庭に打水して石燈籠に灯を入れる、岐阜提灯に點火するもよし、緣側に花蓙若くは莞莚を席いて晩酌、せいご、黑鯛、鮪の洗ひ、水貝、瑠璃色したる茄子の新漬、酒は日本酒ときめる。夜は家族打連れて緣日でもそゞろあるき、軒端に蟲籠を吊して蟲の音を聞くも可、夜深けて飼へる河鹿の聲を枕に近く聞くも可。

○　本間久雄

拜復

別にこれといふ腹案もありませんが、私は都會にも都會相應の夏の味ひがあらうかと思ひます。涼を山水に避けて、夏を樂しんでゐるのは俺ばかりだといふ顔をする人などの知らない別な味ひがあらうかと思ひます。例へば銀座あたりの夜の散步にしても、そこには何ともいへぬ趣きの深い味があります。昔しの浮世繪畫家はよくすみだ川の夕涼みを畫いてゐますが、すべてあゝいふ風に都會生活を美化するつもりで生活すれば、都會の夏にもそれ相應の味ひが生じて來るかと思ひます。

○　柴田勝衛

目まぐるしい、息づまるやうな戰ひに疲れて居る都會生活者には、讀書の趣味、書畫の鑑賞、花卉の愛玩、散策の快樂と云つたやうな事も、相應に味はひはあるでせうが、それにも增して切實なる情操を惹起さすものは、一日の勞働を十分に了へた後、愛情と感謝の念

を以て、簡粗な食卓を圍む時の心持です、此の心持の解らぬ人は、恐らく何んな方法を採らうと、暑さを忘れる事は出來ますまい。

○　齋藤與里

……眞夏の期節に於て、凉を山水に趁ひ、暑を田園に避くる能はざる都會生活者の忘暑納涼の工夫……は知りません。强いて書けばそれは不自然味になる樣な氣がします。

○　宮崎八百吉

御尋問之儀別に妙案も無之候得者、唯々晩凉を趁ひて樹木多く花卉馨れる附近の公園を訪ひつゝ一日の清福を領し居候、先は貴答略如斯御座候

○　秋田雨雀

この間ある人の話に、今年は避暑客のために東京驛の一等列車を全部連結しても足りないといふことでした。その一等旅客の多くはこの頃噂さの高い所謂『成金』といふものださうです。そして見るとこゝ二ケ月位ゐはそんないやな人類の顏も見ないで私達は靜かな心持で夜の散歩が出來ます。そんなことを考へるだけでも凉しいやうな氣がしますね。

○　五十嵐力

私は家族四五人、趣味を同じうして、人手を借らずに土相手の自然生活を營む場合に、理想的ともいふべき土地の面積は五百坪だと考へて居ります。そして百坪は家の方に、百坪は黑い庭に、百坪は花庭に、百坪は野菜畑に、そして殘つた百坪は果樹園に割りあてたいと思つて居ります。是れ丈の土地があれば、暑さを忘れるどころか、むしろ暑さを歡び迎へて樂しく夏を過すことが出來ませう。

たとひ庭が狹くとも、盆栽草花を樂しまば、愉快に夏が過せると思ひます。

盆栽草花も面倒とならば、庭の隅に一個二個の水盤を備へてなみ〳〵と淸水を湛へ、庭には打水して苔を生やし、苔の間に生ひ出でる雜草の中、面白さうなのを殘して、名も知らぬ花を咲かせる。それで十分に夏の自然が樂しめるではありますまいか。利休は櫟の木

だけで風雅な庭を造つたといふことですが、私は水と苔と雜草の陶汰と、それで、結構夏の風流が出來ると思つて居ります。

○　長谷川時雨

○私は町に育つて只今は田舍に住んでおりますから、何とかよい御返事が出來さうなものですが、あんまり考へますと「朝早く起きよ」なぞといふ平凡なお答になつてしまいます。

○中以下の町の者はかなり自然に暮してゐると思ひます。あの人達は家の内をまゝ四角に取かたづけて簾一枚で往來を仕切つて住つてゐます。大路も田園の田圃道と違ひはいたしません。さうしたはしぢかで、輕い浴衣がけで家中が晩餐をとつてゐます。露路うらなどでは兩側の家から涼臺を渡して靑天井の下に共同の寢臺を作つてゐます。

○田舍の人は朝起です。けれど東京のものも夏はまけてゐません。田舍の夕暮は自然の樂園ですが、夜は灯とり蟲や蚊が多いので良夜を樂しむものはありません。都會人は夕暮は忙しいが夜こそ夏の慰めの第一でありませう。そして幸に蚊もすくない。私は思ひます。一家の者が心をあはせて午後一時から四時過迄日盛りを寢て夜の時間に代へ、夜は二時三時迄起きてゐて、其内の幾時間かを明日の午前の下調べなり下ごしらなりに費やしたら却て炎熱の中でうだつてするよりはよくはありますまいか、そして少時間眠り早朝に起て其日の午前中家業をハゲム事です。

○　溝口禎次郎

暑中は可成早起きの習慣を求め常に心身の安靜を持するを第一とし且何事か適當の目的を定め日課的にこれに從事せば必ず忘暑の好結果を生ずべし小生は毎夏僅に收得する公暇を最も自分の嗜好する水墨畫（彩色畫は不適當）の練習に利用せるが其爲にや酷暑別段の苦慮も無之憶に自家修養の一法として同時に特別の獲物をのこして後日の樂みとも相成候故これを無上の忘暑術といたし居候。

○　田村俊子

私のやうな平生坐臥を放縱にしてゐるものには、斯うしたお問ひ合はせには返事にまごつきます。先づ盆栽植木などをいぢる事は涼を取る上に好い方法でせうか。鉢のアスパラガスに水を吹くと其の水點の雫が何時までもきら／＼と眞珠のやうに保たれてゐて美しい。こんなものを眺めたり、或は釣しのぶから水を滴らせながら晩餐の一酌を取るのは考へて見ても涼しからうと思ひます。高山植物の盆栽などは殊に夏向の趣味かと思ひます。その外盆景を作つたり箱庭を拵えたりするのも涼を取る時間としておもしろいでせう。

○　中川忠順

拜復御尋の趣拜承近來人事益々デリケートに流れ社交的儀禮いよ／＼繁多を加へお互にいやが上煩い思を重ぬる事と相成候が暑熱之候には精々御免を蒙り無頓着に願ひ嗜める書物などをながめ敷島を輪に吹く位が我等の味ひ得る自然生活の關の山に御座候右御返事まで草々敬具

○　廣津和郎

小生はやつぱり晝寢黨です。一番暑い日盛りに二時間ぐらゐ晝寢するのが最良の忘暑法だと思つてゐます。そしてこれが又頗る自然に適つてゐるものだと思ひます。それから夕方から町　散歩するのが、やつぱりいゝと思ひます。餘り平凡のやうですが、此の外には別に名案も浮んで來ません。――小生は近頃海岸に住んでゐますが、海岸なんて云つても、此の鎌倉などは東京と少しも變りがない程暑いのです。

○　戸川明三

餘ほど悟つた人でゝもなければ到底出來ない相談だらうと思ひます。箱庭、盆景などから盆栽繪畫などを弄ぶのは俗塵の中にありながら自然を樂しみたいといふ本能から起つた事でせうが、そんな事で滿足が出來ませうか、疑はしいものです、只一つ學問でもあれば自然に關した書物を讀むのは自然に接すると同じ感を起させるだらうかと思ひます。

○　鈴木三重吉

硝子鉢の金魚と鉢植又は投挿しの草花位のもの早朝

まだ寢靜まつてゐる町筋を歩くのも一種の自然味がある。

〇　　　　　　　　　　　　　　窪　田　空　穗

小生には夏は一年中最も心の落ちつく時に候。暑さを脱るゝは暑さを忘るゝにありと存じ、心をしづむる事を第一に致し候。それには讀みたき本にて、やゝ面倒なりと思ふ本を選びて讀む事、草花を植ゑて自身にて世話を致す事などに候。草花は僅かに限り、丈夫なるものを選び候。

〇　　　　　　　　　　　　　　内ヶ崎作三郎

都市はいかに發達するも、依然として大自然を背景とせざるをえない。蒼天と大氣と日光とは都市を包圍することと田園と異らない。現實の塵の一日終れば澄み渡る夕空に星と月との神秘境が開かれる。雷雨沛然として注ぐ時庭前數坪の地も水郷の趣きを呈す、赤裸々として雨粒の的となれば文覺上人の苦行を偲ばざるにあらず、都市といふ文字に拘はるゝ勿れ、要するに大自然の一部のみ。

〇　　　　　　　　　　　　　　鎌　倉　生

都會生活を送りながら、此の眞夏の暑さを如何に忘るゝべきか、と急に考へ出して見ても小生には餘り名案が浮んで來ません。今小生は都會に住んでゐないために、何だか自分に直接關係のない問題のやうな氣がしてゐるからなのでせう。併し夏の海岸の暑さに比べれば、東京の夏はそんなに凌ぎ難いものではないと思ひます。避暑地なんて云つても、小生のゐる鎌倉などは、ちつとも涼しくはありません。却つて東京の山の手などよりも暑い位です。――併し、何處に住んでゐても、やつぱり書齋が一番の忘涼だと思ひます。

（最後の此の一文、寄稿者の氏名記載なき爲め假りに鎌倉生といたしおき候（編者しるす））

都會生活者の採り容れ得べき自然生活味について

拜啓、時下益々御清榮奉賀候。扨「中央公論」臨時增刊「自然生活號」に於て

『都會生活者の採り容れ得べき自然生活味』

と題し。右に對する諸名家の回答を誌上に掲載致したき計畫に有之候へば、返信はがきに御記載し得る程度に於て、御高見御洩らし被下候はゞ幸甚の至りに存じ奉り候。右は人間が最も自然の懐を戀ひ慕ふ眞夏の期節に於て、涼を山水に趁ひ、暑を田園に避くる能はざる都會生活者の爲めに、些かにても忘暑納涼の工夫を說示いたしたき趣意に出でたるものに候へば御多忙中御迷惑ながら是非〳〵御高見御寄稿の程伏して祈上候。頓首。

尙同號は七月十五日發行に候へば御返書は七月八日までに屆き候樣御願仕り度候。

七月四日　　東京本鄕區西片町　中央公論社

右の如き意味を以て都下五六十名の名士の御回答を求め候處前掲の如き大多數の御寄稿を賜はり、誌上の光彩を發揚するを得しは編者の深く感謝する所に御座候。尙〆切後五六の御寄稿者ありしも發行期日及び頁數等の關係より掲載する能はざりしは甚だ遺憾の至りに存じ候。右謹んで御禮旁々御詫まで敬具

（編者しるす）

▽八月號小說豫告△

罪惡に戰きて（長篇小說）……小川未明

短篇小說……小山內薰

短篇小說……德田秋聲

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

安價生活法の姉妹編

醫學博士 額田豊先生講評

獨乙アドルフ・ユスト原著

寒川鼠骨先生譯

四六判布装 金八十五錢 送料八錢

(最新刊)

天然生活法

▼實行の簡易
▼效果の的確
▼天然の良藥
▼自然の滋養
▼世人の採る
▼に任せ用ふ
▼るに委す

安價生活法を著して一世を驚倒せしめたる博士は、今又本書を推薦せらる

天然生活とは文明病の弊害を脱ぎ捨てゝ赤裸々に歸るの生活にして、一面現代の醫術と相背馳するかの如くして又合理的なる方法也。

原著者は世人の天然を無視し其生活の人爲的に傾きたる決果、相率て生活難、疾病、失望、牢獄、自殺に走りつゝあるを恐怖し、憤慨し、自ら天然的の生活を實踐躬行して大悟する處あり、即ち伯林の科學萬能界に立ちて『天然に歸れ』の大獅子吼をなすや、直ちに英文に飜譯せられ全歐洲は勿論米國に到る迄非常の歡迎を受け此主義を奉ずるもの益々多く特に戰亂の殃禍を目撃するもの相爭て著者の前に禮拜するに到れり、現代文明に中毒し身心共に毀傷し懊惱呻吟せるものは、速かに本書に就て天與の幸福と靜寧とを享受し給ふべし。

大隈百廿五歲侯序
遠山醫學博士序
松尾陸軍軍醫正纂

比較研究 **七大健康法**

特價金七十錢 送料金八錢

(中付の一)

東京日本橋區北鞘町 振替東京一三七五番

大阪屋號

電話本局 三七三四 三七二八 七九▲▼

(支店) 大連 旅順 鐵嶺 京城 釜山

信用なき店舗又は卑猥なる賣品の廣告掲載は總て謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■夏の好讀み物■

高濱虚子著
道　小說集

作者齡すでに四十を過ぎて、その人間味の圓熟は此の渾然たる藝術品を成せり。これ眞に「おとな」の讀む可き小說也。作者自ら曰く「これ等は皆作らうと思つて作つたものではない。書かねばならぬやうな心持ちがして書いたものである」と。

木綿表紙張り絹
定價金八拾五錢
—送料八錢—

吉井勇著
祇園双紙

漲るが如き祇園情緒に、讀者の憧憬を深からしむ可き此作者獨壇の詩境を看よ。『祇園双紙』及び『浪華風流』は歌の集。『俗と雛妓』は哀れなる歌物語にして、別に文を以て京阪の名妓を描き、歌を以てこれを補ひたる長編『京阪名妓傳』あり。

竹久夢二裝畫
定價金六拾五錢
—送料六錢—

縮刷獨步叢書（第三）
獨步書簡

獨步が明治二十二年より四十一年病院内の絕筆に終る幾十百通の書簡を收めて、藝術、戀愛、人生に關する彼の苦鬪史を端的に語らしむ。今、縮刷刊行に際し、更に赤裸の獨步を示し得可き某々氏の秘藏にかゝるもの十數通を加へたり。

布製天金美本
定價金五拾五錢
—送料六錢—

東京牛込矢來中の丸　振替（東京）一七四二
新潮社
電話番町八〇九番
電話番町八九九番

（中付の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

テオドール フオルベル著 第五高等學校教授 文學士 佐久間政一譯補

造形美術講話

最新刊

◎四六版三百頁 定價金壹圓貳拾錢 小包送料◎
◎上製函入頗美裝 内地八錢◎

本書は繪畫、彫刻、建築の三領域に亘り、其本質を闡明にし其構造の法則を述べ、且其生活の條件を詳説し、藝術に對する眞の理解と觀照の方法を、最も親切に敎へたるもの、難解な哲學的考察や、冗漫な史的叙述を避け、眞に之等藝術の眞髓に突入し、遺憾なく其内腑を公開し、約五十の、代表的藝術の挿繪により親切叮嚀に説明せり。思ふに讀書は本書の一讀によりて、容易に批評眼を養ひ且藝術の堂に入るを得べし。原著者は斯界に有名の人、譯文頗る趣味に富む。

文學士 大西克禮著（新刊）

美學原論

（定價貳圓四拾錢 送料内地十二錢）

心理學的美學の根本を説き、リツプス、クローチエ、コーエン等諸家の學説を紹介批評し新らしき美學の方向を指示す、邦語にて書かれたる唯一の美學參考書

ウオルター・ペーター原著 文學士 田部重治譯

新刊

全一生活

◎定價金七十錢 送料八錢◎

全一に生きることはゲーテの生活の理想であつて、又實に現代人士の理想であるゲーテの感化が最も深かつたペーターの人生に對する理想は遺憾なく本書に盡されて居る

松本文學博士 永井醫學博士序 文學士 齋藤茂三郎著

再版

優生學

（人類の遺傳と社會の進化）

理想の配偶を選ぶべき方法、優良なる子孫を得べき學理と實際、遺傳が社會に及ぼす影響、等が詳しくわかる。
（定價金一圓廿錢 送料八錢）

發兌 東京市外西大久保二五八 不老閣書房 振替東京二七〇二二

（巾付の三）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



田舎に歸り住んでから

（此の書を東京にある小川未明君に寄す）

相馬御風

——兄

君と別れてから、もうかれこれ一年半になる。その間に僕はつい一度も君に宛てゝ長い手紙を書かなかつた。是非一度はそれを書かなければならぬやうな氣が絶えずしてゐながら、今日までつい其の機會がなかつた。しかし、今日こそ思ひ切り長い手紙を書いて、別離後一年半の間つもりつもつて來た話のせめて一端なりと、君にまで書き送らうと思ひ立つた。

實は、僕は十日程前からたちの惡い流行性寒冒に侵されて床に就いて居る。そして熱がひどく高かつた初めの三四日間は、肉體の苦しさの爲めに殆んど全く頭の働きが惑亂されて居たのであるが、おひ／＼熱が低くなり、からだの苦しさも薄らぐにつれて、此の頃の僕にすら稀な靜かな、しんみりとした氣持が得られるやうになり、君やN—君やH—君やT—君などの事が今更自分にも不思議なほどしみ／＼と思ひなつかしまれるやうになつた。僕が今君に宛てゝ此長い手紙を書かうと思ひ立つたのも、主としてさうした心持の抑へがたさからだ。

此の土地に生れて育つた君は、此の頃——梅雨期——

ーの此の土地の陰欝さのどんなものであるかは、今なほあざやかに記憶してゐることゝ思ふが、まつたくそれは堪へ切れないほどの陰欝さだ。わけても海——全く波と云ふものゝなくなつた鉛色の海の眺めは、陰欝と云ふ程度を通り越して、死の感じにまでも達してゐる。絶えず波の音を聴き慣れてゐる者には、全く波の音の聞えないと云ふことは、むしろ一種の凄味を感じさせるものだ。夜なかにふと眼のさめた時などは、それが一層痛切に感じられる。さうした瞬間に、思ひがけなく時鳥のあの鋭い叫びを聴いたり、水雞のあの情味のある啼き聲を聴いたりすると、却てその爲めに寂寥が深められて行くやうに感じられる。僕は此の數日、わけてもかうしたさびしい夜を味はひつゞけてゐる。しかし、かうした寂寥の底に深く身をも心をも沈めてゐる時こそ、此の頃の僕には最も力強く自分の生きてゐることを感じられる時だ。「淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは淋しさをあるじなるべし」かう芭蕉は云つてゐるけれども、その「淋しさなくばうからまし」と云ふ古人の詠嘆のうちには芭蕉の云つたやうな淋しさをあるじとし、淋しさにつかへると云ふやうな消極的な心境よりも、むしろ淋しさによつて引きしめられ、淋しさによつて力づけられて行く、積極的な生の自覺のよろこびが閃きを見せては居ないだらうか。少なくとも、此の頃の僕自身にとりての寂寥の味は、さうであるやうにしか思はれない。人と相對してゐる時、又は人なかに立ち交つてゐる時には、どちらかと云へば放散し勝である生命の自覺が、空虚を感じ勝である心が、寂寥のどん底に於てむしろしつかりと握まれ勝であるのは、全く不思議な事實である。僕が本當に心の奥ふかく君をおもひ、君を懐しむのも、かうした寂寥の底に沈んだ瞬間に於てだ。そして僕が今君にこのような長い手紙を書く機會を得たのも、此の頃の僕の病氣が僕に與へてくれた此の淋しさのおかげだと思ふ。

先日の君からの葉書によると、君は此頃又轉居したと云ふことだ。今度は君としてはかなり久しぶりの轉

居のやうに思ふが、それにしても君は東京に住んで居た間の僕に比べると、殆んど極端と云つても好いほど轉居を好む人であつた。その反對に僕はまた殆んど極端とも云つて好いほど、轉居が嫌ひな人間であつた。

僕は一旦こゝを自分の住居ときめると、餘程な事情でも生じない限り、他へ移轉すると云ふ氣にはならない。他人の家を借りて居るのではあるが、どうも僕にはさうたやすく移轉する氣にはなれない。一草一木に對してすら妙に一種い愛着が感じられて、容易に去りがたい情が付きまとふ。僕に比べると、君は思ひ切りがよい。君はいやだとなると一日もぐず〱して居ないで、ずん〱移轉する。僕は又少しくらゐ氣に合はないところがあつても、一方の愛着の心からそれを抑へる場合が多いが、君はそれと反對に多少良いと思ふところがあつても、一方の嫌厭の情の爲めにそれを打ち消してしまふ。「そこは君と僕とは正反對と云つてもい程だね」いつだつたか、そんな事を云つて君と笑ひ合つた事があつたが、僕はとう〱さうした心持が極度に達して、今ではかうして自分の生れ故郷で草木のやうに動きのない生活を營むやうになり、君は相變らず積極的に都會生活をぐん〱押し進めて行つてゐる。つまり君は強い人、僕は弱い男なのだ。時には僕は自分のかうした性向をひどく因循な意氣地のないものゝやうに思ふこともあるが、何と思つて見てもどうも此の性向は欺いたり、改めたりすることが出來ない。

つひ此の間も僕がこちらへ來てからこの方一番親しくして居た或る學校の校長が、突然轉勤を命じられて此の土地を去ることになつた時も、その人に別れることの悲しみと共に、さう云つた風な轉々と住む所を變へて歩く人々の生活に對して、他人のことながら一種の悲しみを感じないでは居られなかつた。一體この人に對してばかりでなく、僕はこちらへ來てから他にも一二の親しい人とかうした別れ方で別れもしたし、又多くのさうした種類の人々のあまりに目まぐろしく來往する有様をも目撃したりして來た結果、一層痛切にさう云ふ生活に對する悲しみを感ずるやうになつたの

だ。それで僕は此の間此の土地を去つた其の學校の校長の送別會の席に列なつた際にも、さう云つた風の生活を送つて居る人達のさう云つた生活についての考へを訊いて見た。

「そりやまつたく時々は自分ながら不安でたまらなくなることもありますよ。併しそんな不安にかまけて居た日には食つて行くことが出來ないのですから、まあ仕方なしに「人生は旅行なり」と云つたやうな腹をきめて行きあたりばつたりにやつて行きますのさ。それにしても、矢張まだ充分に諦めがつかないものと見えて、せめて自分の子供にだけは將來さう云ふ生活はさせたくないもんだと云ふやうな事をつく〴〵考へたりして居ますよ」から一人が答へた。

「いや、子供の將來の生活もさうですが、私は又子供の現在が可哀さうでもあり、不安心でもありしてなりませんよ。殊に私とこの長男なぞは、小學校の四年の課程を終へるまでに學校を五つも轉じました。これではとても滿足な敎育なんか受けられるものではありませんね。敎育もさうですが、そんな風に幼ない頃から絕えず轉々して歩いてゐる爲めに、土地に對する親しみとか、人に對する親しみなんてものはまるで感じてゐません。よし時々そんな感情を抱いて見ましたところで、そんなものは自分の生活狀態からすれば邪魔ものなんですから、結局は無理にもそんなものを持たない方が好いことになり、それが習慣となつて今ではもうまるでさう云ふやうな感情がなくなつてしまつてゐます。無論鄕土を愛するなんて心は解りつこはありませんね」から他の一人が話を引き取つた。

話題が話題だけに、一時はこんな風で多數の同じ種類の人達の間に、盛に話の花が咲いた。多數のうちには、もうさうした事に思ひ惱むと云つた風な境地を遙か向ふへ通り越して、今では變つた所へ轉じて行くのを常に待つてゐると云つた風なところまで心持の行つてゐる人もあつた。前に引いた芭蕉のエキスプレッションを借りて云へば、いつの間にか轉住そのものをあるじとしてゐる人さへあるのであつた。もとは自分の

した話題ではあるが、僕はしまひにはさうした會話の裡に居ることがもうとても堪へられないやうな、不安と悲しみとを感じないでは居られなかつた。

「まつたくかうした人との親しみも、土地との親しみも感じないやうな人が多くなつて行つて、しまひには世の中はどうなるのだらうか。少なくともさうした世の中の變化につれて、俺みたいな引込み思案なものの運命はどうなるのだらうか」僕は正直のところさうした自分を本位とした不安までも感じないでは居られなかつたのだ。絶えず凡ての意味での自分の居る處に對する不安に驅られたり、他人との交渉接觸に對する不安や危惧の念に苦しまされたりしながら、まるで針金のやうに張りつめた神經の痛さを感じつゝ營まなければならぬやうな生活に堪へ得られなくなつて、貧しくても淋しくても不便でも單調でもいゝ、たゞぢつと一つところに落ちついた、定住的な生活が送りたさに、かうして自分の生れた邊土へ逃げ戻つて來た現在の僕にとりて、地方生活の半面に於てます／＼激しくなりつゝあるかうした現象のあることを知つたことは、あまりにもいたましい經驗であつた。こんな事を云つたらば、君は「そんな事は初めから解り切つたことではないか、今更何もそんな事に驚くにはあたらない」と思ふかも知れないが、現在の僕はさうした初めから解り切つて居たことに對してさへ、新たな驚きを感じないでは居られぬほど、幼稚な僕なのだ。それにしても前に云つたやうに常に自分の居る所でも何でも變りさへすればより善くなるやうに思つてゐるやうな人や、又は役人でも敎師でも何でも變りさへすればより善くなるやうに思つてゐる地方のある一部の人々や――かうした所謂「外的變化をあるじとした」やうな人々が、だん／＼多くなつて行く今の世の中は、そしてその將來の運命はどうなるのだらうか。それを思ふと、あまりにも外的變化の煩はしさをいとはしく感ずるやうになつた僕みづからの如き人間は、何と云ふみじめな時代錯誤者なのであらう。けれども既に外的動搖乃至變化をあるじとすることに得堪へなくなつた者にとりて

は、矢張何とかしてその底に、若くばそれを離れて、若くばそれを超越して、何等か恒久なよりどころを得なくてはならぬのではなからうか。

何はともあれ、こちらへ來てからの僕にとりては、矢張此の土地の自然が一番親しいものになつて居る。君の郷里附近とこゝとはさう大した隔りはないのだが自然の趣は非常に異なつて居る。此の邊には君の郷里附近に見るやうな平野は見られない。海からすぐに山になつて居る。平地と云つては、海際から山際までの七八町の間にしか過ぎない。その代り山は、南と東と西の三方に見られる。就中南一帶はつい手近の小山つゞきから、信濃境の北日本アルプスの連山に至るまで層々相重なつて、それ〳〵特色のある輪廓を空高く描いて居る。それら多くの高い山々の姿を眺めることは此の土地に生活する僕にとりての最も大きな歡びなのだ。わけても一年のうち半ば眞白に雪を被つて居る信濃境一帶の連山の崇高なそして端嚴な眺めは、一種の宗教的情緒をさへ與へるやうな氣がする。無論山の形の如何にもよるのだらうけれども、總じて高い山に對してゐると、いつとはなしに一種の奥深い安定感が與へられるやうに思ふ。あらゆる不安動搖が打ち消されて、何とも云ひやうのない泰らかさと根强さとが、そこから感じられるやうに思ふ。君も多分讀んだおぼえがあると思ふが、ツルゲーネフの書いたものゝ中に、次のやうな一節がある。

『地平線を取り卷いてゐる廣大な松林の眺め、かの森の眺めは海の眺めを憶ひ起させる。而もその二者の喚び起すところの氣持は、同じだ。切初このかたそのまゝになつて居る力が、その擴がりと威嚴とのかぎりを見せて觀る人の眼前に橫はつてゐる。不滅の森の奥から、不死なる水の底から、同じ聲が來る—「われ汝とかゝはることなし」と。——自然は人間に向つて曰ふ「汝は汝の力の限りを奮ひ起して死より脫れんとすとも、われに絕對の支配權あり」と。けれども森は海よりも一層陰鬱で一層單調である。それ

は常に同様であり、殆んど全く無聲である。海は威嚇したり愛撫したりする。それはあらゆる色彩を呈して戯れ、あらゆる聲を以て語る。それは空を反映する。そこからも矢張永遠の呼吸が來るけれども、それは恰も吾々からはさほど遠くないやうな永遠である。……暗い、變化のない松林は重々しい沈默を守つて居たり、鈍い唸りに充たされて居たりする。――そしてそれを眺めることは、人の心の奥ふかく一層深い、一層堪へがたい自己の空虚感を與へるものである。此の彼の上に同情なく見据ゑられた永遠のアイシスの冷たい凝視に堪へることは、昨日生れて明日死ぬ運命を擔つた刹那の生物たる人間には、殆んどよくし得ないことである。啻に愛すべき青春の望みと夢とが彼のうちにあつて卑しめられ、打ち消され、元行の冷たい吹息の奥に封じこめられるばかりでなく、彼のたましひの全體が彼のうちにあつて力を失ひ悶絶するのである。彼は彼の同類の最後のものが此の地球の表面から消え去つてしまつて、それらの小枝の上には何一つ打ちふるふものもないのを感ずる。彼は彼の孤獨と、彼の弱小と、彼の無常とを感ずる。そして人知れぬ狼狽を以て、人生のうるさい心配と勞苦とのうちへ歸つて來る。彼にとりては彼自ら創造した其の世界の方が一層氣樂なのである。そこで彼は打ちくつろぐ、そこで彼はなほいまだ彼みづからの意義と彼みづからの力とを信じようとするのである。』

これは僕が嘗てひどく心を動かされた一節で、これを以て當時の自分の所謂「うるさい心配と勞苦」との生活の意義と價値とを明らかにしてくれる好個の説明であるやうにさへ思つたことがある忘れ難い文章である。けれども今では僕はもうさうした考によつて自然を遠ざかり、自然から離れて、自分みづからのうるさい心配や勞苦の生活にのみ沒頭すべく、あまりに多く自然の恩恵を感じ知ることが出來た。ツルゲーネフが觀たやうな地平線を取り卷いた大森林の眺めなどは此の土地では觀られぬけれども、遠くの空高く聳え立つた山

脈の眺めや、北方の空の下に涯も見えずひろがつた海の眺めは、日毎に接することが出來る。而もそれら大自然の偉大な、又は崇高な眺めから受ける印象は、今日の僕にはむしろ最も貴いたましいの養ひであるやうに思はれる。朝早く起き出て、薔薇色をした東南の空に高く、且くつきりと描き出された眞白な山の輪廓を眺めやつたりする時の崇嚴な、しかも安泰な氣持は、今の僕には何ものから與へられるよりも貴い、そしてなくてはならぬたましひの養ひであるやうな氣がする。「かうした山の姿を見て暮すことさへ出來れば！」と云ふやうな歡びと滿足とを我とわが身に感じることさへ度々ある。僕がこんな事を云つたらば「それはお前はまださう大した苦しみがないからの事だ、ひどい苦しみに攻められて見ろ、山の眺めなんかいくら良くたつてそれが何になるものか」かう云ふ人があるかも知れないが、併しそれはあまりに自然と人間とを引き離しすぎた考だ。なるほど山は直接手を下して人間の不幸な狀態を改めてもくれないし、又直接心の苦しみを癒やしてもくれない。けれども絶えずさうした自然の美によつてたましひを養はれて居ることは、いつとなしに其の人のたましひに根强い落ちつきと、泰らかさとを與へはしないだらうか。君も知つてゐることゝ思ふが、此の地方の人々には、此の世の勞苦に對する根强い忍從性と、運命に對する不思議なほどゆつたりとした一種の悟りに近い諦らめとが、さはやかな特色をなして居る。これは彼等が無智未開の故ばかりでもなく、又此の地方に弘布してゐる淨土宗の永い間の感化ばかりでもなくして、むしろ何よりも彼等の生活の環境をなして居る自然そのものゝ風趣によつて、いつとなしに彼等のたましひに與へられた養ひによるのではないだらうか。自然は最も古くして、而も常に最も新らしいたましひの糧を與へる。僕等は到底此の自然の養ひを外にしては、眞の健康を得ることが出來ないではなからうか。「われ汝とかゝはることなし」と云ふ自然の聲を聞くことは、人間にとりてはいたましさの極なのではなからうか。

「自然の生命の潮流は吾々の周圍にまた吾々の中に流れ、その潮流が與へる力に依つて、自然に順應した行動に吾々を誘ふ。さう云ふ自然の中に一時の間抱かれて居ながら、吾々は何故過去の枯骨の裡を模索したり、生ける時代を色の褪めた衣裳棚から拔け出した假裝會としたりしなければならないのであらうか。」からエマスンは云つて居る。「森林の中にあつて吾々は理性と信仰とに還る。此處では生涯私の身に起ることは何事でも——如何なる恥辱でも、如何なる災禍でも（私に兩眼の存する限りは）自然が復舊して吳れないものは何一つ無いやうに感ぜられる。索莫たる地上に立つて——私の頭を快き空氣に洗つて無限の空間の中に擡げるとき——卑しい自尊心は悉く消滅する。私は一個の透明な眼球となる。私は無である。然かも私は一切のものを見る。普遍的實在の流は私の體内を循環する。」からも彼は云つてゐる。これほどの心境はまだ／＼僕には味はれないけれども、少なくとも現在の自分にとりて最もうれしい「リクリエーテイヴ、カルチユア」を與へてくれるものは、何よりも此の土地の自然であるやうに思ふ。そして僕は、永い間の僕自身の不自然な都會生活で、精神的にも肉體的にも、みじめな不健康狀態に陷つた自分が、かうした自然から與へられる養ひによつて、おひ／＼にもとの健康を取りもどし、やがては自然によつて導かれる單純な、しかしはれやかな悅ばしい生活を營み得るやうになりたいものだと、そのことを今切に望んでゐる。

つい十日程前に、君も御存じのK——君からこんな事を書いた手紙を貰つた。

『僕はいま混沌としてゐるとより外、申上げようもありません。しかし、絶えず、一種の鄕愁に囚はれてゐます。どこまでも都會生活に適しない、一個の野人が、鈍牛の如き老軀を提げて、重い憂欝に沈みながら、夜のまちなどをぶら／＼と歩いてゐる姿を想像なすつてください。

鄕愁といつたところで、僕には歸臥する故鄕もありません。ある事はあるのですが、そこには僕がいま

巣をくつてゐる東京の片隅よりも、もつとはげしい、もつとみじめな、生活の悶爭が渦卷いてゐるのです。僕の故郷の田園は、物質的にも精神的にも今盛に破壞されてゐるのです。僕は、よく郷里にかへります。少なくとも三月に一度位づゝ歸ります。やはり、兩親の事やなにかゞ氣になりもし、なつかしくなりもするからです。しかし、たゞ、憂悶の更にしきりなるを覺えてかへつて來る丈けです。彼等は土を離れて都會をおもつてゐます。僕は矢張土を慕うてゐるのではないでせうか。彼等も而して僕も、ゆくところはありません。所謂適歸するところを知らずです。僕は、しかし、郷里の自然は舊によつて美しいのを見る。僕の郷里はかなり自然美に富んだところです。僕は昔釣りをした河原などによく行きます。今頃ですと鮎が釣れます。山影水光蒼茫として夕の色に沈むとき、灘聲夕ぐれを包んで、そこに、空漠とした無念無想境を開くでせう、僕はこの恍惚を味ふために故郷にかへるのかも知れません。しかし、自然の何ぞ美しきや、而して人間の何ぞみじめなるやと云ふ感じがします。自然にも行けず、人間にも行けず、この意味に於ても、僕は適歸するところを知らずです。」

何と云ふ悲しい、いたましい告白だらう――僕はK――君の此等の言葉を讀んだ時にしみ〴〵とさう思つた。けれども、すぐにその次の瞬間にかう思ひなほした。

「K――君はまだ年が若くて、しかも肉體も精神も僕などよりはずつと丈夫だ、かうした悲しみを抱きながらもそれに堪へ、それに打ち勝つて、自分の未來を切り拓いて行くだけの力が充分にある、僕にはそれだけの力が無くなつて居たのだ、だからさう云つたやうな事を考へ煩つてゐる餘裕すら無しに、一とたまりもなく逃げ歸つて來たのだ、疵を負うた獸が藪陰へ逃げ込むやうにして苦しい叫びと共に逃げ歸つて來たのだ」と。

K――君は「適歸」と云ふ言葉を二度も繰り返してゐる。だが、まつたくかうして自分の故郷の自然裡へ逃

げ歸つた僕の現在は、その所謂適歸だらうか。僕には今なほさうであるとも、さうでないとも、判斷がつかない。むしろ僕はその所謂「適歸」とか適住とか云つたやうな生活の味はひを、今に於てはじめて求めなければならなくなつたのではなからうか。外團の變化動搖の刺擊に引きずられて、何もかも無茶苦茶になつて動き廻つてゐた苛立たしい過去の生活に堪へられなくなつて、たゞ一圖におちついた、かゝはりのない生活が慕はしくなつた――それが僕のかうした現在ある所以に外ならぬのだ。しかも、故鄕の自然は、不思議なほどの親しみを、久しく迷ひ出て居た此のみじめな一個の人間に與へてくれた。山からも、海からも、僕には「われ汝とかゝはることなし」と云ふ冷やかな聲の代りに、「弱い者よ、われを信ぜよ、われと共にあれ」と云ふやさしい言葉が、いつでも囁かれるやうな氣がする。そして此の自然の囁きは、僕には舊い記憶のやうで、同時に思ひがけない新らしい言葉のやうにも感じられるのだ。人間にとりては――わけても僕などのやうに弱い人間にとりては、永久にこの自然が離るべからざる慈母の懷なのではなからうか。

僕はずつと以前から、君の書く作品中にさま〳〵な姿、さま〳〵な味はひをもつて故鄕の自然が、しげく描き出されてゐるのに對して、いつも深い興味を感じて來た。或る時はそれはやるせない憧れとはてしない夢に誘はれながら生きてゐる無智なかよわい少年の生活の背景として描かれて居た。或る時はそれは自分とは不調和な都會生活の暴威に虐げられ、飢ゑと絕望との暗黑などん底に陷つた、無智な、しかし正直な善良な田舍出の男の、悲しい追憶の幻想として描かれて居た。又或る時は、それは人生の苦慘を想ふに惱み疲れた詩人の暗い心に、たとへば五月雨雲のところ〳〵に時ありて點出せられる蒼空のそれの如く、時ならずほのめき出た光りと色とのそれとして描き出されて居た。僕は君の作品中に時ありて描き出されたかう云つた風な故鄕の自然の いみじき姿や味はひ に接する度に、君の描くそれらの人々の生活にとりてそれが持つてる

意味の奈邊にあるか、作者たる君はそれをどう云ふ風に考へて居るか、そのことを僕はいつも想はないでは居られなかつた。此の事については以前にも幾度となく君と話し合つたのであるが、今日でもなほそのことを想ふことが度々である。人間生活の醜惡と苦惨とに對して常に激しい惱みと憤りと悲しみとを感じつゝ、しかも常に强く且きよく生きようとして鬪ひつゝある純潔なたましひの所有者たる君にとりて、僕が今日々夜々に接してゐる此の鄕土の自然は、今なほ折々の君のたましひの休息鄕、時ありての快い幻想の世界となつて居るであらうか。いづれにしても此の頃の僕には常に此の鄕土の自然を通してのみやすらかに君をおもふことが出來るのである。そしてそれを外にして君をおもふことはそれはあまりにたよりない事なのだ。

さて、話は少し他へ轉じるが、昨年の暮近くに此の地方一帶が、恐ろしい海嘯に襲はれた當時のことは君も新聞や何かでほゞ知られたことゝ思ふ。僕も生れて初めてあんな猛烈な海嘯に遭つたので、一時はひどく愕かされた。交通機關や通信機關は一時全く杜絶したので、他の地方の様子は知れなかつたが、僕のところだけでも隨分すさまじい光景だつた。浪は町中へまでもぶち込んだ。川と云ふ川は全部出口が砂で埋つたので、山寄りの方からは洪水が攻めかけて來た。避難の途は全くふさがれてしまつた。電燈は二晩と云ふもの全くつかなくなり、ランプも火災の危險があるので點すことが出來ず、眞暗な家の中で辛うじてつけられた蠟燭の明りの周圍へ家族一同が頭を集め、身をちゞめて、二晩と云ふもの全たく眠らずに夜を明かした。絶え間ない暴風雪に、家は今にもくつがへされるかとばかりに、物凄い響を立てゝ搖れつゞけた。子供や女や老人は外へ出ようにも出られなかつたが、若い男共はそれでも急設の防波工事の爲めや、浪と洪水との模樣を見る爲めに、戸外へ出て働いたり、見廻つたりした。事態は刻々に危險に瀕して行つた。しかし、策の施しやうはなかつた。そんな風で初めのうちは皆うろたえ廻つたり、叫んだりして、たゞ〳〵恐怖の擒とな

つて居たのであるが、いつとなしに人々の心には一種の沈んだ靜かな諦めが出て來た。泣きわめいて居た子供等さへも、晝はすさまじい響きと動搖との中で遊び戯れ、夜は物悽い暗黑とすさまじい動搖との底に眠るやうになつた。かうして荒れ狂つた世界のうちに、一種の嚴肅な靜けさが、いつとなしに感じられるやうになつた。此の靜けさは戸外へ出て浪と嵐とに對して働いてゐる者にも、いつとなしに感じられるやうになつた。人々はあわてなくなつた。あせらなくなつた。怖れなくなつた。愕かなくなつた。その代り抵抗しがたい疲れが刻々に人々の肉體を襲ひつゝあつた。

けれども、幸ひにして、暴風と共に浪は三日目の晩方からいくらかづゝ靜かになつて行つた。暫らくは全く危險について語り合はなかつた人々の口から、御互の危險についての話が取り交はされるやうになつた。そしてそれと同時に早く荒れの過ぎ去ることを希ふ意味の言葉も取りかはされるやうになつた。

此の間の人々の生活狀態や、僕自身の經驗や見聞やについては、話せばいろ〳〵興味ある事柄があるが、これはいつか又他の機會に話すことにする。たゞ此の度はさう云ふ風な動亂の底から、いつとなしに感じられ出した一種の嚴肅な靜けさのあつたことを、僕の思ひがけなかつた最近の一つの經驗として、君からも聞いてもらひたくて此の事を書く氣になつたのだ。

しかし、それにつけても、僕はさうした怖ろしい事に遭遇しながらも、なほ且此の土地を郷土として居る者の殆んど凡てが、少しも此の郷土そのものに對する恐怖の念を心に殘さないで、矢張前と同じく此の郷土を信頼して生活してゐる事實を、ひどく意味深い事に思ふのだ。云ふまでもなく、世間一般の風潮の如く、此の地方でも他の地方(就中大都會)へ出て行く者の數が近來甚だ少なくないのであるが、しかしそれらのうち幾人か眞に此の郷土の自然そのものを嫌つてゐるものがあらう。此の事實は、更に又意味深い事であると思ふ。

僕は前に此の地方の人々には一體に現世の勞苦に對

する根强い忍從性と、運命に對する不思議なほどゆつたりした一種の悟りに近い辛棒强さが著しい特性を示してゐると云ふ事を云つたが、それはとりわけ此の邊の漁師の間にきはやかに見られるやうだ。彼等の間からも無論生れた土地を離れて行く若者などが年々多少はあるけれども、併し概して云へば彼等は此の荒海を相手とした生活を持續して行くことに愛着を感じてゐるやうに見える。昨年の暮の海嘯の後をうけて今年の冬季ぐらゐ海荒れの日のつゞいた年は此の數十年一度もなかつたと云はれたのであるが、さうした永い不漁期に遭遇しても、彼等は一向に海に對して愛想をつかしたやうな色を見せなかつた。「時にはこんな事があるものだ」と云ふやうな態度で、うろたえずに凪ぎを待つだけの辛棒心を彼等の多くは持つて居る。それは必ずしもあがいても、もがいても仕方がないと云ふだけの引きずられ方ではないやうである。僕は彼等のさうした心持に、少なからず僕などの學ぶべきものがあるやうに思ふのだ。

つひ先月の中頃にも、僕などには想像もつかない程の珍らしい出來事が、僕のところのすぐ近くの漁師のうちにあつた。それは沖へ刺網漁に出て居て俄か荒れに遇つて難船した三人の漁師についての出來事だ。その時の荒れはまつたく今時の季節には思ひがけないひどい荒れであつた。そしてその荒れに遇つた船は、此の近海で十數艘もあつたが、いづれも吹き流されて遠くの濱へ行つて打ち上げられた。一時はそんな風で悉く沖で難破してしまつたものと思はれて居たが、翌朝になつて次ぎ〳〵に無事に打ち上げられた知らせが來た。けれども、そのうちで唯一艘だけは、その翌々日になつてもつひに行衞が知れなかつた。近隣の者は無論それは沖で難破して、一人殘らず死んでしまつたものと思つた。それで荒れのあつた日から四日目になつて、村中の船がそれ〳〵手別けをして、沖へ船と死體とを探しに出た。ところが、丁度その折他村の漁船が偶然にも、轉覆したまゝになつてゐる一艘の漁船を發見して、それに近付いて行くことによつて、その船に

繩で縛りつけられて居る死に瀕した三人の漁師のあるのを見つけた。そして辛うじてその三人の命を救ひ得たのであつた。後で聞くと、その三人がいよ〳〵駄目と覺悟をきめ、死んでもせめて死體だけは引き上げて貰ひたいと云ふ一念から、各自の體を船にいはへつけて浪のまに〳〵漂ひ出した時から、六十時間餘たつて居たのであつた。しかも彼等はなほ未だ意識を失つては居なかつた。何と云ふ不思議な出來事だらう。僕はその出來事をその時搜索に出た漁師の一人から聞いたのだが、その時その男が繰り返し云つた「一つは運もよかつただが、それにしてもようまああれだけ持ちこたへられたもんだ」と云ふ感嘆の言葉のうちに、無量の味はひのあることを思はないでは居られなかつた。まつたくよく持ちこたへたものだ、それほどの對抗力が人間にあり得ようとは全く思ひもよらぬことだ、よくそれだけに慌てもせずあせりもせず絶望もしないで持ちこたへられたものだ――かうした感嘆の言葉を、僕は幾度心のうちで繰り返したかわからない。かうした事を見聞するにつけても、僕は今更ながら弱い自分をみづから鞭うたずには居られないのだ。

此の難船のはなしをした序手に、僕は何をやめても君に聞いてほしい、それこそ貴い今一つの話がある。これも矢張先日の暴風浪の時に起つた事件で、場所はあの有名な親不知附近でだ。あの時の俄か荒れは六月十二日の夕方から起つたのであるが、翌十三日の朝九時頃になつて、僕のところから西へ三里ほど離れた親不知東海岸へ乘り上げた五艘の漁船があつた。いづれも越中宮崎村の漁船であつたが、幸ひ乘手は皆生命に別條はなかつた。併し彼等は皆暫くは起つ事が出來ないほどに疲れもし餓えもして居た。ところが彼等が救助されてから間もなく、又しても一艘の小形漁船がその濱へ漂流して來た。しかし、今度のは船が小さいのと、乘手が僅かに二人しかないのと、しかもその二人が既に極度の疲勞に達してゐるらしいのとの爲めに、とても彼等自身の力で岸近くまで乘上げる事が不可能であるやうに見えた。それでその附近の村民は大擧してそ

の哀れな漂流船一艘を助けようと、集り騒いだのだけれども、荒れ狂ふ大浪に氣を呑まれてたゞ徒らに騒ぎ廻るだけで、誰一人波をくゞつて救助に向ふべく奮起し得るものがなかつた。しかも漂流しつゝある二人の漁師の命は、刻々に危險に瀕するばかりであつた。折も折、突如として彼等の間へ割り込んで來て、その役目を自分にまかせてくれろと申し出た二人の男があつた。見るとそれはつひ數刻前に救ひ上げられた越中の漁師であつた。その二人は年はまだ若く、身體も頗る强健さうに見えたのであるが、何と云つてもつひ今の今まで綿の如く疲れて臥て居た人達であつた。人々は一時は喜びはしたものゝ、併しひどく危ぶまないでは居られなかつた。しかし二人は云つた、「俺達はどうせもう死ぬものと覺悟して居た命を、かうして助けてもらつたのだから、死んだつもりで飛び込んで見よう、漁師は相見互だ、こんな様子を默つて見て居てはすまん」「そして二人は突嗟の間に救助船に乗り込んで、すさまじい怒濤の中へ分け入つた。しかし、不幸にもその瞬間かの漂流船は重なり來つた大浪に呑まれて、見る間に姿を沒してしまひ、折角奮ひ起つた二人の苦しい努力も、つひに水泡に歸してしまつた。

二人の努力は、かくしてつひにその甲斐がなかつた。しかし、彼等の示した美しい同情と勇氣とは、人々の胸に深い感銘を與へた。「これこそ眞の同情だ、これこそ眞の犠牲的行爲だ、そして其の勇氣と力とは何と云ふ美しさだらう。今にも死にさうにまで疲れ切つて居た體のどこから、それほどの勇氣と力とが出たのだらう。不思議な勇氣だ、不思議な力だ。多數の疲れない丈夫な人達の中からつひに湧き起らないで、綿のやうに疲れて居た人達の中から突如として湧き起つた其の勇氣と力とは何と云ふ崇厳な表現だらう。」僕はその話を聞いた時に、幾度となくさうした感嘆の聲を繰り返さないでは居られなかつた。そして、更にさうした感激がやゝ永くつゞいた後で僕は「その二人の漁師だとて恐らく平常は一向つまらない人達なのであらう、或はむしろ善くない方の人達でないとも限らない、し

かも機會に遭遇すれば突如として彼等の内部から、さうした崇嚴な同情と勇氣と力とが湧き上つて來る、それは何某と云ふ固有名詞を持つた特定の人物のものであるよりも、むしろ人間そのもの丶奥底にひそんで居る尊さなのだらう、いづれにしても驚くべき事實だ、崇嚴な事實だ」こんな事をも思つた。

けれども、かう云つたやうな事實があるからと云つて、僕は漁師等の生活狀態そのものが善良なだけ、純潔なだけだなど丶云ふのでは決してない。むしろ彼等は單純であるだけそれだけ、美しさと同時に醜さをも露骨に示し勝ちである。だが僕は今さうした事について語つてゐるのではない。むしろ今の場合僕自身としては彼等の如き單純に生きる人達の生活の上に時あつて表現される善良なもの、美しいもの丶感化を、能ふかぎり僕自身のたましひに受け容れ得ることをより多く希求して居るのだ。他人の救ひよりも、むしろ自分みづからの救ひを求めて居る今の僕にとりては、これより外に途がないのだと云ふことを察してもらひたい。

漁師ばかりでなく、百姓の生活にも接觸する機會が僕には少なくない。しかし、どちらかと云へば海岸だけに、漁師の方との親しみが深い。それに、僕の家も以前漁業仲間であつたので、僕なども幼い頃から漁師の間に生活して來た爲めに、今日でも矢張僕には漁師の方が交り易いのだ。隨て何かにつけて、彼等の生活からより多くの事を考へさせられたり、教へられたりするのだ。

併しさま〴〵な點から考へて僕には漁師の仕事よりは百姓の仕事の方が好ましいやうに思はれる。海を相手とするよりは、土を相手として居る方が、より多く僕には樂しい事のやうに思はれる。君も東京に住みながらも、以前からかなり土いぢりが好きらしいが、僕も隨分と土いぢりが好きな方だ。こちらへ歸つた當座は僕は釣りにかなり興味を持つたけれど、おひ〳〵土いぢりの方が面白くなつて、此の頃では晝間に居る時と食事の時の外は、大概土いぢりをやつて居る。僕の

父などは毎日朝から晩まで土を離れないと云つても好いくらゐだが、僕も能ふかぎり多くの時間を父と共に畑へ出るやうにして居る。菜、大根、キャベツ、馬鈴薯、芋、瓜類、豆類等、何でもつくる。草花つくりも一方にはやつて見る。いづれも面白い。たゞ見て樂しむだけならば草花の方が好いが、しかし複雜な興味はむしろ蔬菜類の方にあるやうだ。つまるところは花を育てゝ樂しむのも、菜や大根の發育して行くのを樂しむのも同じやうなものだ。いかに百姓仕事が生活の爲めの仕事だとは云へ、實利一方でさう熱心にやつて行けるものではないと思ふ。尤もこれは百姓仕事に限つたことでもなからうけれど、しかしどちらかと云へば漁師の仕事や百姓の仕事にはさうした興味が多分に助けとなつて居るやうだ。その爲めかどうかわからないが、漁師や百姓の子供等の大半は家の仕事を面白がつて、一年のうちの或る季間は、殆んど全く他の遊戯など忘れたやうに、家業の手傳ひをして居る。親から命じられるから仕方なしにするのでなくて、むしろ遊戯のつもりで彼等はそれをやつて居る。都會の子供達の間にすら土いぢりや水いぢりを好むものが多いのだから、田舍の子供のさうなるのもあたり前なことなのであらう。お蔭で東京に居た時は何か知ら玩具がなくては面白く遊ばなかつた僕の子供も、此の頃では殆んどもう玩具など見向かなくなつて、一日の時間の大半を日向で、しかも土か水かを相手にして遊んで居るやうになつた。たま〳〵玩具を持つても、それは多く店頭に賣つてあるものでなくて、自然の材料を用ひて自分達で工夫したものだ。だが、かうした自分の子供の變化を、僕は近頃での何よりも嬉しい事に思つて居る。

それにつけても僕は都會の眞中で、常に不思議な一種の寂しさを感じて居るやうな顏をして、多くの場合獨ぼつちで居られた、君の亡くなられたお子さんをおもひ出さずには居られない。それはあのお子さんだけには君のあの郷里の山の上の家の住居をさせてあげたかつたやうな氣がするからだ。それと云ふのも結局孤獨を愛する者には、自然が唯一の安住境だと思ふからだ。

君はあのＭ――と云ふ、君の郷里からあまり遠くない、あのＳ――河に沿うた村から、東京のＷ――大學へ來て居た、大酒飲みの歌などよく作つた、善良だつたがだらしのなかつた青年を、まだ記憶して居るだらう。しかし、彼が中途で學校を退いて、間もなく東京を去つてから以後の事は、おそらくまだ知らないだらう。僕も昨年の春こちらへ歸つて、彼の父なる人に遇つて、彼のその後の生活についての話を聞くまでは、全くその事について夢にも思はなかつたのだ。どうだらう、彼は今殆んど僕などの理想に近いほどに純潔な勤勉な、そして愉快な農業生活に沒頭してゐるのだ。彼は今自分の村からかなり離れた山の中へまで唯一人で出かけて行つて驚くべく大仕掛けな蜜蜂の飼養に從事して居る。しかも、蜜蜂飼養家としては、彼は此の地方での模範的な成功者を以て一部の人々から認められてゐるほどだ。彼はあれだけ好きだつた酒を殆んど全くやめた。煙草もやめれば、無論遊蕩などもやめた。彼はまだ結婚はしないが、しかもさうした生活裡に純潔な自分を守つて居る。彼の父なる人は「私は息子一人を拾つたやうに思ひます、それどころか、牛に曳かれて善光寺參りのたとへのやうに、此頃ではどちらかと云へば私の方が萬事息子の指導を受けて居るやうなわけです」とこんな事まで云つて居た。そしてそのついでに彼は蜜蜂を飼ふと云ふ事は實利的で趣味的だと同時に、彼等の規律正しい勤勉な生活によつて毎日得難い教訓を受けて居るやうなものだと云ふ事も話した。僕はその時土産にと云つて貰つたＭ――養蜂研究所と云ふ名稱入りのペーパを貼つた瓶詰の蜂蜜を、一種不思議な贈り物のやうな思ひをして眺めずには居られなかつた。その後僕はＭ――その人にも、一度遇ふ機會を得た。しかし、その時は他にも人が多數居合はせた爲めに、しみ〴〵彼の話を聽くことは出來なかつたけれども、僅かしか取交はさなかつた斷片的な彼との會話と、彼の凡ての擧動やら容姿やらとを通して、彼の内部に新たに開けた世界の如何に尊敬すべきもので

あるかをほゞ察することを得た。要するに彼は極めて平凡になつた。人ちがひでないかと思はれるほど、彼は平凡化した。しかし、その平凡化の奥に開けて來た彼の内的世界は如何にもほがらかな、深い光に充ちたものであるらしい。M――のかうした變化を觀たことも、僕には近頃での最も嬉しい、驚くべきことの一つであつた。僕は近いうちに是非M――の養蜂所を訪ねて、しみ〳〵その後の彼の生活についての彼自身の感想を聽かうと思つてゐる。今かうして君にまでM――のこのやうな變化について書きながらも僕は抑へがたい歡びをおぼえるのだ。

此のM――とは境遇も異つてゐるし、教育程度もかなりに差はあるが、しかし僕がこちらへ來てから矢張一種尊敬の念を以て交つてゐる他の一人の男がある。彼は此の町の一部ではあるが、市街からはずつと離れた山寄りの小部落にある古い自分の家に住んで、町の公共事業の一寸した役目を仕事としながら、半ば農作によつて妻と四人の子供と共に生活してゐる。彼は年はもう四十になりかけてゐる。彼の受けた學校教育と云つては、僅に以前の小學教育の五六年に過ぎなかつたのであるが、いつ誰から教育されたとなく、彼には何事につけても相當の理解力を持ち、文學などに關してもかなりな鑑賞眼を持つてゐる。しかし僕の何よりも彼について敬服する點は、さうした物質的に豐かでない自分の生活に對して、彼がみづから持してゐる態度だ。貪りと云ふことの嫌ひな、併し決して物質的に多くを求めない彼の態度だ。彼は常に何人に對しても氣持の好い落ち着きを以て接する。自分の身の上に起つた不幸についても、彼はむしろ快いユーモアを加味した意味の深い一篇の文學的作品について語るが如く、悲しんで傷らず、即かずして離れない靜かな氣分で語る。名利の心がなく、よし時に起つてもそれを打ち消すだけの力を自分のうちに持つてゐるところから、彼は他人を羨やんだり、妬んだり、憎んだり、亦は爭つたりするやうな事が、殆んどない。彼はいつか僕に語つた事がある、「自分などは他人の爲めに盡すなどゝ云

ふ事は自分の力がゆるさぬのだから、せめて人知れず自分の力で叶ふやうな小さな善い事を努めてやつて行きたいと思つてゐる、例へば自分の歩いてゐる道に偶々ガラスの破片とか躓きさうな石ころなどがあるのに出遇ふと、自分だけがそれを避けて通るやうな事はしないで、それを他人の足に觸れないやうな場所へ取り除けて置く、つまりさう云つたやうな世間の人達の些細な事としてあまり顧みないやうな小さな仕事を出來るだけ見逃がさずにやつて行く、せめてそれぐらゐな事で自分の道徳心を滿足させることにしてゐる、總じて自分の考としては惡い事は無論だが、善い事にも無理をしないと云ふことが自分のやうに微力なものには大切な事だと思つてゐる」と。

　彼も亦一時は都會熱にうかされて、かなりに華やかな物質的幸福を夢みて東京へ飛び出したことがあつたのだ。しかも、もと／＼さう云つた性向を多少は持つて居た彼のことだから、東京へ出てからも相當に金を得る道もついたらしいのであるが、彼は間もなく決然として生れた村へ逃げ歸つた。彼は矢張僕に話した、「自分はとても東京には居られなかつたのだ、生活が困難だつたからではなくて、むしろ金廻りが少しづゝよくなつて行くに隨つて自分の心の中から頭を擡げ出した烈しい物慾と、外部に見え出した底の知れない快樂の誘惑が、妙に怖ろしくなつたからだ、元來自分にはどうかすると快樂に溺れてとんだ事をしかねないやうな傾向があることに多少氣づいて居たのであるが、その時ぐらゐ痛切にそれを感じたことはないし、又その時ぐらゐそれが怖ろしくなつたことはない」と。今の彼は決して人に優れた勤儉家でもなければ、活動家でもなければ、道徳家でもなければ、又手腕家でもない。誰一人彼をえらい人だと云ふ者はない。併し彼を知つてゐる人は、誰彼の別なく彼を正直な人だ、善い人だ、じみな人だ、情のこまやかな人だ、氣持の好い人だと云つてゐる。それで居て、彼は未だ曾てさう云ふ意味で世間から「模範的」と云ふ形容詞などをつけられたこともない。僕も矢張そんな事を彼に對して思つたこと

はない。併し僕には彼に接し、彼と居り、彼と話をすることが樂しいと云ふ以上に、一種のカルチュアのやうな氣がしてゐる。そして僕はこちらへ來たおかげでかうした一人の友人――都會地にはあり得ようとは思はれぬ此の善い意味での土臭い友人を得たことを大きな歡びの一つとしてゐる。

　此の男のことを話したついでに、僕は一つ彼についてのエピソードを君に話さう。彼は元來普通以上に强健な體質を持つてゐるのだが、どうしたわけか今年の冬かなり重い熱病に冒された。そして一時は彼の友人間で死ぬのではなからうかと云ふやうな事まで噂された。そんなことで僕は是非一度彼のところへ見舞ひに行きたいと思つて居たが、何しろ稀な大雪の冬であつた上に、彼の村への道がかなり遠くもあり、足場がよくないので、雪降りが止むまでは行き得ないで居た。が、いつまでたつても天候が恢復しさうにもないので、思ひ切つて或る日雪の晴間を見て出かけた。さすがに彼の村は、町とはちがつて積つたまゝの雪に埋もれて居た。別ても一番山寄りの彼の家の如きは、まるで穴の底にあるやうになつて居た。彼の家の中は眞暗であつた。子供が多勢眞暗な家の中で騷ぎ廻つて居た。リユーマチスで跛になつた彼の細君は、頭に手拭を卷きつけて、大きな爐に火を焚いて何か煮て居た。僕がその爐ばたまで行くと、その茶の間の左寄りの煤けた板戸を明けて、驚くほど瘦せ衰へた彼が步けないで匍ひ出して來た。そしていろ／＼とその後の樣子を物語つて、此の二三日餘程よくなつたと云ふことを話した。彼は初めのうちは、久しぶりで逢つた僕に對して涙ぐんで居たやうであつた。僕も妙にセンチメンタルになつて、いろ／＼と彼を慰める爲めの言葉を云つた。が話がおひ／＼と進むにつれて、彼の氣持も次第に常態に復して行つたらしかつた。彼は爐ばたに敷いた毛布の上に腹匐ひになりながら茶を出してくれたりした。さうした間に彼はいつもの靜かな、しかしどこかユーモラスな態度で、こんな話をした。

「私も今度は何だか死ぬやうな氣がしてゐました。幾

晩も、眠られなかつた爲めに、くだらない事をいろ〳〵と考へましたが、どうも矢張「死ぬと云ふ事が一番痛切に考へられましたよ。しかし、そんな事はどうせ私の考へたことですから、お話するのも馬鹿々々しいやうな事ばかりですが、たゞ一つさう云ふ間に、ふいと憶ひ出した妙な事がありました。かなり古い事で、平常憶ひ出すこともなしに忘れ果てゝ居たことなんですが、妙な工合にそれが記憶の上に浮んで來たんです。

それは何でも私がまだ二十代の頃のことでした。此の村のあのK――と云ふ地主のところのお爺さんで、殆んどもう生佛と云はれるまで此の邊の人達に尊敬されて居た信心家の老人がありました。お堂を建てるとか、方々のお寺へ寄進をするとか、廻國巡禮をするとか、それは〳〵此の邊では稀らしいほとけごとの好きな人でした。その老人が、ある日突然家族の者を爐ばたへ呼び集めて、こんな事を云ひました。「俺は此の頃佛のお告げで、明日が往生日だと云ふ事が知れた。俺は明日中に往生する。どうか親類中へその事を知らせて、皆で俺の臨終を見てくれ。」これが他の人が云つたのならば、誰だつて其の人を發狂したのだと思ふのでせうが、人が人だけに家族の者は皆それを信じて、命じられるまゝに親類中へ知らせを出し、その晩から親類一同がその家に伽をすることにしたのです。そこで當人はと云ふともう確かに自分でもその覺悟で最後の寢床を敷かせて、その上に靜かに寢て合掌して居ました。けれども滑稽なことには、その日が來ても老人の身體には何の異狀も起らなかつたのです。それでもと云ふので、親類一同は三日間さうして居ましたが、とうとうやり切れなくなつて、一人去り二人去りして、四日目にはもう誰一人寄りつかなくなりました。だがそれでも老人は少しもきまり惡くも、恥かしくも思はず、まだ何かの因縁が此の世につながつて居たのだと云ふ風に、平氣で再び起き出して、以前のやうに働いて、食つて、寢て居ました。

何でも、それから三四年もたつてからだと思ひます。その頃はもう誰一人その老人にそんな事のあつた事など思ひ出すものがありませんでした。季節は何でも秋の終り頃でした。私は或る晴れた氣持のいゝ日に、家の前の庭で稻こきをやつて居ました。その時かの老人はその家の前の石垣の上の柿の木へ上つて、赤く熟した柿の實をもいで居ました。私はそれを眺めて、「あのお爺さんはなか〳〵えらい、あの年になつてもまだあんな危ない仕事をして居る、さすがにあれだけの身代をこしらへ上げた人だけある。」そんな事を思つたりして居ました。しかし、自分にも仕事があるので、おきにもうその老人の事などは忘れて、稻こきを一生懸命にやつて居ました。何でも私が柿の木の上に居られる老人の姿に目をとめてから、およそ半時もたつた時分と思ひますが、突然ドサッと云ふ何か物の倒れたやうな音がしたと思ふと、引き續いて「誰か來てくれんかえ」と叫ぶ女の聲が二聲三聲聞こえました。私はその刹那「そら、K――さんの老人が木から落ちたぞ」と、直覺的にさう思ひました。そしていきなり驅け出して行きました。その時はもう近所の人が七八人集つて居ました。果して老人が木から落ちたのでした。しかも、石垣の下まで落ちたのですから、一とたまりもなく往生してしまひました。別にこれと云ふ大きな怪我もありませんでしたが、老人はもう死んで居ました。腰に下げた籠の中にうんとこさともぎ入れたらしい仰山な柿があたり一面に散らばつて、美しい色を見せて居ました。

私が病氣中にふいと憶ひ出したと云ふのは此の事でしたが、不思議にも此の事を憶ひ出すと同時に、ひどく亂れて居た心が急にすうと凪いで行くやうな氣がしました。それで、その後「死ぬ」と云ふ事を考へたり、それについてのいろ〳〵と氣がゝりな事が心に浮んだりし出しますと、いつでもその記憶を繰り返しました。くだらん事が、時には不思議な氣休めの種になるものですね。」

彼はかう云つて病氣なんか忘れたやうに、氣持よく笑つた。一寸面白い話ではないか。

それにしても、僕は初め此の手紙を書き出す時には隨分といろ／＼な事を君に話したいやうな氣がして居たのだが、いつの間にか妙に又くだらない雜談になつてしまつた。何だか自分ながらおかしいやうな氣がしてならない。「いつの間にか手紙に書くことまでが田舍の爐ばた話じみて來た」と云ふやうな事までが我れながら考へられたりする。爐ばた話と云へば、此の附近の名物にたて茶と云ふものがある。それは、此の附近の者の特殊な風俗をなしてゐる一種妙な茶の飲み方だ。此の附近の家では、大概の家に晩茶を煮出す爲めのすばらしく大きな茶釜を爐にかけてある。それから他の地方では見ることの出來ない大きな厚い土燒きの茶飲み茶碗（丁度と粗造な茶の湯の薄茶茶碗の形をした）と、これも粗造な竹の茶筌とを、その茶釜と共に備へて居る。そして何かと云ふと多勢集つて、その大きな茶釜で煮出した晩茶をその茶碗の中へ汲み入れて、その粗末な茶筌で泡立てゝは飲み廻す、一種のティーパーティーをやる。多くはその家々の祖先の命日に、晋々に自分の家の爐ばたへ近所の人達を呼べるだけ多勢呼び集めてそれをやるのだ。これは此の附近のずつと昔から持ちつゞけて來た風俗だが、此の近年ちよい／＼此の風俗をやめろ／＼と主張する見識家が官吏や教育家や町の先覺者などの間にあるやうだ。そしてその理由とするところは、一つは衞生上から多勢集つて一つの茶碗で飲み廻すことの有害な事、一つはさうした事に無暗と多くの時間を費すことが不經濟であり、且人心をだらけさすことだと云ふにあるらしい。けれども、僕などから見ると、これくらゐ人々の親和の爲め慰安の爲めに善い風俗は、現代では極めて稀な事のやうに思はれる。そればかりでなく、此の事が懶惰を誘致するよりも、むしろどれくらゐ働くことの助けとなつて居るかわからないとさへ思はれるのだ。茶菓子一つ食ふではなし、且茶そのものからして多くは自家製の

のに過ぎない。これぐらゐのつゝましやかな樂しみがたんとはあるものでない。これだけの樂しみすら彼等の間から奪はねばならぬほど、それほど此の地方の農民も漁民もまだ困窮しては居ない。それどころか、さうした趣のある風俗を持續して行くほどに、此の地方の一般人の間には一種犯しがたい溫かみと、濕ほひとがある。兎に角僕は此の土地の此の風俗を殊の外好いてゐる。そして機會ある每にさうした仲間入りをしては、さうした雜談を聽くことをたのしい事に思つてゐる。僕の手紙に少しはそんな風な爐ばた話じみたところがあつても、それも亦一興としてくれたまへ。

つひ〳〵くだらない事をなが〳〵と書き立てゝ、さぞ君は退屈を感じられたことゝ思ふ。どうぞ其の點はゆるしてください。此の頃は每日々々雨ばかり降つてゐる上に、僕自身又近頃にないひどい病氣に苦められた後なので、好い機會だと思つて書き出しては見たものゝ、やつぱしくだらない事しか書けなかつたのは、自分ながらあきたらない氣がしてならない。いづれそのうち又ゆる〳〵書き送るが、今日はこれでゆるしてください。

東京もやつぱし雨天勝ちの事と思ふ。どうぞ何よりも健康を大切にしてくれたまへ。病氣はまつたくいやだ。僕も早く元氣を恢復して、外へ出て土いぢりがしたい。僕は東京に居た時にT――君のお母さんが、果實であれ瓜であれ豆であれ、自分とこで買つて來て食べたものゝ種は何でも一つ殘らず蓄へて置いて、廣くもない庭しかないにも拘らず、一度はその種を蒔いて見ないでは氣がすまないと云ふ風にやつて居たのを見て、永い間土を相手に生活して來た人にとりて如何に深い親しみが土との間に保たれてゐるものであるかをつく〲感心した事があつたが、さうした土いぢりの味はひが此の頃の僕にも殆んどもうなくてはならないものとなつてしまつたやうな氣がする。そのうちには君のところも何か手作りの畑のものでも送るほどになりたいと思つてゐる。呵々。(梅雨期の越後にて8生)

日本服を謳ふ

楚人冠

一

朝の未明に桑港に着いたことがある。明朝はゴールデンゲートを入ると直ぐ檢疫があるから、いくら早くても、銅鑼の鳴り次第食堂に集つて見れとの通知が、その前晩にあつた。

翌朝五時半に銅鑼が鳴つて、船客がぞろ〳〵と食堂に繰り込んだ。僕等日本人は今日上陸といふので早くから身支度して、見苦しくない一帳羅に着かへて、僕と同じ卓子にゐた原信子女史などは、念入にお化粧までして今日を晴れと盛裝して出かけたものだが、見れば一等船客の八九分を占むる西洋人は、孰も思ひ合はせたやうに寢衣の儘で眠たさうな顏をした者ばかり。それも西洋風の寢衣を着たのは僅に三四人で、その餘は盡く日本服である。黑の七ッ紋か何かで堂々と練り込むがある、白絣の浴衣で寒さうに震へてゐるのがある、何だか番頭でも着さうな唐棧の袷がある、と思へば、若旦那の朝歸りといつたやうに、ぞべら〳〵とお召の裾を引きずつて行くのもある。女はと見れば、是は盡く日本の長襦袢。燃え立つやうな無地の緋縮緬がある、けば〳〵しい裾模樣を縫取にしたのがある、中には又頗る挑發的な赤色の勝つた友禪模樣の奴が出て來る。それがきちんと帯でも結んだことか、細い紐を帯の代りに間に合はせて、大きなお尻をふり〳〵やつて來る所は二目と見られた態ではなかつた。併し大きなお尻こそ、成程見られた態ではなかつたかも知れぬが、斯う紅黄白紫の千種萬樣の色どりを盡して、列んだ所は、時ならぬ花を朝の食堂に咲かせた趣があつて如何にも美しい。その上氣の輕い亞米利加人の多い事

とて、検疫官の來る間の退屈凌ぎに、すつくと立つて紋附を見せびらかす男もあれば、長襦袢の褄を一寸つまんで踊の眞似する女もある。何だ乃公のは思ひ附だらうと、一方で誇り顏に示すがあれば、「アノ子」「サヨナラ」などゝ片言の日本語を使つて、日本の女のやうに内輪に歩いて見せる者も片方にある。その眞似が旨いとては笑ふ、拙いとては又笑ふ。その賑はしさと言つたら正に當航海中隨一の見ものであつた。肝腎正式に着物を着かへて出た僕等日本人は、片隅に少さくなつて、氣まりが惡い位であつた。

議論は此處から出立する。

二

つら〳〵考ふるに、氣まりの惡かつたのは尤もの次第である。原信子が念入にお化粧をして今日を晴と着飾つたりなんかしたのは、そも〳〵餘計の手數の甚しきものであつた。元來日本服なる寢衣の儘でも澤山なのである。今この食堂に集つた連中の、見たところ餘り體裁のよくないのは、お尻の大きさにも由るが、主としては男女とも帶を締めてゐないに由る。若し相當な帶をきちんと結んで居さへすれば、何處へ出しても恥かしくない、立派なものだ。その儘でマーケット、ストリートの大道を横行濶歩したところで、風俗壞亂でもなければ風敎維持でもない。——註解を加へておくが、世の風敎維持を口にする者は、その實風俗を壞亂する者と餘りかはつたことがない。この故に風俗壞亂と風敎維持との間にどれほどの相違もあるものではない。

颯と引つかけて、帶をくる〳〵と卷けば、それで瞬間に一應の禮容が整ふ所に、日本服の妙味がある。下着も下帶もつけずに、單衣の浴衣一枚で何處へでも押し出せる日本は實に幸なるかな。日本へ來た西洋人は皆之を羨ましがつて、盛夏の頃は、皆こそ〳〵と着て歩く。簡にして要を得たとは、正に是である。カーライルのサーター・レザータスの中に——（などゝ利いた風な口をきいて見るが、實は何かの種にならうかとて、この四日ほどの間に初めて讀んだのである。しか

も急いで讀んだから半分以上は分らずに通つて來た。併し確と呑み込めもせぬ書物を前晩に讀んだ儘で、翌日早くも堂々と之を講義する人が世間にいくらもある。格別恥しがるにも當るまい）――そのカーライルの中に、凡そ天下の簡單明瞭な服裝と言つて、コロンビア戰爭に土人の着た軍服に過ぎたるはあるまいとある。何したか言ふと、ブランケットの眞中へ一尺ばかりの裂目を作つて、其處からすつぽりと首を突き出したのである。之で日光も遮れば雨露も凌ぐ。おまけに、餘つた毛布の端を兩腕に卷きつけたので、一廉の彈丸除けにもなつたといふ。併し何が何でも毛布の穴へ首をつゝ込んだ奴では、まさか銀座通りは歩けまい。其處になると日本服はえらい。銀座の散歩どころか、親しい中ならその儘デナー（！）にでも行ける。

三

桑港から歸つて後、次第に獨逸の潛航艇の跋扈が甚しくなつて、僕はます〳〵この感を深うした。新聞紙の傳ふる所に依れば、英佛海峽や愛蘭沖で、時々潛航艇でやらるゝ客船に溺死者を生ずるのは、船室に寢た者が着物を着かへる間がなくてその儘馳け出せぬに由ることが多いとある。前年タイタニックやエムプレッス・オブ・アイルランドのやうな巨船が沈沒した時、婦人客の溺死の多かつたのは、一に着換に手間取つたからだとも聞いてゐる。思ふに、是等の乘客が若し日本服利用の道を心得てゐたならば、大抵は死なずに濟んでゐたかも知れぬ。

戰爭中僕は英國のサヽムプトンから海峽を越えて佛蘭西のハーブルに渡つたことがある。潛航艇が危ないといふので、船は夜半に乘客を載せて翌朝未明に出發することになつて居た。船室は下甲板の今一つ下に在るので、甲板から三つばかり梯子を降りなければならぬ。僕は臥床に入らうとしてこの梯子を降り行く時、若し寢てゐる間に水雷の發射を受けたら、着物を着かへて此の三段の梯子を昇つて行くうちに船は沈んで了ふに相違ないと、つく〴〵心細くなつた。たとひ首尾よく甲板迄昇り得たとしても、洋服の儘では泳ぐこと

も何うすることもならぬ。一旦着たものを又脫ぎすてる間にも三分や四分はかゝる。斯な時にこれが日本であつたならと、僕は俄に里心のついた事を今も尙記えてゐる。

倫敦から歸りに太西洋で十日間大時化を食つた事がある。その時は船室に寢たり甲板に出たりして時を潰したが、出つ入りつの度每に一々着物を着かへる煩はしさといふものはなかつた。それが太平洋にかゝつて、船が日本の天洋丸となると、丸で天地がかはつた。僕は四五日少し船に醉つて、寢衣の儘で船室に引き籠つてゐたが、甲板に出たくなつた時は、件の寢衣の上へ急に羽織袴を引つかけて飛び出す。履物は篦を使ふに及ばず、紐を結ぶに及ばず、草履に足をつきこめば事は足りる。甲板から船室に歸れば、そこらへ羽織袴を脫ぎ棄てゝごろりと橫になる。一々疊まねば洋袴の筋目が立たぬでなし、着る每に刷毛をかけなければ、塵が目立つてつくといふでなし。船內の着衣として日本服は確に理想的のものだと、僕は心から感謝した。

便利は獨り汽船の旅に限らぬ。汽車の中でも、日本服なら坐ることも胡坐を組むことも自在である。殊に寢臺に入る時は、ごろりと其の儘橫になれば、それで濟む。洋服となると、さうは行かぬ。あの窮屈な洋服を狹苦しい、天井の低い寢臺の中で脫ぎ換へる時の苦勞といふは、それこそ一と通りでない。上着と短褐とは格別の苦もないが、洋袴となると、脚を踏み延ばしてそろ〳〵と裙から踏み脫いでゐる所は、丸で下手な毛蟲が殼を脫ぎ損ねた形である。若し夫れ白シャツを脫がうとする時んば、兩脚を伸ばす譯に行かず、之を宜い加減に屈めながら、身を海老の樣に折り曲げて袖の端から脫ぎ捨てやうとあせる樣。見る人がないから宜いやうなものゝ、考へて見ると、首のないおばけがシャツと組打を始めたにも似てゐる。

宿屋に着いた時はといふと、ホテルなら知らぬ事、ぽんと下駄を脫ぎすてゝ、其の儘すつと上れる。上つて坐敷に入れば、寢やうと坐らふと勝手な眞似が出來る。下女が褞袍を持つて來る間をもどかしがる必

要もなければ、風呂に入りたくなつた時、貸浴衣を待つ迄もなく、直ぐ飛んで行ける。鞄の中にカラの掛換、シャツ、ネクタイの用意もいらぬ。旅行は洋服に限るなどゝ人並らしい事を言ふのは、畢竟一本のカラを汚れた儘で三日も四日も間に合せ、一枚の白シャツを一週間も着かへずにゐて、カフのしや／＼くしやになつたのを平氣で着て歩く田舍者の言ふ事だ。

四

明治の何年頃だつたが、無暗に西洋風が尊ばれて、西洋の眞似をせねば、外國人と對等の附き合が出來ぬものゝやうに考へられた時代があつた。今日では相手の外國人の方から日本在來の物が賞め立てられて、そんなことならといふので、大分日本流に後返りの形となつたものがある。日本服の如きも其の一である。

日本で、通常服といへばフロックコート、通常禮服といへば燕尾服と定められて居る。元來フロックコートといふは、重苦しい衣嚢の少い、不便極まる服で、その本家の英國では、疾くの昔こんな窮屈なものは廢つて了つて、今ではホテルの親父か、料理屋の亭主位しか着ない事になつてゐるに、日本では都鄙一般今尙盛に行はれて、夜でも晝でも着て歩く。凡そフロックコート着用の盛なる事日本の如きは稀で、上は大臣大將より下庶民に至るまで、何ぞと言ふと必ずフロックだ。夜の宴會にさへフロックコートで濟して行けるのは、恐らく世界中に餘り類があるまい。ホテルなどの宴會に、フロックか燕尾服か決しかぬる時は、此に一種の不文法があつて、六時の案内ならフロック、七時以後より燕尾服とちやんと定つてある。晝間なら冠婚葬祭の物々しさは言ふに及ばず、着流しで行つても差支のない所でも、身分のある人は必ずフロックで出かける。何でこんなにフロックが好なのか事體譯が分らぬ。中には縞のシャツを着込み、中折帽を被り、赤皮の靴を穿いて、甚しきは白麻の蝶形ネクタイをかけて、濟してゐる先生が隨分ある。誠にはや宜い氣なものと言はざるを得ない。それほど洋服が着たいなら、せめて夜の宴會だけは、トキシードにしては何だらうか。僕は

何故にあの簡便にして、見た所も小意氣なトキシードが今少し日本に行はれぬかを怪しむものである。

燕尾服はといふと、之は制規の通常禮服となつて居るので、大禮服を持たぬ平民共は、儀式といふと夜でも晝でも來て歩く。隨分如何はしい形の奴を如何はしい様子に着做したのを見受けるが、いくら如何はしくても、燕尾服である以上、日本服では出られぬ處へも出られる。燕尾服といへば、靴はパテント・レザーの半靴に限り、靴足袋は黒無地の絹に限り、手袋は白のキッドに限ることをさへ知らぬ者が多い。流石に縞のシャツを着る者はないが、時にはシャツの胸の鈕が失敬してゐる位なのは能く見かける。斯くても尚禮服は禮服である。

日本にちやんとした禮服がありながら何で之が用ひられぬのだらうか、西洋かぶれの時代なら知らぬ事、今日尚田舍へ行くと、日本服では入れぬが、洋服なら背廣でもノーフヲークでも構はぬ處があるに至つては、驚く。平生忠君愛國を口癖にする輩に相伺ふが、我邦傳來の品を輕視して外國品を尊崇することが果して愛國心を深うする所以だらうか、ちいと許り考へて貰ひたい。

僕は倫敦で或る家の晩餐に招かれた時、燕尾服の火熨しが間に合はなかつた爲、日本服で出かけた事がある。主人も合客も非常に喜んで呉れて、立派だといふ、センシブルだといふ、日本の國產だけに絹を惜氣もなく使つた所が羨ましいといふ。はては日本に斯ういふ歴とした禮服があるのに、なぜ日本人は勞働服のやうな洋服を着たがるのだと笑ふ者もあつた。その以來ホテルの晩餐にも、汽船内の晩餐にも、僕は能く日本服で出かけた。さういふ處では燕尾服かトキシードでなければならぬもゝのやうに考へてゐるのは、自ら輕んずるも甚しいものである。今倫敦に居る駒井權之助君などは、年中日本服で押通してゐる。日本でも昔は燕尾服に限つた宴會に、近頃大分日本服又は燕尾服といふやうになつたは、正しく日本の自覺で、一大進歩と言はざるを得ない。

五

婦人の服裝に就ても同じ事が言へる。

前年朝日新聞で初めて世界一周會を催した時、一行の中に三名の婦人があつて、孰れも儀式立つた時は日本服で通したが、到る所「キモノ」「キモノ」とて大評判であつた。英國で新聞王ノースクリツフ卿の別邸で歡迎園遊會を催された時、卿の夫人から前日書面が來て、婦人は是非日本服で來て呉れとの注文であつた。それほど日本の女の服が珍重される。

あのゆつたりとした袂、きちんとした裙まはし、派手やかな大形の裙模様など、見慣れた日本人の目にさへ、女には似つかはしい、優やかにして美しい所がある。ごり〳〵した織物の帶を後で花やかに結んだ所は如何にも他國では見られぬあでやかさである。このあでやかなデザイスでお尻の大きいのを隱さうとした技巧は、コルセツトで胸をしめてスカートを下で擴げた智慧のなさ加減に比べて、全く比べものにならぬ。此の故に西洋の女でさへ帶〳〵と言つて卷きたがる。留にたがる計りでない。西洋の婦人服に近來著しく日本風を加味して來た點は、見免すべからざる事實だ。先づ堅苦しいカラは棄て去つて、美しい襟足をずつと出すやうになつて來た。スカートを下で無暗に開いたのは流行らなくなつて、日本服のやうに、すらりと棒立ちになつて來た。袖口の筒袖は肴屋の女房の鯉口のやうだとでも思つたか、日本の袖のやうに、袖口の幅を廣くしてだらりと下るやうになつて來た。一筋のバンドを腰に卷いて、前で掛金をかけたのでは土藏の錠前が呆れるとて、近頃は巾の廣い帶のやうなものを締めて、後へ結び目を拵へて之を「オビ」と唱へてゐる。日本服に對する思想の趨勢も察しるに足る。

それを肝腎の當の日本人が打ち棄てゝ、脚の短かい、内股に歩く日本人が、不恰好な洋服の着ざまをしたのが、布哇や桑港邊で能く見かけるが、全く一目見て興が覺める。布哇や桑港では周圍の事情で洋服も已むを得まいが、日本の内地で何處に其の必要と妙趣があらう。殊に羅馬邊の若い處から流行り出した、胸も脇は

なローブ・デコルテか何かを、暖室の設備の不完全極まる日本の室内で着て歩くに至つては、衞生上から言つても寒心に堪へない。僕の知つた前某大臣の夫人は「夜會のある毎に必ず風を引きます」と笑つたことがある。

六

是を要するに、洋服は男女とも勞働の服であつて、儀容の服でない。喧嘩用の服であつて、(だから軍服には宜し)和樂の服ではない。地質が毛織の强いものだから、毎日着ても餘り痛まぬのと、手足に袖や裳がまつはらぬから立居に自由なのと、今一つ男の方には、衣嚢が多い爲め、窃に接待烟草を卷き上げて來るのに便利なのと位のものである。

只日本服となると、困る事が二つある。一つはこの衣嚢のない事で、紙入位は懷中にもねぢこむが、萬年筆などは入れ場に困る。併し之も西洋の婦人服に衣嚢のない事を考へ合せば、婦人のやうに小さい信玄袋を持つて歩いても宜い譯である。亞米利加邊の男妾のやうに、用もないステッキを持つて歩くよりは遙に理窟に叶つてゐる。僕は近頃この不便を除かんが爲に小さな衣嚢の四つ五つゝある短褐に襟をつけたのを下に着込むことにしてある。今一つは頭の被り物で、之は禮服の時に殊に困る。まさか日本服にシルクハットでもあるまいし、さりとて中山、高、中折、鳥打孰も西洋臭さを免れぬ。西洋人に言はせるとお高祖頭巾か陣笠が一番似合ふといふ。已むを得ずんば編笠でも被るか。この二つの難點に何等かの解決を加へ得るならば日本服は儀式の時にも休息の時にも用ふべき天下無類の名服となるのである。

終に臨んで、この一篇は或る意味に於ける僕の懺悔なることを白狀しておく。

山水放浪中に逢ひたる自然人の印象

大町桂月

一　大島の導者

案内を知らざる地を探ぐるに、導者を雇はざるは、提燈なくして夜行くが如し。宿屋に滯在する時に按摩を呼べば、便を得ること多し。曾て伊豆の大島に數十日滯在しけるが、殆んど毎日按摩を呼べり。その按摩目見ゆ。年は若し。東京の人にて、活氣あり。文字ありて俳句を作り、尺八を吹く。われこの按摩よりいろいろ大島に關することを聞けり。或時導者として、泉津に行きて一泊す。櫻株、文覺窟などの案内は知り居りしが、海岸傳ひに波浮に行く案内は出來ず。別に導者を雇ふ。年三十五六、體軀魁梧、面魂逞しく、水兵となりたる事ある由にて、氣象荒々しく、祖父は旗本にて、大島の士族は己れ一人なりと氣張れる男なりと聞く。我等に對する態度、甚だ横柄にて、案内者らしからず。下士官の兵卒を率ゐるやう也。折り〱誤つて路を失ひても、濟みませぬといふ顔付はせず。戻れ〱と喚く。われ按摩と相顧みて苦笑す。路なき處をかきわけて行くに、按摩ばらに搔かれて鮮血脚を染む。『痛からむ』と云へば、『風流は痛きものなり』とて笑ふ。日暮れむとして絶壁の下に出づ。その絶壁高く、且つ數町に亘り、海に接して屹立す。越後の親不知とても、このやうには波濤絶壁に迫つては居らず。『通れるか』と問へば、『十二三年前に一度通りたることあり』とて、衣を脱して裸體となり、浪に打たるゝ絶壁にとりすがりて行く。浪腰に及ぶ。戻り來りて、『通れるなり。裸體になれ』と命令的にいふ。その言に從ひ、裸體になりて導者の後より絶壁にとりすがりて過ぐるに、浪は脊中に及べり。十二月の末の事とて、唯裸體にな

りても寒きに、波に打たれてふるへ上る。按摩我に向ひて、「寒からむ」と云ふに、前の按摩の語を思ひ出して、「矢張り風流は寒きものなり」と云へば、按摩大に笑ふ。ふるへながら行くに、また浪の絶壁を打つ處あり。其處を過ぐる時は、浪は我頭の上を越し、首に結び付けたる衣服びしよ濡れになれり。絶壁盡きて、ほつと一息つく。濡れたる衣服を身に纏ひ、疾歩して暖を取れり。この難所を「おたい濱」といふ。「筆岩」といふ孤巖近く海中に屹立す。われ此處を過ぎたるは、在來旅して苦しき日に逢ひたるものゝ一也。苦しと云へば苦しけれど、痛快と云へば痛快也。それも豪膽なる導者ありたればこそと心の中に感謝す。波浮の宿に就きて、共勞を謝し、案内賃たけの酒手を與へ、その上にも招きて酒食を共にす。導者大に喜べるさま也。案内する中は虎のやうに見えしが、今やおとなしきこと猫の如し。

二　居酒屋の若主人

波浮にやどりたる翌朝、按摩と共に海水に盥漱してゆきたるついでに、ぶら／＼散歩す。東京の不忍池の半分ぐらゐなる小さな可愛らしき港にて、漁戸東岸に相連る。その中に思ひがけずも東京風の居酒屋あり。店頭に石油の罐を竈となして、何をか煮るらむ、味噌汁たぎりて、芳香鼻を衝く。入りて矢大臣となり、酒を註文し、「鍋のものを出さずや」と云へば、「我等の食ふ粗品なり。客に出すべきものに非ず」とて肯んぜず。「その代りに」とて、秋刀魚を燒きて出す。主人は二十四五歳にて、その妻は二十歳未滿に見ゆ。按摩主人に向ひ、余を指して、「この方を何職の人とか見る」と問へば、「醫者ならむ」といふ。按摩は白皙秀眉、代診らしき顏付也。われ心に「なる程」とうなづく。「大島にては衣食する能はざる身なり」と云へば、「さらば畫家ならむ」といふ。「遠からざれども中らず」と云へば、「さらば新聞記者ならむ」といふ。益々近寄れり。按摩語を轉じて、「君は雜誌を讀むか」と問へば、「讀む」といふ。「學生を讀むか」と問へば、「讀む」といふ。いと嬉し。「さらば大町桂月の名を知り居るならむ」と云へば、

「知り居れり。大町先生の新學生訓をも愛讀す」といふ。「この方が大町先生なり」と按摩余を指せば、「然るか」とて、大に驚く。その驚き方は信じての驚き方にて、疑へるには非ず。大島の漁市に愛讀者あらむとは思ひかけざりき。嬉しさの餘りに、今一本註文して醉を買へり。

三　三原山の導者

大島の三原山か、三原山の大島か、三原山は日本有數の活火山にて、その外壁は三里、內壁は一里、內壁の底は火を噴く、內壁と外壁との間は横に長くして、砂漠茫々たり。山上に、かゝる偉大なる砂原あるは、日本中他に其比を見ざる所也。われ四度この山に上りぬ。第一回は妻と四歳なる男の子とを伴へり。宿屋の番頭の內地人にして大島の女を妻とせるが兒を脊負ひながら案內す。十五六歳の大島女、荷物を頭に載せて從ふ。その着物の縞柄細かく、內地にては老女の着るもの也。妻之に向ひて、「あまりに地味ならずや」と云へば、「大きな縞のものを着ると笑はれちやあ」といふ。

番頭折り〳〵大島節を謳ふ。宿に還るまでには、兒覺え込みて、

私しや大島御神火育ち胸に烟は絶えやせぬ
ハイノハイ

この時は噴火口には下らざりき。次には按摩に案內せられて噴火口に下りぬ。口內に大森山あり、中村山もあり。之に行かむとするに熔岩龜裂し、進む能はざるやうになりて路を轉ぜむとし、暫し立ちながら煙草を呑む。二人の少年老女に案內せられて壁上に來る。老女は下らずに、「あの人の處へ行くんだよ。芋石を拾つて來るんだよ」と大聲あげて叫ぶ。少年近づく。「何處へ行く」と問へば、「波浮へ」と答ふ。「その行先には非ず。この噴火口內の行先なり。われらは彼の大森山と中村山とへ上らむとす」と云へば、「われらも共に上らむ」といふ。さらばとて、一先づ口壁まで引返し、暫し壁に接して進み、まづ大森山に上る。噴烟壯也。老女驚き、「あぶないよ。上るんぢやないよ。戻れよ」と叫ぶ。所謂芋石は、この山にあり。「芋石を拾つて

るんだよ」と云ひながら、『上るんぢやないよ』とは、矛盾も甚し。前のおたい濱の導者の事を思ひ出し、男女の强弱斯ばかり相違あるものかと、感に堪へざりき。

三度目には元村の村長に導かれ、有志十數人と共に噴火口に下り、外壁の上にて午食す。持ち行きたる鍋にて牛肉を煮、酒を煖め、砂上に團欒して、飲み且つ食ふ。この山上の酒宴は、余が山水放浪中最も快く感じたるものゝ一なりき。

四度目にはわれ發起して自ら導者となり、三原山上に日出を見むとて、夜十時元村の宿を出で、十二時湯場に着く。こゝに蒸風呂あり。呼べど、叩けど、返事なし。『前日來り宿したるものなり。怪しきものに非ず』と云へば、戸内より火光近づく。暫しありて戸を開きて一行を入る。主人余の顏を見て、安心せるさまにて『先年夜更けて三人の客忍び入り、酒を飮み、飯を食ひ、金を拂はずして去りしことありき。それに懲りて、わざと戸を明けざりき』といふ。山中の一軒屋なるが、『こゝも亦浮世なりけり』とあはれに思ひぬ。午前五時こゝを發足して山上の砂漠に至り、朝食するほどに、雨大に至れり。日出どころか、濃霧の中にやうやつと下り路を見付け、雨にすべる路をころ〳〵ころがり下りぬ。提燈持てる一人の學生轉びし拍子に、提燈を破壞したるが、余の提燈を全うして歸りたるを見て、『私は意氣地が無い』と口惜しがる。口惜しがるは、まだ意氣地があるなりと賴母しく思ひぬ。この時の同行八九人、提燈は都合三つもちゆけり。湯場を出でし時、相約して行く〳〵枯木をもちゆきて、山上に焚火して暖を取れり。然るに提燈を持たうともせず、枯木をも拾ひゆかざりしもの二三人ありき。それでも人間の中間かと慨嘆に堪へざりき。この學生は始終提燈を持ちたりき。枯木をも拾ひたりき。

四　謳ふ老女

大島の元村にては、毎月十五日と晦日との夜、女ばかり祠前に相會して、神に祈り、且つ相和して歌ふを例とす。これ島外に出で居るものゝ安全を祈ると共に

婦女の懇親を圖る也。一夜われ獨り行きて、戸外に立ちて、その謳ふを聞く。純樸にして愛すべし。次に菓子を持參して戸内に入りて之を聞く。一座白けたり。恥かしがりて歌はむとせず。强ひて歌はせたるが、前の夜ほどには面白からざりき。六十歲あまりの一老女の身體肥滿せるが、音量最も多く、謳ふこと最も妙也。一夜菓子を持參して、その家を訪ひ、『お前さんが一番謳が上手だから、わざ〳〵聞きにきた』と云へば、『さうだよ』とて、謳ひけるが、二回目に聽きし時ほども面白からざりき。

五　三峯山上の社務所

三峯山上の社務所は、數百人を宿泊せしむるに足る設備あり。余一宿したることありき。書記役の老人、宿泊帳を持來りて、余の職業を問ふ。『著述業』と云へば、首を傾けて、『著しくあらはす。これは如何なる商賣にや』と問ふ。余その返答に困りぬ。暫し考へて、『新聞に書いたり、雜誌に書いたり、書物を作つたりする商賣なり』と云ひしに、なほ首を傾けながら、立ち去りたりき。

六　筑波山上の宿

余、筑波山に上ること三度に及びぬ。二度目の時、宿の主人の五十歲餘りと見ゆるが、宿帳に『大町芳衞』と記したるを見て、『桂月先生の御内の御方か』と問ふ。余答へて曰く、『さうだ〳〵』。

七　馬肉の馳走

輕井澤に汽車を下り、碓氷峠を踰え、妙義山に上り轉じて赤城山に上り、更に進んで草津に至りし時、嚢中纔に數金を餘すのみ也。余は一泊して、翌日白根山に上りて直に歸途に就かむと思へり。然るに翌朝覺むれば、雨也。もとより雨を辭せず。されど雨に登山しても眺望なきを如何せむ。よし〳〵雨霽るゝを待つて登山せむ。旅費の不足は、原稿を草し、原稿料を取寄せて之に充てむと決心して、數種の案内記を購求して之を讀む。中に溫泉の事のみを解說せる書あり。草津に住める醫師の著せる所也。讀み終つて、其醫師を訪へば、余の名を知り居りて大に喜び、余を酒樓に誘ふ

て共に飮む。「湯治に來れるに非ず。雨霽るゝを待つて白根山に上らむとするなり」と云へば、『共に上らむ』といふ。雨霽れたり。その醫師、その夫人、小學教員一人、酒樓の若主人、半玉一人、物賣る家の娘一人、寫眞師一人、浴客二人と共に上りぬ。晩に歸り來れば郵便局長首唱して有志の人々余の一行を酒樓に招待せり。冬の初め也。四千五百尺の山上、如何に馳走せむとするも、馳走すべき物なし。唯馬肉の鍋をつゝつくのみなりき。

八　宿屋の祝宴

上州の中之條の鍋屋といふ旅館に宿りけるが、翌くる朝、宿の老母來りて余の書を請ふ。十返舍一九曾てこの家に宿して、「愛嬌は外に類(たぐひ)の中之條鍋屋のうちの居心のよさ」と咏みたりとの事なれば、われ之に和して、

古も今も變りは中之條鍋屋はやはり居心のよさ

と書き記しぬ。老母重ねて、「御差支なくば今一ト晩滯在して下されずや」といふ。何事ぞと問へば、「日露戰爭の際、倅は町長をつとめけるが、その功によりて今春勳七等に叙せられたり。今夜祝宴を張る。來臨せらるれば、一家の面目、此上も無し」といふ。余喜んで之に應ず。酒中請はれて演說し、簡單の聲を聞いて止む。余の前に來りて、杯をさすものあり。見れば先きに簡單と叫びたる人也。大に醉へるさまにて、余を冷罵す。余相手にせざりしかば、杯を他にもち廻はり、誰れに向ひても、喧嘩を吹きかくるさま也。終に一人共相手になりて、取つ組合を始めたり。後にて人に聞けば、「警察官にて、酒癖惡く、人民を保護すべき筈の人が醉へば、いつも人民に保護せらるゝなり」とて笑ひぬ。

九　醉ひたる銀行員

中之條の醫師寫眞師の二人余を酒樓に招待す。小學校長一人、町役場の役員一人來り加はる。酒酣にして銀行員と稱する人も來る。年三十ばかり、色白くて肥えたり。文學を好める由なるが、大に醉ひ居りたり。醫師に向ひて、「本物(ほんもの)か〳〵」と問ふこと頻り也。終に

余の前に來りて、『貴方は本當の大町桂月なるか』と問ふ。『然り』と答へしが、上戸本性をたがへず、本物なることを知りて心に恥ぢたりけむ、涙をこぼしながらこそ〳〵立去れり。

一〇 橋守

旅して無一文となりても、ひもじき思を辛抱しさへすれば、事濟む。唯橋賃を取る橋を通るが厄介也。曾て東海道を歸り來りて、六郷橋にさしかゝる。この橋今は橋賃を取らざれども、その頃は八厘の橋賃を取りたり。番小屋左岸の左側に在り。泳がむかとも考へたるが、時は眞夜半也。橋守或は眠り居らむ。よしや起きて居りて咎めたらば、走りて逃げむのみと腹を据ゑて橋を渡る。ランプの光番小屋の硝子戸を透して路を照らす。走らむかと考へたるが、咎められたる上にてと思ひかへし、わざと落付きて歩む。一寸横目をつかひたるに、一人起きて居りたり。されど何とも云はざりしかば、知らぬ風して通り過ぎたりき。

中山道を歸り來りし時にも、無一文となりて、戸田橋にさしかゝる。この橋も今は橋賃を取らざれども、當時五厘の橋賃を取りたり。昔の事とて、知らぬ風しては却つて咎められむとて、無一文の由を告ぐ。橋守肯んせず。さらば泳ぐの外なしとて立去らむとしたるに、『唯通すことは相成らぬ。借して置く。今度通る時に返せ』とて、漸く通ることを許したりき。

上州富岡より本庄に出づる路に十間ばかりの川ありて、小さき橋かゝる。前岸に番小屋ありて橋賃取るさま也。水淺くして漸く膝に及ぶばかりなれば、徒渉して番小屋の前を過ぐ。橋守は十五六歳の少年なりけるが、橋賃を請求す。『無一文なるを以て徒渉したり。これこの通り脚が濡れて居るを見よ』と云へば、『橋は通らざれど、橋に來るまで道を通りたらむ。あの道は金かけて造りたるものなり』と理窟をいふ。『全く無一文なり』とて、罵る聲を後にして立去りたりき。

一一 裸の男

一夏家族をつれて沼津の千本松原に寓居せしことあり。一夜あまりに蒸暑かりしかば、訪ひ來れる田中

葉を誘ひ、旅行用の蓙を持出して濱邊に露臥す。眞夜半頃、『誰だ』といふものあり。桃葉『おれだ』と怒鳴れば、何とも云はずして立ち去る。目を開きて見れば、犢鼻褌一つの赤條々の肥りたる男なりき。

一二　性質の惡き導者

『安藝の宮島廻はれば七里、浦は七浦七恵比須』、宮島に遊びて浦廻りを爲さゝれば、宮島の風光の一半を閑却するものなるべし。田中桃葉と共に九州に遊びたる歸途、宮島に渡り、舟を雇ひて浦廻りを爲す。舟夫二人にて漕ぐ。一月の初にて風寒く、浪ちと荒し。一里ばかり漕ぎゆきたるが、年老いたる舟夫、我等を威かして、『今日の浪にては危險なり。舟を回さむ』といふ。余の經驗に徴するに、危險と云ふべきほどには非ず。腹立ちたるが、聲をやはらげ、『我等は旅に慣れたり。これくらゐの浪が危險では、舟には乘れず。行け〳〵、骨の折れ具合にて洒手をやるぞ』と云へば、何とも言はずに漕ぎつゞけたりき。

湯河原溫泉に遊びたる時、土肥の大杉を見むとて、導者を雇ひて、二兒と共に宿を出づ。空くもれり。余等三人は雨具を用意せるが、導者は用意なし。われ導者に向ひて、『雨が降るかも知れぬぞ』と注意したるに何とも答へざりき。いよ〳〵山路にさしかゝりたるに、果して雨至る。一月の初にて寒さ甚し。導者威かして『夏ならば行く人あれど、今頃は行く人なくして路惡し。殊に雨降りては滑りて歩かれず。引返さむ』といふ。『さきほど注意を與へたるに非ずや』とたしなめ、『酒手はいかばかりにても與ふべし。辛抱せよ』と云ひたるに、なほ肯んぜざるさま也。『いよ〳〵いやなら我等だけ行くべし』と云へば、いや〳〵ながら案内をつゞけたり。雨ふりても、ごく樂なる山路なりき。

一三　素性も顏も分らぬ路伴

中山道を徹夜徒歩して歸りたることあり。夜更けて余と相前後する男あり。暗ければ、顏は分らず。『何處へまで』と問はるゝに、『東京まで』と云へば、『私も東京まで行くものなれば、共に行かむ』といふ。薄氣味惡くは思ひたれど、無一文となり居りたれば、心配は

無用とて、連れだちて歩く。『眠くは無いか』と問はるゝに、『眠い』と云へば、『さらばこゝにて』とて、二人共に路傍の砂を積みたる上に横臥す。蚊多くして眠られず。『眠られぬ。歩かうか』と云へば、『歩かう』とて歩き出したるが、また眠くなる。共に材木を横へたる上に横臥せしが、矢張り蚊に攻められて眠られず。又歩く。路傍の家の戸は鎖したるが、戸に接して濡縁(ぬれえん)あり。就いて腰かけ、やがて横になりしが、矢張り蚊に眠られず。路伴の男はと見れば、四斗樽の内にしやがみ、上に風呂敷やうのものをかぶせて蚊を防ぎ、鼾聲を出して眠り居りたり。これは妙案とうらやましくなり、外に樽やあると見れども無し。縁(えん)では眠られず。馬鹿正直に約を守るにも及ぶまじとて、取去りにして、余ひとり歩きたりき。

一四　相宿

相宿には、折り〳〵困ることあり。或時成田不動の豆撒を見むとて、四人づれにて堂前の宿屋に投ず。八畳の室なりしが、四人づれの客と相宿を爲せり。夜に入りて、此方にても酒飲み、彼方にても酒飲む。彼方の中に、七十歳と稱する老人あり。最も元氣にて、最も多く酒飲み、最も多く饒舌る。九時頃にその四人ながら出でゆけり。豆撒は午前二時頃行ふが、堂に入りて豆を拾はむには、午後十時頃より出掛けざるべからず。而かも寒き最中なるに、宿屋の浴衣一枚にならざるべからず。我等の中一人だけ十時頃より出でゆく。午前二時迄はとて、余は他の二人と共に蒲團の中にもぐり込む。堂内に入りたるかと思ひの外、七十の老人一人、もどり來る。而かも女を伴へり。聞くに忍びざることを言ひちらして、笑ひ興ず。一人蒲團の中より『ゑへん〳〵』、今一人も『ゑへん〳〵』、余も之に和して『ゑへん〳〵』、女終に老人を促して出で行けり。

越中の上瀧といふ處にて、七八人の若者と相宿となりて、一つの蚊帳に寢たり。蚤多し。若者どもは、いづれも寢相惡く、あちらへどた〳〵、こちらへばたばた、余の腹に足を加ふるもあれば、余の頭に手を加ふるもあり。蚊帳の隅に小さくなりて一夜を過した

りき。

一五　宿屋の隣室

宿屋にて隣室の物音の聞ゆるにも閉口することあり。天橋立に遊びける時、第一等と稱せらるゝ旅館の第一等の室を占め居りしに、隣室に客來り、女中に向ひて頻りに不足を云ひ、余の室と取換へむことを望む。女中何とも返答せず。翌くる朝また同じことを繰返していふ。「あの方は今日大江山に上る由なれば、その留守中に取換へ申さむ」と女中答ふ。余の起き出でたる時は、客は既に他出し居りたり。「何人ぞ」と問へば、「京都の辯護士なり」といふ。「わざ〳〵立聞したるにあらざれども、幾度も自然に耳に入りたるまゝに申上ぐ。小生の室を御所望の由、小生異議なく候間、御遠慮なく取換へられよ」といふ旨を書面に認め、「客歸らば渡して呉れよ」と女中に賴みて大江山に上り、晩方戻り來りしに、室はかはり居らず。客は歸り居るさま也。「書面を渡したるか」と女中に問へば、「渡したり」といふ。われ襖を排いて其室に入り、「書面にて申上げたる如くに致さむ」と促したるに、頭を掻いて應ぜざりき。

我が文藝に現はれたる自然生活

笹川臨風

一

孔子や孟子は野處して縱談横議したが、其野處したのは、已むを得ざる野處で、志を得れば民と之に由り志を得ざれば獨り其道を行ふところの野處であつた。「無爲の事に處し、不言の敎を行ひ、萬物作りて辭せず、生じて有せず、爲して恃まず功成りて居らず、夫れ惟々居らず、是を以つて去らず」と放言した老子

とは固より雲泥の相違がある。莊子になると、更に其思想を進めて、「今子、大樹あり、其の用なきを患へば、何ぞ之を無何有の郷廣莫の野に樹ゑ彷徨乎として其側に爲すなく、逍遙乎として其下に寢臥せざる」と傲語して居る。此老莊の南方思想は、孔孟の北方思想に對して、獨り、理想と實際との差別ばかりでなく、山林江湖の氣風を鼓吹したことが夥しい。易姓革命の國柄であるから、韜晦する習俗はあつたが、之を助長したものは南方思想であつた。

山林江湖の間に放浪するものが、人寰を離れて、名利を棄つるとゝもに、自然の謳歌者となるは、當然のことである。心眷々として故國を忘れなかつた屈原と雖も、「朝には木蘭の墜露を飲み、夕には秋菊の落英を餐ひ、木根を擥りて以つて茝を結び、薜荔の落蘂を貫き、菌桂を矯めて以つて蘭を結び、胡繩の纚々を索す」(離騷)と詠じ、「嫋々たる秋風、洞庭波たち、木葉下る」(湘夫人)と嗟嘆したではないか。許由巣父を慕ひ、伯夷叔齊を千萬世唯一人と推稱して處士氣質は支那國民性であるやうになつて來たとゝもに、窮居して野處し、自然を愛することを誇とすることになつた。商山四皓の紫芝歌に莫々高山、深谷逶迤、曄々紫芝、可ニ以療一レ飢、唐虞世遠、吾將ニ何歸一、駟馬高蓋、其憂甚大、富貴之畏レ人兮、不レ若ニ貧賤之肆一レ志と歌つたは、即ち此思想を最も善く發現したものである。六朝に入ると、殊に南方思想の旺盛なるが爲に、文藝の上には著しく此傾向が見える。淸談なる出世間的な放縱な思潮が流れ出たのも此ためである。阮籍は、去者余不レ及、來者吾不レ留、願登ニ大華山一、上與ニ松子一遊、漁父知ニ世患一、乘レ流泛ニ輕舟一と詠じ、嵇康は携ニ我好仇一、載ニ我輕車一、南凌ニ長阜一、北厲ニ淸渠一、仰落ニ驚鴻一、俯引ニ淵魚一、盤ニ于游田一、其樂只且と歌つてゐる。非ニ必絲與一レ竹、山水有ニ淸音一と吟じた左思、天地爲ニ我鑪一、萬物一何小と傲語した孫楚も皆當時の思潮の産物であつた。菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見たる陶淵明になると、自然生活を謳ふ大詩人であつた。少無レ適ニ俗韻一、性本愛ニ邱山一、誤落ニ塵網中一、一去三十年、羈鳥戀ニ舊林一、

池魚思二故園一と云ひ、野外罕二人事一、窮巷寡二輪鞅一、白日掩二荊扉一、虚室絶二塵想一と云つて、遠く塵世を超越して、自然と冥合せんことを期してゐる。此思想は澎湃として、長く支那國民の血液の裡に流れて、但だ花の開落を看て人の是非を言はずとか、浮名を戀する勿れ、夢幻泡影限りあり、且に樂事を尋ねんとすれば、風花雪月窮りなしとか云つて、大悟徹底したやうな顔をする。

繪畫に南北の別を立てたのは、禪の南頓北漸に基してゐるが、北に臺閣的氣分ありて、南に山林的氣象を帶ぶるやうな傾向を生じた。士大夫が南畫に走つたのも、此山林的氣象と共鳴する點があつたからである。自ら自然生活を愛して之を寫すとゝもに、又觀る者をして自然生活を憧憬せしめた。北畫と雖も、固より自然生活を寫したが、南畫の氣分は最も善く此自然生活と適應した。「夫れ山水は廼ち畫家十三科の首なり、山巒柯木、水石雲煙、泉崖溪岸の類あり、皆天地自然の造化」(山水節要)と稱し、「君子の夫の山水を愛する所以のものは、其旨いづくにかある、丘園に素を養ふは、常に處るところなり、泉石に嘯傲するは、常に樂むところなり、漁樵の隱逸は常に適するところなり、猨鶴の飛鳴するは、常に觀るところなり、塵囂の韁鎖は、人情の常に厭ふところなり、烟霞の仙聖は、これ人情の常に願うて見るを得ざるところなり」(林泉高致)と道破するが如く、山水畫は畫中に於ても殊に人情の喜ぶところとなつた。山水畫を喜ぶのは、何も必ずしも世を遯れ、山水の間に隱れようと云ふのではない。姑く塵境を脱して自然生活を憧憬しようとする情から來たのである。作家の胸中には無論邱壑の情がなくてはならぬ。南畫に逸氣を說き、塵俗の脫却を云ふは、このために外ならぬ。老莊思想と禪とやゝ類似した點があるところから、老莊思想と禪とは相結だ。繪畫に於ても亦此點を看取するに難からぬ。宋以後禪僧の畫技を善くするもの少からず、從つて、出世間的、悟道的氣分は、畫中に漂うて、自然生活を鼓吹するに多大の力を致して居る。

老子の道德經が我邦に輸來されたのは奈良朝以前である。莊子の傳來も殆ど同時位であらう。大友皇子の御作に、道德承ニ天訓ー、鹽梅寄ニ眞宰ーと云ふ句があるが、眞宰の語は莊子の齊物論に出てゐる。大友皇子の御子に渉らせらるゝ葛野王の作に命レ駕遊ニ山水ー、長忘冠冕情、安得ニ王喬道ー、控レ鶴入ニ蓬瀛ーとあるのも、南方思想を傳承したものと見て、差支があるまい。其後奈良朝に入りては、淸風入ニ阮嘯ー、流水韵ニ嵇琴ー（藤原宇合の作）だの、犢鼻標レ竿日、隆腹曬レ書秌（紀男人の作）だのと、淸談の徒の故事を歌つたものがあつて、南方思想が著しく傳來してゐることが分る。しかし之は思想の飜譯であつて、未だ十分に影響したものではあるまい。云はゞ文字上の南方思想で、事實上の南方思想ではあるまいが、とにかく此思想に接觸したことは事實である。萬葉詩人は戀を歌ひ、志を述べ、花鳥風月を諷詠してゐるが、自然生活を慕ひて之に思ひを寄せものは殆ど見ぬやうである。大和を慕ひ、故鄕に依て戀々の情を寄せたものはあるが、自然の懷に抱かれようとはしてゐない。山川鄕土を慕つてゐても、それは其純なる山川鄕土を慕ふのでなく其處に住める戀人を慕ふのである。「古への七の賢き人どもも欲りするものは酒にしあるらし」（大伴太宰帥）と淸談の徒を詠み、多少、其思想に觸れたものもないではないが、痛切に此思想を傳承したものは見えぬ、又自然の生活に憧憬れようとしてゐるのはない。平安朝に入ると、佛敎思想の影響は盛んであつたが、現代の榮華歡樂にあこがれる世の中であつたから、自然の生活を戀ひ慕ふと云ふ樣子は甚だ乏しかつた。殊に都會本位のことで、當時の智識階級は宮殿生活に一生を送り、金殿玉樓の中が其天地であつたから、到底自然生活などを夢想すべきではない。古今集以下の歌集を見ると、題詠の世の中であるから、文字の上にこそ斯やうな思想の發露してゐるものもないではないが心からしてしか信じしか憧憬したものとは見えぬ。配謫の身ではあるが、都近い須磨でさへ「沖より舟どもの歌ひのゝしりて、漕ぎ行くなども聞ゆ、ほのかにたゞふさき鳥の浮べると

見やらるゝも、心細げなるに、雁のつらねてなく聲、楫の音にまがへるを、打眺め給ひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、くろぎの御すゞには立給へるは、故郷の女戀しき人々の心みな慰みにけり」(源氏物語須磨の卷)とある。であるから、まして筑紫などになると、關山千里の旅の空である。「今はかくて、都離れて、知らぬ世界に罷り流されて、又かやうになき御かげにも、御覽ぜらるゝやうも侍らじ、自ら忘ると思ひ給ふる事侍らねどさるべき身の罪にて、かうあるまじきめを見侍れば、いかで何地も罷らで、今宵のうちに身を失ふわざをしてがなと、なき御かげにも御面伏と、後代の名を流し侍る、いと悲しきことなり」(榮華物語浦々の別れの卷)とあるのも、尤も千萬である。まことや須磨と云つた所が今日のやうに大廈高樓が軒を並べるのではなく、藻鹽焚く海士のあやしげる伏屋がちらほら散在するばかり、都住居の人には定めて不便で、憂くつらくあつたであらう。筑紫の左遷が悲哀痛切であつたのは、如何にも同情の感はあるが、遙任の國司さへあつて、都を離れること、それ自身が愁苦であつた時である。物觀るべきあれば樂むべきありと、悟りを開くことは到底難い。寒山子歌つて曰く、「登陟す寒山の道、寒山路窮らず、谿は長く石は磊々、澗は濶し、草は濛々、苔の滑なるは雨に關するにあらず、松の鳴るは風に假らず、誰か能く世累を超えて、共に坐せん白雲の中」と、固より平安歌人の思ひ到るところではない。

地方の武家が勢力を有つ、戰亂で富貴榮華が一朝にして轉變する。さあからなると都も修羅の巷、粉白黛綠の連中が東西に迷ひ走る。時勢と修養とは自然を歌ふ詩人を出すやうになつた。鎌倉時代に於ける僧西行の如きは、其第一人である。彼の歌は吟詠の爲に作つた者でなく、眞情實景の流露である。「山路分け花を尋ねて日は暮れぬ宿かし鳥の聲もかすみて、」「月のため心やすきは雲なれや浮世にすめる影をかゝせば、」「山里は庭の木すゑの音までも世をすさみたるけしきなるかな」「おのづから音する人もなかりけり山めぐりする

時雨ならでは。」佛教徒の常として、厭世觀ではあるが、彼は善く自然を理解し、之を慕つたのであつた。

猶之を一層明白に述べたのは、佛教と老莊思想とに養はれた兼好法師である。浮世の酢いも甘いも嚙み分けた粹法師であるから、其の云ふ所も垢拔がしてゐるが、其根本思想は佛教と老莊とにあつた。隱棲した双ケ岡は都には近く、浮世の風が吹かぬものでもなかつたが、彼が終焉の地なる伊賀の種生となると、山幽に谷邃く、一鳥啼かざる閑寂境である。景色も双ケ岡に及ぶべくもないが、不便は之に幾層倍したであらう。今日も餘程の好奇心に驅られねば、往くところでない。尤も密乘院と云ふ寺が儼然存在してゐた當時であるから、案外今日よりは開けてゐたかとの疑問もないではないが、開けてゐたとて、あの深山でどうならう。「いかなれば世をも心をも捨てし身のまだ捨てられぬ敷島の道」と詠んだ如く、歌道の爲に再三上京したが遂に北山間の幽境に入寂した。曾て信州霧原山の麓に草菴を結だ折、國守の狩獵に逢ひ、「こゝも亦浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」と詠んだくらゐであるから、餘程の浮世嫌ひであつたらしい。

萬づの事は、月見るにこそ慰むる物なれ、ある人の月ばかり面白きものはあらじと云ひしに、又ひとり露こそあはれなれと、爭ひしこそをかしけれ。折にふれれば、何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るゝ水の景色こそ時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東流去、愁人の爲にとゞまること少時(しばらく)もせず、と詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。嵇康も山澤にあそびて、魚鳥を見れば、心たのしむといへり。人とほく水草きよき所に、さまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

と自然美の樂しむべきことを述べてゐる。山寺の閑居を敍べては、「心の儘に繁れる秋の野良をおきあまる露に埋もれて蟲の音かごとがましく、遣り水の音長閑なり。都の空よりは雲の徂徠も早き心地して、月のはれ曇ること定め難し。」といひ、自然の見方を說いて

は、「望月の隈なきこと、千里の外まで眺めたるよりも曉近くなりしまち出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の陰、打ちしぐれたる叢雲かくれの程、またなくあはれなり。椎、柴、白樫などの濡れたる樣なる葉の上にきらめきたること、身に泌みて心有らん友もがと都戀ひしう覺ゆる」「すべて月花をばさのみ目にて見るものかは、春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの内ながらも思へるこそいとたのもしうをかしけれ」と說いてゐる。自然に對しても彼は見識が高くあつた。されば名利を卑しみ、華美を排し、驕慢を斥けた。鴨長明に至りては不平からの隱遁であるから、悟つたやうで悟り切れず、其の言ふ所は徹底して居ないが、こゝに六十路の露消えがたに及びて更に末葉に宿りたる閑適の趣きを述べては、よく自然美の味を翫賞してゐる。時代の降下と與に有爲轉變の世相が愈々激しくなりて、名利を棄て自然生活を試みようといふ傾向は隨所に現はれて來た。東山時代になると自然生活の味を悠々たる天地の間に嘗めようとするのではなく、四疊半裏松風の音も佗びしい茶鐺の湯の烟の間に求めようとした。茶の湯は華美を戒めて質素を原とし、喧囂の塵世を避けて靜かに自然と冥合しようといふのを旨とする。利休の尺八竹筒に數萬金を投じ、所謂名物なるものが什襲珍藏さるゝ樣になつたのは寧ろ小堀遠州以後の事に屬する。尤も此の以前とて名物の愛翫が無いではない。東山殿も翫物喪志の譏りを受け、信長も有名なる茶器を得るに腐心したものだが、後世の茶の湯が名物本位、茶器本位となり、茶の湯本來の目的を忘れて、只管に形式の末に走つたのとは同一視すべきものではない。茶の湯は名利の巷からして自然生活に反らしむる一つの道であつた。茶の湯の中には禪味もあり、老莊思想もあり、宋元文明もあり、武士道も有り、自然生活もある。後世松平不昧公などが茶の湯を以て知足安分主義を鼓吹したのは要するに茶の湯の一端を以て全豹としたのに外ならぬ。丁度儒道神佛の諸教理を渾一して之を平民的に通俗的に講述した心學が知足安分を標榜

してゐるのと同樣である。華美なる形式に趨つた茶の湯は、知足安分主義とも抵觸してゐるばかりではなく、其の根本なる自然生活に復歸しようとする精神に違背してゐること夥しい。

けれども茶の湯は普遍的であり、平民的であり、一般的であつたが爲に、當初に於て鼓吹した精神は朧氣ながらも國民の內に普及されて國民趣味を形造るに至つた。九尺二間の裏店でさへも土鉢に草花を植うるを忘れず、箱庭を造り、稗蒔を愛翫して百忙裏に一閑境を造り、聊かながらも自然生活に觸れようとした。窮巷陋居にありても床の間には一幅の掛物を吊し、書かれたる山水の間に興を遣つてゐる。四時の行樂には近郊に遊びて自然美に接することをつとめ、三十三所の札所詣り、六阿彌陀詣りなどの信仰的行脚も、間接ながら自然生活に親しむの機會を作つた。

俳諧は談林風に都會趣味を鼓吹したが、芭蕉に至ると、頗る自然生活に憧憬してゐる。衒らはず、作らずして、侘びしく淋しく自然に近づく。其後流れて江戸座の塵俗趣味となつたが、天明の復興となり、更に其後に至ると、一茶の如き滑稽味を帶びた自然生活を歌ふものが出來た。「夕月や鍋の中にてなく田螺」、「蛙鳴くや狐の嫁が出た〳〵と」、「婆殿の眼鏡をかけて茶摘哉」、「五月雨の竹にはさまる在所哉」、「鼻先に智慧ぶらさげて扇哉」、「寒いぞよ軒の蜩唐辛子」の類何れも自然生活を歌はざるものなく、俗界を嘲笑せざるものは無い。

西鶴にしろ、巢林子にしろ、成金萬能の浪華に生れたから都會美を歌つても、自然美を稱道することは無い。「雌松叢立ち萩の枯れ垣まばらに徃の編戶に犬の潛り路のあらけなく、それより奧に自然の岩の洞靜かに片びさしを下して軒は忘ぶ草、過ぎにし秋の蘿の葉殘れり。東の柳が下に筧音なしてまかせ水の淸げにこゝに住みなせる主は」(好色一代女)と書きなしてはゐるが、これも仕たい放題の好色沙汰から揚句の果ての隱者であれば自然生活とは何の因緣も無い。江戸文學は都會文學で、多くは狹斜の巷や芝居を背景としたも

のであるから、自然生活を描寫したものとては恰んど無い。寧ろ王侯に事へず野處して獨り其事を高尙にする漢學者の詩文に於て見るべきものがある。

我國の文學が其初めに於て長く搢紳の文學臺閣の文學であつたと同じく、我が藝術も亦信仰の對象以外に於ては宮廷藝術臺閣藝術貴族藝術であつた。されば自然生活を描き若しくは彫るものは殆んど無かつたといつてよい。土佐派の繪卷物を見ても自然生活を窺ふべきものは略〻無しといふも可。稍〻之を窺ふに足るものは後れて出た宗敎家の繪傳である。一遍上人繪傳、法然上人繪傳、融通念佛緣起の類である。何れの畫史に於て見るが如く、我國にても山水畫の獨立したものは、古代に於て殆んど見る可くもあらぬ。赤星家の入札に於て見たる巨勢派の那智瀑布圖の如きは現存する最も古き山水畫である。通常の場合に山水畫は單なる背景に過ぎぬ。然し尤もよく自然を寫したものは山水畫である。花卉の畫にしろ、翎毛の圖にしろ、何れも自然畫には相違無いが、自然生活と最も近きものは山水畫であらねばならぬ。我々が自然生活を樂むといふは、俗境を去つて山水の間に悠々自適するに於て始めて意味を生ずる。山水畫の獨立に發達せざる時代にては、一般に自然生活を憧憬したとは見えぬ。我國にて山水畫の獨立に發達したのは宋元の畫風が輸入された足利時代からである。而も其の多くの畫家は浮世を外に見棄てた禪僧であるから、從つて其の描く所も超俗したる、氣韻の高いものであつた。周文は「工は天下の妙を窮めども、外其の容貌を見れば、儻くは能くする所無きが如く、藝、衆人の善を兼ぬれども內其意氣を察すれば、苟くも讓る所有るが若し」（村庵小稾）といはれ、雪舟の描かんとするや「先づ斗器の滌を酌み、快く百尺を吹くこと數聲、或は倭歌を唱へ、或は唐詩を吟じ、箕坐盤礴して後、筆を吮ひ紙に臨み、意氣揚々として龍の水を得るが如し」（梅花無盡藏）と說かれてゐる。何れも洒脫した態度が偲ばれて、修養する所の深きを識るに足りる。されば其の作る所は韻致有り、雅趣有りて、含蓄する所極めて裕かであつた。東山時代

に於ける淡々たる水墨の山水畫は、安土桃山に入りて金碧燦爛たるものと移り變つたが、江戸に至りては和畫と漢畫とを斟酌したる狩野派の獨占場となつた。けれども狩野派は土佐派が繪所預たりしが如くに、幕府の御用繪師となつて、所謂臺閣的氣分を漂はした。しかも其末は樣に依りて葫蘆を描き、一種の典型に陷りて、遂に振はずなつた。しかし此の時代は千紫萬紅色樣々の有樣であつたから民間には幾多の巨匠大家を出した。古人を法とし而して自然を師とし意匠と技能と相俟つて、始めてこゝに名畫が出現する。光琳の如きは宗達より出で、土佐派の妙を窮め、自然を寫して一新機軸を開いた。しかし彼は元祿の華美なる時代に出で、而も京都の豪富の家に生れ、又自ら華奢を喜んだから彼の畫裏には豪華の影は有るが、恬淡なる自然の趣は乏しい。之を陶に隱れた弟の乾山に比すると其の間に談林と正風とぐらゐの相違が有る。長崎から傳へられて派を分ち岐を別ちたる南畫が行はるゝ樣になつて、自然の縮圖を畫裏に收め、天下翕然として之に趨くの狀を呈した。殊に伊孚九より出でたる池大雅や謝蕪村等が出づるに及んで、南畫の勢力は頓に加はつた。山林的氣風を帶ぶる南畫がこれ等民間の士によりて描かれたることであつたから、自然生活を皷吹するに於ては少からず功があつたに相違ない。よしや自然生活を皷吹するまでに至らずとも自然美を喜び自然生活を憧憬させる風を生じたのは爭ふ可くもあらぬ。圓山派から出發して、更に南畫の氣分を加へたる四條派は、京都地方の山水を描くに於て頗るよく適應した。雲煙の變幻、水氣の取扱方は、此の派の長所で、雄大渾厚の風には缺けてゐたが、溫潤典雅の趣は備へて餘りあつた。殊に南畫に於ては竹田は固より、大雅蕪村に至るまで著しく支那風であつたが、四條派に至ると、純然たる日本式で、殊に京畿の氣分に富んでゐた。南畫は自然を寫すを力めて居たが、其派の末流になると餘りに主觀的に趨いて客觀美を害ふこと夥しい。見るものをしてたゞ怪奇の念に打たしむるのみで、自然美を憧憬し、自然生活を思はせるだけの餘裕が無い。

世事紛糾すれば、人は自然に歸せんことを欲する。自然美にあこがれて、自然生活を營まんことを欲する。然れども自然に歸せんとし、自然生活を營まんとすることは談容易なれども事情は頗る難い。此に於て時々山水の間に放浪して一時の慰安を貪り、若くは文學藝術に於て其の渇望を醫やさうとするのである。華美なる都會文學、煩瑣なる都會藝術は、たゞ我等をして塵俗の氣分を多からしむるのみである。我等は寧ろ堪へ難く思ふ。自然美なる哉、自然生活なる哉。我等は自然の懷に抱かれて彼の純なる灝氣を吐呑したく思ふ。文學藝術は人をして自然に復歸せしめ、自然生活を憧憬せしめ、煩瑣なる塵俗より暫らくの間でも脫却せしむ可く勉む可きものであらう。人は清凉劑を欲する、人は火坑裏に凉味を懷ふ。文學藝術は人生の清凉劑であらねばならず、一道の凉味であらねばならぬ。

二

一體日本の地は自然美に富んでゐる。海岸線の長さ、北より南に亘りて地の細長き、火山岩の地質、其の他諸種の原因は、日本をして自然美に富める地たらしめた。山紫に水明に、花咲き鳥歌ひ、月白く風淸く、到る處風景の勝を以て聞えて居る。從つて日本民族は古來から自然美の愛好者で、其の謳歌者であつた。されば祝詞には「天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の棚引く極み、白雲の向伏す限り、青海原は棹楫乾さず、舟の艫のいたり留まる極み、」と自然の壯美を巧みに詞のうちに用ひ、古事記には、「大和は國のまほろば、たゝなづく、青垣山こもれる、大和しうる。はし、」との歌を載せて故國の自然美を憧憬してゐる。故に萬葉詩人は月に對しては、「天にます月よみ男まひはせん今宵のながさ五百代つぎこそ」と歌ひ、梅花に對しては、「霞たち春日の里の梅の花嵐の風にちりこすなゆめ」と詠み、秋の野を懷うては、「秋風は凉しくなりぬ馬並めんいざ野にゆかん萩の花見に」と偲び、雪に寄せては、「よなばりの野木にふりおほふ白雪のいちじろしくもこひん我れかも」と感想を述べて居る。霜に對し、露に對し、櫻花に對し、雨に對し、水に對して其

の吟懷を寄せぬは無い。戀を歌ひ、悲哀を歌ひ情を歌ひ、人事に感興を遣りたる多恨の詞人は、自然美に對してもまた多感の才人であつた。平安京は最も自然美に富める地、よし歷史無く傳說無しとするも、京洛を繞れる山河は美しいものである。平安朝の士女が此の自然美の間に起臥して自然美の謳歌者となつたのは固より偶然でない。自然美の地は之に人工美を加へて愈々美はしくなつて來た。三十六峰、松杉濃やかなる間には堂塔參差として點綴し、藤原式の優美なる建築は、山の間水の邊に建てなされて土佐繪の精粹を發揮する。逢坂の山を越ゆれば十萬頃の太湖は漾々とし鏡を開き、湖を繞りて自然美の佳なる所は尠からぬ。都の東南には宇治有り、攝に接しては男山あり、京洛の士女が遊觀すべき所は、到る處にある。交野の春の櫻狩、嵐の山の秋の暮、四時折々の風景は自然の美をして更に層一層美ならしめた。されば遠く都を離れては熊野詣に南海の波濤雪の如き壯觀に驚き、吉野の山嵐の氣冷かに入相の鐘と共り散り行く花の行方を惜しんだ。住吉、和歌の浦、須磨明石は平安詩人を恨殺させた事幾ばくかりであつたらう。けれども自然美を愛好すること甚しくはあつたが、元來が小天地に跼蹐して自由の境に翱翔し得ざりし平安朝の人であるから、遠く自然美を探ることは敢てし得なかつた。獨り此の間に立ちて偉大なる宗教家が熱烈なる信仰の爲に深山幽谷を開き、堂舍を建てたるは、信徒をして其の自然美觀を擴大せしめるに於て與つて力があつた。勝道上人は既に奈良朝に日光を開き、行基は此の時代に多くの靈場を造り、役行者も到る處に其の足跡を遺し、平安朝に入りて最も大なるものには弘法大師の金剛峯寺創建があつた。熊野行幸などが平安朝に屢々されたのも畢竟信仰の致す所である。平家時代に至ると嘗ては須磨明石さへをも都遠き蕭散たる寒村孤邑と見なしてゐた平安時代に反して、瀨戶內海開通の爲に力を盡くした。兵庫に經島を築き、穩戶の瀨戶を開いて西國との交通を便にし、嚴島大明神を信じし、煙波漂渺たる海上の孤島に蜃氣樓を現ずるの奇觀を作つた。平清盛

は其の願文にて、「弟子清盛敬みて白す、夫れ以みるに蘋蘩風芳しく、自ら芬陀利華の露に混し、潢汙水潔く遂に薩婆若海の波に歸す。和光同塵、其れ然らざるか。伏して惟みるに安藝國伊都伎嶋の大明神、名、常篇に載せ、禮恒典に存す。一區孤洲の巍薛たるに據り、四海巨海の渺茫たるに臨む。其の靈勝を謂へば則ち雲蓬露萊の乾坤の外に存るが如く、其の締構を謂へば亦金殿玉樓の峴閬の間に挿まるに肖たり。凡そ厥の靈驗威神言語道斷なる者なり。是に於て弟子本因緣有り、專ら欽仰を致す。利生搨愛として久しく家内の福緣を保ち、夢感誤り無く、早く子弟の榮華を驗す。今生の願望既に滿ち、來生の妙果宜しく期すべきなり。相傳へ云ふ、當社は是れ(□)觀世音菩薩の化現なり。又往年の比、一沙門有り、弟子に相語つて曰く、菩提心を願ふの者此の社に祈請せば必ず發得有らん。斯の言を聞きしより偏に以て信受す。歸依の本意、蓋し玆に在り、」と叙べて此神に對する敬虔の情を寄せてゐる。後年平家が一谷、鐵枴に敗ひ、尾島に泛び、遂に一族壇ノ浦の藻屑となつて、瀬戸内海と終始してゐる。瀬戸内海は如何にも日本の風景美中最も勝れてゐるところには相違ないが、優美で、華麗で、平家の公達のやうである。清盛の雄大なる所を存して居らぬけれども都以外には容易に出なかつた京都の搢紳妃媵をして瀬戸内海に泛ばせて、其自然美に接せしめたのは、平家の力である。其夜に消えて其夜に降る雪の富士は、萬葉詩人の筆に詠嘆し、昔男の業平の東下りもあるが、富士川會戰の夜に奔竄した以外に於て平家歷史と交渉が薄い。西に鵬翼を張らんとした平家は東に向つて驥足を展べなかつた。從つて東の自然美は都人士の顧みる所でなく、依然として東夷の地を以つて目したものである。

源氏時代になると、遠く東北平泉の地まで出かけて北上川の谿谷を窺ひ、東稻山の歌枕をも見て來たが、武邊の關東武士が自然美から得る所は少くあつたらう。けれども、西行などが南船北島し得たのも、時勢のお蔭に依る所は多い。北條氏が三上皇を新島守に流

し奉つた大變動は國史上の大事件のみでなく、違例に自然美の範圍を擴めたと云ふこともあらう。南北朝以後には、京洛の巷が屢々馬蹄の踏籍するところとなり、兵火の脅かすところとなつたが爲に、上は聖天子より月卿雲客に至るまで東西にさ迷ひ、南北に流離した。京畿の自然美は空しく懷舊の涙を濺ぐよすがで、配所の月を見る見じめな境遇に立ち到つた。固より文辭を修飾した本のことではあるが太平記に賀名生皇居を敍して、「吉野の主上は天の河の奥、賀名生と云ふところに僅なる黒木の御所を造へ御座あれば、彼唐堯虞舜の古へ、茅茨剪らず、柴椽削らず、浮桒の風も、誠なる方もありながら、女院皇后は、柴葺く庵の怪きに、軒漏る雨を禦ぎかね、御袖の涙乾す隙もなく、月卿雲客は木の下岩の陰に、松の葉を葺きかけ、苔の莚を片敷きて、身を措く宿とし給へば、高根の嵐吹き落ちて、夜の衣を返せども、露の手枕寒ければ、昔を見する夢もなし、況や其郎從眷屬たる者は、菻山の薪を拾うては、雪を戴くに肩寒く、幽谷の水を掬では、月を擔ふに肩疲せたり、かくては一日片時もありながら人心地もなけれども、流石に消えぬ露の身の、命あらばと思ふ世に、たのみをかけてや殘るらん」とあるが、まことに斯うもあつたらう。斯る境遇にあつては、自然美も畢竟心を傷しめ愁を添ふるものに過ぎないに相違ない。

兵馬倥偬として、久しく戰塵に塗みれてゐた京都は足利氏の基礎が堅くなるとゝもに一時小康を得たが、それは短夜の夢であつて、應仁の大亂で、殆ど打破された。公卿縉紳は東西に迷ひ出で、或は東に奔つて今川氏に身を寄するものもあれば、或は西に赴いて大内氏に寄寓するものもある。騷人思士が流離奔走の間に自然美に接し感慨を寫したものも少からずあつた。後成恩寺關白兼良は、「應仁の初世の亂れしより此かた、花の都の故郷をば、あらぬ空の月日のゆきめぐる思ひをなし、ならのはの名に負ふやどりにしても、六かへりの春秋を送り迎へつゝ、うきふし繁き吳竹のはしになりぬる身を憂へ、こひぢに生ふるあやめの草の根をの

み添ふる比にもなりぬれば、山の東美濃の國に、武藏野の草のゆかりをかこつべき故あるのみならず、高砂の松のしるべなきにもあらざれば、五月雨かみのかき曇らぬさきにと、みのしろ衣思ひたつ事ありけり」とかこち、宗祇は「今日も浪風騷がしく、袖の雫もいとゞ繁きに、千鳥の一つ二つ四五など啼き行くもいかなる事を思ふかと哀れなれば、濱千鳥聲打詫びて大島の波のまもなく誰を戀ふらむ、旅の空はいつとなく、世のことはりの物うきながら、世々のふるごとなどにも思ひ慰め侍るを、相具したるものども、偏に浪風の愁をのみ打ち嘆くを聞ても、我故にこそと思ふもあぢきなし」と云ひ、堯恵は隅田川に浮んで、「東岸は下總西岸は武藏野につゞけり、利根入間の二河落合ふ所に、彼古き渡りあり、東の渚に幽村あり、西渚に孤村あり、水面悠々として、兩岸にひとしく、晩霞、曲江に流れ、歸帆、野草をはしるかと覺ゆ、筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西にありて、絶頂は下へにきえ、裾野に夕日を帶び、朧月空がゝり、扇雲行き盡きて、四域に山なし」と嘆賞の思を盡し、道興准后は中禪寺に遊んで、「此山の上は三十里に、中禪寺とて權現まし〱けり、登山して通夜し侍る、今宵はことに十三夜にて、月もいづくに勝れ侍りき、渺漫たる湖水侍り歌の濱といへる所に、紅葉色を爭ひて月に映じ侍れば云々」と深山の月夜を敍してゐる。大井川を越えて、「いくせ白波とか見渡されしに替りて、水も淺し、數日雨にもあはぬなるべし、暮れ果てゝ島田と云ふ所に着きたり、山下風吹て疎屋の板戸たまらぬ烈しさながら、いざよひの月小夜の中山より出で、ふきゆくまゝに薄雪散きつゝ、更に忘れ難き旅寢にぞ」とあるは宗牧の風流にして、「又靜喜の發句に、朝霧も知らでまたぬる小萩かな、萩の發句にはかばかりの風情耳なれ侍らず、若紫の巻にや、かゝる朝霧の知らではぬるものかなと小萩にとりなされぬる、其興淺からずとぞ」とは宗長の情調である。戰國亂離の際でも、自然美に對する風流心は依然として存在してゐたのである。江戸の文藝は市井の文藝であるが、其間に自然美に對す

る要求を忘れてゐない。幕府の御用繪師狩野法眼探幽に富士百圖があれば、市井の浮世畫家葛飾北齋に富士百景がある。土佐派に繪卷のあるが如く、廣重には東海道五十三次がある。美人の嬌態を雁す春信春章等など多く自然美を其背景とすることを怠らずあつた。彼は多くの浮世畫が花街柳巷劇場を背景として用ひたるに對し、別に自然美を配合して、其特技を示した。自然美に對する憧憬讃嘆は日本國民を通じての趣味である。

田舍の男と都會の女との對話

生方敏郎

景

東京の山の手、佇滯して惡臭を放ち蚊の培養基となる溝を前に控え凹凸したる路に臨める小さい家。此溝は平生は流れずに腐れてゐるが、夕立の後には濁水洋々漫々として流れ、路に擴がり、時には家へも流れ込む。すると此界隈に住む家々の坊ちやんや孃ちやん達が洗足で這入つて遊ぶ溝である。（坊ちやんと云ひ孃ちやんといふは奥樣と號する貧乏な月給取の妻の生みたる小兒の事にして、田舍にて單に子供と呼ぶ位の程度の人類也）又此凹凸の道路は晴天には紅塵を擧げ雨天にはドロドロにぬかる。すると此臭い溝を柄杓で掬んで埃止に播く家もあり、又風のまに〳〵紅塵に任かせる放任主義の家もある。市の撒水夫が水車を引いて來る事はないから、道行く婦人達がトバ散を挑ねかされて、泣顏をする悲みも無し。たゞ成金さん等の自働車のみは、例のガソリンの惡臭を惜しげ

もなく發散し、米屋の小僧の自轉車と競爭的に老人子供を轢き倒して走ること一視同仁、日來浪花節と講談雜誌の武士道とやらで修養したる帝國臣民的の勇氣現はれて頼母し。

時 ビリケン内閣の七月、三百の古頭顱を日比谷の衆愚院に集むるの日。例の山師の骨董屋が催しに成る遊蕩華族の寳物入札かと見れば、さはなくて一名日比谷の蛙と稱する代議士とやらいふもの、よく〱見れば彼等も人間に相違なく、或者は居睡り或者は喚き或者は暴れ罵り、あらゆる醜態痴態狂態を演じつゝ、その餘暇を以て帝國の國政を議するといふ人々――彼等衆愚院に集まるの日。その午後

人 愚叔。――惡姪の叔父
惡姪。――鈍夫の妻

右の二人年齡に二十歳の相違あり。然れども二人は互によく理解す。之れ愚叔が叔父の故を以て時々惡姪に土產物を與ふるに依る。年齡が相違すれば、今の若い者は年長者を「古いから」とか「私達は若いんだ」とか「時代の相違」などゝ申すなり。されど、若し此際年長者が年少者に對つて多少の利益を與ふれば、彼等はそんな野暮は申さぬ也。矢張そんな様なわけで、之より田舍もの、愚叔父と、東京永住主義者の若い女、惡姪は互に打解け、次の如く問答するもの也。

前書き

愚叔今日田舍より上京し、惡姪の家を尋ね來り、入口の前に立ち標札を見てゐる。先づ入口には明けたての惡い、その癖輕い格子戶。此戶には鈴が附いてゐる。之は客來を家人に通ずる爲めの機關かと思へば、然ではなく、盜人の去來を家人に報告する器である。けれど盜人がその鈴を鳴らさぬやうに這入つて、惡姪の良人鈍夫の外套を盜み去つたのは一昨年の事である。その後鈍夫は冬外套を補充したが、その影響で鈍夫が在京紳士の生命であるかのやうに思ひ込んでゐるところの夏外套を未だ買ふ事が出來ず

にゐる。又此鈴で止める事の出來ないものはたゞに盗人ばかりではない。孤兒院と廢兵院の賣り子と稱する者が、高い品物を賣りに來る事である。その品物は優に婦女の眼を誘惑するに足るべき化粧品等である。それ故、惡姪は品物を見ては購買慾を起すのであるが、値段が折り合はないのである。惡姪は慈善的に安く賣つて貰ふ事は希望してゐるけれども、他に對して慈善的に高く買ふ事は知らない。直に迷惑だと思ふ。又氷川樣のお札といふ物を賣りに來る老人がある。價は僅か一錢か二錢に過ぎない。そして此爲めに家內安全そくさい延命火難盗難を免かるといふのだ。凡そ此位安いものはない。之を强ひても賣つてくれやうといふ老人は親切それ自身であるかも知れぬ。然るに惡姪はその親切を無にして斷つたので、親切それ自身から白眼で睨められ罵しられた。彼女はそれ以來氷川樣を外套盗人以上に可怕がつて格子に刺し込みの鍵を作るやうになつた。惡姪は此時格子先に人の氣はいがするので內から出て來て

惡姪　あら、まあ、叔父さん（ト頓狂な聲で叫ぶ。田舍漢も亦屢ば頓狂な音聲を出す。但し、田舍者のそれは彼等の愚鈍を誇張するもの丶如く、都會女の製造する頓狂聲は自己に魅力を添へんとして、却つて虛僞の馬脚を現はすものである）お珍らしい。此所の家よく解りましたのねえ。

ト叔父を內へ入れ座敷へ通す。愚叔は此鳥の巢かマッチ函のやうな小さい家の中をキヨト〴〵見廻す

愚叔　ずいぶん狹い家だな。疊が幾枚敷かるの。

惡姪　これでも都會生活としちやあ、そんなに狹かないんですよ。玄關が二疊……

愚叔　なに？　玄關。何處に有る。あの入口の間の事かい。ありやあ唯の入口ぢやないか。

惡姪　いゝえ。あれを東京ぢや玄關といふんですよ。何處の家だつて玄關の無い家はないぢやありませんか。それで此部屋が寢室兼客間のそこが居間兼食堂、二階が書齋であすこが臺所兼女中部屋ですよ。

愚叔　成程。ガタピシ内閣のやうに兼官が多いことだの
惡姪　お湯殿も有りますし物置もあるし、便所だつて二つチャンと有りますよ。一穴ぢや有りません。
愚叔　一穴つて何の事か知らないが田舍にやあ便所なんかは四つも五つも有るさ。
惡姪　叔父さんは來る早々便所の自慢なんか始めましたね。ステーションぢや有るまいし、便所が澤山あつたつて、叔父さん自慢にはならないわ。
愚叔　いや、便所ばかりぢやない。柱だつて太いさ。私は此前來た時本郷の可成大きな禪寺へ行つて見たが、柱が蚊の脛のやうに細いのにはがつかりしたよ まして通常の家の華車なこと、何處もヘナ〳〵してゐるぢやないか。あれぢや少し頑丈な男が力足でも踏んだらば、折ぺしをれてしまふだらう。けれど又都會の家には家相當なヘナ〳〵男が住んでゐるのだらうから、心配はないて。
惡姪　いゝえ。叔父さん。さうでもありませんよ。それは却つて廣い屋敷の大廈高樓にこせ〳〵した成上り者の小人が住み、私の家の様な茅屋にはあくせくしない大人が宿ることが兎角有り勝でございますわ
愚叔　貧乏人はいつも然う考へてゐれば間違ひはない。俺はあくせくしないから貧乏するのだとな。從つて貧乏の報酬として少し位怠けやうと酒を飲まうと構ふもんかとな。
惡姪　では金持は金持で、俺は豪いからして金持なのだ。從つて金持の餘德として少しは惡辣であつてもいゝと考へるのですか。沒義道であつてもいゝ。我利々々であつてもいゝ。暴慢であつてもいゝなどと自分免許で納まるのですか。
愚叔　さうだとも〳〵。ところで此マッチ函の家賃は何んなものだい。
惡姪　田舍と違つて仲々相場が高いんですよ。
愚叔　惡からう、高からうといふ次第かな。まるで近頃の和製品のやうだ。
惡姪　こないだ家の鈍夫が和製のペンを間違へて買つて參りましたが、全く物の役には立ちませんでした。

でも價段は仲々高いんですよ。ですから、和製の文房具は駄目だと申して居りますよ。

愚叔　和製は自慢にならないね。けれどその符帖には新の字が附いてゐるからそれを見たら逃げ出せばいゝさ。

惡姪　さうでございますね。まづ木綿交りの新セルジ――皺になるから着られません。又寫眞版の載りの惡い新アート紙――之もたしかに和製ですよ。

愚叔　それから、政治家としては鬱爵こと和製ルーズの君。偖てその次が新らしい女――之も恐らく和製と見えて、保ちの惡いこと〳〵。

惡姪　けれど、叔父さん。新らくして好いものは、疊と女房とやら昔から申し傳へて居りますが、そんな心持のするものでせうか。

愚叔　なあにさ。新らしくつて好いものは色女だよ。疊は勿論、家でも風呂桶でも、着物は尙ほ更ら仕立下しに限る。それから新米新茶新海苔だらう。

惡姪　新海苔はオッですね。けれど海苔の味ばかりは江戸兒でなくつては解りやしませんよ。叔父さんのやうな田舍漢は新地の方が好いでせう。そして女房の新らしいのは何うなのです。叔父さん。

愚叔　女房は古くつても善し、新らしくても善し。常に好いものだ。便利で而して安いと來てゐる。其上に保ちがよければ更に好い。

惡姪　あら、叔父さん。叔母さんを道具あつかひするのは酷うござんすわ。若し罰が當つて、叔母さんが夭折したら、叔父さん。何うなさる。

愚叔　馬鹿を言へ。女房は道具だからこそ倦きないのだ。之を床の間の置物と考へて見ろ。今土燒のおかめが三日と置いて眺められたものかい。

惡姪　どうも叔父さんの考へ方は物質的ですよ。それぢや、物事に神秘も幽玄も無くなつちまうわ。

愚叔　なに、そんな事が有るものか。物質なればこそ神祕なんだ。水は雨とも雲とも氷ともなる。砂糖が芥子になつたり芥子が炭になつたり、火になつたり、鳥になつたり善人になつたり惡人になつたり、河豚

になつたり、何にでも成る。男の髮が女の垢になつたり敵の汗が自分の肉に成る事もある。物質は有る如くにして無く、無きがごとくに有るのだ。何うだ解つたか。女房は一個の物質なるが故に神祕だ。卅日に怒つたと思ふと一日には御機嫌がいゝ。從つて今生きてゐても又死なんとも限らない。その時は何うすると云ふのかい。錢さへ有れば生命保險を懸けて置くよ。こいつはお前のところの鈍夫の好きな勸業債券と違ひ、決して外(ヒツ)れることの無いものだ。

愚姪　さあ、その債劵の圖といふものは、賭博でせうか。奬勵の爲でせうか。

愚叔　人民がやつたら賭博だらう。政府がやつたら奬勵の爲めだらう。時に此向ふの家は少し豪ら相だが、何だな。

愚姪　明き家ですよ。こないだ迄お醫者さんがゐたのですよ。些とも患者が來ないで氣の毒の樣でした。東京ほど藪醫者と三百代言の多いところは有りませんね。

愚叔　何さ。商賣の餘り繁昌するのは尙氣の毒だ。それに藪醫の多いのは卽ち醫術の進歩だよ。醫術が進歩すれば病人は無くなる。病人が無くなれば醫者は要(い)らなくなる。

愚姪　では叔父さん。藪醫者ばかりに成るのでせう。

愚叔　さうだ。〳〵。藪醫者は病氣の無い時代にも必要だ。へボ相撲、大根役者、女優、水轉藝者、曲學阿世學者彼等は常にお座敷が懸かる。

愚姪　その事いへば、叔父さんところの太郎さんは、最早(いつ)學校を御卒業なさいまして?

愚叔　卒業して、そして遊んでゐる。まだお座敷がかゝらないといふ次第だ。學校の方は學生を卒業させるのが目的だらうが、學生の方はお座敷のかゝる方が目的なのだがの。いや恐らく、就職難に逢つてる私立大學の卒業生ほど場所塞(ふさ)げの物は無いぞ。かういふ卒業生を作る學校の氣が知れん。又かういふ卒業生を製造する學校の存在を認める國家の氣が知れん。瀬戸物の破片(かけら)と私立大學の卒業生と來たら、塵(ごみ)

屋も良い顔をしては持つて行かない。

惡姪　丁度信徒の無いお寺みたいなものですね。邪魔になるばかりでせうね。

愚叔　なあに。お寺の方は生臭坊主が住みさへすりやあ決して人生の邪魔物ぢやあないよ。坊主はそれを養蠶場やら政治演說會やら徵兵檢查所やら、樣々なものに使つてゐるさ。裏の墓石さへも赤ン坊のおしめ乾しに應用してゐる際だからのう。

惡姪　さうですね。坊主に較べればお寺の方がまだしも役に立ちますのね。サイダアの空壜でも何かの役に立つ時節が有ると思へば、物品の方は仲々重寶なものですね。

愚叔　全くだ。人間ほど潰しにしてから役に立たないものは無い。

惡姪　けれど、女だけは生きてる間なら、何うか恁うか潰しがききますわ。

愚叔　さうだ。潰しが利くといふ幸福を持つところから、女は屢ば潰しにされる。否餘り多く潰しにされる。

惡姪　つまり婦人矯風會の事業なんかは、その潰しをふせがうと云ふのでせう。

愚叔　なあに。あれは娼妓を潰しにしやうといふのさ。いくら貴婦人や紳士が演說しても牛肉から牛が作れもすまいよ。大方娼妓の引肉でも作るつもりでゐるのだらう。

惡姪　滅相な。叔父さん。この頃の貴婦人を、そんな何も出來ない人形のやうに思つちやあ、全く了簡違ひでございますよ。ノラの文句ぢやないけれど、彼等は既に人形の家から出ましたよ。

愚叔　そして自働車乘りと一緒に千葉の鐵道路線を步いたか。

惡姪　それどころぢやないわ。繃帶お卷きます。バザアもやります。花の日にはお花も賣ります。

愚叔　成程。それが衞生的の運動ですか。村井弦齋の發明にかゝる――

惡姪　あら。叔父さん。衞生の爲めなんて。そんな物

ぢやありませんよ。最つと高尙な目的の爲め‥‥

愚叔　ではマサカと思ふが、經濟の爲めかい——贔負(ひいき)役者を呼ぶ費用の

惡姪　叔父さん。いけません。

愚叔　でも經濟と衞生の話の他は、婦人雜誌には何も書かれてやしないぢやないか。その他の讀書を日本の女がする事があるかの。

惡姪　でも貧民とかその他世間の氣の毒な人々の爲めに、皆さんが女ながらも盡さうといふのでせう。

愚叔　ふん。それでは貴族的救世軍か。貴族的花賣女。貴族的看護婦。貴族的養蠶‥‥

惡姪　氣の毒な同胞に寄する同情の涙を以て‥‥

愚叔　なに？　涙？　涙！　都會の女が劇場以外の何處に於いて、他人の爲めに泣いた例(ためし)が有る？

惡姪　では女は泣かなくつてはいけないのですか。

愚叔　なあに泣かなくとも宜しい。たゞ泣いた眞似をすればいゝ。そして若し對手(あひて)の男を泣かせる事が出來れば更に好い。人類の中で多く泣くものは女だ。けれども眞に泣くものは男だぞ。

惡姪　若し對手の男を笑せる事が出來たら何うでせう。

愚叔　他人を笑はせる事をするな。他人を笑はせる者は馬鹿か、然らざれば惡魔である。惡魔は決して他を苦しめて泣かせはしない。彼は必ず他を苦しめて笑はせる。總てカリケーチユーアを描くものは惡魔の弟子だ。何となれば、彼は本當の事を言ふからだ、虛言をつけ。虛言をつけ。虛言を吐く事は多くの女を悅ばせ、虛言を聞かされる事は更によく女を悅ばせる。そして僞りの涙は男の悅ぶところとなるのだ。

惡姪　では若し女が本當に泣いたら何うでせう。

愚叔　自分の爲めにかい。勿論然だらう。女が本當に泣く可き理由があつて泣いたなら、周圍は恐らく逃げ出すだらう。

惡姪　では男が若し泣いたなら。

愚叔　正直なる男が常に戰ふ如く、愚かなる男は常に泣くよ。泣けば周圍は彼を殺す迄のことさ。貧乏し

た馬鹿な男の愚痴を知つてゐるかい。その歌に曰くさ。

死んだなら、幾か二分かと笑ふだろ
生きてる中は百も出さない

生きてる中は見殺しにして、死ねば神様にして下さる。神様は本當にお供物を喰べはしないからな。

惡姪　若し神様が本當にお供物を喰べたら……

愚叔　それこそ誰もお供物を上げはしなからう。世間に神様と自稱する輩が、最後に失敗に終るのはお供物に手を出すからだ。

惡姪　では近年出來た憲政の神様とやらいふものは何も召し上らないのでせうね。

愚叔　さうよな。憲政の神様も人民を喰ひ物にしないで下されば有り難いことだがの。若し喰ふところを見られたら、忽ち祭壇から引ずり卸される事だらうよ。だが、惡姪よ。お酒造は飲みやうに依つてはいゝものだぞ。

惡姪　何だか。我田引水ですね。一本つけませうか。

愚叔　何卒賴む。人間の創造した物の中で樂器と酒とは神の前に誇るに足るものだ。書物を讀んで誇大妄想になつた奴は、我を忘れるのであるが、酒を飲んで管を卷く場合には必ず本性を違ふものではない。だから酒は誠に輕便なる人間價値の計算器である。

惡姪　さうでございますか。酒を飲ませれば本音を吹くのでせうか。

愚叔　なんの、〳〵、酒が本音を吹くものか、酒は人をして虛言を吐かせる。而して虛言は人をして本音を吐かせるのだ。

惡姪　その虛言で女と共に樂むのですか。

愚叔　話は屢ば逆轉するな。丁度日本の思想界のやうに。虛言を解する賢い都會の女は常に微笑み、虛言を解せぬ田舍の男は屢ば泣くのだ。

惡姪　では叔父さん。田舍の女は何うでせう。彼等に虛言が解りますか。それとも彼等は都會の女の持たぬ他人の爲めの涙を持つてゐませうか。

愚叔　彼等には愚鈍と服從が有るばかりだ。田舍には

ぢやありませんよ。最つと高尚な目的の爲め‥‥

愚叔　ではマサカと思ふが、經濟の爲めかい――贔負(ひいき)役者を呼ぶ費用の

惡姪　叔父さん。いけません。

愚叔　でも經濟と衞生の話の他は、婦人雜誌には何も書かれてやしないぢやないか。その他の讀書を日本の女がする事があるかの。

惡姪　でも貧民とかその他世間の氣の毒な人々の爲めに、皆さんが女ながらも盡さうといふのでせう。

愚叔　ふん。それでは貴族的救世軍か。貴族的花賣女。貴族的看護婦。貴族的養蠶‥‥

惡姪　氣の毒な同胞に寄する同情の涙を以て‥‥

愚叔　なに？　涙？　涙！　都會の女が劇場以外の何處に於いて、他人の爲めに泣いた例(ためし)が有る？

惡姪　では女は泣かなくつてはいけないのですか。

愚叔　なあに泣かなくとも宜しい。たゞ泣いた眞似をすればいゝ。そして若し對手(あひて)の男を泣かせる事が出來れば更に好い。人類の中で多く泣くものは女だ。けれども眞に泣くものは男だぞ。

惡姪　若し對手の男を笑せる事が出來たら何うでせう。

愚叔　他人を笑はせる事をするな。他人を笑はせる者は馬鹿か、然らざれば惡魔である。惡魔は決して他を苦しめて泣かせはしない。彼は必ず他を苦しめて笑はせる。總てカリケーチユーアを描くものは惡魔の弟子だ。何となれば、彼は本當の事を言ふからだ、虚言をつけ。虚言をつけ。虚言を吐く事は多くの女を悦ばせ、虚言を聞かされる事は更によく女を悦ばせる。そして僞りの涙は男の悦ぶところとなるのだ。

惡姪　では若し女が本當に泣いたら何うでせう。

愚叔　自分の爲めにかい。勿論然だらう。女が本當に泣く可き理由があつて泣いたなら、周圍は恐らく逃げ出すだらう。

惡姪　では男が若し泣いたなら。

愚叔　正直なる男が常に戰ふ如く、愚かなる男は常に泣くよ。泣けば周圍は彼を殺す迄のことさ。貧乏し

た馬鹿な男の愚痴を知つてゐるかい。その歌に曰くさ。

死んだなら、總か二分かと笑ふだろ
生きてる中は百も出さない

生きてる中は見殺しにして、死ねば神樣にして下さる。神樣は本當にお供物を喰べはしないからな。

惡姪　若し神樣が本當にお供物を喰べたら……

愚叔　それこそ誰もお供物を上げはしなからう。世間に神樣と自稱する輩が、最後に失敗に終るのはお供物に手を出すからだ。

惡姪　では近年出來た憲政の神樣とやらいふものは何も召し上らないのでせうね。

愚叔　さうよな。憲政の神樣も人民を喰ひ物にしないで下されば有り難いことだがの。若し喰ふところを見られたら、忽ち祭壇から引ずり卸される事だらうよ。だが、惡姪よ。お酒造は飲みやうに依つてはいゝものだぞ。

惡姪　何だか。我田引水ですね。一本つけませうか。

愚叔　何卒賴む。人間の創造した物の中で樂器と酒とは神の前に誇るに足るものだ。書物を讀んで誇大妄想になつた奴は、我を忘れるのであるが、酒を飲んで管を卷く場合には必ず本性を逸ふものではない。だから酒は誠に輕便なる人間價値の計算器である。

惡姪　さうでございますか。酒を飲ませれば本音を吹くのでせうか。

愚叔　なんの、〳〵、酒が本音を吹くものか、酒は人をして虛言を吐かせる。而して虛言は人をして本音を吐かせるのだ。

惡姪　その虛言で女と共に樂むのですか。

愚叔　話は屢ば逆轉するな。丁度日本の思想界のやうに。虛言を解する賢い都會の女は常に微笑み、虛言を解せぬ田舍の男は屢ば泣くのだ。

惡姪　では叔父さん。田舍の女は何うでせう。彼等に虛言が解りますか。それとも彼等は都會の女の持たぬ他人の爲めの涙を持つてゐませうか。

愚叔　彼等には愚鈍と服從が有るばかりだ。田舍には

娘も嫁も無い。田舍の女に年齡は無い。彼等は皆齊しく老婆の如く粧ひ、老婆の如く語つてゐる。東京に於いて、娘は自分自身を粧飾品と成さうとし、母は娘を自分の粧飾品としやうとしてゐる。彼等は口で僞る如く體をも僞る術を知つてゐる。娘化粧すりや狐がのぞくといふ言葉があるのを見ても、化ける事に於いて娘は狐の師であるのだ。彼等の學校は三越白木である。そして彼等は劇場でも公園でも、あらゆる場所あらゆる機會を展覽會にしてゐるのだ。

惡姪　では女學校は何の爲めでせう。

惡叔　知れたこと。嫁入道具としての免狀を賣る幼稚園ぢやないか。

惡姪　それは兎も角、東京の女のいゝのは夏姿ですわね。冬の仕度は金目を誇示する爲めのもの、美は夏姿で見て貰ふのですよ。浴衣地の柄意氣はとても田舍の叔父さんなぞには解りやしませんもの。昔は繪にあるやうな女といふ事を言つたでせう。此頃ぢや美人繪より美しい女を時々見るやうですよ。

惡叔　そりやあ、女が昔より美しくなつた爲めばかりではない。繪の方が昔より下手に成つたからだらう。

惡姪　でも昔からみれば美術界はなか／＼盛んなのでございますよ。展覽會の數も殖えたでせう。從つて畫家の數も殖えたでせう。見物人の數は一層殖えたでせう。

惡叔　無定見で亂雜な展覽會の數が殖えたといふのだらう。流行に乘せられ虛名虛榮に迷ふてへマムショ入道を樂書する低能兒が殖えたといふのだらう。彼等は髮の毛さへ長く伸ばせば畫家に成つたと思ひ込んでゐる。それから淺草公園をブラック積りで展覽會へ行き、活動寫眞の繪看板か繪葉書屋の店頭で藝者の寫眞を見るやうな心得で、先づ何よりもしどけない姿の美人畫の前に群集する彌次馬連が殖えたといふのだらう。それから經師屋と八百長で揮毫料をせり揚げる日本畫家が景氣がいゝといふ噂なんだらう。

惡姪　ところが、叔父さん。その彌次馬といふものこ

そ、東京第一の名物でせうよ。火事だと云つちや出て來、水だと云つちや出て來、花が咲いたと云つては出、電車が何うした内閣が怎うしたと、その都度彌次馬は出て來るのですよ。

愚叔　いや、また今日此所へ來る道の交番の前でも見たよ。

惡姪　それは大方迷い子か何かに集つたヤジ馬でせう。それから、カッフエでもバアでも公園でも、何處へ行つても澤山ゐますよ。

愚叔　名物にうまい物無しとは此彌次馬の場合にも適合する。だが彌次馬彼自身は「江戸ッ兒だい」と思ひ込んでゐるのだらうさ。多勢寄つて彌次馬の團體を構成すると、俄に鼻息が荒くなつて猛りたてたり喚めたりするが、一人になるとカラ意久地の無いものでの。侠氣だの何のといふのは講談本の傳說さ。矢張長い物には卷かれろで、小悧巧に世を渡つてゐるだけのもの。それが卽ち今日の江戸兒だ。

惡姪　叔父さんのお言葉ですが、もう少々彌次馬の心を理解して頂たうございますよ。彌次は彌次でも江戸兒の彌次は國民議會あたりのお上りさんとは格式が違ひますよ。火事場へ「わあッ」と驅けつけるにしても、たゞ景氣のよさに吸ひ寄せられるのです。コーリッチが火事を好んだと同じ心意氣なのです。自分の物他人の物、それを助け出さうといふ善心なんかではないのですからね。たゞ交番の前へ立つにしても「何處の迷子だらう。可愛相に」といふ言葉の奥に、その覗く心の中に、何だらうといふ好奇心があるのです。口でいふほど憐憫なんて生やさしい心ではないのです。それ怪我人があつたといつて驅け集まる群集の心には、その血を見やうといふリファインされた殘忍性が有るのです。到底、田舍の叔父さんなんかには解らない、味の有る殘忍性が有るのです。

愚叔　江戸兒の讃美と詠嘆は、その位にして切り上げちやあ何うだ。彌次馬なんぞ何那縺つた味があるにしろ、味方に附けて得も有るまいに。

惡姪　本當に然。江戸兒は味方につけて得の行くやう

な人類ぢや無いでせうよ。けれど叔父さん。江戸兒に悋つたれた者は一人も有りませんのね。日給三四十錢の砲兵工廠の職工でも電車に乘れば毎も一錢の通行税を拂つてゐますもの。

愚叔　そりやあ、お前東京ばかりの事ぢやあないよ。日本ぢう皆誰でも通行税を拂つてゐるよ。砂糖でも鹽でも織物でも悉く間接に税はかゝつてゐるんだ。尙將來は貧民税と云ふものを拵へて、皆で金持を唯喰はすやうにしやうと考へてゐるんだ。そこが日本人の氣前のいゝところよ。西洋の文明國にはとてもこんな例は見られまい。だから日本の政府はいつも借金の勘定ばかり仕事にしてゐるんだ。嘸かし算盤が上手に成るだらうよ。

惡姪　次に東京人の誇りといへば魚河岸の兄いでせうね。いなせの勇み肌といふのが昔から賣物なのですよ。

愚叔　兄いが勇みだど、魚のイキがよくなるのかい。私が見たところぢやあ、世界中に魚河岸くらゐ穢くつて臭いところはないと思ふよ。泥の上を鮪をずる〳〵引ずつてゐたり、通る奴の惡臭といつたらないぢやないか。あれが人々の口へ這入るものを扱ふところなんだからやりきれないと、田舍者の常識では考へるの。

惡姪　えゝ。けれど大方江戸兒の勇み肌で魚の穢れはとれるのでせう。まあ、あの儘改良する事もないのでせうね。砲兵工廠の煤煙なんかは政府事業で盛んに噴出させてゐますが、あれも肺病とかの藥に成るのだ相ですよ。だから周圍に多くの肺病人がゐるわけですね。之も東京名物の一つに數へられてゐるのですよ。

愚叔　成程、市内の眞中で煤煙製造とは面白い。政府は仲々事業の思ひ附がいゝよ。煙草專賣局も衞生品だ。今に電氣ブラン專賣局、娼妓專賣局、なんか大に有望な事業だらう。たゞし値段が高くなるのは需要者の少々迷惑とするところだな。

惡姪　東京名物の一つとして、殺人犯がありますよ。

數年前から之も名物の一つのスリが無くなつたと思ふと、人殺しが殖えました。

愚叔　なに、人殺し！　物騷な事だの。

惡姪　いゝえ。唯の人殺しぢやありません。逮捕されない殺人犯が流行るのです。

愚叔　ふん。巡査の數が不足してゐるな。

惡姪　いゝえ。犯人の數が少し多いのでせう。それに泥棒の方が收入も巡査より幾分か多いかも知れません。先達て、家の筋向ふの質屋とやらへも强盜が這入つてピストルを主人に突きつけて、「命惜しくば金を出せ」と定り文句ですとさ。

愚叔　ふん。それで、命を持つて行つたかい。金を持つて行つたのかい。

惡姪　泥棒ですか。無論金を持つて行つたでせう。質屋の爺の命では酒を買ふことも女を買ふことも出來ますまいから。

愚叔　馬鹿な泥棒だな。取り損なつた命ですら賣物にして新らしい女共なんぞは、毎月のやうに原稿料にしてゐるやうだぞ。新聞を讀まない人の知らない事だけれども。

惡姪　えゝ、そりあ然ですねえ。大石良雄の取つた上野介の命は、如何に多くの役者と浪花節語りと不品行な道學先生とに如何に多額の遊蕩費を與へた事でせう、み吉野も花が咲かねばアリャたゞの山。什我兄弟も大石も首を取らねばアリャたゞの人でせう。他人の首を所望するのは生蕃人やサロメの醉狂ばかりぢやありますまいよ。

愚叔　さうとも。だがのう。惡姪。吉良上野の首も人間が取れば英雄的といふ譯だが、赤城山の狼が討取つたら、殘忍だといふに過ぎぬだらうのう。同じ事でも人間がやれば人道、獸がやれば非人道。こりゃ當然だ。讀んで字の如しぢやから。

惡姪　然でございますとも。同じ菜食主義でも鈍夫や惡姪がやれば貧道主義で、トルストイがやれば人道主義といふところでせうからね。つまり、そこがトルストイの豪いところなのでせうね。東京の文壇に

いふ精神界の巨人連の中で近頃トルストイといふものが、流行してゐますが、田舎の方の景氣は何うですね。

愚叔　トルストノとやらいふ文士連の喰物は田舍にゐちやあ見た事も無いが、菜食の方は私の村ではずいぶん古くからやつてゐるやうだ。魚と來ては鮭の鹽引と眼玉の赤い鰯位しか無いものだから。玄米や半搗米を喰ふ事でも日光浴でも登山でも、自慢ぢやないが、私の村などの方が東京よりずつと先に流行つてゐる。私の生れる前からやつてゐるやうだ。

愚姪　叔父さんまたそろ〳〵持前の法螺か始まりましたことね。叔父さんは法螺と政治道樂が無いと本當にいゝ人ですけれど。

愚叔　法螺の無いところに政治が有るものかな。法螺を吹けばこそ、誠意の無いものが大臣にもなれゝば、無學な着炭組が代議士にも成れるのさ。法螺が政治家を造ることは、猶辭令が官吏を造る如く確實だ。

愚姪　叔父さん。そんな事を憤慨する暇で、叔父さんの村から女中を一人お世話して下さいませんか。目下東京は女中難で皆惱まされてゐるのでございます。今日、嫁を苦しめる者は姑よりも下女でせうよ。

愚叔　駄目だ。〳〵。田舍でも女中難は流行だ。コレラにしろ遊蕩文學にしろ活動寫眞にしろ、東京で拵出した惡いものは一度は必ず田舍へ流行つて行く。

愚姪　何ですか。活動寫眞も餘り流行る爲めに取しまりが嚴重に成るとやらで、子供と大人は別々の物を見るやうに成るのですとさ。

愚叔　親は親、子は子といふのだらう。親子別ありといふ新道徳で、愚叔大賛成だ。たゞ子供を連れて淺草へ行つた時なぞは不都合だらうな。矢張芝居や活動の見物には曲學阿世的に家族制度を尊重した方が便利のやうに思はれる。

愚姪　夫婦別有りも夏向きでございませう。

愚叔　さうさ。田舍へ行けば春夏秋冬いつでも夫婦別ありだ。お前の家のやうに夫婦一緒に街中を歩いて見ろ。直ぐ道祖神のやうだといつて笑はれるわ。

惡姪　それでもお叔父さんのところ位子供が澤山生れれば十分だわ。けれど一體人間の子供が生れるといふ事は惡い事なのでせうか。

愚叔　子供の生れるのは結構な事としてある、だから子供が生れゝば羞かしげも無く、お祝ひをするぢやないか。又自慢相に連れて歩くぢやないか。たゞ子供は生れるまでの過程に何か惡い事でもあると見える。

惡姪　して見ると毛蟲が蝶に成るやうなものでぜうか。人間といふものは。

愚叔　いや、だが生れてから後はその倒だといふ事だ。子供の時が美しい蝶々で成人するとさなぎに成り、終ひは毛蟲といふわけだ。

惡姪　大臣だの大將だの元老だの叔父さんなどは、つまり毛蟲の境涯ですのね。

愚叔　お前なんぞも間も無く毛蟲の群の中へ這入るよ。可憐高堂明鏡白髮を悲しむといふ文句の通りだ。其時は鏡を見るのもいやになるだらう。聖書は惡人の爲めに書かれたものであるのに、常に善人のみが之を讀み、鏡は美人の爲めに作られたのに、醜女や老人が之を見ては嘆いてゐる。あゝ、くたびれた。此位で一服やらう。

お斷り。本文中衆議院を衆愚院とせしは決して駄洒落に非ず。たゞし、少數黨の故を以て否決さるゝや否や、之も亦迂生の知るところに非ず。

—大正六、七、一—

木食僧と語る

田中貢太郎

一

瀧田樗蔭さん――

貴君からお話のあつた木食上人に愈々逢つてみました。それから桂月翁にも逢つて貴君の傳言を傳へました所が、幸い好い材料があるから執筆しても宜しいと申して居ります。私が桂月翁を知るやうになつてから既に十餘年になりますが、その間、山水に遊行する爲に旅行するのは別として、家に居る時でも、暇さへあれば散歩に出て、滅多に書齋にゐるやうな事はなかつたが、何うした事か今年になつて好きな散歩をパッタリ止めて、庭いぢりを始めて居りますから、訪問されるには好都合かと思はれます。

雜司ヶ谷町にある桂月翁の住居は、故鹽井雨江氏の居た所で、庭が廣く、其所には抒情詩人の趣味に叶つた種々の植物を植ゑ、一方には柴折戸なども設けてありましたが、桂月翁が住ふやうになつてから、その漢詩人風な大まかな、群の中に個を消して、その中に趣きを見出さうとする趣味によつて、柴折戸を取除け、樹を植かへなどした上に、離屋や書庫の増築をした爲に、庭は一變して見えますが、それでも表座敷の前には、幾何かその面影が殘つて、抒情詩人が植ゑてあつた二三本の老梅は、枝の其所此所を切られながらも花をつけて、夏は深緑の葉蔭に黄ろな實を見せます。櫻も咲きます。いぢけた孟宗竹には、二三本の筍も出ます。びしよ〳〵と降る五月雨の中に仙人の眉毛のやうな花を見せた栗は、秋風の中に實をこぼします。青桐は緑の洋傘を翳し、大きな芭蕉の葉には、時とすると雨蛙が這つて居ります。一叢の萩も咲き、薄も穗を抽

きます。庭の中で多い樹は楓で、秋はそれが皆紅葉します。門を這入つた右側の軒口には、山柿の樹が一株あつて、秋の末に赤い玉を綴ります。楓の林の中には、稚い松の木もあります。山茶花が散り、八手の花が冷たい空氣の中に顫へる頃には、庭が冬ざれて日の光さへ佗しうございます。

その庭の眞中には、何時の間にか小さな花壇が出來て、櫻草、チウリップ、アネモネ、薔薇、朝顔、ダリヤ、菊など四季折々の草花が咲きます。これは桂月翁の二番目の令息の仕事であります。庭の中には、金魚が飼つてある池もあります。それも一つではなく、手洗鉢の傍に二つと、縁側から見る庭の左隅にも一つありますが、それははじめの二つよりは餘程大きうございます。池の他にも木で造へた箱があつて、それにも金魚を飼つてありますが金魚はその箱池の中に入れてあるのが好い金魚だと云つて、桂月翁の孑孑を遣るのを度々見た事があります。

昨今桂月翁は、その庭に深山幽谷の趣を擬へると云つて、日々庭に下りて居ります。跣足で尻端折になつたり、蝗蚸のやうな痩せた赤黑い體軀に褌一つしたりした橐駝師は、鋸を持つて楓や梅の枝を惜し氣もなく切つたり、鍬を揮つて八手や檜葉を植替へて居ります。私の見覺のある青木は、數日の中に三所ばかり位置を變へました。『樹と云ふものは、なか／＼枯れない物ですねえ』と縁側に腰をかけて私が感心すると、座敷で裁縫してゐる奥様が『本當にねえ』と笑顔をします。

桂月翁は此方へ裸體の背を見せて、切々と土を堀つて居ります。『樹になつて見ても、彼方此方に遣られちや、安心が出來ないですね』と少し大きな聲をすると、桂月翁が一寸振返つて、顔の中の狹い髭の濃い口元に微笑を見せます。

『植かへる事は好いとして、あんな樹をドン／＼切つて、それで樹が足りないと云つて、買ひに行かれるには困りますよ』と奥様が小さな聲でこぼします。それが聞えると、『山の神は吝嗇で困る』と翁が云ひま

す。私も江戸川の緣日へ一所に行つて竹などを買つた事がありますが『山の神に又叱られるか。』と云つて屁つた車に買物を積み込んで歸りました。

桂月翁の目的は、庭の左隅に方つて、隣家の檜や銀杏の樹が見えるので、それを自分の家の眺望に取入れて、木立を奥深く見せやうとするのにありますから、それが爲に眺望の邪魔をする庭樹の枝を切り切りしたものであります。それは數年前、箱根にある某別莊にゐた時に覺えた事であります。私も桂月翁の關係でその別莊に好く出かけて行きました。其所には立派な西洋館と日本屋との數棟の建物があつて、庭には溪の流れを引いてありました。その別莊では、四方にそゝり立つた山の線を取入れる爲に、庭の樹を短くしてありました。『よく考へたものだ。』と桂月翁は私に庭の案内をしてくれながら話した事があります。桂月翁が今それを我家の庭に應用しようとした所であります。

樹の配置が一わたり出來ると、池の先に築山をはじめました。最初私が見た時には、山の上に尖つた石を並べてありましたが、その後に見ると、尖つた石を除つて、山の向ふを固く低くしてありました。『はじめの方が好かつたやうですね』と緣側に腰をかけて私が云ふと、山の裾の方に杉苗を植ゑてゐた桂月翁は、『――何うだね深山幽谷に見えるかね、』

『左様ですなア』と云つたぎりで煙草を飮んでゐると、桂月翁は杉苗を置いて、表座敷から鍵の手のやうに折れ曲つた書齋の緣側の前に來て、『此所から見給へ』と云ひます。

云ふ通りに翁の傍に行つてみましたが、築山の背後に植ゑた小さな杉の樹が枯れたやうに葉を卷いて、築山と少しも調和しません。『左様ですなア、』と云つて後を何とも云はずに居りますと、『それぢや此所から見て見給へ、』と云つて桂月翁は私を連れて行かうとします。で、隨いて行きますと、池の前に行つて蹲むやうにします。私もそのする通りに蹲んでみましたが、少しも深山幽谷らしい趣が見えません。『どうだね、矢張り見えないかね、』と桂月翁が云ひます。私は云ひや

うがないので、『ヘエー、』と云つて薄笑をしますと、桂月翁も笑ひ出しました。

私は縁側に引返して腰をかけました。『何時になつたら深山幽谷になるでしようね、』と座敷に居りました奥様が笑ひながら小聲で云ひました。

其所へ金魚賣の爺仁が這入つて來ました。奥様は爺仁が度々桂月翁に高い金魚を賣りつける事を知つて居りますから苦い顔をして居りました。奥様の顔色を讀んだ爺仁は、桂月翁の傍に行つて、何か世間話をしながら隙を見てゐて、奥様が奥の方へ行つた間を見て、『旦那に買つて貰ふと思つて、わざ〳〵持つて來ました。』と云ひました。左様云はれると厭と云ふ事の出來ない桂月翁は、『左様か、よし、よし、』と承知をしました。爺仁は喜んで門の外に据えてある荷物を取りに行きました。それを奥様が知つて、『子供に買つてやりたい物さへ買はずに居るぢやありませんか、妾が斷りますよ、』と云ひました。桂月翁は笑ひながら、『まア、好い好い、』と頷きました。『好い事はありませんよ、妾が斷りますよ、』と云つた奥様は、急いで玄關口を出て行つて、爺仁が金魚の荷物を擔いで這入らうとする門の戸をぴつしより閉めて、『金魚屋さん、氣の毒だけれども、歸つて頂戴よ、』と云ひました。庭にも座敷にも一頻り笑聲が起りました。

二

瀧田樗蔭さん——

話が反れて桂月翁の事になりましたが、これから注意して、木食上人の事を話します。

木食上人は、府下王子町字王子にある阿彌陀堂の堂守であります。飛鳥山の下で王子電車を下り、石神川（瀧ノ川）の小さな流に架した橋を渡つて王子權現の境内を拔け、柱も格子も一面の朱塗になつた隨身門の前に立つて見ると、一町ばかり眞直に通じた正面の路が右に折れ曲つた所に、草葺屋根の黑い片端が新綠の間から見えます。それが木食上人と云はるゝ堂守の住む阿彌陀堂であります。

私の行つたのは、五月雨の空が暗く曇つて、微寒を

覺ゆる日でありました。入口には木槿の生垣がありました。生垣の内は一面に大小の石碑がゴタ〳〵と並んで、その間に墓地を區別する爲に要冬青や杉の生垣をしてあります。杉は新芽を吐いて居りました。墓地の中には、又桐や樅なども植えて居りました。

その奥になつた阿彌陀堂は、狹い室を二つに支切つて、一方四疊半ばかりの所を本堂にして、其所に阿彌陀像を安置してありました。近所の者らしい十四五歳位の小娘が、三人ばかり子供を連れて來て、本堂の疊の上で遊んで居りました。佛壇の前には、赤く塗つた木魚や鉦なども見えました。堂守の木食上人は一方の薄暗い室で、裸體で衝立つて居りましたが、小娘を通じて來意を告げると、直ぐ出て來て、小さな經机を引寄せ、それに兩手を突きながら私と差向になりました。

名は山下覺道、當年六十五歳との事でありましたが、見た所は五十前後であります。この二十餘年、水浴ばかり遣つて湯に這入つた事がないので、皮膚は蒼黑いが、引締つて如何にも堅さうに見えました。型を置いた藍が剝げて松の皮のやうな赤茶けた色をした袷を着て、頭には木彫の觀音像をつけた鼠色の角帽子を冠つて居りました。一體に野性を帶びて、先達とか堂守などには好くある自我の强さうな型であります。

『木食をお始めになつて何年になりますか、』と聞くと、『左樣だ、二十五年位になるかな、此所へ這入ると共に始めたから、』と鄕の大きな地聲で答へました。

『木食をお始めになるに就いては、何かお考へがありましたか、』とその動機を問ひますと、『それは他の坊さん達は、學問があるから學問で行を積む事が出來るが、私には學問がないで、其所で他の坊さん達の好うしないやうな事をして行を積まうと思ふて始めた事ですわい、』と云ひながら立ち上つて、堂の下へ降りて遊んでゐる子供の方に向ひて、『杉の葉取つて來ておくれ、お客にたべる所をお目にかけるから、』と云ひました。

小娘は子供を連れて、石碑のある方へ行きました。

私は又經机の前に戻つて來た堂守に向つて、『木の葉や

草であつたら、どんな物でもたべられますか、」と聞いてみました。「たべられない事は無いが、堅いのは咽喉へ引ッかゝつて困る。たべるには新芽が好い。」と云うてゐる所へ、小娘が杉の新芽の摘んだのを一握り持つて來て、經机の上に置いて行きました。

堂守はそれを口に入れて、靜かに噛みながら、「新芽なら何んでも好い、草でも生へたてに限る、」と云ひました。白い泡が黄ろな齒ぐきに絡るのが見えました。

「左樣しますると、草でも木でも、たべる物とたべない物とありましようね、」と聞いて見みると、「今は柔な物なら何でもたべるが、はじめ六年位は厭な物があつたわい、」と飽くまでも飾氣の無い返辭であります。

「お茶なんか何うします。」とうつかり聞くと、「火の入つた物はたべないと云ふ心願で始めた事だから、茶も酒も飲まないが、水かて其樣なに飲まうとは思はない。水や茶の飲みたいのは火の入つた物をたべるからだ。私しのやうに天地自然のものを生でたべて居れば、水や茶が飲みたうないばかりか、この身體は天地一體だから、」と云ひながら、胸をはだけて、右の指先で胸の肉を撮むやうにして、「決して死ぬると云ふ事がない。行が積んでくれば、人の眼には見えないやうになるが私は決して死なない。」

二人が夢中になつて話して居ると、一人の若い紳士が上つて來ました。縞絽の羽織を著て、黄金緣の眼鏡をかけ、黄金側の腕時計をした商人風の男でありました。緣側には紳士の著てゐた鼠色のインバネスとパナマ帽と、それから手にして來たらしい樒の枝とが、それに添へて置いてありました。

紳士と堂守とは、親しい仲と見えて、互に隔のない口を利き合ひました。其所で私も一所になつて、種々の事を話してゐる内に、紳士が用事があるやうにしますから、「何かお有りになるなら……」と云ひますと、紳士は堂守の方に向ひて、「ぢや卒塔婆を願ひましようか、」と云ひました。堂守は氣輕く、「お經も一所にあげやうか、」と云ひますと、「いやお經は後であげて置いて下さい。」と紳士が云ひました。

堂守は佛壇の前に立てかけてあつた五六尺位ある削り立ての卒塔婆を持つて來て、壁際の机の前に坐つて、折れた墨の缺けらを持つて磨りはじめました。そして墨が濃くなると、筆を鬢に持ちながら、上の方に梵字を書き、その下に、『右釋覺善信士第正月菩提進當者也』と書きましたが、『善は、どう書くかな、』『信は、どんな字であつたかな、』と堂守はその度ごとに筆を控へて分らない字を聞き聞きしました。

書いて了ひますと紳士は懐から紙入を出して、『二十五錢でしたね、』と云つて二十錢銀貨と穴のある五錢の新貨とを出して前に置きました。堂守は卒塔婆を佛壇に立てかけた後に、『どうも有難う』と云つてその錢を取りました。

紳士は堂を下りて、緣側の梻の枝を持つて墓場の方へ行きましたが、やがて戻つて來て、インバネスを著、帽子を冠つて出て行きました。

私は又堂守に向つて、『草や木をおあがりになつても、秋までは宜しうございましようが、冬はどうなされます。』と聞いて見ますと『冬は草の根を堀つてたべたり、木の葉をもんでたべますが、それでも不自由ですから、野菜を買つてたべます。』と答へました。

紳士と入違へに三人連のお神さんが來て、次の室の庭へ這入つて行きましたが、やがて出て來た所を見ると、皆線香の束に火をつけて居りました。そして打連れて墓場の中に行きましたが、直ぐ戻つて來て、本堂に上つて來ました。堂守は次の室から、白い襦袢のやうな物を持つて來て、その內の顏の平べつたいお神さんに遣りました。お神さんは嬉んで、禮を云ひながら、同行の二人に見せて、『子供が不仕合だから、今度の子に著せやうと思うて、坊さんに賴うであつた。』と云ひ云ひしながら懐に入れてゐた草色の風呂敷を出してそれを包みました。

お神さん達は直ぐ歸つて行きました。私は又、『日に何度位お上りになります。』と聞きました。堂守は、『家にゐる時は、二度たべる事にしてあるが、外へ出る時には、歩き歩き手當り次第にたべる。』と云ひました。

未だその邊に遊んでゐた小娘は、この時又杉の新芽を摘んで來て、堂守の前に置きました。堂守は白い泡を齒ぐきに溜めながらたべはじめました。

『無論お湯には這入らないでしようね。』と云ひますと、『この二三日前まで水風呂を据ゑてあつたが、少し痛んだから彼所へ入れてある……』と堂守は戸外の方へ指をさしました。其所には車井戸と並んで小さな物置のやうな物があつて、その園に葦簾を引いてあるのが見えました。『寒中でも氷を砕いて、彼の水風呂に這入つてゐたが、寒くとも何ともない』と堂守は云ひました。

三

瀧田樗陰さん――

私は今、木食上人の現在に就いて話しました。これからその過去に就いて知つて居る所を話しましよう。

木食上人の山下覺道は、石川縣鳳至郡柳田村國光の生れで、父は田舍畫家でありました。五六人の兄弟があつて、ある者は吳服屋となり、ある者は米屋となり、又ある者は材木の商賣などをやつて居りました。覺道ははじめ父親の感化を受けて畫家になりたいと思ひましたが、『畫家は道樂商賣だから不可ない』と云つて父親が承知しないので、鐵砲鍛冶の弟子となりました。鍛冶の師匠と云ふのは、加賀侯お抱の鍛冶でありましたが、維新の瓦解と共に、鐵砲鍛冶に變つた者でありました。

東京に出たのは、二十六歳の時でありました。出た目的は矢張り鍛冶の腕を磨く爲でありましたが、それには手蔓がありません。村の者で湯屋の三助をして居る者を便つて行つて、その手傳などをして居る内に、本所の紺屋へ世話する人がありましたから、其所の奉公人に住み込んで、日々藍草を舂いたりしました。

覺道の奉公人生活はその日から始まりました。紺屋から八王子の下宿へ行つたり、淺草鳥越の佐竹家へ家敷奉公したり、湯屋の三助になつたり、米屋の配達人になつたり、王子の海老屋や上野の雁鍋など云ふ料理屋の奉公人などにもなつたりしました。或る人は、彼

が出家したのは、この奉公人時代に溜めた金を欺されて取られたからだと云ひますが、それは明瞭しません。併し彼が湯屋の三助をやつてゐる時、主人に見込まれて、養子になれと云はれたやうな事はあるらしう御座います。『お前がやる腹なら、この家を譲つても好いと云はれた事もあつた。』と堂守は私に話しました。

在家の奉公は、上野の雁鍋で終つて、寺院の奉公がはじまりました。寺院奉公をはじめた原因は魚や鳥獸などの肉食をするのが厭さからでありました。寺では一兩二分貰つて飯焚を勤めました。

最初に住込んだ寺は、上野の聖[illegible]院でありました。それから小石川の傳通院、麻布廣尾の阿彌陀寺、三田白銀の採蓮寺、芝高輪の廣覺寺、芝増上寺下の法照院、下谷の長照寺、小石川の一行院、淺草の觀音などと移つて行く内に、信仰も出來、人の信用も得たので、終に北豊島郡豊島村にある閻魔堂の堂守となりました。

併し其所も安住の場所ではなく、豊島一番の阿彌陀寺に移りましたが、移つて居る内に、漸く今の阿彌陀堂を見付けたものであります。眼に一丁字の無い僅に地藏經位を聞き憶へてゐる彼は、阿彌陀堂に移ると共に、火だちの大願を起して、所謂ゆる木食をはじめたものであります。

爾後二十五年、木食上人の名が廣まると共に、阿彌陀堂の附近に二百五六十軒の埴家が出來たので、布施の金も可成に這入るが、生活費の入らない彼は、その金を各種の寄附に出したり、手拭を買つて川口から上野間の工場に勤めてゐる職工に施して居りますが、二十餘年の間に施した手拭の數は三四萬に昇ると云はれて居ります。

四

瀧田樗陰さん――

人體は、水、鹽類、含水炭素、蛋白質、脂肪の合成物であります。それを燃燒して生存を續けるからには、常にその缺損を補充せねばならぬと云ふのは、自明の理であります。然らばこの燧人氏以前の時代に歸

つたやうな原始的生活を營んでゐる木食上人の攝取する食物の中には、遺憾なしにその缺損を補充するに足るだけの營養分が含まれてゐるのでしやうか、これは何人も知りたい問題であらうと思ひます。私はこの問題を解決する爲に、木食上人の周圍の木葉、雜草、野菜類の分析をやりたいと思ひましたが、それは時間が許しませんから、今回は唯だ飽滿に苦しんでゐる人々に向つて、同胞の一人が斯うした原始的生活を續けてゐると云ふ事を知らしただけで足れりとして止めやうと思ひます。

終りに臨んで、私がこの報告書を作る初に於いて、大町桂月翁の事を書いたのは、その手段に相違はあつても、原始的自然的生活をやつてゐると云ふ上から、木食上人と桂月翁と相通ずる所があるやうに思はれたから、それで一言を發したと云ふ事を云ひ添へて置きたいのであります。

林檎園と旅人

「土に歸れ」の著者　鳴海うらはる

一

晩熟の林檎は、花が散つて了つた。早熟は白い柔い和毛を着けた仔林檎になつて居る。

枝と枝とを交す綠の樹蔭は風の音一つ爲ない。時折、あたりの山から小鳥の囀る聲が、綠葉の茂みを通して幽かに人の眠りを誘ふ樣に聞えて來る許り。林檎の王國、津輕の果樹園の初夏、それは眞に樂園だ。

二

果樹に遣る肥料、其れは中々面倒だ。原料の選擇から配合、分量、それから果樹の種類、老樹若樹の差違ひに依つて、一々方法を異へねばならず、手數も大方でない。害蟲の驅除は、手で一疋一疋へし潰さねばならぬのがあるかと思へば、枝儘取つて、火に燒殺さねばならないのもある。其うかと思へば、藥を噴霧器に突込んで、撒懸けねばならないものもある。幹や花の腐爛れる病氣の豫防やら治療やらにも相應に骨が折れる。雜草の刈除、茂みを透す枝の切拂、其れから何のかんのと數へ立てれば、實の熟らないうちに既にこれ丈けの手間が要る。實の摘採から市場に賣り出す迄の事を考へたら、林檎一粒はそれは仇や愚で出來ない。何の事も同じだが、樂園の生活といふものも中々心の緩みのないものだ。

玆は、津輕の平野、四通八達の小都會と聞えた黑石から北西三里の僻村吉野田の林檎園。主人夫婦は黑石から五六年前に來て、松林を伐採つて開墾し、其れに林檎を植付けたのだ。林檎は未だ十分生育たない。其れに伜の清太郎が借金と小商賣の遣繰でやうやく經營してるのだから、萬事經濟で、一切のことは此初老夫婦で遣りこなす。

地積四町二反八畝十五歩、林檎の植付が、千五六百本。間作は大豆、蕎麥など。但し間作は九分通り、農夫の小作である。

三

晝の十一時だ。先づ女房が小屋へ戻る。湯を沸かして、漬物を出して、乾鱈の固いやつを焚火にいびて石の上で叩くか、乾鰊を折つて生味噌を添へたものかで晝飯の仕度が出來る。

夫が遠い場所に居る時分は石油罐を鳴して知せる。近い場所に居る時分は、

「おとさー、飯よどせあー」と晝飯の出來たことを知せる。これは働きに出た時の毎日の極りだ。

六月初夏の果樹園日和、今日は朝から夫婦が害蟲退治に働いて居る。他に、小作の百姓も二組程野菜の土懸か何かに來て働いて居る。

女房は例の通り、晝の仕度に小屋へ戻つて來ると、見慣れない風采の

若者が果樹園の門から這入つて來た。汚れた單衣に汚れた襯衣、埃に塗れ、日に燒けて赤くなつた麥稈の帽子は少し前下りに冠つて居た。

女房は眉に皺を寄せて林檎の幹の間から看た。急いで小屋に這入つて、居爐裡に林檎の枝の枯れたのを焚き付けて居ると、若者は、小屋の前まで來て止まり、麥稈の帽子は脫いで右の手に下げ、少しもぢもぢし乍ら、小屋を覗く樣にして、それから中の土間へ這入つて來た。

「今日は、」と叮嚀にお辭儀をした。

女房は、「唯、何でごす、」と言つて、熊の樣に、恐ろしく深い皺を眉に寄せて、若者の身態の全部に目を通して、笑顏を拵て、「兄樣、何方から來した？」と斯う問うた。

「おかみさん、まことに濟みませんが、一寸休ませて下さい、」と、大分身體が疲れて居るらしく、殆どよろめかぬばかりに、若者は小屋の上框にどつかりと腰をおろした。

土間に居た二羽のぷりもすろつくの雞がけげんな顏をして若者を見上げた。

四

「何か品物とでも賣るんですか、兄樣」と、女房は斯う訊ねた。

「はい、否、方々廻つて此前の山を越えて今來たばかりですが、あのう、彼處は高屋敷とか言ひましたつけ、山に這入つてから此方は路は中々解り惡うござんすね、實際弱りました、」と付かない事を言つて、暫く默つて居たが、尙も言葉を繼いて、

「斯ういふ大きい林檎園では、澤山の人が要りませうね。」斯う言つた。

「へゝ、何、そでもごへんでせあ」女房は斯う言つて、若者が何の用事があつて來たのか不思議に堪へぬ面持をした。

「おかみさん、どうでございませう、林檎の鳥取やなんか、働き人が澤山お入用でせうが、私は書生ぽで他の仕事は餘り出來ませんが、お宅の樣な、斯ういふ處は實際私の非常に望ましいのですが。一つ働かせて見て下さいますまいか。もう給料などは何も要りません。唯食せて下さる丈けで實際澤山です、北海道に親戚があつて家を出て來たんですが、生

皆其の親類も開墾が全く失敗して北見の方へ行つたとかで、私の尋ねて行つた所にはもう居ませんでした。え、其處はあの天鹽の奥の方ですが、毎年あの天鹽川の氾濫には開墾地も處によつてはから駄目なのですつて、私の小父も其れにかゝつたのです。前から手紙を出して置けばよかつたのですけれども實はあの、少し家が面白くなかつたもんですから、無情て家を飛び出したのです。小父は北海道に渡らない前、私の子供の時分、私を大層可愛がつて與れたものです。私はそれをようく知つて居るものですから、たづねて行つたらどうか世話して與れるに違ひないと思つて出懸けたのです。どうせ家を飛び出したのですし、これから家へ歸つたつて面白くもありません。百姓はもとよりの覺悟ですから、此樣な林檎園には是非お世話になりたいのです。」

「おゝ、お。お前樣廿歳一つか二つ行つたばかりだ樣だや、何したてまた家など出ふあて歩きすば。何時家から出て來たんですば、」と女房はたづねた。

「一昨年です。」

「まあ、それ程長い間、何して、暮して居したば。早く家さ歸らねいで。おいおいゝ若い中てものは少しの事でも氣揉むもので、己らも若い中あ其であつたもの、そだども男あまだ別だ事考へるもので、何でも男づものは、みんな女子の事ばかりで苦勞するもだや、己れやの五番目もそれ、まだ、二十歳になつた許りで、それ近所の一人の娘あ何だとか斯だとか言つて、急に東京の先生の所さ行かねばならねて、この貧乏暮二十圓の金なんだかんだ仕度して與ろて、品物質に置いて漸やく一月前に出してやつたつこと。この五番目童子は、小さい時から、一番親に苦させない子供で、讀んだり書いたりすることばかり好であつたはで是こそあ親の助けになると思つたきや、これあまだ世間に外聞あ惡い女子の事考へで泣たり吠えたり、まあ本當ね男の子供ていふものは。あ、お前樣も矢張り近所の娘子でも何とかひしたな? 娘あ他で育つたものだもの何ぼ器量あいゝたて、氣立あいゝたて何へすば。まあせあ、お前樣共らで無いべども。己家の子供に呆れて、お前樣に話して知せるつことし。お前樣も必ず、無分別起さねで、大概だば家さ歸るえに爲ひ! 今、おいさ來るはで、お前樣こと使つて與るか何だか話ては爲て見てやるどもし、」と自分の子に就いての繰言を並べて、若者に反省でも爲せるらな口

吻を言つた。

若者は顔を赤めて聴いて居たが、少し溜息を吐いて、

「家に帰つても面白くない訳は、あなたの息子様の事に似た様な事も少しあるのですけれども、えなあに、私は読書が道楽で、これさへあれば、何処でも一人で暮せます。尤も其為め、たいした労働は出来ません。ほんの食ふ丈です。それで此通り、彼方彼方放浪つて居る訳ですが、其代り人には決して迷惑を懸ける事は為ません。」と言訳らしく而しはきはき言ふのであつたが、どうも努めて物を言つてる様子が見えた。女房は其の初心な純心に憐憫を催ほして、斯ういふ若者一人位置いてやれないこともあるまいと考へた。

「おとさー、飯でこせあい。」大声に夫を呼んだ。

五

主人が小屋に戻つて来て、女房からも、若者からも、林檎園に使つて貰ひたいことを聴取たが、其れは矢張り出来ない相談であつた。

「まあ、何も無いども、お飯でも食べて行きひー」と言ふのが、主人の慈悲の言葉であつた。

露のがら漬、冷た若布の味噌汁、乾鰊を折つたのに、生味噌を付けたのを御馳走に晝餉の振舞を若者は主人等と一所に上框に腰を掛けたまゝたべた。

「他さ行つたら使つて呉れる所もあるかも知らないから行つて頼んで見たら宜ごしよ。」と主人も女房も注意を与へて、草鞋銭だといつて五銭の白銅一つ前に置いたら、御親切有難いと、叮寧に挨拶して懐に捻ち込み、林檎園を後に送れて立ち去つた。

若者の行方に岩木山が船の白帆を浮べた様にくつきりと空にかつてゐた。

六

「口吻の元気だ割に影の薄い若い者子だことねす、おとさ。」と女房は言つて、「巳家の子供等も彼して歩くべねす。」

若者の去つた後、例来る郵便配達夫が、一封の手紙を置いて行つた。亜米利加に行つて居る三男の三之助からの通信だ。主人は仕事に出か

やうと土間に立つたのだが改めて腰を下して、手紙の封を切り始めた。

「今の若い者子見て、三之助こと今考へて居たきや、丁度さ手紙あ来たつことねす!、お父さ、」と女房は、喜んで首を延した。

「こちらに渡つてから早四年になる、光陰の過ぐる早いのには驚いた」といふことも書いてあつた。渡つた最初の二年は、あらゆる反省を避ける爲めに、殆ど無言の修道者となつて、大根の間拔、苺の摘み、種々の農園に無智の勞働者に立交つて、寧ろ彼等勞働者に勝る位の勞働を續けた、」といふ意味も書いてあつた。「偶像も燒いて仕舞ひ、今は俳句すらも作らない、」とも書いてあつた。「歸鄕をお勸め下さる御兩親の思召も十分察するが、以來其事は決して仰せられないで頂き度い、」と言ふことをも書いてあつた。「神經衰弱は元より承知のことであるが、この頃身體がいやにだるく其上肺が[illegible]體に見ゆるので、醫者に見せたところが、肺勞の疑があるから、遠洋航海でも爲ろと勸められた。暫く金は送れない様だから、其の積りで居て貰ひ度いと」言ふことも書いてあつた。

三之助が、人並はづれて苦勞の多かつた性質の子供であつたこと。何の子も多少怜悧であることは自慢に思つて居たのであるが、三男の此子は。一層怜悧でたつた。顔立からして、色も白ければ、眉も綺麗だ。七つ八つから繪も描ければ、彫刻も出來た。怜悧さ過ぎて、二十歳の頃からの迷ひと言つたら、凄の宿る目もいぢらしかつた。山に一日も二日も寢て家に歸らないことも度々であつた。其れは何を考へるか、痛々しい位考へ事をして、頬はこける、目は落ち込む。其して繪筆やら手帳やら持つて、山に出掛け、野に彷徨つた。人の話では、大聲を上げて、山の中を走づり廻つて居たのを見たといふ。まるで狂人であつた。遂々黒森(隱者の居る山寺)に登つて彼の世捨人の坊主になつて仕舞らともしたらじかつた。それも出來ないかして、黒森の下の家の十六七戸ある山村の小學敎員になり、二年も家と通信を斷つた。彼時、人を以つて、何う云ふ積みだかと尋ねさせた時に、自分を世の中に無い者と思つて呉れといふ返事であつた。二年目に唐突に亞米利加に渡ると云つて、頭を下げて頼んで來た時、ほろほろと涙を零して居た。惡い事も爲ないのに自分で自分の身を責苛んで居る。女房はさう云ふ事も思ひ出して旅で病んで居る聰明な息子の事が無性に不憫になつた。「お父さ本當ね肺病だべかねす?」といつて、ほろりとした。

七

二三日經つた日だ。朝から霧がかかり、氣が濕つて外の仕事が出來なかつた。仕事を休んで、主人は爐邊で新約聖書を讀み、女房は日用品や酒を買ひに村へ出て行つた。

夫が北海道へ出稼に行つた後の留守居の若女房の事を此の邊で俗に夏後家と言つてる。其れに時々如何しい事が生ずる事があるので、社會に鋭敏な神經を持つた彼女は、村に出る度に其らいふ事を考へさせられるので極めて不快な氣持がしてならなかつた。相變らず、某の夏後家の家に、ほやほやの娘達も二三人交り、若衆の大勢が寄集つて、大騒で無駄話に耽て居た。

「是が百姓達だから之でも濟んで居る。是が町で見ろ、思つた許りでもぞつとする。已家の三之助達あこんなことでも見て世の中が嫌になつたのかも知れない。あゝ皆な已家の子供等あ、甥に似て、世の中を深く考へる癖だ。あゝ思ふ樣に行かない世の中だ、」と、二六時中物を考へる癖の彼女が、今の新しい學問を爲た人が思ふ樣なことを考へ出して無暗に嘆くことであつた。

衆の樣、酒店にも三四人の醉どれ百姓が管を捲いて居た。女房の顔を見ると、

「やあ、林檎園のお母樣、已の仲間さ這入つて一杯飲みひな！あゝ其れよりも、お母樣、珍らしい話がある。樽澤の、三左衞門の普請家に、一昨の晩に首縊のあつたのをお母樣知らぬべし。それそれ其だはて、一寸一寸。村さ出て出て、世の中見ることだづことし、」と言ふのは、例の冗談で、氣にも止めないが、首縊と聞いては、聞耳も立つ。

「おれアー、だれの家の人あ首縊りしたば？、」と女房はたづねた。

其れは旅の者で二十一二の若者、懷に本二册と、麥稈の帽子に、汚單衣に、汚袷衣、其れに垢のついた褌一本の他は、何も無かつたといふ。噂では、果樹園といふ果樹園、何處もかも使つて吳れと言つて歩いて居たと言ふことだ。何處の者とも知れないから、早速、樽澤のヤンタロコ（卵塔場の意味）へ假埋葬にして置いた。ひよつとしたら、お母樣の林檎園へも尋ねて行きは爲なかつたかといふのであつた。

八

女房は、家に歸つたら其事を話さうと思つて色々な事を考へながら泥にぬかる作場道を喘ぎ喘ぎ戻つて來た。

× × × × ×

其後四五日經つてから、主人が黒石の留守宅へ行く途中、栂澤を通つた。

三左衛門の普請のやう〳〵出來上つて、壁も未だ半分しか塗つて無い家が路の端に白く立つて居た。主人はこの家をちつとも知らないのだが、首を縊つた若者の名殘を訪ねる心持て、三左衛門の舊家の方へ寄つて見た。

若者の懐にあつたといふ表紙のとれた漢詩の本一册と他に、歌やら新體詩やら印刷した割合に汚れて無い小本一册とが、三左衛門の家に保存してあつた。檢視の眼に入いらなかつたのか、或は特に此家に下渡されたのか其處までは詳しく聞かなかつた。

「どれどれ、何したものですば、見ひて哭へ、」と主人は二册の本を取上げて開いて見た。主人は少しは漢詩の心得もあるので、先づ其方を所々拾つて讀んで見た。

宛轉復宛轉
宛轉日幾回
君腸應[illegible]斷
我腸車輪摧
征途險艱
人乏馬飢
富老不如貧少
美遊不如惡歸
浮雲隨風常偏四野
仰天悲歌
泣數行下

十數年實驗し來りたる自然養生法

序論――本論(一)自然に順應する適切なる食物――本論(二)自然に順應する體力の養成――本論(三)心身の抵抗力を增進する方法――結論

小野鍾山

序論

▽肉體の健康は人間生活の基本也

晩近散見するところによれば、所謂文明の理想を達するに、富力と智力とを以てせんとする傾向があるやうであるが、予は更に其上に、もう一つの要素を附加へたいと思ふ。即ち健全なる體力それである。古來人間の幸福を歸納した言葉に、福、祿、壽といふのがあるが、之をよく玩味して見ると、實に千古の名言である。福と祿は言ふまでもなく富と智とを意味するもので、壽は生命であつて、即ち肉體の健康を意味して居る。予は此三者中に於て、如何なる場合にも、肉體の健康が一番肝要であると信ずる。實に肉體の健康はあらゆる人間生活の基本であつて、而も人間幸福の出發點であり、又國家の富強も國運の消長も、一に個人の健康なる發達に繫つて居るのである。『命あつての物種』とか、『健全なる精神は健全なる身體に宿る』とかいふ諺は、此間の消息を最も明瞭に表はして居ると思ふ。然るに、今日の狀態を觀察すれば、醫學は日々に進歩すれども、此人間生活の基本たる肉體は上下を通じて段々と弱くなりつゝあるやうである。特に此傾向は都會人士の間に烈しい。之は個人に取つても亦國家將來の爲めにも、甚だ憂慮すべき重大なる事柄である。

▽文明は吾人に過度の智力を要求す

斯様になつた原因は、多々あることであらうが、要するに之は、今日の所謂文明なるものが吾人に過度の智力を要求する事にある。即ち今日の文明は、吾人人類に社會的生存を遂げしむる必至の手段として其智的活動を高度に強ゐるのである。そこで今日の文明社會では、此所謂智者を以て適者とし、所謂愚者を以て不適者とし、從つて智者はよく生存し愚者は生存し得ざる者としようとする。然し事實は適者必ずしも智者でなく、不適者必ずしも愚者ではない。故に、今日の所謂智識の有無は、生存の適不適に關せないのである。それよりも予は體力の強弱を以て、先づ生存の適不適を定めんと欲するものである。現代人の智力は之を過去に比較して見れば、非常に進歩發達して居る。然し其體力は恰度智力の反對に大いに退化して居る。自然の眼より觀て、現代人の健康が大損傷を受けて居るといふ事は、これ人間生活の基本を危くして居るものであると論斷するに憚らぬ。原則として予は各人は其皆智力に伴ふ丈けの體力を有たねばならぬと主張する。如何程智力丈けが進歩しても、其體力が弱ければ、可惜其智力も用を爲さず、恰も玉を抱いて海に沈むと同様である。即ち學術優秀の青年學生や、前途多望なる才幹の士等が、或は病のために斃れ、或は病のために棄を發するが如き、沈痛悲惨の事例が瀕々として起つて居るではないか。況んや健康なる體力があつて、初めて其上に偉大なる智力の發現を見るべきものであるから、いよ〱以て智力に伴ふところの體力、猶それ以上の強き體力を要する譯である。

▽精神生活の混迷と不統一

更らに進んで、現代人に對して大いに反省を促さねばならぬ問題は、彼等は單に物質に對する手腕は頗る巧妙であるが、之に反して精神的損害を常に招きつゝあるといふ事である。即ち彼等は眼前有形の算盤勘定には隨分と達者であるが、無形の算盤勘定には盲目同然の有樣である。予は物質に對する慾望を敢て非なりとするのではないが、餘りに利慾に驅られて居る爲めに、其心身を害して恐るべき病根を醸成しつゝあるを憂ふるのである。即ち敢然として死に赴く底の、大智大德の人が、大義大道のために身命を拋つは、實に欽崇すべきであるが、唯夫れ盲目滅法界に、利慾のために、世にも淺ましき行動を敢てし、身にも心にも自ら鑢をかけて消磨し、終には肉體の健康を害し了るが如きは、縱令物資の滿足を得たにせよ、果して其滿足が眞實の滿足たることが出來るや否や、寧ろ氣の毒の感に堪えぬのである。本來人間は只精神のみを以て生存し得べきものでなく、又物質許りを以て生存し得べきものでない。要は其一致其中庸にあるので、眞の幸福も其處に存在し、人間生活の眞意義も其處に在ると思ふ。然るに現代人の多くは、血眼になつて物資を要求し、殆ど其奔命に疲れて居る。之は所謂心を以て形の役となして居るのである。彼等の心身は、其不統一にして訓練なき事、全く寄木細工同様である。予は常に予の主張よりして、彼等は完全なる人間でないとして居る。若し予をして裁判官たらしめ

ば、彼等に對して殆ど皆禁治産者たるの宣告を與へるに憚らぬのである。なんとなれば、彼等は悉く物質の奔命の爲めに精神能力を不自然に濫費浪費して、其心身を不健全にならしめて居る事は勿論、彼等が其最も肝心なる精神能力を濫費し浪費して居るといふ事は、畢竟精神生活上の經濟を知らぬといふ事である。結局、精神上の經濟を知らず、自分の頭の中の帳簿の整理さへ出來ないやうでは、一家の會計は言ふまでもなく社會國家の大經濟の治められる譯けはない。そこで禁治産者又は準禁治産者の判決を與へるのは、決して不當な事でないと思ふ。要するに、此精神生活の混迷或は不統一といふ事が取りも直さず現代人の心身の弱くなつて居る原因の一つである。

▽心身の統一を計れ

本來宇宙界の何物と雖も、悉く獨立對峙の關係であつて、物皆夫自身に於て獨立し得られる力を有して居る。然るに多くの人は、此本然の玄微なる眞理を覺らず、且つ之を體得する事が出來ぬので、前述の如く自分自ら其心身を不具者同樣になしつゝあるのではあるまいか。自已の心でありながら、自己の欲するまゝに之を統率する事が出來ず、又自己の肉體でありながら、自己の心のまゝにする事が出來ぬといふのは、實に腑甲斐ない事と言はねばならぬ。苟くも自己の心である如何ある事又は物に對しても自己の心のまゝに爲し得なければならぬ譯である。苟くも自己の肉體である。如何なる場合に於ても自己の心のまゝに爲し得べき道理である。然るに、自己の心を自己の欲するまゝになし得ず、又自己の肉體を自己の心のまゝになし得ないとは、之をよく爲して居る他の動物に對しても、甚だ面目ない事ではあるまいか。要は心身の調和、靈肉の一致にある。先覺者が說いたところも、其主旨は茲にある。儒、佛、道の主旨も、其說くところこそ異なれ、究竟の目的は此處に存在して居るのである。『道は近きにあり』で、先づ身自らを統率支配する力の所因を知るは、是れ總て萬有解悟の第一鍵である。『年ごとにさくやよしのゝ山櫻木をわりてみよ花のありかを』理屈よりも體得が肝要で、體得は一に實行によつて得るところでなく、又法樣の習ふべきところもない。自悟自得すべきのみである。

▽大自然に歸れ

人は萬物の靈長であるのは言ふまでもない事であるが、いくら靈長であるといふても、大自然から見れば動物に他ならんのである。故に吾々人類の生存するには、第一に吾人々類が動物たることを基本とし、而して又廣く他の生物界の生活狀態を理解して、人類生存の理法を考へねばならぬのである。然るに、現代人の日常生活は次第に複雜になつて行くと同時に、次第に動物本然の理法と相反し相隔りつゝあるやうである。即ち現代人の生活は少からず大自然の思想に背いて居る。何んと言ふても人間が已に動物である以上は、此大自然を離れては到底健全なる生存を遂げる事は出來ない。固より予は科學の力を蔑視

る事は、敢て人に讓らないのであるが、又之と同時に、大自然の力に對して大なる信念と大なる信頼とを有つ者である。即ち如何なる學理も科學も、大自然の中に存する法則であつて、此大自然力以外には何等の根底をも有せないのであるから、之より離はて居る人間生活の誤謬であり又不健全である事は當然の理である。そこで、現代人の生活の煩悶不安が、總て此點に胚胎して居る事も當然の成行である。故に一面に於て、自然の中に生活して居る未開人或は野蠻人の方が、却つて天惠の多分を有して居るとも言はれる。彼の山野に棲息せる鳥獸の如き、其山野に於ては殆んど無病のものであるけれども、一度之を家畜的の飼養をなすに方つては、終に其山野に於けるが如きを得る能はざる狀態に陷るのは學者の等しく認むるところであつて、是即ち自然に順應せる生活が、如何に健全且合理的なるかを證明するに足るではないか。今日は理科學及び醫學の如き長足の進歩をして居るが、まだ人間を本當に健全にし幸福にするまでには餘程の隔りがある。否寧ろ今日の醫學にも、其根底の甚だ危まるゝ點がある。即ち醫學夫自身の力が甚だ薄弱であると同時に、之を施す人其物が自然の理法を誤つて居るのである。彼等は此奕妙なる人間を餘りに物質視して居り、大自然の力を閑却して居る。血の一滴、肉の一片、學術の力で得られる物ではない。假令死して三千年、醫學の進歩は大なりと誇稱するけれども、生命自身は醫學者にとりて、尙未だ不可解のものではないか。

×　×　×　*　×　×

本論　予の自然養生法

予の十數年來研究實行して居る養生法は、上述の缺點を補はんが爲めにするものであつて、人間を主とし諸動物を對照として出來上つたものである。それは大體に於て三つに分ける事が出來る。

第一、自然に順應する適切なる食物。

第二、自然に順應する體力の養成。

猶更らに進んで、より以上の積極的體力を訓練せんとするには、

第三、心身の抵抗力を增進する方法

についても一考せねばならぬ。

一、自然に順應する食物

抑々此肉、此皮、此骨、此筋は、何んであるかといふに、要するに自己の食したる物の形を變へたのに他ならぬ。即ち食物は、精神及び肉體を組織する元素である。そこで食物の問題は我が養生法に於て第一に研

究せねばならぬ問題である。食物は原則として、自己の身體の要求に基いて適當に攝らねばならぬ。然るに多數の人を觀るに、彼は只眼前の單なる感覺の刺戟に應じて、又元氣に任かして、全く肉體自らの要求に反し、不必要なる攝り方をして居る有樣である。即ち現代人の食物の攝り方は、食物の眞意義に適つて居らんのである。換言すれば眼で食ひ、鼻で食ひ、耳で食ひ、虚榮(みえ)で食ふと云ふ有樣であつて、全く肉體を度外して徒に胃腸を慘酷に驅使して居る。若し夫れ胃腸の悲慘なるその叫びを聞くの耳を有せしめは、必ずや胃腸が不平に泣きつゝあるを知ることが出來るであらう。是れ實に、「飢て食し渴して飲む」と云ふ自然の法則に捩つた、人爲的の所爲である。

▽日本人の食物

食物の問題は總て各人の體質を本位にして夫々決めねばならぬものであるが、先づ概括的に『日本人』といふ見地から說明を試みようと思ふ。日本人の食物は已に二千五百有餘年の昔から決定せられて居る。即ち山の物と海の物の二種であつて、換言すれば五穀を主食とし海產物及び野菜類を副食とするのが、最も適當なのである。元來食物は其土地の自然即ち日光及び空氣等に大なる關係があるものであるからして、其處其時を異にして適當に變化するのは當然なのであるが、苟くも日本の內地に生存して居る者は、其風土に適するところの食物を取るのが最もよろしい。近來歐洲風の食物が大いに流行するために都鄙共に肉食が盛んになり、其結果として甚だ慨かはしい狀態が表れて居る。一々實例を擧げるまでもなく、生物が其處に發生するや、必ずや其發生したる天地の產物であつて、其天地とは離して見る譯には行かぬ。人間も亦此理法に基いて、苟くも日本の天地に生るゝや、必ずや日本の天地に適するやうに出來て居るのである。即ち一草一木皆其處に適して生存するのであるから、生物は其本然の性質が、適處に適存するものであると云ふことを悟らぬ。此理は極く單純な事のやうであるが、非常に意味深長なことで、最も大切な問題である。例へば、問

患者の如き生れ故郷に行つて居れば、忽ち平癒するが如きは、其身夫自身が生じたる天地と同化するに最も適して居るからである。又畜類の如きも其生れたる土地の土を喰はしむれば、大抵の場合に於て、已に治療の方法の盡きたる大病も早速回復するものであるのに見ても、其所因を明かに知ることが出來るのである。故に先づ其食物は、其土地柄を考察し、又一面には自分の天職の本質をよく了解しなくてはならぬのである。されば各人の傳來的の性質と習慣的の嗜好とは、殆んど其本質となつて居るものであつて、或程度までは同化及變化をなし得べきものではあるが、可及的其體質本來の要求に應じて、適切なる食物の供給を爲すことを閑却してはならぬ。彼の自己の欲せざる人に向つて單に滋養であるからと云ふために、牛乳とか鷄卵とか或は獸肉を强うるが如きは、實に愚の極であつて、是一に各人の體質本然の眞實なる要求を閑却して居るからである。如斯は健康體の時ならばまだしも、病に罹りたる患者に對しては、實に氣の毒なるものである。此十年間に於て接したる三千有餘の患者中、疾病は既に快癒し、又は快復に向ひたるに拘はらず、食物攝取の方法を誤りたるために、可惜肉體が持たぬと云ふやうな恨事を觀たことが、隨分多くあつたのである。素より對症的療法にはあらゆる限りの方法と、熱誠なる相當醫の治療とに待つべきは云ふまでもないことであるけれども、患者其人の精神的の資質と體質の性好とを最も能く考覈し、之に加ふるに其生活境遇を了解してやるだけの同情を有つことが肝要であることを切實に感じて居る。而して此醫學的治療法に、體質に適應する食物の攝取方法を講ずれば、漸次に體力を挽回して疾病を驅除することが出來るのである。故に疾病を治するには醫學的治療と體力の保持又は挽回のためにする適切なる食物攝取とが、相伴はねばならぬのである。

古より『命は食に在り』と云はれて居り、往々にして惡い意味、即ち不養生極る暴飲暴食者等の口にするところとなつては居るが、眞に命は食にありで、命を

繼ぐも食であり、命を落すも亦食である。されば此貴重なる食を最も自然に順應する方法によりて攝取し、漫に命を持するのみならず、八十九十は愚か、苟くも命を有するの間に於ては、寸時だも不愉快を感ずることなく、最も平靜に安全に活潑發地の活動をなすべきことを覺悟するのが、養生法を講ずる第一の目的である。

況んや、人の疾病に犯さるゝや、恰も戰の如きものであつて、即ち體力と疾病との爭ひである、體力が弱ければ、病の爲めに制せらるゝは當然のことであるから、平素健康の時に於て、豫め心身の空隙なきやうに所謂充實せる生活をなすと云ふことは大切である。甚だ專檀的ではあるが、予の實驗に徵すれば、多くの場合に於て、其疾病の重いか輕いかと云ふことは、一に其患者自體の强いか弱いかと云ふことに歸着するものであると信ずる。故に世の最も不幸なるは、不健康者にして、弱き者よ、汝の名は病者なりと、眞に同情に堪えぬのである。乃ち自己の不注意のために、病患に犯さるゝ人々は、實に天恵に反きたる、全く耻を知らざる所行として、排斥せざるを得ない次第である。

▽上等の大便をしろ

極めて卑近の事ではあるが、予の故郷なる九州地方では『彼れは上等な大便を爲し得ない。故に彼れには金を借してはいけない』といふ風で、其人を侮蔑する習慣があるが、之は非常に適切な言葉であると思ふ。予は已に十數年來自己の糞便につき仔細なる研究をなしつゝあるが、眞實健康狀態の時に於ては、即ち所謂上等の糞便を快通する事が出來るのであるが、少しく不健康を感ずる場合には直ぐ其結果が表はれて來る。上等の大便とは、二十歳以上の成年者であれば、必ずや一定の時に於て六寸乃至一尺三寸位のものを快通する事である。而して其糞便は有形にして硬軟宜しきを得、最初より最終まで連續して、最終に尖端の出來るが如きを以て上等とし、中等とするところのものは上等の如くなる能はず、最初硬又は軟、終りに於て有形なる能はざるのみならず、只一本に連續する能はざる如

きを云ふ。下等に至つては、或は鬼糞の如く、或は有形たる能はずして、下痢するが如きを云ひ、甚だ硬きも軟きも尚未だ上等にあらず、要は只一本何の苦もなく僅々一分間位に其用を足し得るを以て第一とす。各人の感覺に顧みて自得するが宜しい。さて此上等の大便を常に快通し得ぬ人は、即ち不健康者であつて、便時に不快を感ずるのみならず、彼の好ましからぬ處に長き時間を費さねばならぬといふのは、よく／＼前世の因業が惡いことだと失笑に堪えない次第である。而も不健康者の活動能力の薄弱なる、到底、健康者に及ぶべくもあらねば、そこで、前の如き言葉が出來たので、之は卑俗な言葉ではあるが、其眞理たるや尊きものである。此上等の大便を快道せんとするには、常に食物の適否を判斷して、腹の要求に基いて適當な供給をせねばならぬ。換言すれば、食物は腹と能く相談をして擇るべきものであるのを忘れてはならぬ。序に一言して置かねばならぬのは、日常糞便に注意するより受くる大なる他の利益である。日常糞便に注意して居ると、自ら身體の調子が分つて來るから、自然病を未前に防ぐことも出來れば、又醫師に對して、眞實なる告白をなすことが出來るから、手遅れをするやうな憂を免るゝことが出來るのである。如何なる場合に於ても自己を知るものは天地間に唯自己一人のみである。他の馬に乘り、他の弓を挽き、他の非を辯ずるよりも、先づ以て己れを知るが肝心ではあるまいか。

△粗食主義

予の見るところでは、今日の都會人士の多くは、食物の方法を大いに誤つて居るやうである。昔から「口は禍の門」と言つて居るが、食物の上に於て最も切實に其然る所以を感ずるのである。即ち多くの人は、高價な物、珍らしい物、又は總て濃味なる物を以て、滋養分に富める美食であるかの如く心得て居るやうであるが、之は實に不經濟極まる事で、單に肥料屋さんを喜ばせるに過ぎないではなからうか。又多く食せばそれ丈け滋養も多いかのやうに思ふて居るが、「過ぎたるは及ばざるに若かず」といふが如く、却つて害を爲す

場合が多いのである。美食のために已に身體を害した る人々の多き今日の狀態に顧れば、益々其有害無益なることが判明するのである。彼の糖尿病の如きは夙に贅澤病とまで云はれて居りのみならず、外國の肉主食人種間に於ても、彼の恐るべき動脈瘤等の如き疾病は、全く肉食の過多に起因して居ると、叫んで居る學者があるのに徴しても、吾人日本人たるものが、其本末を辨へずして、其弊のあるを忘れて居るのは、特に考慮を要することである。卽ち食物は質や量の問題でなくして、自己の腹の問題であると同時に、其個人々々の生活と境遇によつて適當に選擇せねばならぬ。卽ち成年者にあつては、其時の精神及び勞働の如何によつて、其消費したる分量に應じて適當に補給せねばならぬ。又未成年者にあつては、絕えず成長しつゝあるのであるから、消費したる分量を補ふ以外に十分に成長を遂げる丈けの補ひをせねばならぬ。今日最も廣く流行して居る嚴格なる時間割制度の如きは、此論理よりして最も不自然なる方法と言はねばならぬ。先年御大典の際、八十二歲以上の長壽者を調べた結果によれば、其九分方は肉一片だも食ふた事のない所謂粗食主義の人々であつた。これで見ても人の健康の如何は、食物夫自身の問題でなくて腹夫自身の問題である事がよく分かる。予は年來所謂粗食主義を實行して居るが、自分に取つては之れが美食なのである。常に米麥を主食とし野菜を副養とし、米多菜少を主意として居るが、之を大牢の珍味よりも猶且つ美味に感じて居る。而して此美味をば遍く我が四千萬の同胞に賞味せしめたいと希ふて居る。無論此大切なる食物に對しては價の高下を以て兎や角言ふべきものでないのみならず、寧ろ其價額を論ずるよりも、自己の體質に適するや否やを量定することが第一必須の手段である。と同時に米多肉少に肉に代ふるに野菜を以てするやうにすれば、食膳は甚だ簡素であるけれども、常に變化ある食物を得らるゝのみならず、斯くて初めて時たまの美食は、尙より以上に、美味に而も有効に攝取し得らるべきもので、常に飽き果てたる美食者の、其味感は恐らく其美

味に慣れて、其の美味たるを解することが出來ないであらう。因より斯く美味に食する爲めには、諸種なる條件があるのであるが、それこそ卽ち予の所謂自然養生法であつて、後段に於て詳しく說明するであらう。植物の如きに對しても、餘り多くの肥料をなす時には所謂肥料疲れといふ事になる。上流社會の人々には、此肥料疲れをして居る人が極めて多數である。特に注意すべき事である。

▽砂糖分と鹽分とは適當に攝れ

食物を硏究するに方つて、今一つ閑却してならぬ事は、砂糖分を多く攝つて鹽分を少くすることを避けなければならぬことである。鹽分を適當に取るといふ事は、理想的の健康を保持する上に最も大切な事である。然るに、今日の都會生活をして居る人々を見るに、口舌一時の快味の爲めに砂糖分を多量に加味する傾向あがる。あらゆる植物の中には適當な糖分を含んで居るものであるから、別に砂糖を多量に加へる要はない。眞實に健康な人々は鹽分を比較的に多量に取るものであるが、健康を害せる人々は鹽分を相當に取る事を好まず、却つて砂糖分を多量に取らんとする。而して次第に其調和を缺いで益々健康を害する傾向がある。加ふるに如斯人に在つては、身體の運動足らざるために終に糖尿病を惹起せるもの比々皆然りである。肉體を過度に勞せしめた場合に、時として自ら砂糖分を要求する時は、勿論補給すべきであるが、普通の狀態に於ては鹽分を適當に取るのが、健康を增進する唯一の方法である。此點は特に都會に於て子女を育てる人々に取つて最も注意せねばならぬ。それ泣くからお菓子を遣らう。うるさいからお錢を遣らうといふのは、子供をして砂糖分を多量に取らしめて、第一齒を害し延て腸胃を損じ、終に其健康を失ふ事が非常なものである。都會の子供が弱くて、田舍の子供が健康なのも、一面これに原因して居る。又都會の子供には蟲齒が澤山あり、田舍の子供には少ないといふのも亦之に基いて居る。昨年東京市に於て、梅雨期中に子供の過食の爲めに胃腸病にかゝつた者が五千有餘人もあつたとい

ふ。誠に恐るべき事である。世の親たる者はよろしく此菓子一つが此子の將來に如何なる影響を與へるが、此金一錢が此子供の健康に如何なる關係を有つて居るかといふ事をよく〳〵考へて後、與へるといふやうにせねばならぬ。

玆に食物の研究を終らんとする方にて、其要領擧ぐれば、食物は總て(一)濃味ならんよりは寧ろ淡味に取り、(二)美食よりも粗食を尊び、(三)砂糖分と鹽分とは適當に攝り、(四)消化に順應して適宜の供給をなし、(五)常に大便に注意して、(六)自己の體質を究めて之に適應する食物を取るといふにある。約言すれば自然に最も順應することゝである。

二、自然に順應する體力の養成

扨て、美味に食して心地よく大小二便を快通し得る人は、卽ち健康な人である。此健康を得んとするには自然に順應せる生活をせねばならぬ。而して此健康を得るには二つの必要條件がある。(1)自然に適合せる姿勢と、(2)自然に適合せる運動である。

(1)自然に適合せる姿勢

身體の姿勢卽ち持方は、其從事して居る職業に從つて千樣萬態であるけれども、其要とするところは常に姿勢を正しくする事である。換言すれば、身體各部分を通じて無理のないやうにする事である。卽ち內臟は云ふに及ばず、手足等總て血液の循環する處は、如何なる部分と雖も障害なく平易に循環するやうにするのである。故に、肺臟の眞の活躍を阻止するところの肩を前に竦めるが如き、腰を前に屈めて胃部を壓するが如き、甚だ好ましからぬ事である。已に胃腸の弱き人々は、大抵脊椎を垂直にした端然たる姿勢が出來ない。それは胃腸の抵抗力が減ぜられて居る爲めに、從て氣力を失ひ重力のために、上體を前に屈し、自ら不自然に陷つて居るのである。昔から、日本の武術の如き、其他宗敎上の禮拜の如き、眞實なる精神統一を要する場合に於ては、此端然たる姿勢を以て其第一の用意として居るのは、期せずして自ら自然の法則に合

して居るのである。されば、坐する場合に於ても、歩行し又は寢臥する場合に於ても、出來得る限り、肺及胃腸部に無理を感ぜざるやうにせねばならぬ。言葉を換へて云へば、身體の何處の一部たりとも無理な箇處があつては、眞實なる本能生活を營む事が出來ないのである。『天下太平』といふことは、上下相通じて各々其居に安んじ、各々其職務に忠實に働いて居るといふ姿が、即ち天下太平なのである。吾人の肉體も亦同じく、其各部各機關を通じて各々完全に、其生格機能を營むやうにして遣るといふ事が大切なのである。今圖を以て其姿勢を示せば、(第一圖)は起立したる姿勢にして、(第二圖)は端坐せる姿勢、(第三圖)は脊椎を屈曲したる甚だ惡しき姿勢、(第四圖)は椅子

第一圖



第二圖



第三圖



第四圖



に腰掛けたる姿勢である。

　如何なる姿勢の時でも、唯臍下一寸五分位の處を目標にして少しの力を入れ居るのみで、漸次に何の苦もなく、行住坐臥、其力が這入つて、而して力が中心點となるやうになるのであつて、靜坐であらうが、禪であらうが、やる時にやるばかりでなく、常に之が保たれるやうになるのが、即ち修養である。要するに中心がなくては安定は出來得られぬから、先づ臍下を中心として姿勢を正しく取ると云ふことに考へれば足りるのである。而して第二圖に於ける端坐する時に、注意せねばならぬのは、膝を各自の自然體のまゝ屈めて無理に膝と膝とを密着するには及ばぬ事である。普通二寸乃至七八寸位間隔のあるもので。肥滿せる人々にあつては

安坐することすら出來難い程であるから、要は安定よく坐せらるゝやうに工夫するがよろしい。又端坐の場合に足部は拇指が幷行するやうにするのが、最も安樂なもので、重ねるのは無理になる。而して全體の重力を、利き足の方に少し托するやうにするのが適當である。

特に椅子に掛けて執務する時に於ても、尙椅子に淺く掛けて兩足と臀部とにより、安定したる姿勢を取り、机上に伏して執務するにも脊椎を曲げぬやうにすることは、極めて大切のことであつて、能率の上に大なる關係のあることを知らねばならぬ。

(2) 自然に適合せる運動

人の能力は有限のものであるやうであるが、其使用方法が適切であれば、實は無限の力を有して居るのである。之は畢竟力の蓄積といふ事と、力の養成といふ二つに歸するのである。力の蓄積とは、必要ならざる使用をなさざる事で、力の養成とは、苟も動くべき部分は必ず之を動かすといふ事である。然るに現代人の日常生活を見るに、此原則に反する場合が甚だ多いのである。肉體的勞働者は此場合、精神的勞働者よりも比較的有利な地位に居るが、併し誤つた不自然なる使用をして居る者も決して少くない。精神的勞働者の肉體の運動缺如して居る事は言ふまでもない。假りに精巧なる時針ありとせんに、單に油を注したるのみにて放置する時は、終に其油は粘着凝固して、全く運動不能になるものである。人體も亦然りで、只營養の攝り放しに、運動の適切を缺げば、終に又病的狀態になるのは、理の明かなるところである。此缺點を補ふ運動方法は、千樣萬態であるけれども、今予が動物全體に亙つて研究し得たる方法を概括的に述べて見よう。

實際生後一年六ヶ月位までの小供に於ては、全く動物の本能的作用として、總ての運動が營れて居るけれども、生長すると共に人工的の慣習に染みて、遂に動物本能の尊き作用を忘れて了ふのである。予の方法は畢竟此尊き動物本能の運動をば、各人の上に蘇生せしめんとするに他ならぬのである。

▽**起床に必要なる本然運動**

目が覺めて起る時に於ける人間の狀態は、動物中最も不用意千萬なものである。如何なる大なる動物も亦極めて小さき動物と雖も、睡眠より覺むれば、非常なる場合を除き、必ずそれ相當の準備運動をして居るのである。然るに人間は之を爲さず、不覺不知の間に大損害を醸成しつゝあるのであるから、深き注意を拂はねばならぬ。

▽**床上の運動**

先づ目が覺むれば、床上に仰臥したるまゝ、靜かに、(枕をして居るとすれば)其枕を外づし、兩足兩手を長く垂直に延ばし、先づ除かに足を臀部に引き着けながら除々に吐き出し、又深く吸ひ込みながら足を伸して元の姿勢に返る。之は睡眠中に溜つた有害なる瓦斯を體外へ排出して、早朝の新鮮なる空氣と換へると同時に、肺臓、内臓等に障害なきや否やを試みる最初の一手段である。即ち第五圖は吐き出し盡して、今將に肺部に吸ひ込みたるところを示す。而して吸ひ込み終れば少しく力む心持にて、臍下を目標として、全體の緊張を試みる。強式呼吸ならば一回にて足りるも、然らざる場合には三四回をなすがよろしい。次ぎに靜かに眼瞼に力を入れ兩手の人差指を以て其上を輕く二三十回摩擦する。第六圖に示すが如し。之は眼部の血液の循環を整へると同時に、其抵抗力の増進を計る爲めである。眼の大切な事は言ふまでもなく、多くの場合に於て一番早く倦怠を感ずるも

第五圖



第六圖





第七圖



第八圖

のは眼である。これ眼は覺めた時から眠る時まで寸時も間斷なく外界に接觸して居るところから、自然と疲勞する多く、從つて其血行を整調する必要があるのである。次ぎに第七圖に示すが如く、鼻梁の兩側を眼と眼との間から二三十回摩擦する。次ぎに第八圖に示すが如く輕く頭を持ち上げ、兩耳を二三十回摩擦する。皆同樣の理由である。而して眼、鼻の摩擦は、起床就床の外日常執務の間に數回之を行へば最も宜しいものである。次ぎに腹部に少しの力をも入れずして、兩手を以つて靜かに二三十回摩擦按腹する。之は便祕性の人又は胃腸に障害ある人の最も必要とするところである。その基くところは胃腸の蠕動を活潑にして血行を盛ならしむるのである。次ぎに第九圖に示すが如く、少しく下腹部に力を入れ、兩手を靜かに大腿の外側部に延ばし母指に力を入れて四五回內外に廻輕して、又其まゝ手首を數回屈伸させ、次ぎに掌に十分力を入れて二三十回握つたり開いたりする。之は兩手全體の神經筋肉及血管其他組織細胞全體の活躍を旺盛ならしむる爲めである。次ぎ第十圖及第十一圖に示すが如く、足部を床上より少し上げ、足先を十數回屈伸する。而して伸ばす時は足先に十分に力を入れ、屈する時には踵に十分力を入るゝを要するのである。之亦手と同じ理由に基くのである。この運動を終らば更に兩足を延ばし兩手を下垂した姿勢に於て、極く徐かに息を吐き出し、而して最も大きく鼻より吸ひ込み、恰度下腹部に送る心持で、肺臟はいふまでもなく全身に漫遍なく力を入れて、大いに力みつゝ深き呼吸を數回繰返す。即ち再度深呼吸を試むることになるのである。

第九圖



第十圖





第十一圖

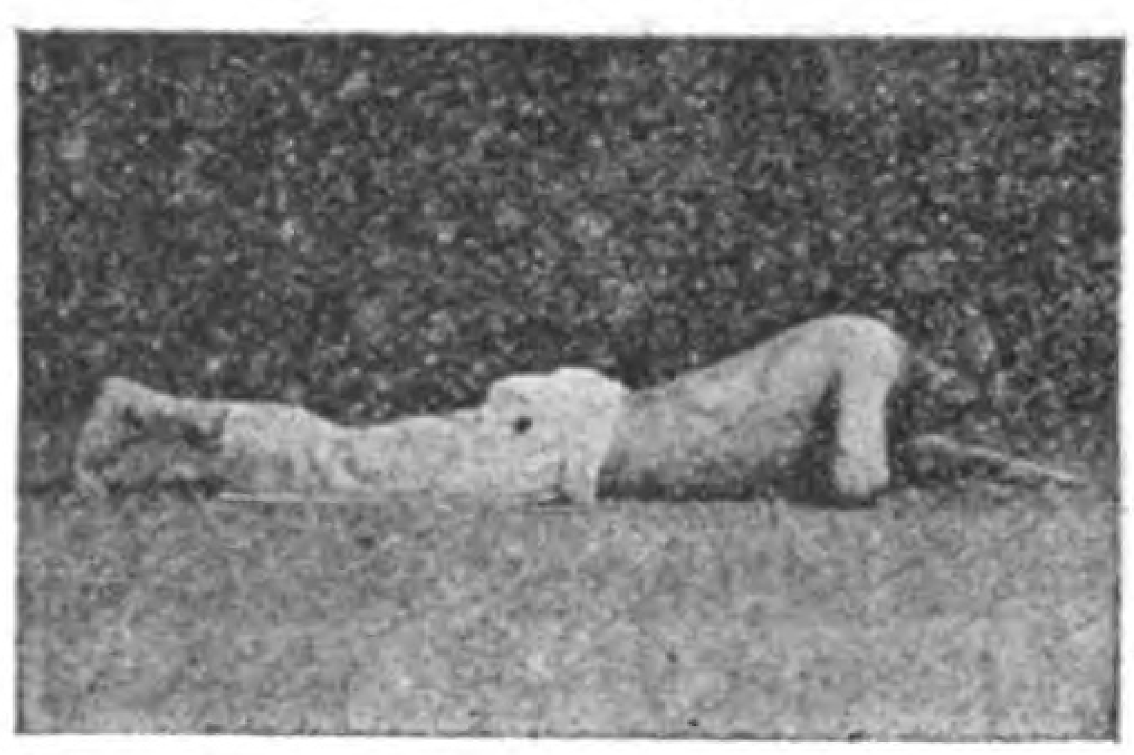
▽**床上運動はあらゆる活動の準備である**

以上は皆血液の循環を正調にし、組織細胞の全體を活躍の狀態に入らしむる準備行爲であつて、如何なる鳥獸も其形こそ異なれ皆遣つて居る事である。即ち犬や等猫の如きは目を覺ますと同時に、俗に言ふ延び〲を遣つて居り、鳥類に於ては必ず羽づくろひなるものを遣つて居るのが卽ちそれである。凡そ運動の目的は何であるかといふと、血液の正調なる循環と、體溫の發生を盛ならしめて生活機能をよく營ましめ、新陳代謝の作用を旺盛ならしむるにある。故に、以上の如き動物本能的の準備運動は、實に閑却すべからざる大切な事である。よく言ふ事であるが、飛び起きた時に眩暈を感じ、又終日氣持が惡いとかいふのは、此準備行爲がしてないからである。

▽**起き方起きた後の運動**

試みに手を高く上げて見よ。血液は直ちに流下して、血管には空隙が表はれるではないか。斯樣に血液の循環は烈しいものであるから、不用意に飛び起きるが如

第十二圖



第十三圖



きは、血液の正調を亂すものであるから、床上に於て前述の準備を行つた後、起立する場合にも猶相當の注意を要するのである。其方法は、(第十二圖)に示すが如く、先づ靜かに右なり左なりに全身を回轉せしめて俯伏しになり、(第十三圖)に示すが如く、其まゝ膝を立てゝ上體に引きつけた後、徐かに双手を突張りて上體を上げて端坐する。斯かる起方をすると、眞に豁然として朗らかなる天地に蘇つた心持がするものである。斯くて後立上がり、直立不動の姿勢を取つて、頸を數回前後左右に廻轉させる。之も前述と同樣の理由であつて、頸骨の作用を圓滑ならしむる爲めである。他の動物の中には、隨分極端に頸を延ばしたり又縮めたりするものがあるが、卽ちこれを遣つて居

るのである。次ぎには矢張り立つたまゝ、足先より逆に、兩手の掌を以て力を入れ、漸次簡單に全身に渡つて摩擦する。而して後、湯又は水を以て綺麗に拭ふのである。之は主として皮膚の抵抗力を養成する爲めである。他の諸動物も大抵此摩擦法及び拂拭法を取つて居る。最初の間は何人も手の掌を以て摩擦をするがよろしいが、次第と訓練を經た後には、或は荒き綿布を以てし、更に荒綱を以てする程にならねばならぬ。

是等の諸運動は熟練するに方つては、僅五六分間になすことが出來るのであつて、其時と場合とによつて適宜に緩急を計るがよいのである。又甲の運動が適して乙の運動が適せぬといふこともあるのであるから、是も各人の身體と對照して取捨しても差支ないのであつて、要はこの精神を掬んで貰ひたいのである。

▽就寢時に於ける本然運動

睡眠は疲勞の回復に最も大切な精神及び肉體の休養である。若し人間生活をして全然自然的にならしめる事が出來れば、疲れて眠り、覺めて起きるのが、最も自然のものであり、又日出と共に起き日沒と共に寢るのも自然であるかも知れぬ。併しながら生存競爭の激しき現代では、斯ういふ事は到底も望まれない。故に今日の場合では、其人の生活境遇、其時の疲勞の如何に依つて適當になさねばならぬ。長く寢る方がよいとか、幾時間寢なければいけないとかいふ事は少しもない。原則として睡眠は、淺く長く取るよりも、短く深く取る方がよろしい。そこで今日の場合では、此短かく深く取つて、早く疲勞を回復し、起きて活動する時間を多くする方法が一番よい譯である。眠らんとして眠られないといふ人がよくあるが、それは何處かに不健康なところがあるのであるから、殊に心身の訓練をする必要がある。本來眠るといふことは、畢竟五管の機能を働かさゞる狀態であつて、醫學上から觀れば一歩死に近き境涯である。故に十分眠れないといふやうな人は、催眠心理の方法によつて精神の訓練をなし、十分な休養たる睡眠をなさねばならぬ。之を遂ぐるには寢姿の安泰なる方法を取ることが精神上の訓練と共に大

切なことである。

▽枕は有害無益である

予の研究によれば、生後一年六ヶ月以後の人の睡眠は、甚だ亂雜になつて居つて、而かも自然と甚だ遠く隔つて居るやうである。彼の枕の如きは、或一種の病的習慣に基くものであつて、動物本然の道理からすれば、全く必要のない物であるのみならず、其之を用ゐざる方が却つて健康に適當である。若し强ゐて之を用ゐんとなれば、仰臥したる場合、其人の後頭部と脊との平衡を得る位の高さ――普通五分乃至一寸を以て適當とする。これ仰臥したる場合に於ても、猶姿勢を正しくして生活機能を圓滑に營ましむる爲めである。殊更らに高き枕を好む人々は、長き間に於ける習慣に依るのは勿論であるが、其頭腦には多少不健康な部分があるのを證明して居るものである。思ふに我國人は其因襲が極めて久しきものである。蓋し彼のチョン髷を結ひたる頃から、そのチョン髷の保護のためと、夜具等の油に汚れぬために、殊更に高き枕を用ゐたものであつて、今日婦人中の成年者の枕を見るに、髮が毀れるといふ單純なる考から、極めて高き枕を用ひて居るが、之は大切な血行を不知不覺の間に非常に害するところの甚だ惡しき習慣である。髮を結ぶのには、一時間も早く起れば十分に其用を達する事が出來るのであるから、其爲めに大切な身體を害することのないやうに注意して貰ひたい。人間以外の動物皆枕なくして同樣の姿勢を以て眠つて居る。犬や猫等について見れば、彼等は病氣になつた時に於てのみ其姿勢が毀れ、頭部を何か高き物に託して眠るのに徴しても、枕が如何に病的な物であるかを知ることが出來る。又小兒や若き人々は、枕をして居つても何時の間にか外ずして居る。俗に之を寢姿が惡いと言ふて居るが、此方こそ却つて本然の理に適つて居るのである。

▽最も適當なる睡眠時の姿勢

予は諸動物の睡眠狀態を研究し、又た古來幾多の先哲及び養生論者の說に聞きて、最も本然の道理に適つて居る睡眠の姿勢を述べようと思ふ。先づ第一に、安

樂なる睡眠を得んとするには、仰臥が最もよろしい。仰臥すれば、肺の働き、內臟の機能が障礙なく行はれ、血液の循環が最も容易に行れるのである。或は右に或は左になど偏頗に流れて居るのは、多くの場合病的なのである。若し又止むを得ず横臥する場合に於ても、頸骨を屈曲すること、脊椎と頸骨とが直線に近きやうにするを要するは勿論のことである。彼の俯臥して寢る人には、胃腸又は肺に故障のある人が多い。一歲乃至六七歲の子供であつて、俯臥するやうな場合には、親たるものは大に注意せねばならぬ。之は內臟機關に障害があつて其處丈け抵抗力を失ふから、自づと俯臥しになつて其處を壓迫して以つて抵抗力を保持するのである。若し何うしても仰臥することが出來ない人は、右向きにするがよろしい。仰臥する場合には、（第十四圖）に示すが如く、兩足をゆるやかに組んで、恰度足倉(あぐら)を崩したやうな姿勢にするのが一番よろしい。即ち右足先を左足の「フクラミ」のあたりに着け、左足の踵を右足の足首のところあたりに着くればよいのである。

第十四圖



第十五圖



これは左足を內にする場合にも同じことである。而して兩手は何(ど)の場合に於ても、常に自然のまゝ下垂せしめて、其掌を恰度腸骨（俗に腰骨）の部分に置くのである。此姿勢が一番理想的であつて、特に冷性の人に最も適して居る。即ち夜分足が冷えて眠られないといふやうな人が、若し此方法を行ふ時は、早速其効能を知る事が出來る。兩足は原則として常に連續せしめ、決して絶縁體にならぬやうにする。俗に大の字なりに兩手兩足を四方に長く延ばして寢るのがよいといふが、それは單に一瞬時の快感を覺える方法であつて、決して長き時間に適せざるのみならず、眞實なる休養をなすことを得るものでない。斯く足を組んで寢るのは、詰り血行を平調ならしめて保溫の

一を完全にする爲めである。古來我が國の兵法の中に於ても、此點を微細に論述して、斯の如き姿勢の最もよいことを示して居る。又諸動物の狀態を見ても、大抵斯く纏つた姿をして居る。次ぎは第十五圖の如く、右足又は左足何れにしても、其足裏を片方の足の脛(はぎ)、(俗にフクラミ)に密着をして寢る方法である。次ぎに又其踵を臀部に引きつけて膝頭を立てゝ寢る方法もあるが、これは疲勞した時又は、病人などが自然に之をやつて居るのであつて、理論は皆同じく夫々適法なものである、而して第一の方法は最も冬期によろしく、第二第三の方法は夏時に適當である。

▽睡眠前の準備運動

睡眠中は夢一つなき狀態にあらねばならぬ。夢を見るのは詰り不健康な證である。此安らかなる睡眠を得んとせば、起床時に準備運動をなすが如く、睡眠前にも亦又其必要がある。先づ仰臥するや、眼瞼、鼻梁骨、耳、腹部、兩手、兩足と順次に、起床時に於けると全く同樣な方法を爲し、最後に足の裏を以つて片方の足の甲を交互に十分摩擦して後、前掲の如き姿勢を取つて眠りに入るのである。斯かる準備行爲は、其形容こそ異れ、諸動物は皆規則正しく實行して居る。

▽積極的の本然運動

以上の起床時及び就寢時に於ける準備運動は、老若男女を問はず何人にても講ぜざるを得ざる方法であが、今茲に强きが上にも强からんと望み、殊更ら運動を好む人、特に青年男女の爲めに、仕事の暇々になすに適して居る最も簡單なる諸種の方法を述べよう。

(一)仰臥したる時、高く交互に足を上げて手と共に四足動物の歩行或は疾走の狀態を行ふ。(第十六圖)此場合に於て注意せねばならぬのは、上に伸したる手を屈曲して上げたる足には餘り力を入れず手を以て半圓狀を描きつゝ下ぐる時と足を踏み伸ばす時とは同時にウンと力を入れるのである。


第十六圖

(二)仰臥したる時、兩手を下垂して十分床上に着けて力を入れ、少し反動を以て兩足を上げ、頭上の方へ屈げられる丈け屈げ、直ちに反動を以て烈しく跳ね返し、其足の床上につくと同時に調子よく全身を以て立ち、立つと同時に一寸空に飛び上り、又元の如く倒れて仰臥し、更に之を繰返すのである。度數は十回位を適當とする。卽ち(第十七圖)は將に(第十八圖)の運動に移らんとする姿勢であつて。(第十八圖)は、反動をつけて屈曲せる時の狀態にして、(第十九圖)は(第十八圖)の反動によりて起き上らんとする時の狀態で、この時直ちに高く跳躍をなし、(第二十圖)の如く一度起立し、又更に(第十八圖)の如く臀部を床上に着けながら足を上ぐるのである。

(三)直立不動の姿勢(第二十一圖の一)の如くに於て、徐かに一度息を吐き出し、爪先を立て、下腹に力を入れつゝ大きく長く息を吸ひ込みながら、漸次に兩足を開きて上體を落とし、(第二十一圖の二)圖の如く自然體のまゝ蹲み、蹲み終らば今度は息を同じく徐か

第十七圖



第十八圖



に吐き出しながら立つ。之は深呼吸法の原理に基く全身の一致運動であつて、十回位行ふを適當とする。

(四)兩手兩足のみを座につけて恰かも四足動物の如く匍匐する。八疊位の室を五回乃至十回行へば寒中に於ても汗をかくものである。之は特に肥滿せる人及び老人に適當して居る。

(五)直立して、足先を爪立て、重心をとり兩手の掌を強く握り、一方の手は上に一方の手は下に、交互に強く上げ又は下ろす、上げたる拳は天を貫き、下ろしたる拳は地軸に達するといふ勢を以てするのである。(第二十二圖)は右手を上げ、(第二十三圖)は左手を上げたるを示す。而して此場合に於ても全身均一に力の分配さるゝことを必要とするのであ

第十九圖



る。

（六）直立したまゝ頸を出來る丈け後ろに縮め、同時に兩肩を強く高くして頸を摩擦する事五六回。之は實行者等が『小野式按摩法』とか『小野式專賣特許』などと稱して居るもので、肩の凝りを治すに甚だ特效がある。卽ち（第二十四圖）は兩肩を上げて後頸を接觸せしめたるを示し。（第二十五圖）は右肩に後頸部を回轉して接觸せしめたるを示し。（第二十六圖）はその左肩との接觸を示したものである。此運動は特に精神的業務に從事する人々の、一日數回必ず試むべき大切なる方法である。

第二十圖



第二十一圖ノ一



第二十一圖ノ二



（七）直立不動の姿勢に於て、强式深呼吸をなし而して肺の完全なる發育と抵抗力とを育成することは大切なことであるから、最も自然的合理と信ずる其方法を示さんに、卽ち（第二十七圖）は將に肺へ體に吸ひ込まんとする時の狀態にして、漸次に吸ひ込みながら（第二十八圖）の如く仰向きの姿勢となり。次に徐ろに吐き出しながら（第二十九圖）の如く、下腹部に力を充實せしめ、少し前屈みになるやうにして、全く肺部を虛にして了ふのである。各自自ら工夫を重ねて行ふときは、極めて平易に行はるゝものであつて、吸ふ

第二十二圖



第二十三圖



第二十四圖



ときは大抵十秒位で、吐く時は五十秒の長さに達するやうになるのである。

（八）體を眞直に俯伏して足先を爪立て、兩手を以て肩巾の廣さに支へ、呼吸をこめて、（第三十圖）と（第三十一圖）と連續して、徐々に數回を行ふ。是れ最も腕力と腰の力を養成するに効果大なる方法で

第二十五圖



あるから、一回でも二回でも余り無理にならぬ、即ち自己の體力に應ずるだけ試むることが肝要である。而して

三、心身の抵抗力を増進する自然養生法

心身の抵抗力を養成する一方法としては、第一に皮

第二十六圖



膚を丈夫にせねばならぬ。皮膚を丈夫にするといふ事は、常に外氣に接觸して居る手足及び顔面等よりも、特に衣服を以て蔽はれて居る部分に必要がある。即ち可成身體の全部を大氣中に曝露して、日光及び空氣に接觸する機會を多くせねばならぬ。近頃の人は餘りに衣服を裝飾し過ぎる爲めに

第二十七圖



皮膚の抵抗力を非常に弱めて居るやうである。古より『暖衣飽食は病の源』であると言はれて居るが、實に其通りであつて、無論寒地と暖地とによつて多少の相違はあるべきも、

第二十八圖



厚着をするよりも寧ろ薄着に慣れて置く方がよろし

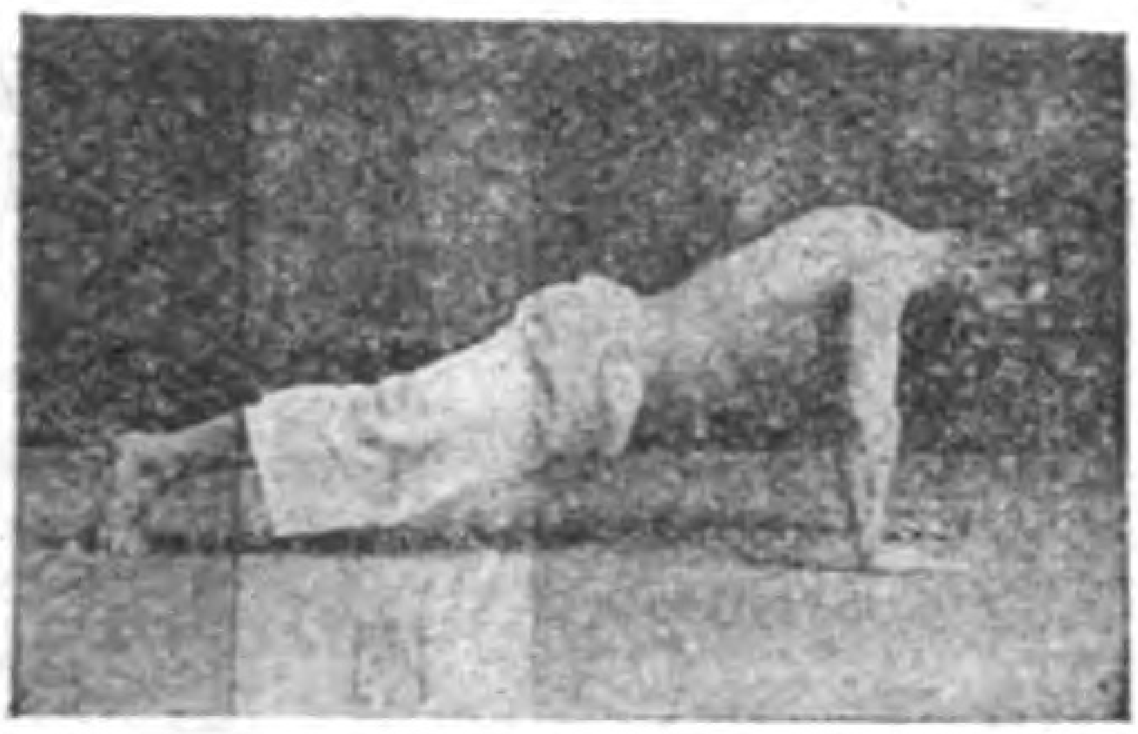
い。彼のメリヤスのシャツ類の如きは絶對に廢止して

第二十九圖



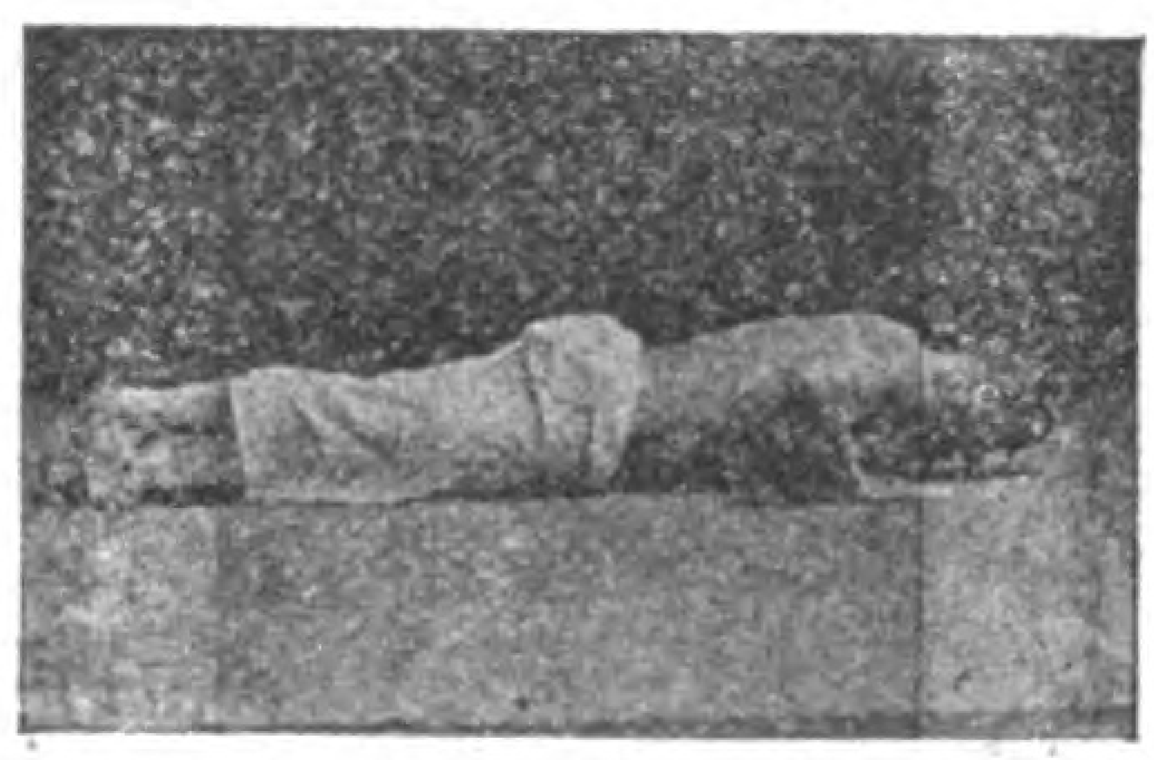
貰ひたい。『子供は風の子である』といふ言葉があるが、眞に其通り惡戯盛りの子供は本質上成人者よりも寒暑の感じが強くないのである。然るに多くの父母達は、成人者の心持を以て嫌やがるのを無理に厚着をさせて、遂には抵抗

第三十圖



力の弱き不健康なる身體にして了ふのである。大いに注意せねばならぬ事である。予は皮膚の積極的養生法として、十數年來（但し東京生活に於て）極寒中と雖も單衣一枚を以て凌ぐと共に、常に寒中游泳を試み、又大暑中裸體を以て屋上に登り、所謂日光浴をなして居る。此方法を試みる時は、如何に弱き人も強くなり、強き人は一層強くなる事、予が實驗に照らして明かである。近來避暑又は

第三十一圖



避寒が非常に流行して居るやうであるが、斯くの如きは眞に天恵に反く事大なるものである。日本内地の如き氣候溫和なる土地に於ては其必要は少しもない。病人がするならまだよいが、健康人が競ふてなすといふのは、國民教育の上に於ても大なる問題である。心ある人は、先づ一世の模範として、寒暑を避けるよりも寧ろ之に向つて、より以上の活動をなし得るの方法を講じては何うであるか。

▽空氣・土による自然養生法

朝早く起るといふ事は、健康上最もよい事であるが、都會人は殆ど晝と夜とを取違へて居る有樣である。これに對する補ひとして、毎日朝早く起きる事の出來ぬ人は、先づ夏期なれば午前四時頃一寸起きて寢室の戸を開け發ち、其後で再び寢るがよろしい。假りに朝六時まで寢る人がありとせんに、四時に戸を開ければ詰

り二時間新鮮な空氣を吸入すると同時に、自然の氣溫に肉體を接觸せしむるのであるから、皮膚も亦自ら抵抗力を增進する事を得るのである。風邪に侵さるゝ人を見るに、多く外氣に接觸する事の少ない人々である。常に外氣に接觸し、肉體を曝露して居れば、自然と同化（アッラクリマチザチオン）の力を增すが故に、氣候の變化によつて障害を受けるやうな事はない。而して冬期に於ては、朝五時頃に寢室の戸を開け放つが最も適當である。次いで、特に都會人に對して勵行を望みたいのは、洗足で土を踏む事である。時間には限りがないけれども、なるべく朝夕二回、假令一坪の土塊でもよいから、其上を踏むのである。之も畢竟生物本然の道理に基くのであつて、吾人の肉身夫自身が已に地水火風より成つて居るのであるから、大地に親む事は自然と同化する最も大切なる方法である。

▽沐浴による養生法

沐浴は禽獸類が本能的に好んでなすところであつて、其水浴と濕浴と砂浴なるとを問はない。我々人間も一日一回必ず之をせねばならぬ。肉體内の不用物は大小便によつて排出せらるゝと同時に、身體全部を被ふ皮膚から絶えず分泌されつゝあるのであるから、其新陳代謝を敏活にしようと思へば、何うしても此沐浴を遣らねばならぬ。就中精神的勞働に從事する人は、毎朝溫浴又は擦拭方法をする事が最も必要である。此場合、浴槽はなるべく大なる物を選ぶがよろしい。詰り澤山の水がある程、水壓力が强くして、排出物がよりよく排出し拂ひ去されるからである。沐浴の場合に最も適當なのは、全身摩擦である。掌を以て全身をよく摩擦し、而して後水に入るがよろしい。此方法を勵行する時は、病的に肥滿して居る人も、大抵二週間位にして皮膚を健康にすると共に皮らしき皮とする事が出來る。又瘦せたる人も、百匁乃至五十匁の體量を增加する事が出來る。

結論

▽理想の健康體とは如何なるものぞ

肉體の最も健康なる發育は如何なるものかと言ふに、筋、骨、皮の三つが強くならねばならぬ。而して其肥えたると其痩せたるとを問はない。多くの人は便々たる腹、豐滿なる顏容を見て、恰も體力夫自身が非常に強いかの如く思ふけれども、強ち左樣でなきのみか寧ろ見かけの丈夫さうな人が眞實弱いものである。然らば其標準はと言へば、如何なる場合に於ても、皮は皮として立派に存在し、骨は骨として確實に存在し筋は筋として見事に存在し、而して血液は循環平調にして體溫は平均し、常にうまく食せられ、大小二便は上等の物を快通するといふ狀態である。更らに之を精神的に言へば、雨にも風にも雪にも、霜にも、毫も辟易(ひるま)ぬ堅固な、恰かも亭々たる老松の剛健なるが如きを言ふのである。故に其肥えたるも痩せたるも各々其本質に基くものであるから、只其強くする方法を講ずればよいのである。其本質を考へずして、徒らに外形の如何を苦慮するのは、眞實なる養生法ではない。今茲に十分なる營養と適法なる養生によつて、十八貫匁

第三十二圖



の體重のある人ありとせんか、予の理想としては其人をして先づ其二貫匁を減ぜしめて十六貫匁とするを最も健康に適せる體量と思ふのである。即ち筋、皮、骨、血管など各々和かに其居を占有し、而して所謂寛ぎのある形を保つて居る事が大切なのである。彼の何處が骨やら皮やら筋やら分ちぬやうに肥えて居る人は、其內臟機關の居所も必ず窮屈の

第三十三圖



狀態にあるに相違ない。各部分が完全に發達して所謂よく引き締つた身體をして居る人の內臟は、屹度其居所に安定して居る。內部の關係と外部の關係とは、常に影響し合つて居るからである。現在日本男子成年者の體量は、「一寸三百匁」を以て最も健康體として居るから、此標準率に向つて適當な運動をせねばならぬ譯

である。序に一言を要するは、既に述べたる如く、餘りに肥滿したるも亦、餘りに瘠せたるも、共に不健康狀態であるのであるから、速に醫師に依つて必ず其原因を究めて其本を芟除することを忘れてはならぬ。

▽實行主義

以上述べたる諸方法は極めて卑近なる事柄であるけれども、「知るは易く行ふは難し」で、捨てゝ顧ないといふ風になり易きのみならず、性急なる人は僅か二三回試みたるのみにて、其効果を疑ふといふやうな事例に乏しからぬが、總ての事は實行によつて其効果を現はすものであるから、よく其理法を考へ、各自の體質及び境遇に照して、各自自らの天地を開いて貰いたい。實際我々は每日不知不識の間に、心身を擦り減じつゝあるのであるから、其補給方法とし、其削減せる量より假令僅かたりとも多量の精神力及び肉體力を增加して行く工夫をせねばならぬ。此方法は、以上述べたる一般的の養生法に加ふるに、積極的訓練法によらねばならぬ。即ち武術、其他の運動、或は藝道等、其何たるを問はず玩味して之を用ふれば、皆生を養ふの道に適ふものである。予は特に日本固有の武術の眞精神と禪道の妙諦とに鑑みて、其方法を有して居るけれども、今回は本誌の題名に因みて以上の範圍を以て止めて置き、更に機會を得なば平生の實驗による、他の方法に向つて所信を述べ、以て聊かたりとも、江湖同胞の爲めに酬ゐんことを期す。

自然を詠ずるの歌百首

齋藤茂吉

(一) 山岳の歌

○

山こえて二夜ねむりし瀬上の合歡花のあはれをこの朝つげむ

あづま山の谿あひくだる硫黄ふくみなみ疾風にむかひてくだる

うつし身の聲あぐるときたたなはる岩代のかたに山反響すも

梅干をふふみて見居り山腹におしてせまれる白雲ぞ疾き

山がひにおきな一人ゐ山刀おひて吾妻のやまをみちびきのぼる

うごきくるさ霧のひまにあしびきの山の鴉の飛びがてぬ見ゆ

おきふせる目下ひらやま天つ日の照りてかげらふ時のまを見つ

あづまねのみねの石はら眞日てれるけだもの糞に蠅ゐるあはれ

いましめて峽をめぐれりまながひの赤はだかなる山に陽の照る

くたびれて息づき居ればはるばると硫黄を負ひて馬くだるなり

○

ここに來て心いたいたしまなかひに迫れる山に雪つもるみゆ

あしびきの山こがらしの行く寒さ鴉のこゑはいよよ遠しも

はざまなる杉の大樹の木下闇ゆふこがらしは葉おとしやまず

山がはのたぎちのどよみ耳度にかそけくなりて峯を越えつも

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり音とどろくも

藏王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻の山に雲のゐる見ゆ

たちのぼる白雲のなかにあはれなる山鳩なけり白くものなかに

あまつ日に目陰をすれば乳いろの湛かなしきみづうみの見ゆ

まなかひにあかはだかなる冬の山しぐれに濡れてちかづく我を

ものの行とどまらめやも山峽の杉の大木の寒さのひびき。

(一) 耶馬溪にて

与謝野晶子

馬車はやく舞鶴橋の下くぐり青き世界に歩み入りにき

山あひの流つたへば自らがものに刺繍置き行くここちする

山の草皆白き牙もつごとし葉の裏かへす夕風ぞ吹く

石なべて面白けれど皆知れるわれのこころの形するのみ

大空の覗くと見れば水色に蓼の咲くなり雑草のなか

わが御者が角吹き止めば溪の水高く鳴り出づ山いかるごと

山の石戀に比べて侮りぬ見て涼しさの湧くのみこれは

三時程岸を歩めば溪川はこころに鳴れる音かとぞ聞く

みどりなる曲玉なして冷たかる山國川の岸の道かな

石の山高き方より風吹けばはかなさ覺ゆ君と行けども

石多き山にしあれば楓など女めく木を哀れにぞ見る

山も皆透き通り行くここちして世にあさましき河鹿鳴くなり

木草より猿(ましら)の族のそれよりもあてに思へる身を山に置く

水は泣く山移(やまうつり)てふ驛をば別れてわたる橋の下にて
夕ぐれの山あひの雨哀れなる旅のこころを白く打つなり
溪の風冷し鳥かはた魚か人かしらねど我等相ゆく
高山の石のかぎりは墨をもて夕が早く塗りにけるかな
旅人の涙の散るに似たりけり夜の溪つたふ螢は悲し
山の夜の螢の火にてわが四人見かはす馬車もなまめかしけれ
わが馬車を追ひくる螢さもなくてあてに山這ふ彼方の螢

(三) 寂寥

若山牧水

溪をおもふ歌

疲れはてしこころの底に時ありてさやかにうかぶ溪のおもかげ

何處(いづく)とはさだかにわかねわがこころさびしき時に見ゆる溪川(たにがは)

獨り居て見まほしきものは山かげの巖(いは)が根(ね)ゆける細溪(ほそたに)の水

巖が根につくばひ居りて聽かまほしおのづからなるその溪の音

五百重(いはへ)山(やま)峰にしら雲たたぬ日も絶ゆることなき溪としおもふ

わが居ればわが居るところ眞悲(まがな)しき音に出でつつ見ゆるその溪

幼き日ふるさとの山に睦みたる細溪川(ほそたにがは)の忘られぬかも

山をおもふ歌

わがこころ今は疲れぬ時じくの山の雫に行きて濡れましを

さびしさや峰高ければ小(ちひ)さしとひとのいひけむその月を見む

高山のそのいただきに額(ぬか)あげて風の寒きに相觸れましを

たのしきはわれを忘れて曉(あかつき)の峰をはなるる雲あふぐ時

山中獨居の歌

うららかに獨りし居れどうらら寒きこころをりをり起りこそすれ

向つ峰にけふもしらじら雲い立ち照り輝くに獨り居にけり

輝けば山もかがやき家も照り夏眞白雲わびしかりけり

麓邊の路のひとすぢしらじらと見えて向つ峰雲湧きやまず

峰のうへに卷き立てる雲のくれなゐの褪せゆくなべに秋の風吹く

みねの風けふは澤邊に落ちて吹く廣葉がくれの葛の白花

朝空に黃雲たなびき蜩のいそぎてなけば夏日かなしも

朝雲ぞけむりには似るこの朝げあわだしくもなくほととぎす

いまもかも身か光りなむ眞晝愛し峯にはかかれ天の雲むら

(四) 栂と松

島木赤彦

松林やうやく寂し一人ゆくわれの草鞋に赭土はつき
松風のなかに木摺れの音すなり枝々ふかく交はせるならむ
松かげに腰をおろしてひそかなれ足袋のほこりを吹きてわが居り
赤埴の土は明るしひとり座る我が眼に見えて松葉は散るも
松の木にわが凭りしかばたはやすく剝げて落ちたるさびしき樹皮を
松風は吹きとよもせどわが笠に松の落葉はさはりて聞かゆ
幹長く聳つゆゑならむ風止みてなほ動く松の木摺れの音す
山晴れて却りて寒し栂の葉におのづからなる霧は流るも
晝もなか霧はれゆきて栂の葉のしみらに照るは寂しかりけれ
出づるとき妹に物言ひ栂の葉の日のきらめきに妹思ひ居り
山上の日光は寂し栂の木の黒き茂りに入り行かむとす
寂しくて踏みゆくわれの顔は觸る栂の繁りの丈けたかからず
栂原にな恠しみそ眼の上に紺いろの山いくも立てり

山の上の栂の木むれを吹きとよもす嵐の空の日は澄みのぼる

栂林あらしのなかに澄める日のいや澄みのぼり小さくし見ゆ

栂のうへに嵐の雲の通れれば月のごとくも日の見ゆるあはれ

火口原燒石原の落葉松のおそき芽ぶきに嵐は吹くも

硫黃谿谿底ひくく杉生見ゆ杉のなかなる溫泉の宿のけぶり

たえまなく嵐はあたる岩かどにをり〳〵あがる赭土の埃

山上の燒石原の岩の上に瓜を輪に切り食べてわが居り

(五)葛飾の歌

北原白秋

時雨の鳥

鳥のかげ木々にちらばるあはれさも今朝は時雨れてなほ小さく見ゆ

折よしに羽たたきうつる何の鳥時雨は煙る疎ら木立に

霜雀

友雀今朝も羽根掻き幽かなれ風少し見ゆる霜の柳に

冬枯の庭

一色に寂びれはてたる冬の庭夕さり明るそのたまゆらを

今さらに寂しといふもあはれなり庭をしづかに眺めけるかな

春意うごく

巣をつくる二羽の雀がうしろ羽根かすかにそよぐ春立つらむか

椿咲く

山ゆけばお山で赤い落椿ひとつ拾はな道のなぐさに

螢生る

草の葉に生れしばかりの露の泡螢はいまだ光り得なくに

鴉と蛙

青蛙嘴に引き裂く美くしさ鴉も濡れて雨後の地の上に

嘴太のわが家の鴉しみじみ濡れ蛙引き裂けば青き液流る

白蘭

石の間にかすかにかをる蘭の香の今は古りつつ澄みわたるかも

白牛

白き牛首差し入るるおとなしさ何かしら匂ふ草の深みに

蝗湧く

青き葉のかげにひそめる青蝗ゆるる動かさずば誰知らめやも

菖蒲咲く

花菖蒲あやめの上の竹棚に洗面器白し夏を淺みか

野良の正午

大空の圓き際涯に午砲の音とどろと鳴りぬ野良の飯時

雨後

雨霽れて早稲の青田の中空に虹鮮やかに立ちにけるかも

國府台

夕立のあとに喇叭の音の冴えて霧たちのぼる松のむら立

郵便配達の來る道

唐黍の紅き垂毛のふさふさと搖れて下ゆく人待つらむか

今日もまた郵便くばり疲れ來て唐黍の毛に手を觸るらむか

秋立つ

青すすき茅萱おしなべ吹く風に鴉は啼けり空を仰ぎて

中央公論臨時增刊自然生活號創作

禰宜様宮田

中條百合子

（一）

春になつてから沼の水はグッとふへた。

此間までは皆むき出しになつて、うすら寒い風に吹き曝されて居た岸の淺瀬も、今はもう稍々濁つては居るがしとやかな水色にすつかり被はれて明るい日光がチラチラと、輕く水面に躍つて居る。

波とも云はれない水の襞が、彼方の岸から此方の岸へと寄せて來る毎に、未だ生え換らない葦が控目勝ちにサヤサヤ……サヤサヤ……と戰ぎ、フト飛び立つた鶺鴒が小波の影を追ふやうに、スーイスーイと身を翻す。

處々崩れ落ちて、水に浸たつて居る堤の後からは、ズーッとなだらかな丘陵が彼方の山並みまで續いて、丁度指で摘み上げたやうな低い山々の上には、見事な

吾妻富士の一帯が他に抽でゝ聳えて居る。

色彩に乏しい北國の天地に、今雪解にかゝつて居る此山の姿ばかりは、完く素晴らしい美くしさを以て、あらゆるものゝ歎美の的となつて居るのである。

山は白銀である。

そして紺碧である。

頂に堅く凍つた雪の面は、太陽にまともから照らされて眩ゆい銀色に輝き渡り、やゝうすれた燻し銀の中腹から深い紺碧の山麓へと其の餘光を漂はせて居る。

遠目には見得ようもない地の襞、灌木の茂みに從つて、同じ紺碧の色も、或處は稍々青味勝ちに、又或るところはくすんだ赤味をまして、驚くべき巧な陰のつけられてある麓の末は、其前へ一段低く連なつた山の峯の裡へと消えて居る。

そして、靜かな西風に連れて、來ては去る雲がその時々に山全體の色調に此上なく複雜な變化を與へる。

或時は明るく或時は暗く、山はまるで生きて居るやうに見えた。

大きな楓の樹蔭に胡座をかき、釣糸を垂れながら禰宜樣宮田はさつきから、此等の美くしい景色に我を忘れて見とれて居たのである。

「まつたくはあ、偉れえもんだ………

彼は思はずもつぶやく。

そして、自分の周りにある物と云ふ物總てから、生々として、眞當なあらたかな氣が立ち上つて來るやうに感じたのである。

一本の樹でもどんな小さな草でもが皆創られた通りに生きて居る。

背の低いものは低いやうに、高いものは又高いものゝやうにお互にしつくりと工合よく、仲よささうに生きて居るのを見ると、何によらず彼は、

「はあ眞當な事だ

と思ふ。

そして何處となく心がのび／＼と樂しくなつて、彼のいつも遠慮深さうに瞬いて居る、大きい子供らしい眼の底には、小さい水銀の玉のやうな微かな輝やきが湧くのである。

一體彼の顔は、大變人の注意を引く。

利口さうだと云ふのでもなければ雄々しいと云ふのでは元よりない。

東北の農民に共通な四角張つて、頬骨の突出た骨相を彼も持つては居るのだけれども、五十にやがて手が屆かうとして居る男だなどゝは如何うしても思へない程若々しく眞黑な瞳を愼ましく、けれどもちやんと相手の顔に向けて、下瞼の大きな黑子を震はせながら、丁寧に口を利く彼の顔を見ると、誰でもフト此處らでは滅多に受けない感じに打たれる。

大變物柔らかに、品のいゝやうな快さを感じるとともに、年に似合はない單純さに、罪のない愛情を感じて、尨毛だらけの耳朶を眺めながら自づと微笑まれるやうな心持になるのである

禰宜様宮田は至つて無口である。

どんな諷刺を云はれやうが、曾て一度も怒つたらしい顔さへした事がないので、部落の者達は皆、

「ありやあはあ變物だ」

と云ふ。その變物だと云ふ中には、間抜け、默んまり棒、時によると馬鹿かもしれないと云ふ意味が籠つて居る。

眞面目に働いても利口に立ち廻れないから、女房のお石が桑の賣買、麥俵のかけ引きをする。彼女がするやうにさせて、一口の小言も云はないので、お石は大抵の場合彼の存在を念頭に置かない。たまに、彼女の口から

「とつさん」

と云ふ言葉が洩れる時は、きつと何か仕事が上手く行かなかつたときとか、氣がむしやくしやして、腹を立てゝやる相手が必要な時に限られて居ると云つても、決して其が誇張ではない程、彼の權威は微かであつた。

「ヘッ！俺ら家のとつさんか………」

他人の前でも、地面に唾を吐きながら、彼女の持つて居るあらゆる侮蔑を何の隱すともなく現はしても、不思議に思ふ者はない。

家柄は禰宜様――神主――でも彼はもうからきし埒がないと云ふ意味で、禰宜様宮田と云ふ綽名がついて居るのである。

人中に居ると、禰宜様宮田の「俺」はいつも〳〵心の奥の方に逃げ込んで仕舞つて、何を考へても云はうとしても決して「俺の考」とか「俺が云つたら」と云ふものは出て來ない。けれども、野良だの、釣だのに出て來て、斯う云ふ風に落付くと、彼は漸やつと「俺」をとり戻す。

そして、段々心は廣々と豊かになつて、彼の眞個の命が榮え出すのであつた。

今も長閑な心持で四邊の様子を眺めて居るうちに、禰宜様宮田の心は、次第に厚みのある快さで一杯になつて來るのを感じた。

そして、平らかな閑寂な其の表面に、折々雫のやうにポツリポツリと、家内の者達の事だの、自分の事だのが落ちて來ては、やがてスーと波紋を描いて何處かへ消えて行つて仕舞ふ。

沼で一番の深みだと云はれて居る三本松の下に、これも釣をして居るらしい小さい人影を見るともなく見守りながら、意識の端々がほんのりと霞んだやうな狀態に入つて行つたのである。

其からやゝ暫く立つてから、彼はフト元の心持に戻つた。どの位時が過ぎたか分らない。

禰宜様宮田は、ついうつかりして居た竿を上げて見た。餌ばかりさらはれて、虫けら一匹かゝつては居ない針が、極り惡さうに瞬きながら上つて來た。

彼はもう何だか、わざ〳〵切角斯うやつて生きて居る蚯蚓の命まで犠つて僅か許りの小魚を釣るにも及ばないやうな心持になつて、草の上に針を投げ出すと、そのまゝ煙草をふかし始めた。

先刻（さつき）までは居る影さへしなかつた鳶が、いつの間にかすぐ目の前で五六度圏を描いて舞つたかと思ふと、サッと傍の葦間へ下りて仕舞ふ。

キ……キッキ……

微かな聲が聞えて來る。

「はて、小鳥でもはあ狙はれたけえ……

葦叢をのぞき込むやうにして膝行出た禰宜樣宮田の目には、フト遠い、ズーッと遙かな水の上に、何だか奇妙なものが足掻いて居るのが寫つた。

鳥でもないし、木片でもない。

「今時分人でもあんめえし……

浮藻に波の影が差して居るのだらうと思つて見ると、さう見えない事もない。

が、しかし……

何だか氣になつてたまらない彼は、煙管を持つた手を後で組み、纖ぎはぎのチャン〳〵の背を丸めて、堤沿ひにソロ〳〵と歩き出した。

「オーイ、誰來てくんろよ―オーイ

近所の桃林で働いて居た三人の百姓は、喫驚して仕事の手を止めた。

「オーイ來てくんろよ―沼だぞー

「あら、オイ禰宜樣の聲でねえけえ？

彼等が沼地へ馳け付けた時には、眞裸體の禰宜樣宮田が、着物の明いて居る所中から水が入つて、ブク〳〵とまるで水袋のやうになつて居る若い男を、やつとの事で傍の乾いた草の上まで引きずり上げた

ところであつた。
背が低くて、力持でない禰宜樣が助け上げたのが不思議な位、若者は縱にも横にも大男である。
が、もうすつかり弱り切つて居る。
心臟の鼓動は微かながら續いて居るから、生きては居るのだが、見るも恐ろしいやうな形相をして絕息して居る。
もう一刻の猶豫もされない。
水を吐かせ、暖め摩擦し、其時其處で出來る丈の手當がほどこされたのである。
此處いらの百姓などゝは身分の違ふ人と見えて、勞働等は思つて見た事もなささうな體をして居る。
自分が裸體だなどゝ云ふ事はまるで忘れて、水氣が一どきに乾からうとする寒さで、齒の根も合はずガタガタ震へながら、それでもひるまない禰宜樣宮田は、若者の上に跨がるやうにして
ウムッ！ウムッ！
と滿身の力を籠めて擦つて居る。
靑醒めた、けれどもどうあつても此男を生さずには置かないぞと云ふやうな、堅い決心を浮べた彼の顏は、平常(ふだん)に似合はず確かりとして見える。
心から調子の揃つた四人の手は、やがて段々若者の生氣を取り戾し始めた。
呼吸が淺く始まる。
紫色だつた爪に僅かの赤味がさして、手足にぬくもりが出る。

追ひ〳〵知覺されて來た刺戟によつてピリ〳〵と瞼や唇が顫動する。

やがて、丁度深い眠りから、今漸々と覺めようとする人のやうに、二三度唇をモグ〳〵させ、手足を動かすかと思ふと、瞬きもしないで見守つて居た禰宜樣宮田の、其眼の下には、今、辛うじて命をとりとめた若者の水々しい眼が、喜びの囁きの裡に見開かれた。

此の瞬間!

禰宜樣宮田は、自分の體の中で何かしら大した幅のあるものが、足の方から頭の方へと一目散に馳け上つたやうな心持がした。

そして、彼のいゝ顏の上には、しん底からの微笑と啜泣が一緒くたになつて現はれた。

「はあ、眞當なこつた。

若けえもんあ死なさんにえわ……なあ……今まで只の一度でも感じた事のない歡喜と愛情が、彼の胸には焔のやうに燃え上つて來た。

もうどうしていゝか分らなくなつて仕舞つた彼は、傍の草の中に突伏して、拜みたくて堪らない心持になりながら子供のやうに泣吃逆つたのである。

そして、安心して氣が緩んだので、いつかしら我ともなく心がポーッとなりさうになつた時、

「オイ〳〵禰宜樣、何う（あによ）してるだよ。

俺らあおめえん介抱（けえほう）まぢやあ請合はねえぞ

と云ひながら、誰かゞひどく彼の肩を搖つた。

スー、スーと一寸づゝ區切りをつけながら、蜘蛛が糸を下げるやうに、段々と眞暗な底の知らないところへ體が落ちて行くやうに感じながら、どうしても自分で頭を擡げる事の出來ないで居た禰宜樣宮田は、此時ハット思ふと同時に、急に自分の體が自由に輕くなつたやうに感じた。

そろ〳〵と起き上つた彼は、仲間と一緒に若者をよう〳〵近所の百姓屋まで運んで行つた。

救はれた若者は、町で有名な海老屋と云ふ呉服屋の息子で、當主の弟にあたる人であつたのである。

名乘られると、急にどよめき立つた者達は、平常(ふだん)は使はない取つて置きのいゝ言葉で御機嫌をとらうとするので、大の男まで時々途方もないとんちんかんを並べながら、ワク〳〵して助けて吳れた人は何と云ふ者だと訊かれると、

「ありやおめえさ禰宜樣宮田で、へ……

もうからきしはあ……

などゝ、お世辭笑ひばかりする。

今の場合、わざ〳〵拾つて來られたところで如何う仕ようもない魚籠だの釣竿だのを、一つ〳〵若者の前へ並べたてながら、彼等は財布と銀時計――若者も內心では如何うなつたらうと思つて居た――をこつそり牒し合はせて、見付からない事にして仕舞つた。

「オイきつと默つてろな、え?

えゝけ、きつとだぞ!

皆に拳固を差しつけられた禰宜樣宮田は、部屋の隅の方でコソ〳〵と身仕度をした。

そして、大切さうに皆に取り卷かれ、氣分もよほどよくなつたらしい面持ちをしながら、家からの迎へを待つて居る若者を眺めてから、愛くしみに滿ち充ちた心を持つて、裏口から誰も氣の付かないうちに、さつさと歸つて行つて仕舞つた。

（二）

今まで、何かにつけて禰宜樣宮田は自分の心の裡に年中飢じがつて、ピイ〳〵泣いては馳けずり廻つて居る瘠せつぽちな宿無し犬が居るやうな氣持になり〳〵した。平常は半分まぎれて氣がつかないで居ても、何か少し辛い事や面白くない事が起つて來ると、何處かの隅に寢て居た瘠せ犬がムックリと起き上る。そして、微かな足音を立てながら、悲しげに泣きながら、彼の體中を步き廻る。ソク〳〵ソク〳〵云ふ足元から、悲しい寂しい心持が湧き出して、禰宜樣宮田の心も體も押し包んで仕舞ふのである。

そして、時には瘠せ犬が自分の心の持主なのか、又は自分が、其の瘠せ犬の主なのか、よく分らなくなつて仕舞ふ程、追ひ拂つても、追ひ拂つても、亦戾つて來るみじめな、瞬く間に自分の心を毫礫させて仕舞ひさうな辛さが、彼の心を苦しめたのである。

けれども、有難い事には、昨日のあの瞬間から――彼が泣き伏しながら拜みたい心持になつた時から――彼の魂は眞當な休みどころを見つけた。

其處だけは、いつも明るく暖かく輝いて居る。

辛かつたら來るがいゝ……

泣きたくなつたら、泣きに來い……

彼は、今まで俺はもう／＼不仕合はせなけだものだと思つて居た自分の心を――あの瘠せ犬があんなにも引搔き廻す自分の心を――ちやあんと、どなたかが見て被居つしやつて、斯う云ふ休みどころを下すつたのぢやあるまいかと云ふことを大變思つた。

其のどなたかは、世の中ぢゆうの眞當なことの持ち主であらつしやる………

禰宜様宮田は、廣場へ筵を擴げて、楤の根を乾かしながら、大變仕合はせな、謙遜つた心持で考へて居たのである。

南向きの廣場中には、日がカアッと差して、桔槔の影は彼方の納屋の荒壁を斜に區切つて消えて居る。

廿日程前に誕生した雛共が、一かたまりの茶黄色のフワ／＼になつて、母親の足元にこびりつきながら、透き通るやうな聲で

チヨチヨチヨチヨ／＼……

と絶間なく囀るのを、親鳥の

クワ…クウ／＼…クワ……

と云ふ愛情に滿ちた鼻聲が一緒になつて、晴れた空に響いて行く。

娘のまきと、さだに守りをされながら、六の小さい裸足の足音は濕りけのある地面に吸ひ付くやうな調子で、今來て肩につかまつたかと思ふと、もうあつちへヨチ／＼とかけて行く。

「ア、六。

そげえなとこさえぐでねえぞ

血もんもが出來てあゝいて〳〵になんぞ、な

こつちやて、にうら見、とつとがまんま食つてんぞ、おうめえ〳〵てな……

麥粉菓子の海いやうな香ひが、乾いて行く桜の根から靜かにあたりに漂つて居た。

すると、晝過ぎになつて、突然海老屋の番頭だと云ふ男が訪ねて來た。

昨日のお禮を云ひたいから、店まで一緒に來てくれと云ふのである。

種々言葉に綾をつけながら、故意と早口に、ぞんざいな物云ひをする番頭は、彼の妙にピカ〳〵する黒足袋を珍らしがつて鷄共が首を延す度んびに、さも氣味惡さうに下駄をバタ〳〵やつては追ひ立てる。

鷄がはあおつかねえとは……

心の内で喫驚しながら、まさやさだは番頭が厭な顔をするのも平氣で、眞正面に突立つたまゝ、不遠慮にその顎のとがつた顔を見守つて居る。

禰宜樣宮田は行き度くなかつた。

そんな立派な家へ、何も知らない自分が出かけて行くのは氣も引けたし、何かやる〳〵と云はれるのにも當惑した。

「俺らほんにはあ御使えいたゞいた丈で、結構でござりやす……

何もそげえに……

そんに決して俺らの力ばつかぢやあござりましねえから……

彼は、下さる物は、自分のやうな貧乏人にとつて不用ない筈はないことは知つて居る。

けれども……何だか品物などで御禮をされるには及ばない程の滿足が彼の心にはあつたのである。

そして、物なんか貰つてさも俺の手柄だぞと云ふ顏は、到底出來ない何かゞ彼の頭を去らなかつた。

番頭に蹴飛ばされさうになる雛どもを、ソーッと彼方へやりながら、禰宜樣は幾度も〳〵辭退した。

が、番頭はきかない。

到頭喋りまかされた禰宜樣宮田は、海老屋まで出かけることになつた。

店の繁盛なことや、暮しのいゝことなどを、しまいに唇の角から唾を飛ばせながら喋る番頭の傍について、在の者のしきたり通り太い毛襦子の洋傘をかついだ禰宜樣は、小股にポク〳〵とついて行つたのである。

海老屋では、家事を萬事とりしきつて仕て居ると云ふ年寄り――五十四五になつて居る先代の未亡人――が會つた。

金庫だの簞笥だのを、ズラリと嵌め込みにした壁際に、帳面だの算盤だのを澤山積み重ねた大机を引きつけて、男のやうな、と云つても普通の男よりもつとバサ〳〵した顏や聲を持つたおばあさんが、ムンヅと云ふ形容が可笑しい程適した形をして座つて居るのを見ると、あれでもおばあさんだらうなと云ふ感じが、一層禰宜樣宮田の心を間誤付かせた。

「はあ、お前さんが宮田とお云ひか……
丁寧に頭を下げた彼の挨拶に答へた、彼女の最初の、太いかすれた聲を聞いた瞬間から、もうすつかり彼の心は、受身になつて仕舞つて、いつもの「俺」の逃げて行き方が、もつと早く、もつとひどく行はれたのである。年寄りはあんな大男の息子を助けた男と云ふ丈で、もつとずーッと體ぐ心もがつしりした元氣な男を期待して居たところへ現はれた彼は、餘り總てに於て思ひがけない。
おばあさんは、何だか滑稽なやうな、お禮を云ふのも馬鹿らしいやうな氣持になつて仕舞つた。
そして、臆して居る彼の前に此上ない優越感を抱きながら、お禮を云ふのか命令して居るのか、差程の區別をつけられないやうな口調で息子の救はれた感謝の意を述べた。
私のやうな者が、お前にお禮を云ふのさへ、眞個なら有難すぎる事なのだと云ふ口吻が、ありくと言葉の端々に現はれて居るけれども、禰宜樣宮田はちつとも不當な態度だと思はなかつたのみならず、彼女がほのめかす通り、お禮などを云はれるのは勿體ない事だと思つて居たのである。
お前さまは海老屋の御隱居であらつしやる。そんにはあ俺あこげえな百姓づれだ。其處にもう絶對的な或物——禰宜樣宮田にとつては此上ない畏怖となつて感じられた、兩者の位置の懸隔——を認めることに、馴されきつて居るのである。
何を云はれても、彼は只ハイ、ハイと御辭儀ばかりをした。
一通り云ふ丈の事を云ふと、年寄りは勿體振つた樣子で、仰々しい金包みを出した。
麗々と水引までかゝつて居る包みを見ながら、禰宜樣宮田は、途方に暮れたやうな心持になりながら、

ぎごちない言葉で辭退した。
「ほんにはあ御有難うござりやすけんど……
俺ら心にすみましねえから……
けれども年寄の方では、喉から手が出さうに欲しくても、一度は「やつて見る」遠慮だと思つたので、唇の先丈で
「まあ御遠慮は無用だよ
と云ひながら、煙草を吸ひ込む度に目を細くしては彼の様子を見て居た。
が、彼はどうしても納めようとしない。
貰はない譯を彼は說明したかつたのだ。けれども、何より肝腎の
俺の心にすまんねえもの
を、云ひとくに入用丈の言葉數さへ知らない上に、如何う云ふ譯だからどうなつて俺の心に濟ないのかと、云ふ事は、彼自身にさへよくは分つて居ない。
只心に濟ない氣がする。後にも先にも其丈なのである。けれども、その漠然とした「氣持」が、どんなにしても胡魔化せもせず、詐せもしない强さで彼の心を支配して居るのである。
永い間ジーッと考へれば、云はれない事もなからうが、何にしろ、今斯うやつて年寄りが面と向つて口元を見守つて居る時などに、どうして平氣で其那事が考へて居られよう。
彼のいゝ魂は、すつかり恐縮して頑丈な胸の奥にひそまり返つて居たのである。

幾度云つても聞かないのを見た年寄りは、内心に意外な感じと、先づ儲けものをしたと云ふ安心とを一どきに感じながら、たつた一圓の包みを眺めた。

そして、何となしホッとしながら、けれども何處までも切角出したものを突返された者の不快を裝ひつゝ、不機嫌さうに傍の手文庫を引きよせて、包みを入れると、ピーンと錠を下して仕舞つた。

隅々の糸がほつれて居る色も分らない古巾着を内懷から出して、鍵を入れると、

「一錢や二錢のお金ぢやあなし、遣らうと云へば、一生恩に被る人が、ウザ〳〵云ふ程あります、只湧いて來るお金ぢやあなしね」

とつぶやきながら、頂垂れて居る禰宜樣宮田の胡麻鹽の頭を眺めて、彼女は途方もない音を出して、吐月峯をたゝいた。

（三）

海老屋の年寄りは、翌朝もいつもの通り廣い果樹園へ出かけて行つた。

笠を被り、泥まびれでガワ〳〵になつたもん平を穿いた彼女が、草鞋がけで澤山な男達を指揮し出すのを見ると、近所の者は皆、

「あれまあ御覽よ、

又海老屋の鬼婆さんが始まつたよ。」

と、あきれ返つたやうな調子で云ふ。

自分が鬼婆々々と云はれて居ると云ふことも、其の譯も彼女はちやんと知つて居る。けれどもちつとも氣にならない。それどころか却つてこそ〳〵と鬼婆がどうした斯うしたと噂されるのを聞くと、今までに倍した元氣が湧いて來るのである。

どんな惡口でも何でもつまりは、ねたみ半分に云ふのだ。

自分の事を眼の敵(かたき)にして、手の上げ下しにろくな事を云はない津村にしたところで、腹の中は見え透いて居る。今までこそ、呉服は津村に限るとまで云はれて、町隨一の老舗で通つて來たものが、此頃ではうちにすつかり蹴落されて、目に見えて落ちて行く。その當人になつて見れば、嘘にもお世辭にもよくは思へないのも無理はない。其がこわくて何が出來よう。

先達つて三綱橋の御祝ひの時にも、佐渡の御隱居が彼那にわい〳〵云つたつて、矢張り寄附金が少なかつたから、見たことかあゝやつて私よりは下座へ据えられて、夜の御振舞ひにだつて呼ばれはしない。町會議員を息子に持つて居ると威張つたところで、いざと云ふ時にはどうせ、私の敵ぢやあない哩。今の世ぢやあ、金さへあればどんな無理も通せると云ふもの、現に佐渡りの議員だつて、買つたも同樣の札で當つたのだと云ふぢやあないか。

物は方便、金が物云ふ時世に生れて、變におかたい事を云ふのは、馬鹿の骨頂だ。

何とか彼とか理屈をつけて、溜めたくないやうな振をして居る者の御仲間入りをして居られるものか。何と云はれたつてかまはずドシ〳〵溜れば、それでいゝのだ。あゝそれでいゝのだとも……。

どんな僅かの機會でも、決して見逃すことのない彼女は、幾分かの利益が得られさうだとなると、ど

んな手段でも策略でも遠慮會釋なくめぐらして、どうにでも仕舞ひには勝つ。まるで思ひがけないやうな難題を考へたり、云ひがゝりを作ることは、彼女の得意とするところであり、從つて何よりの武器であつた。其等の思ひ付きを、彼女は日頃信心する妙法樣の御靈驗と云つて居たのである。

果樹園には、此の土地で育ち得る總ての種類の果樹が栽培されて居た。そして、收穫時が來ると、お初穗をどれも一箇づゝ、妙法樣と御先祖にお供へした後は、皆賣り出すのだから、今からの手入れは決して忽がせには出來ない。雇人や作男などは、皆猫つかぶりの大噓つきで、腹の裡では何をたくらんで居るか、知れたものでないと思ひ込んで居る年寄りは、枝一本下すにも始めから終りまで自分の目の前でさせ、納屋へ木束を運ぶまで見屆けなければ安心がならない。

大汗になりながら、馳け廻つて監督するのだが、體は悲しい事に一つほかない彼女が、今此方に來て居れば彼方の畑の作男共は、どうしても手を遊ばせたり、ついなまけて仕舞つたりする。

今朝も、鼻の頭に大粒な汗をぴつしより搔いて、大忙がしに働いて居ながら、どう云ふわけかおばあさんの頭からは、どうしても禰宜樣宮田のことが、離れない。

「妙な男だわえ……貧乏人の分際で……金……何にしろ遣らうと云ふのは金なんだから!

汗を拭き〳〵年寄りは、

「おい亶、お前彼男を知つてるんだらう、

ありやあ一體どうした男なんだね、

など〻訊いた。

「へ……

どうも、……

「一體何で食つて居るんだね、よくあれで生きて行かれたもんさ、

「ちいつとばつかり桑畑や麥畑を持つてるからそれでやつてくんでござりませう、が御隱居の目から見なさりやあ、何奴もはあ氣違えのやうなもんでござりますよ

へ……

作男達の顏には、彼等特有の微笑が湧く。

誰か「エヘン！」とわざと大きな咳拂ひをして、おばあさんが振向く間もなく何處かへゴソ〳〵隱れて仕舞つた。

手元が見えなくなるまで、眞黑になつて働いて居た年寄りは、食事をすませると火鉢の傍で、煮がらしの番茶を飮んで居た。

いつともなく禰宜樣宮田の丁寧な御辭儀の仕振りなどを思ひ出して居た彼女の心には、不意に思ひがけずあの妙法樣が御乘りうつりなすつた。そして、瞬く間に誰が聞いても喫驚しずには居ない程、「い〻思案」が夕立雲のやうに後から〳〵と湧き出して來て、頭を一杯にして仕舞つた。

腹心の番頭と、や〻暫く評議を凝らした時には、此からもう五六年も後の事が、ちやんと表になり數

になつて現はれて居たのである。

禰宜樣宮田の臆病なウジ〳〵した樣子が、何か年寄りに「いゝ思案」のきつかけを與へたらしかつた。

海老屋へ行つた禰宜樣宮田は、きつと澤山な御褒美にあづかつて來るものだと思つて、待ちに待つて居たお石は、空手で呆然戻つて來た彼を見ると、思はず

「とつさん、土產あ後からけえ？

と訊かずには居られなかつた。が、

「馬鹿えこくもんでねえ

と、彼は相手にもしない。

段々聞いて、出された金包を戻して來たと知つた時には！

「まあお前が……まあ返して來たつちゆうけえ！

お石は、腹のしんが皆拔けて仕舞つたやうに、落膽した。暫くポカンとした顏で亭主を見て居た彼女は、やがて氣をとりなほすと一緖に、今まで嘗て此那に怒つた事は無い程の激しい憤りを爆發させた。半夢中になつて、彼をまるで猫や犬のやうに罵り散らしながら、自分の前かけや袖口を齒でブリ〳〵と嚙み破る。

譯が分らないで怒鳴りつけられたり擲たれたりして、恐ろしさうに竦んで居る子供達の肩を撫でゝやりながら、禰宜樣宮田は、默然として其罵詈讒謗を浴びて居た。

それから每日〳〵斯う云ふ厭な事ばかりが續いた。

お石は、何かにつけて金を貰つて來なかつた事を引合ひに出して、子供が一寸物をねだる事まで皆彼女の腹癒せの材料にされたのである。

「汝等あまでたかつてからに、こげえな貧乏おつかあをひでえ目に會はせくさる！

あんでも父つちやんに買つて貰つちや、呉れるちゆう金え、突返すほどのお大盡たあ知んねえで、我が食ふもんもはあ食はねえようにして、稼えでたんなあ、さぞえゝざまだつたべえて、

俺らも、もう毎日眞黑んなつて働くなあ止めだ、人ら面白くもねえ、

後あどうでもえゝやうにすんがえゝや

朝でもふて寢をしたり、食事の用意もしないまんま、何處へか喋りに行つて仕舞つたりするので、心の裡では其那に母親を怒らせた父親を怨みながら、まだやつと十一のさだが、危ふげに飯などを炊く。

暗い、年中ジク〳〵して居る流し元に、鍋などを洗つて居る姉の傍に、むづかる六をこぼれさうにおぶつたまきが、途方に暮れたやうに立ちながら、何か小聲で託つて居るのを見ると、禰宜様宮田は眞個に辛いやうな心持に打たれた。

自分が居れば居る程、大混雑になる家から逃れるやうにして、彼は出來る丈野良にばかり出て居た。けれども、別にさう大して働かなければならない程の仕事もない。

耕地の端れの柏の古木の陰に横はりながら、彼は様々な思ひに耽つたのである。

透き通りさうに澄み渡つて、まるで精巧なギヤマン細工の天盃のやうに一面キラ〳〵と輝いて居る、廣い〳〵空。

短かい陽炎がチロ〱ともえる香りのいゝ地面。

禰宜様宮田は、ジイッと瞳をせばめて、大きい果しない天地を想ふ。

そして、想へば想ふ程、眺めれば眺める程、彼はあの碧い空の奥、此の勢のいゝ地面の底に何か在りさうで堪らない心持になつて來るのである。

眞個に、きつと何かゞ在りさうな氣がする。

それなら一體何が在るのか？

彼は知らないし、又解りもしない。

只、底拔けでない、筒拔けでは決してないと云ふ心強さが、じわ〱と彼の心の核まで滲み込み、悠久な愛情が滾々と湧き出して、一杯になつて居た苦しみを靜かに押し流しながら、愼み深い魂全體に滿ち溢れるのである。

「何事もはあ眞當なこつた……」

天地が廣いのが眞當なやうに、何も知らない意くじない自分が小さいのは、辛い事があるのは決して間違ひではない。

「どなたか」は各自の心に各自違つた考へを御授けなさる。それがよし自分と同じで無いとしたところで、どうして怨んでなるものか。

總ての物の裡に潛んで居る眞當、堀り下げて、堀り下げて行つた底には、きつと光つて居るに違ひない眞當に、强い憧がれを感じて、禰宜様宮田のあの子供らしい、上品な眼は涙組んだのである。

貧乏な暮しには、いゝ魂より金の方が大切だ。
お石は、唇を嚙んでジリ／＼しながら、どう考へても馬鹿の阿呆に違ひない自分の亭主を呪つた。
家中の責任を皆背負つて立つて居る自分、此の自分が居るばかりに漸々哀れな亭主も子供達も生きて居られるのだと云ふ自信に、少なからず誇りを感じて居た彼女は、何の價値も全然認め得ない彼が、一存で禮を突返して來たと云ふと――無能力者の僭越――によつて、非常に自分の誇りを傷けられたと感じた。
丁度、大變自尊心の強い先生がどうかしたはづみで目にもとめて居なかつた生徒に、遣り込められた時のやうな、何とも云ひようのない混雜した心持を、形式こそ違へ、お石も感じて居たのである。
そして、一層其の金包みに愛着を感じた。
指一本觸らずに置いて來た金包みの裡に、彼女は自分等の永久的な慰樂が包藏されて居たやうな心持がして、禰宜様宮田はまるで聖者の假面を被つた惡魔、生活を破壞させ、墮落させようと努めてばかり居る惡魔のやうに憎んだのである。
勿論、お石の心の中では、斯う云ふ風な言葉も順序もついては居ない。
掻き廻された溝のやうに、ムラ／＼、ムラ／＼と何も彼も一どきにごた混ぜになつて互に互を穢し合ひながら湧き出して來る。
さうするともう眞暗になつて仕舞ふ彼女は、譯も分らず叱りつけ、怒鳴りつけ、擲り散らす。
けれども、直ぐ旋風が過ぎて仕舞ふと、後には子供達に顏を見られるのも堪らないやうな氣恥かしさが殘るので、彼女は照れ隱しにわざと何處かへ喋りに飛び出して仕舞ふのである。

妙にぎごちない、皆が各自の底意を見拔きながら、僅かの自尊心で折れて出る者は獨りもないやうな生活が彼女にとつても早うんざりして來た時、思ひがけずに海老屋の番頭が、欲しいものを要求して吳れと云つて來た時には、もう何と云つていゝかまるで生き返つたやうな心持がした。

自分さへ打ちとければ、其に對して片意地な心を持つ者は誰も居ない等と思はないお石は、小さい娘達まで心のひねくれた大人扱ひにして、自分獨りで拗戾て居たのである。

辭退はされるが、どうか何なり欲しいものを云つてくれと云ふ使の趣を話された時、顏が熱くなる程嬉しかつたお石は、相手を斯う出させるために、とつさんは彼時斷つて來たに違ひないと思つた。

若しさうだとすれば、俺ら何のために怒つたらう？私かに心の裡ではにかみ笑ひをしながら、彼女は今度も亦謝絕して居る禰宜樣宮田を珍らしく穩やかな眼差しで眺めて居た。

彼は相變らずのろい、丁寧な言葉で斷はると、五月蠅いものと諦らめて居た番頭は思ひがけず、じきに納得して歸つて吳れた。

禰宜樣宮田は、先ぐ歸つて貰つた事に滿足し、お石は何はともあれ來て吳れた事に滿足して、家中には久し振りで平和が戾つて來たのであつた。

けれども、使は三日にあげず寄來される。そして、ことわられては素直に歸つて行く。

「又御きまり通りでございます……」

番頭がさう云つて隱居の部屋へ挨拶に行く每に、海老屋の年寄りは會心の笑を洩して居たのである。

完くおきまり通りになつて來る哩へ……

年寄りの心には、丁度蔭かげに隱れて、落しにかゝる獸を待つて居る通りな愉快さが一杯になつて居るのである。

何にも知らない獲物は、平氣で頓間な顏付きをしながら、ノソ〱ノソ〱と段々落しに近づいて來る……

其時獵人の胸に滿ちる、緊張した原始的な嬉しさが、そのまゝ今年寄りに活氣を與へて、何だか絕えずそわ〱して居る彼女は、きつと斯う云ふ時ほか出ないものになつて居る無駄口をきいたり、下らない事に大笑ひをして、

「ヘッ、馬鹿野郞が！

などゝつぶやく。

其の馬鹿野郞と云ふのは、決して憎しみや、侮蔑から作男共に向つて云はれたのではない。

此からそろ〱と御意なりに落しにかゝらうとする獲物に對する非常に粗野な殘酷な愛情に似た一種の感情の發露なのである。

年寄りは、着々成功しかゝる自分の計畫の巧さに、我ながら勢立つて益々元氣よく朝から晩まで、馳けずり廻つて働いて居たのである。

三度まで無駄足を踏ませられても、怒る樣子もないばかりか、使を寄來すのを止めようともしない……

流石の禰宜様宮田も、又流石のお石も、少し妙な氣がした。

「一體まあ如何うした事ぢやい！」

漠然とした疑惑が起らないではなかつたが、禰宜樣宮田は、さう云ふ心持を自分で自分の心に耻じて居た。

何處に、自分等の大切な家族の一員の命を救つて吳れた者に對して、惡い返報をする者、又出來る者が居るだらう。

淺間しい疑を抱く自分を彼は私かに赤面しながら、何處までも、親切づくの事として信じようとして居たのである。

けれども、四度目に來た時、海老屋の番頭はもう斷はられて歸るやうな、其那生優しいものではなくなつた。

彼は眞個の用向――年寄りの計畫の第一部――を持つて現はれたのである。

今までとは打つて變つて高壓的な口調で、番頭は先づ隱居が大變立腹して居ること。此那に手を換へ、品をかへて何か遣らうとするのにきかないのは、何か思惑があるのぢやあないか、一旦自分で突落した若旦那を又自分で助けて來でもして、此方で上げようとして居るものより何か外の物に望みを置いて居るのぢやあないかと思つて居なさると、云つた。

其を聞いて、眞先に怒鳴り出したのはお石である。

憤りでブル〳〵と聲を震はせ、吃りながら、番頭の前へずり出して嚙みつくやうに叫んだ。

「云ふ事うにもことよう缺えて、まあ何んたらことう吐くだ！

何ぼうはあ貧乏してても、元あ歷とした禰宜樣の家柄でからに、人に後指一本差さつちやことのねえとつさん捕めえてよくも〳〵……
よくも〳〵そげえな法體もねえことを吐かしてけつかる！
何ぼうはあ、
眞靑な顏をして、あの黑子を震はせて居た禰宜樣宮田は、氣を兼ねるやうに、猛り立つお石の袂を引つぱつた。が彼女はもう止められない程氣が立つて居る。
邪慳に彼の手を拂ひのけると又一にじり膝行り出て、
「何ぼう、はあ金持だあ、海老屋の婆さまだあと、偉れえことうほぜえても、容赦なんかしるもんけ！
斫り殺してくれつから、ほんに、
俺らほんにごせえひれる！
と一息に怒鳴ると、發作的に泣き始めた。
禰宜樣宮田は、すつかり悶誤付いた。當惑した。
云はなければならない事が澤山喉元まで込み上げて來て居る。
けれども、どうしても言葉にまとまらない。何とか云はなければならないと思ふ心が强くなればなる程、彼の舌が强ばつて、口の奧に堅くなつて仕舞ふ。
彼は徒に手拭を握つた兩手を動かしながら、訴へるやうな眼をあげて油を今注いだ車輪のやうによく廻る番頭の口元を眺めた。

「まあ〳〵そんなにお怒んなさんな、御隱居だつて、無理もないんだ。あゝやつて切角氣を揉んで使をよこすと、片つ端からいらない〳〵ぢやあ、誰にしろいゝ心持あしないもんです、餘り勝手がすぎると、つい其處まで考へるのも、年寄りにやあ有勝ちの事つた。ねえ、切角こちらも、斯うやつて決してそんな氣はなくて居るものを、御隱居にさうとられると云ふなあ、全のところ損どころの話ぢやあない。察しまさあ、だから今度あ音無しく御隱居の志を通しなさい、ね、さうすりやあ決して惡いこたあない。
最後の「御褒美」として、今明いて居る十三俵上りの田を十俵に就き三俵で貸さう。此まで云つて聞かなければどうしても、御隱居の疑ひを事實と認めるほかないと云ふのである。

餘りひどい！

餘り云ひがゝりも過ぎて居る。此那難題が何處にあらう。

禰宜樣宮田は、何か一言二言云はうとして口を開いた。が、焦心(あせ)る脣の上で言葉になる筈の音が切れ切れに吃るばかりで、漸々順序立てゝ云はうとした事は忽ち、滅茶々々に亂れて仕舞ふ。

彼は益々深く項垂れるほかなかつた。

「例へ嘘にしろ何にしろ、あの御隱居が、さうと思ひ込んだと云つたら、決して只ぢやあすまさない方だ。
事によれば訴へなさるまいもんでもない。
疑ひをかけられる位、人間恐ろしいものはないからね、

すつかり身の證も立てゝ、御隱居の考へも通させた方が、どう考へても得策だね、

訴へ！訴へ!!哀れな夫婦の耳元で、訴への一言が雷のやうに鳴り響いた。

無智な農民の心を支配して居る法律に關する此上ない恐怖が、彼等の頭を掻き亂したのである。

道理の有無に關らず、彼等を一竦みに縮み上らせるのは、訴へてやるぞと云ふ言葉である。

まるで證據のない事を、若し若旦那が、えゝ誰かゞ後から突落したのを知つて居ますとでも云へば、

一體俺等は何で、さうでないと云ふ明しを立てるのだ。

調べられる時、酷い目にでも合はされて、苦しまぎれに夢中でさうだとでも云つたら、如何うすればいゝのか。

訴へ、恐ろしい訴へ——それも自分の方には何の强みも無ささうに思はれた訴へ——が、すぐ目前に迫つて居ることを思つた禰宜様宮田は、もう何をどう考へる事も出來ない程の混亂を感じた。

體中で震へながら、冷汗を掻いて居る彼を見ながら、番頭は口の先でまだヘラ〳〵と喋り續けた。

「考へて御覽な、

片方は何と云つても海老屋の御隱居、片方は失禮ながらお前さん達、

さうぢやあない違ひますと云つたところで、世間様ぢやあどつちが眞個だと思ふんだね、

誰が聞いたつて、御隱居を疑ぐる譯にやあいかない。政府のお役人様だつて、御前さんと、御隱居ぢやあちいつとの手心あ違はうとも云ふもんだ、

だから、下らない意地は捨てる方が得、ね、ウンと承知すりやあ、萬事萬端目出度し〳〵で納まらう

つてもんだ、
え！承知しなさい、その方が得だよ。
激しい强迫觀念に襲はれて、あらゆる理性を失つて仕舞つた禰宜様宮田は番頭の言葉を聞き分けることさへ出來ないやうになつた。
まして、其等の裡に含まれて居る弱點などを考へることなどは出來得ようもない。
彼は只恐ろしい。身にかゝる疑ひが恐ろしい。
思想の斷片が、氣違ひのやうに頭の裡中走け廻る……
大きな眼にうつすら涙を浮べて、口を開き暫く呆然として居た彼は、やがて一寸目を瞑ると殆ど聞きとれない程のつぶやきで、
「……俺ら……俺らすんだら……
と、云ふや否や押しかぶせるやうに、
「何？承知する？
あゝそれで漸う埒が明くと云ふもんだ、さあ、そんなら此れに一寸印を貰ひませうか。
番頭は、包みの裡から何か印刷したものを出して、禰宜様宮田の前に置いた。
取り上げては見たが、どうしても讀めない。
字の劃が散り〳〵ばら〳〵になつて意味をなさないのを、番頭に助けられながらそれが小作證書であるのを知つた時には、もう一層の絶望が彼の心を打つた。

が、もう何と云ふこともない。

二度も三度も間違えながら筆の先をつかへさせて名前を書き入れると、彼は默々として印を押した。

（四）

其の田地――禰宜様宮田が實に感謝すべき御褒美として、海老屋から押し付けられた――は、小高い丘と丘との間に狹苦いしく挾み込まれて、日當りの悪い全くの荒地と云ふほか、何處にも富饒な稲の床となり得るらしい形勢さへも認められない程のところであつた。

破産までさせられて、自棄になつた彼の前の小作人が半ば復讐的に荒して行つたのだとも云ふ、石つころだらけの、何處からどう水を引いたらいゝのかも別らないやうに、孤立して居る田地を見た時、禰宜様宮田は思はず溜息を洩した。

一體何處から手を付ければ、此那にも瘠せ切つた原つぱのやうな田地を、少くとも人並みのものに出來るのだらう……。

けれども、もう斯うなつては否でも應でも收穫を得なければ大變になる。

全く強制的に彼は朝起るとから日が落ちるまで、土龍のやうに働かなければならなかつたのである。

禰宜様宮田は、眞個に體の骨が曲つて仕舞ふ程耕しもし、血の出るやうな工面をして、澤山の肥料もかけて見た。寸刻の緩みもなく、此上ない努力を仕つゞける彼の心に對しても、よくあるべき筈の結果は、時脱れの長雨で滅茶々々にされた。

稲の大半は青立ちになつて仕舞つたのである。

どうしても負けて貰はなければ仕方がなくなつた爾宜様宮田は、年貢納めの數日前、全く冷汗をかきながら海老屋へ出かけて行く決心をした。

小作をして、おきまり通りちやん〳〵納められるものが、十人の中で幾人居る、何も耻かしい事ぢやあない、平氣でござぜ、平氣でござぜ。尋常なこつたと云つて居られるお石の心持を半ば驚きながら、彼はいろ〳〵と云ひ譯の言葉などを考へた。

あの年寄が此那事を願ひに行つたときいたばかりで、何と云ふかと思つた丈でさへ、足の竦むやうな氣のする彼は、せめてもお詫びのしるしにと、新らしい冬菜を澤山車にのせて、おづ〳〵と出かけて行つたのである。

臺所の土間に土下座をするやうにして、顏もあげ得ず間誤付きながら、四俵の筈のところを二俵で勘辨して呉れと云ふ爾宜様宮田を、上の板の間に蹲踞んで見下して居た年寄りは、思はず

「フム、フム

と可笑しな音をたてゝ鼻を鳴らした程、いゝ御機嫌であつた。

いくら平氣で居るやうに見せかけても、あらそはれない微笑が、ともすれば口元に渦巻いて、心が若い娘のやうにはね廻つた。

彼女の計畫は斯うなつて來なければならないのだ。

斯うなると、あゝなつて、さう云ふ風にさへなると……。

種々な意味に於て快く承知した年寄りは、負けてやる二俵分を現金に換算して禰宜様宮田に借用證文を作らせながら、丁度若い人が此れから出來ようとする氣に入りの着物の模樣、着て引き立つた美くしい自分の姿及び驚きの目を見張る其那着物を作られない者達のことゝを想像する通りに、そわ〳〵と彈力のある心持で順々に實現されて來る計畫に心醉したやうになつて居たのであつた。

其から三年の間、膏汗を搾るやうにして續けた禰宜様宮田の努力に對して、報はれたものは只徒に嵩んで行く借金ばかりであつた。

今年こそはと澤山の肥料を與へれば、期待した半分の收穫もなくて、町の肥料問屋へも、海老屋へも、如何うしようもなくて願つた借金が殖えて行く。

今までは、貧しくこそあれ一文の貸しのない代りは、又借りもなく、家内中の者が家内中の手で養して居られた彼等の生活には、絶えずジリ〳〵と生身に喰ひ込んで來る重い〳〵枷が掛けられた。

如何うにかして脱したい。

何とかして元の身輕さに戻りたい。

一生懸命に藻掻けば藻掻くほど、枷はしつかりと食ひ込んで來るやうに、僅かの機會でも利用して借金も輕め生活も樂にさせたいと焦心れば焦心る程、經濟は四離滅裂になつて來る。

ガタ〳〵になり始めた隅々から、貧しさは止度もなく流れ込んで、哀れな小さい箱舟を、一寸二寸と、暗い、寒い、目のないものが棲んで居るどん底へと押し沈めかけて居たのである。

ところへ、五年目に起つた大不作は彼等一族を、完く困憊の極まで追ひつめて仕舞つた。

恐ろしい螟蟲の襲撃に會つた上、水にまで反かれた稻は、絶望された田の乾からびた泥の上に、一本一本と倒れて、やがては腐つて行く。

豊かな、喜びの秋が他の耕地々々を訪れるとき、禰宜樣宮田のところへは、何が來てくれたのか。

息もつけない恐怖である。逼迫である。

愚痴を並べ、苦情を云つて居られるうちは、貧乏の部には入らないと云ふ、其の眞個の「空虛（からつぽ）」が來たのである。

空虛（からつぽ）な俺等（おら）……

蓄はへた穀物は無くなるのに、何を買ふ金もない。何で親子五人の命をつないで行つたらいゝのだらう？

其處へ、海老屋では又も難題を持ちかけて來た。

一俵の米も寄來されない。其れじやあすまないから、今まで貸してやつて居た金を、暮まで待つから全部返濟しろと云ふのである。

食ふや食はずで、只さへ生きるか死ぬかの今、無斷で一割の利まで加へた百圓以上のものを、如何して返せるだらう。

金で返せない？ 其なら仕方がない、土地を差押へるぞ！

此れが海老屋の年寄りの奥の手であつた。

最初から斯うまでするように、彼女の妙法樣は御指圖下すつたのである。

現在海老屋の所有となつて居る廣大な土地は、全部斯う云ふ風な詭計を用ひて奪つたのだと云ふことは、決して單にそねみ半分の惡口ばかりだとは云へない。

其那事をするに、ちつとも可哀そうだとも、恥かしいとも思はない丈、充分に彼女の心は强かつたのである。

そして、又その驚くべき强い心に、此上ない誇りを感じて居る彼女は、何も自分の持つて居る力を引込ませて置く必要は認めなかつた。

何のために虎は、あんな牙を持つて居るかね、弱い人間や獸を食ふためぢやあないか、私の生れつきだつて其と同じなのだ。其でもうすつかり彼女は安んじて居られたのである。

今度〻彼女は、自分の天稟（てんぴん）に我ながら滿足しずには居られなかつた。

もうこゝまで漕ぎ付ければ、後は自然（ひとりで）に自分の懷に入つて來るほかない幾何かの土地を思ふと、優勝の戰士がやがて來る月桂冠を待つ時のやうな心持にならざるを得なかつた。

比類ない自分の精力と手腕を以てすれば、此那相手を斃した事は、寧ろ當然と云ふべきではある。

が、嬉しい。此上なく張合がある。

土地や金が、只、「殖える」とか「廣くなる」とか云ふ。其那やにつこい言葉で彼女の快感は表はせない程、熾んなのであつた。

彼女は、しんから自分自身の生命の榮えを讃美しながら、次の對照の現はれを强い自信と名譽を以て待つて居たのである。

が、禰宜樣宮田は……。

憤るには、彼等は餘り疲弊して居た。

海老屋から使がその趣を傳へて來た時でも、彼等夫婦はまるで他人の事のやうに、呆んやりした、平氣な顔をして聞いて居た。

何だかもう、頭の中が眞暗になつて、感じも何も皆何處へか行つて仕舞つたやうな心の狀態になつて居たのである。

絶えず口元に自嘲的な笑を漂はせながら、唇を嚙んで居るお石は、すつかり自暴自棄になつて仕舞つた。

まだ何か望みがあり、盛り返せるかもしれないと云ふ未練が殘つて居た時には、懸命に稼ぐ氣にもなり、怨む氣もしたけれども、斯うまで落ち切つて仕舞へば、絶望した彼女の心は自棄になるほかない。

「へん海老屋の鬼婆め！

何んもはあねえくなるまで、さつさと引つ剝だらえゝでねえけ、小面倒臭せえ。

乞食して暮しや、家も地面も入用んねえで、世話あねえわ！

默り返つて居るお石は、折々不意にはつきり獨言しながら、ゴロンと爐邊に臥ころがつたりした。

禰宜樣宮田も、もう土地も何にも入用なかつた。只どうかして、今のいやな心持から一刻も早く逃れたい許りなのである。

眞個にお石の云ふ通り、乞食して暮しても、此頃のやうに怨みの塊りのやうになつて居る境涯からぬ

けられたら、それでいゝ。

此處つから此處まぢやあ俺らがもん、其處から其處まぢやあ汝がもんと、區別う付けて置くから、はあ人のもんまで欲しくなる。

地體、どなたか樣は、そげえな區切りい付けて、地面御作りなすつたゞべえか？

欲しいもんだらはあ遣るがえ……

最初の間、彼はもうすつかり諦めて、奇麗さつぱり何時でも、土地でも家でも寄來せと云ふものを、遣つて仕舞へるやうな心持で居たのである。

けれども、やがて近所の者達の同情が、彼の決心を動かし始めたのであつた。

いつとはなし、宮田一族の迫つた難澁を知つた者達は皆同情して、世界中の惡口をあらひざらひ、海老屋の人鬼、生血搾りに浴せかけた。

口では、まるで一ひねりに捻り潰してくれさうな勢で彼女を罵ること丈は我劣らじと罵る。

けれども、若しその公憤を具體化さうとでも云へば、彼等は互に顏を見合はせながら、

「はあ……

相手がわれえ……

と尻込みして、一人々々コッ〳〵と影を隱して仕舞ふだらう。

其等の同情も、いざと云ふ肝腎の場合にはさほどの役には立たない。何と云つて禰宜樣宮田の肩を持つても、どれ程ひどく海老屋の年寄りをけなしても、つまりはなるようにほかならないにきまつて居る。

其處まで俺等の力あ及ばねえと云ふことを、云ふ方は勿論云はれる方も漠然と感じて居る。

いくら無責任な同情だと云つても、慰められ、辛い境遇を共に悲しんで貰つて厭な心持はしないのみならず、却つて彼等は事件の結果に何の責任も持たないから餘計禰宜様宮田の心を動かすやうな言葉を、口から出まかせ、行がゝりにまかせて喋る。

諦めて居た筈の土地に對しても、又新らしい執着―強い、もうあんなに單純には諦め切れない未練―を覺えるとゝもに、怨みとも憤とも區別のつかないやうにもしや〳〵した心持が蘇返つて來て、禰宜様宮田をどの位苦しめて居るのか。

さう云ふことは、彼の仲間の一人として考へ及ぶ者はなかつたのである。

慰められるにつれて、しんから底から自暴自棄になつて居たお石は、漸々氣を持ちなほすに從つて、體ごと眞黒焦げに成つて仕舞ひさうな怨みの焔が、途方もない勢で燃え熾つて來るのを感じた。

何かしてやれ！

何とかしてくれたら、はあなじように小氣味がよかつぺえ！

二六時中、人間のやうな聲を出して怨念が耳元で唆かす。

よくも、よくも、こげえな目さ會はせ居つたな！

今に見ろ！

大黒柱もつ返して、土臺石から草あ生やしてくれつから！

居ても立つても居られないやうな氣持になつたお石は、殆ど夢中で納屋へ馳け込んだ。

そして、まるでがつ〳〵した犬のやうに喘いだり、目を光らせたりして鼻嵐しを吹きながら、そこいらに散らかつて居る古藁で、人形を作りにかゝつた。

彼等の仲間では昔ながら恐ろしいものにされて居る祈り釘を此の人形に打ち込んで海老屋の人鬼の手足を、端々から腐り殺してやりたい！祈り殺さずに置くものか！

手先はブル〳〵震えるし、どうやつたら此のバサ〳〵な藁が人形になるかも分らない。

いくらしても片端じから崩れたり解れたりしてものにならない藁束に向つて、彼女の満身の呪咀と怨言が際限もなく浴せかけられたのである。

引きちぎつたり踏み躪つたりした藁束を、憎さがあまつて我ながら、どうしていゝのか分らないやうに足蹴にしながら、水口まで來ると、お石は上り框に突伏してオイ〳〵、オイ〳〵と手放しで號泣した。

怨んだとて、呪つたとて、海老屋の年寄にはどうせかないつこないのだと云ふことが、口でこそ强さうな事を云つて居ても、心にはちやんと分つて居るから、お石は一層たまらない。

胸を掻き挘られるやうな心持になりながら、娘達をつかまへては泣き出し近所の者に會つては怨みを並べて居る彼女の、厚みのないへこんだ額には、一日一日と皺が増えて、鼻の周圍に泣き皺が現はれた。

もうまるで子供ではない娘達は、兩親の苦痛は充分同情して居た。

が、さて如何うしたらいゝのかと云ふことになると、彼女等は、ほと〳〵途方にくれてしまふ。

そして、極く〳〵單純な彼女等は私に遣らなければならないものなら、やつたつてよささうなものだのに、……町へ行つて奉公したつて食つては行ける位に思つて居た。

勿論、親達の苦しんで居る樣子に對して、それを口に出すことは、いかな彼女等でも出來なかつたけれども自分等自身としてはそんなに辛くはなかつた。

始終、心から離れない何か陰氣な悲しいものがあると彼女等の感じて居たのは、事件そのもの丶苦しさよりも、寧ろ、大人達のやうに沈んで悲しく自分等を持して行かなければならないと云ふ感じが與へたものなのである。

「おめえんげでも、ええこつたなあ、まきちやん、

「あ丶……

さも心を惱まされて居るやうに、ませた表情をして返事をしながら、實はさう云はれても、咄嗟に何がええこつたつたのか心に浮ばないやうな事さへあつたのである。

いくら心の複雜でない禰宜樣宮田だとても、子供等のやうに、さう單純に事を見て行くことは出來ないし、又さうかと云つて、お石のやうに、一目散に怨みこんでは仕舞はせてくれないものを、自分の裡に持つて居た。

人を怨んだり、憎がつたりするなあ、はあ眞當なこつちやあねえ。

さう知りながら、恨めしいやうな心持や、憎らしいやうな心持が、忘れようとしても忘られず心にこびりついて居るから、彼はせつないのである

もうやがて近々に別れなければならない、耕地を見歩きながら、此の事を思ふ彼の眼には、いつでも止めるに止められない涙が湧き出して、大きい、あの子供らしい目が何も見えなくなつて仕舞ふのが

常であつた。

海老屋の御隱居……俺が田地……子供等……俺が死んだ後あ、はあ何じよつて奴等あ恭してんべえ。

そして、あの海老屋の若者を救ひ上げたときの歡しさを思ひ出すと、彼は全く堪らなくなる。

今はもう、皆どこさかぶつとんで行つて仕舞つたあの時のあんなに仕合はせだつた心持を思ひ出すと、其が追憶である故に――此から二度と會ふことの出來ない、昔の思ひ出であるために――一層慕はしく、なつかしく胸を搖られる。

斯う云ふ原因に「それ」がなつたのだと思ふと、眞個に何とも云へない心持がして來るのである。

一思ひに、あの時の「その喜び」も何も、皆怨みや憎しみで塗り潰して仕舞へれば、それは却つて結構かもしれない。

が、さうはならない。今の苦しさが強ければ強いほど、あの時の思ひ出は、はつきりと、あの時のまこの新らしさをもつて浮み出して來る。あの時の通り明るく、暖く歎いて行く自分を迎えて呉れるのである。

それがたまらない。

彼の心は、只土地が惜しい、年寄りの仕打ちが恨めしいと云ふばかりではない、あの時の、あの歡びを憶ひ起すに耐へないやうな心持が―それだのに又、憶ひ出さずには居られない一見矛盾した感情が、自分でどう自分を處していゝか分らないやうに湧き上る。

生活の基礎が、ぐらついて居る不安、家族の者共に對する愛情、眞當な何物かに對する憧憬等が、彼

には一つ〳〵斯う云ふ風な區別をつけられて居ない丈、それ丈混雜した一しほ惱ましい心持になつて、彼等の言葉で云ふ心配負けにとつゝかれた狀態にあつたのである。

重い白土の俵を背負つて、今日も禰宜樣宮田は、急な坂道を轉がりさうにして下りて來た。

窮した彼は、近所の山から堀り出す白土――米を搗く時に混ぜたり、磨き粉に使つたりする白い泥――を、町の入口まで運搬する人足になつて居たのである。

出來る丈賃錢を貰ひ度さに、普通一俵としてあるところを、二俵も背負つて居るので、其那に力持ちでもない彼の肩はミシ〳〵云ふやうに痛い。

太い木の枝を杖に突いて、ボコ〳〵、ボコ〳〵破れた古鞋の足元から砂煙りを立てながら歩いて來た禰宜樣宮田は、とある堤に荷を靠せかけるやうにしてホッと息を入れた。

先刻行つた人足も、矢張り此處で斯うやつて休んだと見えて、枯れかけた草を押し伏せて白土の跡が眞白く殘つて居る。

滲み出した汗を拭きながら、彼は四邊を見廻した。

總てが寂しい。

滅入るやうに靜かな天地には、もうそろ〳〵冬の寒さが爭はれない勢を見せて、すがれた叢、音もなく落葉して行く木立の梢を包んで底冷えのする空氣がそこともなく流れて居る。

やがては霜にならうとする霧が、泥繪具の茶と綠を混ぜて刷いたやうな山並みに淡く漂つて、篩ひかけたやうな細かい日差しが向ふにポッネンと立つて居る皂角子の大木に絡ひ付き、茶色に大きい實は、

莢の裡で乾いた種子をカラ〳〵、カラ〳〵と風が渡る毎に佗しげに鳴り渡る。

ジジー――ジジー――……

地の底で思ひ出し〳〵鳴く蟲の聲を聞くともなく聞いて居た禰宜様宮田の心の裡へは、又海老屋の事が浮んで來た。

「……なじよにしたらよかつぺえ……

幾度考へたとて、徒に同じ埒の中を堂々廻りするほかない。

彼は駸々と滲み出して來る無量の淋しさと、頼りなさに、自分の身も心も溺れさうな氣がした。

今までは自分の後にあつて、目に見えぬ支えとなつて居てくれた何か、何かの力が、もう悉皆自分を見捨てゝ獨りぼつち取り遺したまゝ、先へ先へと流れて行つて仕舞ふやうな心持がする。

何も彼にもが過ぎて行く……。

グン〳〵、グン〳〵と何でも彼んでも、皆どつかへ飛んで行つて仕舞ふ……

居たゝまれないやうな孤獨の感に打たれて、彼の魂は急に啜泣きを始めた。

空虚(からつぽ)が彼の心にも蝕んで來た。

彼の知らない涙が、當途もなく凝視めて居るあのいゝ眼から、糸を引くやうにこぼれ出て、疎らな髭の裡へ消えて行つた。

（五）

收穫の後始末もあらかた付いて、農民が一體に暇になると、兼ね〴〵噂のあつた或新道の開拓が、よく〳〵實行されることになつた。

町の附近にあるK溫泉へ、今までは危い坂道で俥も通れなかつたのを、今度其の反對の側の森を切り開いて、自動車の樂に通る路をつけようと云ふのである。

募集された人夫の一人となつた禰宜樣宮田は、先づ森の伐採から着手することになつた。白土運びをするより賃錢も高し、切り倒した樹木の小枝位は貰つても來られると云ふ利益があつたのである。

深く、暗く、鬱蒼として茂りに茂つて居る森は、次第々々に開けるにつれて粗雜にばかりなつて來た町に、完く唯一の尊い太古の遺物であつた。

總てが此處では幸福であつた。

澤山の鳥共も、這ひ廻る小蟲等も、又春から秋にかけて、積つた落葉の柔かく濕つた懷から生れ出す、數知れない色と形の「きのこ」も差し交した枝々に守られて各自の生きられる丈の命を、喜び樂しむことが出來て居たのである。

けれども、俄に荒くれた、彼等の仲間では此那に無慈悲で、不作法なものはなかつた人間どもが、昔ながらの「仕合はせの領內」へ闖入して來た。

そして大きな斧が容赦なく片端しから振はれ始めたのである。

まだ生れて間もない、細くしなやかな稚木共は、一打ちの斧で、體中を痛々しく震はせながら、音も立てずに倒れて行く。

思ひがけない異變に驚く間もあらばこそ、鋭い刀を命の髓まで打ち込まれ〱した森の古老達は、悲じさうに頭を振り動かし、永年の睦まじかつた友達に最後の一瞥を與へながら次から、次へと伐られて仕舞ふ。地響を立てゝ横はる古い、苔や寄生木のついた幹に拂はれて、共に倒れる小さい生木の裂ける悲鳴。

小枝の折れるパチパチ云ふ音に混つて、

「南へよけろよーッ、南ー、

ドドーンと又何處かで、かなり大きい一本が横はる。

パカッカッ……カッパ……カッ……パカッカッ……

せわしい斧の妙な合奏

樵夫の鈍い叫聲に調子づけるやうに、泥がブョ〱の森の端で、重荷に動きかねる木材を積んだ荷馬を、罵つたり苛責したりする鞭の音が鋭く響く。

ト思ふと、日光の明るみに戸惑ひした梟を捕まへて、倒さまに羽根でぶらさげながら、陽氣な若者が何處へか馳けて行く。

今まで、森はあんなに靜かな穏やかなところと、誰の頭にもしみ込んで居るので、此等の騒ぎは、此上なくいやな、粗雜な感じを與へた。

始終落付のない、此處のがさつな騒動が、どこともなく町にも傳はつて、往來に落葉などを散らせながら、立派な樹々が運ばれて行くのを見ると、皆互の噂になつて居る嘘つきから、平氣さうな顔はして

居ても、何かしらが心の底で動く。

あゝやつて伐るのは惜しいやうだが、又自分の手で、あれ程の大木を伐り倒せたら、面白からうなあ。

すつかりまるはだかにされた樹々が、一枚の葉さへないやうな太い枝を、ブッツリ中途から切られて、寒げに灰色の空に立つ様子。塒を奪はれた鳥共が、夕方になると働いて居る者の頭の上に、高く低く飛び交ひながら鳴くのなどを見ると、禰宜様宮田は振り上げた斧も、つい下しかねた。

森中の木魂の歎息が、小波のやうに自分の胸にもよせて來て、彼は心が痛むやうな氣持がした。

いくら木は口を利かないからと云つて、同じ生きて居るものを、此那にむごたらしく、氣の毒だとか可哀さうだとか思ふ方が馬鹿(こけ)だと云ふやうにして、まるで樂しみにでもして居るやうに、バタン／＼と切り倒して行かないでも、如何うにか成るのぢやあ、あるまいか。今まで幾百年かの間茂つて立派だつた森も、集くつて居た鳥共も、草もきのこも何も彼も、皆無くなして仕舞つたところへ、あんな古ぼけた一台や二台の自働車が馳けて行くからと云つて……其處にどんなにいゝことがあるのだらう。

禰宜様宮田は、人が餘り損得に夢中になつて居るので、却つて上氣せ上つて自分にははつきり分る損得を、逆に取り違えて居るのではあるまいかなどゝも想ふ。けれども、勿論口に出しては一口も云ふ彼ではない。默つてまるで蟻のやうに働く禰宜様宮田は、寄り集り者の仲間から、あつぱの宮田―啞の宮田―といふ綽名をつけられて、心さへ持つては居ない機械(からくり)、ちいつとばつか工合のえゝ機械(からくり)のやうに、只泥づかりになつて働くほか能のない人間だと思はれて居たのである。

森が段々開けて來る頃から、そろ／＼冬籠りの季節になつて來て、雪などに降り込められた禰宜様宮

田が町から受負つて來た粗末な笊だの籠だのを編んだりするやうになると、例年の通り町から、紡績工女募集の勸誘員が、部落の家々を戶別に訪問しはじめた。

紡績工場やモスリン工場へ、まだ十に手が屆くか屆かないやうな子まで、十年十五年と年期を入れて働きにやつては、幾何かの金を前借するのが、彼等の仲間にとつては、さほど耻べきことではない。

禰宜樣宮田は、近所の誰彼が、

「まあ、へえ、よし坊は十圓け？　餘つぱら割がえゝなあ、俺らげんなあお前んげと同じい年でも、いまちいつとやせえわ、

まちつと相場あ見てつと得したんだになあ、

など〻云つて居るのをきいた。

もう十六と十三になつて居る彼の娘達は、勸誘員が來ると一緖に、其のさもい〻事づくめらしい言葉から多大の好奇心をそ〻られた。

何と云ふあても決心もない。

只其の多勢でそろいの着物を着て、唄をうたいながら糸をとると云ふ事がして見たいのである。

町の工場で働く。其處に何か此處に居ては到底得られない名譽と幸福があるやうな氣がする。

友達だつた娘が行く事にきまつた等と、さも嬉しさうに誇らしげに告げると、二人は妙に後れちやあ大事だと云ふ心持になつて、こつそり納屋の隱や、畑の隅で相談する。

大業に相談するとは云つて居ても、事柄は簡單なものである。

さだちやんよ、

こんねえだ俺ら、新やん家で聞いたけんど、工場さ行ぐと、毎日〳〵牛ばつか食はして、衣裳まで呉れんだつて……

俺らこげえな貧乏家に居るよら、何ぼかえゝと思ふなあ、

お前どう考へる？

阿母ちやんさきいてんべえか……

「ふんとになあ、

俺らも行ぎてえわ、姉ちやん、

お前と二人で行ぎあ、おつかねえこともあんめえもん……

娘達は、此の位の事を云つて仕舞ふと、もう後に云ふことも考へることもなくなるので、いかにも思案に耽つて居るやうにお互に寄りかゝり合つて、默つては居るものゝ、妹のさだなどはいつの間にか、外の考へに氣をとられて、何のために斯うやつて立つて居るのか分らなくなるやうな事さへあつた。

彼女等が打ち開けかねて居る時、母親のお石も亦、心の裡で同じ事を考へながら、これも亦娘達に云ひ出しかねて居た。

今の此のひどい中で二人の口が減る事丈でさへ一方ならない事だのに、その上いくらかは入つても來ようと云ふものだ。

彼女等だつてまんざらの子供ではなし……

さう思つて居るところへ、娘達の方からどうぞ遣つて下さいと切り出した事は、お石にとつて何よりであつた。早速三人は、禰宜樣宮田の許しを乞ふたのである。が、お石は彼が主人であると云ふ名に對してとつた一種の形式なので、若し彼がいけないと云つたところで、自分が遣らうと云ふ決心はどこまでも貫徹させるつもりではあつたのだ。

話の模樣では大變いゝらしい。

けれども町の樣子や、さう云ふところの仕來りなどを皆目知らない禰宜樣宮田は、責任を以て判斷は出來なかつた。

「俺ら、おめえ等に指圖あ仕かねる。

けんども、はあ何んでもお前等が仕合はせになつてんだら、行ぐも惡かあなかつぺえ。

俺ら、おめえらが仕合せにせえなりや、どの道、何よりはあ嬉しいだからなあ……

自分のやうな、利口に世の中を立ち廻れない者を父親にもつて、何の仕合はせも受けられない娘達が自分等で働いていゝ目に會つて行かうと云ふのに、そりやあいけない、止せとは云ひ切れない。云ひ切れない丈彼は娘に愛情を持つて居たのである。

いやがる者を止めて置いて、もうどうせ潰れるにきまつたやうな家と運命を共にさせるには忍びない。決心しかねて彼が迷つて居るうちに、話はぐんぐんはかどつて、到頭娘達は五年間の年期で町へ行くことになり、二十五圓の金が親達に渡された。

娘達は、まるで祭り見物に行くやうに嬉しがつて、はしやいで行つたのだけれども、證文と引きかへ

に渡された金を見ると、禰宜樣宮田は何とも云へず胸のふさがるやうな心持になつて來た。

俺の心に濟まないから、如何んな事があつても、此金ばかりは決して使つてはならないと、お石に堅く云ひつけて、彼は彼女に知らさないやうにして、古葛籠の底へ隱して仕舞つた。そして自分でも二度と見ようとはしなかつたので、彼方此方、散々索し廻つたお石が、到頭其を見つけ出して、何ぞの時の用心にと、肌身離さず持つて居ようなどゝは、夢にも知らなかつた。

裏から紙を貼つてある一枚の十圓札、まだ新らしいもう一枚の十圓と五圓とは、黑つぽい襤褸にくるまつて今も矢張りあの古綿の奥に入つて居るものと、彼は思つて居たのである。

そして、獨り遺つた息子の六に、唯一の賴りを感じて暮して行く筈だつた自分の心が、日を經るに從がつて兎角去つた娘達の上にばかり傾けられるのを知つた。赤坊のうちから眺めて暮して來た彼女等に對して、毎日顏を合はせ、居るにきまつたものとなつて居たときは、別にさう大して居ない時の淋しさも思はず、又彼女等が家庭生活にどれ程のうるほひを與へて居るかも、氣づかなかつた。

けれども、居なくなつて見ると、一種異樣の淋しさと物足りなさがある。

丁度、絕えまなく溢れ出して居た窓下の噴水が、急にパタリと止まつて仕舞つたときに感じる通りの心持——何でもなく耳馴れて居たお喋り、高い笑聲が聞えない今となると、たまらなく尊い愛くるしい響をもつて、記憶の裡に蘇返るのである。

何處となく丸味のついて來た體を、前や後にゆすぶりながら、僅かな事にも大笑ひする娘達が居なくなつてから家中は、何と云ふ活氣に乏しくなつた事か……。

土間の隅や、納屋に轉がつて居る赤勝ちの古下駄や、何かの折に出る古着などを見ると、禰宜樣宮田は、字を知らないので手紙もよこせない娘達に、どうぞ仕合はせが廻(めぐ)つて來ますように祈らずには居られなかつたのである。

禰宜樣宮田は、いつもの通り地面を掘つて居た。

五間幅の道路は、三四町眞直に延びて、一つ大きくカーブしたところから、ダラ〳〵坂になつて、ズーッと下の溫泉の中央まで導かれる筈なのである。

もうそろ〳〵晝頃かと思ふ時刻になると、彼の仲間として一かたまりになつて居る七八人の者の中の一人が、

「とつさん賴むぞ、

飯(まんま)の茶あ沸かしてくんな、

と、云つて後の方に鍬を振つて居る禰宜樣宮田を振り返つた。

「ふんとに、はあ晝だんべ、

とつさんよ！

禰宜樣宮田は、穢ない小屋掛けへ戻つて行つた。そして大きなバケツを下げて、足袋の中でかちかむ足を引きずりながら小一町ある小川まで水を汲みに行く。

此は毎日の彼のお役目にされて仕舞つたのである。

あつぱの宮田は、眞個にはあ機械(からくり)同然だ。何をしても憤らなきやあ、小言も云はない。賴むぞと云ひ

さへすりやあ否(いや)と云へねえ爺さまだ。

強い者勝、口の先丈でも偉さうな氣焔を吐く者が尊まれるこう云ふ仲間では、默つて何でも辛棒する禰宜樣宮田は、一種の侮蔑を受ける。彼の美點であり、弱點である正直な何處までも控目勝ちなところを彼等は、どし〳〵と利用するのである。

利用するとまではつきり意識しないでも、皆があまりぞつとしない事を、禰宜樣宮田のところへさへ持つて行けば遣つてくれるから、どうしても彼に押しつけるようになる。

度重るにつれて、段々遠慮のなくなつた彼等は、此頃では完く彼を使ふ。何處かで勢力を張らないでは居られない彼等は、唯一人の禰宜樣宮田を對照として、各自の自尊心を滿足させるのである。

丁度、澤山居る小使の中でも、何處かと云へばお人好しで、他人を批難することの出來ない男が、いつも小利口に立ち廻る者達の、下廻りをしなければならないと同じような狀態なのであつた。

いくらバケツは大きくとも、底が痛んで居るので、一杯汲み込んでも未だ前の道を戻つて行く時分には、水は七分目位に減つて仕舞ふ。

それに寒いから、手を洗ふにも湯を使ふのだし、資金(もとで)のいらない湯でも澤山飮んで體を暖めようと云ふ者達が何しろ十人近く居るのだから、たつた一度の往復では足りようもない。

寒さで眞靑になりながら、禰宜樣宮田が二度目に川から歸つて來ると、もう仲間共は木片を集めてボン〳〵燃火をし、暖かさうに眼白押しをして居る。

「爺さん、お待ちかねだぞ!」

かぢかんだ指で茶釜をかける。

そして、彼等の中では一番年長者である彼が、皆の背のかげから、僅かの暖みをとるのである。膝を抱へて小さく蹲まつて居る禰宜樣宮田は、うつとりと、座くさい大きな肩と肩の間からチロ〳〵と美くしく燃える火を見ながら、當途もない考へに耽るのが常であつた。

けれども、此頃では何を考へてもお仕舞ひまではまとまらず、又まとめようと云ふ意志も無い。只、ジイッと靜かにして居たいのである。

誰に何を云はれても辛棒してするのは、自分で守つて居る靜かな心持を、口小言や罵りで打ちこわされるのが厭だと云ふことも、主な原因になつて居る。

他人の云ふことも聞えない事の方が多かつたりして、彼は我ながら、はあ呆けて來たわえと思ふことなどもあつた。

苦しい生活に疲れた彼の心は、只管安靜を望んで居るのである。もう激しい世の中から隱遁して仕舞ひたくなつて居るのである。

けれども、さうは出來ない彼は、又自分の心がそれを望んで居るのだとは氣づかない彼は、老耄が、もう來たと思つた。が、それを拒むほど、彼は若くて居たくもなかつたのである。

心がいつも〳〵何かどんよりした、厚みのある霧のやうなもので包まれて居て、外から來る種々な刺戟は皆共處に溜つて、しんまで滲み通らない。

そして、其のどんよりしたものゝ奧には、大變深い寂しさにしつかりと包み込まれて、如何にもトロ

りとした露の雫のやうに、色と云ふ色もなければ、薫りと云ふ薫りもない、只あると云ふ事丈の感じられるやうなものが潜んで居る。

折々彼の心と體とは、悉皆その透明な、トロリとしたものに吸ひ込まれて仕舞つて、何も思はず何も聞かず、自分が今此處に斯うやつて居る事さへ知らなくなる事などがあり／＼したのである。

毎日／＼仕事は果取(はかど)つて行つた。

そして、もう二三日で彼方側から堀つて來た新道と、此方側から堀つて行つた道とが、立派に合はうと云ふ日である。

平らな路の間だけに、大きな花崗岩のロールを轉がすことになつた。

其日はもう大變にいゝ天氣で、此頃にない暖かな日差しが朝早くから輝やいて、日が上り切るとまるで春先のやうに長閑な氣分が、四邊に漂ふ程であつた。

一區切り仕事を片づけた禰宜様宮田は、珍らしい日和りにホッと重荷を下したやうな樂な心持になつて、新道の丁度カーブのかげに長々と横りながら、煙草をふかし始めた。

久振りでいゝ味がする。

後から差す日は、ポカ／＼と體中に行き渡つて、手足や腕が甘へるやうに氣怠るくなる。

見渡すと、彼方の湯元から立ち昇る湯氣が、周圍の金茶色の木立ちの根元から梢へとほの白く這ひ上つて、溶けかゝる霜柱が日かげの叢で水晶のやうに光つて見える。

仲間達の喋る聲、鍬の刃に石のあたる高い響等が、皆樂しさうに聞えて來る。

禰宜樣宮田は、何とも云へず延び〳〵とした心持になつて來るとともに、又自分の心の奥にある鉛の雫のやうなものへ、自分のあらひざらひが吸ひ込まれて行くやうな氣がし出した。

呆んやり眺めて居る眼には、總ての物象が一面に模糊とした裡に、微かな色彩が浮動して居るやうに見え、種々の音響は何の意味も感じさせないで、只耳の入口を通りすぎる。

深い〳〵水底へ沈んで行く小石のやうに、眞直に徐々と自分の心の底へ彼の全部が澱んで行つたのである。

皆の者は、ガヤ〳〵云ひながらロールを動かして來た。柄を引き上げて、一列に並んだ者達は兩手はブラ〳〵させながら、各自の胸で押して居たのである。

けれども、微かな勾配で自然に勢のついたロールは、押すと云ふ程の力を加へられないでも、自分で輕く動いて行く。

此のカーブさへ曲れば、もうお終ひだと云ふ心の緩みと、勞力の費されない氣安さとで、下らないお喋りに有頂天になつて居る者達の胸は、只義務的に柄に觸れて居ると云ふに過ぎなかつた。

まるで生物のやうによく轉るロールに從いて、人々が今、カーブを廻り切らうとした時である。

突然怯え切つた絶叫が、仲間の中から起つた。

「アッ！ 人！ 人!!」

ハッと逡巡ぐ瞬間、抑へてもないロールの柄は彼等の胸から離れた。

コロ〳〵コロ……

一層惰力のついたロールは、
「石！　早く石、石早く突支へ！」
と云ふ叫びがまだ唇を離れないうちに、今の今まで見えて居た人の寢姿を押し隱して、陰氣に重々しく、二三度ゴロッ、ゴロッと捲り返した。
そして、もうそれつきり動く樣子は見えなかつた。

（六）

恐ろしい冬が過ぎた。
程よい雨と照りが地の底から生氣を盛返させて、何處から何處まで美くしく蘇返つた。
お玉杓子が湧き、ちやくとり――油蟲の成蟲――がわや〳〵云ひながら舞ひさわぐ下の耕地にはペン〳〵草や鷺苔や、薄紫のしほらしい彼岸花が咲き滿ちて、雪解で水嵩の增した川と云ふ川は、今までの陰氣に引きかへまるで嬉しさで夢中に成つて居るやうに見えて來る。
コーコー、コーコー笑ひさゞめきながら水共が、或時は岸に溢れ出し、或時は途方もないところまで馳け込んで大賑やかな河原には小石の隙間から一面に靑草が萠え、無邪氣な雲雀の雛の囀りが、かご茨や河柳の叢から快く響いて來る。
桑の芽は膨らみ麥は延びて、耕地は追々活氣づいて來たけれども、もう耕す畑も海老屋の所有にされて仕舞つたお石は、毎日古着や駄菓子を背負つては、近所の部落へ行商に出かけた。

禰宜樣宮田は、あんな不意な事で死んで仕舞ふし、家の畑は、到頭鬼婆にとり上げられるし、もうつくんざり仕切つて居る彼女は、只獨り遺つて居る息子の六を可愛がる氣もなくなつて居た。

若い時から、彼女が働く原動力になつて居た意地も何も、皆何處へか行つて仕舞つて、あんなに祈願をこめても利益を授からない神樣にもほと〳〵愛想をつかして居る今、彼女は只毎日を如何うやら生きてさへ居ればいゝ丈である。

種々な口實を設けて、家屋まで奪はれた彼女は、辛うよ〳〵元納屋にして居た處を住居にして、朝は目が覺めたときに起き食事をすますと荷をかついで出たまゝ、氣が向くまで歸つて來ないのが、此頃の習慣になつて居たのである。

九つになつた六は、母親があつても無くてもまるで同じやうな生活をして居た。

目を覺した時には、お石はもう大抵留守になつて居るし、遊び疲れた彼が爐傍でうたゝね仕て仕舞ふ頃までに彼女は歸つて來ない方が多い。

學校へも行かず叱りても持たない彼は、彼の年の持つあらゆる美點と缺點のごちや〳〵に入り混つた暮しをして、或時は大變いゝ子であり或時は大變惡い子である六は、貧しい部落中でも貧しい者の子、躾けのない子と目されて居るので、彼の友達になつてくれるものはない。

たまにあつたとしても、學校で敎はつて來た字を書いては、

「六ちやん、おめえこの字知つてる？

などゝきかれるのは、溝らなく口惜しい。自分の方でも避けて居るので、全く獨りぼつちの彼は一日

中裸足の足の赴くがまゝに、山や河を歩き廻つて居たのである。

何處へ行つても山は美くしい。

面白いもので一杯にはなつて居るけれども、彼の一番お氣に入りなのは、元二人の姉達が居た時分春になるとは松ぼつくりを拾ひに來た事のある館の山である。一吹風が渡ると澤山な〳〵松の葉が山のしんから戰ぎ出すやうに、あの一種特別な音をたてて鳴り渡るのを聞きながら、蕗の薹のゾックリ出た草地に足を投げ出して、あたりを見はらすのが、六にとつて何よりの樂しみなのである。

「きれえだんなあ……

何ちゆう可愛げえんだべ俺ら……

高い山から眺める下界の景色は、眞個に奇麗である。そして眞個に可愛らしい。

何もかもが小さくちよぴんとまとまつて、行儀よく、ぶつかりもせず離れすぎもしないやうに並んで居る。

昔々ずうつと大昔、まだ人間が毛むくぢやらで、猫のやうな尻尾を持つて居た時分に——部落の年寄達はきつと斯う云ふ言葉を使つた。——巨人が退屈まぎれに造つたのだと云ふS山を正面に、それから左右に擴がつて次第々々に高く立派になつて居る山並みに圍まれた盆地のところ〳〵には、綠色をたつぷり含ませた刷毛をシユッ、シユッ、シユッと二三度で出來上つたやうな森や林が横はつて居る。

いつも何か大した相談事をして居るやうに、きつちり集まつて居る町の家々の屋根には、赤い瓦が微かに光り、遠いところから毛虫のやうな汽車が來ては又出て行く。

目の下を流れて行く川が、やがて、蜒り蜒つて、向ふのずうつと向ふに見えるもつと大きい河に流れ込むのから、目路も遙かな往還に、茄子(なすび)の馬よりもつと小つちやこい駄馬を引いた胡麻粒位の人が、平べつたくヨチヨチ動いて居るのまで、一目で見渡せる。

河の水音、木々のさわめき、何處かで打つ太鼓の音などは、皆一つの平和な調和を保つて、下界から子守唄のやうになでやかに物柔かく子供の心を愛撫して行く。

六の單純な心は、此等の景色にすつかり魅せられて仕舞ふのが常であつた。

大人の話す町々や河――自分なんかゞ行かうとでも仕たら、死んで仕舞ひさうな程遠い〳〵ところにあると思つて居る山も、河も、賑やかな町もみんなもうすぐ其邊に見える。

此方(こつち)の山から彼方(あつち)の山まで、一またぎで行かれさうだ。

ちつちやけえ河、まあ、あげえにちつちやけえ河!

「オーーイッ!

彼は、あらひざらひの聲で叫んで見る。

「オ、、、イ……

彼方(むかう)のむかふ――の雲の中から、誰かゞ返事をする。

「オーイッ!

「オ、、、、イ……

「オ、、、イ

「オ……
俺ら飛びてえなあ……
あの高けえ山のあつちやの國、
夢にさへ見たことのない世界に生きて居る澤山の、澤山のもの
子供の空想は、折々彼の頭を掠めて飛んで行く小鳥の翼にのつて、果もなく恍惚として擴がつて行くのである。

やがて、日が段々山に近くなつて、天地が橙色に霞み山々の緑が薄い鳩羽色で包まれかけると、六は落日に體中照り出されながら、來たとは反對の側から山を下りる。

そして、菫が咲き、清水が湧き出す小溝には澤蟹の這ひ廻るあの新道を野道へ抜けてブラ／＼と、彼の塒に歸るのであつた。

町では此の一ヶ月程前から、――町架空索道株式會社と云ふものが新らしく組織されて、町端れに、停留場とでも云ふのか、索道の運轉を司りながら、貨物の世話をするところを建てゝ居た。

三里程山中の、至つて交通の不便な部落から、切石、鑛石、薪炭の類を産するので、町への搬出を手輕く出來るように、町からそつちへ賣り込む日用品をも樂に供給するために、出來たことなのである。

隨分粗末な小屋掛け同様の建物が出來、彼方の部落まで、眞中に一ヶ所停留場を置いて、數間置きに支柱が立つて、鋼鐵の縒鋼が頂上の滑車に通り、いよ／＼運轉を開始したのは、もう七月も半ば過ぎて居た。

六は勿論、早速見物に行つた。

そしてもうすつかり默默して仕舞つた。
何から何まで珍らしい。魂消（たまげ）る事ばかりである。
仕事が始まるから終るまで、小屋に立ちつゞけて、全く「不思議なもの」の働きを見るのが、彼の新らしい飽きることのない日課となつたのである。
或日、六はいつもの通り小屋へ行かうとして家を出かけた。
そして、とある林の傍へ來かゝると彼の目には妙なものが見えた。赤い小さい、可愛い椅子が、何かをのせて空の眞中を歩いて行く……
さも呑氣さうに氣持よささうにスースー、スースーと針金の上を滑つて行く……
彼は此那ところから、索道が見えようとは思つても居なかつたのである。
椅子は林の上を通つて行くのだ、あんなにも高く！
高く……廣く……山を越え……河を越え……スースー……スースー……
六は、不意に或思ひつきに胸を打たれた。
「俺ら、俺らあれさ乘つてんべー
鳥のやうに飛んで行ける！
六の心臟は今にも口から飛び出しさうになつて仕舞つた。
ころげるやうにして、小屋へ馳けつけた彼は、いきなり出ようとする空椅子を捕まへると、ギユーギユー自分の體を押しつけながら、

「乘せてくんろ！よおぢちやん
　俺らこれさのせてくろよ！
と叫んだ。
「まあ此の餓鬼あ！
あぶねえわな、おつこつたら何じようするだ……
「やめろつちえな、
おつこつたらはあ、木端微塵になつちまうわ
「なあに大丈夫、
こんな餓鬼が一匹や二匹乘つたからつて、すぐ落ちるやうな機械を、誰れもわざ〳〵發明もしなけりやあ、買ひもしないやな、
仕事びらきん時あ、町役場の御役人さんが、藥埴まで行つて來なすつあね、
大丈夫よ、オイ、小僧。
乘つてもいゝが、歸りの椅子で戻つて來ねえと、ぶつぱたくぞ。
六の小さい體は、椅子の刳込みにボックリと工合よく納まる。
嬉しさで半ば夢中だつた彼が、漸々少し落付いて四邊を見廻した時には、もう自分の體はいつの間にか、すつかり町を離れて、或る川の傍まで運ばれて來たのを知つた。
河原で一人の男が石を破つて居る。

槌を石に打ち下した。と思ふとやゝ暫く立つてから、カッ！カッ！と云ふ音が耳へ來た。
手元を見ながら音をきくと、ウッカッ！ウッカッ！と云ふやうだ。
「ウッカッ！ウッカッ！ウッ……
段々音が微かになると、目の下には茂つた森が現はれた。
絶えず陽氣でお喋りな若い葉どもは、お互にぴつたり肩をすり合はせ、頭をよせ合つて、しきりに早口で何か囁き合つたかと思ふと、クックッ、クックッ微笑み始め、やがてさも堪へ切れなさうにサアッと分れて大笑ひに笑ひ潰れる。
と、仲間の一人が、ふざけるやうな様子をして頭を擡げ、眩しい眼を繁叩きながら、フト自分等の上に來かゝる子供を見上げた。
「オヤ、まあ
サヤ〳〵サヤ〳〵……葉どもは一齊に身をそらせて彼を見る。
「アラ、人間の子よ、
「まあ、あんなものに乘つかつて……可笑しいわ、
「ほんとにまあ、たつたあれんぼつちの子！
「まあ……
口々に囁きながら、行き過ぎる彼を見なほさうとして、ぶつかり合ひ縺れ合ひ、大騒ぎで身じろぎをする。
サヤ〳〵……サヤ〳〵……

涼しいすが〱しい薫りが六の體のまわりに滿ち渡つた。

足の下で山鳩が鳴く。

カツコー……カツコー……

しとやかな含み聲の閑古鳥の聲が、何處からか聞える。

常春藤が木の梢からのび上つて見上げようとし、所々に咲く白百合は、キラ〱輝きながら手招きをする。

六はもう、得意と嬉しさで有頂天になつて仕舞つた。

世界中が俺の臣下のやうに畏こまつて並んで居る。

今斯うやつて、鳥より樂に、素張らしく空を歩いて居る俺、たつた一人の此の俺！

スースー……スースー……

王者になつたやうな心持で居る六をのせて、綱は段々山奧へ入つて行つた。

景色は次第々々に珍らしく、不思議になつて來る……

周圍は益々靜かにひそやかになつて來る……

六は急に飛び度くなつた。飛びたく。

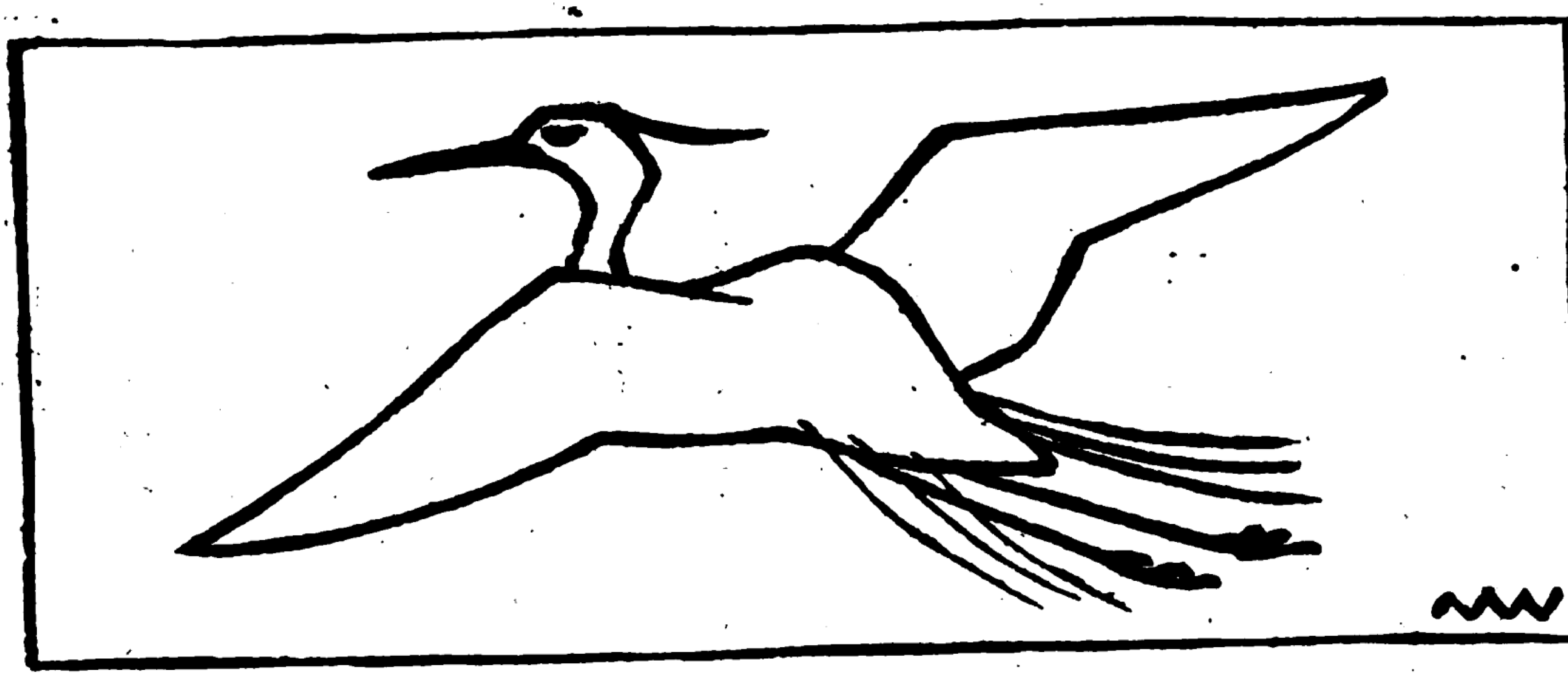
あの雲の峯、あの………

彼は思はず前へのめつた。瞬間椅子は重心を失つた。

オミヨオミヨワラ――――ン……

天地中が隅から隅まで、一どきに鳴り渡ると感じる間もなく、六の體は太陽の火粉のやうに、眞下の森へ向つて落ちて行つた。……

一九一七年六月十四日



故郷

正宗白鳥

二十代にはよく芝居を觀た。四晩も五晩も續けて寄席の木戸を潜つたこともあつた。新聞記者といふ職掌柄飲食の場所へ近づく機會も多かつたのであるが、貧しい財嚢の許すかぎりは、自分から進んで彼方此方の酒色の巷をうろつく癖もついてゐた。有頂天になるやうな面白い經驗をした覺えはないが、兎に角私の若い心は都會の人臭い濁つた歡樂へ惹寄せられてゐた。餘暇があつても、滅多に郊外などへは足を向けなかつた。暑中に十日か一週間の休暇を得て、突然思立つて、身輕に海や山へ旅立つことは二三度あつたが、何時も無感興な倦怠に付纒はられて、匆々に歸途に就くのを例としてゐた。田舍の宿屋で柔かい夜具に横はつてゐるよりも、住馴れた都會の下宿屋で破れ蒲團に寐てゐる方が、心が落着いて安らかな眠りが得られた。十年あまりの間、東京の牛込と本郷の下宿屋の四疊半や六疊の室が、私に取つては離れがたない故郷となつてゐた。生

れ故郷の父母の家にも親しまれないで、たまに歸省しても、しみ〴〵打解話をする暇さへ惜しいやうに、慌たゞしく塵の都へ歸つたのであつた。祖母や妹の團欒から脫出て、徒らに騷々しいばかりで誰も私を迎へてくれる者もない下宿屋へ戾ると、私の身も心もその處を得たやうに伸々した。生々した。錢湯に入つて旅の垢を落して來て、影法師を壁に映しながら疵だらけの古机に向ふと、その頃の私はやうやく落着くことが出來た。……將來に希望を掛けてゐたゝめに、見窄らしい都住ひに甘んじてゐたのではないので、知らず〳〵都會生活の風習が私の骨身に染込んでゐたのだつた。

「田舍には田舍の樂みがある。釣魚をしても面白いぢやないか」と、ある時私を故鄕に引留めやうとして父が云つたことがあつた。秋の彼岸前で、油を流したやうな滑らかな入江には、村の漁夫や近在の遊び客の釣船が幾艘も浮んでゐた。埠頭場でさへ半日も蹲んでゐれば、二十や三十の沙魚は釣れると云はれてゐた。が、私は綠葉の影を醮してゐる向ひの小島の水際に絲を垂れて時を過すのは思つても退屈であつた。それよりも窮屈な大入場に割込んで芝居でも見てゐた方が、どれほど面白いか知れないと思はれた。

二十代にはかういふ氣持であつた私も、歲を取るにつれて、海や山に何故となく懷かしみを覺えるやうになつた。机の前に坐つて涸れ〳〵になつてゐる腦漿を絞りながら重い筆を動かしてゐる時、ところ定めずに雜沓の巷を散步してゐる時、殊に眠られぬ夜などには、知らず〳〵心が都會の外に馳せるのである。古今東西の旅行紀や地圖が私の書物棚に殖えるやうになつた。「歌舞伎」を初號から保存してゐて、轉居のたびに他の古雜誌や新刊書と一緒に古本屋の手に渡さうとしては何時もこの雜誌のみは實惜ん

で、時々取出しては、昔觀た舞臺の跟を追想して獨りで樂んでゐた私も、つひに數百號に達してゐるこの「歌舞伎」合本を旅費の足しとして無雜作に賣拂つてしまつた。弊履を棄つるが如くに何の愛惜もなく手放しゝた。私が都會の劇場へ足を運び出したのは、「歌舞伎」の初號の出た時分だつたから、この雜誌に離れるのは長い間の記憶に殘つてゐたあらゆる芝居の影に別れを告げるやうなものであつた。……二十二三の頃耶蘇教の檻から放たれた時に、宗旨の教理や歴史を書いた古い書籍や雜誌類を一まとめにして、二束三文で賣飛ばしたのと同じやうな氣持がした。

飲み水や食物や氣候の變化に累はされ勝の身體の弱い私は、普通一般の規定通りに、旅行によつて健康を增すとは限らないで、却つて瘦せ衰えて歸ることが多いが、第一まだ長途の旅に上つたことは殆んど無いと云つていゝ。體質や資力やその他の事情のために、一生思切つた旅行は企てられないかも知れない。狹い日本の、しかも汽車や俥で遊びに行かれる有り振れた土地をうろつくだけで一生を終るかも知れない。だが、この頃になつて私の心がやうやく雜沓した都會から離れ得らるやうになつたのは、私に取つて一つの幸福だと云つていゝ。自分でもさう思つてゐる。

先日（五月中旬）日光の奥の湯本で數日を送つたが、その時まだ一人の客もゐない外人專門のホテルの廣間へ入つて、質素なテーブルに凭れて、外人が置いて行つた各國の旅行案内や、汽船會社の廣告雜誌などを讀んでゐると、私の一生の最後の目的がそこにあるやうに、私の初心な旅行慾が激しく唆られた。私はそのホテルの食堂で、一人ぼつちで不味い洋食を食べ、山奥には不似合に完備した浴室へも入つた。廊下に立つと、まだ雪の濃い山々や寂しい湖水が、日本を遠く離れてゐるやうな感じを私に與へ

た。私は廊下へ椅子を出して、日向ぼつこしながら、外人が讀棄てた數十冊の書物の中から撰出した探偵小説を讀んだりした。雪の斑らな兎島あたりに鞭竿を持つた鳥刺の動いてゐる外は人の姿は見えなかつた。

高い山に圍まれた湖畔の狹いこの溫泉場には、散歩する場所もなかつた。中禪寺の方への一筋道を往來するか、石段の上の小祠まで上つて見るくらゐであつた。上州へ通じてゐる山間の小徑には、雪がまだ二三尺も積もつてゐるさうだ。何といふ鳥だか、時々キーッと鋭い鳴聲を立てゝ靜かな空氣を破つてゐた。

私は默々として、一日を長い思ひをして暮らした。

手水鉢に薄氷の張つた朝もあつた。私は褞袍を着て火鉢に當つて煙草の吸殻を堆かくしながら、果てじのない空想を恣まゝにして一日を送つた。少年時代の空想の天國には最早上れなくなつてゐても、地上のさま〴〵な光景を見盡したいやうな慾望は、無聊なところへ付込んで私の空想を頻りに刺戟した。私は異つたいろ〳〵な土地を空に描いては、そこへ自分の身を置いて見た。

二三日して宿を出て、風の寒い戰場ケ原を横切り、湖畔の宿で一休みしてから山を下ると、俄かに冬から春になつたやうに、馬返しあたりは軟かい若葉に包まれて、ところ〳〵に櫻が咲盛つてゐた。桃か何かの紅い花で斑らに色取られてゐる向ひの山の岩角には、小猿が二三匹匐つてゐた。

その日の終列車で歸る筈になつてゐたのであるが、馬返しの宿屋へ寄つて茶を飲んでゐる間に、ふと、もう一晩宿つて見たくなつた。若葉の匂ひに包まれてゐるやうなその宿は、外の構えも內の室取りも昔

めいてゐて、數年前紅葉の頃に來た時にも心に留めた家であつた。

私は略々さう定めて、電車の發車時刻の迫つてゐるのを知つてゐながら、緩くり明日の見物場所の順序を立てなどしてゐたが、すると、數十人の團體客がどや〳〵と入つて來た。まだ日が高いから、その人達は此處で一休みして、それから中禪寺まで登るのかも知れなかつたが、數日間の孤獨な生活で心の鎭まつてゐた私は、俄かに荒々しい彼等の聲で神經を亂されて、若葉のその宿に懷しむ氣持も揉消されたので、直ぐに計劃を一變して、電車の方へ急いだ。電車が神橋を過ぎて日光の町へかゝつた時分、雨がぽつ〳〵落ちだした。窓から覗くと、凄いやうな黑雲が湧立つてゐた。

日光羊羹を四五本と二三枚の新聞とを買つて汽車に乘つた。僅か四五日新聞を讀まなかつたゞけだが、大きな活字で出てゐる戰爭の電報や角力の記事は珍らしかつた。小さな活字で出てゐる文藝界の消息も珍らしかつた。その中には畫家である私の弟の名前も出て居た。昨日寫生旅行に出發したといふのだつた。數の多い弟妹の誰れとても、最近しみ〳〵話をしたことのない私は、どうかした機會に彼等の顏を思出すたびに、思ひが昔の方へ馳せるのである。何時の間にか大人(おとな)になつて、女房を取つたり子供を生んだり、嫁に行つたり、それ〳〵に勝手な道へ進んで、いはゆる生活の渦に卷かれてゐる彼等の現在の氣持や所行はよく分らないので、自然幼い時分の彼等の面影のみが私の頭の中に鮮明に浮ぶのであつた。故鄕の山海を背景にした時にのみ彼等は懷かしいものとして思浮べられた。

一年置きくらゐに子供の生れた私の兩親の家では、子供は母の寢床から祖母の寢床へ、それから別に設けた寢室(ねま)へと、順繰りに送られた。私は十歲で尋常小學校を終へた時から、二階の勉强部屋で自分で

寢床を延べて獨り寢をすることになつたが、一二年すると弟が祖母の懷を離れて私の側へ寢床を設けた。また一二年立つと次の弟もやつて來た。ＡＢＣの三兄弟は、Ａである私が他郷へ學問に出るまで、その同じ部屋に起臥して幾年かを送つた。三人とも根が柔順しい天性だつたのであらう。さしたる惡戲をしなかつたやうに覺えてゐる。

私はその頃讀耽つてゐた八犬傳の筋をよく二人の弟に話して聞かせた。盂蘭盆の前後には三人して寢床の周圍で盛んに盆踊りの眞似をして、階下の座敷にゐる父に小言を云はれたこともあつた。村のある家へ泥棒の入つた噂を聞いた時には、物置部屋から錆刀を持つて來て枕許に置いて、まさかの時には三人力を合せて泥棒を退治する計劃を、眞面目に評議したりした。

その二階の部屋を私がまづ飛出してから、二十年以來三人が一つところに寢起きして、心から打解けた話をしたことは一度もなかつたと云つていゝ。二十代には故郷の者と四五年の間に端書一枚の遣り取りをさへしなかつた有樣であつた。そして、たまに歸省するたびに、小弟や小妹が見違へるほど大きくなつてゐるのに驚かされた。

私は初夏の田舍景色を眺めながら、こんな追想に耽つてゐたが、宇都宮を過ぎてからは左右は闇となつて、一日歩き通した疲勞も出て頻りに睡氣さして來たので、乘客の少いのを幸ひに横になつて、快い假寢に落ちた。

都會の生活に倦んでゐても、旅から歸つて明るい夜の町をぶら／＼歩いて、久振りに都會でなければ食べられぬやうな料理を食べると、口腹の慾を輕んじてゐる私も、都住ひの有難味を感ずるのを常とし

て居た。その日も停車場から直ぐには家へ歸らないで、銀座の裏通りのある洋食屋へ寄つて、胃の負擔にならないやうな輕い食事を取つたが、湯本のホテルの出來合ひの料理の不味かつたことが、今度の旅での唯一つの缺點であつたやうに思出された。‥‥「さうすると、おれは口腹の慾に引摺られて東京に留まつてゐるのだらうか」といふことが、四五年前よく食物屋入りをしてゐた時分に、「おれは口腹の慾に引摺られて生きてゐるのだらうか」と疑つてゐたのと同じやうな意味で心に浮んだ。

夜は可成り遲くなつてゐたが、私は目が冴えて來たので、腹こなしに夜店などを見て、平生の就眠時刻に家へ歸つた。

子供のない夫婦暮しは氣樂なやうでも、女の身としては張合ひのない寂しいものらしかつた。私に旅行癖がついてからは、私の妻は一層の寂しさを覺えてゐるやうだつた。で、人に對する情味の年々に薄らいでゐる私も、旅中の唯一の義務として、妻にだけは大抵日に一枚づゝ繪葉書を送ることにして居る。書くべきことがなければ、宛名だけ書いて送つた。

その日は近所の家は戶を鎖して寢鎭まつてゐた。幾月立つても馴染まない隣りの犬は私を見て吠立てた。その聲で私の歸りに氣付いたのか、玄關まで出迎へた妻は、不斷よりも元氣のいゝ顏して、「Dさんが來てゐますよ」と出拔けに云つた。

「Dが‥‥」私はさう云つただけで、戶を鎖して、山道で汚れた足袋を脫いだ。ふと見ると土間には、鼻緒の太い無骨な、故郷の穿物を思起させるやうな日和下駄が脫放されてあつた。

「Dさんが歸る〳〵と云ひなさるのを無理に留めて置いたんですよ」

さう云つて突立つてゐる妻の身體に遮れて、Dの姿は見えなかつたが、嗄枯れた咳拂ひは彼れの聲を私の記憶から呼起した。私は流し元へ行つて汚れた足を洗つてから茶の間へ入つたが、其處に坐つて兩手を袂に入れたまゝ反身に構へてゐるDは、少し赤らんでゐる目で眼鏡越しに見上げたゞけで、口も利かなければニッコリともしなかつた。二十年前の私や私の朋輩の衣服を思出させるやうな、華美になつた今の東京では、苦學生の間にも見出しがたいほどの疎末な着古しの田舍々々した着物を着て、垢光りのしてゐるやうな袴を穿いて居た。

「でも、よくやつて來たね」私は長火鉢の側に胡坐を搔いて、Dの方を見やつた。家の者には上京の日納をも理由をも明かさないで、出拔けに故鄕を飛出したので、私の所へ寄付きもしなければ居所をさへ知らさなかつた。知人はゐるまいのにどうしてゐるのだらうと、時々案じながらも暫く打やつて置いたが、話相手の少い妻は、緣つゞきのDが多少懷かしいのか、心當りを訊合はせて、やうやく居所だけ索り當てたので、來訪を求めたのであつた。「手紙をやつたつて來るか來ないか分りやしないよ」と云つて、私は旅行中Dのことなど殆んど念頭に置いてゐなかつた。

「今日は土曜で、授業が早く濟んだから、その足で此方へ來なすつたんですつて。いろんなことを聞きましたよ。Dさんは感心ですわね」と、妻は一つ二つDに聞いたことを私に傳へた。

「學校へ行つてるのかい」と、私が向ふを見据ゑて聽くと、

「えゝ。麴町の××學校へ入りました」と、Dははじめて口を利いた。

「學資はどうするのだい。家から來ることになつてるのかい」

「家から貰はいでもどうかなる」Dは冷かに答へた。

「長いこと月給を溜めてゐたんですつて」と妻は代つて云つた。

「お前は幾つだ？」

「三十」

「三十？。そんなになるかね」

私は弟の年齢を意外に感じながら、まじ〳〵とその顏を見入つた。赭黒くて頑丈らしいけれど、何處となく憂鬱なところのあるのが、私の心を暗くさせた。

日光から持つて來た羊羹を切つて茶を入れて、一しきり取留めのない話をはじめたが、するとDも何時となく火鉢の方へ躙り寄つて、少しは打解けた口を利きだした。金網屋の二階を借りて食事は近所の繩暖簾でしてゐると云つた。

「お前はよく卵を食べてゐたが、東京は卵も高いからさう食べられまい」と訊くと、

「いや毎日食べてる」と答へた。

「自分が十年もかゝつて僅かづゝ殘して來た金を、物價の高い東京で費ふのは馬鹿々々しいぢやないか。親爺に貰つたらいゝだらう。外の者は兎に角親爺に強請してでも自分の好きなことをやつてるのに、お前だけは默つてゐたために田舍の教師なんかをして修業の時期を遲らせて一生の損だつたぜ。おれはお前は田舍にゐて滿足してゐたのかと思つてた」

「人間は成るやうにほか成らんのぢやからな」

Dが微笑して感慨めいた口調で云つたので、私は噴出しかけたが、Dの顔は釣魚に食事をも忘れて衣服をぐちや〳〵に潮に濡らして歸つて來てゐた頃の幼顔ではなくつて、そんな感慨を洩らすに相應しいやうな尤らしい顔をしてゐた。

「今から東京でコツ〳〵勉強するよりは、田舍で氣樂にしてゐた方がよささうなものだが、食ふには困りやしないんだから」と私は前とは矛盾したことを云つて、「皆んなが田舍の金を東京へ持つて來て費つちや、田舍が貧乏になる譯だね。Dまでが國を出て來るやうぢや、子供の處分については親爺の思惑はまる外れだ」

Dは泊つて行くことになつて、私達は話に夜を更かしたが、無口な弟が一人加はつただけでも、平生に違つた話の種が出來て、多少の興がないでもなかつた。

「面會の節は教示頼み入り候」といふ端書が父から來てゐたが、どんな風に教示していゝのか私には分らなかつたし、また弟にでも差圖がましい態度を執ることを私は好まなかつた。勝手にさせろといふのが腹の底の考へだつた。そして、私が芝居入りや食物屋入りなどして、將來の目的も定めずにうか〳〵してゐた二十代に、Dは出京を目的に零細な月給を蓄積したことを思ふと、その量見の是非にかゝはらず、根強い辛抱に感心されて、

「おれの家に同居してもいゝし、同居がいやなら、この近所に部屋借りでもして、飯だけ家で炊いて持つて行くことにしてもいゝよ」と、勵ましたりした。

翌日は遲く起きた。Dは朝飯抜きの早午餐を食べてから、芝公園を見て歸ると云つて暇を告げた。私よりもゝつと氣無性な彼れは、兄弟と一緒に散歩するのをむしろ煙つたく思ふだらうと察せられたので、どうせ日に一度は散歩に出る筈の私も、進んで彼れの案内に立たうとはしなかつた。

「でも些つと變つてるわね。同じ兄弟でも、CさんやFさんとは、顏も氣持もまるで違つてゐますよ。兄弟であゝ違ふつてことがあるもんでせうか。私が何か訪ねても、返事をするまでに隨分手間がかゝるんですよ」と、妻は云つた。

「お前にはまだ話をする方なんだ。親爺なんかには一口も口を利かないさうだ。餘程前に病院で鼻の療治をした時に、親爺は附添ひに行つてゐたさうだが、後でその時のDの樣子をおれに話して、Dはお前によく似てるとつく〴〵感じたやうに云つてゐた。何がよく似てるんだか、親爺も云はなければおれも訊かなかつたが、大抵は察しがつく」

「だつてさう似てやしないわ」

「お前には嚙んで含めるやうに云はなければ物が分らないんだから駄目だ。おれ達親子は一言云つてもお互ひの腹の底が分るから、親子の間でさう無駄口なんか聞きやしない。親馬鹿といふ言葉は少しもおれの親爺には當嵌まらない言葉だ。だから、子供が柄にないことをそれ〳〵にやりだして、親爺の立てた方針に從はないのに失望してゐる。……妙なもので、下の奴が惣領の感化を何時の間にか受けてるんだね。おれの方ぢや兎の毛ほども進んで弟や妹を感化した覺えはないのに、皆んながおれのして來たこ

とに似寄つたことをやりたがつてるらしいよ。……さう云へばDも昔繪を習ひたいと云つとつたさうだよ。すると、お前が畫家なんかになれるか、それで何で飯が食へると親爺に叱られたので、それから默込んでしまつたさうだが、自分の望みを壓潰された不平が昂じてあゝなつたのかも知れないよ。……おれがずつと田舍にゐたらDのやうにして二十代を送つたかも知れない。」

多くの男が一生の中で最も面白く暮してゐる二十代を、私達の昔の勉强部屋であつたあの田舍の二階の一室で讀書獨學のみして、家人とも話をせず、友人とも交はらないで過して來たDに比べると、私の方が餘程幸福であつたのであらうと考へたりしてゐると、Dをこのまゝ見棄てゝは置けなくなつた。書齋に籠つてゐるか、自分一人の心を見詰めてゐるか、自然の眺めを貪つて、この頃の月日を過して來た私には、こんなことでも珍らしい世間的の用事の一つであつた。彼れの學力や才能を仔細に檢査して、修業期の著るく遲れてゐる彼れに、最も早く効果の多い方へ向はしめる方法を案じてやらなければならないし、第一故郷から學資を支給させるにしなければならなかつた。親馬鹿の感情を缺いてゐる父には「可愛さうだから」と云つて說いたつて駄目なのに極つてゐた。「彼奴には六ヶ敷學問は出來ない」と見破つてゐる父には彼れに適したいゝ職業が東京にあることをまことしやかに說明しなければならなかつた。

で、私の心は一日二日Dのことにばかり集中した。幼少の頃から目に觸れ耳に觸れたことを一心に思出して、零細なことを寄集めてDといふ人間を明かに描きださうとした。この一人を描かうとすると、父母兄弟のすべてがそれを取りまいて鮮かに浮んで來た。故郷の山や海や人家も今見てゐるやうに目に映つた。十年二十年私の頭を刺戟してゐた筈の東京は影が薄くなつて、東西一里に足らない小村は、春

は春夏は夏の色彩を帶びて追想された。一家の運命や人間の流轉の異相も、私は都會で見知るよりも、その小さな田舍で一端を窺つてゐたのだつた。

「Dとは湯上りに、涼み臺で將棊を差したことがあつたよ。故鄕は暑い土地だが、夏の方が面白いには面白いね。夕凪の海を漁船が歸つて來るのも面白いし、蚊遣火の側で夕餐を食べてたことを今考へて見ると面白いよ。七夕と盆祭はも一度見たい樣な氣がする。」と、私は突如として妻に云つて、追憶に耽つたりしたが、一昨年から去年へ掛て寒い間を永く私の故鄕で退屈に過した妻は、私の言葉に同感はしなかつた。

「冬は詰らないところだ。久振りに今度は夏行つて見ようか」

私は梅雨前に今一度旅行したかつたので、Dの處置に關連させて、故鄕を中心にして瀨戶內海の沿岸に遊ばうかと目算を立ててゐた。私は關東は可成り廣く知つてゐても、瀨戶內海の沿岸は自分の故鄕以外には、あまり旅行したことはなかつた。飾磨、室津、下津井、鞆などの汽車のなかつた頃の船着場は、幼耳によく聞いてゐたので、一度は船に乘つてそれ等の港々を見て廻りたいと、かねて樂みにして、春か秋かに充分に時日の餘裕を得た時にと、一年々々伸してゐたのだつたが、今年も早く決心しなければ、梅雨や眞夏が相ついで目の前に迫つてゐる。

で、私は歸鄕前にDの決心を聞取るために、彼れを呼寄せやうとして端書を出した。彼れのために心を盡くしてゐることをも微見かした。が、訪ねて來もしなければ返事も寄越さなかつた。

一度懸り合ひのついた上は放任してゐられない氣がしたので、私は自分で金網屋を訪ねて行つた。瘦せつこけた男が板の間に胡座を掻いて、蠅帳らしいものを編んでゐた。その側では五つ六つの男の子が

金物の屑を集めて惡戯をしてゐた。

「××は居りますか」と訊くと、

「あの人は二三日前に轉居しました」と答へて、その男は仕事を續けた。

「轉居先は何處でせう」私は二三分間も立つてから訊いた。

「さあ、……」その男は面倒臭さうにして、奥を顧みて「二階にゐた人の越して行つたところは何處だつけな」と聲を掛けた。

「錦町一丁目の××館だよ」と、主婦は障子の向うで答へた。

私は雨戸の鎖されてゐる二階の方を見上げながら其處を放れた。海の見える廣い靜かな二階を棄てて、こんな小汚い二階へやつて來て、しかも冷遇を受けてゐるDに向つて、「お前も馬鹿だ」と、この時には云ひたかつたが、するとさういふ私自身も馬鹿なやうに思はれた。

身内の者に近寄られるのを、Dは嫌つてゐるのではないかと、私の訪問が相手に取つては有難迷惑になるのを恐れながら私は敎へられた錦町の下宿屋の方へ足を向けた。

幸ひ家にゐたので、下女に案内させて、長い廊下傳つて、行留りの、便所の側の部屋へ入つた。日當りは惡さうだが、私が學生時代にゐた二三の下宿の部屋に比べると、廣くつて宿屋の格も上だつた。Dは新しい机に向つて書物を讀んでゐたが、私の方を斜に見たばかりで口は堅く噤んでゐた。

「こんな下宿へ來ちや金がかゝつて困るだらう」

私は机の外に何も置かれてゐないガランとした部屋を見廻して、話の糸口を見付けやうとしたが、相

手が木像のやうなので、如何にも話しにくかつた。

「何を讀んでゐるのだい」と、私は手を伸して机の上の小型の洋書を擢取つて見ると、それはトルストイの短篇集で、「イワンの馬鹿」の初めの方が披かれてあつた。題目だけは知つてゐるが、まだ讀んだことがないので、半ページほど走り讀みして、

「讀易い文章だ。お前は讀めるのか」と訊くと、

「讀めんことはない。このくらゐな物は字引を引きさへすれば讀める」と、Dは意外にも勢ひ込んで云つた。

「學校の教課書ぢやあるまいが、こんな物が面白くつて讀んでるのか」

「面白うないこともない」

「こんな物も英語の力をつけるためにはいゝだらうが、學校へ入つた以上學課に身を入れなきや駄目だぜ。親爺に學資の請求をするのにも、明細に何年卒業で卒業後は何になれて月給がいくら〳〵といふことを、個條書きにして知らせなければ駄目だ。後になつてどうならうと、兎に角確實らしく書いてやることにしよう」

「……それはどうでもいゝ」

Dは懶さうに云つた。餘計なお世話だと云ひたさうな口吻だつたので、私は張合が拔けてしまつた。

「だつて一文無しになつたら、東京にゐられないことぐらゐ分つてゐるだらう」

「二三年は困らんやうにして來とる。その中にはどうか道がつくつもりぢや。……一文無しになつたら、

その氣になりや生きて行けんことはあるまい」

私は話を替へて、

「友人はあるのか」

「そんなものは一人もない。來た時に金網屋を紹介して、入學の保證人になつて吳れた者が一人あるけれど。別に往來はせんのぢや」

「同級生は皆んなお前よりは若いだらう。年下の者ばかりの中に交つてゐて厭な感じはしないかね」

「さうでもない」

私は所在なく教課書について訊ねたりなどしてゐたが、Dがはき／＼受答をしないので、次第に二人はまじ／＼顏を見合つてゐるばかりになつた。……教師に成り立ての頃ある山奧の小さな分教場で、たつた一人で教鞭を執つて、三四年の間故鄕へは一片の音信をもしないし、山から一度も踏出さなかつた彼れには、私などの伺ひ知れないやうな孤獨癖が早くから根を張つてゐるらしかつた。

私は惡親切で彼れの靜居を亂したのを悔ひながら、「ぢや、氣が向いたら遊びに來い」と言棄てて座を立つた。早い夕餐の膳が彼方此方に運ばれてゐるのを見ると、十年の間下宿屋の飯を食べて胃の腑を壞したことが痛いやうに思出されたので、擦違ひに膳の上を横目で見た。錦町界隈は以前同鄕の法律書生が幾人も下宿してゐたところなので、地理を熟知してゐた筈だが、何年目かに步いて見ると、記憶から浮ぶやうな家は殆んど一つもなかつた。電車が出來たりして、亦都會の變遷がいくら激しかつたにしても、十數年くらゐでまるで面目を新にした譯ではあるまいが、私の記憶が衰えてしまつたゝめか、初め

その町を歩いてゐるやうな氣がした。

大手に古本屋をあさつて、露伴の「枕頭山水」と、本居宣長の「菅笠日記」とを買つて歸つた。電車の中でところ／＼開けて見てゐると、「旅して口惜しきはわが財を持つことの少きよりもわが學を積めることのまだしきにあり。歷史に詳しく通じ居らんには僅かに殘れる古の城の墟或は破れたる寺頽れたる塚などにのぞみても限りなき感を起し人知らぬ興を覺え身に染み心に留ること多きかるべき」といふ記事が目に留まつた。私も旅するたびにかう思はないではないが、歷史に通じてゐないことよりも、動植物や地質などについての知識に富んでゐないことが一層口惜しく思はれるのであつた。ぼんやり大海の入日や高山の星空を仰いで、天地悠久の感じに耽つたりするだけでは物足らなかつた。

私の讀んだ範圍について云へば、昔の記行文はどれも／＼飽氣ないものばかりである。わづかに橘南谿の「東西游記」ぐらゐに、その時代の土地々々の光景を思ひ浮べさせるやうな平明忠實な描寫を見ることが出來るが、多くは文字の戯れに過ぎない。人の世の儚さ旅の淋しさが退屈な文章の中に含まれてゐるのに過ぎないのである。私は比較的こまかに書かれてゐる「菅笠日記」を讀んでもさう感ぜられたが、でも、數年前の花盛りの頃に自分の行つて見た吉野山を思出して、この日記の記事に比べてゐると、時代の變遷がいろ／＼に考へられた。

「金の入らない人間がゐるんだから不思議だね。學資か貰へるやうに道をつけてやらうと云つてもいゝ顏をしないんだから不思議だよ」

私は家へ歸つてからDのことを妻に向つて話した。

「親切甲斐のない人ね。お母さんは心配してゐらつしやるのに」

「彼奴餓え死しても平氣かも知れないよ。拗ねてゐるんでもあるまいが……」

人に會つてゐるのが重苦しくて、誰れにも構はれないでゐたいやうな氣持は私には多少理解されてゐた。Dほどでなくても、身内の者に一擧一動を注視されるだけで厭に感ぜられることが、私にもこれまでに屢々經驗されてゐた。人懷つこい感じをDは一度も感じたことはなさゝうだつた。「Dは何を考へてゐるのか分らん」と、彼れと毎日膳を並べて食事をしてゐたBは、かつて、さも彼れの存在を認めてゐないやうな口吻で、私の問ひに答へた。「Dさんとは何年も話をしたことがないが、先日中は碁の本を出して、ひとりで碁を打つとつた」と、EやFが云つてゐたことがあつた。

私が内海の船旅を志して身輕に故郷の方へ向つて立つたのはそれから間がなかつた。四時の急行列車に乘る前に、Dを訪ねるつもりで、早くから家を出たのだつたが、自作の出版に關する用件で、ある書肆に立寄つて、うかうか長座をしたゝめ、外へ廻る暇を失つたので、直ぐに停車場へ向はねばならなかつた。私の物好きで關り合つてゐるやうなものなのでDに會はないことが殘念でも何でもなかつた。

旅行には少し暑過ぎる時候になつてゐて、汽車に乘るまでには、厚着した肌は汗をかいて氣持が惡かつた。私は座が定まると、同じ車内の客を一通り見渡すのが癖になつてゐる。たまに面識の人に會ふこともあるが、この日は知つた人も、特に目を惹くやうな風變りな人も乘合せてゐなかつた。窮屈な眠づらい夜は琵琶湖のほとりで明けかゝつた。

大阪を過ぎ神戸を過ぎると、故郷が目の前に迫つて來て、それとゝもに私は今だに子供染みた氣持になるのが例になつてゐた。惣領であつて幾人もの弟妹をもつてゐる私も、父母が健かで稼業を勵んで、老の到るのをも知らないでゐるため、私自身は一家のことを顧みる必要もなく、從つて歸省する時にも世間的俗事は、私の身に纒はつてはゐなかつた。近郷の私塾や岡山の英人の學校に學んでゐた時分の休暇に、風呂敷を抱へて海岸の石ころ道に朴歯の日和下駄を鳴らして、父母の家へ急いで歸つてゐた昔と、同じやうな氣持が今でもしてゐるのであつつた。

播州路の平凡な禿山は、緑濃い兩毛の山々に比べると、目の保養にもならなかつた。私の故郷までの汽車の左右には、凡庸な景色のみがつゞいてゐる。田植間近で水田の眺めも汚らしかつた。

汽車を棄てゝ俥に乘ると、自分の家まで二里あまりの間は、目を瞑つてゐても、道の隈々が鮮明に分つてゐた。十年も前から何時通つても修繕をしてゐない赤土の塀や、徒ら書のます〳〵殖えて行く路傍の岩石や、峠の饂飩屋などが、此處等だと思つて目を開けると、そこへ形を現はしてゐた。小さい町を横切つて海岸へ出ると、何時ものやうに胸がひらくやうだつた。夏の眞晝の日は、さらでも勢ひのいゝ赭ら顔の船頭を生々と照らしてゐた。

私は橋の袂で俥を下りて、柴垣に添つて、漁夫村に特有の惡臭のしてゐる小徑を上つて、裏木戸から家へ入つた。茄子や胡瓜など一家一年間の食料になるだけの潤澤な野菜の作られる菜園には、筒袖を着た父が鍬を持つて働いてゐたが、私の歸つたのを見ても仕事の手は休めなかつた。一言何か云つたやうだつたが、それも私の耳にはよく聞取れかつた。

壁の白い穀倉の前には、枇杷や梅が實をつけてゐて、大方花の散てゐる霧島躑躅のあたりには、以前のとは異つた鶏が小蟲を啄んでゐた。襖や障子を取拂つて、茶の間も寢室も客間も區別のないガランとした家の中に、下女と二人で魚網の糸を編んでゐる母に挨拶して、汗ばんだシャツを脱棄てゝ、顔を洗つて冷たい澁茶を飲んだ。私は二年や三年會はなくつても、母に向つて話したいことが胸に溜つてゐるのではないので、着物を着替えたら直ぐに二階へ上つて、昔の部屋で快く午睡をしやうと思つてゐたが、母が熱心にDの話を持出したので、容易に側を離れる譯に行かなかつた。

自分で荷造りして、親兄弟には殆んど一瞥をも與へないで、東京へ向つて故郷を出立した時のDの様子を、母はくど／＼と話した。

「Dのことぢやから、何年立つたらまた家へ歸つて來ることやら分らん。前にも××の山の中へ行つたきり、生きとるも死んどるも分らんやうであつたのを、わざ／＼Bが行つて無理に連れて戻つたんぢやから、東京だと尚更こんな田舍へ戻る氣にやなるまい。着物だつて着替えもろくに持つて行つとらんのぢやから困るだらうのに、知らん顔して家を出居つた。私が生きて側にゐる間は、どんなことでもしてDの世話をしてやらうと思ふとつたけれど、遠方へ離れとつちや世話のしてやりやうもないからなあ」

「あれは獨りに馴れて居るから、さう案じたものぢやありませんよ。人に親切にされても虐められても同じやうな氣持でゐるんだから」

「あんなに物に頓着しないやうな風をして居るけれど、子供の入つた後の湯にはどうしても入らんのぢや。學校へ通ふのにも濱通りを通らいで、雨が降つても風が吹いても、わざ／＼廻り道をして山道を

通つて行つとつたくらゐぢやから、東京のやうな人通りの多いところぢや、人を避けることが出來んで困つて居らう」

「しかし東京だと何方向いても、知らん顔ばかりだから、いくら人間數か多うても木や石も同樣に思はれてるだらう」

私は母の言葉の可笑さに、冷かす樣にさう云つたが、Dは心からさう思つてゐるのかも知れなかつた。そこへ出入りの村の者が訪ねて來て、「ようお戻んなさつた」などゝ私に挨拶した。私は母がその人と話をしてゐる間に座を脱けて二階へ上つた。二三脚の机が出てゐたが、弟妹が暑中休暇に歸省するまでは主がないので、埃で白くなつてゐた。雨に煮染み風に破られた障子を開けると、鏡の如しといふ形容はこんな海にこそ當嵌ると思はれるやうな入江が目の前に現はれたが、私は馴染深い景色を樂しむ前に、夜汽車の疲れを癒すための午睡をした。

蠅に舐められたり蚊に嚙まれたりして睡りは屢々妨げられたが、でも、風呂の湧く頃まで氣まゝに寢ころんでゐると、頭の中が凉しくなつて、粘つこい口の內にも食慾が萌しだした。寢てゐた間に潮は遠く退いて、磯邊には鳥が幾羽も下りて犬か猫かの死骸を貪つて居た。滿潮の吹送る爽やかな風とは異つて、干汐時のいやな臭ひは久振りに私の鼻に感ぜられた。入口の狹い袋のやうな入江には、腐つた魚だの朽ちた藻屑だの、海の垢が沈澱してゐるので、汐が干ると、さういふ物が日に蒸照らされるのであつた。

私は風呂に入つたゞけで、日暮れ時の階下の混雜を避けて二階へ戻つて、階子段の引戸を締めて、舞上つて來る竈の煙を防いだ。そして、亂雜に彼方此方に置かれてある本箱の側へ寄つて、手當り次第に

古いのや新しいのやいろ〳〵な書物を出して見てゐたが、弟妹の愛讀してゐたらしい書物を見つけたり殊に書入れた文字を見たりすると、自づから微笑まれたりあるひは眉を顰まされたりした。私はじめすべての兄弟の幼い空想の跡は此の二階の勉强部屋に殘つてゐた。手を觸れるとザラ〳〵と赭い砂の落ちる古い砂壁には小い者等の徒ら書がところ斑らに殘つて居た。

が、Dの名前の記されてゐる書物は見當らなかつた。彼れの手垢のついた物もあるのだらうが、書入れなどしてゐないために分らなかつた。私はふと好奇心を起して、本箱から離れて、文庫や机に手をつけた。文庫には弟妹のノートブックや、彼等の友達の寄越した手紙などが入つてゐた。自作の和歌を集錄したものもあつた。が、Dの手跡は見つからなかつた。

そこへ父は湯氣で生々と艶のついた顔色をして上つて來た。久振りに二階を見たのであらう。掃除もしないで空家同樣に汚れて居るのに今はじめて氣付いたやうに獨り言を云つて、窓の閾に腰を掛けた。私もそちらへ寄つて腰を掛けた。

「この頃は儲るかい」と、のつけにかう訊かれると、

「儲かりもしませんね」と、私は力の入らない返事をした。私自身不斷夢見たいなことをうか〳〵と考へてゐたことが、父の前へ出ると明かに顧みられた。で、自分の身の上に關はつた話を避けて、歐洲戰爭のこんな田舍に及ぼした影響などを訊いてゐたが、Dのことが自然に互の口に上るやうになつた。

「拋つて置く譯にも行かんが、彼奴はわしの手では仕末がつかん。お前の方でどうにでもして呉れ。四年とか五年とか區切りをつけて學資を出すのは出しもしやうが、彼奴は世の中で人の中にまぜつてどんな

稼業でも勤まる奴ぢやない。この村の學校ならこそ教師もして居られたが、他村へ行つちやそれさへ出來なからう」父は間延びのした口調で悠然としてさう云つて、「何にしても三十にもなつて嫁がなうては極りがつかんから、わしが手數をかけて、堅い家のえゝところの娘を捜し出して、去年の暮に結納の取かはせをして内輪だけで假祝言をしたんぢや。當人はやつぱり默つて居て承知するもせんも傍の者には分らなんだけれど、Dが何とか返事をするのを待つて居つた日にや果てしがないから、わしがこの娘ならどんな貧乏生活にでも辛棒すると見込んだゞけで獨り極めに極めて、ずん〳〵と事を運んだのぢや。……………」

「私はちつとも知らなかつた」

Dの結婚は惣領の私にも初耳であつた。そして、喜劇染みた感じがふと胸に起た。

「わしも一生の失敗ぢやつた。こんな困つたことはない」と、父は眉のまわりに深い皺をつくつて澁い顔をした。が、その澁い顔にも私が東京の先輩や朋輩の上に見るやうな苦しさうなところはなかつた。どんな場合にも樂天的な相は父の顔から消えなかつた。

「うまく折合はなかつたんですか」

「惡いともえゝとも何とも云はないで、自分だけこの二階で暮しとる。……まるで人情のない人間のやうぢや」

父はその間の立入つた話はしなかつたが、いよ〳〵女の方で困つて離別を申出した時に、父が仕樣事なさに又女を連れて實家へ送屆けたことを手短かに話した。

「一月の二十二日ぢやつた。雪花のちら〳〵しとる寒い日であつたが、S——村まで俥で隨いて行て、村の手前の渡し場でその女だけを船に乘らせて、向う岸へ無事に着いたのを見屆けて、わしだけ戻つて來たんぢや、あの時だけはわしも弱つた」

「その娘にや可愛さうなことをしましたね」

父の子供は皆自分で職業を撰んだ上に、匹偶をさへ自分で撰んでゐるのに、Dにだけは父が干渉したために却つて失敗したことを私は皮肉に感じた。

「尤も後で相當な所へ緣付いたさうぢや」

「ぢや、その女はDに隨いてゐるよりや仕合せでせう」

「それもさうぢや」

夕餐の知らせがあつたので、私達はDの話を一先差置いて階下へ下りた。膳の上では東京では食べられない雜魚の煮付が私の舌を喜ばせた。

その夜私は、その話には觸れたくなさゝうな母に問ひを掛けて、Dの結婚について聞いた。

「嫁が去んでしまうてから十日ばかり立つと、Dは炬燵の上で腕まくりして、わしは大分肥つたと獨言を云ふた。後にも先にもそれだけほか何にも云はなんだ」と、母は云つてゐた。

「外のことゝは異つて、嫌ひな女と一緒にゐるくらゐ厭なことはないだらうが、Dの氣に入つてる女が別にある譯ぢやないでせうね」

「あれに限つてそんな者があるものか」

「さうでしやうね」

小學を可成りいゝ成績で卒業して、獨學で相當の學問をもしてゐるらしいDを、低能兒とはどうしても思はれなかつた。子供の時分に私よりも將棊の强かつたことなど思出された。負けかゝつていら〳〵して無理强いに相手を壓倒しやうとした私に向つて、彼れは悠然たる態度を取つてゐた。

「東京の學校で修業して、立派に身を立てやうと、きつぱりした決心をもつて出掛けたのぢやないかも知れませんね」私は東京でDに會つた時とは異つた目で彼れを見るやうになつた。普通の田舍靑年のやうに都會の榮華に憧憬して故郷を出立したとは思はれなかつた。

「Dのやうな汚い着物を着て居つたら、東京では人に嗤はれやうがな。漁夫でさへ今時は流行〳〵の着物を着たりなんぞして居るのに」

Dは何時も兄の着古しを着てゐた。かつて、貯畜があるのなら、一枚安い反物を買つて、その頃家にゐた嫁に仕立てさせたらと母が勸めると、「五錢ばかりの着物がありや買ふてもえゝ」と、Dは答へたさうであつた。喜怒哀樂で顏色も口調も變へたことのない彼れが、そんな返事をした時には、流石に母もむつとしたさうだ。

歸省した翌日から、早くも梅雨模樣で、二三日日の目が見えなかつた。私は腹こなしに山登りさへ出來なくて、二階で長い日を懶怠に暮した。弟妹の藏書を亂讀したり、濱通りの往來の人を眺めたりしてゐた。巢をつくる時分になつたのか、燕が軒先へやつて來た。泥を啣んで家の中を泳ぎ廻つた。

霖雨の時節に入つたのなら尚更だし、晴れでも暑くなつた以上、舟遊びに相應しくはないので、折角の計劃にもゆるみが出たが、遊んでゐる漁夫を一人招いて、近海の話を聞糺した。

「汽車や蒸汽船があるのに、漁船に乗つて見物にお出でなさるのは阿呆らしいぢや御座いませんか。今でも和船で金毘羅詣りをする人もありますけれど、辛氣なもので御座いますぞな」と、その男は私の説明を聞いても得心しなかつた。

「春さきに島に桃の咲いとる時分なら、K村のお大師様くらゐまで、お詣りがてら舟遊山にお出でなさるのもよう御座いませうけれど。……私ども商賣で年中乗廻しとる者でも、同じことなら何處へ行くにも陸を廻つて行きたいと思ふて居ります。海の暮しほど退屈なものはありません」

大抵の漁夫が、自分でつくつて食へるほどの田畝があつたら、海から陸へ上つて、肥桶を擔いでもいゝと思つてゐるとはその男の述懐であつた。

「でも、僕等の少い時分から、漁夫は米の飯に魚を添へて食べられるし、百姓は麥飯に菜つ葉を食ふつてことになつてるんぢやないか」と、私が云ふと、

「その代り漁夫は沖へ出りや、三月も半歳も女房子の顔は見られんのですから。何年舟乗りをしとつても、疊の上に寐るのがいつちえゝ氣持で御座いますらあ」と、その男は答へた。

さう聞くと成程と思はれたが、小波に搖られながら眠つてゐる舟の中の漁夫の寢姿を見たり、苫の間から炊煙の上るのを見たりすると、私の空想裡の樂みは頻りに刺戟された。

梅雨が霽れると、私は後の山に登つて内海を見渡して、舟旅の道筋を遙かに辿つたが、日和の不確か

なためや船暈の氣遣はしさに次第に決心が怯んで來た。

「ぢや秋まで延ばさうか」と、私は傍の者の注意を容れて、歸省の一つの目的を取消した。Dの身の上についても、彼れの保證に立つて父に說くほどの熱心を失つてしまつた。父子兄弟の親しみなど生れながらに持つてゐないやうな彼れを、私の力でどう導くことも出來さうでなかつた。心持の違つてゐる人間を世間に有振れた考へで縛らうとしたつて効のないのは分つてゐた。

一週間ほど逗留して故郷を立つ時に、私はDのことについては、父母に向つて一時の氣休め見たいな受答へをした。

東京へ歸ると、妻は

「お父さんはDさんに學資を送つて下さることになつたのですか」と先づ訊いた。

「さうしたら功德になるやうにお前は思つてるのか。……Dはお前などに憫まれるやうな人間ぢやないかも知れないよ」



紫合村

上司小剣

一

紫合と書いて、「ゆふだ」と讀む。如何な學者も初めは首を傾ける、と村の父老は言つてゐる。舊記を調べると、夕田と書いたのもあるさうなが、德川の時代から紫合村で通つてゐる。

一口と書いて、「いもあらひ」と讀む村が、京の近くにある。其處から餘り遠くないところに紫合村はある。

白い玉を溶かしたやうな美しい水が、丹波の奥から流れて、茅渟の海に注ぐ。川の名は處によつて變るが、中ほどでは紫合川といふ。巖を廻り、渓に沿ひ、淵をつくり、瀬をなして、長さ三十間の紫合橋といふ土橋の下を、銀の箭のやうな勢ひで奔つてからが、紫合川となるのである。

紫合村は、其の綺麗な川を挾んで、兩方に開けた僅かばかりの平地に、山を

負ひ、山に抱かれて、千五百ばかりの人口が、多くは藁屋根の下に散らばつて住んでゐるのである。

村の眞ん中に、瓦葺きの大きな堂がある。天台に象つたといふ二重屋根で、川に臨んで、小山のやうなこんもりとした丘の上に建つてゐるから、高い屋根はいよ〳〵高くて、村中が其の棟の鬼瓦に睨み下ろされてゐる。

鬼瓦の眼の眞正面に當る家々では、藁葺きの煤ばんだ軒に、いづれも鍾馗の繪姿を貼り付けて、鬼に睨まれる災厄から遁れようとしてゐる。

『鍾馗さん強いで、……長い劍提げて、黑い髭生やしてはるさかいなア。この人にかゝつたら、鬼もあかん、ぼろくそや。……』

『鍾馗さんと閻魔はんと、どッちやが强いやろ。……すもん(角力)取らしたら、おもろいやろなア。どッちやが勝ちやはるやろかいな。……』

村の子供たちは、寺の大きな鬼瓦を眺めては、家々の軒下の鍾馗の繪姿と見比べて口々にこんなことをよく言つた。

『本堂の鬼瓦より、國さんとこの鬼瓦の方が怖いで。……』などと、通りかゝつた若い衆は、子供だちに戯れつゝ行き過ぎた。

『呼ぶより謗れや、……鬼瓦が來た。』と、子供の群の一番大きいのが、ませた物の言ひやうをして、寺の樓門の下を指さしたが、成るほど、村一番の大百姓國松の家の下女お作が、鬼瓦と綽名に呼ばるゝ、反ッ齒の醜い顏を、七ッ下がりの薄日に晒らして、縮れッ毛のほつれを秋の風に嬲らせながら、石段を

下りて來た。

「やアーい、……鬼瓦アッ。……」と、一人の腕白は近づくまゝに、お作の方を向いて叫んだ。

「鬼瓦かて、あんたの世話になれしまへん。」と、お作は直ぐどんぐり眼を瞋らして、持つてゐた空の笊を振り上げた。

「鬼瓦が眼剝いた。……」と、子供等は面白さうに棄臺詞を殘して逃げ散つた。

「ほんまに、子供の大人調弄ほど、いかんもんはない。」と、お作はぶつ／＼獨言をしながら、寺の崖を廻はつて、石塊の多いだら／＼坂を登つて行くと、昔し馬繫ぎのあつたといふ塀の崩れから、三莊といふ吊り髭の三十男が現はれて、出會頭に、

「作やん、何處へ行きた。本堂か……」と、別に知りたくもなさゝうなことを訊いた。

「さうだす莊兵衞はん、本堂へお大持つて行きましたんや。」と、お作はつい先刻まで大根のどッさり入つてゐた笊を振つて見せた。

「あゝさうか。」と、三莊は苦み走つた顏の鼻の先きに笑をいッぱい浮かべて、懷手のまゝ行き過ぎた。

「あの人、赤痢やつたのに、もう快うならはッたんかいな。」と、お作はまた獨言をして、皆んなに三莊と呼ばれて通つてゐる三谷莊兵衛の、如何にも博奕打ちらしい縞の袢纏の後姿を、稍長いこと、ぢいッと見送つてゐた。

二

本堂の棟に大きな鬼瓦二つを載せてゐる寺は、紫合山光格寺といふ門徒寺である。先住はもう粽形の

石塔の主になつて、新發智の桃丸はまだ十九の童名のまゝで、住職になつてゐない。庫裡には先住の後妻で桃さんの繼母お加代と、其の生んだ紅香といふ四歳の娘と三人で、雨が降るところ〳〵にぽたり〳〵と漏る大きな屋根の下に暮らしてゐる。

柿の實が熟しかけて、青いながらに皮の下には黑い餡をもつ頃になると、蜩の聲が、

「ツクツクオイシ……ツクツクオイシ……」と、木立の中で、竹片なぞを持つた腕白どもの頭の上に響く。

「やアーい、もう柿が喰へるぞい。」と叫ぶもの、手には、青いのや、帶に蟲が付いて小ひさいながらに黃ばんでゐるのやらが、二つ三つ握られてゐる。猿のやうに白い齒を剝き出して、皮ごと齧り〳〵行く尻切れの藁草履のわるさのあとから、痩犬が長い尾を振り〳〵隨いて行くのも、村には見慣れた石版畫のやうな光景ではあるが、この秋は何うしたことか、其の頃から惡い病が流行り出して、村役場の土間には石炭酸の瓶が堆く、紺飛白に小倉の袴の衛生係と、白い服の巡査とが、毎日〳〵西に東に、村中をうろ〳〵してゐた。

「柿喰うな、赤痢になるぞい。」と、光格寺の院主が本供の行列を立てる時六尺を勤める大男は、胴間聲で言つて、己れは手近かの枝にある大きなのを一つむしつて、長い前齒でかくりとやつた。

「新ぼんちに早やう得度して貰はんと、どんならん。」と、大男は口癖に言つてゐることをまた言つて、二つ目の柿をまたむしつた。

「十ッさん、わしにも一つ取つてんか。」と、新發智の桃丸は、桑畑を潜り〳〵駈けて來たが、大男の十

吉はせゝら笑つて、
「滅相な、ぼんちがこんなもん喰うと、直きにレコや。」と、破れた腿引の臀のあたりを叩いて見せた。
村中をうろ〳〵する巡査の白い服が、黒いのに改まつても、惡い病はなか〳〵減らないのである。
光格寺の庭には柿の木が多い。あたりまへの甘柿が四本と、御所柿が一本と、こねりが一本と、澁い美濃柿が一本とあつた。久しい出入りの十助が、廣い空地を掘り返しては畑にしてみても、後の手入れが續かぬので、豆でも芋でも大根でも、滿足に出來たことはないが、植ゑた先祖の餘徳で、柿だけは放つたらかしといても、年々に實を結んだ。
何んでも石山合戰の飛火で、織田信長に燒かれるまでは、この光格寺がそれは〳〵立派な寺であつたさうで、半分焦げ殘つた古い御家流の帳簿に、「紫合御坊」といふ文字の讀まるゝのでも、大抵の樣子は分りさうである。
「門徒寺が、眞言や天台みたいに、山の上に居ては、寺の繁昌のする道理がないわい。京の本山かて低い町の中に居やはるやないか。」と、村の節用集と仇名されてゐる四十男はよく言つてゐる。
昔は貴い什物もあつたらしく、書畫の軸物の箱ばかりが、三つ四つ殘つてゐる中に、東坡筆竹之圖といふのもある。
「こんなもんが、ほんまにあつたんやろか。」と、節用集はそれを見るたびに首を捻つてゐる。
「この箱に入つてたもんが、皆んな今あつたら、それこそえらいもんや。一身上も二身上もあるがな。」
と、節用集はまた首を傾げる。

「そんなもんは無うてもよい、俺やまた裏の北山だけでもあつたらなアと、惜しうてならんのや。」と、

十助は維新の時先住が下手を打つて上地して了つたといふ六十町歩のこんもりした松山を眺めては、幾十年このかた惜しがり續けてゐる。

「日が長うても短うても、一日仕事ちうもんは、大概きまッたどけほか出けんもんぢや。」と、十助は割り木を積み上げ、斧を片付けて、暮るゝに早い秋の夕の、茜色の雲を西の空に眺めてゐた。

「これだけあつたら、この寺の半季の焚きもんは不自由なからう。」と、節用集は十助が納屋の軒に積み上げた薪の割木を見上げて、唸るやうに言つた。

「何がのう、半季あるもんかい。せえさい四月やなア。」と、十吉は腰を擦つて背伸びをした。

「松やさかいなア、くにぎ（櫟）やつたら、こいで一年あるで、……」と、節用集はまた仔細らしく首を傾けた。

「くにぎがこいだけあつたら値打ちもんや。……賣つて米買うた方がえゝ。」と、十吉は割木の臺にしてゐた太い松丸太の上に、ゆッたりと腰を卸ろし、割つた木の端に引ッかけてあつたよれ／＼の淀屋橋を取つて、かち／＼と燧石で火を拵らへ、黄色い煙草の上へ黑い引火奴を載せたまゝ、スパ／＼と吸つた。

「十ッさん、御膳喰べなはれ。」と、四歳の紅香が赤い鼻緒の下駄で、よち／＼とやつて來てさう言ふとまたよち／＼と庫裡の方へ戻つて行つた。

「古川に水絶えず、とでも言ふんかなア、俺んとこ等の子が祭に穿く下駄を孃は常に穿いてるがな。」と節用集も手織木綿の微塵縞の懐中から疊み煙草入れを出して、鉈豆の羅宇煙管で、十吉が十能のやうな

掌に轉がしてゐる吹殻の火の玉に吸ひ付けた。

『あんなことしてるさかい、此處の家は身上が持てん。』と、十吉は三服目の煙草を吸ひ付けて、太い柱の曲つた庫裡の大きな裏口の高い敷居を、やッこらさと跨いでゐる紅香の小さい背中を見詰めつゝ言つた。

『そやけど十ッさん、お前はようこないに仕たげるなア、椀給でなア。……大忠臣や、御家再興の曉にや御家老に取り立られるで。……』と、節用集は莞爾笑つて、縮れッ毛の頭を撫でた。

『和アやちんも一所に御膳おあがり。』と、赤い鼻緒の紅香はまたよち〳〵やつて來て言ふと、機械のやうにクルッと向ふをむいて引き返へした。

『へえゝ、……』と、節用集は驚いた顔をしたが、十吉は何事をか少し考へた末に、唾液を呑み込んで、

『小作つくつて地のしさんへ奉公してるより、椀給でもよいさかい、此處の焚きもんでも拵へたげてる方が氣が利いてる。』と、稍大きな聲をして、煙管を持つたまゝの手で、ちんと手洟をかんだ。

『そらさうや、世の中に小作ほど阿呆な仕事はまアないなア。詩作るより田作れちうが。何んの、田作るより詩作る方がえゝわい。……昔は何うやつたやら知らんが、今時の小作は、政府と地主と銀行から甘味を吸はれて、糟だけ舐めてるんや。……言はゞまア、税と地代と利息の三ところ責めや。町へいて電信柱建てる。穴掘つてたかつて四十錢や五十錢の日傭は取れるもん、小前のもん〳〵と見下されて、氣の利いた犬や猫なら嗅いでも見んやうなもん食うて、へいこらさ、へいこらさしてることあれへん。』と節用集も節の多い丸太に腰を卸して、べら〳〵と話し込んだ。

『和三はんは、せッちようし（節用集）と言はれてるさかい、物識に違ひないが、まだあかんわい。税納めたり、銀行へ利息取られたりする貧乏なら旦那貧乏や。此方等の貧乏は其處どこやない。』と、十吉はまたチンと手洟をかんだ。

『小作つくれや、地代ちうもん取られるやろ、そん中にや政府へ納める税も籠たるね。肥料買はんならんいふて、地のしから金借るやろ、其の金銀行から出たるねやが、利息は地のしが頭張つて、銀行へ持つて行くねやがな。……百姓は詰まらんいふたかて、地のしはお大名や、どんづまりの糟は小作が拾ふてるんや。』と、節用集の和三郎は頻りに鼻の穴を穿り出した。

『物識り貧乏ちうて、和三はんもそいだけ物識つてゝ、ちッとえらうなりさうなもんやなア。』と、十吉はまた〳〵、ちんと手洟をかんだ。

『汚ないことするなア、十ッさん。』と、節用集は腰をよぢらして、眉を顰めたが、十吉はにや〳〵笑つて、

『汚ないことあるもんか、お前はんみたいに、布片や紙へ洟かみ込んで、大事さうに袂やほところへ入へれとくのは、此方等から見ると、何んぼ汚ないや知れへん。』と、更に四度目の手洟をかまうとしたがこれは思ひ直して止めた。

『どれ、去なうか。』と、節用集は輕く欠伸を一つして、夕暗の迫つて來る中に、スックと立つた。

『折角あゝ言やはるんや、お辭儀なしに御ッつおうになつたら何うだす。』と、十吉も立ち上つて、腰を捻つたり撫でたりしてから、大鋸と斧とを持つて、庫裡の方へ歩いた。

三

庫裡の廣い板の間には、上り口のところへ丸爐を浮き上らしたやうな圓形の大火鉢を据えて、それに割り木がぼッぼと燃えてゐるのに、せめてもの先住が盛りの頃の光景を偲ばせた。それにかゝつてゐる藥鑵は黒煤りに、幾代かの煤をためて、出がらしの番茶の湯氣を、俺の役はこれだとばかりに、廣い口から濛々と吐いてゐた。

「和三さん見い、この漆塗りみたいに黒うなつてる板の間も、火鉢の下だけはちいと新らしいなア。：：この火鉢何百年て此處にへたッてるんやで。此方等が覺えてからでも、この火鉢は此處でズッとへたつて、この藥鑵に湯氣吐かしてるもんなア。」と、まださう火の戀しくない時候ながら、十吉は大きな十能のやうな手を翳して、温まらうとする風に、懷かしい物ごしをした。

「さア皆さん上つとくれやす。」と、先住の坊守りお加代は、唐草模様のある木綿の薄い座蒲團を二枚、古疊の上へ好きほどに敷いて、優しい聲で言つた。

「へたくしまでが、十ッさんのお相伴でえらいお雜作になります。」と、節川集は薄笑ひをして、「さア、十ッさん何うや、お前はんが正客や。」と、背後を顧みた。

「まア／＼、お前はんは、なんぞごとのある時、羽織着る人や。：：第一此方等は足洗ふて來るんが邪魔くさい。：：お前はんだけ上らして貰ろたえゝ、此方等此處がえゝ。」と、十吉は板の間の上り框にどかりと腰を卸して、大火鉢の割り木の燃え工合を直してゐた。

「ほいゝゝ、十ッさんまアそんなこと言はんと、足洗ふて來て上つとくなはれな。あんたが上つてやな

いと、和アやんも上つて呉れはらんよつて、……」と、お加代は臺所から膳を持ち出しながら、十吉を促し立てた。

十吉が桃丸の古い利休下駄を提げて、井戸端へ足を洗ひに行つた間に、お加代は白瓜ののッぺいに鰊の焼いたのなぞを膳の上へ載せ、引ッかけにいッぱい湯燗にしたのを、節用集の方の膳に付けた。

「お神酒まで上つたなア、勿體ない。」と、節用集は膝行り〳〵膳の前へ寄つて、引ッかけの中のものに鼻をひこ付かした。

「お辭儀無しに頂きます。」と、十吉も足を洗つて來て膳の前へ座つたが、「此方等はこないに改ると、折角の御ッつおうが咽喉を通らん。」と、大きな手で引ッ摑ふやうに膳を持つて、板の間の大火鉢の横へ移り、

「此處がえゝ、此處がえゝ。……此方等の性に合ふたアる。」と、獨りで笑壺に入つた。

「十ッさんも附き合ひのわるい男やなア、手が屆かん、手が屆かん。」と、節用集は引ッかけを高く差し上げて見せた。

「此方等そんなものに用はないわい。そんな辛いもん何んで可味いのやなア。」と、十吉は膳を引き寄せた。釜のまゝに出された松茸飯がプーンと山の薫りを立てる。

「惡い病が流行つてるさかいなア、十ッさん、酒飲まんとあかんで、……酒さい飲んどいたら、何んなことがあつたかて傳染らん。風邪の神は膳の下、時疫の鬼は徳利の蔭、ちうてな、風邪引いた折にや、飯をドッサリ喰や癒るし、時疫の流行る時にや、徳利さへ出しといたら、病神は逃げよる。」と、節用集

は二三杯の酒にもう上機嫌の醉ひ心地になつて、講釋口調で言つた。

「ほんまになア、此方等覺えてからこんなことはまだなかつたで、何んでも村中で百人からあるちうさかいなア。……まだ何んぼ殖えるやら分れへんちうこッちや。」と、十吉はさも怖ろしいと言つたやうな顔をしながら、大きな五郎八茶碗へ湯氣の立つ松茸飯を盛つて、茶碗ごと喰べて了ひさうな勢ひで頬張つた。

「赤痢の元祖はあの三莊や、あいつが町へ博奕打ちにいて持つて戻りよつたのが、村いッぱいに擴がつたんや。あいつは碌なことしくさらん。」と、節用集は先刻から持ち續けにしてゐた盃を、伏せてある五郎八茶碗の糸底に載せて、徐ろに懷中の巡査煙草入れを抽き出した。

「三莊はんはもう快うなつたんやな。まいど其處で見たが、よう肥えて病ひあがりみたいやなかつた。……何んでもあの人は藥一服呑まいで、葱の腰湯で癒したちうこッちや。」と言ひ〳〵十吉はもう膳の上のものを綺麗にして了つて、「大けに御ッつおうはん。」と五郎八茶碗を伏せた。

「早いなア十ッさん、俺がまだこれに半ぼん飲まんのに、お前はんもう仕舞ひか。何んしよ年齢が年齢やさかい、達者さうでも食が落ちたか。」と、節用集はまた仔細らしく首を傾けた。

「落ちるには落ちたが、この五郎八に五杯なら、まだ戒名の命くにや間があらうぞい。」と、十吉は膝の淀屋橋を探つた。

「一寸の間に五杯やつたか、ふうーん。」と、節用集は大仰に眼を瞠つた。

「早や飯早や糞藝の中ちうてなア、此方等はこれが若い時から自慢や。」と、十吉はさも得意らしく言つた。

「そらさうと、村で避病院建てるんやさうなが、議員さんたち愚圖々々して、根ッから捗が行かんげな。』と、節用集は忙しさうに鉈豆で一服吸ふと、また手酌の一杯をグッと呷つて、半ば獨言のやうに言つた。

「あゝ、惡い病人を入れる病院だッかいな。……あれはお前はん、へキ病院といふのやないか。何んでもあそこへ入つたらあかんげな。あれは殺しにやるとこやさうな。そんなものが和三はん、寺家へも出けますのかいな。……そらえらいこッちや、强訴もんやで。……』と、十吉は身慄ひせんばかりに、厭やな\／顏をして言つた。

「お前はんもへキ病院の手合ひか、村長はんからしてが、へキ病院て言ふてはるさかいな、アハヽヽヽ。』と、節用集の笑ひ聲は俄に高かつた。

「へキ病院が何病院でもえゝが、そんな病人を殺しにやるとこを拵へるのは、ぞッとしまへんな。いづれ入費は小前の頭へもかゝつて來るのやろがな。』と、十吉の聲は細く悲しさうであつた。

「避病院がわざ\／病人を殺すといふのは、あれや嘘や。病院ちうもんは、あれや人を助けるところや、病院へ入つたら屹と殺されるなんて、そんな阿呆らしいことあれへん。』と、節用集は先づ眼のまわりから赤くして言つた。

「其のへキ病院ちう地獄みたいなもんは、一體何處へ建つのやろな。』と、十吉の言葉はもう他所のことのやうに冷かであつた。

「さればや、學校を建てる時は、村中で引ッ張り合ふて、到頭あんな寂しい野中へ持つていたんやが、

避病院となると、今度はまだ押し合ひで、皆だおかんいや、我れんとこに病人があると思へや、ねきへ避病院が出けたかて構やへんし、それに消毒ちうことをするよつて、一寸も怖いことあれへんのに、議員さんが皆んな我れの家の近くへ病院の出けるのを厭やがるんで、何遍村會開いても、遍照金剛言ふてゝ、決まれへんのや。村會議員なんて、薩張りわやや。』と、節用集の耳朶はだん〱熱くなつて來たやうである。

『まアさうやつてる中には、おひ〱寒うなつて、悪い病も片付くやろ。南んまん陀佛、南んまん陀佛……』と、十吉は眠たさうな聲を出した。

『さういふ譯にや行かん、お上からの達で、何うしても避病院は建てんならんのやさかい。愚圖々々してたら、村長はんがお目玉や。』と、節用集は兩手の母指と食指とで、大きな眼の玉を二つ拵へて見せた。

『其のお上ちう奴が碌なことさらさん奴でなア、……昔しみたいに公方さんや殿さんがお上なら、お上もお上らしいが、今は何んや、伊丹の郡長はんがお上やないか。』と、十吉はせゝら笑つた。

『郡長はんがお上ちうこともないがな。』と、節用集は酒とゝもに笑ひを呑み込み〱した。

『お上ちうもんはなア、學校建てい、病院建てい、……と普請ばッかりが好きで、其のたんびに小前いおめや。小前の血の膏絞つて、あんな大けな學校建てたかて此方等にや手習しに行く子が一人居るおやなし、阿呆らしい話や。……まいども天保山で異人の戰があつて、えらい怪我人やさうなが、肥料にする干鰯から何からから高うなるのも、其の天保山の戰の爲めやげな。其の戰はまだこれから何年續く

やら知れんさうなが、それもお上が惡いさかい、異人が戰しよるんや。……まいども役場から其の天保山の戰で死んだ異人の嚊や子を助けたるんや言ふて、何んぼでもよいさかい寄附せい言ふて來たが、此方等は厭やゝ言ふたつた。異人が勝手に戰さらして死によつたのに、それを日本人が構うたることあれへん。何んでも其の戰の側杖で日本の船も沈んで、積んで來たもんが皆わやになつて、物がかう高うなるのやてな。」と、十吉は物識りの節用集の前をも憚らず、あべこべに講釋する風をして言つた。

「何言ふてるね、十ッさん、天保山でそんな大戰があつてたまるもんかいな。天保山は此處から六里やで……」と、節用集は呆れた顔をしながら、殘り尠なになつた引つかけの酒を大事さうに注いだ。

「さア其處や、此方等もそれが心配でなア、戰が天保山だけで、濟んでるとえゝが、大阪の町へ異人の兵隊が上つて來よつたら、えらいこッちや思ふて、……」と、十吉は染々心配さうな顔をした。

「阿呆らしい十ッさん、異人の大戰はなア、何千里ちう遠いところにあるんや。」と、節用集は眞面目に取り合ふのも阿呆らしいといふ顔をした。

「そんなこと言ふて騙まさうと思ふたかて、此方等謳されへん。まいども雨の降つた日に、えらいこと大筒の音が聞えてた。死んだお婆さんの話に聽いた大鹽騷動みたいなことにならなえゝと思ふてるんや。」と、十吉は獨りで固く呑み込んで了つて、挺でも動く様子はなかつた。

「まア天保山なら、天保山でもよいさかいなア、十ッさん、其の異人の戰のお蔭で日本にもえらう金持が出けたるね。」と、節用集は何うしても自分が話を聽く側ではなくて、人に話をして聽かさなければ氣が濟まぬのである。

『戦のお陰で金持になる、……』と、十吉は不思議さうな顔をしたが、『あゝ分つたるがな、おほかた討死した奴のほところを探して、小使錢や時計でも取つて來るんやろ、異人はドッサリ錢持つてよるいふこつちやさかい、兵隊でも三兩や五兩持つてよるやろ、それを集めたら大けかろ。……死人に錢は無益や、六文さへ殘しといたッたら、あとは持つて來てもえゝな、成るほどぼろいこと思ひ付きよつた。』と、十吉はまた〳〵獨り呑み込みをして、感心に堪へぬといふ風情であつた。

『そんなこつて、金持になるんやない。』と、節用集は空嘯くやうに言つた。

『やいや、そやろ。昔かて戰があると、百姓は田ア踏み荒らされて、作物はどだいごくわやになるし、錢や取れんし、仕樣がないさかい、竹槍拵へて、道端へ隱くれてゝ、戰に負けて逃げて來よつた奴があると、竹槍で突き殺して、鎧兜や持つてよる錢取つたもんやげな。百姓にや敵も味方もない、負けて手負ひにでもなつて、殺しよさゝうな奴が敵ぢや。田地作つて荒らされるより、其の方が何んぼ割りがよかつたか知れんちうこつちや。……そらあの淨ろ理にある光秀なア、あいつも其の手で百姓に殺されたんやげな。大將やさかいなア、あいつはこれたんと持つてよつたやろ。』と、十吉は母指と食指とで圓い形をして見せて、あべこべに節用集へ話し込まうとするので、節用集は話の切れ目を待ち構へて、

『十ッさん、えらいこと知つてるなア。そいで天保山に戰があるなんて、途轍もないこと何んで言ふんや。』と、感心したやうな、冷かしたやうなことを言つた。

『天保山に戰が無うて何うせうぞい。此方等は嘘言はん、其の戰でから物が高うなつたり、惡い病が流行つたりするんやないか。お前はんが言ふやうに、何千里も遠いところで異人の戰があるんなら、何ん

でこないに物が高うなるもんか。……戦があると敵はん、物が高うなつて、税が殖えて、小前泣かせや。……手柄立てた大將は、顔役でえゝかも知れんが、博奕と戦は此方等嫌ひや。』と、十吉は何かの精が乘り移つたかと思はれるほど、節用集を前にして能く喋舌つた。

椀の中の冷めたのッペい汁を、微酔の眼に睨み詰めたまゝ、節用集は默つて了つた。

四

其の翌る日も、十吉は大鋸と斧とを持つて、朝から光格寺の石段を登つて來た。もう一日仕といたら來年の正月いッぱいの焚きもんはあるやらう、といふのである。二丁四面の境内を有つたこの荒れ寺には、松を主とした雜木林や竹藪が、人間ならば肱を張つたやうに、經藏の後から本堂まで蔓つて來て、十吉が二日三日斧を入れると、薪がドッサリ積み上げられるのである。

『十ッさん、わしもちいとあのけいやら知れん。』と、桃丸は少しばかり蒼い顔をして、お臀の方を氣にするらしい樣子で、木を割つてゐる十吉の傍へ來て、昨日節用集がやつてゐたやうにして、丸太の上へ腰を卸ろした。

『坊んち、うだ〳〵言ひなはるな。今あんたがあのけいでたまりますかいな。』と、十吉は斧の手を止めて、其の柄を杖つく風にしながら突ッ立つたまゝで、チッと桃丸の顔を見た。

『いゝや、何うしてもあのけいらしい。今朝からもう十何遍雪隱へ行くがな。……腰がだるうて、絞り腹で、水が飲みたい。』と、桃丸は肩で息をしてゐる。

『ほんまだッか坊んち、……そいでまだおでさんに言ひなはれへんのか。』と、十吉は周章てた狀で言つ

た。
「おでさんは墓の中に居やはるがな。」と、桃丸は幽靈のやうな聲をした。
「こら仕舞ふた。緣起がわるい、……山へ行け、山へ行け、貘喰へ、貘喰へ、……」と、十吉は眼を瞑つて禁厭のやうなことをしてから、「あのう坊んち、阿母さんに言ひなはれへんのか。」と、十吉の聲はせわしなかつた。
「あの人にはまだ言えへん。……」と、桃丸は父の生きてゐるうちでも、繼母に對して、阿母さんといふ聲は何うしても出なかつたので、父亡き後はもうおほぴらに、「あの人」で通してゐる。
「早やう醫者どん呼んで、藥服まなどんならんがな。」と、十吉は斧を棄て、桃丸を引き立てつゝ、庫裡へ入つて行つて、いまだに何うかすると晝も蚊の居る暗い土間に立つて、
「奥さん、どえらいこつちや、坊んちがあの惡い病のけいだすてな。」と、本堂へまでも響くほどの聲をした。
「まアー、……」と、奥から出て來たお加代は驚いた顏をしたが、それでも藪から棒にそんなことと信じられぬといふ色が、あり〳〵と窺はれた。
「そんな惡い病やなうて、腹仕舞ふてはるだけやら知れんさかい、まア赤松でも呼んで診せてみなはれあの藪醫者かて、病の筋ぐらゐ分るやろ。」と、十吉は大事の品物を抱へたやうに、そつくりと桃丸を上り口へ押しあげた。
「坊ん、それ見なはれ、柿喰べたら可かん言ふてるのに、まだ青いのを七つも八つも皮なりで喰べてや

よつて、工合がわるなるのや。お父つあんが生きてゝみいで、十一月にならんと柿喰へさしはらん。」と、お加代はキイ〳〵聲で言つて、しよんぼりと、湯をかけられた青菜のやうに力のなくなつてゐる桃丸を睨んだ。紅香がよち〳〵と、赤い鼻緒の下駄で表から入つて來て、指を銜へながら桃丸の直ぐ側へクッ付くやうにして坐つたので、お加代はまたキイ〳〵聲で、

「紅さん、傳染るがな、兄さんのねきへ寄つたら、……」と、劇しく言つて、紅香の細い手を引張つた。

「奥さん、そんなこと言ふていで、早やう坊んちに寢床敷いたげなはれ。」と、十吉はお加代を促し立てつゝ、桃丸の樣子を氣がゝりな風でヂッと見詰めてゐた。

「水が飲みたい。……飲んでもえゝやろか。」と、桃丸は力のない聲で、誰れに言ふともなく言つて、何んだか急に病人らしくしなければならぬやうな氣持ちになつてゐた。「あの人」なんぞは、何んぼキイキイ聲をしたかて、一寸も怖うないが、若し今自分が赤痢なんぞになつたら、この大きな家は何うなるであらう。この秋の收獲が濟まなければ、燈明田の年貢も入つては來ぬ。それまでは賣り殘りの道具でも賣つて、米買ひを續けて行かねばならぬ。父の法衣と袈裟とまで質に入れた金が、「あの人」の手にはもう何んぼも殘つてはゐないであらう。――などと、そんなことをいろ〳〵考へてゐると、腹の痛みがだん〳〵强くなつて、腰が擴がるやうに思はれ、急ぎ足でまた雪隱へ行つた。

「一週忌の濟まんうちに石塔建てるもんやない、屹と災難が湧いて來よる。」と、飾用集が頻りに言つてゐたけれど、僅かばかりの檀中から集めて呉れた石塔の料を、米代なんぞにして了うては申し譯がないと、「あの人」が石工を急き立てゝ、百ケ日の濟んだばかりに建てたあの新らしい粽形の石塔が祟つて、

自分はこんな惡い病になつたのではなからうか。――と、桃丸は不淨の中に蹲踞みつゝ、先づこんなことを考へた。少し込み入つた考へごとをすると、頭がフラ〳〵して氣が遠くなりさうである。窃と手をやつて額を押へてみると、内部では火が燃えてゐるのかと思はれるほど、熱い、熱い。

不圖思ひ浮べたのは、「あの人」がお腹に子を持つてゐるといふ村人たちの噂さである。先住が亡くなつてから丁度五ヶ月、さうして、「あの人」のお腹も四月か五月らしいとの蔭口が、風に傳はつて聞えて來る。

「月が重なれや、お腹が太る、どしよぞいな。……さアさ棄てとけ、放つとけ。……」と、大きな聲で寺の門前を唄つて過ぎる若い衆のあるのを、「あの人」は何んと聞いてゐるのであらうか。お腹の中に居るのが、自分の弟か妹かであるならば、それも仕方がないが、若しやあられもないもの〻胤であつたなら、自分としては何うしてよいのであらうか。今までは一向に考へたこともない心配が、何ういふものか犇々と身に迫つて來る。これも惡い病に取り付かれた爲めであつたらうか。――

桃丸はこんなことを取り止めなく考へて、雪隱から出て來ると、先住が居間にしてゐた茶室がゝりの四疊半へ、自分の寢床が面倒臭さうに舒べられてあるのを見た。けれども桃丸は、其處へ横にならうともせずに、また頻りに催して來る便意を忍びつゝ、ぽつねんと看病をしてゐる人のやうな位地に座つて、古ぼけた木綿縞の蒲團のごつ〳〵したのを見詰めてゐた。

五

裏手の方からは、十吉の木を割る音が頻りに響いて、桃丸は何んとなしに涙を誘はれた。

寺家中へは、直ぐに桃丸惡病の噂さが擴まつたが、眞つ先きに見舞に來たのは三莊で、彼れは其の苦み走つた吊り髭の顏を庫裡の入口に現はすと、嗄れた聲で二た言三言、お加代に話してから、ずいッと病室へ入つて來て、元氣よく尻引ん捲つて桃丸に毛脛を見せつゝ、枕頭へ胡座をかき、

「坊んち、到頭やりなはつたなア、これも附き合ひの一つやよつて仕樣がおまへん。この病には葱の腰湯が一番や、わたへが今葱刈つて持つて來たげたさかい、あれで腰湯使ふてみなはれ、屹とえゝに違ひない。」と元氣よく言ひ〳〵、桃丸の額へ手をやつてみて、

「あゝだいぶん熱がある。雪隱通ひが敵ひまへんで、わたへはなア、六折の紙を枕元へ置いといて、一枚づゝ持つて行きましたが、一晩でないようになつたよつて、二六十二の百二十遍行きましたんや。」と尾籠なことを手柄話のやうに言つて、自分も笑ひ、桃丸をも笑はした。

三莊が去んでから、お加代は早速五右衞門風呂で葱の湯を熱く沸かし、それをば底の腐りかけた大盥へ取つて、

「坊ん、三莊はんの言ふたこと、早やうしてみなはれ。」と、病室に向つて呼んだので、桃丸は身體がぐつたりして、おとましいのを、癒りたい一心によろ〳〵立ち上り、竹を張つた床の毀はれてゐる風呂場へ行つて見ると、葱の臭ひが病の身には厭やな氣持ちにプーンと鼻を衝いて、ふら〳〵と逆上せさうになつた。熱いのを辛抱して、盥の湯に腰を浸すと、成るほど腹の工合が覿面に快くなつて、引ッ切りなしに催してゐた便意も礑と止まつた。

これでもう惡い病は、ちやんと癒つたのであらうかとさへ思はれて、桃丸は嬉れしくてならなかつた

が、湯から上つて少しすると、腹の工合はまたもとの如く、鬼瓦でも呑み込んでゐるやうになつて、ごろ〳〵と少し鳴つた。

少しばかりうと〳〵として、十ッさんの斧の音を夢の中に聞いてゐると、近いところに人の聲がざわざわして、枕頭には黑い服の巡査と、役場の喜之はんと、赤松の坊主醫者とか、顏を揃へて立つてゐた。

『坊んち、やりましたね。』と、喜之はんは村で唯一人の江戶辯を使ふて、ニャ〳〵笑つた。坊主醫者と言つても、これは西門徒で、頭の毛は人並みよりも長く散髮にして、左の方で綺麗に分けてゐる。「此奴がわしを殺しよるのか」と、東門徒の桃丸は惱亂した心の中で思つて、睨むやうに坊主醫者の顏を見てゐると、

「お前はんの商賣は、どッちへ轉げても落さずや。二た道かけたアるよつてなア、世の中にこんなぼろいことはない。……死んだらお布施、癒つたら藥禮、……」などと、冷かされ付けてゐる坊主醫者は、仔細らしく羽織を撥ねて座つてから、默つて桃丸の脈を取り、舌の色を見たりして、背後に突ッ立つたまゝでゐた喜之はんを振り向いて、

「いやもう、正眞正銘紛れなしや。……隨分性の惡い方で、なか〳〵重いなア。」と、首を傾けた。

「あゝ左樣か。」と、喜之はんは氣樂さうに言つて、土間の方へ大きく、「そんなら重たん、消毒しなくちやア。」と、石炭酸の大瓶を持つて上り口に控へてゐた小使の重太郎を江戶辯で呼んだ。

巡査の指圖通りに重太郎が、本堂の須彌壇へまで石炭酸を撒きに行つてゐる間に、桃丸はまたうつら〳〵として、今其處に突ッ立つてゐた喜之はんの顏を、半ば夢の中に描き出してゐた。

頭の毛は薄いけれど、喜之はんはまだそんなに老人でもない。さうして年齢に比べては大きな娘があつた。今年十七で、細面の色の白い、喜之はんによう肖たおもざしで、頭の毛もさう薄くはなく、寺家で一二の容貌であつた。されば若い衆の品さだめにも上ることが多く、毎晩の夜遊に若い衆はてんやもん屋の床几の上で、お縫さんといふ名を流行唄の中へもぢつて入れたりした。

其のお縫さんが、十七の花の姿を、冬になれば鴨や鴛鴦の浮く赤松の大池に投げて死んだのは、この七月の土用の入りの日で、家々には腹綿餅が出來てゐた。お縫さんもお晝に腹綿餅を三つ喰べてから家を出て、其のまゝ夜になつても歸つて來なかつた。親一人子一人の家で、喜之はんは、役場から戻つて娘の身を案じつゝ、方々を探し廻はつた。温和しい質で、若い衆が夜遊びをするてんやもん屋などへは一遍でも寄り付いたことはなかつたが、喜之はんは丹念にそんな家まで一々尋ねて、

『ひよッと、家のお縫が來てやしまへんか。……』と、もう江戸辯どころではなく、太い地聲で訊いて歩いた。

喜之はんが自慢の、小ひさな眼覺まし時計が、欅の机の上で丑滿の二時を指すまで、喜之はんはたつた一室の狹い家を出たり入つたりしてゐたが、お縫さんは遂に戻つて來なかつた。

其の夜はまんじりともせず、翌くる日は夜の引き明けから、村のあるき夫婦を賴んで、山の中や川の端を探し廻はつてゐると、午後の三時頃になつて、白い浴衣に赤い帶の映え合ひのよいお縫さんが、俯向けになつて、大池の碧い水の上へ浮きあがり、晒したやうに美しく亂れ漂ふ長い髮の毛には、一筋の藻を引つかけてゐた。

朝から何遍となく、この大池の堤の上へ來たのであるが、お縫さんは底深く沈んでゐたのであらう。一晝夜すると一旦は浮きあがつてまた沈むといふ昔しからの言ひ傳への通りにして、父に其の淺ましくもまた美しい姿を見せたお縫さんは、やがて堤の青い草の上に、女郎花が一もと、ひよろ／＼と寂しく咲いてゐるあたりへ引き上げられて、水を吐かさうと父の手で、眞白なお腹を押へられたり、藁火で溫められたりしたけれど、手當の甲斐はなかつた。五六人の村人に混つて、手提鞄片手に駈け付けて來た坊主醫者が、仔細らしく丸藥を紫色に變つた唇の中へ押し込まうとしても、白い齒がチラと見えただけで、堅く結んだ唇は開くよしもなかつた。

「きんのは島田に結ふて、桃色の鹿の子懸けてはつたがなア。」と、近所に住む木挽の嬶は、眞ッ黑な瓢簞のやうな乳房をだらりとさして、背中で黑い洟を垂らしてゐる大きな子を搖ぶりながら言つた。

「坊んち、えゝもん見に行きなはらんか。若い別嬪の檢死や、滅多に見られへん。……目の正月しなはれや。……」と、役場の助役が、石段の下から聲をかけて呉れたので、桃丸は、

「一所に見にいてもだいでおまへんか。……」と、連れ立つてゐる巡査を憚りつゝ、助役に言ふと、

「あんたのこッちや、大目に見とかう。」と、助役は笑ひながら巡査を顧みたが、巡査も笑つて點頭いたので、桃丸はピリ／＼と破れかける縮緬の兵兒帶を浴衣の上に締め直して、檢死の一行に隨いて行つた。

群がつて來た村人たちを遠慮さして、檢死が青い草の上で行はれた。助役と巡査と喜之と醫者との四人が、美しい死骸を取り卷いて蹲踞むと、桃丸は其の横へ小ひさくなつて立つてゐた。助役に許され、巡査に默許されてゐるとは言ひ條、喜之はんや、遠くから様子を窺つてゐる村人たちに對してきまりが

わるく、居工合がよくなかつた。それでも其處を立ち退くことは殘り惜しくて、一二尺後退りして、長く伸びた薄の脇に足を踏み締めた。

「あんたはお寺はんや、其處に居とくなはれや。……あんたが口のなかで念佛申しておくなはつたら、この娘も浮ばれるやろ。」と、薄羽織の上から白い兵兒帶の透いて見えてゐる助役の聲が、この場の靜寂を破つたので、喜之はんも萎れ切つた顏を此方に向けて、淋しい微笑を浮かべつゝ、桃丸に默禮した。

桃丸はもう誰れに遠慮も要らんと思つて、また少しばかり死骸の方に近寄つたが、醫者は先づ水の滴る赤い帶を解いて、お縫さんの浴衣を脱がさうとしたが、其の途端に長い〳〵袂から、美しく磨いたやうな石が三つ四つ、ころ〳〵と出たので、人々は今更に哀みの眼をしばたゝいた。

小ひさな人形でも扱ふやうにして、醫者は死骸を改めつゝ、古風な矢立を取り出し、青い罫紙へ檢案書を書いてゐると、其の圓い背中へ、曇つた空の黑い雲の中から出た西日が、劇しく照り付けたので、喜之はんは周章てゝ、持つてゐた繻子の蝙蝠傘を擴げ、娘の亡骸と醫者とに翳しかけた。

「妊娠四ヶ月の見込み……」と、檢案書の末へ、醫者が默つて書き付けたのを見た人々の顏には、驚きの色が一時に浮んだ。喜之はんはあらぬ方角に眼をそむけて、口をもぐ〳〵さしてゐた。――

病の苦痛を忘れて、眞夏の日の痛ましい出來事を、こんな風にいろ〳〵と夢とも現ともなく思ひ浮べてゐると、桃丸はいつしか秋の半ばの冷かな時候から金を溶ろかすやうな眞夏の暑さに後返へりしたと覺えて、身體中が一時に火照つて來た。

ハッと氣が付くと、お縫さんの美しい亡骸があり〳〵と横はつてゐると思つたあたりは、丁度病室の

床の間で、望玉泉の筆になつた帆舟の幅が懸つてゐた。父が遺愛の掛け物も、何時かは米代になるであらう。いや／＼自分がこの病氣では今度いよ／＼藥代になつて了うであらうと、悲しいことを考へて、其の繪を見つめると、長い綱で川舟を曳いてゐる簑を着た男の眼が、まさしく自分を見て、別れを告げてゐるやうであつた。

眼を瞑つてうと／＼とすると、またお縫さんの眞ッ白に美しい亡骸が、あり／＼と眼の底から浮んで來る。

溫和しくて、固い一方と譽められてゐたお縫さんの、妊娠四ヶ月といふのは、皆んなが不思議に思つてならなかつたけれど、よく視ると、素人にも分る身持ちのしるしが現はれてゐたのと、それをほかにしては身を投げて死なねばならぬ譯がないらしいのとで、到頭さうと決まつて、

「あの娘可哀や、……白歯で身持ち。……」といふ唄が、この夏から村に流行り出した。

お縫さんの戀の相手といふのを、寺家の衆はさま／＼に噂したけれど、一つも確かなのはなかつた。宛然月夜に釜を抜かれたやうぢやと言はれてる親の喜之はんにも、心當りが全くないといふのである。

自分こそ、其の戀の相手ぢやが、氣が付かんかい、と言ひたげな顏をする息子どんが、三人や五人でなかつたけれど、そんなのは兎てもあかんと人々に否まれた。

これはもう存じも寄らんところに相手があるに違ひないと、果ては桃丸が少しばかり疑ひをかけられた。「あの檢死の時坊んち一人がねきに居たやないか。」といふやうなことから、この疑ひが起つて、「喜之はんは知つてゝ知らん振りしてるんや。」とまで、突つ込むものも出來た。

「赤松の大池にや、大けなのしが居る。何んでも五尺からの鯡鯉ぢやけな。其の鯡鯉が雨の降る晩、八百屋お七の芝居に出る吉三郎みたいな風して、お縫さんの家へ來た。其の晩は喜之はんが役場の宿直で、……」なぞと言ひ出すものも出て來て、「さうやら知れんなア。」と、合槌を打つものやら、「さうやつたら其の鯡鯉が大池へお縫さんを呼び寄せたんやろが、そんなら何んにも一旦沈んだお縫さんを浮かして戻す筈があろまい。」と、讃を入れるものやらで、惡い病の流行り初める頃まで、そんなことが村いッぱいの噂になつた。――

　桃丸はまた夢のやうに、こんなことを思ひ出しながら、高い熱の苦しさに、うーんと覺えず唸ると、何時の間にやら、あの坊主醫者が、今度は檢疫醫でなく、普通の診察に枕頭へ座り込み、「何うだすな、だいぼん苦しいやろ。」と、小指の爪を長く伸ばした白い手を出した。其の手が、この眞夏に赤松の大池の堤の女郎花が咲いたところで、お縫さんの白く美しい亡骸を撫でゝゐた時其のまゝの恰好であつたので、桃丸はブル／＼と慄へて首を縮めた。

　十ッさんの木を劊る斧の音が、まだ丁々と聞えてゐる。

六

　其の夜の夢に、亡き父の姿があり／＼と桃丸の枕頭に現はれた。熱に浮かされてゐる桃丸は、それが夢であるといふことを意識しながら、矢張り夢を見てゐるので、同じ夢なら、父の姿なんぞよりも、あの白く美しいお縫さんの亡骸を、もう一度見たいもんや、なぞと思つたりした。

「藥は利かん、酒を飲め、酒を、……」と、父の聲がまざ／＼聞えたやうな氣がした。さうしてそれか

らはもう何も夢に現はれて來るものはなく、惡魔の苛責のやうな病熱の苦悶が、五體を弄るばかりであつた。

夜が明けてから、「あの人」が枕頭へ來た時、亡き父が夢枕に立つたことを告げると、氣の故か「あの人」は此頃父のことを言はれると、おど〳〵して顏色を變へるやうであるが、それでも力强い聲で、

「おでさんが、あんたの病氣を心配して、早やう癒るように敎へて吳れはつたんやら知れん。……おでさんのお告げの通り、お酒ちいと飮んで見なはれ。」と、早速臺所へ立つて、節用集が飮み殘したのを盃に一つ持つて來た。

桃丸は其の酒をグッと一つ飮むと、咽喉から腹の底へ、ずうつと父の惠が染み込んで行くやうでお腹が急に溫まり、催してゐた便意も一時忘れて了つた。

「こらよい、……よう利くなア。」と、桃丸は感謝の聲を揚げたが、何うしたことか、兩の頰へ熱い淚がハラ〳〵と流れた。

「おでさんは、お酒が好きやつたよつてなア。坊んにもお酒飮まして、病氣癒して吳れはるんやろ。」とお加代は言ひ〳〵立つて、臺所から燗德利を持つて來て、盃と一所に枕頭へ置き、「あんまり餘計飮んでも可かんやろが、ちいとづゝ、ちよい〳〵飮みなはれや。……けど、お醫者が來た時は隱しとかんとわるいやろ。」と、眼をくしや〳〵さした。

さう思つて見ると、少し膨れてゐて、妊娠四ヶ月ぐらゐらしいこの人のお腹が、桃丸は急に氣にかゝつて、お緖さんの痛ましく美しい最後と思ひ合はせ、胤の知れぬ腹の子から、自分の家にも何か大きな

騒動が猛獸の如く歩み寄つてゐるのではあるまいかと、心配に堪へられなくなつた。

少しづゝ酒を飲んだ故でもあつたらうか。桃丸の病は思ひの外に早く恢復期に向つた。

一の檀家の國松はもとより、節用集も役場の手合ひも、皆傳染を恐れて見舞に來なかつたが、十吉と三莊とは毎日のやうに來て、

「えらいことをしなはるなア、そらいきまへんで、この大病で、しかも腹がわるいのに、冷酒飲むなんて、……」と、叱るやうに言つた。

けれども、桃丸は盃に一口酒を飲む度に、病神が一寸づゝ追ひ立てられて行くやうな氣がしてならなかつた。

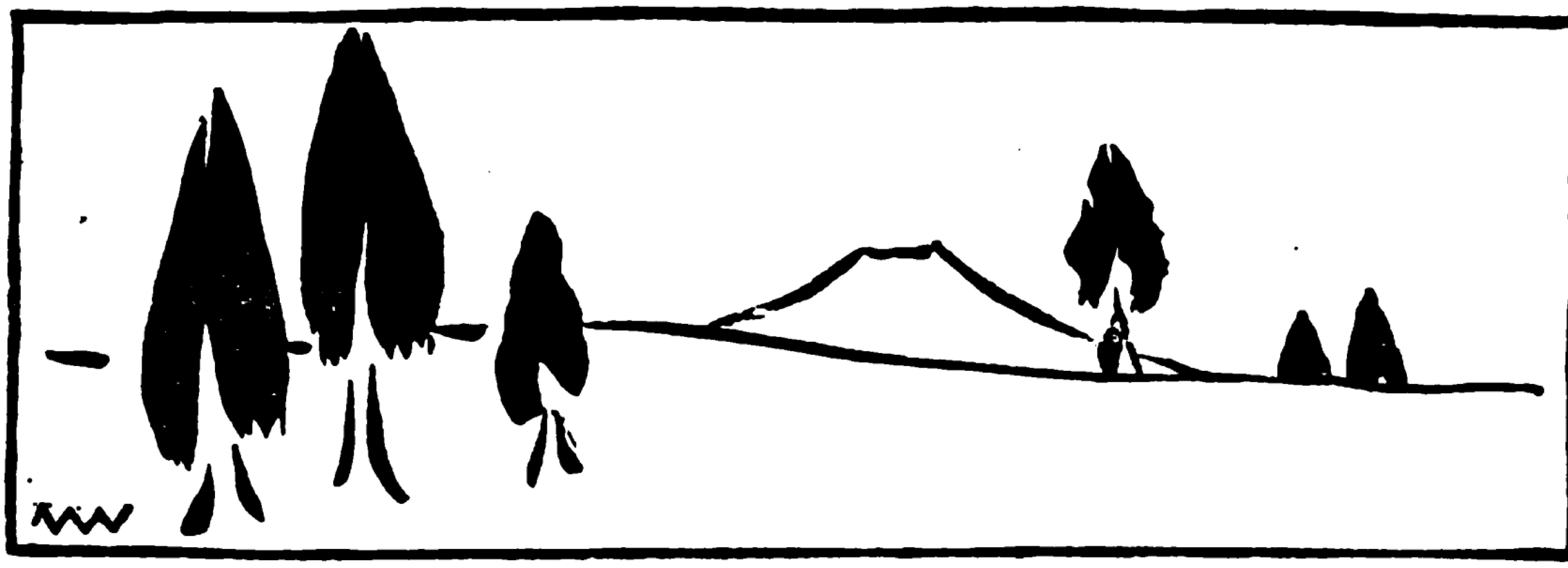
幾度かごだはりのあつた末に、村の避病院は、到頭村會の決議を經て、光格寺と川を隔つた對ふがはの、小山の上に建てられることになつた。

桃丸は病の枕に、避病院を建てる大工の鑿と槌との音を聞いてゐたが、其の棟の上る頃には、桃丸の枕も上つた。さうして村中にはもう悪い病の患者は一人もなくなつて、赤く熟した柿の實が、高い梢に花の如く美しかつた。

「坊んの病氣も癒りましたよつて、……」と、お加代は始終羽織の袖にお腹を掩ひ隱して、一昨貸家の方へ歸つてゐたいと言ひ出した。何も知らぬ虹香は、

「阿母さん、いつまでも此處に居まへう。……」と、泣き聲を出した。

節用集は立て腐れにならうとする避病院の留守番に住み込んで、窓から光格寺の庫裡を眺めながら、桃丸の姿を見出すと、頻りと鐵砲を打つ眞似をしたり、弓を引く恰好をして見せたりした。（完）



山の鳥小屋

田山花袋

一

山奥にあるこの溫泉場は、客と言つても、大抵は田舍の百姓か、鑛山の職工の家族達か、でなければこの溫泉の効能の著しいのをかねて知つてゐて每年態々遠くからやつて來る人達で、都會の客などは見たいにも見られなかつたが、それでも夏は二棟の家屋が一杯になる位にいつもぎつしり詰つた。

「お盆がすんだで、Ｋまで行つて來べいか」かう言つて、さういふ人達は、姉妹や夫婦や親子や近所の人達を誘ひ合はせて、これが一年中の一度の樂みと言つたやうにして、嶮しい山坂、恐ろしい淋しい谷合、深い暗い密林の中を通つて、米や味噌を背負つて、遙かにこの山又山の奧までやつて來た。

「おめいさま、去年は何うさつしやつた。待つてゐやしたぞえ」

かう一人の百姓がかねて見知つてゐる中老婦に聲をかけると、

「去年はな、忙しうてな、何ないにも出られんで……。さうだつてな、あのお嚊連は來たつてな。今年はまだ見えんかな」

「何うも、逢ふ人に逢はねえと、さびしいもんでな」

「ほんにな……」

汚ない浴槽の中に浸りながら、又は上から落ちて來る湯瀧の方に束ねた髮の頭を持つて行きながら、さういふ人達は話した。萎びてだらりとした乳、荒れた色の褪めた唇、鐵色をした毛の深い脚、あるものは柄杓で湯を頭から懸け、あるものは長湯に赤くなつた體を疲れたやうに其處に横へてゐたりした。かれ等は互にかれ等の生活の話——養蠶、田植、麥の出來、一年間の小さな悲喜劇などに就いて話した。時にはまた去年來てこの春死んだ爺などについて話した。「さうかな、あの達者な爺さんが、……わかんねえもんだな。ぽつくり死んだかな。面白い爺さんだつたがな」かう言つて、その元氣な顔やら滑稽な身振やらを思ひ出すやうにした。湯瀧の灑り落ちる音、それをも掩ふやうにして、浴槽のすぐ下を流るゝ谷川の瀨の音が高くきこえた。狹い谷を蓋するやうに繁つた深樹の間からは、鮮かな碧い夏の空が覗かれた。

「えらい別品さんのお嚊つれて來たな、此處の息子は——。」

「ほんによ……あんでも、吉原のおいらんださうだぜ」

「吉原のおいらん！」たまげたやうに中老婦は言つて、「道理で、別品さんなわけだ。それにしても、よく、こねえな山の中さやつて來たな」

「息子が伴れん來たんかな」
「何でも、伴れて來るについては、面白いことがあつたんぜや‥。あの上さん、あゝ見えて如才ねえだよ。山が好い、かういふ山ん中ぁ好い。東京なんかよくよくはア厭だなんと言つてやした‥‥。何でもはア、此處の息子どん色でもなんでもなかつたんだとせや。何でも息子さんのつとめてゐる大きな商人の一番番頭の色だつたんとせや。それがな、ひかしてえ、圍つて置いたんださうだが、世間が喧しうて、それを圍つて置いては、番頭どん店へすまねえと言ふで、それで息子どんに呉れたんだとせや――」
「よく知つてるな、おのし‥‥」
「だつて、あの上さん、自分でさう言つてゐたでな」
「ぢや、此處の息子どん、旨いことをしたわけだえ」
こんなことを言つてある爺は笑つた。
「それにしても、よう來たな。こんな山ん中さへ？」
「ほんにな‥‥」
こんなことを人々は話した。
實際、この夏來て見ると、二三年ゐなかつた息子が歸つて來てゐて、おまけに綺麗な、山の中の人とは何うしても思はれない上さんがゐるので、それが一方ならず浴客達を驚かした。それに、二十八九になるその上さんは、都會の人とは思はれないやうに、客にも應對し、家事にもまめまめしく働き、さ

うした田舍の浴客達にも愛嬌ある笑顏を見せるので、帳場も廊下も今までに見ぬやうな賑かさと明るさとを持つて來た。夜は大勢客を集めて面白い廓の話をしたり三味線を彈いて聞せたりした。

浴客達は其處此處でその上さんの明るい顏に出會した。亭主と何か話してゐることもあれば、舅と睦しさうに笑つて話してゐることもあつた。家でも上さんは評判が好いらしかつた。『まア、な、これで、息子も家に歸つて來たゞで、落附いてゐて呉れべ。俺達は、さうすりやもう村に歸つて、あつちの方のこともせにやならぬ。あつちの方は、若いものばかりだで」などゝ家の老主人はその老妻に言つたりした。朝などは、その若い上さんは赤い襷をかけて、先に立つて精々と働いた。

二

都會の話、都會中の都會である廓の話は、すべて山の中の人達の耳を驚かすに十分であつた。明るい灯、大きな三階建の家屋、そこに湧くやうにきこえる三味線や鼓、夜櫻の美しい中に繪のやうに並んでつけられた電燈、その中をうかれて歩く男、張店に十人も二十人も人形のやうに美しく並んでゐる女――さうした光景は、山の中の人達には、別の世界のやうにも、極樂か何ぞのやうにも思はれた。美しいもの、善いもの、旨いもの、面白いもの、人の魂を蕩かさずには置かないもの、さういふものが到るところにあるのに、それを捨てゝ、かうした山の中に來たと言ふことも、不思議のやうに思はれた。

かれ等の群は、多くは自分の生れた村で成長し、妻を持ち子を持ち孫を持つてそして老いて行つた。かれ等の眼には山が映り、山畠が映り、水田が映り、古い先祖代々の家屋が映り、いつも變らない村落のみが映つた。中には、町に行つて、そこに僅かに殘つてゐる女郎の張店を見たことも一度や二度はあ

るけれども、その町さへ山を越し、谷を越して行かなければならないので、滅多に出かけて行つて見たことはなかつた。かれ等は多くは袷でその都會の廓なるものを見た。しかも、昔の昔の袷か何かで‥‥。

「矢張、あんなに高い下駄を穿くんかな。さうかな」

など丶老婦は感心したやうに言つた。

「一度は行つて見ていもんだな」

こんなことを若い百姓が言ふと、

「お前達はな、若いから、いくらも行かうと思へば行けるだが、俺アなんか、年を取つたで駄目だ。來世はな、もつと東京に近いとけへ生れべい。せめてな、近いところにでも‥‥」から爺は言つた。

「さうかな、大きな家は一夜に一軒で三千圓‥‥三千圓ッて言へば百兩が三十だな。それが一夜だな。廓では金は羽が生えて飛んで行くぢやな」から言つて眼を丸くするものもあつた。

これに引かへて、東京から來た上さんの眼には、今まで夢にも思はなかつたやうな山中のさびしい別天地が映つた。『山の中の方が靜かで好い‥‥。もう東京には飽々した。東京の忙しいのや喧しいのには飽々した。え、さういふ處の方が好いんです。さう言ふところに行つて、じつと落附いてゐたら、何んなに好いでせう』から言つて、自から男に縋るやうにして、自分の數奇の一生をこれでおしまひにして了ふ氣で、進んでこの山の中に入つて來た。かの女は汽車をあるさびしい停車場で下りて、そして車で一日搖られながらやつて來てある處で泊つた。そこは最早既に好加減の山の中で、旅舍の欄干から覗くと、下には大きな小さな石のごろごろした川が凄しく白く流れてゐて、危い一本橋がそこにかゝつてゐるの

が見えた。そこから車で又一日やつて來た。もう大抵近いだらうと思つたが、それは空頼みで、そこから、車がもうこの先は通らないといふ處から、結附け草履を穿いたり、馴れぬ草鞋を穿いたりして、かの女は猶ほ二日歩かなければならなかつた。大きな山は大きな山に續いた。深い谷は更に又深い大きな谷を孕んで行つた。こんなところに一生を送つてゐる人もあるかと思はれるやうなさびしい村などもあつた。この長い山路を通る間、かの女の胸には、今まで經て來た苦樂が、波瀾の多い數奇な半生が、幾人となく心を注いだ戀の虚僞と誠實(まこと)とが、繪卷でも展けて見てゐるかのやうに歴々と映つて見えた。妾としてすら圍はれてゐることの出來ない身を悲しんだ揚句、『女として亭主を一人持つのがこの世の慣習、何んな山の中でも好い、何んな苦勞をしても好い、』かう言つて息子に貰はれて來たけれども、途中では、自分から自分の生涯が悲しくなつて、そして涙が人知れず袖をぬらした。かうした山の中に入つてはもうあの人にも一生逢ふことも出來ない。あの人にも逢ふことが出來ない。かう思つたかの女の眼前には、更に盡きない山と山との深く重り合つてゐるのが見えた。『これも縁だ、因縁だ……』かう思ふと、幼い頃、老祖母の寢物語に聞いた阿古屋姫の話なども思ひ出された。姫の縁は深山の中の炭燒藤太に結ばれてあるために、姫は上方から親に離れ肉身に離れて、幾日も歩いて、遠い遠いその山の中に行つた。そしてその山の中の小さな川を渡らうとして、水鏡に自身の姿の映つたのを見て、『おゝ恥かしい』と言つて顏を掩つたと老祖母は話した。そのお伽話がかの女の運命に似てゐるのであつた。しかし行き着いてからのかの女の心は落着いた。かの女はめづらしがられ、愛せられ、又大事にされた。初め行つた處は山合の古い昔の家であつたが、そこに十日ほどゐて、親類廻などをして、そして更に二里山奥にあるこの溫

泉場の旅舍の新しい主婦となつた。

三

「まア、さう、そんな山の中を、お嫁に來るのに、お前さん通つて來たの？」

「え……」

「一人ぢやないんでせう」

「一人ぢやないともね。兄弟だの、爺だのと一緒に！」

「馬も通れないの？」

「え……」

「で、旦那さんは知つてゐたの？前から？」

「山で二三度逢つて知つてはゐたがね」

「さむしくなかつたの？」

「山はさむしいとはちつとも思はない」

「矢張、馴れだねえ」

上さんはかう言つて考へるやうな顏をした。こゝから山を越して一七里、その間には人家は一軒もない。をりをり熊なども出る。路と言つても深く熊笹が繁つてゐて、馴れたものでなければ通るとが出來ない。その間を、花嫁子のその若い細君は、平生着てゐる山行衣とは違つた晴衣を着て、新しい帶をしめて、結ひ立ての髮を壞れないやうに手拭で蔽つて、親兄弟に伴れられて、そしてこの山奥の獵師の男

の許に嫁いて來たのであつた。若いその獵師の細君は、名をお兼と言つて、年は二十歲、山の中にはめづらしい容色好で、ぢきその川の向うに一軒小さな家を構へて、そこに亭主と二人住んでゐるのであつた。矢張、上さんの東京の話に魅せられた群の一人で、そのめづらしい話になると、極樂の話でも聞くやうにして、默つて凉しい眼を丸くした。

「二人きりで、あんなところにゐて淋しくないかね」

「別に、さむしくもねえ……」

「一人でもゐられるかね、あんなところに……」

「ゐるだとも……一人で。內で三日も四日もゐねえ時あるでな」

「さういふ時は何處に行つてゐるんだね、？旦那さんは？」

「山捗ぎせ」

「山は恐ろしいと思ふやうなことはないかね」

「さァね。ねえこともねえな。だからな、お上さん、俺ら鎌を放したことはねえだ。何處に行くにも、この鎌だけは持つて行く。ひよつとかしてな、魔物でもな、出ねえとも限らねえからな」から言つて、いつも腰にさしてゐる利鎌をお兼は見せた。お兼は何うかすると、曾て聞いた山の恐ろしい物語などを上さんにして聞かせた。その物語に由ると、山には種々な恐しいものがあるらしかつた。熊や猪は何でもないが、またまむしや蛇は一挺の利鎌で退治ることが出來るか、それ以外に種々な恐ろしいことがあるらしかつた。お兼は山の主の話をした。又眼に見えない山坊主の話をした。それは秋から冬になると

よくやつて來た。形は見えないけれど、湯に入りになど來るといふことであつた。そして山の人は皆それを知つてゐて、『また、淋しくなつたと見えて、山坊主が來た』などと平氣で話した。

『でもな、お上さん、わるとことをせへせにや、何にも怖いことはねえッてな。……』

などと言つて、じつと上さんの顏を見詰めた。

『秋から冬になると、それは山はさむしいぞな。お上さんなんか、とてもゐられねえぞ』

『困るねえ』

『その時は、元の東京さ、つゝ走るだ、なアお上さん。とても、こゝにはゐられねえ。寒くはなるし、お客はなし、湯はぬるくなるしな』

『その時分は何をしてゐるんだね、皆なは？』

『内なんか獵師だで、冬が挊き時だで、始終山に行つてゐるアな。それに、その時分にや、お上さんの家ちや村さ引上げるで、こゝには、俺達しかゐなくなつて了ふんだで』

『さうかねえ、よくゐられるねえ』

時には、上さんはその若いお粂の家に行つて見たこともあつた。その時は上さんは川に架けた一本橋を怖々ながら渡つて、熊笹の中を分けて行くと、其處に少し開墾した燒畑があつて、その一隅に掘立小屋のやうな小さな家屋が見えた。周圍は板で圍つて、中に入ると、大きな圍爐裏のある土間の向うに、筵を布いた一間があつた。そこには鐵砲だの、山刀だの、鉞だのが置いてあつた。

時にはお粂の亭主がむつつりして其處に坐つてゐたりした。髯の深い顏の中から大きな眼をぎよろつ

かせてゐるやうな男だが、それでもこの男が長年お兼を執心して、漸く昨年一緒になつたかと思ふと、上さんは不思議なやうな氣がした。それに山の中の人達は、途中などで逢ふと、女などには魂も消えるやうに恐ろしく思はれるが、實は存外やさしくつて親切で、質朴で、決してわるい心などは持つてゐないのであつた。「かうして一生を送る人達もあるのだ。……七里の山路を歩いて嫁に來て、かうした堀立小屋のやうな家に起臥して、そして春が來、夏がすぎて、一生經つて行つて了ふ人もあるのだ」かう思ふと、上さんには、その經て來た半生の數奇な經驗が、今更ながら歷々といつも胸に浮んで來た。男二人に女一人、女二人に男一人、さうした辛い經驗も、人間の魂をわざと玩具のやうに取扱つた墮落した稼業の辛さも、義理と人情との柵も、思ひ餘つて刃を肌に通すやうな苦痛も、何も彼も一切此處にはやつて來ないのであつた。かう思ふと、上さんの胸には、まだ廓に身を沈めない以前のある事件がはつきりと浮んで見えた。それはかの女がまたH町で春をひさいでゐる頃のことであつた。かの女は惚れた男に捨てられた。その男のためにはかの女は尠なからぬ金を見ついだ。その男のためにはかの女は他の男の魂を玩弄具のやうに取扱つた。ある男はそのためにかの女の無情に失望して病を得て死んだ。母親や兄弟に不義理をしたのもそのためである。それほど盡したのに、それなのに、男に捨てられた。男は他に女を拵へた。その忿怒と怨恨とに滿されて、半ば喪心して、かの女はある日明るい川の畔を歩いてゐた。帆や小蒸汽などが通つた。渡船には人が大勢乘つてゐた。かの女の歩いてゐるすぐ前には、大きな帆が通つてゐた。ふと渾身に漲つた忿怒と怨恨とが一杯になつて、そこにあつた渡頭の斜阪の路からかの女はふら〳〵として水に飛び込んだ。かの女ははつと思ふと同時に、一度深く水の底に沈んだ。再び浮び

上つた時、もし其處に大きな帆を張つた船が通つてゐなかつたなら、かの女はそのまゝ其處にその一生を終つたのであつた。かうした山の中に來るやうなこともないのであつた。かの女は今それを思ひ出して不思議な氣がした。その時扶けて呉れた船頭の痘痕面がはつきり浮んで見えるも不思議であつた。

それにも拘らず、お兼は頻りに東京の話を聞きたがつた。ある時には、「生中東京に出たいなんて思ふものぢやありませんよ。賑かには賑やかだし、面白いにも面白いが、裏にはまた辛いところもあるからね、お前さん。此處にゐれば何でもないけれど、東京では、お前さん、食ふことからして先に心配しなけりやならないんだからね。東京では、田舍のやうに、困つたものを皆なして心配して呉れなどはしないからね」かう言つて上さんはお兼の若いあくがれた心を戒めた。

「それは辛い辛いことがあるから……」

「辛いて、何んな……」

「それはちよつとは言へないけども……」

「話してきかせて下せいよ、な、お上さん」

かうお兼は子供のやうにまつはつて言つた。

四

夏は賑やかに面白く過ぎた。山の中なので、東京のやうに暑いことはなし、蚊はゐず、蚤はゐず、蠅はいくらかゐるけれど、山が深く住民が少く、養蠶などをするものがないので、それとて氣になるほどではなかつた。谷の岸からは、齒に泌みるやうな冷いたい水が滾々として湧き出して、それに里から運

んで來た西瓜や甜瓜を浸して食つた。

二棟の家屋――そこからは男女の浴客がいつも手拭を下げて、だらけた風をして下りて來た。一人として田舍臭くないものはなく、男はふんどし一つ、女は二布だけで平氣で其處等を歩いた。かれ等は皆な自炊をするので、客としては少しも手のかゝるやうなことはなかつた。室を借して勝手道具を一揃ひ出してやつて、夜の蒲團さへ出して宛がへば、それでかれ等は十日も二十日もそこにごろごろしてゐた。かれ等は茶代を置くでもなければ、世話になる女中に金をやるでもなかつた。自炊をするために出來てゐる圍爐裏の傍からは、常に粗朶を燃した薄い白い烟が颺つた。

夜は浪花節だの義太夫だのが其處此處で始つた。それは拙くつてとても聞いてゐられないものであるけれど、それでも、誰かそれを始めると、浴客達は皆なぞろぞろとそこへ集つて行つて聞いた。退屈なかれ等に取つては、どんなものでも面白かつた。若い上さんも、始めの中は、面白がつて、三味線などを彈いたけれども、後には面倒になつて滅多にそれを手にしなかつた。

息子の父親は、曾て江戸へ出て、三四年其處でお店奉行しただけあつて、かうした山の中にはめつらしい物のわかつた粋な爺であつた。爺は矢張拙い節廻しで、義太夫などを語つた。「お政どの、一つ糸を彈いて與れやれ」などゝ笑ひながら所望した。

若い上さんには、息子の家柄や、土地での勢力や、財産や、氣分や、さういふものが段々飲み込めて來た。成ほど息子の言つた通り、田舍に歸つてゐれば大議の息子殿ですましてゐられるのであつた。又若い上さんもお上さまとして村の人に立てられるのであつた。かうした山の中ではその前半生が泥水

に浸つた女であるといふことなどは、何でもなかつた。寧ろめづらしい眼新しいものとして歡迎された。それに、山も澤山持つてゐれば、林も澤山持つてゐた。一生かうして食つて行くのには何の差支もない。今まで經驗したやうな辛い悲しい經驗は、もう何處からも襲つて來ない。おとなしく息子と同棲してさへすれば、それでかの女の後の半生は靜かに經つて行つて了ふのであつた。しかし、夏も半ばをすぎた頃から、かの女の顏には、次第に冴えない色が上つて來てゐた。食ふもの丶ないのと、周圍に自分に似た人間のゐないのと、單調な平凡な生活とが漸くかの女を退屈させた。かの女は東京にゐた頃の昔の夢から覺めて、谷川の音に今のさびしさを染々と感じた。

來た當座に拵へて貰つた此山特有の餅ももうめづらしくなく、川で獲れる岩魚やかじかも拙い、蕎麥も黒くボキボキしたのが厭であつた。かの女は淺草の仲店の天ぷらや、鰻や、鳥肉や、又は紅梅燒や、餅菓子や、甘納豆などを思つた。つゞいて賑やかな夏の夜の賑はひが眼の前に浮んで見えた。氷店、明るい灯、ぞろぞろ通る涼客の群、白い派手な中形を着て、髮を綺麗に結つて歩いてゐる人達、袖と袖とが合つたり肩と肩とが打突つたりしてそれから起つて來る色戀の氣分、さうした都會が漸くかの女に蘇つて來た。

五

三人づれの學生は、草鞋に糸立といふ輕快な扮裝で、谷川に添つた路を山の方から下りて來た。

丁度、川の緣で洗濯をしてゐた上さんは、それを迎へて、

「もう、歸つて來たんですか。お早いですね」

「はア、山の上まで行かずに、よして來た。中々大變らしかつたから」

から一番背の高い色い淺黑い學生は言つた。

「でも、Nまでは行つたんですか」

「ヱ、Nまでは……」

「ぢや、湯澤の吹き出す穴は見て來ましたか」

「見て來たけども、此間の雨で流されて、まだいくらも出來てゐなかつた」

「さうですか、それは殘念でしたね。……まア、勞れたでせう。早くお湯にでも入つてお休み」

かう言つて上さんは好加減に洗濯をやめて、そして上つて來た。そして、女中に、菓子を一皿と、此間里から來た水蜜桃を十ほどその座敷に持たせてやつた。

この山の中にかの女が來てから、宿帳に東京とつけた客は、この三人の學生が始めてであつた。昨日の夕暮に、嶮しい山路に疲れたやうにして、その三人はやつて來たが、それと察した上さんは、普通の客以上にかれ等を歡迎して、「まア、東京ですか。東京は何處ですか。本郷ですか。まア、なつかしい。東京ツて聞くと體が震へるやうな氣がしますよ」とか何とか言つて、ちやほやした。昨夜は上さんはわざわざ此方から出かけて行つて、まだ一年と經つてゐない東京を、もう五年十年も離れてゐるかのやうにしてなつかしがつた。「さうですか、こんな山の中に、よくそれでもお出かけになりましたね。さうですか、探險に……。まア、そんな沼がまだこの山の奥にあるんですか。まア、そんな穴から湯がふき出すやうなところもあるんですか」こんなことを言つて、上さんは長い間三人のゐる一間にゐた。

上さんは自分の遠い親類が本郷にゐる話もすれば、かうして若い身空でこんな山の中に好き好んで入つた來た話などをもそれとなくその學生達に打明けた。東京の賑やかな噂は、それからそれへとつゞいた。學生の一人がいくらかは廓のことも知つてゐるのについつり込まれて、自分の前生をそれとなく悟られるやうな話までもした。もう夏もすぎて、山にはさびしい秋風が立ち始めた。田舎の米味噌連ももう大抵は歸つて、室には五六の湯治客が殘つてゐるばかりであつた。朝夕は單衣では肌寒く、空は碧く澄んで、前を流るゝ谷川の音にも、何處となくさびしい氣分が添つた。學生達が山から歸つて來た日の夜にも、上さんは一時間ほど其處に行つて話した。

今にして考へて見ると、自分が何うしてかうした山の中に來る氣になつたか、それが上さんには疑はれた。無論、かの女の數奇の半生がさう言つた心を起させる大きな原因にはなつてゐたに相違ないけれど、その山の中がかうしたひどい山の中だとは上さんは思つてゐなかつた。さうすると、此處には矢張自分の不仕合、自分の不運が矢張今でもその身の上に纒り附いてゐることを思はずには居られなかつた。散々世話を燒かせた母親、それでも生きてゐて呉れたならば、あの時の無謀な自分の考をとめて呉れたであらうけれど、同胞では、もうそれほど深くかの女のことを考へては呉れなかつた。その證據には此間も手紙をやつたけれども、碌々その返事さへも呉れなかつた。

今では日毎の生活が退屈で退屈で爲方がなかつた。此頃は老主人達は村の方へ歸つてゐるので、毎日若い亭主と鼻をつき合はして暮してゐるが、――若い亭主は上さんの退屈らしい氣分をそれと察して、いろいろちやほやして呉れるけれど、上さんには却つてそれが煩さく感じられて來た。大きな鼻、脂ぎつ

た赧ら顏、山に歸つて來てから、一層亭主の顏は田舍臭くなつて見られた。『何うして、あの時、かうした男と一緒になる氣になつたらう』かう思ふと、世間ばかりをかねて、自分のことを少しも思つて吳れない番頭の薄情な鼻の先に、さうした決心を打突けてやらうといふ心で一杯になつてゐる淺はかな自分を上さんは見た。

上さんは學生の一人に、廓のことなんかいくらか知つてゐる方の一人に、大音寺前に住んでゐるをばさんの家に行つて、何うか、私がかうして困つてゐる話をして吳れなどと賴んだ。そのしるしとして、かの女は短かい手紙を書いて渡した。

それに、上さんは學生から山を出て行く路をいろいろと訊いた。『さうですか、あつちをぐるつと廻つて入つて來たんですか。それでは遠い筈だ』こんなことを言つて、學生達は持つてゐる地圖をひろげて上さんに見せた。學生達は山越しに來て、そしてまた山越しに歸つて行くといふ話であつた。『そら、御覺なさい。こゝをかう行くんですよ。こつちから來れば、かう遠廻りをして來るのを、此處をかう眞直につゝ切つて行くんです。だから近いんです。……さア。しかし、女にはとても駄目だな。案内するものがあつても駄目だな』などと學生は言つた。

『さうさな、これからNの鑛山を越して、Uまで八里、もう少しあるかな。何アに、途中で迷ひさへしなければ、そんなに大變でもないがな』

もう一人の學生はかう言つて地圖を手にしてそれに見入つた。後には、上さんは、『本當に、貴方方に一緒に伴れて行つて貰ふと好いんだけども……』半は眞面目に半は戯談のやうにして言つた。

その夜は泊つたが、あくる朝は、早くから起きて、學生達は出發の準備をした。かれ等にしても矢張案內者を一人伴れなくては危險であつた。かれ等は村の獵師の一人にN鑛山まで一緒に行つて貰ふことにした。大きな結飯、それを銘々に横に背負つて、途中に水がないからと言つて、水筒に水を一杯滿した。かれ等は脚絆草鞋に身を固めて、猶他に二三足草鞋を腰につけたりした。

上さんは、帳場から店先に出て頻りに何彼と世話をしてやつた。

「ぢや、好うがすか。早く行きやすべ。俺ら、歸つてから、まだ仕事があるでな」

から案內者の獵師に促されて、學生達は杖をついて出かけた。

「其處まで、川の縁まで」

から言つて上さんは送つて來た。

「何アに、Nまで行きさへすりや、あとは一本しきや路はねえから、迷ふやうなことはねえだ……」

こんなことを言ひながら獵師は先に立つて步いた。

やがて川にかけた一本橋のところへと來た。

「ヤ、大變世話になりました。それぢや左樣なら……」

「左樣なら」

「お上さん、乾度行きますからね。ぢや左樣なら」

から言つて、郞のことを知つてゐる學生を先に、あとから二人の學生が續いた。そこに立つてゐる上さんは、橋を渡つて、一同の段々向うに步いて行くのを見送つた。始めは振返り、振返り、手巾などを

振つてゐたが、その一行の姿は、やがて草に隱れ、林に隱れて、遂にはそれも見えなくなつて了つた。あとには依然として山が聳え川が流れてゐるばかりであつた。上さんは何とも言はれないさびしさを胸に抱きながら、喪心したやうにして、家の方へ歸つて來た。

六

それからはもう再び上さんは東京の人の言葉を耳にしなかつた。秋が來て、やがて山の湯も段々淋しくなつて行つた。二棟の家屋はがらんとして、唯一隅に山の村の夫婦連が一組二組あるばかり、それすら歸つて行く頃には、山はもう寒く、崖のところどころに赤い紅葉などが見えて、朝は冷めたい水霜が下りた。ある時は雨雲が蓋をするやうに深い谷を蔽つて、三日も四日も雨がつゞいて降つた。前の谷には濁流がすさまじく漲つて、女の心にも、世界が終りになつて行くかと思はれた。亭主は亭主で、山海嘯でも起つては大變だと言つて、村の人夫達を相手に、濁流の漲つて來るのを向うに廻すための工事に朝から夕まで從事した。

何の因果でかういふ眼に逢ふのかと思ふと、上さんの胸には、今まで關係した、又は今まで騙した男の心の數々がはつきりと浮び出して纏りついて來るやうなのを感じた。生靈、死靈、さういふものがこの廣い天地に漲つてゐて、そして自分をかう苦しめるのであらうと思はれた。それに、深い山、何うしても出ることの出來ない深い山が怖しかつた。それに就いては、かの女はいろいろに考へもし、思ひもし、計畫もして見たのであるが、然し何うしてもそこからは脫却することは出來ないらしくかの女には思へた。一人では無論駄目、さうかと言つても好加減な人を賴むわけには行かず、こつそりぬけ出して

行つても、この山路では、追手がかゝればすぐ捕へられる。一度は東京にあくがれたお粂を誘ひ出してそれと一緒にと思つて計畫をして見たけれど、却つて自分の企てが見透かされるやうな氣がして、中途で止した。ある時にはいつそ亭主を欺いて引出して、そして東京の眞中でそれをまいて了はうかとも思つて、いろいろにして誘つて見たが、何う說いても、亭主には再び東京に出る樣な意思のないといふことを發見して、かの女は失望した。さうかうした中にも、山は日増にさびしく寒くなつて行つた。時には客が一組もないやうな日もあつた。大勢の百性達の肩やら頭やらにかゝつた湯瀧は、徒らに廣い浴槽にドオドオと音を立てゝ落ちてゐた。

學生達の持つて行つた手紙も何うなつたか、竟に竟に音沙汰もなくて過ぎた。

もう奥山には雪も來たといふ頃であつた。ある日近い方の浴舍の一間に、近所の鑛山を視に來たといふ四十一二のでつぷり肥つた男が來て泊つた。何でも奥州の方の生れで、言葉にも何處か訛があつたが、まづい洒落などを言ふ男で、下つた眉、開いた鼻、額は狹く、髮にはもういくらか白髮が雜つてゐるのを上さんは見た。かれは古い手提鞄を常にその傍に置いて、そこから地圖やら、鑛區を描いた紙などを出して見ては默つて考へ込んだ。最初の日は、N鑛山附近まで行つて、日が暮れてから歸つて來た。翌日は會津境の山を見に行くのだと言つて出かけた。

さうするより他に仕方がないと思つた。かう思つた上さんには、急にある計畫がその胸をついて上つて來た。さうでもしなければ、とてもこの山の中から出ることは出來ない。冬になつても駄目である。雪に埋められてこの山の中に悶死して了ふばかりである。しかしこんなこととは夢にも知らずに、山の

中に一夜を過した男はやがて歸つて來た。

上さんは急にちやほやした。女中の代りに自分が膳を運んで行つたりした。菓子や菓物などを持つて行つてやつた。幸ひにも亭主はその頃、蕎麥の收穫が忙しいので、家につかつてゐる日雇取と一緒に遠い山畠に行つて、留守の時が多かつた。上さんは長い廊下を膳を運びながら、『あんな男――あんな男に』かう思つて舌打をした。

東京にさへゐれば、稼業をしてゐなくとも、さうした男などには眼も呉れなくつても好いのであつた。ある位置からある位置に達するために、男から男へと橋渡をしたことは、これまでにも度々經驗したけれども、その橋渡しにすら、今までかの女はさうした男を使つたことはなかつた。あんないやな男に身を任かせたことはなかつた。上さん又舌打をした。

しかしそんなことを言つてゐられない今の場合であることを上さんは考へた。

晩酌の時、上さんは傍についてゐて酌をした。

『おまへさん、此處の何だね、女中かね』

『さう見えて？』

『さうは見えないけれども……あまり如才がないから……』

かう言つて男はにやにや笑つた。

『もう、少し持つて來ませうね』

『もう澤山だ……』

『そんなことを言はないで……』

上さんの美しい眼は、田舎の鑛山師の心を奪ふのに手間暇は要らなかつた。鑛山師は不思議のやうな又は思ひもかけない賜が急にその前に湧き出したといふやうな、しかもあまりの好い事にいくらか疑を挾んだといふやうな顏の表情をして、ひき入れられたやうにして上さんの若い艶ながし目を見た。

『なアに、Uまで行くな、わけはねえ。一日かゝりや行ける。さういふところは、私なんか始終歩いてゐるから、よく知つてゐる。』などと言つて、鑛山師は鞄の中から地圖を引張り出して見せた。

『俺ら、金なんか持つてゐないぞ！』怜い薄情な男の言葉だとは思つたけれど、それ以外に目的のある上さんは、強いてそれを押へて、男の方にその柔かな膝を寄せて行つた。

始めは男はさうした女の行爲を不思議に思つてゐたが、女の希望が次第に飲み込めて來るやうになつた時には、男は既に女の情の深く其身に絡み附いて來てゐるのを感じてゐた。

『そんなことは何でもない、わけはない。好いとも、好いとも……』

かう男は醉つて言つた。

鑛山師はさうした面白い事件が不意に湧いて起つて來たにも拘らず、毎日毎日山を見に一里二里の處へと出かけて行つて、夕暮には歸つて來て、その浴舍の一間に三日も四日も滯在した。

『お歸んない。今日は早う御座んやしたね』

かう言つて、上さんは其處に茶や菓子を持つて行つた。

その男のゐる二階の一間の灯は、帳場や店の處からよく見えたが、それを上さんは望みながら、やが

て山を出て行く時の支度を何彼と心懸けた。何うせ大したものは持つて行けない。着物なんかは大抵置いて行かなければならない。その代りに、それを金にして持つて行つてやるつもりで、上さんは成たけ多く金を手元に集めた。金の指環や時計やその他の貴重品は、皆な小さな信玄袋の中に入れた。亭主はそんなことは夢にも知らずに、一日山畠で働いて來て、疲れた體を湯に入つて、そしてぐつすりと若い上さんと一緒に寢た。

昔の稼業の生活は、再び上さんの身に必要となつて來てゐた。それがこんな山の中で、そんなことは夢にも想像されないやうな山の中で……。上さんは一度寢た身をそつと起した。亭主が眼の覺めてゐる時には、「どら、一つ湯にでも入つて來て寢やう」などと言つて、そして草履を突かけて、長い廊下を風呂場へと行つた。折曲つた廊下の薄暗いところには、それを待つようにしてゐる鑛山師の姿が見えた。

七

亭主が遠い山畠へ出かけて行つたある日の留守に、上さんは女中に言つた。

「ちよつと、Nまで行つて來るからね」

「N？」

女中は吃驚したやうにして言つた。

「東京から身寄のものが其處に來てゐるといふことがね、今わかつてね。それでね、旦那に伴れて行つて貰くんだがね」

「今日歸つて來られるかしら」

「二里半きりないッて言ふから、歸つて來られるよ。おそくも日の暮れるまでには歸つて來るからね」

平氣でかう言つて、かねて支度をして置いた信玄袋を持つて、穿き馴れない草鞋を笑ひながら鑛山師に穿かせて貰つたりしてそして出かけた。家には晝は女中以外に年老つた爺がゐるばかりで、あたりはひつそりしてゐた。二人はいろいろ相談した結果、さうした時刻が一番好いといふことになつたのであつた。朝早くでは、山路が暗くつて通れないし、すぐ追手がかゝつて來る恐れがある。夜は無論出られない。それよりも、午前の十時、亭主や近所の人達が山畠に行つて働いてゐる留守ならば、ちよつとはそれを知らせに行くものもないし、又、旨く疑はれないやうに言つて置けば、畠から歸つて來るまでは知られずにゐる。歸つて來てからならば、追手がかゝるとしても夜になる。其時分までに鑛山のあるNまで行つて置けば、あとは何うにでもすることが出來る。それに、鑛山のNには知つてゐるものもある。かう鑛山師は言つた。鑛山師にしても、この山の中で、俄かにかうしたことになつたのは恐しいやうな氣もしたが、しかし今更女を振り捨てゝ遁げるわけにも行かなかつた。

二人が平氣で出かけて行くのを、女中も爺も怪訝な顔をして見送つてゐた。爺はあるところまで追かけて來て、「旦那は知つてるんかな」などと念を押した。「知つてるんだよ、昨夜話して置いたんだよ」かう上さんは言つた。

十町位行く間は、上さんは氣が張り詰めてゐるので、ひどい路だとは思ひながらも、默つて男の跡について歩いた。男も氣が氣でないらしかつた。兎に角かれはわるいことをしてゐるのである。大丈夫と

は思ふが、――さう急に追手がかゝるやうなことはないとは思つてゐるが、それでもNまでは三里近くある。それに路がわるい。嶮しい山坂もあれば、谷を渉らなければならない處もある。急がなければならない、かう思つてかれは成るべく早く歩くやうにした。それにNまで行けば大丈夫のやうに女には言つて聞かせたが、實はそこでもまだ安心は出來ないやうなところがあつた。その山中の村の人は、其處には澤山に入つてゐる。かれは其處で何ういふ風に一夜を過さうかなどと思ひながら歩いて行くのであつた。

熊笹が人を沒するばかりに深く繁つてゐた。路といふ路はない位である。女が段々後れ勝ちになるのを男は處々で待つてやつたが、その待つてやる時間が後には段々氣にかゝり出した。あの爺さんも女中も疑つてゐた。乾度使ひを亭主のゐる山畠にやつたに相違ない。もう大騷をしてゐるかも知れない……かう思ふと、じつとしてゐられない。しかしまた一方女の方を見ると、山路に慣れないかの女は、それでも既に勢一杯の努力をしてゐるらしく、苦しさうな呼吸をついて、額からは汗を絞るばかりに流した。「ひどい路ね、これぢやとても女一人ぢや駄目ですね」とか、「夜なんかとても通れない」とか始めは言つてゐたが、後にはさういふ元氣もなくなつて、默つてはアはア言ひながら男の跡を追つた。男の默つてゐるのも段々女には氣にかゝり出した。

突然熊笹の中から人が顯れた。二人ははつとした。

見るとそれは背負籠を負つて、腰に長い鎌をさしたお爺であつた。

「まア、お上さん！」

かう先から聲をかけた。

わるい處で逢つたと思つたが、それを顏にあらはさずに、

「お兼ちやん、こんな處まで來るのかえ？」

「それよか、お上さん、何處へ行くだ？」

かう言ひながら、ぢろ〳〵と男の方を迂散臭さうにして見た。

「Nへ知つてゐる人があつて、旦那に伴れて行つて貰ふんだよ」

「さうけえ、それは大變だ。」矢張ぢろ〳〵と二人を見て、「今夜は歸つて來るけえ？」

「その積だがね」

「大變だな」

こんな話をしてゐるのをまだるつこしいやうにして男はずんずん先に行つた。上さんも猶話しかけるお兼を振放つやうにしてそれを免れた。

「わるい所で逢つたな」

「え」

かう二人は言つたが、そんなとに拘つてはゐられないやうな氣がした。もう一生懸命で遁げるより他仕方がないと二人は思つた。驅落をする者の怖しい心が今はかれ等を捉えた。

それに山路は次第に嶮しく嶮しくなつた。一度登つた坂を今度はぐつと谷の底まで下りた。もうすつかり密林の中である。何處を見渡しても白ちやけた大木の幹がによきによき立つてゐて、晝も日光が到

らぬほど暗く、時にはぐちやぐちやした坂路に、女は草鞋を滑らして、尻持をついて、あッとけたゝましい聲を擧げた。

上さんは蒼白い突詰めた神經性の顏をして歩いた。ある坂路では、『もうとても駄目だ……』と言ふやうにして、路傍の草原にべつたり腰をついた。上さんには、一歩一歩、今まで自分のやつて來た罪惡、男を泣かしたり亡ぼしたりした生靈死靈が、今一時にその身邊に集つて來たやうに思はれた。いろいろと男の顏が見えてはまた消えた。

一里半、二里近く來た頃には、上さんは慘めなあはれな姿になつてゐた。髮は荊棘(いばら)やら木の下枝(したえだ)やらにかゝつて壞れ、草鞋から白い脛にかけては、泥濘のはねが一杯に上り、尻端折をした腰卷は、度々尻持をついたので、丸く黑く土に塗れてゐた。一歩毎に上さんは堪へられれなくなつたやうに、はアははアと烈しく呼吸を吐(つ)いて立留つた。

ある谷の底には、綺麗な水が草に蔽はれてちよろちよろと流れてゐた。其處では、もう何うしても歩けないといふので、心配しながら、男は女を介抱した。時計を出して見ると、もう二時である。二里の路にもう四時間近くを費してゐる。これではならぬと思ひながらも、しかも何うすることも出來なかつた。

そこで男は女に水を飮ましたり、持つて來た結飯(むすび)を食はしたりして暫く休んだが、さうぐづぐづしてはゐられないので、女を勵まし勵まし山路を登つた。男の心配は次第に募つて行つた。飛んでもない破目になつたものだなどとも思つた。女の言ふことを好い加減に聞いて置いて、巧に一人で身を退いて了へば好かつたなどとも思つた。それに、これからNまで行くには、まだ嶮しいところが澤山にある。あの阪も越

えなければならない。あの林の中も通らなければならない。かう思ふと、男は氣が氣でなかつた。
「とても歩けないから、休ませて……」かう言つて女は度々立留つたが、後には「もう仕方がない、追手がかゝつて捕へられても、殺されても仕方がない」こんなことを言つて、蒼い顔をして烈しく呼吸をついた。いかにも苦しさうである。心臓が烈しく波打つてゐるのが他からも見える。上さんの心には、後悔の念だの、恐怖だの、生靈死靈に虐まれた念だのが今は一杯になつて動いた。かういふ眼に逢ふのも、皆な自分がわるいからである。皆な自分の罪惡の報酬である。今までは少しも知らずに、今の今まで、ついさつきまで、それをわるいと思はないで、恐ろしい罪惡を犯して來た……。「追手がかゝつて捉まえられても仕方がない。貴方が迷惑なら、何うか放つて先へ行つて下さい」ある處では、上さんはかう言つてばつたり腰を其處に下した。
「そんなことを言つたつて仕方がない。行くところまで行かなくつちや」
男も困つて、かう言つて、駈落者がするやうに、疲れてへとへとになつた女を負つてこの山を越えやうと決心した。
「駄目ですよ、……これも皆な妾がわるいんだから……男を誑した罪なんだから」かう神經性になつて焦々してゐる女を、男は何の彼のと欺して、そして、漸くそれを負つた。幸ひにして、女は割合に小柄で十貫目あるかなしかであるのに、男は十六七貫目ある何方かと言へば膂力のすぐれた方であつた。男は一歩一歩靜かに歩いた。女の蒼白い顔は男の肩のところに重なるやうに見え、兩手で押へた下からは、細い白い女の足が二本だらりと下つた。

しかしいくら力がある方でも、男はそれを三四町もつゞけて負つて行くことは出來なかつた。ところどころで、男はそれを下して休んだ。「少し歩いて見ちや何うだ。」時には、かう言つて手を引張つたり腰を上から押したりした。

やがて大森林が來た。雲霧は時の間に凄しく蔽つて來て、白いまたは灰色の壁が、永久に突破することの出來ないやうに、そこに、かれ等の面前にあらはれ出した。そして白樺の太い幹が、その深い雲霧の中にさびしく白く見えてゐた。

もう五時に近かつた。かれ等はこの山の中で思ひもかけない時間を費した。しかし、この深い大きい密林、この密林を向うに往けさへすれば、もうNの鑛山の低い谷が見える筈である。かう思ふと、男にも新しい勇氣が出て來た。兎に角、其處まで行けば、何うにか出來る……かう男も思つた。

「もう少しだ、もう少しだ」

かう言つて、男は女を勵ました。

ところに、急に人聲がきこえた。二人はギヨッとした。二人は立留つてあたりを見廻した。それは果して追手であつた。鎌や山刀を携へた山の住民の群が、すぐその下のところを此方へ此方へと上つて來るのが見えた。

「太い奴だ。そこだ、其處にゐる！」かうした聲がした。

女は夢中で走つた。もう疲れたなどと言うてゐられなかつた。始めは男と一緒に走つてゐたが、氣が附くと、もう追手が其處に近く迫つてゐるので、唯、遁れたいばかりに、滅茶苦茶に難儀い中を走つた。

上さんはある崖の傍のやうなところに來て、そこでばつたり仆れたまでは覺えてゐるが、それから以後は、かの女は全く意識を失つて了つた。

八

氣がつくと、自分は堀立小屋の中のやうなところにゐる。蓆が壁の代りになつてゐる。藁が敷いてある。山刀が壁にかゝつてゐる。はつと思つて、向うを見ると、大きな榾木が燻つて燃えてゐる。そこに頤髯の深い熊のやうな男が、唯一人ぽつねんとして座つてゐるのが眼に入つた。

一緒に逃げた鑛山師はと思つてあたりを見廻したが、それは姿も形も見えなかつた。上さんは思はず聲を立てた。

と、その男は寄つて來た。

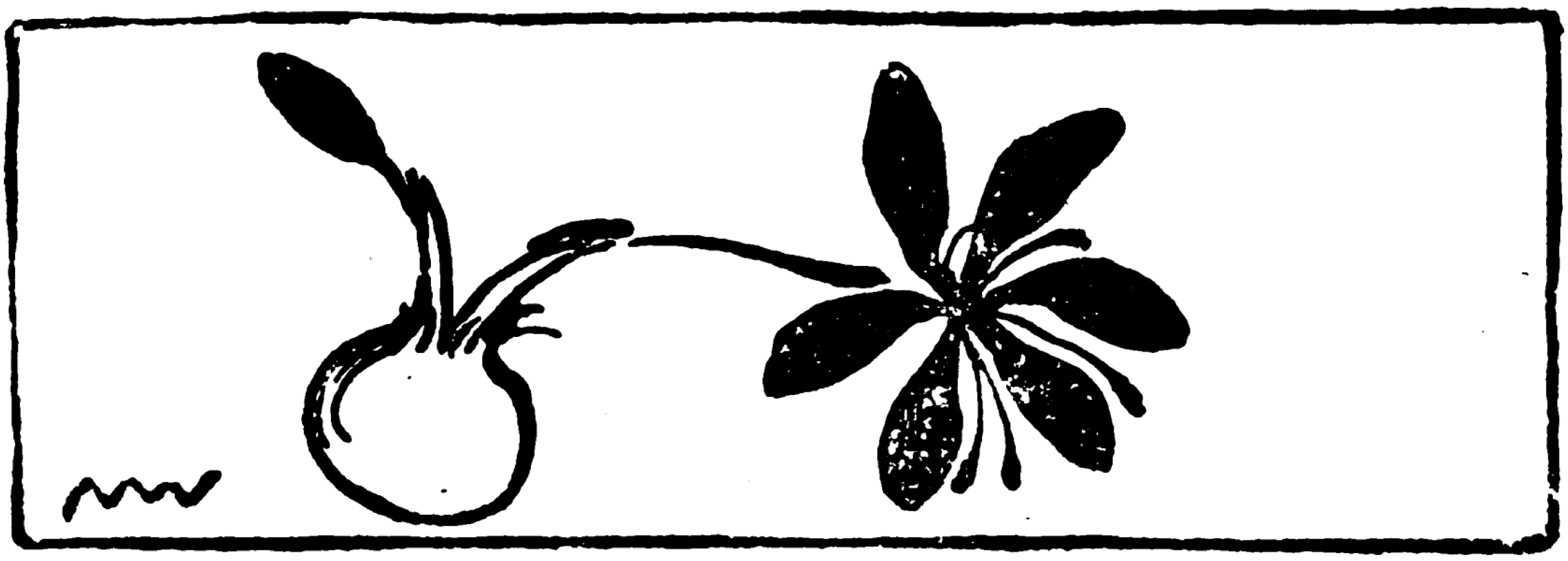
「姐え、氣が附いたけ」

莞爾した顔である。上さんは始めは怖しくつて口もきけなかつたが、意識が漸く恢復して來た。その男の言ふ所に由ると、此處はある峠の上で、そこで一週間も前から鳥の網をかけて張つてゐたが、一時間ほど前、水がなくなつたので、それを汲まうと思つて、下に下りて行つた。と、そこに女が倒れてゐる。死んだやうになつて倒れてゐる。何うしたのだらうと思つて、ゆり動かして見たが氣が附かない。それから負つて此處に伴れて來たといふことであつた。

「此處さ、つれて來て、水を飲したり何かしたどア。氣が附いたか。姐や。よかつた、よかつた……」

いかにも喜ばしさうである。上さんは口も利けなかつた。あの追手に追はれた時の恐怖が、未だに纏

いてゐるやうに思はれて、體がぶる／＼震へた。しかし、この鳥小屋の男が、村の者ではなく、向うの國の方から遠くやつて來てゐるものであるといふことを知つた時には、上さんの元氣は俄かに恢復した。上さんは一人で無謀に山の中の旅をした話をまことしやかにその熊のやうな男に話した。上さんには新しい活路が開けたやうな氣がした。追手に捉えられてひどい眼に逢つてゐる鑛山師などはもう何うでも好かつた。男を扱ふことを何とも思つてゐない平生の慣習が、此處でもかの女の力强い武器であつた。かの女はこの山小屋に一日二日じつとして隱れてゐて、餘炎のさめた時分に山を出て行かうと決心した。



この岸あの岸

中村星湖

一

篠竹で粗末に編んで鳥籠形のうけや、流し釣の道具や、餌箱や、まさかの時の雨具代りの襤褸着物やを、土地の言葉でづきぼうといふ水馴竿の兩端にぶらぶらさせながら、漁夫の作平は玉蜀黍のたけ高くしげつた畑と畑とのあひだの小徑からガザ〳〵と現れて、やがて湖水からのそよ風に波立つてゐる、涼しい青田の畔を歩いて行つた。

彼はもとからの漁夫ではなかつたので、その皺ぶかい小さな顔や、そのがつしりとはしてゐるが並よりも低い體には、どつか勿體らしい樣子があつた。

田の畔の小徑は間もなく彼を小高い塚のやうな恰好をした丘の上へ導いた。そこには白い花の咲いてゐる野菜の畝があつたり強い香りのする麻畑があつたりした。そしてそこからは、彼がいつもその持ち舟を繫いで置く小川の尻が一

と目に見えるのだが、今日に限つて、何うした事か、あの三稜草のむらがつてゐる水際に、あの小さい舟の影も見當らなかつた。彼は驚いて立ち止まつた。そして今一度眼をみはつてそのあたりを見廻した。

「やつぱり見えない。何奴か漕ぎ出しやがつたんだな、畜生！」

彼はさう獨りごちながら、眼さきをずつと遠い方まで漂はせた。午後四時頃の西の空は、彼が家を出る時仰いだと同じやうに、一と夕立ありさうな氣配にまつ黒く掻き曇つて、沖には烈しい風が出たらしく波は思つたよりも高かつた。その風のあふりで、ゾヨ〳〵と陸の方へ吹き靡かされてゐる水際一帶の青々とした三稜草や葭蘆や赤紫の溝荻などの眺めはなか〳〵に美くしかつた。が、そんな景色を樂しんでゐる餘裕は彼にはなかつた。水の上に動いてゐる一二隻の舟にも、二三町東に離れた舟着き場に引揚げられてゐる幾隻かにも、自分の舟らしいものを認めなかつた彼は、「チエッ！」と一つ舌打ちをして、一層するどい眼つきをした。彼の舟は、並の舟よりもずつと小型に出來てゐて、しかもその型はこの濱にはたつた一隻しかなかつたので、目に入りさへすれば見誤るわけはなかつた。

「兎に角、いつもの川尻まで降つてから探すことにしよう。」

さう思つて、彼は竿の肩を變へて、やはり釣道具を體のあとさきにぶら〳〵踊らせながら小川の縁へ降つて行つた。川尻まで行つて荷を卸すと、ことによつたら、昨夜暗闇まぎれにたけ高い草の中へでも引入れたのではなかつたかと、念の爲めにあちこちと草叢のかげを覗き歩いた。

「いゝや、たしかに、いつものとこの石へ纜を結へて置いたのだつた。」

やがて荷を置いた所へ立ち戻ると、彼は腰から煙草入れのさしを拔いて、一ぷく點けながらゆつくり考へた。何うしても、これは誰かゞ盜んで使つたに相違なかつた。そんな事がこれまで一度や二度はあつた。こつちで要らない時には使はれたつて村ところの者になら腹は立てないが、使つたなら使つたでもとの所へ戻して置けば好いのに！　水の上には何處にも浮んでゐないのを見れば、どこかよその濱へ着けてあるかも知れない、まさか乘り逃げをしたわけでもあるまい……

兩頰をふくらめて火口を草の中へ吹き落とすと、彼は殆んど器械的に煙管をさしに納めてもとの腰へ戻しながら、川岸を丘の手前まで引返した。そしてそこから別の道を取つて舟着き場の方へ歩いて行つた。丘の上から眺めた通り、そこにも彼の舟は見出されなかつた。彼は二度目の舌打ちをした。そして『何處の何奴だ？』とまたも獨りで罵りはじめた。『見付けたが最後、手んぼうでも足んぼうでも打つ拂つてくれる。ひとの職業の間を缺かせやがつて！』

彼は先刻、出掛けに、妻と一と喧嘩して來た。

『けふは盆の十四日だから漁は休んだら何うでござんすね？』と妻は言つた。『盆だらうが正月だらうが職業はやめられない！』とこちらは答へた。『でも子供等にさへ盆には殺生をするな、蟬蜻蛉でも捕るなと言ふぢやありがしないか？』と妻が言つたまではよかつたが、『一體、うちのお父つあんは、職業々々と口ぐせに言ふけんど、何が職業づら？　朝晩それにかゝり切りで餌つこ一匹捕らない日さへあるぢやないかね？　そんなに職業が大切なら、家の者がこんなにお蠶で忙しがつてる手傳ひをしてくれた方がよつぽどましだ！』と、毒づかれると、彼はぐいつと急所を突かれたやうな氣味で、むかつ腹を立てゝ

家の仕事もするだけはしてゐる、糞ッ！といふ勢ひでやつて來たのであつた。

今更、舟が見當らないからと言つて家へ歸つては行けなかつた。さればとてひとの舟を乘出す氣にもなれなかつた。盗み使ひをされたにしても、乘り逃げをされたにしても、何かちよつとした手がゝりでも摑まなくては、たとへ夜が明けようとこの濱を離れることは出來ないと思つた。

彼は濱傳ひに次第に東の方へ行つた。さきの川よりもつと廣い川の川尻まで行つて、そこから今度は西の方へ引返した。泳ぎをしてゐる子供や道ばたの畑に働いてゐる人に、「もしや誰かゞ六首川尻からちいさい舟を漕ぎ出すのを見かけなかつたか？」と訊ねた。知つてゐる者は一人も無かつた。すると、またも小丘の下を過ぎて、彼はずつと西の方へ行つた。

遠く眺めては柔かく美くしい毛氈のやうな濱荻の咲き續いた濕地にも、足の裏を傷けたり向ふ脛を引掻いたりするかつくち（切株）や刺があつた。一度は、或小流れを向ふへ越さうとして、彼は飛びそこねて深い泥のなかへ陷つて、股引のみか上衣をまで泥だらけにした。

西川の川原まで探して行つて、探しあぐねた彼は、湖水の方を眺めて、兩腕を組んで突立つてゐた。その時であつた、彼がその持ち舟と思はれる小舟を認めたのは。

荒立つてゐた波がいくらか靜まつて、いやにむし／＼としては來たが、ます／＼色濃くなつた夕立雲の爲めに、日の暮がいつもよりも早く來たやうな水の上を、その小舟が長崎の鼻を廻つて現れた時にはまだはつきりそれとは思はれなかつたが、次第に近づくにつれて、乘つてゐる二三人の人影の割合に舟の型のひどく小さく見えたので、そして舟着き場よりは北寄りに北寄りにと漕いで來るらしいのを知つ

たので、彼はぐつと背伸びをした。

彼は暫くそれを見詰めてゐた。果して彼の持ち舟であつた！　乘つてゐるのは誰等であるかを彼は見きはめようとした。舟は近づいた。二人の男の外に一匹の犬が白い鼻面をちよこんとこちらへ向けてゐた。漕ぎ手も乘つてゐる者も麥稈帽をかぶつて長い着物を着た若者らしい事だけは察しられたが、眼鼻立ちまではわからなかつた。

「何奴だ？」と彼は呶鳴らうとしたが、まて〳〵、何奴だつて構ふものか、ぎゆうといふ目に逢はせてくれる！　と強く決心した。そして舟よりさきに六首川尻へまはつて待伏せしてやらうと思ひ付いた。

彼はさつき水際を歩いて懲りたのと舟盗人から隱れる必要とから、急いで畑のある方へ出て、一番の近道を選んだ。彼が釣道具を置いてある場所に戻つた時には、陸に近く、陸に近くと漕がれて來た小舟はすこしまた沖へ出てゐた。のみならず、漕ぎ手がかはつたと見えて、そり〳〵舳が變な方へ向いて、舟身がぐら〳〵と搖れたり廻つたりするのであつた。

「アハヽヽヽヽ」

若々しく、こだわりもなく笑ふ聲が聞えて來た。彼はその笑ひにも胸をむか〳〵させた。彼は雨降りの折の用意にと持つて來た襤褸着物を頭から被つて、そつと青草のなかに横たはつた。獲物の近づくのを狙つてゐる獸のやうに、しば〳〵四つん匍ひになつて、草葉の間から首を擧げ、眼を光らせた。舟の舳はまさしく川尻を指して進んで來た。

「ずつと側へ寄るまで、奴等が舟から上るまで……」と彼は我れと我が心の急き立つのを抑へた。

直ぐそこに姿を見せながら、舟が岸に着くのは案外に手間取れた。かうして待伏せしてゐるのを奴等が氣付いたのではないか、と彼は思つた。かすかな青草の匂ひとじと〳〵した泥土の濕り氣とは、くわつとほてつてゐる彼の顔を襲ひ、ドキ〳〵打つてゐる彼の胸を壓し、股引や野良着をとほして彼の膚に滲みた。奴等が何時までも上らないなら、おれも何時までも待つてゐてくれる。まつ暗になるまでゞも夜が明けるまでゞも。そして思ふさまひどい目に遇はせてくれなければ……いや、奴等はこつちに氣が付いてはゐない、見ろ、今舟を着けた、舟から降りた、そしてまた愉快さうに笑つた。

「何奴だ、ひとの舟を矢鱈乗り廻してゐやあがつたは？」

さう大聲に、堪へに堪へてゐた鬱憤を一どきに吐き出すやうに叫んで、彼は草むらから飛び立つた。彼の前には呆氣に取られたやうな二人の若者の顔があつた。彼等は餘程驚いたらしく、どちらも二足ばかり後へさがつた。と、彼等のうしろに續いて來た白と黒との斑の洋犬がワンワンワン……とけたゝましく吠えて飛び蒐つて來た。

それには彼も不意を打たれた。彼は急いだので脱ぐのを忘れたぼろ着物を片手でかなぐると、それを犬の前で打拂つた。ひらりと横へそれた犬はまたも烈しく吠え續けながら、うしろから、前から、彼を襲はうとして飛び廻つた。噛み着かれては、と思つたので、彼は次第に後じさりながら、そこらの草株を引抜いたり泥を掴んだりして、頻りに犬になげ着けた。

「ジョン！　ジョン！　コラ！」と犬を叱つたのは村の生れで、村の小學校の敎師をしてゐる若者であつた。

「ジョン來い、ジョン來い！」と叫んで丘の上からも口笛を吹く者があつた。犬はそちらへ箭のやうに走つて行つた。

　思ひ掛けない犬の出現に、鋒先を折られたゞけそれだけ作平の憤怒は複雑なものとなつた。彼の全身はガタ／＼と顫へた。彼の胸はむん／＼と混み上げて來た。あひ手が十分に知合つてゐる村の者だらうが學校の教師だらうが、遠慮してゐられなかつた。返答のしやう一つでは、ほんとに掴みかゝつて川の中へでも泥の中へでも捻り込んでやりたかつた。

「君等はその舟を誰に借りた？」

　彼は強く首を上下に振りながら、二人の若者の方へ詰め寄つた。

「お前さんの舟でしたか？　そりやあすこしも知りませんでした。孝一君が借りて置いたから乘り出さうといふので……」

　眼鏡を掛けた脊の高い教師が見下ろすやうにして、眼をパチ／＼させながらさう言ひ懸けると、作平はいくらか意外の思ひがしたが、直ぐ遮つた。

「孝一？　あの尊造さんの伜か？……わしは、貸した覺えはない。嘘を吐いちやあ可けない！」

「嘘を言ふものかね！　ねえ君」と言つて教師はも一人の仲間を顧みた。「孝一君が、空いてる時には使へつて言はれてゐるからッて、一緒に乘り出したんだねえ。」

「あゝ、さうだ。」

　さう答へた若者は作平の見知らぬ町場者らしい樣子をした男であつた。しかし、「空いてる時には使

へ」と言つた言葉に就いては多少の記憶がない事はなかつた。
「なる程、この間あの人がこの川尻で釣をしてゐるのを見掛けて、わしがそんな事を言つた覺えはある。けれども、それは「空いてゐる時」に限つた事だ。そしてそこらで釣位ゐはしてゐてもいゝと言ふ事だ。今日のやうに、こんなに職業の間を缺かれて堪るものか？　わしあ二時間も三時間も山の神川尻や西川尻まで探し歩いてゐた！」
「いや、叔父さんにさう言はれるとわし等もうつかりしたわけです。實際、孝一君が借りて置いたものだと信じたからで……」
「君等はこの舟で何處まで行つて來た？」
「××まで。」
「それ、さう言ふ事をするからだ。そんな遠くまで乘つて行かれてなるものか？……さうして今日は專造さんの伜は君等と一緒だつたのか？」
「一緒ですとも。××へ行かうと言つたのもあの人の發議で……」
「それで一緒には歸つて來ないのかい？」
「えゝ、あの君は親類で引留められたから、今夜はあつちへ泊つた筈です。」
　そんな問答が、變に入違つて、怒るにも思ひ切つては怒られないやうな感情を中心にして運ばれてゐた時、彼はさつきの犬が十二三の少年に連れられて再び近づいて來るのを見た。その少年は孝一の弟であつた。氣味わるい眼つきでこちらを見てはゐるが、さつきのやうに飛び蒐らうともせずに尾を振つて

ゐる犬は、その少年に馴らされてゐる様子から孝一の家の犬に相違なかつた。

二

「一體、孝一つて奴は生意氣だ！　東京へ出てすこしばかり學問をし申すのなんのつて、それを鼻さきにぶらさげやがつて、ひとの物を平氣で乘廻して、職業の妨げになる事をぁ考へない。……君等も子供ぢやあるまい、殊に學校の敎師でもしてゐる人間なら、すこし氣を付けるがいゝ！」

　作平がむしやくしやまぎれにそんな事を言ひ出すと、小學校の敎師は「實際、職業の間を缺いたんぢや申わけはなかつた。わざとやつたんぢやなかつたから勘辨して下さい」とお辭儀をした。

　やがて若者等が草むらを嗅ぎ廻る犬を呼びながら丘の向うへ消えて行くと、長い間の焦燥や憤怒に眼もくらむやうな思ひをしてゐた彼は、あたりももう薄暗くなつて、氣遣つてゐた雨さへポツ／＼と落ちて來たのに氣が付いた。

　馬鹿々々しいとも何とも言ひやうのない心持を『チェッ！』といふ舌打ち一つに托して、彼は暫らくは舟の方を見たり、空を仰いだり、漁具の方に目を遣つたりしてゐた。

『つまらない！　歸つちまはうか？』とも考へたが、やうやくに氣分を取直して、彼は道具類を舟に運んで、つきぼうで巧みに操りながら舟を川尻の外へ出した。雨は音を立てゝ降り出したが、櫓櫂を使つては仕事が出來ないので、全身を濡れるにまかせて、竿の立たない所まで行くと艪を押しはじめた。

　雨の爲めに沖はまつ暗になり、四方の山々はぼんやりとして、だぶつく波と、波に亂れ落ちる雨脚と

間近の水から頭を出してゐる水草や川柳などだけが彼の眼に寫つた。ころび石のいつもの漁場へ行くまでには、さすがに彼も襤褸をかぶらずにはゐられなかつた。そこで、彼は艪の方に蹲まつて、片手で輕く艪の加減をしながら、も一つの手でうけに餌を入れて適當の場所に沈めたり流し釣の糸を流したりした。さういふ忙しい仕事の間にもさつきの腹立たしさはしばしば頭を擡げて來た。

そのうちに、雨はいくらか小降りになつたが、手元がすつかり暗くなつたので、彼は好い加減にして仕事を切りあげた。やつとの事で舟をもとの所へ着けると、そこらへぐしやりと坐り込んでしまひたい程いやな氣持がした。

「糞ッ！」と彼はつきぼうで薄闇の地上をぱたりと打つた。「孝一の野郎が一緒だつたら、向ふ脛でも脳天でもぶん擲つてくれるだつた！　あの生意氣野郎が……ひとが、久し振で逢つたと思つて親切に言つてやれば、好い氣になりあがつて……」

だが、向うも若い者で氣が利かなかつたといふだけで、小學校の教師の言葉の通りわざわざこちらを困らせようとしたわけではなからう、と思ひ返すと、彼はさつき皆をあんなに罵しつたのがいくらか恥かしいやうな氣もするのであつた。

彼は濡れた竿を杖つきながら、湖水に流れ込む川瀬の音を聞きながら、やゝ落ち着いた氣持で闇を見詰めてゐた。

一週間程前の或夕方、まだ夕陽の名殘がこゝらを明るくしてゐた頃、彼が流し釣を濟まして川筋へ乘り込んで來ると、三稜草の中から麥稈帽を被つた首を出して輪を垂れてゐる若者があつた。それが孝一

であつた。學校の休暇で家に歸つてゐるのだといふ事が直ぐに察せられた。

その時彼は孝一にお世辭を言つた。

『お久し振りで、よく御機嫌さんで……こりやあわしの舟だから、空いてる時には何時でもお使ひなすつてよ。この近所で釣つてるだら何時でも……』

すると、むかうも嬉しさうに禮を言つた。だが、けふはあんまりだつた。こつちがあゝ言つたからには相違ないが、××まで乘つて行く、それも直ぐに歸つてゞも來ればだが……

怒りは、燃ゆるやうな怒りはまたも彼に歸つて來た。

『なぜおれはあの時、あんな馬鹿野郎にあんな空世辭を言つたものだらう？　いゝや、空世辭ではないあの時は心からだつた。あの男はおれの總領と小さい時分の友達だつた。おれの子は、親が貧乏なのと彼奴に智慧が足りないのとで、小學校をも碌々やらせなかつたのに、孝一つてのは中學校をも卒業してもつと上の學校まで入つたといふ噂を聞いて、おれはあの男をえらいと思つてゐた。あんな息子を持つた專造さんを羨ましいとも考へた。それで、あの時にも、おれはあの男をいくらか崇めるやうな氣持であんな丁寧の挨拶をもしたのだ。……そればかりか、專造さんとは貸借關係でいつでも厄介ばかり掛けて來た。娘や嫁には糸を取らせて貰つてゐた。……空世辭ではないにしても、やつぱりお世辭には相違なかつた。あんな事を言つて、おれは親切を見せるよりはむかうの機嫌を取らうとしたのだ。何といふ卑屈だ！　だから今日のやうな目に逢つたのだ。畜生！　口惜しいぞ！　すこし位ゐ金の融通が利くつたつて何だちゆう！　まつたく、あの野郎が生意氣で、ひとを馬鹿にしてゐるからあんな事になるのだ

見てゐやあがれ、今に……」

　彼は歩き出した。小さな丘を越すと間もなく彼の生れた家が、彼の兄の家があつた。寄り道をして、今日の出來事を、堪へ切れない腹立たしさを兄の家族にも聞いて貰ひたいやうな氣がしたが、底を探ると深い理由とても無い、ほんの問違ひみたいな事なので、却つてこちらの心の小さゝを笑はれさうに思はれて、彼はまつ直ぐに畑なかのまつ暗い小徑を、石に躓いたり玉蜀黍の葉や桑の梢に遮られたりしながのぼつて行つた。

　しばらくすると、一二町距たつてはゐるが、孝吉の家の裏手を通つた。今頃そこでは夕飯時か、夕飯をしまつて皆が話でもしてゐる時分だらうと思つた。ひる間の事を、孝吉の弟は何と言つて親達に告げたであらう？

「え、作平さんが孝の事を生意氣野郎と言つたえ？」

そんな風に利かぬ氣のあの母親が口惜しがつてゐるらしかつた。

「まつたく生意氣だ！　今日の一と事で知れたもんだ。それに學問をし申すのと言つて、ひとは汗を垂らして稼いでゐる時も、安閑として釣をやつたり、よそ村まで遊びに出掛けたりする奴だ！」

　彼は空想のなかへ現れて來る孝一の母親の顔に向つて、やつきとなつてそんな事を心で言ひ張つた。彼の氣持は何うしても孝一を「生意氣野郎」にしてしまはなければゐられなかつた。

　それからまた二三町のぼつて、東へ折れて、人家と人家との間から往還を横切つて、長いだつ道を歩いて行つて、一段高くなつてゐる用水の小川の上に架けられた橋を渡つた所に彼の家はあつた。彼はも

と兄の家から程遠くない往還向きの場所に自分の家を持つてゐたのであるが、いろんな事で失敗して、その家を手離してから、もう十何年といふもの、あちらこちらと借家住ひばかりして來た。この家も他人の物であつた。

そこの緣側から差してゐる明るい灯影はパッと庭さきを輝してゐた。彼はつきぼうを小屋根に立てかけて、濡れた襤褸着物を抱へたまゝ默つて戸口を入つた。それに酬いるやうに、彼の妻も默つてゐた。彼女は取着きの開け放しの蠶室で、肌脫ぎになつて、娘と一緒に蠶じりを取つてゐた。チラと彼の方を見たがすぐに、そつぽを向いたのである。

「けふは實に馬鹿を見た」と彼は妻の不機嫌を知りながらも同情を求めるやうに言つた。

「ばかに遲かつたね、お父つあん。」と娘が言つた。

「うむ、けふは忌々しい思ひをした」と言ひかけて、彼は土間に立つたまゝ短かい上衣を脫いた。じつとりと雨が透つてゐるので脫ぎ際の氣味がわるかつた。

「何でこんなに遲くなつたゞね?」と娘は反りの合はない二た親の間をとりなすやうに色白の丸顏をこちらに向けて輕く訊ねた。

「專さんの忰がな、あの孝一つて奴がよ、ひとの舟を乘出して××まで行きやあがつたゞよ。おれはさうとは知らないものだから、小半日あつちこつちを探し歩いた。さうすると、日暮れ時になつてから六郎つて奴と他處かの奴で漕いで來やがつたゞ。おれは腹が立つて〳〵ならなかつたから待ち伏せをしてゐて、打つ挫いてくれべえと思つたゞ。さうすると……」と彼は事のあらましを娘に話した。

すると、默つてゐた妻も、仕事の手をやめてこちらを見た。

「そりやあお前さんが腹を立つも無理はないが」と彼女は始めて口を挾んだ。「むかうはお坊ちやん育ちで、こつちの都合なんか考へなかつたゞね、きつと。空いてる時にはと言はれてつい遠くまで乘り出したで御座んしよ。」

「さうかも知れないが、一體生意氣だよ、こつちを馬鹿にしてゐるからかういふ事になるのだ」と、彼は當の對手が妻でゞもあるかのやうに、六首川の川尻で吐き散したと同じやうな惡口を並べはじめた。

彼の勢ひが何時になく烈しいので、それに仕事の間を缺かれたといふ事が何れくらゐ腹立たしいものかゞ推量されるので、しまひには、妻も程よく彼に相槌を打つた。

「キャン！　キャン！」と突然、柱のかげで奇怪な叫び聲をあげた者があつた。

彼は、素裸のまゝ、蚊に螫されるのにも氣付かずに熱して立てつゞけに喋つてゐた作平は、ぎよつとしてそちらを見た。それは彼の末の男の子であつた。その人間の子らしくない泣き聲や、長いうぶひ紐みたいな物で柱へ繋がれてゐるみじめな樣子は、内にある時でも、外にある時でも、いつも彼の心を暗く重苦しくする物であるだけに、今更に彼を驚かすわけはなかつたのだが、この時ふと、彼は濱邊で彼に吠え蒐り〳〵した犬の事を思ひ出した。わが子の泣き聲と犬のそれと、わが子の姿と獸のそれとが甚だ近く似てゐるのに氣付いたのである。

彼はもう、何とも言ひやうのない厭な氣持がした。彼は身を屈めて、土間の暗がりから下駄を拾ひあげると、逃げるやうに戸外へ出た。彼は用水の流れの側まで行つた。手足の泥を洗はうとしたのである。

けれども、彼は今の新らしい發見にその激し易い魂を脅かされて、淙々と流れ去り流れ去る闇の底の小川の前に彳んで、遣る瀨ない熱い涙に咽んでゐた。

「そんなに皆んなが、おれ一人を虐めてくれるな！」

彼はそんな言葉は知らなかつた。けれども、混濁とした或物に襲はれて泣いてゐる彼の氣持は何よりも一番それに近かつた。

三

彼の妻は、長い間彼と連れ添つて來たゞけに、やはり彼の心持の遷り變りを一番よく心得てゐた。いや、彼の心持の推移はまた彼女の心持のそれでもあつた。彼がこれまでに世に出よう〳〵としてどれだけ踠きもがいて來たか、そして又しても〳〵落ちたり倒れたりする爲めに、つまらない事にまで頑なにもなれば僻みもする、それはやがて彼女自身でもあつたのである。

娘は、そこは、まだ若かつた。

「お淸ちやん、お前、あんまりお轉婆をすると、うちの嫁には貰はないよ。」

彼女がまだ十四五の頃、孝一の妹と一緒に遊ぶ頃、その母親からそんな冗談を言はれると顏を赤らめた事を今だに覺えてゐた。今夜の父親の話を聞くと、もう長いこと諦めてゐたやうな心持がむく〳〵と姿を現はして、そして一層深く諦めなければならないはめになりさうなのが悲しまれた。

「ほんとに、あの人はいやにギス〳〵してゐる。」

さう思ふ事が、彼女にとつては、一番安全の道らしかつた。

作平が變な氣持をやつとの事で戶外の闇に振り棄てるやうにして入つて來た時には、彼の妻は先刻は「うちの殺生狂人が……」などとぶつ鳴りなりながら仕度をして置いた晩酌の膳の蔽ひを取つて、つとめて氣輕に酒の燗を付けなどした。

「冷で好い。早く一杯注いでくれ。」

部屋の隅に掛つてゐた古浴衣を着て圍爐裏の橫座へ胡座を掻くと、彼はさう言つて杯を出した。彼のうしろの壁ぎはには形ばかりの精靈棚がしつらはれて、胡瓜の馬だの團子だのが供へられてあつた。

「ヒヽイ、ヒヽイ、ヒイ、アッパッパッパ……」

太紐で柱に繋がれてゐる子供は、その紐をぴんと引張つて、四つ匍ひに匍つて、物のほしさうな樣子で、父親を見てお世辭笑ひのやうな泣き聲を立てた。たつた今、不思議な衝動を受けた後なので、彼はそちらを見まいとしたが、眼が吸ひ寄せられるやうにその子を見てしまつた。

「ひ、京助、何が欲しいか？」と彼は言つた。彼は何時かふだんの慈悲深い父親に返つてゐた。そして妻を顧みて、「お母あ。早くあれを解いてやれよ。」

「また膳を引掻き廻したりして仕方がないから」と色の黑いこち〱した顏の妻はにべもなく答へた。

「さうは言ふなよ、ちよつくら解いてやれよ。」

一二杯の冷酒に、疲れ切つてゐた彼の頭はほうとして來た。そしてもう五才になつても匍ふ事といふよりは轉け廻る事より知らない子が、膳の側へ來て首を出したのへ、馬鈴薯の煮付けを箸に貫して持た

せようとした。

「およしなすつてよ。先刻澤山食べたばかりだから」と妻は止めた。

「まあえゝ。」

「また放りたらけると困るぢやありがしないか?」

「まあ、さういふな、今夜はおれの好きにさせてくれ。」

やがて彼は、口も利けなければ腰も立たない片輪の子を膝にあげて、その子が例の奇怪な音を立てゝ叫びながら、彼のもぢやもぢやした髯を引張つたり口のなかに汚い指を突入れたり妻が氣遣つた通り膳を蹴飛ばしたりするのを、或時は嬉しげに、或時は悲しげに見守つてゐた。

方々の醫者が言ふ通り、腦が惡るいのかも知れないが、この眼つきや顔つきで何うして馬鹿や阿呆と思はれよう! これは疳だ、この鋭い釣りあがつた眼と青白い顔色とを見ろ、疳に相違ない。疳なら切れる事もあるといふ。今は醫者にも思ふやうに掛けられないが、そのうちに作三が立派の醫者になつてみろ、きつと治してくれる。うむ、さうだ、さうしりや世間の奴等をも見返してやるぞ。見てをれ! 孝一なんかに馬鹿にされてゐるかい!……彼は去年から、湖水向うの桑原醫院の藥局生にやつて置く次男の事を思ひ出した。木伐りでもさせるか百姓男にでもすれば、もう一と廉の役に立つべき作三を、このやうな貧乏のなかから醫者の修業に出すといふのは、世間では身の程知らずだと思つてゐるであらうが、父親の彼としては一つの切ない願ひからであつた。京助の病氣を治してやらうといふその願ひからで。

「さあ〳〵、何時までもそんな者の子守ばかりしてゐられては困りがすよ。早く來て一と手傳ひお賴のまうしがすよ。」

さきから蠶室へ戻つて、またセッ〳〵と蠶じり替へに掛つてゐた妻は、甲高い聲で彼を促した。

「よし〳〵。」

彼は今夜を機嫌よく働いて、折角鎭まつて來た自分の心持を崩すまいと思つた。それには、手放せば何處へでも轉げて行く不具の子供をもと通り柱に括り着けねばならなかつた。しかしそれももう長く馴れて來た事とて割合に氣輕に行はれた。

彼は、醉つてすこしとろ〳〵する眼を瞬きながら、蠶糞や桑の葉のいきれたやうな匂ひがむつとする蠶棚の方へ歩いて行つた。今朝にはに起きた夏蠶は二十本餘りある筈であつた。二三日うちに上簇するのが十本程あつた。大方は小指位ゐの太さになつて吊しランプの光で、青白く光つたり薄黃に透きたりしながら籠の縁や桑葉の間で蠢いてゐた。

家の仕事をなまける〳〵と妻に小言を言はれながらも、彼は一しきりは仲の兄に習つて養蠶敎師として近縣を經廻つた程なので、養蠶に就いてはなか〳〵やかましくもあり巧者でもあつた。そして人工飼育法に最も深い自信を持つてゐたが、その割には實際の成績が面白くなかつたので、今は殆んど女や子供まかせの行なり放題の天然飼ひにしてしまつたのである。

彼はその晩、晝間の一件でひどく疲れてゐたにも拘らず、自分でも怪しまれる程上機嫌で、遲くまで蠶じり替へや桑切りに手傳つた。妻がふと、「盆の十四日だからつてひとが止めたのに、喧嘩面で出掛け

たものだから』と冷笑するやうに言ひ出しても『ふむ、殺生の罰だつたか?』とこちらでも笑ふやうになつた。明日あたりは別居してゐる長男を呼び寄せて、むず造りに手傳はせなければならないといふやうな相談をも夫婦はした。『お蠶が繭になつたら、お前にも、帶の一とへずもおごつてやらぢやあ、なあ』と父親は娘に言つた。

やがていつもの通り娘だけを別の小さい蚊帳に寢かして、親子三人は、不具の子を間にした作平夫婦は同じ大きい蚊帳に寢た。

ぐつすりと一と眠りした後で眼ざめると、彼は古い靑蚊帳の外で、精靈棚に點した豆ランプが微かに黄色い光を放つてゐるのを見た。すべて家のうちは暗かつた。

彼はたつた今、ひどく厭な夢を見たと思つた。けれどもそれが何であつたかはつきり思ひ浮ばなかつた。兎に角、何かを一生懸命で追ひ懸けてゐるうちに、途中からあべこべにこちらが追ひ懸けられてゐたものらしかつた。

『いゝや、夢を見たのではない、たゞそんな氣持がしてゐたゞけだ。』

さう思つたが、それは幾時間かの間の心の變化や、心の流れを堰き止めた睡眠を通して再現された前日の夕暮の出來事であるらしかつた。

『犬?……いゝや、そんな小さな物ではない。何だか恐ろしく大きくてまつ黒けの生物のやうだつた。』

彼がひとりで枕の上の首を振る拍子に、彼の眼には、色の黒い小ぢむまりとした妻の寢顔の前に、浮き出たやうに青白く見える子供の細面が寫つた。それはあんぐりと大きな口を開いてゐた。

彼はだしぬけに惡い物を見せ付けられたやうな氣がした。その子が犬のやうな泣き聲をしたと始めて氣付いた時に感じたと同じ惡寒が彼の襟首を走つた。あんなに好い氣持に返つて寢着いたのに、なぜまたこんな思ひをするのだらうと考へた。

源因を質せば、やつぱり舟を盗まれて間が缺けたのが癪に觸つたのだ、たゞそれだけの事に過ぎないやうでもある。けれども、よく〳〵考へてみると、何が何だか解らなくなるのであつた。

彼は妻と爭つて家を飛び出して行つた時からの自分の色々の心持や、考へや、罵つた事や喋り散らした事やを、出來るだけ靜かに順序を追つて思ひ出さうとした。夜は、といふよりはもう明け方に近かつたであらう、すべてが死んだやうに靜かで、近頃はなるべく物を考へまい考へたつてつまらないとしてゐた彼にもいろんな心持や物事の關係を深く細かく考へさせるに適してゐた。

まづ彼は妻の『殺生』と言つた言葉やその心持を考へた。するとそれは夫婦の間の小ぜりあひの源因だとは考へられずに、直ぐに子供の不具といふ事に結び付いた。馬鹿な! そんな事があるものか、さういふのは坊主などが女子供を騙す言葉だと打消すと、今度はそれがもう疾うに此世の人ではない、彼の父親の釣道樂を呼び起こした。彼の父は三度の食事よりも釣が好きであつた。年百年中水の上でばかり暮した。白い顎髯を垂らして、猫背をして、魚籃をさげて樂しげに出懸ける樣子が今もあざやかに眼に見えた。東では何處、西では何處と釣り場所の細かい穿鑿もして置けば、季節の變遷、天氣の晴れ曇り、波の澄み濁り、風の有る無しに依つて、何の瀬には何魚が寄り、何の淵には何魚が寄らない事も知つてゐ、竿や針や餌の講釋から鈎の付け具合、綸の流し加減まで心得てゐた。鍋釜から寢道具まで用意して

出懸けると一週間や十日は歸つて來ない事がよくあつた。

「あの人はあれで一生を果てたが、あゝいふ事ばかりさせて放つて置いた兄貴もえらいやうな氣がする。しかし、あの時分はうちには可なり財産があつたからあれでよかつたのだ。阿爺には別に世の中へ出ようといふ慾もなかつたやうだし……いや、だが何か他の事を考へてはゐたやうだつた。彼奴が縣令だとか知事だとか威張り腐つても、とかなんとかあの人に似合はない氣焔を聞かされた事もあつたのだから。して見れば木乃伊取りが木乃伊となつたわけか？　一生浮ばれなかつた太公望か？　うむ、太公望の話はよくしてゐた。阿爺はあれで漢書漢籍は好きだつた。おれの釣道樂は阿爺の眞似と言へば眞似に違ひないが……おれだつてこんな事を職業だの何のと意氣むやうにならうとは始めはすこしも思つてゐなかつた。おれは兄弟三人のうちで一番間抜けに生れ付きはしたが、猫の尻尾で、財産を分けて貰ふ積りもなかつたし、實際おれが嫁と一緒になる時分には、嫁の身分が卑しいとか何とかかつて、あの小家を一軒新らしく建てゝくれたゞけだつた。あの時分には兄貴の方だつてすつかり左前になつてゐたのだから。それでおれは總領の子が生れる頃には隨分あせつたものだつた。甲斐絹商人にもならうとした、機屋を始めやうともしてみた、それから見様見眞似の養蠶教師、百姓、樵夫、……そのうちにお清が生れる、作三が生れる……何時か自分の家も人手に渡して、四十の坂を越す時分には、でも今度こそといふ決心で總領を對手に下駄の台を取る事を始めたが、御料局がやかましかつたりして旨い儲けにもならず長續きもしなかつた。京助が生れたのはその頃だつた。これの病氣は生れて間もなくけうふの蟲を病んだ爲めだらうといふ醫者もあつたが、おれは何うも疳だらうと思ふ。おれが小さい時分いくらかその氣

があつたといふから。或醫者はおれに酒を飲むかと聞いた、そしてその爲めかも知れないと言つた。若い時分には無理酒をも飲んだがおれはそれ程の大酒ではない。さう聞けば恐ろしいやうな氣もしたが、あの頃おれは自棄を起してゐた。獨り立つてから二十幾年かの間、やる事なす事が失敗續きだつたから借金しながらでも酒の一合や二合は飲まずにゐられなかつた。外に樂しみも無かつたのだ。總領は總領でおれと同等かおれ以下の人間らしい、人並にもう女房も持つたし子も生んだが、それ以上の能は無さゝうだ……そこへ行くと他人の事が羨ましくなる。專さんの悴……今日は口惜し紛れにあんな惡口を吐いては來たが、兎に角、何處まで登れるか果ての解らないといふ評判は評判だ。うちの作三も何うか物にしてやりたい。今の所、あれ一人だ、おれが樂しみにしてゐるのは。あれが物にさへなれば、京助だつて、たとへ病氣は治してやれなくても、この子一人位ゐは一生見て貰へるだらう。……」

そんな風のはてしもない思ひ出や取越し苦勞に彼の頭はます〳〵冴えて行つた。

ドタリと疊に音を立てゝ、別の蚊帳で娘が寢返りを打つたらしかつた。――あれももう年頃……田舍の女としては年頃をも過ぎてゐる。いくらか縹緻自慢で高く止まつてゐるやうだが、好い亭主を持たせてやりたい、などと彼は思ひ續けた。

何處かで一番鷄か二番鷄かゞ鳴いた。それにつれて方々で羽搏きや鳴き聲がするらしかつた。そのあとは前よりも一層シンとして小川の流れだけがさやかに聞えた。

四

明るい朝が來た時には、彼はいぎたなく眠つてゐた。

「お父つあん。今朝は遲う御座んすよ。」

妻にさう呼ばれて、彼は驚いて跳ね起きた。愚圖々々してゐた爲めに獲物を他人に盜られた例はすくなくなかつたので、彼はいつも暗いうちに起きる習慣になつてゐた。

彼が寢ぼけ面で六首川尻から舟を出す頃には、日が東の山から出かゝつてゐた。空は靑々と晴れて、湖水をめぐつてゐる山々の線は滴らんばかりで、溝萩の花毛氈の上には蝶か蛾か白い翅のものがヒラヒラと舞つてゐた。今日はひどく暑くなりさうであつた。

時刻が遲れたにも拘らず、うけも流し釣の方も、すこしも他人に掠められた樣子はなかつた。それどころか、今朝はいつにない大漁らしかつた。彼はあちらこちらと浮標を拾つては上げて行つた。大きな鮒や鯰がきゆん／＼と綸を引いた、途中まで引揚げられたうけのなかで白い腹を見せた。しまひには持つて來た魚籃が小さ過ぎるやうな氣がした。

いつもより遲く流したのが好かつたのか、ゆふべのちよつとした雨が好かつたのか、などゝ考へながら彼は重たい魚籃を提げてニコ／＼と陸へ上つた。きのふの事などはもう餘り口惜しいとも思はなかつた。

家へ歸ると、魚籃をわざ／＼蠶室まで吊し込んで皆に見せた。總領の子が手傳ひに來てゐた。急いで朝飯を濟ますと、彼は大きな籠を脊負つて山の畑へ、桑取りに出懸けた。眠いので頭がふら／＼するやうであつたが、彼はそれを何とも思はなかつた。

摘みにくい夏蠶の桑をずんと一と脊負ひ摘んで、正午過ぎに戻つて來た時、彼は妻から孝一が詫びに來た事を聞いた。妻とお清とがいつもの半裸體でゐた所へ、頭髮を分けたり眼鏡を掛けたりしてゐる男がひよこりと入つて來たので、彼女等はひどくあわてた事などをも。

「うむ、さうか、何と言つてゐた？」

彼の心の底にはまだいくらか昨日の憤りが殘つてゐた。

「どうも濟ませんでした、と言つてゐがしたよ」と妻は答へた。「昨日は祖父の墓參りに××まで一人で行かうと思つてゐたが、友達が遊びに來たので、急に陸を行く計畫をかへて、いつかこちらの叔父さんが使つても好えと親切に仰しやつて下すつた事を思ひ出して、ついあれを乘出してみましたのです。……あんなに遲く舟を歸す積ではなかつたが、若い者同志だものだから、つい面白くなつて、時間の經つのも忘れてしまつて、何とも申わけなしです。六郎君と弟の話では叔父さんが大變お腹立ちだつて聞きましたが、何うか叔母さんからお詫びを言つて置いて下さい、なんてね。」

「ふむ？　それで、お前は何と言つた？」

「あやまつて來られゝば、さう何時まで惡い顏もしてゐられないから、ナニ、うちでもそんなに怒る筈おぢやなかつたでせうが、自分の間が缺けたものだから、それでゞ御座んせう…　つて言つて置きがした。」

「お母さんは、あの時、隨分長く默つてゐたね。」と娘が側から口を出した。「わしあ孝一さんが氣の毒だつたよ、あの人にばかり喋らせて、ぷうんとしたやうな顏で何時までも默りこくつてゐるだもの。」

「それで澤山だ！」と作平は叫んだ。「おれがゐたら、うんと言つてやる事があつた。」

さうは言つたが、彼は別にこれといつて言ふべき事を持つてゐなかつた。たゞ、いくらか金があつたり、學問するとか何とか言つて遊んでゐたりする奴が癪に觸つてならなかつたのだ。

「へえ？　若い者同志だからつい面白くなつてだつて？　それが言ひわけかい、それが詫びの文句かい？　だから彼奴は生意氣だといふのだ。なる程、おれ等も若いうちは隨分惡さもして歩いたが、他人の迷惑になる事をした覺えはない。」

「だけれど、そんなに何時までも怒つてゐたつて仕方がない事ぢやありがしないか？」と妻はいくらか皮肉な目つきをした。そして獨り言のやうに「過ぎちまつた事を怒つたつて何うしようもない事だ。まだあそこから借りた金の殘りも濟してゐないから、そんな事も考へると、餘り怒つたりしない方が好（え）え。」

「それ、さういふ事があるから、餘計に默つてはゐられないのだ……借金は借金、道理は道理だ！」

彼は、しかし、自分でももう怒つてゐる積りではなかつた。喋つてゐると何時かひとりでに腹が立つて來るのだつた。默る方がよさゝうであつた。そして默つた。

親達の言葉を聞いてゐたのかゐないのか、手傳ひに來てゐる悴は土間の片隅に向うむきに座を構へて蓆（むしろ）にバサリ〳〵と柴を取入れては、しきりにむづを作つてゐた。

不具の子は柱に繋がれたまゝ、汚い疊の上にごろりとなつて晝寢をしてゐるらしかつた。そのいつものやうに大きく開いた口のまはりに二三匹の蠅が止まつたり舞つたりしてゐた。

戸外には、日が焼き付くやうに照つて、南瓜棚の南瓜の廣葉もだらりと萎れてゐるやうに見えた。作平は赤く日に焼けた顔から胸毛の深く生えてゐる胸から流れ落ち流れ落ちる汗を古手拭で拭きながら上り框へドサリと腰をおろした。

日が經つに連れて、彼は舟の一條を忘れて行つた。たまたま思ひ出しても、滑稽の事のやうにしか考へられなかつた。殊に、襤褸を被つて草のなかに待伏せしたり、急に思ひ掛けなく犬に吠え付かれたり夢中になつて草株や泥を掴んで犬に抛つたりした自分の恰好が傍から見てゐたらさぞ可笑しかつたらうと思はれた。

間もなく秋風が音づれた。濱の濱荻は焦茶色にすがれて、葭や蘆の葉も莖も灰色になつて綿のやうな尾花が老人の髪や髯を思はせた。

湖水の波も冷たい鉛色に錆びて、渡り鳥が空を渡つたり波間に浮いたりして、漁仕事もなかなかに骨の折れる頃に、また孝一の家の糸取りを始めたお清が「お父つあん、あそこで鯉か鯰が取れたら持つて來て貰ひたいと言ひがしたよ」と彼に言つた。

彼は或朝、舟から上がると直ぐに、魚籃を提げて孝一の家へ行つた。孝一の母親は、彼の聲を聞くと玄關まで出て來た、そしてまつ先に言つた。

「いつかはお氣の毒で御座んした。孝一がお前さんの舟を乗出して、ひどく間を缺かせたつてね。」

「へえへ、なあに」と彼は苦笑しながら答へた。「わしもあの時、あんなに怒らなくつても好かつたが、

すこし虫の居所が違つてゐたもので……」

「ふんとにね、若い衆ちゆう者は遠慮がなくつて。」

孝一の母親は敷居際に突立つたまゝさう續けたが、子供に代つて詫びると言ふ風ではなかつた。負け嫌ひでは作平の妻と同じやうに昔から村で名高い女であつた。それが冷やつこい眼つきのうちにも言葉振りのうちにもあつた。彼はそれを明かに感じた。「お前が、なにも、あんなに生意氣だの何んのと言ふ事はないぢやないか？」と腹の中で言つてゐるやうにさへ。

彼はあひ手の眼から眼を逸らして、てれ隱しに腰の煙草入れを探つた。

やがて、むかうの望むに任せて大きな鯰の目方を、その家の秤を借りて量つた時、彼は「ほかでないから端たはおまけして置きやせう」と言つた。

錢を受取ると、彼はちよつと押し戴くまねをして煙草入れに入れた。

五

明けるから暮れるまで柱に繋がれ通しの京助が、キャン／＼と獸のやうな泣き方をはじめると一時間も二時間も泣き續けたりちよつと油斷をしてゐた隙に糞や小便を盥に放りたらけて汚ない物を兩手で捏ねたり口に入れたりする事は珍らしくなかつた。そんなのを見ると、作平は時々死んでくれと祈つた。家の者とも相談して、刃物で殺すか淵川へ沈めるかしようと思ひ詰めた事もあつた。

「何の因果か？」

さう口に出しても言つて、その因果を考へる時、彼は何を考へる時よりも重い深い憂鬱に陷るのが常であつた。それは考へても〳〵彼ひとりの頭では解くことが出來なかつたからである。結局は、いつでも同じやうに、かういふ不具者を子と持たなければならなかつた不運をかこつより外なかつたからである。

で、その不運から逃れるのにはそれの源因でもあり結果でもある京助が影も形もなく消えて行けば好かつたのである。自ら手を下ろすわけにはゆかなかつたから、彼は自然の成り行きを待つた。その子がちよつとした病氣にでも罹ると、それかひどく重つてくれゝば好いと思つた。死ぬまでに重つてくれゝば好いと。だが、さういふ考へ方は自分でも空恐ろしかつた。さういふ考へを起こす人間だからこそかういふみじめに逢つてゐるのだとも思ひ返した。それからまた、次男の成業を樂しんで待つ場合には、京助の事もさう苦にするには及ばないやうな氣がした。

「片輪の兒程可愛い」といふ世間の諺を、彼は身にしみて感ずる場合もすくなくなかつた。實際彼は四人持つた子供のうちで、末の子に一番目を掛けてゐた。また目を掛けなければならなかつた。

機會は、不具の兒を何處かへ浚つて行つてくれさうな機會は、彼が待つてゐた時には來なくて、待つてゐなかつた時に來た。

それはその翌年の正月の事であつた。或晩、隣りの家でお正月遊びに花牌をやるから來いと言はれて彼は若い時分には好きで可なり耽つた方だつたので、降るなかを出懸けて行つた。そして、たとでは面白くないからすこし賭けようといふやうな事で、夜遲くまで勝負を爭つてゐた。そこへ、京助が燒傷を

したからと言つて家から彼を呼びに來た。彼は驚いて座を起つた。

「ひどく燒いたのか、ひどく？」

彼は迎へに來た娘と一緒に急ぎ足で歸りながらさう訊ねた。雨は雪に變つてゐた。

「あゝ、隨分燒いたやうだよ、苦しがつて〳〵」と娘は喘ぎながら答へた。

彼はわが家へ驅け込んで行つた。妻に抱かれてキャン〳〵泣き叫んでゐる京助を見た。覗き込んだ。

「まあわん等は何うい ふ間抜けだ！ 二人付いてゐながら、こんな、こんな……」

彼は胸迫つて口が利けなかつた。子供は燒傷の爲めに怪物のやうに膨れあがつた顏と兩手とを、さも痛さうに熱さうにピリ〳〵と顫はせながら聲を限りに泣いてゐた。薄く生えてゐる頭髮は燒けたり灰を被つたりしてゐた。着物も半分焦げてゐた。それはもう手も付けられないみじめさであつた。

妻が上づつた調子で話す所によると、寒いので彼女は京助を抱いて焚火にあたつてゐるうちに、つい眠くなつてしまつた。ふつと氣が付くと、子供は何時の間にか彼女の膝を離れて火の壺へ伏さつてゐた五德には大鐵瓶が載つてゐて、それまでが引繰り返つて、火と煮え湯とが一緒になつて子供を燒けたゞらせたものらしかつた。その時、お清は生憎便所に行つてゐた。

「お清、早く味噌を持つて來う。うんと味噌を塗つてやれ、味噌を‥それから直ぐに醫者を呼んで來う、これはとても素人療治には行きさうもない……眼が潰れはしないかな、眼が……」

妻の話を聞く間に、やつと何うしてよいかを考へ付いた彼は、叱るやうに呶鳴るやうに、そんな事をきれ〳〵に娘に命じた。直ぐに娘は味噌桶から味噌をすくつて來てゆす〳〵膨れて來た燒傷になびつ

やつた。それを彼はまともに見てゐられなかつた。味噌の鹽氣が傷に滲るとみえて、子供は兩脚で盥を蹴つて一層泣き聲を張りあげた。

「うむ、醫者へはおれが行つて來る。」

たゞあわてゝ切つて側でまご／＼してゐるだけの自分に氣付くと、彼はさう言つて戸外へ出た。傘を翳して往還を醫者の家の方へ歩いて行く時、こんな降りでは醫者がオイソレと來てくれるか何うかと危ぶんだ。それに連れて、「あれであの子も死んでくれゝばえゝ」といふ考へがふつと浮んで來た。が、「非道の事を考へては可けない」といふ一つの考へがそれを揉み消した。もつと外の病氣か何かでならだが、あの儘死なせてはあんまり可哀相過ぎた。一刻も早くあの痛みを取つてやりたかつた。

彼はポロ／＼と涙を溢しながら、歩きにくい雪の道を急いで行つた。

京助の燒傷は案外に輕かつた。兩手は火で燒いたのだが、顏は煮え湯を浴びたゞけらしかつた。眼も助かつた。一と月程經つうちに傷はすつかり治つて、兩手にすこし引吊れが殘つたゞけであつた。

陰暦四月の初申は村の鎭守の祭であつた。

その日の正午過ぎに、作平は赤飯を二た重箱と野菜や川魚の煮付けを一と鉢淺黄の風呂敷で包み、自分の紋付羽織と長衣とを白木綿の風呂敷で包み、それ等を例の小舟に乘せて六首川尻から漕ぎ出した。祭の馳走を次男の作三に食べさせようが爲めであつた。それに、倅の主人である醫者にも逢つて、日頃

の無沙汰の詫びをしたり、末の子が燒傷をした時によく利く塗り藥を送つてくれた禮を言つたり、伜の行末をもしつかり頼んだりしようと思つてゐた。

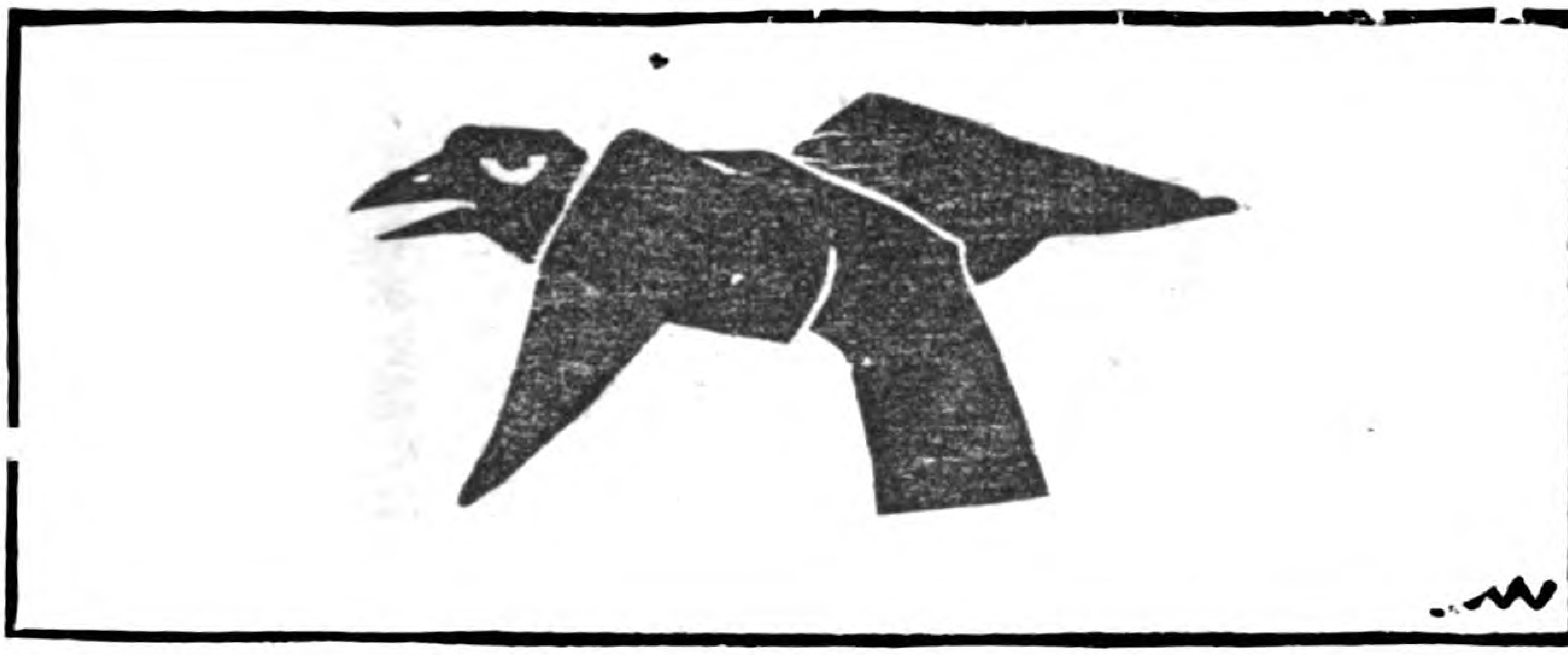
空は暖かく綠に晴れて、湖水は鏡のやうに澄み渡り、島の櫻もチラホラと咲いてゐた。家で祭の酒をしたゝかに飲んで來た彼は、多年の手練で艪拍子を過つやうな事はなかつたが、ともすれば腰がフラフラするを覺えた。

「アヽ、好い氣持だなあ！　おれは隨分久しい事この水の上を往つたり來たりしたが、こんな好い氣持でこんな好い景色をゆつくり眺めた事はなかつた。アヽ、實に好い氣持だ！　今日は桑原醫院の白ボートは出てゐないな。あれが水に浮いたところは、全く白鳥のやうだ。作三の野郎は今頃何をしてゐるかな？　おれがわざ〳〵御馳走を持つて行つたらさぞ嬉しがるだらう……」

そんな事を思ひながら、彼は小舟に相應はしい輕い艪を、ギイと押してはギイと引いた。その度に野良着を着てゐる彼の體は器械人形のやうに一定の角度でフラリ〳〵と前後に動いた。

いよ〳〵むかう岸の桑原醫院の大きな建物の見えるあたりまで行くと、彼は艪を引揚げて、舟を漂ふにまかせながら、野良着を脱いで晴れ着に着換へようとした。體がひどくフラ〳〵した。彼は白木綿の風呂敷をひろげて、まづ長衣を着て角帶を締めた。羽織を着た。やがて、立つたまゝ衣紋をつくらはうとして兩手を襟のところへ持つて行つた。よろ〳〵と足もとが崩れた、と同時に小さな輕い舟は彼の體の重みでひどく傾いた。オヤ？　と思つた時には、彼の體はとんぼ返りを打つてドブーンと水の中へ落ちた。深く、深く………

（をはり）



「鰊ころし」

長田幹彦

一

海は一日暴れてゐた。葡萄色の腹をみせながら屏風のやうにつゞいた海岸一帯の斷崖の裾へ來て砕ける波浪は大して激しくもなかつたが、それでも神居岬の突端から外洋へかけて恐ろしいオホツク風が吹き荒れてゐるとみえ、遠い沖の方には萬馬の振り亂す鬣のやうな白波が際涯もなく狂つて、物凄い沖鳴りがしつきりなしに轟々と聞えて來る。空には綿のやうな雪雲が水平線の端れまでもくもくと重疊して、薄日が照つたり翳つたりしてゐながら時折粉雪が濃霧のやうになつてすうつと山から山へ匐つてゆく。漁期の間に寒氣がゆるむと此附近の漁場では必ずかうした不思議な空模様がつゞくのであつた。

夜に入ると空は全く密雲に掩はれて、又激しい吹雪が襲つて來た。激しいと

云つても嚴寒の間のやうなことはなかつたが、併しそれでも見る見るうちに根雪のうへゝは新らしい吹溜りが幾箇所となく出來てゆく。崖の鼻になつたところにも眞白な雪の堤が出來て、風の音は枯れつくした裏山の雜木林のなかで騷々しく喚いてゐた。

サンナイの漁場ではもう殆んど人の往來も途絶えてしまつた。裏山から海岸まで急な傾斜に沿つて、此處に二戸、彼處に三戸と段々に建てられた六十戸ばかりの人家も大方戸を閉ざしてしまつたので、紅黄い燈火の洩れる家は幾軒もなかつた。それ〲横しぶきに吹きつける粉雪にかき暮れて、眞暗な一帶の漁村は唯吠え狂ふ風の音と波浪の音で寂しく更けて行くのであつた。

丸十と金山の漁場の間にある小高い岩山の裾のところにはこの村へ物資を供給する平家建ての店屋が三軒ほどかたまつてゐた。一軒は酒屋で、あとの二軒は荒物屋とそれから漁具の繕ひをする鍛冶屋であつた。なかでも酒屋が一番大きな店で、そこでは、酒醬油の類から石油や雜穀のやうなものまで賣つてゐた。そして店を二つに仕切つて、片方では一寸した飲屋もやつてゐた。肴といつても此處邊のことであるから地物の魚の煮たのか、野菜の煮しめぐらゐしか出來なかつたが、併しそこには漁期になると所謂「鰊ころし」の女が三人も四人も稼ぎにやつて來るので、兎に角此の界隈きつての歡樂場なのであつた。その店は新潟屋といつた。

表には硝子の割れめを紙で張りふさいだ汚い四枚戸がたつてゐて、軒先には「新潟屋」と紅い字で書いた洋燈が海から吹き上げて來る雪風に惱まされながら寂しく點つてゐる。なかは石高な砂地をそのまま踏み固めた土間になつてゐて、形ばかりの飯臺が三側に並べてつくりつけてある。腰掛もつくりつけ

になつてゐたが、足りないところには醤油樽の古びたのや、かます止めに板を打付けたのが置いてあつた。そして天井のない屋根裏から釣るした三つの洋燈は煤けた板羽目や奥の方の料理場を凄まじく照らし出してゐた。

かうした沖の荒れる日には鰊の網も隙なので、店には兩方の漁場の出面（勞働者）達が七八人ほど集まつて、酒を飲んだり、賭博をしたりしてゐた。此邊では箆のやうな竹片に符牒を書いてそれを引き當てる幼稚な賭博が行はれてゐて、それで十錢五錢の錢を爭ふのである。氣の荒い無智な出面達のことゝて酒が過ぎると僅かなことから爭鬪が起つて、しまひには血をみねばやまないやうな騒ぎになることも珍らしくなかつた。

七八人の出面達は土間の眞中に切つた爐へ白樺の榾火をどんどと焚いて、それの周圍へ雀押しにかたまつてゐた。股火をしてゐるものもあれば、飯臺の上へ倚りかゝつてくづれるやうな格好をしてゐるものもある。榾火から立騰る煙は濛々と屋根裏へ渦卷いて、洋燈の光も暗く息をしてゐる。榾火がぱつと燃えあがる度に出面達の顔も、その間に立ち混る女達の顔も一様に氣味の惡いほど眞紅に照らし出されるのである。

彼等の呷る酒は新酒が主なので、灰汁の强いその燗の匂ひは榾の樹脂の焼ける匂ひや鰊の匂ひと一緒になつて飯臺のまわりからむんむとするほど匂つて來る。賭博で負けたものは自棄になつてコップで酒を呷つては騒ぎ散らす。なかには手拍子を打つて妙にうら悲しい海の唄をうたひ出すものもゐたがその聲はいつか戸外で吹き荒れる吹雪の音に呑まれてしまふ。「鰊ころし」の女達は潮風に色褪せた頭髪を束

髮に結つたり手づくねの銀杏返しに結つたりして細帶ひとつの穢ろしい風姿でその群の間に出たり入つたりしてゐる。出面達が手を握つたり、肩を抱いたりして猥らな惡巫戯をする度に、安白粉で塗り隱したその顔は荒くれた土地にふさはしい媚びを呈する。彼等のつかふ言葉は磯に打寄せる波のやうに荒かつた。

かうした出面達は水草を追ふて歩く古昔の遊牧の民にも等しい生活をしてゐるのである。鐵道や汽船の文明から遠く離れた邊鄙な漁場ではさういふ生活が最も便宜であつた。彼等は冬になつて執念深い雪が大地を掩ひつくすと幾つかの峠を越えて深い山地の方へ伐木の勞働者になつて入り込んでゆく。三月四月となつて漁場が忙がしくなると又海へ歸つて來る。そして漁場が終ると、今度は又峠を越えて耕作地の方へ流れてゆく。そこで夏から秋の收穫の頃まで土煙にまみれながら無頼の生活を營むのである。

彼等の移動につれて動いてゆくのが所謂「鰊ころし」の女の群であつた。町から町、山から山、海から海へ彼等は常に萍のやうに流れ歩いてゐるのである。出面の集るところには必ず此等の身を持ち崩した零落の女の群が影のやうにつきまとつてゐる。彼等の社會にも亦戀もあれば、涙もあつた。そして一漁期四圓か五圓の出面達の勞金はすべて酒と彼等のために浪費されてしまふのである。血を流すやうな恐ろしい爭闘も、刑事上の犯罪も彼等がその源因となつてゐる場合が多かつた。

酒興が熱して來るに從つて、戸の隙間から忍び込んで來る寒氣を防ぐために榾火は益々明るく焚かれる。出面達も幾度となく出代りになつて、賭博の席は漸次と熱して來る。そこへふと表の硝子戸が消魂しく開いて、戸外からさつと吹き込む粉雪と一緒に脊丈の高い屈強な出面が頭から赤毛布をすつぽり被

ぶつて、

「うゝ、寒い。」と、云ひながら飛び込んで來た。長い路を歩いて來たとみえ彼の肩先から腹へかけて向ふ風が吹きつけた雪が眞白にくつついてゐる。

その男は雪を拂ひ落としながら戸外へ顔だけ出して、

「おう、勝峯。愚圖々々しねえで、早く入んな。こゝで熱いのを一杯やつてからぢやねえだか。それでねえば凍え死んぢまうぜ。」と、聲をかける。

それと一緒に戸外からは同じ様な風體をしたもうひとりの出面がいかにも寒さうな格好をしてもぞもぞ入つて來た。前の出面にくらべるとずつと小柄で、毛布の間から見えるその顔は病人のやうに蒼ざめて力がなかつた。

爐のまわりの連中は二人が入つて來たのに氣がつかなかつたが、ふとそれをみかけた若い女のひとりはいきなり立ち上つて來て、

「おや、鶴田さあ。よく來なすつたゞねえ。」と、云つて傍へ歩み寄つてゆく。その聲で爐傍の出面達は一齊に店口の方を見返つたが、先へ入つた出面はそれに笑顔をみせながら、

「よう、集まつてるだねえ。えらく吹雪でねえか。」と、云ひかけて、そのまゝ皆のすぐ後の飯臺へいつてさも疲れたやうに腰を下ろす。勝峯と呼ばれた男も赤毛布をぬいで、土間へ置きながらその向ふへ腰をかけた。二人ともモッペのやうなものを穿いて、筒袖の布子の前を荒縄で結んでゐた。

爐端の連中のなかゝらは、

「今年なまあどうしたと云ふだえ。漁期に入つて妙に暖えと思つてゐたら、又この吹雪だあ。仕様のねえ天道様だねえけえ。」などゝ挨拶を返すものもある。

鶴田は懐から煙草入れをぬきだして、大きな鉈豆煙管で旨さうにぱくぱく煙草を吸ひながら、

「だが、この鹽梅ぢや鰊はいゝなあ。これで明日からりとすりやてえしたもんだ。はゝゝ。今年や働きべえがあるぜ。」さう云ふ彼の樣子にはどことなくゆつたりとした落着きがあつた。年ももう四十を越してゐるらしく、顎鬚の生へてゐるその顏は出面といふにしては恐ろしく威嚴があつた。その威嚴のおかげで彼は此の濱でも出面達の間で鶴田、鶴田と立てられて、誰れしも彼には一目おいてゐるのであつた。物分りのいゝ、俠氣のある男で、新潟屋からは六丁ばかり離れた丸十の漁場でも出面仲間の人望家であつた。生れは何處とも知れなかつたが、その言葉には何處かに九州の訛が殘つてゐた。

鶴田は女が酒の仕度をして來ると、煮えたつやうな熱燗を湯呑に注いでさも餓えてゐるやうにぐつぐつ呷りながら、

「おう、勝峯。お前も飮んだらどうだね。そんなに元氣がねえぢや仕様がねえぢやねえか。熱いやつをぐつとやつて見な。」と、云つて酌をしてやる。

勝峯は飯臺のうへゝ兩肱ついて、ぐつたりしてゐたが、さう云はれると寂しく笑つて、

「飮むのはえゝだが、明日また體に障るでね。」

「はゝゝ。意氣地のねえ野郎だ。そんなにびくびくしてるから病氣なんぞにとつつかれるだあ。今の若さに何んでえ、ちつとべえ體が惡いぐらゐで酒も飮めねえやうぢや死んぢまふぜ。なあ、ぐつとやん

ねえ。はゝゝゝ。」と、云つて、彼は湯呑みをとつて勝峯の方へ突きつける。

勝峯は仕方がなささうな顔をしてちびちび口をつけだした。彼はこの漁場へ來てから暫らくすると體を惡くして、働くには働いてゐるが今にまださつぱりしないのである。醫者にかけるではなし、藥を飲むではなし、唯自然のまゝに任せてあるので、彼は自分でもどうなつてゆくのか分らなかつた。小樽で石炭の仲仕をしてゐるうちにいつともなくかうした出面の群に落ちてしまつた彼は、もとから餘り强壯な方ではなかつたのであつた。此頃ではたしかに何處か體の大事なところが惡くなつてゐると見え、日に日に力が衰へてゆくやうな氣がする。それに一倍激しい勞働をしなければならないだけに、彼は先のことを思ふとに妙に心細くなるのであつた。そのために彼は始終氣が鬱して、口數も碌にきかなかつた。鶴田は數多い出面達のなかでもこの勝峯を弟のやうに可愛がつてゐた。

鶴田は他の出面達と漁の話などをしながら頻りに飲んでゐたが、そのうちに女達のなかでも兎に角眼鼻だちのとゝのつた小肥りに肥つたひとりが代りの德利をもつて傍へやつて來ると、それをつかまへて、「おい、お淸。」と、呼びかけながら、「お淸、われ勝峯を連れて來てやつたゞから、此處へきてちつと酌でもしろや。」と、笑ひながら云ふ。

女はそれを聞くと一寸煩さゝうな顔をしたが、そのまゝそこへ立止まつて、

「鶴田さあ、何を云つてるだね、今更らしい。」と、お座なりを云つて、燗德利を取りあげる。

鶴田は湯呑みになみなみと注がせながら、

「ときにお淸。われ此頃俺あとこの漁場の小山とあやしいちうでねえか。そらほんとのことか?」と、

揶揄ふやうに云ふ。

それを聞いた爐傍のひとりはふいに此方を振返つて、

「はゝゝ。ふんとどころか、なあ、鶴田、こんで一緒にゐるところをみてみねえ、まるでさかりのついた猫だあ。はゝゝ。そんでなんだちうぜ、夫婦約束までしたんだちうぜ。」と、口を入れる。

鶴田はお清の顏をみて、

「夫婦約束をした？」と、云つて一寸眞顏になつたが、すぐ又笑ひ出して、「そりやお目出度いこんだ。はゝゝ。こんなかぢやわれが一番人間らしい面してやがるでな。」と、云つて、そのまゝ又酒を呼り出した。

お清は默つてしれしれ笑つてゐたが、やがてぷいと向ふへいつてしまふ。爐傍の連中はなんのかんのと云つて冷評したが、お清は太々しい顏をして何を云つても受けつけなかつた。そして料理場へ入ると暗い隅のところへ腰をかけて鼻糞をほぢくりながら外方を向いてゐた。

鶴田はその樣子をぢろりぢろり眺めてゐたが、何氣なく勝峯の方を振返へると、その時彼は打跗めされたやうに肩を落として、何事か思ひありげな傷ましい眼眸をして、じつとお清の方を見てゐる。鶴田は何か云はふとしてそのまゝ言葉をのんでしまつた。

その時、爐傍では賭博に負けたひとりが、さも忌々しさうに、

「あッ、又俺食はれた。くそッ　どしうして臭れべ。こんでもうはたいちまふだあ。思ひきつて皆はつちまへッ。」と、大きな聲で怒鳴る。皆は嘲るやうな聲をたてゝ笑つたが、それでも何處か殺氣だつてゐ

た。

家ぢうはそれと一緒にしばらくの間ひつそりする。竹篦をかへす音がかたかたと響いて、皆張り切つた顔をして息をつめてゐる。と、また戸外では崩れるやうな吹雪の音が屋の棟をゆるがして、四邊は森々と地の底をどよもす怒濤の響ばかりになつてしまふ。

そこへふと表の硝子戸が開いて、又一人の出面が飛び込んで來た。それは今噂のあつた小山で、毎晩のやうにこの店へ入り浸つてゐる男なのである。つい去年の漁期に泊の漁場から流れ込んで來たあぶれ者で、漁にかけてはなかなか腕はあつたが、性來豪慢で、性のよくない男であつた。同じ漁場の飯を食つてゐながら鶴田とは妙に仲が惡くて、始終何かにつけて張合つてゐた。それもひとつには鶴田が人望家なので、小山の方は自分の存立上態と楯ついてゐる形もあつた。二人は漁場でも各自の黨派をもつてゐて、漁場を預つてゐる船頭の倉原を除いては二人共に隱然たる勢力をなしゐるのであつた。

小山は鶴田が來てゐるのを見ると一寸眉を曇らせたが、それでも輕く頭を動かして挨拶だけはした。そして鶴田とは反對の側の奥の飯臺へいつて腰を下しながら、

「おい、お清。俺に泡盛をくんな。」と、云ふ。

お清は小山の姿をみると前とは打つて變つた態度になつて、泡盛をもつたコップを持つて彼の傍へいつたつきり對向ひに腰をおろして、何事かこそこそ内證話しをしはじめた。小山は暗いランプの灯影に額だけ照らされながら頻りに合點いてゐる。泡盛のコップはしばらくの間に彼の前に三つ並んだ。お清はちよいちよいひとつコップをとつてはすけてやつてゐる。その樣子が態と見せつけてゐるやうに見

えた。

爐傍の者達は勝負の合間に愚にもつかねことを云つては二人を冷評してゐた。併し二人ともそつちへは見向きもしずに、頻りに語りつゞけてゐた。

鶴田はしばらくすると少し酔つた顔に妙に張り切つた色を浮べながら、

「おい、お清、俺あにも泡盛をくんな。」と、云ふ。

お清はそれには態と返事もしずに相變らず話しつゞけてゐる。

鶴田の顔には電のやうに憤怒の色が閃めいた。

「おい、お清。われ聞えねえだか?」その聲は強く響いた。

お清はそれでも此方を見返りもしずに、すぐ傍にゐるもうひとりの女を顧みて、

「島さあ、泡盛だとよ。」と、投げ出すやうに云ふ。

鶴田はかつとしたやうに、

「やい、お清、泡盛やわれに云つてるだあ。われが自分で持つて來う。」と、云つたが、お清はそれをせゝら笑つて、

「厭なこつだ。今島さあが持つてくから待つてなよ。私やこゝの番でねえか。」と、云ふ。

鶴田はそれを聞くといきなり立ち上つて、つかつかとお清の方へ歩み寄つていつた。そして何をするのだといふやうに兩手を廣げて此方を見返へるお清の耳朶をぐつと引張つて、

「さあ、今云つたこともう一遍ぬかしてみろ。太え阿魔だ。さあ、ぬかせ、ぬかせ。」と云つて、そのま

ゝ自分の飯嚢の方へ引張つて來る。お淸は、「あッ痛え、痛えでねえか。あにをしるだあ。」と、叫びながら千断れるやうに引張られた耳に連れられてよろよろ歩いて來る。

媚傍の連中はさすがに賭博から氣をとられて、殘忍な顔をしながら面白さうにみてゐる。

鶴田は險相な眼つきをして自分の飯臺の傍へお淸を引据ゑると今度は平手でぴしりと彼女の頰桁を擲りのめして、

「お淸ッ俺あの云ふことをよく聞いとけよ。こりや今思ひついて云ふんぢやねえだ。もうこないだつから一遍われに云はふと思つて待つてたゞあ。」と、云つて、湯呑をとつてぐつとひと息に呷つて、眞黒な拳で口を拭きながら、「われは一體どういふ了見でこの勝峯に辛く當るだあ。もとを云やあわれは此の男に助けられたんぢやねえか。われが足腰もたゝねえやうになつてるのをやつとこゝまで連れて來てやつたなあ誰れだ。われもうあの時のことを忘れたゞか。」と、云つて、摑んだ耳をもう一度力をこめて小突き廻す。

事實、彼女はもとこの勝峯の情婦なのであつた。勝峯が岩内の町でごろごろしてゐた時分に、その頃矢張りそこでゴケ（淫賣）をかせいでゐた彼女と出來合つて、二人はそのまゝ岩内へ遁げて來たのであつた。お淸はもと函館で達磨茶屋の女から娼妓にまでなつて、それから轉々と諸方を流浪して今では全く「鰊ころし」の女となり下つてしまつたのであつた。誰れしも彼女の年を云ひ當てるものはなかつたが、もうなんでも二十七八で、今までの經歷を洗ひだてしたら恐ろしい罪の幾つかもつくつてゐるのであ

らう、何にしてもどうせ男を男とも思はぬ女のことであるからかうした稼業にも落ちたのである。

　二人は岩内を逃げてからしばらくの間狩太の方で山地稼ぎをしてそれからこの漁場へ流れ込んで來たのである。その時お清は惡性の梅毒でどうにもならなかつたのを勝峯がやつと脊負ふやうにして連れて來たのであつた。そして泊の漁場で怪しげな加持をして貰つて漸う體だけは役に立つやうになつたので、彼女はそれから間もなくこの新潟屋へ稼ぎに出たのであつた。

　鶴田は擱んだ耳を離しもしずに、散々にそのことを云つてお清を詰つたが、お清はひと言も口をきかない。そのうちにそれまで宙腰になつて様子を窺つてゐた小山は醉つた足許をふらふらさせながらやがてそこへのさばり出て來た。それと同時に四邊には急に殺氣が漲つて來て、今にも彼等の間では恐ろしい爭鬪が起りさうな險はしい雲行になつて來た。

　小山は鶴田が云ふだけのことを云つてしまふまでじつと我慢してゐたが、やがて憤怒に充ちた聲で、

「おい、鶴田。まあ、そこを離せ。」と、云つて、お清を自分の方へ引寄せながら「お前の云ふのも尤もだが、しかしこゝはお前の出る幕ぢやねえづら。お清の仕打ちが惡るけえばそこにゐる勝峯に文句を云はせろ。お前が愚圖愚圖ぬかすなあ餘計なお世話だ。」と、憎々しげに云ふ。

　鶴田は火のやうに燃える眼できつと小山の顏を睨めつけてゐたが、ひと言も口をきゝもしなければ眉も動かさない。まるで石で刻んだ人のやうに身動きもしなかつたが、しばらくするとそのまゝ將油樽のうへへ腰を下ろして燗德利から酒を注ぎながらしづかに呷つて、

「小山、お前はそれを俺に向つて云ふか。よし、それならそれで俺にも考へがあるだ。この先云ひつの

りや俺あお前と喧嘩をしなけりやなんねえから、今夜はこれで控えとくべえ。はゝゝ。こんな女ひとりでお前と俺あと喧嘩をしても何になるべえ。まあ今夜はよしにして、どうだ俺あこれをさすから一杯呑んで呉れねえだか。」と、強いて笑ひながら湯呑みをさす。

飲小山はさゝれた湯呑を強く突返して、

「まあそんなことあおいて呉んな。はゝゝ馬鹿々々しい。」と、云つてそれなりくるりと後を向いて自分の飯臺の方へ歸つてゆく。

鶴田はぶるつと肩をふるはして、

「飲まなきや勝手にしろ。」と、云つたが、その顔は笑つてゐながら或る深い決心を示してゐた。

鶴田はそれから手酌でぐびぐび飲んでゐたが、やがて何と思つたか懷からばら錢を出して勘定をして、

「おい、勝峯。もう歸るべえによ。又明日は濱が忙がしいだからな。」と、云つて立上つた。

二人はそのまゝ默つて戸外の吹雪のなかへ出ていつた。それを見送るとお清は料理場の前の暗闇のところで摑まれた耳をさすりながらむしやくしや腹で、

「ふんとに酷え野郎だ。人を猫つこと間違えてるだあ。俺の體が自由にしたけりや錢ようもて來う。錢もねえ癖に恩べえ着せやがつて……。」と、口汚く罵る。その聲は無論戸外にゐる二人の耳へも入つた。

爐傍では埒もない笑ひ聲が起つた。

吹雪は又ひとしきりひゆうつと軒先で泣くやうな聲を立てながら吹き過ぎてゆく。板羽目へ當る雪は砂を吹き上るやうにさらさらと鳴つた。

二

その翌日吹雪が晴れると、それから二三日の間はいゝ凪がつゞいて、鰊の厚群來が毎晩網へつきだしたので、何處の漁場もまるで戰のやうに活氣だつて來た。網を入れるだけでも手が廻らないので、無論魚の沖揚などはやつてゐる隙がない。網には新らしい袋が次々とつけられて、鰊の一杯入つた袋はそのまゝ海岸へ曳いて來て、灣入した岩礁の間へ繋いで置くより他はなかつた。

丸十の漁場でもその間に五百石からの漁獲があつた。

そのうちに晝間の間は漁場でもある限りの出面が總出になつて、兎に角にも鰊をひと袋でも多く陸へ揚げようと焦つた。身欠きにして鰊棚へあげることや、數の子をとることや、それから魚油、鰊滓などを製造することは二の次にして出面達は唯一心になつて魚の陸揚に骨を折りだした。

明るい日の光の射し渡つた丸十の漁場の廣場では毎日朝から日がかげるまで七八十人の出面が獨樂のやうになつてどろどろ立働いてゐた。海岸から鰊の廊下（板圍ひをした置場）の間を出面達は、まるで珠數のやうにつながつて往返してゐる。各自脊なかには木でつくつた朝顏のやうな箱を脊負つて、海岸の袋のなかゝら魚網(たま)でしやくつて入れて貰つた鰊を廊下へ運んで來ては足場のうへから流し込んでゆく。彼等の着てゐるものは肩と云はず胸といはず、すべてきらきらと銀色に光る鰊の鱗にまみれて、倦むこともなく機械仕懸のやうに歩み來り、歩み去つてゐる。地に積もつた根雪は泥と鰊の血とでさんざんに踏みよごされ、彼方でも此方でも悑げな唄聲や怒鳴の聲が明るい空氣をふるはしてゐる。なかで

も午後の二時頃が忙がしさの絶頂であつた。

勝峯はその前の晩網船でひどく寒い思ひをしながら働いたのが障つたか、その日は朝から頭が重くて苦しさうな顔をしてゐた。それでも漁場の小舍で寢起きをしてゐるからにはどうしても働かずにはゐられないので、皆と一緒になつて箱を脊負ひながら鰊をあげてゐた。そのうちに晝過ぎになると益々氣持ちが惡くなつて來て、ともするとふらふら激しい眼眩ひがする。しまひには立つてゐることさへ耐へられなくなつて、到頭鰊滓を絞る小舍の裏へいつて、根雪のうへへ仰向けに倒れてしまつた。そしてしくしく痛む腹を押へながら死んだやうに眼を瞑つてゐた。

生憎そこを通り合はせたのは小山であつた。彼は何處で飲んで來たのか酒氣を帶びてゐて、いつでもの癖の懷手をして鼻唄をうたひながら歩いて來たが、そこに勝峯が倒れてゐるのをみるといつからか機をみてゐたことゝて、一度行き過ぎて又引返して來ながら、

「おい、勝峯、あんだつて怠けてるだあ。この忙しいなかにそんなところへ隱れてゐやがつて、太えわい、らしだ。さあ、出て來う、頰桁つツてやるだから。……」と、大きな聲で口汚く罵りながらづかづかとそつちへ歩み寄つてゆく。

勝峯は薄く眼を瞬けて、唯じいつと彼の方を見ただけであつた。

小山はそれを見るゝ怒心頭に勃發したやうにいきなり勝峯の襟がみとつて引摺り起しながら、

「さあ、何とかぬかせツ、默つてゐたんぢや分らねえだあ。」と、怒鳴つたかと思ふと忽ち拳を固めて、勝峯の頰桁を突きぬけるやうな勢で擲りのめした。つゞいて右の足で脾腹を力一杯に蹴据ゑた。

勝峯は、
「うゝ……」と、呻めいてそのまゝ意氣地もなく根雪のうへゝ俯伏せに倒れてしまふ。しばらくの間は氣が遠くでもなつたか身動きもしなかつたが、とみると彼の鼻のあたりから根雪のうへゝ紅い血がじくじく流れ出してゐる。

小山は小氣味がいゝやうにそれを見てゐたが、やがて
「あんでえ、そんなざまでお清がどうなつたちうだあ。意氣地のねえわらしだ。口惜しきや起きて來て俺あを殺ろせ。」と、云つて、憎々しく笑ふ。

勝峯はそれでも肩ひとつ動かさなかつた。根雪のうへゝ投げだした兩手はわなわなど細かく打慄へて、まるで人心地もないやうであつた。

鶴田はその時、沖揚げの手傳ひをしに海岸へいつてゐた。魚網のところで澤山な出面達と一緒に唄をうたひながら袋をあげてゐたが、ふと何氣なく鰊澤の小舍の方をみるとそこでは小山が勝峯をつかまへて何かしてゐるので、彼はじいつと瞳を据ゑてしばらくの間樣子を窺つてゐた。どうみても小山が勝峯を責めてゐるやうなので、やがて彼は持つてゐた魚網の繩をはづして、
「一寸待つて呉んな。」と、云つて、そのまゝ廣場の方へあがつていつた。海の照り返しで薄く汗の滲み出た彼の顏には沈默の間に何かしら決意の色が動いてゐた。

小舍の裏へいつてみると、小山は鶴田が來たとも知らずに、お清がどうのかうのと云つて頻りに勝峯を罵つてゐる。鶴田はまるで猫のやうに足音を忍んで小山の傍へ歩み寄つていつたが、突如後から彼の

肩先を鷲摑みにして、
「おい、小山、わりや何を云つてるだあ。此方を向けやい。俺がゐるのが分らねえけえ。」と、云つたが、勝峯が血を流してゐるのをみると、吃驚してそのまゝ根雪の上へ片膝ついて、
「お、勝峯。勝峯、お前どうしたよあ。」と、叫んで、彼の肩へ兩手をかけて抱き起した。勝峯は打たれたところが惡かつたと見え、左の頰から唇へかけて眞紅な瘢痕が殘つて、鼻から出た血潮が眼尻のところまでべつとりくッついてゐる。そしてぐつたりと鶴田の腕へくづをれて、さも苦しさうに肩で息をしてゐた。
鶴田はそれをみると悸乎として、もう一度勝峯の名を呼んだ。矢張り返事がない。鶴田はそれをみるとその次の瞬間には勝峯の體はそのまゝにして置いて、いきなり仁王立ちにすつくと立ち上つた。
「やい、小山ッ、わりやこの勝峯を打つたんだな。こんな病人を手前はあんだつてこんな目に逢はせた。」と、鶴田は叫びながら小山の方へ詰め寄つていつたが、その眼は野獸のやうにぎろりと光つてゐた。
「あんだもねえだ。知れた話でねえか。この忙がしい最中に怠けてばかりゐやがつて、……」
鶴田はそれを云はせも果てず、
「怠けてゐるんぢやねえ、體が惡いから働けねえだ。そんだことぬかす手前こそどうだ、晝日中酒なんぞ食えやがつて。」
「ふん、俺あが酒を食はふが餘計なお世話だ。」小山はさう云ひながら空嘯いたが、鶴田はもう勘忍がならないといふやうに矢庭に小山の胸ぐらを摑まへて、力一杯にどんと押倒した。小山ははづみを食つて

よろよろと根雪のうへゝ尻餅をつく、その時鶴田は有り合ふ漁具の鐵鍵を腰から引拔いて、突如彼の腦天めがけて力任せに打込んだが、それと一緒に頭髮のもぢやもぢや生へた小山の頭からは鮮血が噴き出すやうに迸つた。小山は

「痛ェッ。」と、云つて雙手をあげて頭を抱へたが、そのまゝ腑がぬけたやうにぐつたりと悶絶したしまふ。

その物凄い爭闘をみた出面達はしかけた仕事を置いて海岸からも、廣場からも一散に驅け集まつて來た。そして口々に大聲をあげながら鶴田を抑へようとしたが、その時にはもう遲く、彼は旣に小山の蛇谷のところへ第二の一擊を加へてゐた。

小山は足をぴくりと拘攣させて一度は起き上らうとしたが、顏と云はず胸と云はず一面に鮮血を浴びてそのまゝやがて根雪のうへゝ死んで橫たはつた。

出面達は愕然として口も利けないやうな顏をしながらその樣を見てゐた。

鶴田は血に塗れた鐵鍵を強く強く握りしめながら默つて突立つてゐたが、その顏色は漸次と蒼ざめて來て、やがて今度は鐵鍵を小山の死體のうへゝからりと投げ捨てながら、

「態みやがれ。わりや一度はそんな目に逢はねえぢやならねえ奴だ。」と、吐き出すやうに云つた。そして根雪をすくつては血糊のついた手先を拭いてゐたが、さすがにその指はぶるぶるふるへてゐた。

そこへ急を聞いて漁場の頭の倉原が慌てゝ驅けつけて來た。その場の樣子をみると二度吃驚して、

「まあ、どうしただあ。」と、息を彈ませながら叫んだが、併しもう多年の間荒つぽい出面達を扱ひつけ

てゐるので、餘計なことを云つて彼等を激昂させるやうなことはしなかつた。しばらくしてきつと鶴田を見詰めるその眼は自分達でしたことは自分達で所置をつけろと命ずるやうにみえた。

鶴田はやつと氣が落着いたかして、やがて倉原の方を見返しながら、

「親方、どうも漁場を騒がせて濟まねえことをしました。俺あ泊の巡査のとけへいつて自首しますだから勘辨しておくんなんし。」と、靜かな聲で云つて、「どうせこの野郎たあ一度はかうならなけりやならなかつたんでがす。」と、云つたつきりもう何にも口をきかなかつた。根雪のうへから反映して來る明るい日光は彼の男らしい顔にかつと映つてゐた。かうした慘劇があつたにしては餘りに明るすぎるその光は却つて物凄く皆の眼にしみた。海から吹いて來る風には鰊の腐つてゆく匂ひがむんむとするほど匂つてゐた。

三

その日の夕方になるとそれまで意識が朦朧として妙にうつらうつらしてゐた勝峰は急に吃逆がついて、漁場の出面小舍の隅でひどく苦しみだした。小舍のなかは全部廣々とした板の間になつてゐて、普通の家なら天井を張る屋根際のところに大きな棚のやうなものが四方から張り出してある。出面達は何箇所にもかゝつた梯子をあがつてそのうへで寢るやうになつてゐた。寒氣をしのぐために窓が少くしてあるので、そのなかは晝でも薄暗い。板間の眞中に仕切つた三箇所の圍爐のなかで燃える榾火が僅かに屋根裏を照らしてゐるのであつた。

勝峰は圍爐の傍へ蓆を敷いてそのうへ、鰊の鱗にまみれた着物のまゝながながと横になつてゐた。小山の死體も此處へ運び込まれる筈であつたが、それは鶴田が身をもつて拒んだ。そして彼はそのまゝ勝峰の枕許へ坐つてたつたひとりで介抱してやつてゐた。漁場ではもうそろそろ鰊の支度に忙がしく、大方の出面は濱へ出てゐるので、小舍のなかは物凄いほどひつそりしてゐた。

勝峰はさも苦しさうに吃逆をつゞけてゐたが、その間にも胸を絞るやうな譫語を云ふ。多くはお淸に對する怨言で、時には聞いてゐられないやうなとまで口走つた。鶴田は大きな聲で幾度か勝峰の名を呼んだが、彼は少しも正氣づかない。鶴田の眼には泪が光つて來た。

「可哀想に、お前の心持ちは俺あによう く分つてゐる。……」と、呟いて鶴田はそつと勝峰の頭を撫でゝやつた。

そのうちに日は漸次と翳つて來て、寂しい黄昏がやつて來た。愈々鶴田が泊の駐在所へ自首して出なければならない時が來たのである。

鶴田はやがて名殘惜しさうに立上つて、

「ぢや勝峰、俺あもういくぜ。お前ももうどうせ長えとはあるめえが、まあ達者でゐてくれ。」と涙ぐんだ聲で云つて、そのまゝ自分の寢どころの上へ上つて赤毛布を降ろして來てそれを頭から引被ぶつて、闇にほのめく勝峰の顏を見返り見返り戶外へ出ていつた。せめて倉原にだけは暇乞ひをしていきたかつたが、濱ではもう出船の支度をしてゐるらしいので、却つて皆を騷がせるのも厭なやうな氣がして、彼はそのまゝ漁場の婆さんに言傳てを云殘して裏山へぬける道から登り下りの激しい村道へとぼとぼとの

ぼつていつた。

漁場のすぐ上の小山へ登ると、眼の前には遠い雷電峠の沖から神居岬へかけて一望暗澹とした裏日本の海面が際涯もなく展けてみえる。もう夕陽は水平線の彼方に沈んで、浩蕩たる波路の末には眞紅に燃え爛れた夕榮雲が縞のやうになつて搖曳してゐる。海から吹き上げて來る寒い寒い風は枯れつくして雜木山を横なぐりに吹きどよもして、刻一刻に暗くなつてゆくそこらには人の氣勢さへない。海岸から七八丁の間に流された差網の浮樽は水鳥のやうに波に弄ばれて、そこに浮ぶ漁船の數は漸次に増してゆく。一帶の崖裾には篝火がちらほら燃えだした。

鶴田はその光景をみると何故かぶるッと肩をふるはした。そしてもう何も見まいといふやうにやがてそのまゝ足を早めて歩きだした。

道は自然と下り坂になつて、やがて新潟屋の前へやつて來た。そこまで來ると鶴田は何と思つたか一度行き過ぎて又引返して來ながら、そこの硝子戸をがらりと開けた。漁の方が忙がしいのでなかには飲んでゐる出面達の影もなく、薄暗いランプががらんとしたなかにぼんやりともつてゐた。

料理場の入口に蹲んで洗ひものをしてゐたお島は彼の姿をみると吃驚したやうに頓狂な聲で、

「お、鶴田さあ……。」と、云つた。そして前懸で手を拭きふき此方へ出て來て、「今頃何んだあね、濱の方が忙がしかんべえに。」と笑ふ。

鶴田は默つて飯臺へ腰をかけながら、

「濱も忙がしいが、俺あまだ忙がしい用があるだあ。」と、吐き出すやうに云ふ。

「忙がしいて、何處かへ行くのかね？」
「うん、泊さいぐだあ。」
「え、泊だと？　まあ、これからぢや遲いでねえか。」
「遲くつても仕方ねえ。それより俺あに泡盛をくんな。泊までは四里の夜道だ、泡盛の三杯や四杯飲んでつたつて途中でさめちまはあ。はゝゝ。」鶴田は口を開けて笑つたが、その眼には何とも云へない沈痛な色が浮いてゐた。

漁が忙がしいために漁場からはまだ誰れもこゝへはやつて來ないと見え、小山との爭鬪の噂は少しも聞えてゐない樣子だつた。それでも鶴田は何かしら氣がゝりになるらしい眼つきをして頻りに女達の顏を搜るやうにみてゐた。お清の姿がそこらに見えないので、ひとつにはそれが氣になつたのであつた。

お島はやがてコップに泡盛をなみなみと注いで持つて來た。そしてそのまゝ自分も彼の眞向ふへ腰を下ろして、
「泊さまでぢやえらいねえ。照岸の手前で今隧道を掘つてるで、道が危えちうでねえか。昨日八つあんの話を聞いて、私ら恐かつた。あんでもいけえ石が默つてゝもごろごろ落ちて來るだてね。雪崩れよりもふんとに恐えさうだ。あんたも急な用でねえば明日にしなすつたらよかつぺ。」と、親切らしく云ふ。お清が小山と仲がよくなりだしてからは、このお島の方は妙に鶴田に愛嬌を賣るやうになつてゐた。

鶴田はそれを聞くと苦笑ひをして、
「はゝゝゝ。途中の道ぐれえが恐くつちやとても泊さいげねえだよ。」と、云つて、急に思ひついたや

うに「ときにお清つこは何處さいつたと。家にや居ずか？」と、訊く。

お島は何氣ない調子で、

「清さあは今うへの八つあんのとけえ湯を貰ひにいつたと。もう歸つて來る時分だよ。」と、答へる。

鶴田はそのまゝ默り込んでぐびぐび酒ばかり呷つてゐた。

半時ばかり經つと彼も可成り醉つて來てそれでも何處か氣が滅入つて來るやうにともすると頻りに嘆息ばかり吐いてゐたが、やがて又

「お清はどうした？　まだ歸つて來ねえでねえか。」と、云ふ。

「ふんとにね。なにしてるんだんべ。もう歸つて來さうなもんだに。それとも又あそこでおしやべりこいて歸るのを忘れてるのかも知んねえね。」と云つて、お島は唇だけで笑ふ。

鶴田は飮むだけ飮んでしまふと、硝子戸越しに一寸戸外を覗いて、

「どりや、それぢやひとつ行つてくべえかな。おい、お島、錢にや明日持つてくるぞ。」と、云つて、そのまゝ赤毛布を持つて立上つた。

お島はそれを送つて硝子戸の口まで出て來たが、そこで、

「ぢや又明日歸りに寄つてくんな。待つてるだあよ。」と、後から言葉を殘す。

鶴田は默つて戸口を出かけたが、急に後を振向いて、

「おう、お清は八造のがにゐるだあな？」とたしかめるやうに訊く。そしてお島が笑ひながら合點くのをみると硝子戸をあけてふらふらしながら戸外へ出ていつた。その時醉つた彼の眼は妙に殺氣を帶びて

ゐた。

戸外へ出てみると四邊は晝間のやうな月夜になつてゐた。吹く風は襟もとからぞつとするやうに吹き込んで來て、鶴田は思はず齒の根も合はないやうに身慄ひしながら、

「うゝ、えらく凍れる。」と、獨語を云つた。

泊への道は眼の前に横たはつた山の尾根を越えてゆくので鰊棚の間を登つていかなければならないのに、鶴田は何故かそつちへはいかなかつた。そこから崖端へ出て二尺ばかりの小徑を上へ上へと蹌めきながら辿つていつた。その先には此邊の網方のひとりである八造の家があるのである。

うねうねと登つてゆくうちに道はいつか何十仭とも知れない高い高い斷崖のうへゝ出た。脚下には崖裾を洗ふ波浪が月の光に白く碎けて、吠えるやうなその音が轟々と湧いて來る。惡魔の斧鉞で一氣に削り落としたやうにそゝり立つ巉巖は眞暗に月の光を遮つて、波の碎ける音は陰々とその彼方へ冴してゆく。どうみてもそこらは人住まぬ太古のやうな世界であつた。

振返つて海の方をみると、もう丁度刻限なので網にはさかんに鰊がつきだしたと見え沖には篝火の列が炎々と動いて、波の音の合間に網をあげる唄聲がかすかに聞えて來る。月の光を一面に浮べた海面には船の影が軸だけちろちろ光つて、よくみるとそのあたりには鰊の群について來た海鳥の群が雪片のやうに幾百羽となく叢立つてゐる。篝火の光がくわつと勢よく燃えあがると海鳥の白い翼は狂ふがごとくに亂れる。

群を離れた海鳥の幾十羽は巉岩の下へも迷つて來てゐた。その悲鳴は崖裾から崖裾へ寂しく響いて、

ほの白い姿は月の光を浴びて幻のやうにふるへてゐる。

鶴田は勇ましい大漁のさまを默つて眺めながら歩いてゐたが、そのうちに道は平らなところへ出て、八造の家の灯はすぐ鼻の先にみえて來る。そこの小高い草地のところまで來かゝると鶴田はすぐ頭のうへのところで人聲がしてゐるのにふと氣づいた。

鶴田は俄かに立止つて兩手を耳へ當てゝ聞耳をたてた。うへの草地で話をしてゐるのはたしかに八造とお清であつた。初めは何を話してゐるのだか言葉はよく聞き取れなかつたが、そのうちに漸次と此方へ歩いて來るらしく、急にお清の高調子が聞えて來た。

「ふんとに今年は漁がいゝだあね。この鹽梅ぢや私らもちつたあ芽が吹くべえ。」と、云つたかと思ふと、今度は聞き覺えのある八造の聲が、

「いゝ芽もねえこんだ。われ小山とべえいゝ芽が吹くだんべ。はゝゝ。俺あがだつて錢せえ出さばお前の體は自由になるだが、その錢がねつから出ねえだ。はゝゝ。」

「なにをいつてるのさ。お前おつかさん（かみさん）の方がめんこい（可愛いゝ）だんべ。なんちつても駄目さあ。」

「はゝゝゝ。あんな婆よりわれの方がいゝだあ。ひとつ口說くべえか。はゝゝゝ。」

「それだあば今夜お前さあとこへ泊りにくべえかね。」さう云ひながらお清は猥らな聲をたてゝ笑つたが、しばらくすると「そんなら私、歸ります。おつかさんによろしく。」と云ふ。

八造は何か云つたやうであつたが、それは聞えなかつた。

やがて岩に當る冴えた下駄の音が聞えて、お清は八造に別れて漸次と此方へ降りて來る。それをみると鶴田はそつとそこを離れて自分も足音を忍びながらもと來た道の方へ小走りに降りて來て、とある岩の小陰へ張りついてお清の來るのを待つてゐた。と、間もなく下駄の音が聞えて、片手に手拭のまるめたのを持つてお清が明るい月光のなかへ浮き上るやうに出て來た。

鶴田は矢庭に

「お清。」と云ひながら道へ飛び出した。

さすがのお清もあんまり思ひ懸けないところから出られたので怦乎としたらしかつたが、態と落着き拂つた聲で、

「誰れだあ、鶴田さあか？」と、云つてじつと彼の方をみながらそれなり行過ぎようとする。

鶴田は酒臭い息を吐きながら

「おい、お清、待ちねえ。俺やわれにちつと話しがあるだあ。」

お清はそれをせゝら笑ひながら、

「お前さあの話ならもう聞かねえでも分つてるだあ。私家が忙がしだからそんなこと聞いてゐられねえだあよ。」

「なんだ、生意氣なことをぬかすでねえぞ。」と云ひながら鶴田はそのまゝお清の後から歩いていつたが、やがて吐き出すやうに、「お清手前はまだ知るめえが、われが待つてる小山は今夜からもう新潟屋へ來やしねえだぞ。俺あが今日の晝間、鐵鎚で頭割つて打殺してやつたゞからなあ。」と、云ふ。

お清はそんなことはてんで受付けもしずに、
「なにを云つてるだあ、醉拂ひが、……。」と口のなかで呟いたが、それは興奮しきつた鶴田の耳へは入らなかつた。彼は猶も言葉をついで、
「その代りわれが邪魔にしてる勝峯ゃ今頃はもう息を引取つてるだんべ。彼奴も可哀さうに、口がきけなくなるまでわれのことべえ云つてたぞ。われそれでゃ寐覺め惡くねえだか、――。」
それでもお清が默つてずんずん歩いてゆくので、鶴田はむかむかとしたらしく、いきなり後から彼女の襟がみをつかんでぐつと自分の方へ引寄せた。
お清は腹立たしさうに片肱で力一杯に鶴田の胸を突返しながら、
「あにしるだあ。痛えでねえか。」と、云つたが、鶴田はその刹那胸を突いたその腕を鷲掴みにして、
「この阿魔ッ、手前も小山の供をしるだあか。」と、吠えるやうな聲で怒鳴つてそれなり道の端の崖根へじりじり激しく押しつけていつた。
お清はそれでもまさか鶴田がそんな恐ろしい慘劇を演じたあとの獰猛な心になつてゐやうとは氣がつかないので、
「よしなつては、いくら手荒なことをしたつて駄目だあよ。」と、云つて、口を極めて彼を罵る。
この時醉つた鶴田の心には充分殺意があつた。どうせかうなつたからにはもう破れかぶれだ、このお清も一緒に殺害してしまへと心の何處かで恐ろしい聲が叫んだ。
鶴田は急に野獸のやうに唸めきながら、お清の喉のところを節太なその手でぐつと掴んだ。そして二

三度揺ぶりながら、
「この阿魔、まだこくかッ。」と、叫んで、息の根も止れとばかり力を籠めて押しつけたが、お清もさうなると渾身の力を振つて抵抗しだした。口が利けないので唯ぐッぐッと喉を鳴らしながらいきなり鶴田の眼のなかへ手を突き込んで今度は反對に押返した。
格闘はほんの一分ばかりの間つゞいた。
鶴田は眼球を突かれた痛さと酒の醉ひで思はず力が鈍つて、二三歩よろよろと突き返されたが、その途端に踏み止まつた崖鼻の根雪に耐力もなくするりと足をとられて、あッと云ふ間もなく彼はずるずると崖から滑り落ちてしまつた。その時彼は摑んでゐたお清の片袖を離さなかつたので、お清もはづみをくつて一緒に崖から眞倒さまに落ちてしまつた。
その斷崖は中段のところまでは急な傾斜になつてゐて、熊笹や小さな灌木がところどころに繁つてゐるので、二人はまるで礫のやうに轉落していきながらもどうかしてその樹々の枝に摑まらうとしたらしかつた。しかし中段から下は四十尺ばかりの岩壁になつてゐるので、さうかうしてゐるうちに二人の體は跡先になりながら遂にそこから海の方へ姿を消してしまつた。
そのあとには徒らに明るい月光が射し渡つて、何の叫聲も悲鳴も聞えぬ崖下からは唯暗い波浪のどよみが轟々と湧きあがつてくるばかりであつた。
沖では何處でも大方網をあげきつたと見え、大漁唄は漸次と急調に亂れて、篝火はさつきの數に倍加して來た。

四

漁場ではその翌日も鰊で大混亂を呈した。

忙がしさに紛れて誰れも氣付かない間に、憐れな勝峰は丁度その夜の曉方まで苦悶に苦悶を重ねた末、一旦靜かになるにはなつたが、皆が沖から歸つて來る時分にはもう冷たい死骸になつてゐた。

出面達は手不足ながらも小山の死骸と勝峰の死骸をどうにか所置しなければならなくなつた。以前にも喧嘩をして櫂で撲り殺された出面の死骸を燒いたことがあるので、彼等はその時に捜し出した海岸の岩穴へ二人の死骸を運んでいつて、そこで燒いしまはふと云ひ出した。しかし倉原は鶴田が自首して出た以上は兎に角巡査なり村役人なりが來るまで死骸をさうしたまゝにして置かなければならないと云つて、どうしても許さなかつた。で、勝峰の死骸はそのまゝ鰊滓の小舍へ運ばれて、鰊の血と油と鱗で散々に汚れたそこの土間へ小山の死骸と並べて置かれた。うへには二枚アンペラがかけてあるばかりなので、そこの薄暗い檐の影からは蒼白い四本の足がによきりと氣味惡くほのみえてゐた。

夜が明けきると漁場にはそんな慘らしい光景があらうとは思はれぬやうな明るい朝日が一面に射し渡つて來た。賑やかな朝飯が濟むと廣場にも浜にも出面達が勢よく立働きだして、鰊をあげる唄聲は昨日よりも一層勇ましく朝の空氣を顫はした。小山と鶴田が急に姿を隱しても誰ひとりそれを寂しがるやうなものはゐなかつた。

その晩はさすがの厚群來ももう通り過ぎてしまつたか、どこの網もひどく不漁だつた。何處の漁場で

も沖に見切りをつけて網見張の船頭達が歸つて來ると皆休めやら大漁祝ひやらで酒が出る、鰊鍋がかけられる、漁獲で活氣だつてゐた一村は忽ち未開地らしい歡樂の夜と變つてしまつた。

その晩の新潟屋の賑ひはすばらしいものであつた。店に溢れた出面達は戸外の往來へどんどん篝を焚いて、その周圍へ車座に坐りながらさかんに飲んでゐた。僅か二時間ばかりの間に醉ひどれが幾人となく出來て、喧嘩が三つも四つもある騷ぎであつた。

その頃にはもう小山や鶴田のことが漁場から漁場へ傳つてゐたので、方々の出面達の群の間ではいろ〳〵な噂が起つてゐた。殊に新潟屋での立てものゝお清までがふつと姿を消してしまつたので、それがまた皆の好奇心と疑惑を煽つた。

初めは鶴田が自棄になつてお清も一緒に殺害してその足で泊へ自首しにいつたのだらうといふ憶測が勢力をしめてゐたが、そのうちにそれは手もなくこわされて、皆の推測はとんでもない方へ飛んでいつた。鶴田があゝして小山を慘殺したり、お清につけつけ當り散らしたりしてゐたのももとを云へば彼自身がお清にひどく惚れ込んでゐたからで、きつと昨夜彼はお清を連れだして泊へは行かずに二人で何處かへ遁げてしまつたのだらうといふやうな憶測がやがて無智な出面達の心を支配してしまつた。なかでもお島などは昨夜の鶴田の樣子から推してたしかにさうだと斷言してゐた。

丁度その時、その新潟屋からは十丁と距たらぬ斷崖の裾にはその前の晩墜落して死んだ鶴田とお清の死體がそのまゝになつて横たはつてゐた。お清は岩礁に打たれて、顏の半面を削ぎとられたやうに打碎かれ、そして體は岩と岩との間へ挾まれ、鰊の卵塊と網づかれのしたその魚の鱗や骨や肉片でミルク色

に變色した波が打寄せる度に着物の裾はだらしなく披がつて、幾百人の男の肌に觸れた小肥りのしたその股がちろちろほの白くみえてゐた。

それから三間ばかり離れたところには脊骨を碎かれた鶴田が二つに折れたやうになつて岩のうへ丶引懸つてゐた。

その晩も月がよかつたので蒼白いその光は懸崖のうへから斜に慘澹たる二箇の死骸を照らしてゐた。そこは岩角と岩角とが灣入した懐のやうなところなので、二人の死骸は容易に人の眼に觸れるとはなかつた。高潮が押し寄せて來るか、さもなければ全身腐爛して波に洗ひ去られてしまふまでは日毎に懸崖の間から射し込んで來る日の光や月の光にその恐ろしい姿を曝らしてゐなければならなかつた。その晩も餌を漁りに來て歸りそびれた海鳥が幾羽となくそこらを飛び廻つて、或は岩のうへ丶とまつて首を振つたり、或は水とすれすれに飛んでは波と戯れたりしてゐた。時々あげるその悲鳴は鉛のやうな月光の底で寂しい谺を呼んでゐた。

（をはり）

地藏敎由來（喜劇一幕）

久米正雄

人物

彌三郎。漂ひ人。後に敎祖。

嘉平。｝村の博徒。後に使徒。
源次。
勘吉。

村の人々多勢。（跛者、盲者、啞者等を交ゆ。）

時代

今は過去となれる明治の末葉。

場所

東北地方なる山中の僻村。

舞臺。——村端れなる小さな廢祠の前。街道を前にし、杉の木立を背にす。祠はもと地藏尊を安置したるものにして、古びたれど戸扉破るゝに至らず。

第一場

（或る村の博徒、嘉平、源次、勘吉の三人は、各々祠の段に腰をかけ、柱に凭りかゝり、及び地上に蹲つて、話をして居る。）

嘉平。何しろ飛んだ目に會つたなあ。

源次。此の賭場初まつて以來の事だ。

勘吉。考へるだけでも胸屎が悪るい。

嘉平。今朝彼奴が行つちまう時、何故一思ひとに殺つちまはなかつたかなあ。

源次。さうよ。此の××村で名うての博奕打が三人も揃つてゐ乍ら、名前も知れねえ通りがゝりの旅人風情に、さんざつぱら賭場を荒らされて、有り金殘らずふん奪くられちやあ、賣つた顔が立たねえや。

勘吉。俺も實は口惜しいから、一つ此奴を……と思つたんだが、何しろ向うは會體が知れねえし、餘り手際が甘えもんで、すつかり氣を吞まれて了つたのさ。

嘉平。何しろ箆棒に甘え奴だつた。

源次。賽ころにかけちやあ天狗さま見てえな奴だつた。

勘吉。ことによると地藏さまの生れ返りかも知れねえ。

嘉平。全く人事とも見えねえ奴だつた。かぶせた茶碗の瀬戸を透して、中に賽ころの星が見えるつて云ふ俺の目さへ、血走つて見別けがつかなくなる程、彼奴のやり方は素早かつた。

源次。いつもの俺の振り上手で、今度こそは丁にと振つた積りでも、彼奴が半と云やあ全く半だ。俺あ一昨年北の國へ行つたが、どの漁場でもあんな奴にあ會はなかつた。

勘吉。今度こそ今度こそと思つて、盛り返さうと焦つてる中に、とう／＼朝になつて了つてから、氣が附いて見れあ俺たちの金あ、一文殘らず彼奴の膝許だ。俺あ奴が「氣の毒だ」とか何とか云ひ乍ら、さら／＼錢を掻き込むのを、餘りの事でぼんやり見てゐたよ。

ことによると口が開いてたかも知れねえ。

嘉平。ぼんつくのお前の事だからその位の事はあつたらうよ。

源次。さう云ふ哥兄の顏も餘り冴えてなかつたぜ。

勘吉。敗けたりて元氣を落した事のねえお前が、まだそんなに落膽(がつかり)してゐるぢやねえか。

嘉平。實を云ふと俺もちと驚いたよ。——一體彼奴あ何者だらう。

源次。ほんとになあ。——一體彼奴の來たのは午の刻を廻つてゐた。丁度俺のいつもの勝負運が盡きる時刻だつた。此の社の中でやつてゐると、不意に此處の戸を開けた奴がゐる。俺あ又勝負に氣を取られてる暇に、駐在所の手でも入(へえ)つたか、夜廻りの火の番にでも見つかつたかと、吃驚敗亡して逃げかゝると奴あ厭に落着いた手附きで俺達をとめやがつて、その言ひ草がかうだつた。「まあ皆さん。さう驚きになるにや及びやせん。わしは御覽の通り旅の者です。只今此處を通りかゝると、丁度お堂がありますので。ことによつたら軒下で、一夜の雨露を凌がうかと、暫っく休んで居りますと、何處やらでころ〳〵と賽の音がしますので、わしも元來が大好きな道ですから思はず入つて來てあなた方をお驚ろかせ申しました。どうか續けておやんなせえまし。而して見物させて下せえまし。」

嘉平。「そんなにおめえ好きなのか。好きと聞いちやあ賴もしいや。それぢやあどうだい、見てゐるより一つ入んねえ。おめえぢきに面白くなるぜ。」と俺あ直ぐさう云つた。あの時あ一つ甘(うめ)え鳥が引掛つたつもりだつた。而して一昨日の藥賣り見てえに、まんまと捲き上げてやるつもりだつた。

勘吉。つゞいて俺もかう云つた。「勝負は時の運だ。おめえがすつかり勝たねえとも限らねえ、一つやつて見たらどうだ。」俺もあん〳〵あうまく口車に乗せた氣だつた。

源次。　すると奴あ、「敗けると路用がなくなつちまつて、乞食にならなきあならねえから」とか、「ひどく皆さんが甘(うま)さうだから」とか、しぶ〳〵云つた揚句の果に、やつと仲間入りをしたつけが、三四回勝たしてやつて、又一二回取つちめてやつたと思ふ間に、奴あにや〳〵笑ひ乍らぐん〳〵勝ち出すと來るぢやねえか。

嘉平。　野郎いつか運がぐれるだらうと、一生懸命で突つかゝつたが、とう〳〵今朝まで勝ち通しよ。

勘吉。　餘り馬鹿げた敗けやうなんで、俺あ腹も立たなかつた。

嘉平。　全く一體何處の野郎だらう。

源次。　ほんとに天狗見てえな奴だ。

勘吉。　ことによると此處の地藏尊の使ひかも知れねえぜ。あれ位なら神業と云つても差支はねえ。

源次。　さうよなあ。俺達に毎晩お社を荒らされるんで、懲らしめの爲めにお姿を現したのかも知れねえ。

嘉平。　馬鹿云ふな。あれあ正銘の人間だよ。高が賽ころが甘えだけぢやねえか。俺だちだつて素人(しらうと)から見れあ、神業位の事はすらあ。

源次。　でも餘り甘すぎたぜ。何だか三人とも魔法にかゝつたやうな敗け方だつたからな。

勘吉。　さう云へば眉つきが何處か地藏様に似てゐたやうだ。

嘉平。　嘘う吐け。おめえのぼんつくな眼で見れあ、地藏さまよりあ、町の和窩に似てゐたらう。――馬鹿め。あれあ人だ。人に違ひねえぢやねえか。今時地藏尊の生れ返りなんぞがあつて堪るかい。馬鹿も休み休み云へ。

勘吉。　哥兄ゝう怒るなよ。今なあ冗談だあな。誰も心から地藏様だとなんざ思つちやゐねえ。

源次。　まあ默つてゐろよ勘吉。哥兄あちと斜めなんだ。
然しそれも無理あねえや。

嘉平。　おめえこそ餘計な事云ふな。默つてゐろ。

源次。おいよ。默つてゐるよ。

（沈默、三人ともせう事なしに烟草を吸ふ。）

勘吉。何か昨夜の金をとりかへすやうな、甘え事はねえかなあ。

源次。さうよなあ、俺あれが無ければあ、今日から商買に出られねえや。

嘉平。默つてゐろ。俺が今考へてる處だ。

（又沈默、勘吉と源次烟草を吸ふ。）

勘吉。どうだ哥兄、うめえ考はねえかな。

源次。ほんにどうか考へ出して呉れろよ。

嘉平。（ふと顔を上げて）ふむ、さうだ。うめえ事を考へ出した。

勘吉。どんな事だい。

嘉平。おめえ達あ今地藏尊のお使はしの話をしてゐたな。俺あそれから思ひついたんだ。

源次。ついたつてどう思ひついたんだ。

嘉平。地藏尊のお使はしを見附け出さうと思ひついたんだ。

勘吉。では昨夜の奴を追ひかけるのか。

嘉平。さうぢやねえ。新らしく地藏のお使はしを作るんだ。

源次。どうして作るんだ。

嘉平。此處に待つてゐて、通りすがりの馬の骨をたぶらかして、地藏尊の化身だと祭りあげるんだ。厭應なしに地藏様にして了ふんだ。而して村の人たちに地藏様の生れ返りが現はれたと云つて、布令廻るんだ。さうすれあ馬鹿な百姓共は、有難がつてきつと賽錢を投げるに違えねえ。たとへ賽錢を投げねえとした處が、奴等を一時でも馬鹿にしたと思へあ、いい娯みだ。

勘吉。だがどう云ふ風にして見知らぬ男を地藏様に祭り上げるんだい。もつと詳しく聞かなきあ、どうも腑に落ちねえ。

嘉平。それあ俺が此處に待つてゐて、よささうな奴が

通りかゝつたら、かう云つて其奴を誑らかすんだ。昨晩俺が此堂にお籠りしたら、此處の地藏が夢枕に立つて、今日己の化身が前を通るから、その人に村のいろ〳〵な難儀を救つて貰へつて云つたつて、どうしても拜み倒して了ふのさ。

勘吉。併し其奴が自分でさうだと思ふかね。

喜平。さうかも知れねえ位に思ひ込ませるのさ。先づ俺が僞盲目になつてゐて、其奴に撫でゝ貰ふと忽ち癒つたふりでもすれあ、奴あ自分にそんな力があるのかと、やつと思ひ込まねえ事もあるめえ。そこらは俺がうまくやるよ。

源次。して村の人に信用させるにはどうするんだ。

喜平。それにあおめえ達の手を借りなくちやならねえ。なに雜作もねえ事なんだ。先づ俺がうまく其男を地藏尊にして了つたら、急いで村中を布令廻るから、おめえ達も其時全く知らねえ振りをして、皆の後からついて來ねえ。而すれあ俺が皆集つた所で、御利益を述べ立てるから、其時はなあ源次、おめえ急に「嘘だ、嘘だ」つて叫び出すんだ。すると俺は神樣に云ひ含めて置いて、「そんな事を云ふ奴は神罰立ろに下つて啞となるぞ」と云はせるのだ。そしたらおめえは急に啞になつた振りをしなくちやいけねえ。いゝか、解つたか。而して先づ神樣の靈驗を示すんだ。

源次。うむ。そいつは面白い。宜しい。引受けた。

喜平。それからな勘次公。おめえは又暫らくして、「詐欺だ、瞞りだ。警察樣へ行つて云つつけて來る」つて驅け出すんだ。すると又俺は神樣に「そんな事を云ひ付けに行く奴の足は跛になれ」と云はせるから、其時おめえは急に躄になつた振りをするんだ。さうすれあもう村の奴等あ驚いて了つて、僞神樣が何を云はうと、きつと信用するに違ひねえ。而して信用しちまへば、俺が賽銭を上げろと云へば、神佛が欲しくてならねえ連中のこつたから、きつとばら

ぱらと來らあ。さう來れあもうしめたもんぢやねえか。僞神樣にあその中僅かのお供へをして、あとは俺達が着服するさ。

勘吉。成程、そいつは面白さうだ。餘りよくねえ役廻りだけれど、どつちへ轉んでも損はねえ。一つやつて見るとしやうか。

嘉平。さうと定まつたら、早速仕事に取かゝるとしやうぜ。愚圖つくなあ俺あ大嫌えだからな。

源次。よし來た、合點だ。

勘吉。哥兄、先づおめえ甘くやつて呉れろよ。

嘉平。俺あ大丈夫だ。細工は粒々仕上げを見るがいゝ。鎌で燈心草を刈るやうにうまくやつて見せるから。

源次。(下手の方を見て)あれ、さう云ふ中に向うから一人やつて來たやうだぜ。

勘吉。何だか林の中を縫つて來るんでよく見えねえが、ちらと見えた頭と手の邊りが、朝日で金色に光つたぜ。

源次。今から後光がさす譯でもあるめえが、神樣にはいゝかも知れねえ。

嘉平。兎に角おめえ達は見つけられちやあ、具合が惡るい。社の後ろに隱れてゐて、俺の手際がうまく行きさうだつたら、何食はぬ顔で村へ歸つてゐな。いいか。

源次。よし來た。

勘吉。うまく頼むぜ。

(二人は社の後ろへ入る。嘉平眼がつぶれた振りをなし、そこの祠前につくばひて、人の通りかゝるのを待つてゐる。間。遠くから手風琴を鳴らす音が近づいて來る。やがて賣藥商登場。金モール附の帽子と洋服を着て、手風琴を肩から下げてゐる。)

賣藥。(ゆるやかに手風琴をひき、且つ唱ふ)「濟生藥館目藥は、一度びさせば跡もなく、……オイチニ……」(嘉平に一瞥を與へて)やれ〳〵、盲目さんか、おまへさん早く俺の目藥で癒しやあ、さうはならなかつたらうが、可哀さうに……(行き過ぎる。)嘉平何もせ

ずに嘲笑ふ。やがて藥屋は唱ひつゝ去つて了ふ。）

「逆上目爛れ目トラホーム、一夜に潰れる風眼も‥‥オイチニ‥‥」

（唱聲遠ざかり行く。嘉平くつ〳〵笑ひ出す。二人社の後ろから出て來る。）

源次。哥兄、どうした。

勘吉。何故笑つてるんだ。

嘉平。だつてあんな金モールの藥屋を神様にするなあ、土龍を豚にするより六ケ敷いや。あいつ等の藥で、この俺様の眼が癒つて堪るかい。

源次。さう云へば彼奴の顏からして、僞の廢兵にもなれさうがねえ。神様にしても、まあ貧乏神位だ。外の神様になるにや、髯があんまり七手の芒だ。

勘吉。（下手を見て）さう云ふ中に又一人やつて來たぜ。何だかひどく草疲れた歩きつきだなあ。

源次。さうよなあ、丁度おめえが首をくゝられに行く時見てえだ。

勘吉。緣起の惡るい事あ云ふなよ。俺あこの上惡るくなつても、蹇になるだけの事だからな。まさかに首はくゝられめえよ。

源次。まあ俺も直ぐ唖になるんだから、今の中に減らず口を叩いて置くのさ。

嘉平。餘計な事を云はねえで、さつさと隱れろよ。もう愚圖々々してると見附かるぢやねえか。

源次。よし來た。行くよ。

勘吉。こん度こそうまく賴んだぜ。

（二人は又社の後ろに隱れる。嘉平も亦似盲目となり、社前に逗ひつくばふ。間。日が影つてくる。やがて一人の漂泊者。（彌三郎）、重たい足を曳きづり乍ら、やつて來る。一癖ありげな顏付のそのくせ何處となくオヅ〳〵した所のある若い男。通りかゝつて祠を見、嘉平には目も呉れず、その段の所へさも疲れたと云ふ風に腰を下ろす。）

彌三郎。（ほつと息を吐いて）あゝ疲れた、疲れた。それも其の筈だ。今朝から一粒の飯も食はないで、十里近く歩いたんだもの。もう此先き一足も歩けやしな

い。

嘉平。（進み寄つて）もし〳〵、あなた樣。

彌三郎。何だ。盲目か。何用があるのだ。

嘉平。あなた樣は只今南の方からおいでになつたのでございますか。

彌三郎。うむ、さうだ。わしは南から來た。

嘉平。それから只今は朝の辰の刻でございませうな。

彌三郎。わしは知らん。辰の刻と云ふと今の時間にして何時頃の事だ。

嘉平。左樣でございます。今の時の十時で。

彌三郎。ではまあそんなものだらう。

嘉平。さやうでございますか。では、あのあなた樣が、辰の刻にお一人で南から此の社の前をお通りになつた方でございますな。

彌三郎。左樣、わしの外にはないやうだな。

嘉平。それでは貴方は紺の盲縞の御衣裝を纏ふておゐでゞせうな。私は御覽の通り盲目で、少しも見えないんでございますか。

彌三郎。（苦笑して自分を顧み）ふむ、いかにも紺の盲縞の繿褸を着てゐる。

嘉平。お年の頃は三十位でございませうか。

彌三郎。まあそんな所だが、厭に精しく問ひ訊すね。まるで仙臺の控訴院さま見たいだ。

嘉平。（急に飛びすさつて平伏する。）では貴方さまに間違ひございません。どうぞ實をお知らせ下さいまし。貴方さまは私の待つてゐた御地藏樣の御化身でございませう。どうぞさう仰つて下さいまし。

彌三郎。わしが地藏尊の化身？ 妙な事を云ふね。どこからそんな事を考へるのか、わしにはさつぱり譯が解らん。大方小松原に生へた蕈でも食つて、醒め乍ら夢でも見てるのだらう。

嘉平。いえ〳〵どう致しまして。貴方樣は全くそれに相違ございません。

彌三郎。何を云つてるんだ。お前は今朝蓴菜沼（じゆんさいぬま）の濁り水

で顔を洗つたんで、まだ昨夜の夢の殘りが醒めないんだよ。

嘉平。いえ／＼昨夜見た夢は夢で、夢に違ひありませんが、今此處においでの貴方は貴方で、御地藏樣に違ひありません。

彌三郎。益々妙な事を云ふね。おまへは向ひ山の白狐にでも馮(ばか)されてるんだよ。でなきあほんとの氣狂ひだ。

嘉平。いえ／＼、馮されてもゐなければ、氣狂ひでもありません。私の申す事はすつかり筋道が立つて居ります。

彌三郎。ちつとも立つちやゐないぢやないか。人を捉(つらま)へていきなり地藏だの何だのつて、地藏樣に鴉がとまれあ、十八島田が花嫁になるつて云ふが、鑄掛屋の息子が草疲れたからつて、石頭が圓くなるて云ふ話は扇屋の爺さまにも聞いた事はないよ。

嘉平。まあお聞き下さいまし。(間)私はもと此近在きつてのあぶれ者で、此間迄あ神佛のかの字も云つた事はなし、今考へれあ勿體ねえ話ですが、此處の地藏だつて石ころ同然に考へてゐたものですから二三日前ふと此處を通りがゝりに面白半分お地藏樣へ小便をおひつかけ申しやした。すると其晩から不思議にも急に其處へ熱が出やして、七轉八倒の苦しみをした末、眼迄がこんなに潰れました。それでこれあきつと地藏樣の罰が當つたに違えねえと、急に神罰が恐ろしくなり、それから七日と云ふもの、此の堂にお籠りしてお詫びを致しやした。すると昨夜と云ふ滿願の晩でござります。

彌三郎。(話に非常な興味を感じて)ふむ。滿願の晩に。――何かあつたかな。

嘉平。はい。ござりました。私は腹が減つたのと疲れたので、此處の柱に凭(もた)れたまゝ、ついうと／＼と寢入つたものと見えます。すると眞夜中頃頭の上にぼんやり明りがさすので、驚いて眼を擧げて見ますとその綠とも白ともつかぬ御光の中に、一人の眉毛の

白い老人が立つて居りました。而して私を見ると急に進み寄り乍ら右手に持つてゐた通草の杖で、したたか打ち据えるのです。私は一目でそれが御地蔵様だと解りましたから、平らに恐れ入つてお打ちになる儘にお罰を受けて居りました。只不思議な事にはあれ程打たれても、少しも痛くないのです。で暫らく打たれて居りますと、その老人が仰るのです。

綱三郎。ふむ。——

嘉平。「嘉平、おまへは眞に悔悟したと見ゆるな。善哉善哉、おまへの心榮えに愛でゝ、わしは罪を許して遣はす。おまへの眼も、明日わしの身代りをやつて癒してやるぞよ。その身代りと云ふは年の頃三十前後で、盲縞の衣を纏ひ、辰の刻に御堂の前を南から北へ通る筈ぢや。その人に賴んで、眼を撫でゝ貰へば、今迄の盲目は九月の沼の霧のやうに散るは必ずぢや。その人或ひは言を他に外らして、わしの身代りぢやとはえ云ふまい。されど心をとめて欺かゝるな。その人には誠に神の力が在つて、數々の不思議を現はすぞよ。何事もみ心の儘ぢや、何事も見透しぢや。而しておまへの眼を癒すばかりか、村の難儀も救ふて下さらうぞ。よくお賴み申せ。ゆめ／＼怠つて見失ふな。」と云つたかと思ふと、老人の姿は夕方に飛ぶ五位鷺のやうに、ふわ／＼と中空へ消えて了ひました。ふと我に歸つて見ますと、私は矢つ張りお堂の中に寢てゐて老人の消えた方には、もう明け近いと見える節穴が仄やり白く見えました。それで私は起き上るなり、今か／＼と貴方様のお通りを待つて居りました。どうぞお本身をお明しになつて私の眼をお癒し下さいますやう、どうぞお願ひ申し上げまする。

綱三郎。はゝゝ。馬鹿を云つては困る。わしにお前さんの眼を癒す力なぞがあつて堪るものか。そんな力があるなら、今朝からかうして空腹をかゝえて、當もなくほつき歩いてなぞ居りはしないよ。私は地藏

の身代りでなぞはないよ。私は此處から三十里西南の柳津から來たものだ。

嘉平。さう〳〵、夢の老人もさう仰いました。

彌三郎。しかも貧乏な鑄掛屋の息子だ。

嘉平。それも夢知らせの通りでございます。

彌三郎。昨日親父と喧嘩をして家を飛び出した野良息子だよ。

嘉平。その親父樣と云ふのが、氣の荒い盧迹那佛さまで、貴方樣を此處にお寄越しになるため、わざと辛くなすつたのでございます。それもみんな貴方をお違はしになつて、村を救つて下さる難有い覺召なのでございます。

彌三郎。俺あ毎日居酒屋に入り浸つてゐる佛樣の話は聞いた事がないよ。

嘉平。いえ滅相な。ちやんと三世相にも書けてあります。そんな事をなさるのは、すべて凡夫と見せかける上邊だけの事で、あなた樣の父御樣もそれなのでございます。それも夢知らせに御座りました。

彌三郎。もつと何か無かつたかな。

嘉平。貴方さまに仰られると思ひ出しますので、へえそれからと……えゝ……ございました。何でも、思ひ違ひかは知りませんが、その居酒屋と云ふのは、村端れの椎の木の傍にございませう。而してそこにはまだ水氣のある後家さんが確かおいでゞせう。

彌三郎。(少し驚いて)へゝえ。それおやその夢知らせつて奴も、本當だと見えるな。成程その通りだ。

嘉平。それに貴方さまも、へゝえ、あの、お惚れなすつた筈ですがな。

彌三郎。まあそんな所だつた。こいつよく知つてやがるな。

嘉平。それから又盧迹那佛さまもお惚れでございましたな。それが親子喧嘩の基でございませう。

彌三郎。おまへそこ迄聞いたのか。そいつは益々やり切れないな。(頭を掻く。)

嘉平。さうお恥おなさるには及びません。あの女の方は、あれで又、觀音樣でございますよ。

彌三郎。どうだか知らねえが、全く觀音樣と云はれても恥しくないやうな女だつた。

嘉平。それもみんな貴方を此處へ救ひにお遣しになるためだつたのでござりまする。

彌三郎、何だか知らねえが、餘計な事を知らして歩く奴がゐると見える。何だか少し薄氣味が惡くなつて來た。こんな處にあ長く居られない。さつさと行つて了ふとしやう。(立ち上る)併し腹は減るし、足は痛えし、もう一足も歩けさうもねえ。おい、お前さん何か食ふ物は無いかね。

嘉平。今ぢきに差上げますでございます。が、どうかそれ前に鳥度私の眼をお癒し下さるやう、偏へにお願致しまする。

彌三郎。そんな力は俺には無いよ。

嘉平。いゝえ只觸つた丈で宜しいんでございますから。

彌三郎。ぢや觸つてだけはやるが、癒らうが癒るまいが私は知らないよ。いゝかい。

嘉平。はい結構でございます。

彌三郎。其代り觸つたお禮には何か食ふ物を持つて來て呉れないか。握飯でいゝ。

嘉平。はい。畏りました。いくらでも差上げます。

彌三郎。そんなに澤山はいらねえが、二つ三つ。――いゝかい、それは眼が明かなくたつて持つて來て呉れるんだぜ。

嘉平。宜しうございます。

彌三郎。よし、その約束は濟んだと。(近よつて)ぢや觸るよ。いゝかい。ほら之が私の手だ。

嘉平。(手を押し頂き)へえ、難有うございます。まるで鬼ヶ嶽の谷間にある水晶のやうに凉しいお手でございまするな。

彌三郎。水晶だとすれあ、餘り出來のよくねえ、罅入り水晶だ。――いゝかい、さあ觸るよ。(彌三郎何氣な

しに嘉平の眼に手を觸れる。間。）

嘉平。（突然目を開く。而して立上つて四邊を見廻す。大歡喜。）あ、開いた。あ、開いた。すつかり見える。何でもかんでも見える。（急に彌三郎の前に跪いて）難有うございます。難有うございます。生神樣、生佛樣。

彌三郎。（呆然と見とれて）ほんとに開いたか。（自分の手を見る）變りはない。不思議だなあ。

嘉平。（尙も四邊見廻し乍ら。）すつかり見える。あれ、村長さまの白壁から、向い山の杉の穗先まで見える。遠くは南に晴れ渡つた那須の烟りも見える。近くはお種婆が作つた、十六提豆の蔓まで見える。（再び跪いて）難有うございます。難有うございます。

彌三郎。（猶も考へ込んで）俺はいつこんな力を得たのだらう。不思議だ。不思議だが事實に違ひない。夢でもない。狐に憑されてるのでもない。して見ると事實、俺には不思議な力が在るのかしら。それを今迄氣がつかず、使つて見もしなかつたのかしら。

嘉平。生神樣、ではお約束通り、早速御禮に差上がります。どうぞ暫らくお待ち下さいまし。村の人たちにも知らしてあげます。而して生神樣の御來仰を拜ませてやります。どうぞこの御堂の中で、暫らくお休息下さいまし。そこの御地藏樣には、白い衣が着せてある筈でございます。夢知らせではそれを着せ申せとの事でございました。どうぞお召しなすつて下さいまし。では行つて參ります。他へいらしては困ります。

彌三郎。行きたくても、このすき腹では行かれぬわ。おちや待つてゐるぞよ。

嘉平。（堂扉をあけ）さあどうぞ此の中で。

彌三郎。何でもいゝから握飯を早くして吳れ。（堂内に入る。）

嘉平。畏りました。では御免下さいまし。（堂扉を閉める。而して恭しく一拜して、立上る。後ろを向いて

赤い舌をべろりと出す。)

源太。}（堂の後ろから出て小聲に）、哥兄！甘く行つた
勘吉。}な。

嘉平。（二人を制して、猶も小聲に）まだゐたのか。それぢや早く。いゝか。

源太。}よし來た。
勘吉。}賴むぜ。

（三人急いで其場を去る。長い間。閑古鳥鳴く。）

彌三郎。（戸を開けて、身を現はす。）俺はほんとに神樣になつたのかしら。

（それに答ふるやうな閑古鳥の聲。）幕。

第二場

（同じ場面。一二時間後のことなり。嘉平先頭に立ち村人多勢を引連れ來る。）

嘉平。（皆を顧み）さあ、活神樣の居らつしやるのは此のお堂の中だ。先刻わしが御休息をお願ひ申して置いた筈だから、確かにおいでになるだらう。今、嘉平が皆の衆に拜ませ申すから、そこに跪かつしやい。

（皆々跪く。）

嘉平。（堂扉の前にて）もし〱活神樣、中においでゞござりまするか。嘉平只今戻りました。

彌三郎。（中にて）おう歸つたか。して約束の物は忘れまいな。

嘉平。へえ〱、忘れる段ではござりませぬが、村の婆たちに話した處、さう云ふ靈驗な神樣に上げるのでは、普常の米では不可めえから、お祓ひをした新穗を拔いて搗き、鎭守樣の御神木を伐つた薪で焚いて、やがて持つて來る筈でござります。どうぞ少々お待ち下さいまし。

彌三郎。（中にて）それには及ばなかつたぞ。

嘉平。でももう少しの御辛棒でござりまする。で、どうかそれ迄の間に、もう一度村の人達の前で、御

蹟をお見せ下さるやう、改めて私からお願致します
る。

彌三郎。わしはもうその不思議を現したくない。今日は許して吳れ。

嘉平。いえ、ほんの鳥渡で宜しうござりまする。先刻のやうにして下されば大丈夫でござりまする。嘉平が身を以て請合いまする。決して御迷惑をお掛けしません。

彌三郎。（中にて）ではどうともお前の好きにするがいい。

嘉平。難有うござりまする。（皆を顧み）さて皆の衆。神様は今日はお力を見せるのに氣が進まぬと仰るが、嘉平がたつてのお願ひで、三つだけ見せて下さるとの仰せだ。その一つはもう嘉平の風眼を癒したによつて、あとたつた二つだ。氣をとめてよく拜み見なされ。

人々。（口々に）難有うござりまする。

嘉平。では活神様、只今お扉をお開き申し上げます。皆の衆頭を下げさつしやい。

（人々低頭する。嘉平扉を開く。堂内より白き衣を纏ひて、出來るだけ威儀を整へたる彌三郎、しづ〳〵と現はれる。皆は仰ぎ見る。）

源次。（群集の中より突然進み出で、）はゝゝ。これあ何の事だい。嘉平おめえ冗談も大概にしろよ。神様々々ちうから、どんな偉い物が出る事かと思へば、高が只の人間でねえか。これで身體が金色だとか、額が夜光の石見たいにでも光つてれあ格別、それと俺達の相違は白い衣を着てるだけぢやねえか。

嘉平。馬鹿を云へ。神様が凡夫の姿でお現れになつたのだ。そこが生神様の生神様たる所なのだ。馬鹿を云ふと神様にお願して、おまへの減らず口を啞にして見せるぞ。

源次。これあ面白い。さあするならして見ろ。村一番の口達者で、喧嘩口論揚足取りで、町の議員様さへ敗かした俺だ。その口が塞がるものだか、やれるも

のならやつて見ろい。

嘉平。 神さま、彼奴めあんな事を云ふて居ります。どうか神様のお力で、一つ懲らしめのため啞にして下さいまし。

彌三郎。神は人を啞にするやうな事は好まない。神の力はいつも善に働く。

嘉平。 いえ、惡を懲らしめるのは、卽ち善ではござりませぬか、お躊躇(ためらひ)なくお罰し下さい。

源次。 やい。間抜神、屎神、、あんぽん神。貴様の通力では出來めえ。今の世の中にそんな事があつて堪るか。やれるものならやつて見ろい。(喚く。)

彌三郎。(試めしにやつて見ろと云ふ風で)神を疑ふ不屆者、まだ喚き居るか。おまへの口は啞にならうぞ。

源次。 (今迄喚いてゐたのが、急に聲を呑み、只管悶くのみ。)う丶丶丶丶。

嘉平。 それ見ろ、神罰思ひ知つたか。どうだな、皆の衆こんなに靈驗あらたかなのだ。(皆々驚嘆する。)神様難有うござりまする。

彌三郎。(おのが力に驚きて、呆然うなづくのみ)

嘉平。 (源次に)どうだ恐れ入つたか。

源次。 (跪座低頭、手を合して頻りに許しを乞ふ。)

嘉平。 悔悟の實が見えたら、俺からお願して許るしてやる。それ迄はそこで拜んで居ろ。おまへは毎も我ころの振り方を胡摩かすから、そんな目に合ふのだ。何なら一生さうしてるがい丶。村中がすつかり靜にならあ。

勘吉。 (急に群集の中から叫び出す。)飛んでもねえ奴等だ。魔法使ひだ。それに違えねえ。やたらな魔法は御法度だ。俺は警察さまさ行つて訴へてやる。兄弟を啞にされて默つちやゐられねえ。さうだ。すぐ驅けてつて云つけてやる。(走り出す。)皆々其の方を見る。)

嘉平。 又あんな事を云ふ奴があります。どうぞ早速御罰しなされて、走つて行く處を逆になすつて下さい

まし。
彌三郎。（今度は遲疑せず）そこに走りゆく者走ることならぬ。蹇にならうぞよ。
村の人々。（口々に）蹇になつた。ほんとに蹇になつた。神罰だ、ざまあ見ろ。今になつて頻りにあやまつてゐる。やあ〳〵此方へ這つて來るぞ。
勘吉。（這ひ乍ら入り來る。）どうぞ御許し下さいまし。もう決してお疑ひ申しやせん。心を入れかへました。どうぞお許し下さいまし。（手を合せて頼む。）
嘉平。おまへも源次と同じく、暫らくそこに拜んで居れ。悔悟の實が見えたら、俺から許しを願つてやる。おまへは一體平常から、町の私窩女を張る癖がゐる。その罰としては少し永く蹇でゐてもいゝ位なんだ。
勘吉。飛んでもねえ。あれあ皆んな嘘でございますよ神樣、これから心を入れ替へますから、どうかお許し下さいまし。

嘉平。いゝから默つて神妙にしてゐろ。でねえとおめえも啞にして貰ふぞ。
勘吉。へえ〳〵。（皆に向ひ）全く神樣に違えねえ。私がいい例だ。うつかり疑つちや不可ませんぜ。
嘉平。全くだ。貴樣達二人が餘計な疑ひを起したんで、神罰をお下しになるため、今日の奇蹟は三つ濟んで了つた。折角此處へ集つた皆さんの中にあ、ほんの盲目や蹇がゐて、嘸癒して貰ひたかつたらうが、おめえ達が橫合からそれを奪ひ取つたやうなもんだ。皆さんにもお詫び申すがいゝ。
源次。（手眞似で詫びる樣子をする。）
勘吉。全く濟みやせんでした。
嘉平。では活神樣、今日はこれだけでございましたな。
彌三郎。おまへの心通りに致せ。
嘉平。はつ、では御疲れで御座りませうから、これだけに致しまする。（皆に）さあ皆の衆。今日の御靈驗はこれだけだ。でも神樣の力があらたかでゐらせら

れる事は解つたらう。明日お祈りをして貰ひたい人、後生を頼む人などは、今から賽銭を上げてゆかつしやい。今日の集りはこれきりぢや。

少女。（一人の盲目の老婆の手を曳いて、群をかき分けそこへ出る。）あのもし嘉平様、どうぞお願ひでござります。神様にお頼みして、私の婆さまだけ特別に目をお癒し下さいまし。

嘉平。いや。駄目ぢや、明日にさつしやい。

少女。いえ、どうぞお願でござります。婆さまはお年ぢやから、明日と云はずに今夜にでも、一目此世をお見せ申したうござりまする。さあお婆さま、活神さまぢや、あなたからも御願なされ。

盲婆。どうぞ神様、わしは外に望みはねえだ。やつと育つた此の娘の顔が一と目見て死にてえでござりますだ。赤ん坊の時見たつきり、十五年見た事がありましねえだ。どうぞ一と目見せて下されや。

嘉平。（當惑して）いくら云ふても今日は駄目ぢやよ。

少女。いえ〳〵、神さまぢやなら、お力が限りがある譯はござりますまい。又出し吝しみなさる譯はござりますまい。お願申しまする。どうぞなう嘉平さまもう一度ぢや。

嘉平。駄目ぢやと云ふたら駄目ぢやと云ふに。

彌三郎。（既に大なる自信を得た態度で）これ〳〵嘉平。見れば可哀さうな親子ではないか。折角の頼みぢやきいて遣はせ。わしが癒して進ぜる。

嘉平。えつ、それあ貴方さま大丈夫でござりまするか。

彌三郎。お丶大丈夫とも。（低く獨語のやうに）三人まで力が及んだからには、わしに備る何かゞあるのぢや。わしはわしの力を信じ出した。大丈夫ぢやとも。ささ娘、婆御を此處へ連れて來るがよい。

少女。難有うございます。婆さま、神さまのお前でござりますぞい。

老婆。（彌三郎の前に額づく。）南無阿彌陀佛……。

彌三郎。（老婆の眼に手をふれ）可哀さうに昔亭主を亡くした時、餘り泣き過ぎて瞼が附いたのぢやらう。わしが手で撫でたからには、もう凉しうなつた筈ぢや。さあよいか。わしが此の手を三つ叩くと、三つ目に眼があくぞよ。さあ、一ィ二ゥ三ッ！（手を叩く。）

老婆。（急に目開く。呆然として四邊を見廻すのみ。）

少女。婆さま。あれ目がお開きなされた。そのやうにぱちく〳〵して。私が見えまするか。私の顏が見えまするか。

老婆。おゝ見える。おゝ見える。そなたの美しい木槿のやうな顏が見える。これが目ぢや。澄んだ清水に木欒樹實を落したやうな目ぢや。これが鼻ぢや。雪の岡に兎が蹲つたやうな小高い鼻ぢや。これが唇ぢや。古り沼の隅に咲く睡蓮の花片のやうな唇ぢや。おゝおゝ娘や。わしはもういつ死んでもいゝぞや。

少女。婆さま。（縋りつく）嬉しい。

老婆。わしもぢや。皆んな神樣のお蔭ぢや。

二人。難有うござりまする。（皆々感動する。）

嘉平。（驚嘆してゐたが、やつと吾に歸り）さあ〳〵これで濟んだ。もうお終ひだ。あとは誰が來たつて駄目だぞよ。

白痴女。（愛らしき乳呑兒を擁へて、群集を掻き分け〳〵出で來る。）どいた、どいた、どいた。

其母。（あとから止めるやうについて來る。）これどこへ行く。見境もなくどこへ行くのぢや。

白痴女。（彌三郎の前へ進み出で）いゝ子だろ。いゝ子だろ。誰れの子だ。わしの子だ。

嘉平。これ〳〵何で出て來るんだ。こゝは神樣の前だぞ。おつ母あ、早くつれて行け。

其母。はい。さあ叱られるから、こつちへ來いよ。その子をそんなに見せんでもいゝわ。

白痴女。（尙も兒をつきつけて）いゝ子だろ、いゝ子だろ。

彌三郎。一體これはどうしたのぢや。

嘉平。どうしたのでも御座いません。かまはず置いて

下さいまし。

彌三郎。かまはうとて、白痴はわしにもどうもならん。白痴は患ひではないのぢや。神の惠みぢやからな。白痴が一番幸せぢや。わしも是より此の女を幸にする事は出來ん。

其母。それは私も望みませぬが、只神樣のお力によつて、此の子の父親が知りたうござります。この娘に聞いても解らず、子供に似よりの男は澤山あつて、どこの誰やら解りませぬ。白痴にもせよ子が出來たのは、大方誰かのいたづらとは思ひまするが、一體誰れでござりませう。

嘉平。(又心配して)これ〳〵そんな事を神樣に伺ふものではない。

其母。でもあなたは神樣が、村一統の六ケ敷い事は、何でも知らして下さると云つたでないか。神樣が知らんお筈はない。

嘉平。でももう今日は時間外だと云ふに。

彌三郎。(すつかり自信を以て)これ〳〵嘉平、よいわよいわ。わしが代つて詮議して遣はす。(間。瞑目して後。)先づ其男と云ふのは、此處に集つた人の中に居る。(皆顔見合す)其人はもう旣に心の中でひどく苦められてゐる筈ぢや。名を指すは容易いが、罪を輕うするために、わしは其人の名乘り出るのを待たう。さあ早う出ぬか。(皆顔を見合すのみ。)では其人に就ての事柄を少しづゝ云はう。先づ其男の家は西の方にあつて、南を向いてゐる。而して八輪ぼうの方に松の木がある。親はないが、若い男ぢや。さあこれ迄云ふたらもう出ぬか。出ねば名を云ふか。云はれた後の罪は重からうぞ。

嘉平。(そつと傍に蹲つた勘吉に)誰れもなければあ、おめえ出ろよ。

勘吉。(同じく小聲で)おら厭だ。もうこんな役目をしてるんだからな。おめえ出ろ。おめえが罪を背負ふ番だ。

彌三郎。さあ出ぬか。出ぬのは耳が聞えぬふりをするのぢやな。ほんとに聾にするぞよ。

嘉平。(愈々となれば自分が出る氣で)誰もないか。無けれあ……。

若者。(群集の中から轉び出て、彌三郎の前に手をつく)濟みませんでした。

彌三郎。お前だと云ふのは、先刻から解つてゐた。後悔したか。後悔したら改めて此の女に詫びて、子を引取れ。白痴にからかふなぞは惡るいぞよ。其上默つて知らぬふりをするとは猶の事ぢや。

若者。全く申譯ござりません。醉つぱらつた紛れについ、その、からかつたので。

嘉平。おめえがそんな事をやつたたあ思はなかつた。役場の書記もやり、青年會の幹事もやると云ふおめえが。――一體どこでどうしたんだ。

彌三郎。場所は南北の低い所だらう。

若者。はい。さう見透されちやあ、敵ひません。いかにも村端れの屠殺場裏の窪地でした。高槻の親類へお通夜に行つた歸りの事です。私はぐでん〱に醉つぱらつてゐました。何から何まで酒の爲めです。丁度薄ぼんやりした月が出てゐました。わつしは街道を何氣なくぶら〱やつて來ますと、窪地の藁塚の陰で女の唄ふ聲がするぢやありませんか。時節は春で、榛の木の芽の匂ひがして、穴虫も出るちう土がむつと蒸れるやうな晩だつたので、つい誘はれて行つて見ますと、――

嘉平。それからどうした。

若者。なあに、それだけの話ですよ。それつきりなんです。

白痴女。(谺のやうに)なあに、それだけの話なんだよ。それつきりなんだ。

嘉平。おや兎に角おまへは神様の云ふ通り、罪亡ぼしに其子を引取れ。子まで白痴とは限るまい。引取つて育てゝやれ。

若者。はい。(白痴に)おい、其子を俺に渡さねえか。

白痴女。厭だよ。厭だよ。私の子だよ。(逃げる。)

其母。どこへ行んだ。お淺、お淺つ子。

(母と若者と女の後を追ふて退場する。)

嘉平。(彌三郎に)いや、色々と難有うござりました。では今日はこれ丈に致しまするで御座いませう。

彌三郎。さうか。ではわしは堂に入るぞよ。

嘉平。はつ。(平伏する。)

(皆も嘉平にならつて、平伏する。其間に彌三郎は飽く迄自信ある態度で、堂内に入る。嘉平扉を閉づ。)

嘉平。さあ、皆の衆、賽銭を上げたら退散するがよい。後生を願ふ人は、決して喜捨を忘れまいぞ。

(村の人々、口々に念佛を唱へ、賽銭を投げて去る。遂に嘉平、源次、勘吉のみとなる。)

嘉平。さあもう皆行つて了つた。うまく行つたものだなあ、おい。が、もう芝居をやめてもいゝぞ二人とも。誰も見てゐる者あねえ。源次も云へ、勘吉も立て。賽銭集めでもしやうぢやあねえか。

源次。(口をむぐ/\させるのみ)うゝゝゝゝ。

勘吉。哥兄、立てねえ。どうしても立てねえ。

嘉平。何だ。どうしたんだ。巫山戯るなよ。

勘吉。ふざけてるんぢやねえ。全く立てねえんだ。

源次。(頻りに手眞似をし、地面に字を書く。)

嘉平。(讀む)何だと、ど う し て も く ち が き け ね え。ほんとにきけねえのか。

源次。(涙をこぼして點頭くのみ。)

勘吉。(泣きさうな聲で)哥兄、俺あどうなるんだ。どうしても立てねえや。おめえどうかして呉んねえ。

嘉平。ふゝむ。さうすると彼奴あ、ほんとの神様かも知れねえ。これや飛んだ事をしたぞ。

勘吉。ほんとの神様なら、俺あもう一生立てねえだらう。哥兄どうかお願ひだ。早く神様にお願ひして、もう一度もとへ返して呉れ。

源次。(嘉平の裾を捉へ頻りに手眞似に訴ふ。)

勘吉。神様がゐなくならねえ中に、早くお願ひ申して呉れ。俺あほんとに心から後悔しただ。もう決してこんな眞似はしねえだ。

嘉平。(急に祉の扉を開き、其前にひれ伏す。)神様、誤うございました。全くお見外れ申しやした。どうぞ此罪は御勘辨下さいまし。而してあの通り悔ゐ改めてゐるのですから、二人をもとにお返し下さいまし。お願申上げまする。

彌三郎。(靜に立現れ)やつと私の本體がわかつたか。

嘉平。はい、わかりました。(平伏する)

彌三郎。では心から悔悟したと云ふのぢやな。

平嘉。あの通り手を合せて拜んで居ります。

彌三郎。では以後その方どもはわしの弟子となつて、わしの爲めに盡すと誓ふか。

嘉平。何でも致しまする。

彌三郎。では許し遣はす。源次も云へ。勘吉も立て。

源次。（急に喋り出す。）あゝあゝ、飛んだ目に會つた。天罰だあ全くこの事だ。自分の方で計つた積りが、神樣に會つちやあ敵はねえ。うつかりこんな事をやるもんぢやねえ。神さまはほんとにゐるんだ。しかもどこにでもゐると見える。

勘吉。（一二度跳ね上つて）もと通りの足だ。これなら縣知事さまの人力車と駈けつくらだつて出來る。東京まで十日で繭賣りに出掛ける事も出來さうだ。俺あやつと安心した。

（三人よろこぶ。間。）

嘉平。（急に手をついて）神樣にお伺ひ申し上げます。貴方さまはもとからお生れ代りで、あんな奇蹟をなさる御力があつたのですか。

彌三郎。わしは昨日まで、いや、先刻までそれを知らなんだ。けれども先刻から、自分で自分を信ずるやうになつた。おまへ達がさう信じさせて呉れた。信ずる事を敎へて呉れたのぢや。今わしはわしに力があると信じて居る。卽ち力がある所以ぢや。人々も又わしに力があると信じて居る。卽ちそこにも又在る所以ぢや。信ずる事は在ることと同じぢや。わしは神ぢや、おまへ達の言葉に從へば地藏尊ぢや。明日からわしはわしの力を以て、世を敎へ又救ふのぢや。わしは其敎へを、此處の地藏に因んで地藏敎と名付ける。わしは其地藏敎の敎祖ぢや。さあみんな來て、この新らしい敎への主、救ひの主を拜むがいゝ。わしは神の子ぢや。佛の子ぢや。あらゆるものゝおん主ぢや。救ひを求むるものは來て、わしに聞け。わしを信ずるあらゆるものに、わしは祝福をさづけてやる。わしは今こそ其力を得たのだ。さあ來れあらゆるもの！來りてわしを拜せよ。

（三人威に打たれて跪拜す。舞臺一面仄き紫の光りに包まれ、百鳥急に鳴き頻る。一旦歸途に着きたる村人は、握飯を恭しく捧げたる老婆を先頭として再び登場し、堂前にひれ伏す。）

彌三郎。おゝ握り飯か。（急に氣付きて）わしは神さまぢやつた。

（老婆握り飯を神前に供ふ。皆々跪拜。彌三郎その間に握り飯を一つ取つて頰張り、後ろを向きて靜々と堂内に入る。雉、山鳩、閑古鳥、其他百鳥の囀りの中に。）　靜かに幕。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區銀座三丁目　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　三共
仝　間之町七條　大盛

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

本號定價金六拾錢　郵稅金貳錢

送金注意

一　誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一　郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一　振替貯金　口座は東京三十四番なり
一　郵券代用　必ず一割增の事
一　集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料）
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一　受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年七月十四日印刷納本
大正六年七月十五日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地　中央公論社
電話局小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
中央公論